熊本県文化財調査報告第３０２集

塔平遺跡２

－九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

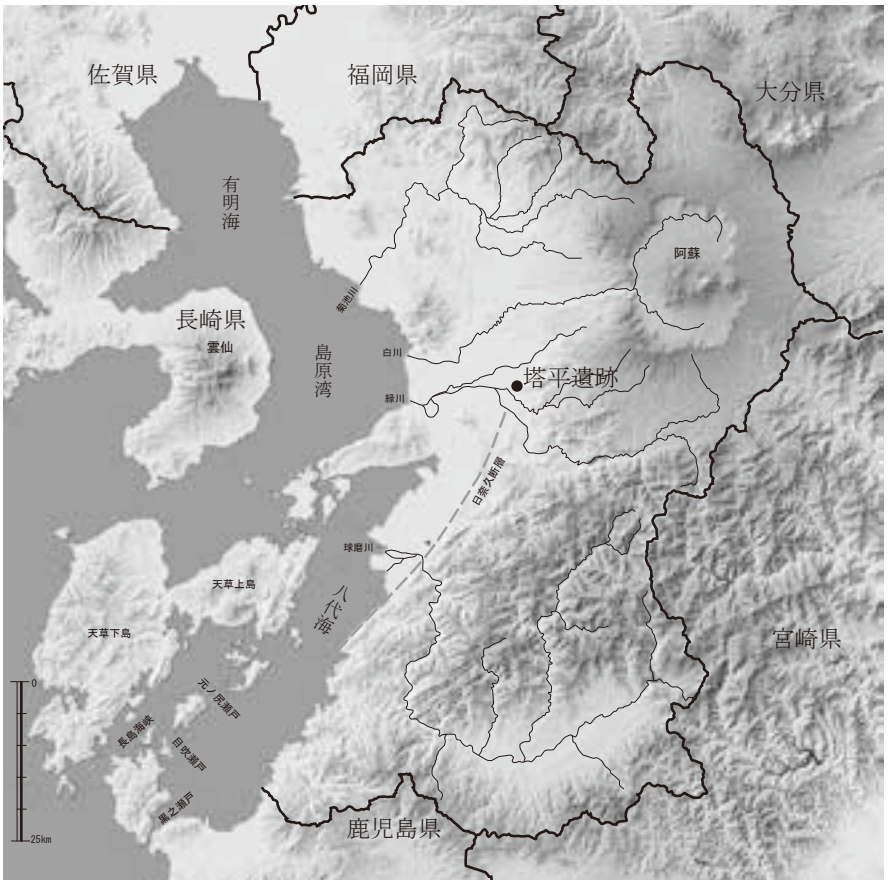
熊本県教育委員会

２０１４．３

熊本県文化財調査報告第３０２集

塔平遺跡２

－九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－



熊本県教育委員会

２０１４.３

塔平遺跡遠景（東から）

ＳＩ 63 出土土器

ＳＩ 71 出土土器

序　文

熊本県教育委員会では、平成20年度から22年度にかけて九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、上益城郡益城町大字小池字塔平、大字島田字小迫原所在の塔平遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器、縄文時代から鎌倉・室町時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが見つかりました。特に重複した弥生時代後期の竪穴建物跡や建物内から出土した多量の土器などは、当時の生活の様子を詳しく知ることのできる良好な資料となりました。

今回まとめました本報告書が県民の皆様を始め、多くの方々の手に取られ、文化財の保存と活用、ひいては地域の歴史に対する関心と理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導・助言をいただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

平成26年3月31日

熊本県教育長　田崎　龍一

例　　言

1　本書は、熊本県上益城郡益城町大字小池字塔平、大字島田字小迫原に所在する塔平遺跡の発掘調査報告書である。

2　この調査は、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所の依頼を受け、九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴う記録保存のための発掘調査として、平成 20 年度から 22 年度にかけて熊本県教育委員会が実施した。

3　現地での発掘調査は、第１章第２節に記す調査担当者が担当し、現地での遺構実測及び写真撮影も各調査担当者が主に行った。

4　現地での４級基準点及びメッシュ杭設置業務は株式会社十八測量設計、航空写真撮影は九州航空株式会社熊本営業所にそれぞれ委託した。

5　遺物の実測及び製図は坂井田亜耶、中村公光子、金川希が行い、一部を株式会社九州文化財研究所、株式会社有明測量開発社、株式会社イビソクに委託した。

6　遺物の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

7　鉄製品の処理は、今田里枝、大塚トシ子、小野美香、花田美佳が行った。

8　遺物写真撮影は、村田百合子、松本智子、蓮池千恵が行った。

9　本文の執筆は、佐藤哲朗、第４章第１節、第６章第１節を坂井田端志郎、第１章～第３章、第４章第２節、第６章第２節を水上公誠が行った。

10　本書は、章、節、項で構成しており、各節の直接的な引用･参考文献については、各節末尾に記載した。本書全体に係る主要参考文献については、本文（第６章）末尾に一括記載した。

11　発掘資料の整理は、第１章第２節に記す整理担当者が熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目 1667）において行い、記録及び遺物の保管も同所で行っている。

12　本書の編集は、熊本県教育庁教育総務局文化課で行い、佐藤哲朗、坂井田端志郎、水上公誠、坂井田亜耶が行った。

凡　　例

1　調査区座標は、６区は日本測地系を使用し、４・５区は当初日本測地系であったものを現地調査時に世界測地系（日本測地系 2000）に変換したものである。

2　本書に記した方位は、方眼北を示す。

3　遺構実測図は、現地において遺構配置図 1/100、個別遺構図 1/10、1/20 で作成しているが、本書に掲載した地図、遺構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。

4　遺物の実測は原寸で行っているが、本書に掲載した遺物実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。

5　土色は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所　色標監修）による。

6　発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。

　ＳＩ（竪穴建物）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＫ（土坑）、ＳＹ（集石）、ＳＤ（溝）、ＳＸ（不明遺構）、Ｐｉｔ（小穴）

7　出土遺物の実測図において、須恵器については断面を黒で塗色した。土師器甕等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した。

8　調査の過程において、遺構番号が重複するものもある。また、整理作業の過程において遺構と認められないと判断した番号については空き番としているため、各遺構番号の最後の番号が、本報告書における遺構の検出数とは限らない。

本文目次

巻頭図版
序文
例言・凡例
目次

第１章　序章
　第１節　調査に至る経緯・・・

挿図目次

第１図　塔平遺跡と周辺の遺跡
（1/50000）・・・・・・・・・・・・18
第２図　塔平遺跡試掘・確認調査位置図及びトレンチ
土層断面図（１/3000・１/60）・・・・・22
第３図　調査区グリッド設定図（１/700）・・・・24
第４図　塔平遺跡（４・５区）基本土層柱状図・・25
第５図　塔平遺跡（６区）基本土層柱状図・・・・26
（調査４・５区）
第６図　４・５区遺構配置図・・・・・・・・・・27
第７図　４・５区遺構配置図（縄文時代）・・・・28
第８図　ＳＫ 32 遺構・出土遺物実測図・・・・・30
第９図　ＳＫ 27 遺構実測図・・・・・・・・・・31
第 10 図　ＳＫ 29・33 遺構・出土遺物実測図・・32
第 11 図　ＳＫ 34・35 遺構実測図・・・・・・・33
第 12 図　ＳＫ 123・124 遺構実測図・・・・・・34
第 13 図　ＳＹ１～４遺構実測図・・・・・・・・35
第 14 図　ＳＩ 24 遺構・出土遺物実測図・・・・38
第 15 図　ＳＩ 25 遺構・出土遺物実測図１・・・39
第 16 図　ＳＩ 25 出土遺物実測図２・・・・・・40
第 17 図　ＳＩ 31・41 遺構・出土遺物実測図・・41
第 18 図　ＳＩ 42 遺構・出土遺物実測図・・・・42
第 19 図　ＳＩ 32 遺構・出土遺物実測図・・・・43
第 20 図　ＳＩ 34 遺構・出土遺物実測図・・・・44
第 21 図　ＳＩ 40・52 遺構・出土遺物実測図・・45
第 22 図　ＳＩ 43 遺構・出土遺物実測図・・・・46
第 23 図　ＳＩ 44 遺構・出土遺物実測図１・・・48
第 24 図　ＳＩ 44・45 遺構・出土遺物実測図・・49
第 25 図　ＳＩ 47・57 遺構・出土遺物実測図・・50
第 26 図　ＳＫ 22（埋設土器）出土状況・遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・51
第 27 図　ＳＸ４・35 遺構・出土遺物実測図・・・52
第 28 図　４・５区遺構配置図（弥生時代）・・・・54
第 29 図　ＳＩ１・９遺構・出土遺物実測図・・・56
第 30 図　ＳＩ 15 遺構・出土遺物実測図・・・・57
第 31 図　ＳＩ８遺構・出土遺物実測図１・・・・58
第 32 図　ＳＩ８出土遺物実測図２・・・・・・・59
第 33 図　ＳＩ 16・61 遺構・出土遺物実測図・・61
第 34 図　ＳＩ 28 遺構実測図・・・・・・・・・62
第 35 図　ＳＩ２遺構・出土遺物実測図・・・・・63
第 36 図　ＳＩ７遺構・出土遺物実測図・・・・・64
第 37 図　ＳＩ 18 遺構・出土遺物実測図・・・・65
第 38 図　ＳＩ 19 遺構・出土遺物実測図１・・・66
第 39 図　ＳＩ 19 出土遺物実測図２・・・・・・67
第 40 図　ＳＩ 20・60 遺構・出土遺物実測図・・68
第 41 図　ＳＩ 38 遺構・出土遺物実測図・・・・70
第 42 図　ＳＩ５・10 遺構・出土遺物実測図・・・72
第 43 図　ＳＩ 10 遺構・出土遺物実測図・・・・・73
第 44 図　ＳＩ６遺構・出土遺物実測図・・・・・74
第 45 図　ＳＩ 12 ～ 14・21・22・26 相関図・・75
第 46 図　ＳＩ 12 遺構実測図・・・・・・・・・77
第 47 図　ＳＩ 12 出土遺物実測図１・・・・・・78
第 48 図　ＳＩ 12 出土遺物実測図２・・・・・・79
第 49 図　ＳＩ 12 出土遺物実測図３・・・・・・80
第 50 図　ＳＩ 12 出土遺物実測図４・・・・・・81
第 51 図　ＳＩ 12 出土遺物実測図５・・・・・・82
第 52 図　ＳＩ 13・70 遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・・83
第 53 図　ＳＩ 13・70 出土遺物実測図２・・・・84
第 54 図　ＳＩ 14・21 遺構・出土遺物実測図・・85
第 55 図　ＳＩ 22・26・62 遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・86
第 56 図　ＳＩ４遺構・出土遺物実測図１・・・・87
第 57 図　ＳＩ４出土遺物実測図２・・・・・・・88
第 58 図　ＳＩ 37 遺構・出土遺物実測図１・・・89
第 59 図　ＳＩ 37 出土遺物実測図２・・・・・・90
第 60 図　ＳＩ 63 遺構・出土遺物実測図１・・・91
第 61 図　ＳＩ 63 出土遺物実測図２・・・・・・92
第 62 図　ＳＩ 63 出土遺物実測図３・・・・・・93
第 63 図　ＳＩ 64 遺構実測図・・・・・・・・・94
第 64 図　ＳＩ 65 遺構・出土遺物実測図１・・・95
第 65 図　ＳＩ 65 出土遺物実測図２・・・・・・96
第 66 図　ＳＩ 65 出土遺物実測図３・・・・・・97
第 67 図　ＳＩ 66 遺構・出土遺物実測図・・・・98
第 68 図　ＳＩ 67 遺構実測図・・・・・・・・・99

第69図　ＳＩ71遺構・出土遺物実測図１・・・100
第70図　ＳＩ71出土遺物実測図２・・・・・・101
第71図　ＳＩ72・73遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・102
第72図　ＳＩ72・73出土遺物実測図２・・・・103
第73図　ＳＫ24遺構・出土遺物実測図・・・・105
第74図　４・５区遺構配置図（古代以降）・・・106
第75図　ＳＩ３遺構・出土遺物実測図・・・・・108
第76図　ＳＢ１・３遺構実測図・・・・・・・・109
第77図　ＳＤ・ＳＸ遺構実測図・・・・110～111
第78図　ＳＤ・ＳＸ遺構・出土遺物
実測図１・・・・・・・・・・・・・・112
第79図　ＳＤ・ＳＸ出土遺物実測図２・・・・・113
第80図　ＳＫ14・15・121・28遺構実測図・・117
第81図　４・５区Ｐｉｔ配置図・・・・・・・・118
第82図　Ｐｉｔ出土遺物実測図・・・・・・・・119
第83図　遺構外出土遺物実測図１・・・・・・・120
第84図　遺構外出土遺物実測図２・・・・・・・121
第85図　遺構外出土遺物実測図３・・・・・・・122
第86図　遺構外出土遺物実測図４・・・・・・・123
第87図　遺構外出土遺物実測図５・・・・・・・124
第88図　遺構外出土遺物実測図６・・・・・・・125
第89図　遺構外出土遺物実測図７・・・・・・・126
第90図　遺構外出土遺物実測図８・・・・・・・127
第91図　遺構外出土遺物実測図９・・・・・・・128
（調査６区）
第92図　６区遺構配置図・・・・・・・・・・・130
第93図　６区遺物実測図（三稜尖頭器）・・・・131
第94図　６区６ａ層検出遺構配置図・遺物
出土状況・・・・・・・・・・・・・・132
第95図　６区５層検出遺構配置図・遺物
出土状況・・・・・・・・・・・・・・133
第96図　ＳＫ36・38・ＳＹ１遺構実測図・・・135
第97図　６区遺構配置図（縄文後晩期）・・・・136
第98図　ＳＩ１～３遺構・出土遺物実測図・・・139
第99図　ＳＩ４遺構・出土遺物実測図・・・・・140
第100図　ＳＩ５遺構・出土遺物実測図・・・・141
第101図　ＳＩ６遺構・出土遺物実測図・・・・142
第102図　ＳＫ29・34遺構・出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・・・・・144
第103図　ＳＫ８・13・15～18遺構実測図・・145
第104図　ＳＫ19～24遺構実測図・・・・・・146
第105図　ＳＫ26～28・33・35・37遺構
実測図・・・・・・・・・・・・・・・148
第106図　６区遺構配置図（古代・中世）・・・・150
第107図　ＳＢ１・２遺構・出土遺物実測図・・152
第108図　ＳＢ３遺構実測図・・・・・・・・・153
第109図　ＳＫ１・２・７・25・ＳＤ８・畝状
遺構・出土遺物実測図・・・・・・・154
第110図　ＳＤ遺構実測図・・・・・・・158～159
第111図　ＳＤ９遺構実測図・・・・・・・・・160
第112図　ＳＤ７遺構実測図・・・・・・・・・161
第113図　ＳＤ出土遺物実測図１・・・・・・・162
第114図　ＳＤ出土遺物実測図２・・・・・・・163
第115図　遺構外出土遺物実測図１・・・・・・166
第116図　遺構外出土遺物実測図２・・・・・・167
第117図　遺構外出土遺物実測図３・・・・・・168
第118図　遺構外出土遺物実測図４・・・・・・169
第119図　遺構外出土遺物実測図５・・・・・・170
第120図　遺構外出土遺物実測図６・・・・・・171
第121図　遺構外出土遺物実測図７・・・・・・172
第122図　遺構外出土遺物実測図８・・・・・・173
（総括）
第123図　弥生土器変遷案・・・・・・・・・・203
第124図　古代の遺構変遷案・・・・・・・・・・204

表目次

第１表　塔平遺跡周辺遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19 ～ 21
第２表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・176 ～ 195

巻頭目次

１　塔平遺跡遠景（東から）
２　ＳＩ 63 出土土器
３　ＳＩ 71 出土土器

写真目次

図版１　４区３層完掘状況
４区４層完掘状況
５区ＳＫ 27 完掘状況
５区ＳＫ 29 完掘状況
５区ＳＫ 33 完掘状況
５区ＳＫ 34 完掘状況
５区ＳＫ 35 完掘状況
５区ＳＫ 124 完掘状況
図版２　４区ＳＹ１検出状況
４区ＳＹ２検出状況
５区ＳＹ３検出状況
５区ＳＹ４検出状況
４区ＳＩ 24 完掘状況
４区ＳＩ 25 完掘状況
４区ＳＩ 32 遺物出土状況
４区ＳＩ 34 完掘状況
図版３　４区ＳＩ 40・52 完掘状況
４区ＳＩ 43 完掘状況
４区ＳＩ 44 完掘状況
４区ＳＩ 45 完掘状況
４区ＳＩ 47 完掘状況
４区ＳＩ１完掘状況
４区ＳＩ９遺物出土状況
４区ＳＩ 15 完掘状況
図版４　４区ＳＩ８完掘状況
４区ＳＩ 16・28 完掘状況
４区ＳＩ２完掘状況
４区ＳＩ７完掘状況
４区ＳＩ 18 完掘状況
４区ＳＩ 19 完掘状況
４区ＳＩ 20 完掘状況
４区ＳＩ 38 完掘状況
図版５　４区ＳＩ５完掘状況
４区ＳＩ 10 完掘状況
４区ＳＩ６完掘状況
４区ＳＩ 12 遺物出土状況
５区ＳＩ 70（４区ＳＩ 13）遺物出土状況
４区ＳＩ 14 遺物出土状況
５区ＳＩ 65 遺物出土状況
５区ＳＩ 65 完掘状況
図版６　５区ＳＩ 66 遺物出土状況
５区ＳＩ 66 完掘状況
５区ＳＩ 71 遺物出土状況
５区ＳＩ 71 完掘状況
５区ＳＩ 72 遺物出土状況
５区ＳＩ 72 完掘状況
５区ＳＩ 73 遺物出土状況
５区ＳＩ３完掘状況
図版７　６区土層断面Ａ－Ａ’
６区土層断面Ｂ－Ｂ’
６区土層断面Ｃ－Ｃ’
６区５層下 三稜尖頭器出土状況
６区５層下 石核出土状況
６区６ａ～５層遺物出土層位確認状況
６区５層下　スクレイパー出土状況
６区５層下　石核出土状況
図版８　６区ＳＹ１土層断面状況
６区ＳＹ１検出状況
６区ＳＫ 36 土層断面状況
６区ＳＫ 36 完掘状況

6区ＳＫ38土層断面状況
6区ＳＫ38完掘状況
6区ＳＩ１・２・３完掘状況１（南西→）
6区ＳＩ１・２・３完掘状況２（西→）
図版９　6区ＳＩ４・５・６完掘状況
6区ＳＫ８完掘状況
6区ＳＫ13完掘状況
6区ＳＫ15完掘状況
6区ＳＫ16完掘状況
6区ＳＫ17・18完掘状況
6区ＳＫ19完掘状況
6区ＳＫ20完掘状況
図版１０　6区ＳＫ21・22・23完掘状況
6区ＳＫ24完掘状況
6区ＳＫ26完掘状況
6区ＳＫ27完掘状況
6区ＳＫ28土層断面状況
6区ＳＫ29炭化物検出状況
6区ＳＫ29完掘状況
6区ＳＫ33完掘状況
図版１１　6区ＳＫ34遺物出土状況
6区ＳＫ34完掘状況
6区ＳＫ35完掘状況
6区ＳＫ37完掘状況
6区ＳＢ１完掘状況
6区ＳＢ２完掘状況
6区ＳＢ３ピット半裁状況
6区掘立柱建物跡配置状況（東→）
図版１２　6区ＳＫ１完掘状況
6区ＳＫ２完掘状況
6区ＳＫ７完掘状況
6区ＳＫ25完掘状況
6区ＳＤ８完掘状況
6区畝状遺構完掘状況
6区ＳＤ１完掘状況
6区ＳＤ２完掘状況
図版１３　6区ＳＤ３完掘状況
6区ＳＤ４・５・６完掘状況
6区ＳＤ７完掘状況
6区ＳＤ９完掘状況
6区完掘状況１（南→）
6区完掘状況２（南→）
6区完掘状況３（南東→）
6区完掘状況４（北西→）
図版１４　4区ＳＩ25出土土器
4区ＳＩ25出土土器
4区ＳＫ22埋設土器
4区ＳＸ４出土土器
4・5区出土　縄文土器（早期）
図版１５　4区出土　縄文土器　方形浅鉢（外）
4区出土　縄文土器　方形浅鉢（内）
4・5区出土　縄文土器　浅鉢
4・5区出土　縄文土器　深鉢
4・5区出土　縄文土器　深鉢
図版１６　4・5区出土　縄文土器　組織痕
4・5・6区出土　縄文土器　モデリング
図版１７　4区ＳＩ15出土土器
4区ＳＩ８出土土器
4区ＳＩ８出土土器
4区ＳＩ18出土土器
4区ＳＩ19出土土器
図版１８　4区ＳＩ19出土土器
4区ＳＩ10出土土器
4区ＳＩ６出土土器
4区ＳＩ６出土土器
4区ＳＩ12出土土器　甕
図版１９　4区ＳＩ12出土土器　鉢
4区ＳＩ12出土土器　壷
図版２０　4区ＳＩ12出土土器　壷
4区ＳＩ12出土土器　高坏
図版２１　4区ＳＩ12出土土器
4区ＳＩ12出土土器
4区ＳＩ14出土土器
4区ＳＩ14出土土器
4・5区ＳＩ13・70出土土器
図版２２　4・5区ＳＩ37出土土器
4・5区ＳＩ37出土土器
4・5区ＳＩ37出土土器
4区ＳＩ４出土土器
4区ＳＩ４出土土器
図版２３　5区ＳＩ65出土土器
5区ＳＩ65出土土器

５区ＳＩ 65 出土土器
５区ＳＩ 65 出土土器
５区ＳＩ 65 出土土器
５区ＳＩ 71 出土土器
５区ＳＩ 71 出土土器
５区ＳＩ 71 出土土器
図版２４　５区ＳＩ 71 出土土器
５区ＳＩ 72・73 出土土器
図版２５　５区ＳＩ 72 出土土器
５区ＳＩ 72・73 出土土器
５区ＳＫ 24 出土土器
４・５区Ｐｉｔ出土土器
４・５区出土土器
４・５区出土　須恵器
４区出土　土師器　把手
４区出土　須恵器（溶着）
図版２６　４・５区ＳＩ出土石器　石鏃など
４・５区ＳＤ・Ｐｉｔ出土石器　石鏃
４・５区遺構外出土石器　異形石器など
４・５区出土石器　石鏃１
４・５区出土石器　石鏃２
４区ＳＩ出土石器　打製石斧
４・５区ＳＩ出土石器 打製石斧
４区ＳＩ出土石器　磨製石斧
４・５区ＳＩ出土石器　磨製石斧
図版２７　４・５区ＳＤ・Ｐｉｔ出土石器　石斧
４・５区出土石器　打製石斧１
４・５区出土石器　打製石斧２
４・５区出土石器　磨製石斧
４・５区出土石器　スクレイパー
４・５区出土石器　石庖丁
４・５区出土　玉類
４区出土　耳環
図版２８　６区ＳＩ１・４・５出土石器
磨・敲石、砥石
６区ＳＩ６出土石器　石斧
６区ＳＫ 34 出土　縄文土器　深鉢
６区ＳＢ２－Ｐ４出土　黒色土器　椀
６区ＳＸ４出土　土師器　坏
６区畝状遺構出土　中世須恵器　捏鉢
６区出土　縄文土器　阿高式
６区出土　縄文土器　深鉢
図版２９　６区出土　縄文土器　浅鉢
６区出土　縄文土器　組織痕
６区ＳＤ１出土　土師器　把手
６区出土　須恵器　椀
６区ＳＤ９出土　須恵器（溶着）
６区ＳＤ９出土　須恵器（溶着）
６区ＳＤ４・７出土　須恵器
６区出土　青磁　碗
図版３０　６区ＳＤ１出土　青磁　碗
６区出土　青磁　碗
６区ＳＤ９出土　中世須恵器　甕
６区出土　白磁
６区ＳＤ１・９出土　陶器　皿
６区ＳＤ１出土　染付　皿
６区ＳＤ１出土　染付　皿
６区ＳＤ１出土　染付　碗
図版３１　６区出土　染付　碗（筒形）
６区ＳＤ１出土　陶器　碗
６区５層下出土石器　三稜尖頭器
６区出土　使用痕をもつ剥片
６区５層下出土石器　スクレイパー
６区５層出土石器
６区６ａ層出土　石核
６区５層下出土　石核
図版３２　６区出土石器　石鏃
６区出土石器　石斧
図版３３　６区ＳＤ１出土石器　打製石斧
６区５層出土石器　石錐
６区出土石器　石匙
６区ＳＤ１出土石器　砥石
６区ＳＤ２出土　硯
６区出土　碁石
４・５・６区出土　土錘（写真のみ）
６区出土　土製品（写真のみ）
図版３４　４・５・６区出土鉄器
鉄鏃・刀子・棒状鉄器
３区出土鉄器　袋状鉄斧（表）
３区出土鉄器　袋状鉄斧（裏）

第１章　序章

第１節　調査に至る経緯

熊本県教育委員会は、九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴い「埋蔵文化財の予備調査について（依頼）」の提出を受け、平成 19 年 12 月 12 日から 17 日、及び平成 20 年 11 月 28 日に塔平遺跡とその周辺で埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施した。

試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所長に対して、調査成果と発掘調査の必要性を通知した。

その後、九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設予定地について、平成 20 年８月４日付け九熊高第５524 号で文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」が西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所長から益城町教育委員会を経由して熊本県教育委員会に通知された。

平成 20 年度調査分（４区）は平成 20 年９月 22 日付け九熊高第 626 号、平成 21 年度調査分（５区）は平成 21 年３月 17 日付け九熊高第 957 号及び平成 21 年６月 25 日付け九熊高第 168 号、平成 22 年度調査分（６区）は平成 22 年３月 26 日付け九熊高第 1113 号で、「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」を西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所長から発掘調査の依頼と承諾書の提出を受けた。それぞれ平成 20 年 10 月 14 日付け教文第 1636 号、平成 21 年４月 14 日付け教文第 25 号、平成 21 年７月６日付け教文第 968 号、平成 22 年４月７日付け教文第 66 号で文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出し、発掘調査を開始することとした。

記録保存のための発掘調査は、４区は平成 20 年 10 月 27 日から平成 21 年５月 21 日、５区は平成 21 年４月 22 日から平成 21 年８月 27 日、６区は平成 22 年４月 28 日から９月 30 日の期間で行った。

整理・報告書作成業務は、平成 23 年４月１日から開始し、平成 26 年３月 31 日に終了した。

第２節　発掘調査と整理作業等の体制

１　発掘調査及び整理作業等の体制

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となって実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。（役職は当時）

（１）予備調査（平成 19 年度）

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　梶野　英二（文化課長）
調査総括　　江本　直（課長補佐）
　　髙木　正文（課長補佐・文化財調査第一係担当）
調査事務局　宗村　士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　高宮　優美（主幹兼総務係長）、塚原　健一（参事）、高松　克行（主任主事）
調査担当　　坂口　圭太郎（参事）
　　水上　正孝（文化財保護主事）
　　遠山　宏（非常勤職員）
　　横田　光智（非常勤職員）

（２）本調査（平成 20 年度）

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　米岡　正治（文化課長）
調査総括　　江本　直（課長補佐）
　　髙木　正文（課長補佐・文化財調査第一係担当）
調査事務局　宗村　士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　川上　勝美（主幹兼総務係長）、山田　京子（参事）、高松　克行（主任主事）
調査担当　　坂井田　端志郎（主任学芸員）
　　坂本　亜矢子（非常勤職員）
　　島浦　健生（非常勤職員）

（３）本調査（平成 21 年度）

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　米岡　正治（文化課長）
調査総括　　木﨑　康弘（課長補佐）
　　村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
調査事務局　宗村　士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　辛川　雅弘（主幹兼総務係長）、山田　京子（参事）
調査担当　　坂井田　端志郎（主任学芸員）
　　水上　公誠（文化財保護主事）
　　木下　勇（非常勤職員）
　　島浦　健生（非常勤職員）
　　吉留　広（非常勤職員）

（４）本調査（平成 22 年度）

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　小田　信也（文化課長）
調査総括　　木﨑　康弘（課長補佐）
　　村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
　　坂田　和弘（参事・文化財資料室長）
調査事務局　宗村　士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　元嶋　茂（課長補佐・総務係担当）、山田　京子（参事）、松島　英樹（主任主事）
調査担当　　水上　公誠（文化財保護主事）
　　木下　勇（非常勤職員）
　　遠山　宏（非常勤職員）
　　横矢　晋二郎（非常勤職員）
　　吉留　広（非常勤職員）

（５）整理作業（平成 23 年度）

整理主体　　熊本県教育委員会
整理責任者　小田　信也（文化課長）
整理総括　　村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
　　坂田　和弘（参事・文化財資料室長）
整理事務局　川上　勝美（課長補佐）
　　水元　敬浩（主幹兼総務係長）、山田　京子（参事）、松島　英樹（主任主事）
整理担当　　水上　公誠（文化財保護主事）
　　梅田　亜耶（非常勤職員）

（６）整理作業（平成 24 年度）

整理主体　　熊本県教育委員会
整理責任者　小田　信也（文化課長）
整理総括　　西住　欣一郎（課長補佐）
　　村﨑　孝宏（文化財調査第一係長）
　　後藤　克博（文化財資料室長）
整理事務局　川上　勝美（課長補佐）
　　中津　幸三（課長補佐・総務・助成担当）、稲本　尚子（参事）、天草　英子（主任主事）
整理担当　　佐藤　哲朗（文化財保護主事）
　　坂井田　亜耶（非常勤職員）

（７）整理作業（平成 25 年度）

整理主体　　熊本県教育委員会
整理責任者　小田　信也（文化課長）
整理総括　　西住　欣一郎（課長補佐）
　　村﨑　孝宏（主幹兼文化財調査第一係長）
　　後藤　克博（参事・文化財資料室長）
整理事務局　馬場　一也（課長補佐）
　　廣石　啓哉（主幹兼総務・文化係長）、有馬　綾子（参事）、天草　英子（主任主事）
整理担当　　佐藤　哲朗（文化財保護主事）
　　水上　公誠（文化財保護主事）
　　坂井田　亜耶（非常勤職員）

２　謝辞

現地での発掘調査及び整理作業においては、下記の機関及び多くの方々から御指導御協力をいただきました。ここにその御芳名を記して深く感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

地元の方々、七滝中央小学校児童と先生方、木﨑康弘・坂口圭太郎・池田朋生（熊本県立装飾古墳館）、美濃口雅朗（熊本市文化振興課）、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、益城町教育委員会、御船町教育委員会、嘉島町教育委員会、阿蘇市教育委員会、御船警察署

第３節　発掘作業の経過

１　調査４区

平成 20 年９月から発掘調査のための資料収集、調査事務所の準備、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所と協議を重ねるなど、事前準備作業を行い、10 月より調査４区の発掘調査を開始した。

調査対象地の除草終了後、重機（バックホー）を用いて１層～２層（表土層）を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。その後、人力により３層（黒褐色土層）以下、最も深いところで５層（褐色土層）途中まで順次掘り下げた。人力による掘削作業は、遺物包含層の掘削後、当時の生活痕跡である遺構の検出作業を行った。次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。調査区全体を含む高所からの各層での遺構完掘状況及び遺跡周辺地形の写真撮影作業は、高所作業車やセスナ機を用い実施した。平成 21 年５月に現地調査を終了した。

なお、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、世界測地系を使用している。

２　調査５区

調査５区の発掘調査は、まず重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。その後、人力により６層（暗褐色土層）以下、最も深いところで８層（黄褐色ローム層）まで順次掘り下げた。遺物包含層の残りが非常に悪く、６層（暗褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーによる耕作痕も多数確認された。したがって、主に基本土層６層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成 21 年８月末に現地調査を終了した。

なお、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、４区同様世界測地系を使用している。

３　調査６区

調査６区の発掘調査は平成 22 年４月から開始し、５日間かけ、重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。その後、人力により３層（黒褐色土層）以下、最も深いところで８層（黄褐色土層・ローム層）を順次掘り下げた。遺物包含層の残りは西側が非常に悪く、８層（黄褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーやいも穴、区画溝による耕作痕も多数確認された。主に基本土層４層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成 22 年９月末に現地調査を終了した。

なお、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、日本測地系を使用している。

調査の経過は次の通りである（調査日誌より抜粋）。

調査日誌抄

塔平遺跡４区　2008年（平成20年度）

10月27日　表土剥ぎ１日目。調査区南西より剥ぎ始め、試掘結果どおり、耕作土直下に褐色土層を確認する。東側は褐色土層から暗褐色土層となる。調査区全域から縄文土器（後･晩期）、弥生土器（後期か）、土師器（古代）、須恵器が出土した。西側は１面、東側は２面、全体的に３時期の調査となりそうである。様相を全体的に重機で表土掘削を行う。調査区の北側と、南側の表土を掘削。

10月28日　表土掘削２日目。黒みの強い暗褐色土（黒褐色か）の層で止める。壁際に東西トレンチ、南北トレンチを入れる必要がありそうである。西日本高速道路株式会社の岡藤工事長が来跡された。

10月29日　表土剥ぎ３日目。調査区のほぼ全域に黒褐色土が広がる。南西部のみ褐色土（暗褐色土）である。坂口参事が来跡された。

10月30日　西側の壁切りを行う。その後、調査区東壁、南壁、西壁で土層の検討を行った。

11月4日　調査を本格的に開始。前面の表土の剥ぎ残しを除去。南壁に幅60㎝のトレンチを設定し、５㎝ずつ掘削。十八測量設計による基準点測量が行われた。坂口参事、木村参事が来跡された。

11月5日　昨日に続きトレンチの掘削。遺物は３層、４層からの出土を確認。５層、６層からはほとんど確認できない。周辺が暗褐色土層に対して、黒く残る箇所がある。遺構の可能性がある。十八測量設計による基準杭の打設が行われた。

11月6日　引き続きトレンチの掘削。４層中に集石を確認する。西日本高速道路株式会社の坂口副所長、岡藤工事長が来跡された。

11月7日　雨天。ローム層を確認している箇所以外、全てを５層の暗褐色土層を５㎝掘り下げた深度で揃えることとした。能登原学芸員、牛島調査員が来跡。

11月10日　壁際のサブトレンチの掘削を行う。調査区全体の凹凸を掘削した。

11月11日　３層の黒褐色土層の凹凸を掘削。宮崎参事が来跡。

11月12日　調査区西側から黒褐色土を５㎝ずつ掘削する。西日本高速道路株式会社の坂口副所長が来跡。

11月13日　グリッドごとに黒褐色土層の５㎝掘削を行う。３層と４層との間に漸移層を設定する。黒褐色土と褐色土がマーブル状に混じっている層である。宮崎参事が来跡。

11月14日　グリッドごとに黒褐色土層の５㎝掘削を行う。調査区南壁のトレンチ内で縄文早期押型文土器が出土。今後の調査で早期の遺構、遺物を確認する必要がある。

11月17日　引き続きグリッドごとに黒褐色土層の５㎝掘削を行う。埋土が黒色土の溝状遺構を２条確認。他にも焼土の混じる埋土をもつ遺構らしき箇所を確認。

11月18日　調査区南東コーナー、北東コーナーのトレンチ掘削と分層を行う。

11月19日　雨天。文化財資料室から機材の搬入を行う。

11月20日　調査区東側の精査を実施。ＳＤ１・２は明確に検出。炭化物、焼土の混じる黒褐色土のピット、茶色みがかったピットを確認。ＳＤ２は緩やかに北東へ傾斜している。

11月21日　西側の精査を実施。ＳＸ１の東側にも溝を検出。ＳＤ１と同一のもので、Ｌ字形になる。ＳＤ２はベルトの分層を終え、ほぼ掘削を終える。

11月25日　ＳＤ１の掘削調査。南側に段をもつ。ＳＤ２、ＳＸ１の実測。

11月26日　ＳＤ１の掘削調査。ＳＤ１の南側の段は別の溝と捉え、ＳＤ３とする。ＳＤ１・２の実測。西日本高速道路の岡藤工事長来跡。

11月27日　雨天。事務所内にて実測図の整理。

11月28日　ＳＤ１・３は完掘する。ＳＤ１の下に別の溝状遺構が存在する可能性がある。

12月1日　ＳＸ１、ＳＤ４の掘削調査。ＳＤ１・３の完掘平面図の実測。ＳＤ４は南側が細くなるようだ。

12月2日　ＳＤ４・９・10・11、ＳＸ１の掘削調査。ＳＸ１は南側で深くなる。西日本高速道路株式会社より４名来跡。

12月3日　ＳＤ３・４・12の掘削調査。ＳＤ４の底面に長楕円形の遺構を検出。ＳＤ４と同時期かつ一連の遺構と考えられる。坂口参事が来跡。

12月4日　昨日に引き続きＳＤの掘削調査。ＳＤ４

の深く落ち込む箇所は２箇所であることが確認できた。溝周辺に遺構らしきプランが見えている。縄文時代の石器がまとまって出土する箇所も確認できた。

12月10日　ＳＤの掘削調査に加え、調査区全景の写真前清掃も行う。益城町教育委員会の堤氏が来跡。

12月11日　ＳＤ４の完掘。溝の写真撮影を行う。

12月12日　ＳＤ５～11（畝跡）、ＳＤ４の実測を行う。また、土層断面の写真撮影を行う。坂口参事が来跡。

12月15日　調査区東側より、基本層３層（黒褐色土）の掘削を開始。竪穴建物跡、ピット、方形の柱穴らしきものが見え始めている。宮崎参事が来跡。

12月16日　基本層３、４層の掘削を開始。西側は縄文土器が集中している。晩期古閑式と思われる。貝殻による条痕が目立つ。調査区中央は弥生後期の土器片が多く、北東側ではカマドをもつ竪穴建物跡らしきものも確認した。髙木補佐が来跡。

12月17日　基本層４層の掘削調査。西側は縄文晩期の土器が多量に出土。破片も大きい。竪穴建物跡が検出される可能性が高い。

12月18日　基本層４層の掘削調査。埋土が黒褐色で方形カマド付きの竪穴建物跡、やや淡い暗褐色の方形竪穴建物跡がある。古代､弥生のものと考えられる。遺構の数は多いようである。

12月22日　精査を行うが、再掘削の必要があった。ＳＤの実測も進んでいる。

12月24日　精査と掘削を行う。塔平遺跡では縄文後晩期、弥生後期、古代の３時期が多い。

12月25日　調査区中央の精査後、遺構の確認を行う。1/100の略測図の実測を開始する。

12月26日　図面の整理、チェックを行う。

1月6日　調査区東側の再精査を行う。竪穴建物跡の切り合いが多い。

1月7日　調査区西側、中央の精査を行う。弥生後期の竪穴建物跡は検出プランが長方形と考えられる。

1月8日　掘立柱建物跡、竪穴建物跡の検討を行う。ＳＩ３はサブトレンチ内で硬化面を検出。カマド粘土が遺構中央にもあるため、切り合いの関係を考える必要がある。坂口参事、益城町議会の石田議員が来跡。

1月13日　ＳＩ１～５、ＳＢ１の調査を行う。ＳＩ１にてピットを４基検出。ＳＩ２は北側にベッド状遺構の可能性がある箇所を確認。ＳＩ５の床面と思われる箇所を確認。大きい炭化材を検出した。

1月14日　竪穴建物跡の調査とＳＢ１の完掘及び完掘平面図の実測を行う。

1月15日　昨日までの調査に加え、ＳＩ６の調査も開始した。

1月16日　ＳＩ４の土器集中部の遺物は弥生後期の土器片と思われる。内外面ともハケ目調整である。タタキは見られない。

1月19日　引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を行う。

1月20日　引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を行う。ＳＩ２・５・７周辺の切り合いがはげしい。

1月21日　引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を行う。ＳＫの調査も本格的に開始する。

1月22日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

1月23日　竪穴建物跡及び土坑の掘削調査及び実測を行う。ＳＩ３は遺物の取り上げのみとなった。

1月26日　雨天。事務所内にて図面の整理を行う。

1月27日　竪穴建物跡及び土坑の掘削調査及び実測を行う。ＳＩ４出土土器を来跡した木村主任学芸員に見ていただく。弥生終末期ではないかとの所見を得る。

1月28日　西側の竪穴建物跡の調査に着手する。ＳＸ１に近いＳＩ11にて多量の弥生土器が出土する。複数個体がまとまっている。

1月29日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

1月30日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

2月2日　竪穴建物跡及び土坑の掘削調査及び実測を行うが、ペースが遅れているようである。明日以降、縄文期の竪穴建物跡の調査に着手する必要がある。遺物出土状況を撮影したＳＩ９だが、出土土器は弥生後期の甕であった。ハケ目調整が顕著である。方形竪穴建物跡の主柱穴は４本がほとんどである。

2月3日　雨天。図面整理に加え、今後の調査に向け

て打ち合わせを行う。坂口参事が来跡。

２月４日　一部精査を行い遺構を検出するも、シミ状のものを遺構と誤認している可能性もある。ＳＩ 11 は欠番とし、ＳＫ９とする。

２月５日　ＳＩ 10・12 ～ 20 の調査を中心に行う。ＳＩ 15 は西側にてベッド状遺構を確認する。西日本高速道路株式会社岡藤工事長、髙木補佐、坂口参事が来跡。

２月９日　図面のチェック、整理と今後の調査に向けて打ち合わせを行う。

２月 10 日　ＳＩ 21 ～ 25 の掘削調査を開始。ＳＩ 17 は遺構ではないことを確認し、欠番とする。ＳＩ 15 にて重弧文「免田式土器」の頸部と思われる部分が出土。遺構中央部に炉を確認する。

２月 12 日　竪穴建物跡の掘削調査及び実測を中心に進める。ＳＩ 24・25 の縄文期竪穴建物跡ととらえている遺構は、サブトレンチを設定して確認するも埋土か否かの判別が難しい。ＳＩ 14 の遺物集中部は、埋土３層中に収まることを確認する。

２月 16 日　竪穴建物跡の掘削調査及び実測を中心に進める。ＳＩ 24・25 周辺を再精査し、新たな竪穴建物跡を確認する。プランの再検討が必要である。木村参事、布田文化財保護主事が来跡。

２月 17 日　昨日に引き続き竪穴建物跡の掘削調査及び実測を中心に進める。ＳＩ 15 は完掘状況を撮影する。

２月 18 日　ＳＩ 13・18 ～ 20 の完掘状況を撮影する。ＳＩ 14 の遺物出土状況の実測に入る。

２月 19 日　縄文期竪穴建物跡の調査を進める。ＳＩ 24・25・29・30 は、いずれも埋土が浅い。床面も軟弱で炉跡も確認できない。

２月 23 日　西側に検出した縄文期竪穴建物跡のトレンチ掘削、及び調査を行う。木村参事、馬場、布田文化財保護主事が来跡。

２月 24 日　縄文期竪穴建物跡の調査を進める。ＳＩ 24・25・29・30 は完掘し実測に入る。益城町教育委員会の堤氏が来跡する。

２月 25 日　縄文期竪穴建物跡の調査を進めるも、断続的な降雨により、なかなか調査が進まなかった。

２月 26 日　竪穴建物跡の調査を中心に進める。ＳＤ４の北側にて新たな弥生後期と思われる竪穴建物跡を検出する。

２月 27 日　引き続き竪穴建物跡の調査を中心に進める。ＳＩ 12 の遺物出土状況実測をほぼ終える。

３月２日　調査区中央の縄文期の竪穴建物跡の調査を開始。埋土は浅い。ＳＩの番号も 40 番台になった。

３月３日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

３月４日　弥生、縄文期の竪穴建物跡の調査を進める。縄文期のものは埋土の深度が約 10㎝で、炉跡も確認できていない。竪穴状遺構である。

３月５日　縄文期の竪穴建物跡はいずれも浅く、炉跡やピットが確認できない。

３月９日　竪穴建物跡の調査を中心に進める。調査区中央は見通しがついてきた。ＳＩの番号も 50 番台を付す。

３月 10 日　縄文期の竪穴建物跡に、柱穴が円形に配置する遺構を確認する。しかし、炉跡は確認できない。髙木補佐、益城町教育委員会の堤氏、保護審議委員の５名が来跡された。

３月 11 日　ＳＩ 12 の出土遺物取り上げが終了。同一個体の遺物がまとまって出土していることから、廃棄よりも祭祀の可能性を考えたい。

３月 12 日　調査区中央の遺構調査を終える。東側で新たに２基の遺構を確認する。ＳＩ 56・57 とした。

３月 16 日　ＳＩ 56・57 の調査に加え、明日の完掘写真撮影に向けて、調査区外周の整頓を行う。

３月 18 日　高所作業車を賃貸借し、完掘写真の撮影を行う。

３月 23 日　基本層４層、５層の掘削を開始。集石を１基確認する。また押型文土器、４層中より勾玉が出土する。髙木補佐、島津主幹が来跡。

３月 24 日　基本層４層、５層の掘削。５層中から出土の主は縄文晩期の土器片である。

３月 25 日　1/100 の遺構配置図の実測を行う。坂口参事が来跡。

３月 26 日　今年度最終日。竪穴建物跡の平面図の実測を行う。残りの調査は次年度へ持ち越すこととした。

2009 年（平成 21 年度）

4 月 15 日　新年度の調査を開始する。基本層５層の掘削を行う。東側トレンチで確認した集石のレベルまで下げることとした。南東コーナーの落ち込みは竪穴建物跡の可能性がある。

4 月 16 日　引き続き５層の掘削を行う。集石に広がりは確認できない。

4 月 17 日　南東部、中央部の５層掘削を行う。遺物は南東部に偏る。ＳＩ９、ＳＩ 16 に切られた新たな竪穴建物跡を検出する。立ち上がりが確認できた。

4 月 20 日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

4 月 21 日　南東部の掘削を終了する。再精査を行い、調査区中央の５層掘削へ移行した。

4 月 23 日　調査区中央部の５層掘削。６層上面より１０㎝程厚さを残して精査する。遺構は検出されない。

4 月 27 日　調査区中央部、西側の５層の掘削を行う。合わせて調査区南壁の土層断面の実測を行う。

4 月 28 日　中央部の精査を行う。竪穴建物跡を２軒、ピットを数基確認する。ＳＹ１・２の平面図の実測を行う。坂田文化財資料室長が来跡。

4 月 30 日　西側の５層の掘削を行う。

5 月 1 日　引き続き西側の５層を掘削する。また、調査区周りの土層断面、1/100 の遺構配置図の実測を行う。

5 月 7 日　西側の精査を行い、サブトレンチで確認した結果、１軒の竪穴建物跡を確認する。ＳＩ 62 とする。

5 月 8 日　検出したＳＩ 62、単独ピットの掘削調査を行う。また、1/100 の遺構配置図の実測を行う。

5 月 13 日　ＳＩ 63・64 の掘削調査。西側の取り残しの遺物をグリッド別、層位別に取り上げる。

5 月 14 日　引き続きＳＩ 63・64 の掘削調査を行う。

5 月 15 日　ＳＫ 23 の完掘平面図の作成を終える。ピットの掘削調査も終え、残すはＳＩ 63・64 のみである。

5 月 18 日　ＳＩ 63 の実測、遺物の取り上げを行う。床面に炉跡を確認する。やや壁側に寄っている。

5 月 19 日　ＳＩ 63・64 の掘削調査及び実測を行う。ピットは検出されなかった。ＳＸ４は台石が出土する。

5 月 21 日　取り残しの遺物をグリッド別、層位別に取り上げる。４区の調査を終了する。

塔平遺跡５区　2009 年（平成 21 年度）

4 月 22 日　表土剥ぎに備え、草刈り、排土置場の設定を行う。

4 月 23 日　重機による表土剥ぎ１日目。

4 月 24 日　表土剥ぎ２日目。

4 月 27 日　表土剥ぎ３日目。作業員は剥ぎ残し箇所を掘削。

4 月 28 日　表土剥ぎ４日目。トレンチャーによる撹乱がはげしい。坂田文化財資料室長が来跡。

4 月 29 日　表土剥ぎ５日目。

4 月 30 日　表土剥ぎ６日目。事務所側は圃場整備による削平がはげしい。ローム上面まで削られている。北及び東側にトレンチを設定し掘削する。

5 月 1 日　重機による表土剥ぎの最終日である７日目。壁切り、トレンチ掘削、剥ぎ残し箇所の掘削を行う。北側の削平は想像以上で、基本層７層まで削られている状況である。

5 月 7 日　調査区南及び北側の剥ぎ残し、凹凸を削る。

5 月 8 日　精査した結果、南側は遺構を残していることを確認。

5 月 13 日　株式会社十八測量設計によるメッシュ杭の打設を開始。剥ぎ残し、凹凸の削りを進める。

5 月 14 日　南側の精査、北側の掘削を行う。また 1/100 の下図作成も行った。

5 月 15 日　段落ち部の掘削を行い、精査をかける。メッシュ杭の打設が終了したため、杭へのナンバリング、略測図の作成を行う。

5 月 18 日　表土の剥ぎ残しを掘削。検出した遺構の略測図を作成する。

5 月 19 日　ＳＩ 65 ～ 67 の掘削調査を開始する。

5 月 21 日　ＳＩ 65 ～ 67 の掘削調査を進める。ＳＩ 67 は埋土が若干残っている程度だが遺物も含んでいる。作業員を大きく３班に分けて調査を進めた。

5 月 22 日　ＳＩ 65・66、ＳＤ 13・14 の掘削調査を進める。ＳＩ 66 は焼土、炭化材が多い。溝は近世のものと思われる。４区から続くＳＤ４はＳＸ１と遺構名を変え、検出を進めた。

5 月 25 日　ＳＩ 70 ～ 72、ＳＤ 13・14、ＳＸ１の掘削調査。５区で検出された竪穴建物跡は、今のところ全て弥生時代後期のものと考えられる。

5月26日　昨日に引き続き掘削調査を進める。ＳＩ65・66は遺物出土状況の実測を始めた。

5月27日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

6月1日　弥生後期竪穴建物跡を調査。また、調査区西側で検出した集石の調査も行った。拳大の焼け石が２箇所に15～20点程度まとまっている。検出面は基本層５層の下層、６層上面に近い。

6月2日　昨日に引き続き弥生後期竪穴建物跡を中心に調査。実測と遺物の取り上げも行った。

6月3日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

6月4日　ＳＩ65・70の遺物の取り上げを終了させる。ＳＩ65・66・70は中央に炉をもつことを確認する。

6月8日　国土交通省熊本河川国道事務所、西日本高速道路株式会社との協議。次年度の調査予定地について確認した。

6月9日　竪穴建物跡、溝の調査を進める。ＳＤ15は造成時の土が混入しているようで、締まりがあまり無い。当初の広いプランとは別に、狭くてより深い溝があることを確認。

6月10日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

6月11日　ＳＸ６・７は現代の撹乱であることを確認した。ＳＸ１を1/100の完掘平面図として実測を開始。

6月12日　竪穴建物跡、溝の調査を進める。調査区東側はほぼ調査が終了した。坂口学芸課長が来跡。

6月15日　竪穴建物跡、溝の調査を進める。調査区北側の再精査を行う。西日本高速道路株式会社松繁工事長、伴氏が来跡。

6月16日　気温が３０℃を超える。ＳＩ37は遺物を取り上げ、削平により南側にのみ遺物が残っていないことを確認した。柱穴、炉跡は確認できなかった。ＳＤ17は北へ傾斜していることを確認する。排水に伴う遺構とも考えられる。

6月18日　盛暑。休憩をこまめにとりながらの作業となる。竪穴建物跡、土坑、集石、溝の調査は順調に進んでいる。ＳＤ17はほぼ完掘した。

6月19日　住居跡の調査は終了に近い。ＳＤ16・18としている遺構は焼土面を確認しており、焼土坑と考えられる。連結土坑の可能性を考え、長軸方向へのトレンチ、断面確認を行う必要がある。

6月22日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

6月23日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。剥がれたブルーシートの養生も行った。

6月26日　北側の表土の残っていた箇所の掘削を終了した。東部はローム層まで削平されていた。ＳＩ65・66は掘り下げを進め、ＳＩ65下層にて炉跡のような焼土の広がり部分を確認した。丁寧な検出が必要となる。ＳＩ71の壁際の土器は、弥生後期の台付甕であろう。髙木前課長補佐、村﨑係長、長谷部参事、宮崎参事、西日本高速道路株式会社担当者来跡。

6月29日　雨天。事務所内にて遺物の観察、実測図の整理、チェックを行う。

6月30日　雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。

7月1日　雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。

7月2日　南側の遺構検出を再度行う。ＳＹ３・４については検出状況の撮影を行う。

7月3日　雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。

7月7日　ＳＩ72の掘削を開始する。ＳＩ71は遺物出土状況の実測を行う。

7月8日　雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。

7月9日　ＳＤの掘削調査を中心に進める。

7月10日　雨天。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。

7月13日　ＳＩ71～73の掘削調査を進める。ＳＩ71は遺物出土状況の実測後、取り上げを行う。ＳＩ72は完掘写真の撮影を行った。

7月14日　遺構に加え、調査区を東西に走るトレンチャー（撹乱）の掘削を行う。ＳＩ71・73の完掘状況の撮影を行った。

7月15日　掘り残しがないかの確認と同時に、ＳＤ22も掘削する。実測は、ＳＩ73の遺物出土状況を終え、取り上げも行った。ＳＩ72内土坑はＳＫ29とした。隣接区の調査３区は表土剥ぎが始まる。

7月17日　ＳＩ72内土坑のＳＫ29の掘削調査、調査区中段部分の掘削を進める。実測は、ＳＤ22、ＳＫ27の完掘平面図を実測する。

7月23日　写真前清掃を行う。

7月24日　雨天。空撮は30日に延期となる。事務所内にて遺物の観察、遺物コンテナの整理、実測図の整理、チェックを行う。

7月27日　交通くらし安全課主催熊本県ジュニアドリーム事業で発掘体験。100人以上が参加された。

7月30日　写真前清掃を行う。

7月31日　空撮写真撮影。

8月4日　ＳＩ71の硬化範囲、ＳＫ28の追加断面を実測する。

8月5日　ＳＤ22の完掘写真撮影を行う。また、1/100スケールの遺構配置図を実測する。

8月6日　ＳＤ22の完掘状況図の修正に加え、ＳＤ23の断面図を再度実測する。

8月7日　昨日に引き続き、ＳＤ22･23の実測を行う。

8月10日　炉穴の完掘写真撮影及び完掘状況の実測を行う。

8月17日　1/100スケールの遺構配置図を実測する。ＳＩ71の追加した硬化範囲を実測する。

8月18日　ＳＫ29・33・34の掘削調査、ＳＩ71の床面調査を行う。ＳＫ34はサブトレンチを掘削し調査を行う。東西に伸びるＳＫ33は南北に伸びるＳＫ34を切っているようである。

8月19日　昨日に引き続き、ＳＫ33、ＳＩ71、ＳＤ26・27・29の掘削調査を進める。ＳＩ71はピットを２基検出する。ＳＫ33は４分割して断面の確認、実測を行った。

8月24日　昨日に引き続き、ＳＫ33・34、ＳＤ27の掘削調査を進める。ＳＫ33は焼土範囲を追加して、断面図の実測を行う。

8月25日　ＳＫ33を完掘し、完掘状況の撮影を行う。ＳＫ34の土層断面の実測も行う。調査区内に残る、ＳＤのベルトを掘削した。

8月26日　ＳＫ34を完掘し、完掘状況の撮影と完掘状況の実測を行う。ＳＫ35は焼土範囲の図化まで終了する。

8月27日　ＳＫ35を完掘し、完掘状況の撮影と完掘状況の実測を行う。５区の調査を終了する。

塔平遺跡６区　2009年（平成21年度）

３月２日～３月12日

塔平遺跡６区の西側約1,800㎡分のトレンチ調査を実施し、遺構が検出されなかったことから、２０１０年度からの調査箇所を東側の約2,300㎡に絞り込む。

2010年（平成22年度）

４月28日　表土剥ぎ１日目。調査区東端より開始。東側は予想どおり削平が激しく、表土下40㎝～50㎝でローム層を確認する。村﨑係長、長谷部参事、亀田主任学芸員が来跡。

４月30日　表土剥ぎ２日目。段をつけて落ち始める。溝を検出する。表土も１ｍ近く掘り下げてようやくアカホヤ２次層を確認する。しかし薄い。

５月６日　表土剥ぎ３日目。南北に伸びる溝を確認する。表土の深度が深くなってきており、ペースが落ち始める。

５月11日　表土剥ぎ４日目。調査区西端の表土を剥ぐ。

５月12日　表土剥ぎ５日目。排土の成形を行い、終える。全体的に東から西に段をつけながら落ち込んでいる。段下がりには溝を持つことから、旧耕作地時代の水捌け用もしくは区画溝と考えられる。

５月13日　作業員が集合した。土嚢を作り、調査区囲み作業、壁切作業を行った。株式会社十八測量設計による４級基準点測量及びメッシュ杭設置を開始する。宮崎参事が来跡する。

５月14日　北側壁のトレンチを掘削し、分層作業を行う。昨日に引き続き、株式会社十八測量設計による４級基準点測量及びメッシュ杭設置が行われる。

５月17日　調査区東側の撹乱範囲を確認し、掘削。近世の溝と思われた箇所の壁トレンチ下層より、昭和15年銘の古銭が出土する。

５月20日　東側上段部の表土、撹乱の掘削を行う。南北に走る溝は壁トレンチにより、北側が深く、南が浅いことを確認。

5月21日　昨日に引き続き東側上段部の表土、撹乱の掘削を行う。薄いが西に向かうにつれ基本層３層（黒褐色土）の遺物包含層が残っている。

5月26日　上段部の調査、中央部段下の溝の調査を行う。溝には並行して走る新しい溝があることを確認する。

5月27日　調査区中央部の溝を検出する。南北、東西に走る溝が交差しそうである。旧耕作地時代の排水､あるいは区画のための溝であろう。撹乱(いも穴)も溝に沿って多数確認した。

5月28日　上段部の基本層３層の掘削調査を行う。遺物は縄文後・晩期、土師器とこれまでの塔平遺跡で確認しているものと変わらないが、遺物量はかなり少ない。４層上面では、ピット、土坑となりそうな遺構のみで、竪穴建物跡などは確認できない。

5月31日　調査区西側下段部の表土残土および、３層の掘削を開始する。

6月1日　調査区内３層の掘削。上段部の検出作業を試みるも、乾燥が激しく不可能であった。散水し、検出作業は翌日に持ち越すこととした。

6月2日　調査区東半分（上段部）の遺構検出、検出状況の撮影を行う。東西に走る大きな溝をＳＤ１として掘削を開始した。

6月3日　南北に走る溝をＳＤ２・３とし、掘削を開始する。撹乱（いも穴）が、溝の切り合いを見えにくくしている。

6月4日　ＳＤ１・２・３の掘削調査。溝内からの遺物は瓦が多い。ＳＤ１とＳＤ２は切り合わないことを確認する。

6月8日　東西に平行するＳＤ４・５・６の掘削調査を行う。全て浅く、深度は10～30㎝くらいか。東側の溝をＳＤ７とし掘削を開始。数回掘り直しをしていることを確認する。最下層はローム層まで達する深度である。

6月9日　引き続きＳＤ１・７の掘削を行う。ＳＤ７からは礫、近世陶磁器片が多い。

6月10日　ＳＤ１の掘削は下段（西側）へと移る。溝に沿うように撹乱（いも穴）が並ぶ。ＳＤ７は最終使用期の実測を開始する。

6月11日　昨日に引き続きＳＤ１・７の掘削調査。ＳＤ７は使用２期の掘削を行う。ＳＤ１の深度確認のために壁際のトレンチを階段状に下げる。ローム層まで掘り込まれている。

6月16日　ＳＤ７は使用２期の壁際を掘削。ＳＤ１は壁トレンチで確認したところ予想どおり北東から南西へと落ち込んでいることが分かった。溝幅も少しずつ広くなっている。調査区中央北寄りの箇所に掘立柱建物跡を１棟確認する。長軸がやや西に振れるところを見るに、これまでの塔平遺跡の調査で検出したものと同時期のものか。

6月17日　これまでピットかと思われていたものを皿状に落とし確認するが、そのほとんどが樹痕であった。明日以降は調査区中央に広がる方形の不明遺構の確認も進めていくこととする。

6月21日　調査途中で雨天となる。これまでの遺物の整理と図面のチェックを行う。

6月24日　ＳＤ１の掘削を進める。撹乱（いも穴）も掘削する。ＳＤ７は使用２期の実測も行う。

6月25日　雨天｡図面のチェックと遺物の整理を行う。

6月28日　ＳＤ１・７の掘削。ＳＤ７は使用３期の掘削である。水上文化財保護主事が来跡。

6月29日　雨天｡図面のチェックと遺物の整理を行う。

6月30日　雨天｡図面のチェックと遺物の整理を行う。

7月1日　ＳＤ１・７を掘削し、ＳＤ７は完掘後、完掘状況及び土層断面写真の撮影を行う。

7月2日　先日検出したＳＢ１付近に残る遺構をＳＤ８として検出、掘削を開始した。埋土の色調が濃く、古代～中世のものと考えられる。

7月5日　調査区西側、下段を掘削。ピット配列の確認で掘立柱建物跡を１棟検出する。調査区中央に広がる方形の不明遺構は樹痕と考えられる。深度に大きい差が見られ、下端の凹凸が激しい。ＳＤ８の土層断面を撮影。

7月6日　ＳＤ８を完掘し、完掘状況写真の撮影を行い、実測を開始した。中央に向かい階段状に窪んでいくので、エレベーション図を追加することとした。

7月7日　ＳＤ１を完掘した。西端の掘削を開始し、段下部に大きくカーブする新たな溝を検出する。

7月8日　昨日検出した溝をＳＤ９とし、掘削を開始。ＳＤ２付近で検出した掘立柱建物跡をＳＢ２とし調

査を開始する。ＳＤ７付近で検出した焼土、炭化物を含むピットを挟むようにピットを２基検出。周辺の削平の状況から２本柱の竪穴建物跡の痕跡とも考えられる。

7月9日　ＳＤ９の掘削を中心に進める。南北部と東西部では断面が異なる。時期差があったものをつなげた可能性もあるが確認ができない。ＳＤ９北側より須恵器が４～５片融着した遺物が出土する。

7月13日　雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。

7月14日　雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。

7月15日　雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。

7月20日　ピット、ＳＤ９の掘削を進める。下段の遺構検出を行うも、遺構密度は低いようである。

7月21日　調査区中央スロープ付近の遺構検出を行い数基の土坑、ピットを検出する。また、方形の不明遺構の半裁等で確認を進めそのほとんどが樹痕であることが分かった。検出作業を行った箇所の遺構検出状況写真に加え、ＳＤ４・５・６の土層断面写真の撮影を行う。

7月22日　昨日に引き続き、検出した遺構の半裁、確認を進め、やはりそのほとんどが樹痕であることが分かる。ＳＢ１・２については４隅の柱穴はしっかりと残っているが、その間のピットが浅かったり締まりが無かったりとしっくりこないものが多い。1/100の遺構配置図の実測を開始する。木﨑課長補佐が来跡。

7月23日　検出できたＳＫ１～13までの断面写真撮影と実測を行う。

7月26日　昨日撮影できなかった土坑の断面写真の撮影と実測を行う。西側に検出したピット配列だが、当初は掘立柱建物跡として考えてはいたが、ピットの締まりが無かったり、樹痕であったりと、厳しい結果であった。

7月27日　ピット、土坑の調査を進める。昨日に引き続き掘立柱建物跡として考えていた箇所の検討を行ったが樹痕が多く厳しい。

7月28日　西側の遺構配置図の実測とＳＫ12・14の土層断面図の実測を行う。

7月30日　ＳＢ１・２の土層断面、及び完掘平面図の実測を行う。翌日の現場公開に向けて調査区周辺の掃除を行う。

7月31日　発掘体験・遺跡見学会を実施。59名の方が来跡された。ＳＤ２・３の完掘状況の写真撮影も行う。

8月3日　ＳＢ１・２を完掘させ、完掘状況の写真撮影を行う。ＳＢ２周辺にもＳＢ１同様、樹痕が広がる。掘立柱建物と樹痕の位置関係が気になる。垣根の可能性を考える。最下段に新たな掘立柱建物跡を検出する。

8月4日　昨日検出した遺構をＳＢ３・４とし、掘削調査を行う。また、調査区北西側に検出した畝状遺構の調査も進める。

8月6日　ＳＤ９の北壁の断面状況から再検討を行い、再掘削を行う。調査を終えていたＳＤ５の名残を下段で検出したため、撮影のし直しを行う。

8月10日　ＳＤ９の調査、意図的な配置をみる樹痕をＳＸ１～９と付し掘削。ＳＢ３・４の完掘写真の撮影も行う。ＳＩ１～３を北側トレンチ付近で検出。ＳＩ４～６は西端付近で検出。後者は埋土がほとんど無く、遺構想定プラン中央付近に炉跡と思われる。

8月11日　雨天。図面のチェックと遺物の整理を行う。

8月12日　ＳＩ１～６の掘削調査を進める。土坑やＳＤ９の実測も行う。

8月17日　ＳＩ４～６内のピットを実測。翌日の空中写真撮影に向けて、調査区内の掃除を行い、全体の3/5ほどを終了する。

8月18日　九州航空株式会社による空中写真撮影を行う。その後、ＳＤ１、ＳＩ４～６、遺構配置の写真撮影を行う。

8月19日　ＳＩ１～６、ＳＤ９の掘削を行い、完掘する。調査区東側より、等高線実測を開始する。炉跡と思われるピットとそれを挟むように位置していたピットの箇所をＳＩ７とし、検出状況の撮影も行う。

8月20日　ＳＩ４～６の完掘平面と調査区の等高線実測を行う。

8月23日　ＳＩ７・８の掘削を行う。ピット２基に炉跡と思われる遺構、という不明な点が多いが、ＳＩとしている。等高線実測は終了する。

8月24日　基本層５層の掘削を開始する。ＳＩ５・

６の土層断面、土坑の完掘状況の実測を進める。

8月25日　基本層５、６層の掘削を進める。数点の礫の出土が確認された。ＳＩ４～６の遺物の取り上げ記録は、ナンバリングを行い図面に記録していくこととした。

8月26日　昨日に引き続き基本層５、６層の掘削を進める。ＳＫ29は炭化物、材の検出があったため、出土状況の実測を行う。埋土は２層に分かれ、出土遺物は埋土１層からのものである。

8月27日　基本層５、６層の掘削を進める。ＳＩ９を検出するも、ＳＩ７・８と同様、ピット２基に炉跡と思われる遺構、という不明瞭なものである。

8月30日　ＳＩ１～３の完掘写真を撮影する。遺構本体の埋土はほとんど無いため、想定プランを破線で結んだ。

9月1日　基本層５、６層の層界付近にて、三稜尖頭器が出土する。樹痕の多かった範囲で出土するものは、ほとんどが縄文後・晩期の土器である。

9月2日　昨日の層界で石器が出土したこと、６層上面に隆起している箇所があることなどから、６層を３㎝程度掘り下げ、他に石器の広がりがないか、確認作業を開始する。

9月3日　焼土粒子が散る土坑を検出。ＳＫ36とするが、平面径はピットサイズである。村﨑係長が来跡され、先日出土した石器についての所見、掘削指導を受ける。坂口装飾古墳館学芸課長も来跡。

9月7日　台風接近のため、現場を中止する。事務所内で図面チェックを行う。

9月8日　土坑の掘削調査、実測を中心に進める。ＳＫ36は６層から掘り込まれており、下層はローム層まで達する。全体的に焼土粒子、最下層には20㎜程度の焼土ブロックが混入する。周辺にトレンチを設定し、確認するも、連結土坑になる要素は見つからない。

9月9日　ＳＫ36のやや南側にＳＫ37を検出。焼土粒子の散る遺構であるが、平面径も大きく、浅い。下段のトレンチ内より、縄文早期の土器が出土する。益城町教育員会の堤氏が来跡。

9月10日　ＳＫ36を完掘。焼土ブロックをサンプリングする。下段は10m × 10mのベルトを設定し、掘削を開始する。

9月13日　下段の基本層５層を掘削する。縄文早期の押型文が出土する。また、礫の散在が見られる。

9月15日　最下段のＳＤ９の掘削を行う。５層中に輝緑凝灰岩のものと思われる石核、調査区西端より調整痕を残す石器が出土する。

9月16日　遺物の点上げを開始する。また、上段部の５層完掘状況を撮影する。

9月17日　下段の５、６層遺物出土状況を撮影。また、上段部の等高線を実測する。

9月21日　上段部のトレンチ調査、下段部の遺物取り上げ、実測を行う。

9月22日　雨天。職員で、昨日清掃を終えた上段部の完掘写真を撮影する。

9月24日　ＳＫ38を完掘。下段の清掃後、完掘写真の撮影を行う。

9月27日　下段部の基本層６層を掘削する。Ｅ４グリッドにて集石を確認する。

9月28日　下段のトレンチ、及び６層の掘削。昨日検出した集石をＳＹ１とし調査する。掘り下げ途中で土器片も出土。後・晩期の遺構か。調査区全体で落ち込みの激しい３箇所の断面を実測する。西日本高速道路株式会社より松繁工事長が来跡する。

9月29日　実測を中心に行う。大方の調査を終了したため、ベルトの掘削も開始する。宮崎参事が来跡。

9月30日　ベルトを掘削し、遺物を取り上げる。調査で使用した機材を資料室へ搬出し、調査を終了した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

塔平遺跡が所在する熊本県益城町は、北緯 32 度 47 分、東経 130 度 50 分に位置する。東西約 11km、南北約 13km、面積は 65.64k㎡を測り、熊本県のほぼ中央に位置する。行政域としては上益城郡に属し、その北部に位置する。西は上益城郡嘉島町、西から北西に熊本市、東は阿蘇郡西原村、南は上益城郡御船町と接している。東部・南部は九州山地から続く、城山（480.4m）、朝来山（469.5m）、船野山（307.8m）、飯田山（481.2m）などが山塊を形作る。北部は広大な益城台地が広がり、西部は熊本平野に連なり、その東域をなす。

本遺跡の東側には、益城町から八代郡氷川町へと至る国道 443 号線が継走しており、交通の要衝となっている。熊本県庁にも程近く、熊本県の玄関口である阿蘇くまもと空港、九州縦貫自動車道、益城熊本空港インターチェンジ等を有し、交通網や立地条件の良さから、近年は著しく人口が増加するとともに、九州横断自動車道延岡線などの開発工事も進んでいる。

益城町には、益城町津森の金山川沿い及び木山川沿いに巨礫層「下陣礫層」、金山川沿いに泥層「津森層」が分布する。益城台地の標準的な土層は、表土以下、黒色土（クロボク）、暗褐色土（アカホヤ）、ブロック状の土（ニガ土）、黄褐色土（ローム層）が堆積している。

第２節　歴史的環境

（１）旧石器時代

益城町では、旧石器を調査目的とした発掘調査による遺跡は確認されていない。しかし、本遺跡では、かつて細石器・スクレーパー・剥片・礫器が表面採集されており、平成 21 年度の発掘調査でも三稜尖頭器・ナイフ形石器が出土している。また、大辻遺跡（大字馬水・大辻）では、黒曜石製の細石刃が確認されている。益城町東部に位置する阿蘇郡西原村の河原第３遺跡・西原第 14 遺跡においては、６つの旧石器時代に属する文化層が確認されており、姶良丹沢火山灰を包含する層の下位まで石器が確認されている。また、同郡山都町の北中島西原遺跡では、本調査において三稜尖頭器・ナイフ形石器の出土、石器製作時のブロックが確認されている。今後益城町においても、新たな遺跡発見の可能性があると考えられる。

（２）縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで数多く存在している。本遺跡でも平成21年度の調査では早期の炉穴、集石を検出したほか、後期から晩期の竪穴建物跡 13 軒、埋設土器を４基検出しており、集落が形成された時期であることが分かっている。櫛島遺跡は、昭和 47 ～ 48 年に九州縦貫自動車道建設に伴い発掘調査され、早期押型文土器や塞ノ神式土器のほか、石槍・石斧なども出土している。石蒸し料理をした跡と考えられる集石遺構や長楕円形の炉跡がヒトデの様な形で重なって検出されている。また、古閑遺跡・古閑北遺跡では、後期後半～晩期の黒色磨研土器が多量に出土しており、「古閑式土器」として標識土器となっている。大辻遺跡では縄文後期から晩期の円形周溝遺構８基が検出されている。御船町の辺田見中道遺跡では後期の阿高式、北久根山式を中心とした土器のほか石錘、石銛などの漁労具などが出土している。

（３）弥生時代

弥生時代の遺跡は、当遺跡が所在する小池に集中している。特に、八反田遺跡（大字砥川）から出土した

甕棺は、弥生前期の板付式土器と縄文的採色の強い夜臼式土器が使用されており、当時の縄文時代から弥生時代への移行期の時代相を反映したものとみられる。

塔平遺跡では後期の竪穴建物跡が 27 軒検出されており、中には遺物がまとまって出土している遺構もあり、当時の生活用具を考察する良好な資料が確認されている。

秋永遺跡（大字小池）では弥生時代の竪穴住居跡と思われるものが検出され、免田式土器を含む弥生時代後期の土器が多量に出土している。また、弥生時代中期と思われる甕棺墓も検出されている。その他にも、環濠の一部と思われるＶ字形の溝や、弥生時代後期の水田遺構も検出されている。

平田遺跡（大字平田）では、弥生時代後期の甕形土器がほぼ完全な形で出土している。宮園遺跡（大字木山）では、大型甕棺（須玖式）や黒髪式などの小型の甕棺も出土している。また、東無田遺跡（大字島田）や下原遺跡（大字島田）では、弥生時代中期の甕棺が出土している。

当遺跡に近い二子塚遺跡（嘉島町）では、中期の甕棺墓６基、後期中葉から終末期にかけての環濠集落跡として竪穴建物 267 軒、円形周溝２基が検出されており、後期後葉に最盛期を迎えている。集落縁辺部には４軒の鍛冶工房が検出されている。また、舶載鏡２面を含む４面の青銅鏡が出土している。

（４）古墳時代

益城町には畿内政権と深く関わりのある人物の墳墓と考えられるものは存在しない。しかし、木山川沿いの湿地帯の開田による水稲耕作と、台地上の畑作物を生産基盤とした在地の大小の支配者階層の人々の墳墓が見られる。

前期から中期にかけての墳墓としては、大字小池の台地上、大字広崎から大字寺迫に至る台地の縁辺部、大字福原、大字上棟台地上などに分布している。このうち発掘調査されたものは少ないが、昭和 47 年に養豚場堆肥置場の造成の際に発見された塔の平石棺がある。調査されていないため詳細は不明だが、前期の石棺と考えられている。他にも、鏡を副葬していた寺迫の城の本古墳をはじめとする円墳、大字小池の秋永遺跡にみられる方形周溝墓などがある。

中期の後半には、装飾壁画のある井寺古墳（円墳・横穴式石室）が、隣接する嘉島町に造られている。大字宮園にある小柳遺跡では、古墳時代前期から中期頃を中心とした集落跡が検出されている。

後期になると熊本平野東部の勢力の中心は、隣接する御船町の台地上へ移行したとみられ、そこには装飾壁画をもつ今城大塚古墳（前方後円墳・横穴式石室）が造られている。近年の調査では同町の滝川石田遺跡の調査で竪穴建物跡が検出されている。益城町大字小池の鬼塚古墳、大字井寺の遠見塚古墳、大字福原の鬼ノ窟古墳（いずれも円墳で横穴式石室）は、その勢力下にある各地域豪族の墳墓と考えられる。また、県道熊本・高森線に沿った大字寺迫から大字田原にかけての崖面と、大字福原地区には、後期の横穴墓群もみられ、嘉島町の二子塚遺跡では６世紀代の円墳４基が検出されている。

（５）歴史時代

奈良時代・平安時代になると、律令制度の導入に伴い、益城町の多くは益城郡に属し、条里は大きな河川を中心とした自然条件に作用されている。御船川・緑川・木山川（赤井川）の３流域にみられ、益城町の条里遺構は木山川を中心にして、北は益城台地縁辺部から、南は船野・飯田両山麓まで、流れに沿って東西に展開している。

当遺跡の東側に位置する飯田山上には、飯田山常楽寺がある。天台宗の末寺で、益城・御船地域の名刹である。諸説あるが、『元享釈書』には「飯田の真俊」の名があり、平安時代末期、真俊により開基されたと一般的に言われている。常楽寺は天台宗・真言宗・浄土宗に禅宗を加えた四宗の学問と修行道場としての性

格をもつ寺院であったと考えられ、後に天皇家の菩提寺となる京都泉涌寺を開基した僧である月輪大師・俊芿（がちりんだいし・しゅんじょう）を輩出している。奈良時代の近年の調査成果としては御船町が調査した辺田見中道遺跡で、検出された奈良時代末の畔状遺構・溝から多量の木材が出土し、水田関連施設の存在が明らかになっている。塔平遺跡の調査では９世紀初頭から９世紀中頃のカマドをもつ竪穴建物跡３軒、掘立柱建物６軒、近接する嘉島町の二子塚遺跡でも９世紀の掘立柱建物 18 軒、柵列３条、御船町の秋只山下遺跡では９世紀代の土器が検出されている。大辻遺跡では、平安時代の竪穴建物跡 13 軒、掘立柱建物跡 11 棟、鍛冶関連遺構・遺物が確認されており、古代・中世の製鉄遺跡「馬水製鉄所跡」、砂鉄採集が行われていた木山川支流の「鉄砂川」の存在から、鍛冶工房及び鍛冶集団の存在を考察している。また、識字層を示す墨書土器、官人層の有する刀子、石製丸鞆、銅製丸鞆の出土から、行政機関と関係する施設の存在を考察している。

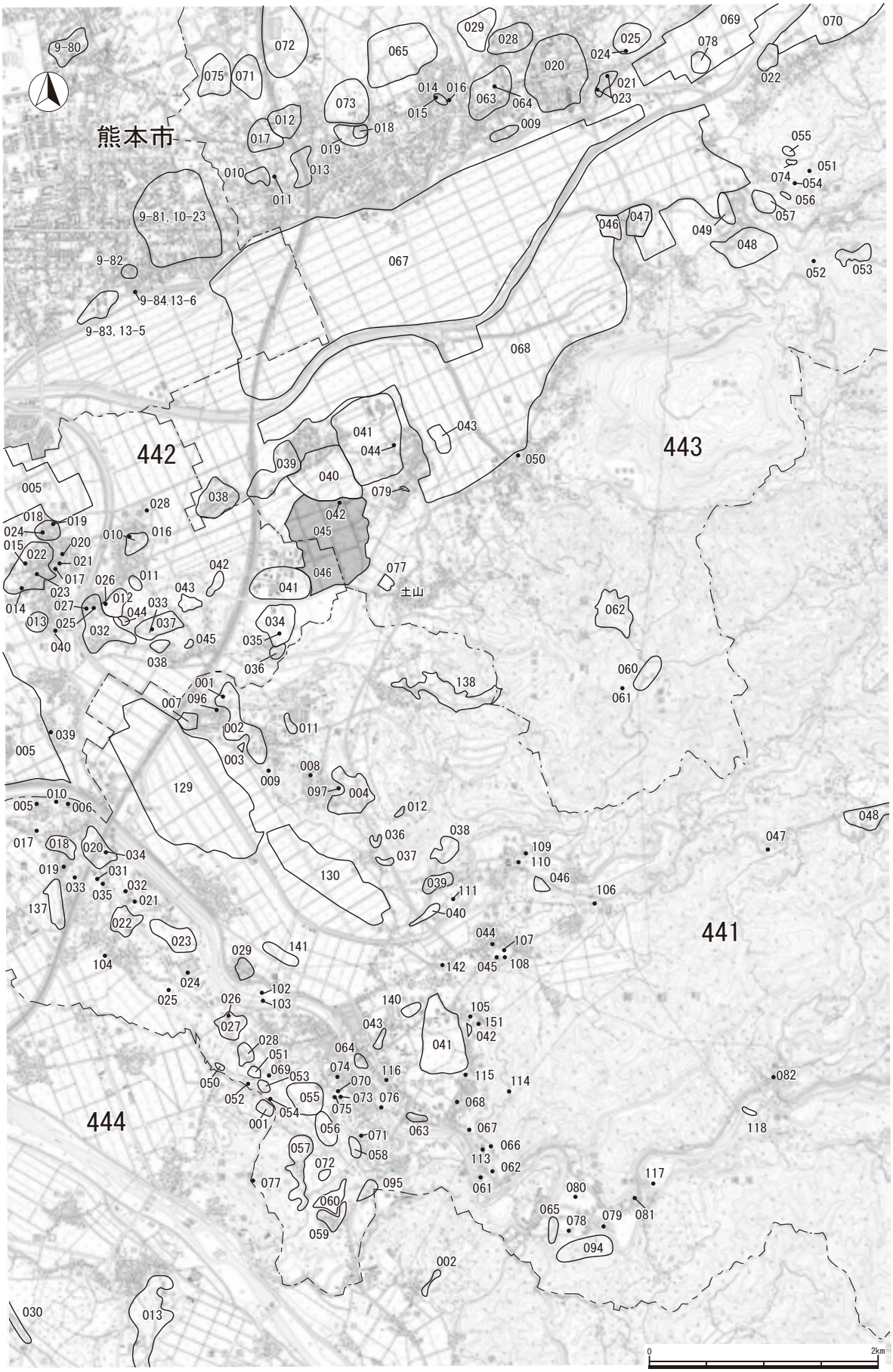
益城町では中世の集落跡等が検出された調査はあまり行われていないが、御船町高木にある山下遺跡では、掘立柱建物、柵列などの遺構、土師器・須恵器・龍泉窯系青磁碗の破片等が出土している。また、小池遺跡では中世から近世にかけての無縫塔、石列、五輪塔や宝塔などが見つかっている。

戦国時代には肥後進出を図る勢力にとっては政局を左右する要衝として、多くの城が築城された。赤井城・砥川城・飯田城（田口平城）・津森城・木山城などがそれにあたる。

近世では、益城町は加藤氏、細川氏の支配に属し、両家の御用瓦を造った土山地区の土山瓦がある。

【引用・参考文献】

益城町　1990 『益城町史　通史編』
堤英介・上高原聡編　2010 『小柳遺跡』益城町文化財調査報告第 21 集　益城町教育委員会
堤英介編　2013 『大辻遺跡』益城町文化財調査報告第 22 集　益城町教育委員会
橋口剛士編　2010 『秋只山下遺跡』御船町文化財調査報告第１集　御船町教育委員会
橋口剛士編　2012 『辺田見中道遺跡』御船町文化財調査報告第２集　御船町教育委員会
橋口剛士編　2013 『辺田見中道遺跡２』御船町文化財調査報告第３集　御船町教育委員会
芝康次郎・小畑弘己編　2007 『阿蘇における旧石器文化の研究』熊本大学文学部考古学研究室研究報告第２集　熊本大学文学部考古学研究室
島津義昭ほか編　1992 『二子塚』熊本県文化財調査報告第 117 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第 184 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999 『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告 175 集　熊本県教育委員会
坂井田端志郎ほか編　2010 『山下遺跡』熊本県文化財調査報告第 260 集　熊本県教育委員会
水上公誠ほか編　2013 『塔平遺跡１』熊本県文化財調査報告第 285 集　熊本県教育委員会



第１図　塔平遺跡と周辺の遺跡（1/50000）

第１表　塔平遺跡周辺遺跡一覧

上益城郡益城町（443）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
443-001	小糸保遺跡	上小糸保　下小糸保	縄文～中世	包蔵地		
443-009	吉川遺跡	安永　吉川	弥生・古墳	集落		
443-010	築山遺跡	広崎　築山・西原	弥生～古代	包蔵地		
443-011	築山古墳	広崎　築山	古墳	古墳		稲荷さん
443-012	古閑遺跡	古閑　宅地	縄文・弥生	包蔵地		縄文・弥生、土師器外の遺物包含
443-013	福重遺跡	古閑　石井川ほか	縄文・弥生	包蔵地		縄文・弥生、土師器外の遺物包含、瓦片
443-014	駿河原遺跡	馬水　駿河原	縄文・弥生	包蔵地		
443-015	益城古墳	馬水　駿河原	古墳	古墳		埴輪片・須恵器
443-016	馬水製鉄所跡	馬水　駿河原	古代・中世	生産		ふいご羽口・鉄滓・青磁・土師器
443-017	広崎六本木遺跡	広崎　六本木	古墳	包蔵地		
443-018	惣領遺跡	惣領　倉木	縄文～古代	包蔵地		
443-019	倉木箱式石棺群	惣領　倉木	古墳	墳墓		石棺多数
443-020	宮園A遺跡	木山　浦見塚ほか	弥生	包蔵地		弥生中期土器
443-021	木山城跡	寺迫　城ノ本	弥生	城		下部に弥生後期住居址群
443-022	平田遺跡	平田　城	弥生	包蔵地		弥生墳墓
443-023	城ノ本古墳群	寺迫　城本	古墳	墳墓	町	円墳・箱式石棺（移転）、刀剣類（考古資料）指定：城ノ本古墳出土品　H18「城ノ本２号墳」『益城町文化財調査報告』第20集（2006）
443-024	上ノ原箱式石棺	寺迫　上ノ原	古墳	墳墓		
443-025	上ノ原遺跡	寺迫　上ノ原	弥生	墳墓		弥生墳墓群
443-028	辻遺跡	宮原　辻	縄文～中世	包蔵地		
443-029	平屋敷遺跡	安永　平屋敷	縄文～中世	包蔵地		
443-038	柳原遺跡	飯田　茂島	縄文	包蔵地		縄文土器
443-039	立石遺跡	飯田　立石	弥生	包蔵地		弥生土器
443-040	東無田遺跡	飯田　東無田原敷	弥生	包蔵地		弥生中期土器・墳墓
443-041	秋永遺跡	小池　秋永ほか	弥生	集落		弥生中・後期、土師器
443-042	荒塚古墳	小池　荒塚	古墳	古墳		
443-043	八反田遺跡	馬川　八反田	弥生	墳墓		弥生中期墳墓
443-044	秋永石棺群	小池　秋永・麻生原	古墳	墳墓		
443-045	塔平遺跡	小池　塔平・長雄・小迫原・牛井川・鬼塚・西岡～惣領町 井寺　上大迫・小笠原	縄文・弥生・奈良～平安	包蔵地・墓地		
443-046	赤井遺跡	赤井　登町	古代	包蔵地		土師器
443-047	赤井城跡	赤井　本丸	中世	城		「本丸」の地名あり
443-048	福原横穴群	福原　西向山	古墳	古墳		平穴
443-049	福田遺跡	福原　福田寺	古墳・古代	包蔵地		大小土師器壺２個出土
443-050	馬川城跡	馬川　城尾	中世	城		「城の尾城跡」
443-051	安養寺跡	福原　杉ノ久保	中世	寺社		
443-052	鬼の俎古墳	福原　滝市川	古墳	古墳		行宮跡の移転説
443-053	福田寺跡	福原　福田寺	古代・中世	寺社		源実朝委器・墓塔
443-054	うどばば横穴	福原　杉久保	古墳	古墳		
443-055	五千塚箱式石棺	福原　五千塚	古墳	墳墓		
443-056	原ガ山遺跡	福原　原ガ山	縄文～古代	包蔵地		弥生土器・須恵器・土師器
443-057	上ノ原箱式石棺群	福原　上ノ原	古墳	墳墓		
443-060	飯田山常楽寺跡	馬川　飯田・常楽寺	古代・中世	寺社		古瓦・礎盤瓦
443-061	飯田古墳	馬川　飯田・常楽寺	古墳	古墳		
443-062	北口平城跡（飯田城跡）	馬川　樋口・光久保	中世	城		
443-063	安永遺跡	安永	弥生～古代	包蔵地		
443-064	大迫石棺群	安永	古墳	墳墓		
443-065	大迫遺跡	馬水　大迫	縄文～平安	包蔵地		
443-067	長堂遺		古代・中世	生産		
443-068	長堂遺		古代・中世	生産		
443-069	長堂遺		古代・中世	生産		
443-070	長堂遺		古代・中世	生産		
443-071	梨木遺跡	広崎　梨木	縄文～弥生	包蔵地		
443-072	古閑北遺跡	古閑　橋久保・鍋瀬	縄文～弥生	包蔵地		
443-073	勝福迫遺跡	福重　勝福迫	縄文～中世	包蔵地		
443-074	杉の久保遺跡	福原　杉の久保	弥生	包蔵地		
443-075	松山神遺跡	広崎　松山神	縄文	散布地		縄文後期～弥生初期土器
443-077	中原遺跡	小池　中原	縄文～古墳	包蔵地		
443-078	小柳遺跡	寺迫　小柳	古墳	集落		古墳時代住居跡「小柳遺跡」『益城町文化財調査報告』第17集（2010）
443-079	小池遺跡	小池　小池	中世	包蔵地		H24.5.16新規記載

上益城郡嘉島町（442）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
442-005	矢形川流域集落跡	下六嘉　上島・姫ほか	古代・中世	生産		
442-010	井寺古墳	井寺　墓屋敷	古墳	古墳	国	横穴式石室墳、陪塚空隙あり、高刀大正10年3月3日指定
442-011	上宮塚古墳群 上宮塚１号古墳・２号古墳	井寺　上宮塚	古墳	古墳		
442-012	上宮塚遺跡	井寺　上宮塚	弥生	墳墓		弥生墳墓
442-013	カキツラ遺跡	下六嘉　カキツラ	弥生	墳墓		弥生墳墓
442-014	カキツラ貝塚	下六嘉　カキツラ	縄文	貝塚		縄文前後期の土器
442-015	宮の本墳墓群	下六嘉　宮の本ほか	弥生	墳墓		弥生墳墓・石庖丁・箱式石棺
442-016	井寺遺跡	井寺　墓屋敷	縄文～中世	包蔵地		
442-017	原上城跡	下六嘉　原上	中世	城		
442-018	西光寺遺跡	下六嘉　西光寺	縄文～中世	包蔵地		
442-019	西光寺墳墓群	下六嘉　西光寺	弥生	墳墓		

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
442-020	内屋敷遺跡	下八幡　西光寺	弥生	埋蔵		
442-021	護国神社の碑（菊地武光）	下八幡　西光寺	中世	碑		
442-022	下八幡遺跡群	下八幡	弥生～古代	包蔵地		
442-023	六幡神社の古墳群	下八幡　宮の本	中世	石造物		
442-024	下八幡の五輪塔	下八幡	中世	石造物		
442-025	虚空塚の塔	井寺　虚空塚	中世	石造物		
442-026	剣原古墳	北甘木　剣原	古墳	古墳		
442-027	剣原遺跡群	北甘木　剣原	弥生	埋蔵		
442-028	手水鉢	竹　浮倉	中世	石造物		
442-032	石塚遺跡	北甘木　石塚ほか	縄文・弥生	埋蔵		縄文後・晩期土器・弥生墓地
442-033	御所塚古墳	北甘木　塔の本	古墳	古墳		
442-034	二子塚遺跡	北甘木　二子塚ほか	弥生・古代	包蔵地		環濠集落
442-035	二子塚古墳	北甘木　二子塚ほか	古墳	古墳		
442-036	下古賀遺跡	下古賀	縄文	包蔵地		縄文土器・土師器
442-037	塔ノ木遺跡	北甘木　塔ノ木　豆坂	縄文～古代	包蔵地		
442-038	小迫遺跡	井寺　小迫	縄文	包蔵地		縄文前期土器
442-039	菊畑神跡	上八幡　菊畑寺	中世	寺社		
442-040	西林寺跡	上八幡　中郡	中世	寺社		
442-041	大隈遺跡	上八幡	弥生	包蔵地		
442-042	内野遺跡	井寺　内野	縄文・弥生	包蔵地		
442-043	村田遺跡	井寺　赤田原	縄文・弥生	包蔵地		
442-044	虚空塚遺跡	井寺　上宮塚	縄文・弥生	包蔵地		縄文土器・弥生土器・墨書
442-045	東原遺跡	北甘木　東原	縄文・弥生	包蔵地		縄文土器・弥生土器
442-046	時平遺跡	井寺　上大迫・小豆坂	縄文・弥生・奈良～平安	包蔵地		

上益城郡御船町（441）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
441-001	甘木貝塚	高木　甘木	縄文	貝塚		縄文遺物散在
441-002	甘木遺跡	高木　甘木	縄文	包蔵地		縄文中後期土器・土師器・須恵器
441-003	天神原遺跡	高木　竜神敷・西原	弥生	包蔵地		弥生・土師器・須恵器
441-004	高野原遺跡	高木　市上	弥生	包蔵地		弥生・土師器・須恵器
441-005	御所塚古墳	豊秋　東原	古墳	古墳		
441-006	城塚古墳	豊秋　市上	古墳	古墳		別名原石塚
441-007	甘木城跡	高木　北屋敷	中世	城		中世城跡
441-008	菅原神社板碑	高木　東菅原	中世	石造物		銘に「阿弥陀如来三尊、永正17年大永元年」あり
441-009	安養寺跡	高木　阿弥陀	中世	寺社	県	
441-010	城塚	豊秋　市上	中世	城		中世城跡
441-011	ツブの山	高木　上古閑原	中世	城塚		
441-012	善知山遺跡	高木　善知山	古代・中世	生産		
441-017	二子塚古墳	豊秋　市上	古墳	古墳		
441-018	久保（秋月）遺跡	豊秋　久保	縄文～古墳	包蔵地		
441-019	秋月古墳	豊秋　山後	古墳	古墳		土師器・須恵器
441-020	秋月古墳群	豊秋　久保	古墳	埋蔵		箱式石棺全体
441-021	小坂大塚古墳	小坂　下原	古墳	埋蔵	町	玉類出土
441-022	樋木原遺跡	陣　樋木原	古墳	埋蔵		土師器・須恵器
441-023	小坂中原遺跡	小坂　中原	弥生	包蔵地		弥生中期土器・土師器・縄文器
441-024	磯塚古墳	小坂　上原	古墳	古墳		
441-025	原塚古墳	陣　原原	古墳	古墳		
441-026	今城大塚古墳	滝川　大塚	古墳	古墳	町	須恵器
441-027	大塚遺跡	滝川　大塚	弥生	包蔵地		弥生後期土器
441-028	滝川中原遺跡	滝川　中原	弥生	包蔵地		弥生中期土器
441-029	平瀬城跡（今城跡）	滝川　城原	中世	城		
441-031	秋月の四方仏塔	豊秋　山後	中世	石造物		
441-032	豊秋西原石塔	小坂　下原	古墳	埋蔵		
441-033	神明山古墳	豊秋　山後	古墳	古墳		
441-034	長塚古墳	小坂　西八幡	古墳	古墳		
441-035	山後石塔群	豊秋　山後	古墳	埋蔵		
441-036	片倉和横穴群A	高木　市上	古墳	古墳		
441-037	片倉和横穴群B	高木　市上	古墳	古墳		
441-038	上の原遺跡	高木　馬場	古墳	包蔵地		土師器・須恵器
441-039	梅塩遺跡	高木　馬場	弥生	包蔵地		弥生土器
441-040	国分横穴群	高木　辺田	古墳	古墳		
441-041	御船高校遺跡	辺田見　行下・山下	古代・中世	包蔵地		瓦器
441-042	木倉新田原遺跡	辺田見　山神	古代・中世	包蔵地		瓦器
441-043	御船古城跡	御船　下岡	中世	城	町	
441-044	西木倉六地蔵	木倉　井出下	中世	石造物		
441-045	甲斐宗運の墓	木倉　荒神門	中世	墓	町	永春寺内にあり　町有形文化財「建造物」指定；甲斐宗運夫婦の墓
441-046	木倉・荒神の箱式石棺群	木倉　原	古墳	埋蔵		
441-047	恋見原古墳	上野　恋見原	古墳	古墳		
441-048	古閑の原遺跡	上野　古閑原	縄文	包蔵地		前期・縄文
441-050	滝川岩屋宮横穴	滝川　岩屋宮	古墳	古墳		
441-051	南原遺跡	滝川　南原	縄文・弥生	包蔵地		縄文早期土器・弥生土器
441-052	岩屋宮B横穴群	御船　下岩屋宮	古墳	古墳		
441-053	岩屋宮B遺跡	御船　下岩屋宮	縄文	包蔵地		縄文後期土器
441-054	岩屋宮A横穴群	御船　下・上の谷宮	古墳	古墳		人骨
441-055	下山神遺跡	御船　下山神	弥生	包蔵地		弥生後期土器

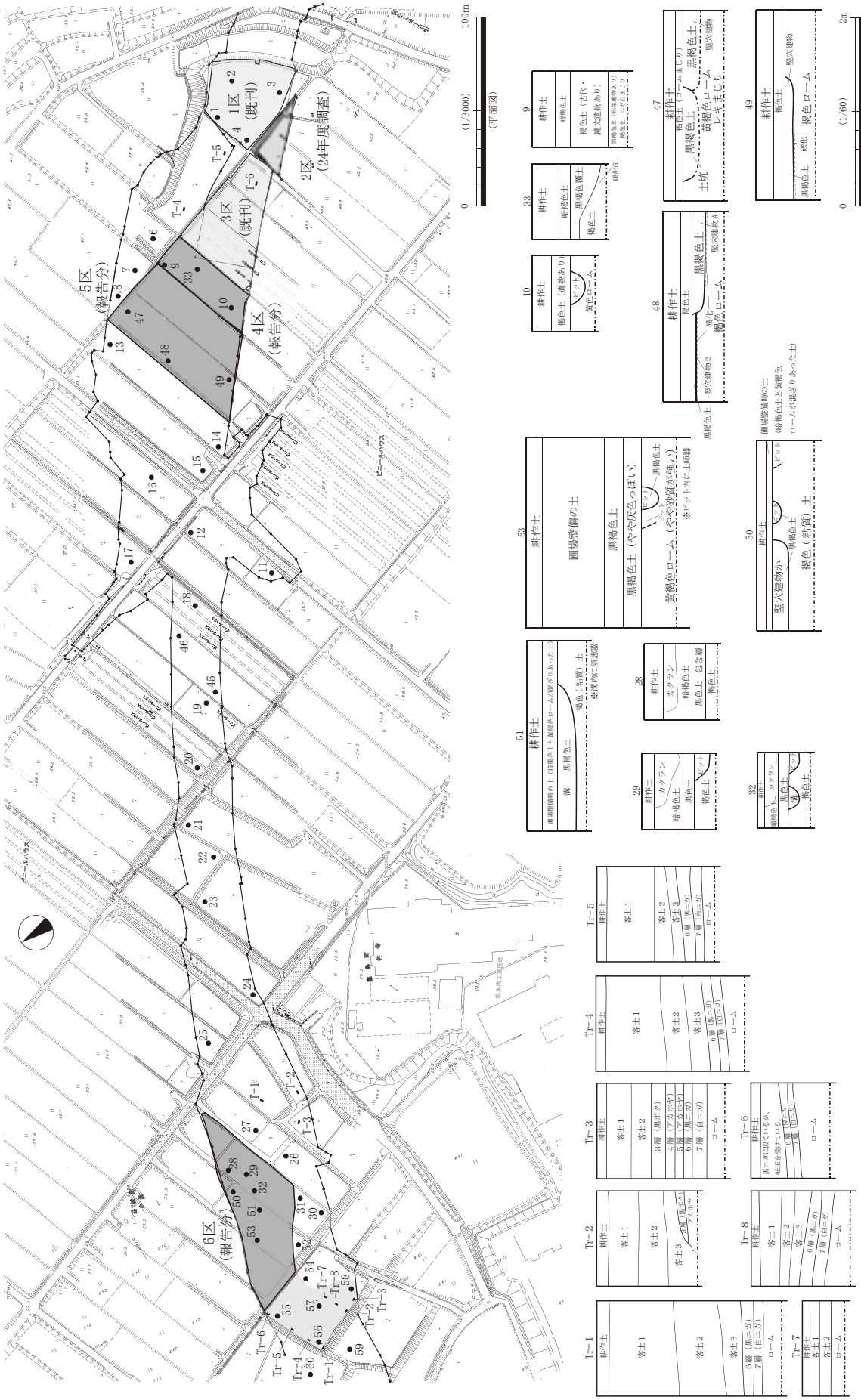
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
441-056	岩屋堂Ａ遺跡	都町　上岩屋堂	縄文・弥生	包蔵地		縄文後期土器・弥生後期土器
441-057	下辺山遺跡	都町　下辺山	弥生～古代	包蔵地		
441-058	中山神遺跡	都町　中山神	縄文	包蔵地		縄文前期土器・石斧
441-059	上辺山遺跡	都町　上辺山	縄文	包蔵地		縄文前期土器・土師器・須恵器
441-060	上山神遺跡	都町　上山神	弥生	包蔵地		弥生後期土器
441-061	東禅寺第２号古墳	辺田見　東禅寺	古墳	古墳		
441-062	東禅寺第１号古墳	辺田見　東禅寺	古墳	古墳		須恵器・金冠
441-063	辺田見所塚	辺田見　下鶴	縄文	貝塚		縄文中後期土器
441-064	六丁目遺跡	都町　町屋（６丁目）	弥生	包蔵地		弥生土器
441-065	玉泉経塚群	滝尾　玉泉	中世	経塚		
441-066	阿部家の墓	辺田見	近世	墓地		
441-067	光永平蔵の墓	辺田見　平鍋山	近代	墓		
441-068	木倉手永会所跡	辺田見　山下	近世	包蔵地		移転（吉久間邸宅）
441-069	相良塚	滝川　新原	中世	塚墓		
441-070	熊本藩士の墓	都町　町屋	近代	墓	町	（十五戦士の墓）
441-071	熊本鎮台都城の碑	辺田見　大坂	近代	石造物		
441-072	道入横山遺跡	辺田見	縄文～中世	包蔵地		
441-073	取放場跡	都町　町屋（３丁目）	近世	包蔵地		片山
441-074	都城郡庁跡	都町　５丁目	近代	包蔵地		保育園
441-075	肥後藩大砲鋳造所跡	都町（清町 法光寺）	近世	生産		
441-076	都城川目橋跡	都町　町屋（３丁目）	近世	包蔵地	県	慶永元年（1848）横山石工の設計、評所、文八によって築造された長さ60.6mの二連眼鏡橋である。昭和61年５月３日県単、基礎部分残存、石材保管。昭和58年10月19日指定
441-077	白鷺山墓地群	都町　上辺山	近代	墓地		
441-078	玉泉の松法御経塔	滝尾　玉泉	中世	石造物	町	永保元年（西暦１１８２年）三月二十三日町有形文化財（建造物）指定：玉泉の経塔
441-079	玉泉寺跡	滝尾	中世	寺社		
441-080	玉泉六地蔵	滝尾	中世	石造物		
441-081	横野光明寺五重塔	滝尾　横野	中世	石造物	町	光明真言（建文４年）
441-082	下鶴祖師堂	滝尾　下鶴	近世	建造物	町	
441-094	玉泉遺跡	玉泉	古墳～古代	包蔵地		
441-095	妙覚坂遺跡	辺田見　下辺田見	弥生～古代	包蔵地		
441-096	甘木地蔵堂の板碑	高木　甘木	中世	石造物		阿弥陀来迎像
441-097	平尾神社の板碑	高木　宮上	中世	石造物		阿弥陀三尊像
441-102	水神社の板碑	滝川　新地	近世	石造物		享保12年
441-103	聖観院の板碑	滝川　新地	中世	石造物		種子字「クーン」
441-104	金光寺の六地蔵塔	勝　所屋敷	中世	石造物		残欠２基
441-105	観音院の板碑群	木倉　観音院	中世	石造物		天正８年他、数十基有り
441-106	三心庵の板碑	木倉　三心庵	中世	石造物		結跏趺石
441-107	永善寺の板碑・石塔	木倉　屋敷	中世	石造物	町	無銘・永禄13年、町有形文化財（建造物）指定：永善寺の石塔
441-108	永善寺門前の板碑	木倉　屋敷	中世	石造物		阿弥陀三尊
441-109	浄光寺の板碑	木倉　浄光寺	中世	石造物		享禄３年・永禄７年（追刻11年）
441-110	浄光寺跡	木倉　浄光寺	中世	寺社		
441-111	北木倉の板碑	木倉　辻田	中世	石造物		阿弥陀三尊・天文18年銘
441-113	東禅寺木造釈迦三尊像	辺田見　東禅寺	中世	石造物	県	県重要文化財（彫刻）指定、平安末期来縁の像 町指定、六地蔵 町指定
441-114	上辺田見の板碑	辺田見　山神	中世	石造物		永禄２年・天文17年
441-115	中道橋	辺田見　山下	近世	建造物		安政２年建
441-116	大戸手川橋	辺田見　町屋	近世	建造物		橋上はコンクリート
441-117	明王堂の板碑	滝尾　明王堂	中世	石造物		天文８年銘
441-118	下梅木の板碑	滝尾　広瀬	中世	石造物		永禄９年
441-129	高屋跡	小坂・高木	古代・中世	生産		
441-130	高堂跡	木倉	古代・中世	生産		
441-137	秋月山下遺跡	豊秋　秋月	弥生～中世	集落		
441-138	山下遺跡	高木　下原田・山下・高山	縄文・中世	包蔵地		
441-140	辺田見中道遺跡	木倉～辺田見　辻	縄文	包蔵地		縄文土器・石器
441-141	滝川辺田遺跡	滝川	縄文・古墳	包蔵地		縄文土器・須恵器・土師器
441-142	門前川橋	木倉	近世	建造物	町	文化５年建
441-151	木倉辻窯跡	木倉　辻	古墳・古代	生産地		須恵器・新平により全容不明

上益城郡甲佐町（444）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
444-001	中尾洞遺跡	白旗　中尾	弥生	包蔵地		弥生中後期土器・石庖丁・石斧
444-002	北平川橋門跡	白旗　北平川	古墳	古墳		
444-003	田口東原遺跡	田口　東原	縄文	包蔵地		縄文（晩）・須恵器・黒曜石
444-030	中山鍋川遺跡	中山　鍋川	弥生・古代	集落跡		土師器・須恵器・弥生土器

熊本市遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
9-80	宮上原遺跡	熊本市東区健軍町宮上原	縄文～平安	包蔵地		
9-81,10-23	沼山津遺跡	熊本市東区秋津町	弥生～平安	包蔵地		
9-82	下津代窯遺跡	熊本市東区秋津町	縄文～平安	包蔵地		
9-83,13-5	沼山津貝塚	熊本市東区秋津町３丁目沼山津	縄文	貝塚		縄文中期・後期
9-84,13-6	四時郵及び四時郵跡	熊本市東区秋津町沼山津	江戸	建造物	市	未指定建造物及び史跡



第２図　塔平遺跡試掘・確認調査位置図及びトレンチ土層断面図（1/3000・1/60）

第３章　調査の方法

第１節　調査方法

発掘調査区は、試掘・確認調査で遺構・遺物が確認された敷地内に設定し、４区・５区・６区とした。調査面積は 1,095㎡（４区）、2,925㎡（５区）、4,150㎡（６区）である。

（１）調査４区

平成 20 年９月から発掘調査のための資料収集、調査事務所の準備、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所と協議を重ねるなど、事前準備作業を行い、10 月より調査４区の発掘調査を開始した。

調査対象地の除草終了後、重機（バックホー）を用いて１層～２層（表土層）を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。その後、人力により３層（黒褐色土層）以下、最も深いところで５層（褐色土層）途中まで順次掘り下げた。人力による掘削作業は、遺物包含層の掘削後、当時の生活痕跡である遺構の検出作業を行った。次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。調査区全体を含む高所からの各層での遺構完掘状況及び遺跡周辺地形の写真撮影作業は、高所作業車やセスナ機を用い実施した。平成 21 年５月に現地調査を終了した。

なお、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、世界測地系を使用した。調査区グリッド設定図は第３図に示す。

（２）調査５区

調査５区の発掘調査は、まず重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。その後、人力により６層（暗褐色土層）以下、最も深いところで８層（黄褐色ローム層）まで順次掘り下げた。遺物包含層の残りが非常に悪く、６層（暗褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーによる耕作痕も多数確認された。したがって、主に基本土層６層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

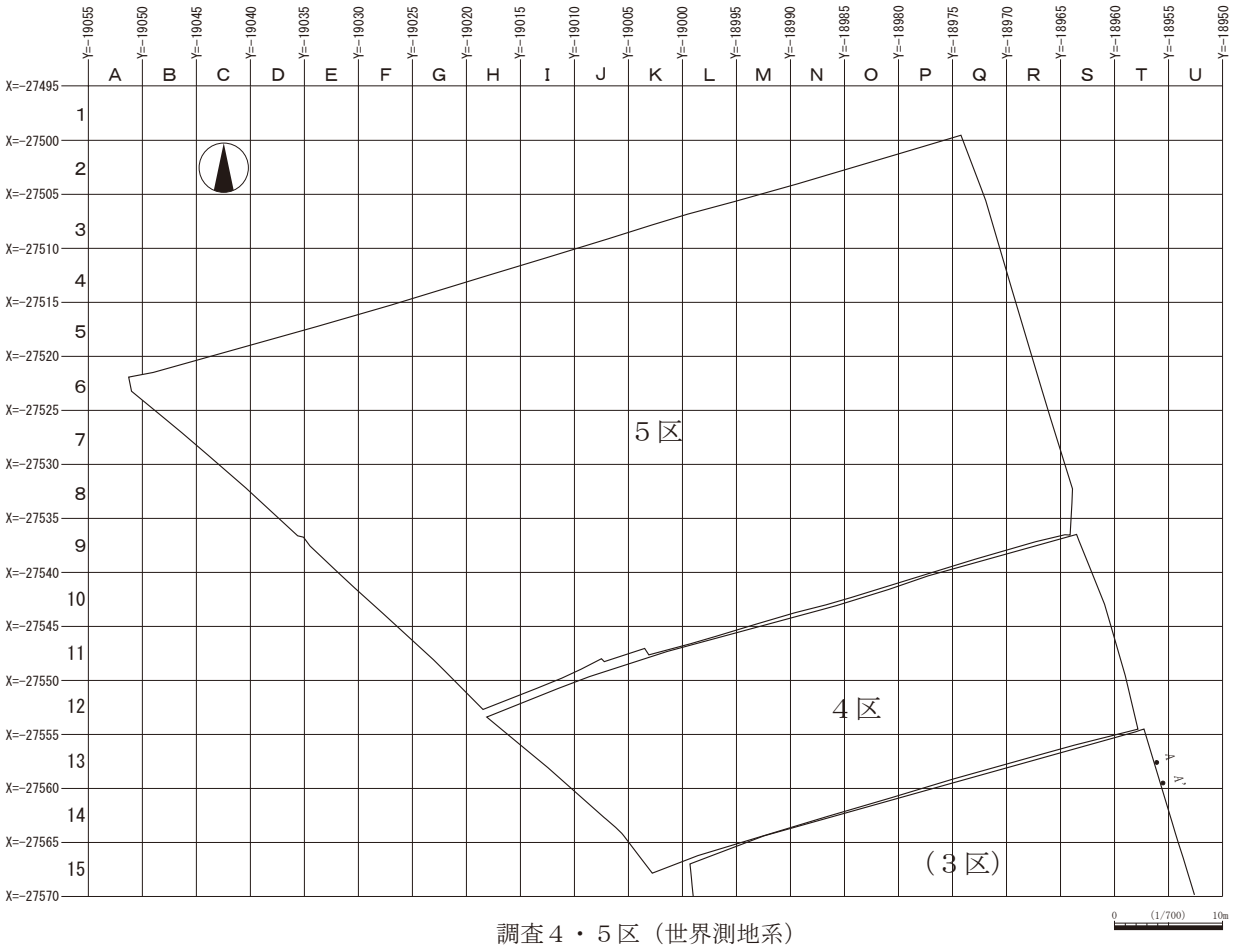
次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の遺構実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成 21 年８月末に現地調査を終了した。

なお、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、４区同様世界測地系を使用した。調査区グリッド設定図は第３図に示す。

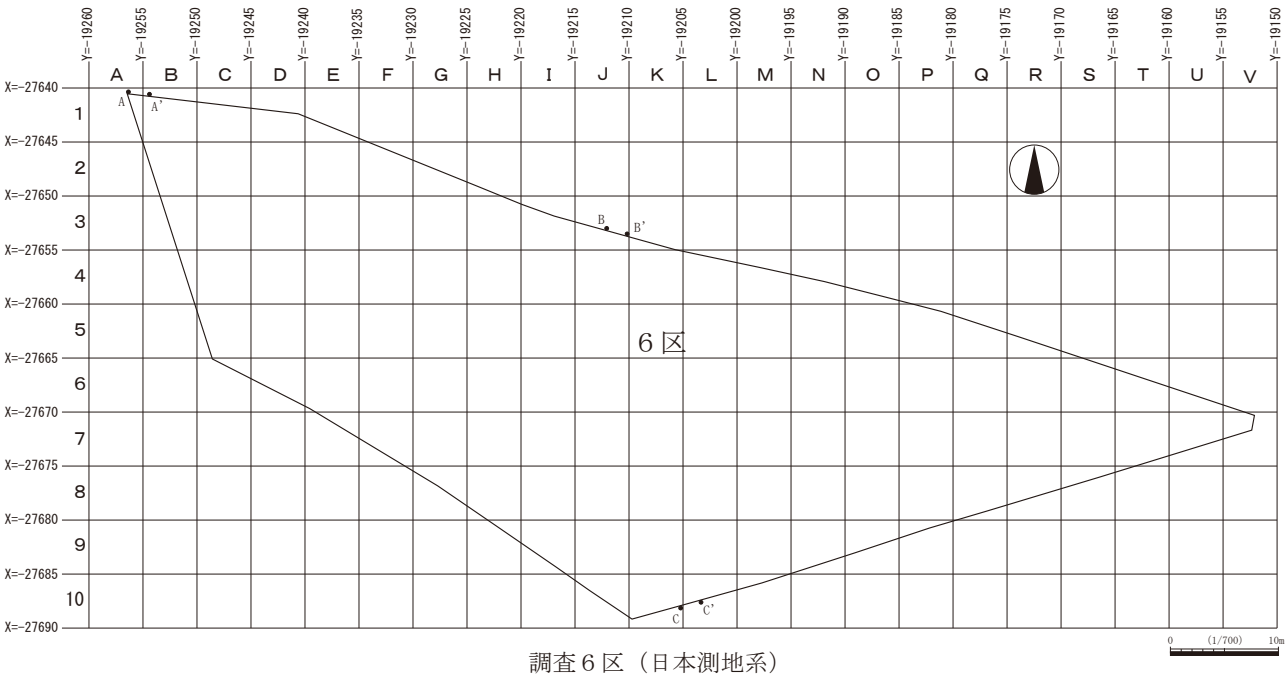
（３）調査６区

調査６区の発掘調査は前年度３月に行ったトレンチ調査の結果をもとに絞り込みを行い、平成 21 年４月から開始し、５日間かけ、重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。その後、人力により３層（黒褐色土層）以下、最も深いところで８層（黄褐色土層・ローム層）を順次掘り下げた。遺物包含層の残りは西側が非常に悪く、８層（黄褐色土層）まで圃場整備により削平されていた。また、トレンチャーやいも穴、区画溝による耕作痕も多数確認された。主に基本土層４層（暗褐色土層）上面で、当時の生活痕跡である各種遺構の検出作業を行った。

次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の遺構実測図作成



調査４・５区（世界測地系）



調査６区（日本測地系）

第３図　　調査区グリッド設定図（1/700）

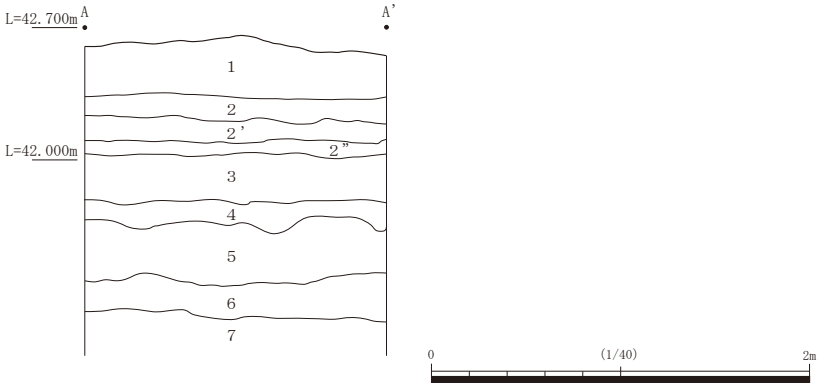
作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成 22 年９月末に現地調査を終了した。

なお、４級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、日本測地系を使用した。調査区グリッド設定図は第３図に示す。

第２節　層序

本遺跡の層序は以下のとおりである。

１層：表土（耕作土）
２層：圃場整備の整地層
　２’層：同上
　２’’層：同上　２’’層は３層と混じる。焼土粒・ローム粒子を多量に含む
　　焼土ブロックを多く含む
３層：黒褐色土層　（略黒ボク）
　　10YR2/2 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　粒径１㎜の焼土粒を少量含む
　　古代の遺物を多く含む
４層：暗褐色土層　（略漸移層）
　　7.5YR3/3 暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　層は薄い　粒径１㎜の焼土粒を少量含む　３層に比べ色調は淡い
５層：暗褐色土層　（略アカホヤ２次）　調査時に「褐色土層」と呼称していたもの
　　10YR3/3 暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　粒径１㎜の焼土粒を微量含む
　　３層や４層に比べ色調は淡くややまだら
　※４・５層は、古代・弥生・縄文の検出層（５層を２～３㎝を下げた面で検出）
６層：黒褐色土層（略クロニガ）調査時に「暗褐色土層」と呼称していたもの
　　10YR2/2 黒褐色土　締まり強い　粘性強い
　　７層と比べ黒味の強い土層である
７層：暗褐色土層（略シロニガ・ニガシロ）
　　10YR3/4 暗褐色土　締まり強い　粘性強い
　　無遺物層　縄文時代早期の炉穴はこの上面で検出が可能となる



第４図　　塔平遺跡（４・５区）基本土層柱状図

１層：耕作土

２層：圃場整備の土

２ａ層：10YR4/3 にぶい黄褐色土　８～２ａ’層ブロックの混合した土　圃場整備の土

２ａ’層：10YR6/2 灰黄褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　２㎜大の炭化物・橙色粒子（焼土粒子？）多く混じる　２㎜大レキ多い

２ｂ層：2.5Y3/2 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　２㎜大の炭化物・橙色粒子（焼土粒子？）多く混じる　２㎜大レキ多い

３層：黒褐色土

10YR3/2 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　２㎜大の炭化物・橙色粒子やや多い

中世・古代～縄文後晩期　検出面
サラサラして締まりややゆるい

４層：暗褐色土（漸移層）

10YR3/3 暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　縄文中期・早期の土器・石器出土

５層：褐色土層（略アカホヤ２次）

10YR4/6 褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　含アカホヤ火山灰　縄文中期・早期の土器・石器出土

縄文早期　検出面
ゴチゴチしてよくしまる

６層：暗褐色土層（略クロニガ）

６ａ層：10YR3/4 暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　石器（旧石器？）２点出土

６ｂ層：10YR2/3 黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い

旧石器確認のため７層 10cm 下げる
ところまでトレンチいれるも確認できず

ニガまざりでザクザク
きゅっとしまる

７層：褐色土層（略シロニガ）　10YR4/4 褐色土　（全体的に見ると）締まり強い　粘性やや強い

７層上：4/4 褐色土　締まり強い　粘性やや強い　ニガ化したブロックやや多い

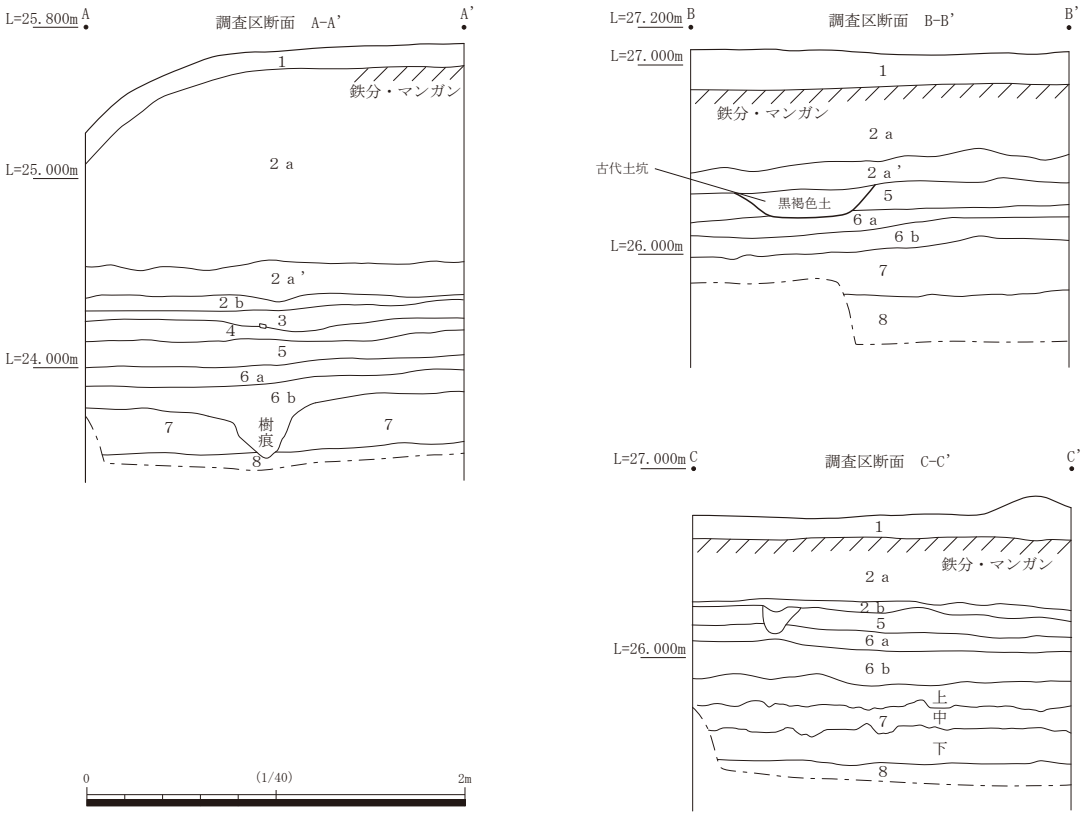
７層中：4/6 褐色土　締まり強い　粘性やや強い　ニガ化したブロックが非常に多い

７層下：3/3 暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ニガ化したブロック少ない
上・中層に比べ黒みがある

ぬちょっとして固くしまる
乾燥するしガチガチ

８層：黄褐色土層（ローム層）

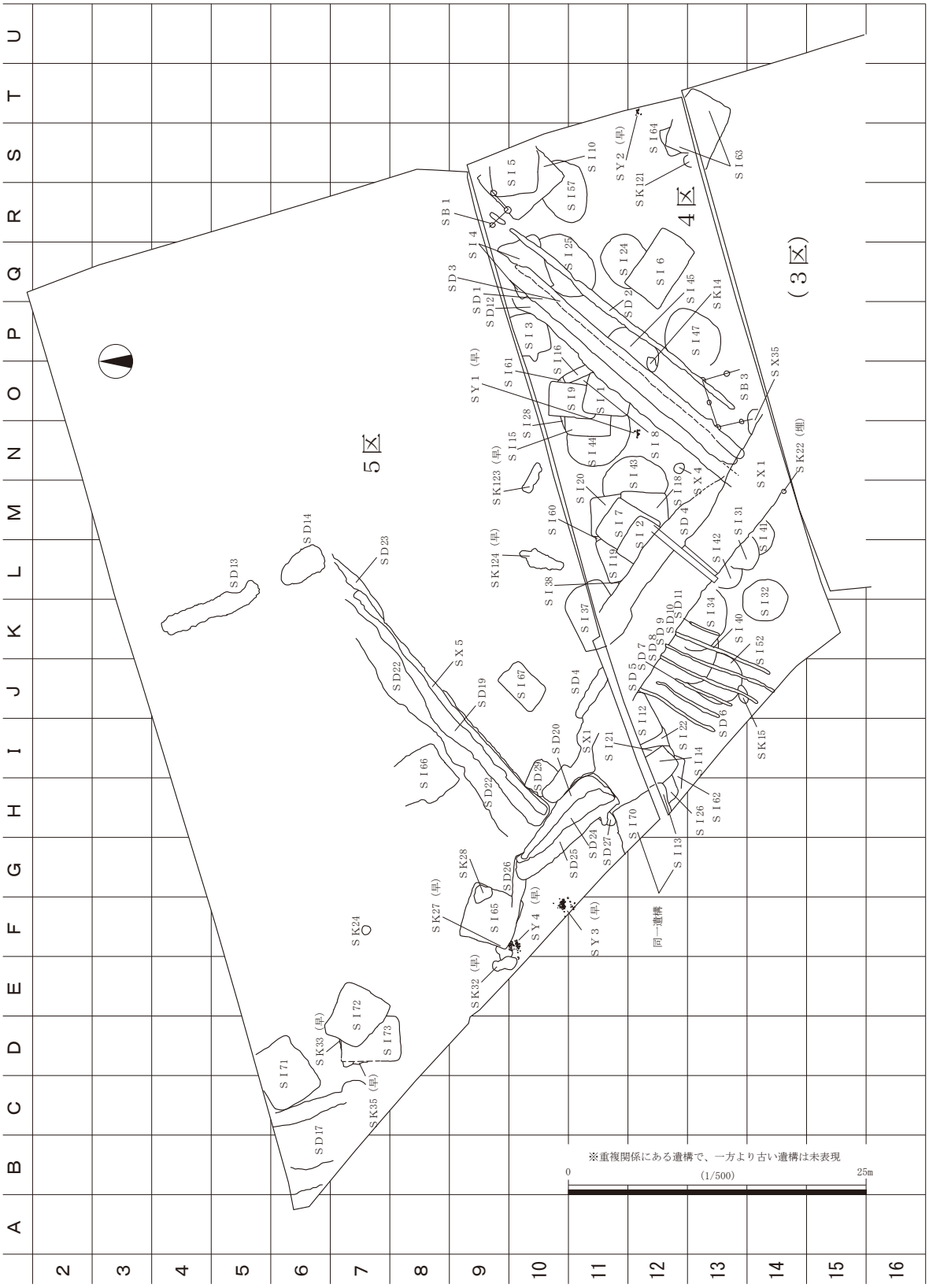
10YR5/6 黄褐　締まり強い　粘性強い　上層 10cm 程度　７との漸移層



第５図　　塔平遺跡（６区）基本土層柱状図

第４章　調査の成果

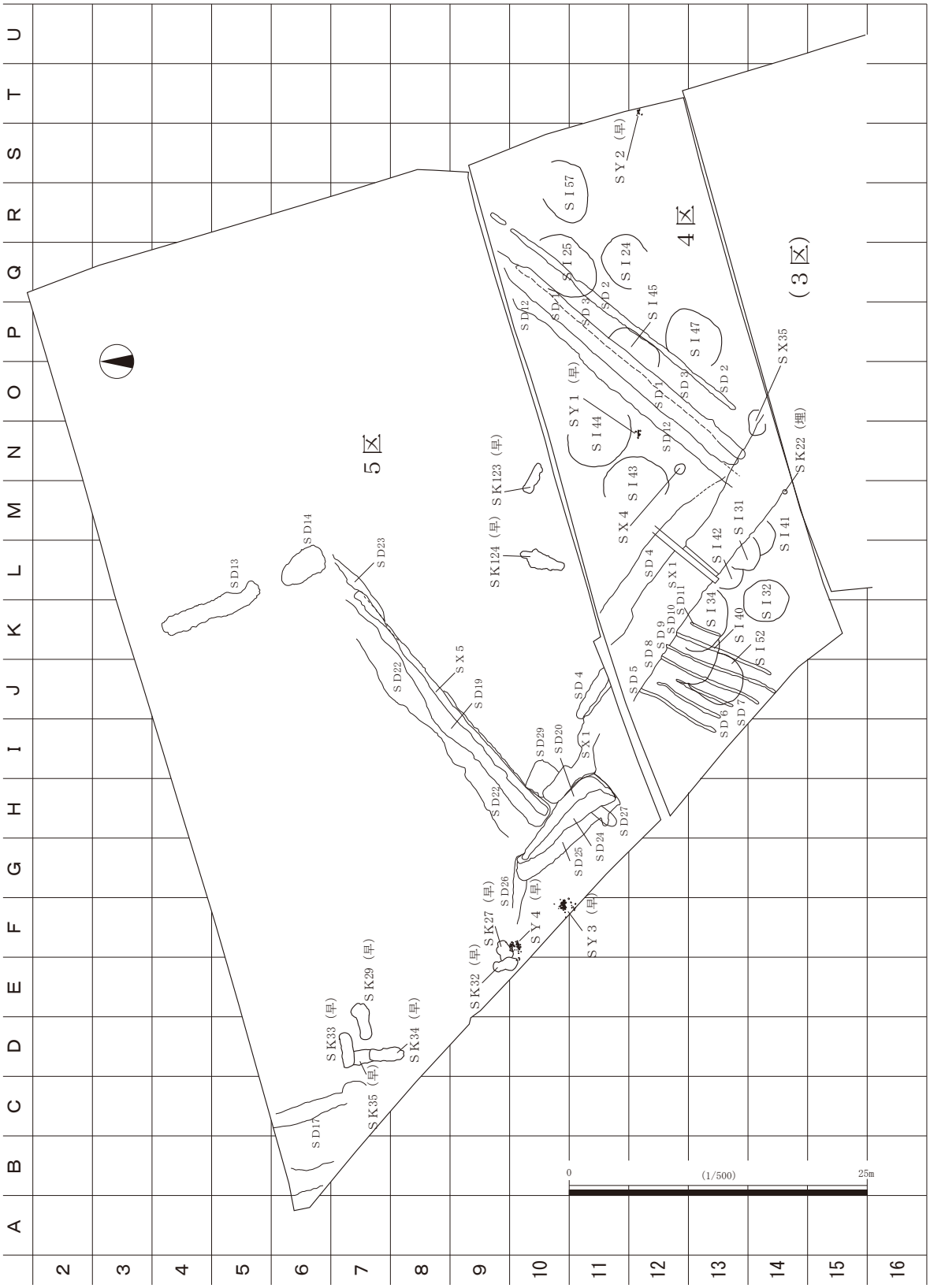
第１節　調査４区・５区



第６図　　４・５区遺構配置図

（１）縄文時代の遺構・遺物（第７図～第 27 図）

調査４区・５区における縄文時代の主要な検出遺構は、土器埋設遺構１基、集石遺構４基、炉穴８基、竪穴建物 14 軒である。すべての遺構に共通するが、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っている。したがって、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。また、調査５区は開田事業により大きく削平されており、検出した遺構はもともとの掘り込みが深かったものと思われる。



第７図　　４・５区遺構配置図（縄文時代）

調査４区に竪穴建物、調査５区に炉穴が集中しているのは調査方法や開田事業等による削平に起因しており、本来の遺跡の状況を表しているとは思われない。

①炉穴

ＳＫ 32（第８図）

ＳＫ 32 はＥ９・10 に位置する。遺構規模は長軸約 2.06 m、短軸約 1.16 m、検出面からの深さ 0.56 mを測り、平面形態はややいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向であり、ＳＫ 27 と重複している。覆土は 23 層に分けることができた。底面中央に炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もＳＫ 29 同様に開田事業により大きく削平されている調査５区に位置しているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

遺物は覆土上層から出土しており、縄文時代早期の遺構と推定している。１は口縁部に貝殻条痕文を施し、焼成後に孔を穿った土器片である。２は深鉢の底部破片である。３・４は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＫ 27（第９図）

ＳＫ 27 はＥ９・10、Ｆ９・10 に位置する。遺構規模は長軸約 1.8 m、短軸約 1.12 m、検出面からの深さ 0.72 mを測り、平面形態はややいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向であり、ＳＫ 32 と重複している。先後関係はＳＫ 27 →ＳＫ 32 である。ＳＫ 32 との先後関係を把握するために設定した土層断面と燃焼部に設定した土層断面でズレが生じてしまった。覆土は 13 層に分けることができた。底面中央に炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もＳＫ 32 同様に開田事業により大きく削平されている調査５区に位置しているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

実測可能な遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

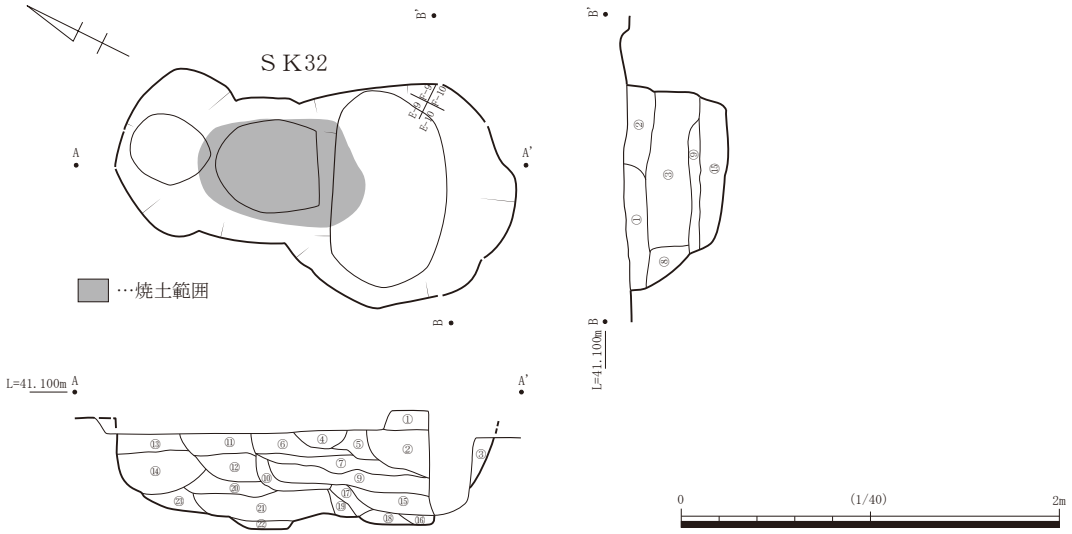
ＳＫ 29（第 10 図）

ＳＫ 29 はＤ７、Ｅ７に位置する。上面はＳＩ 72 により削平されている。遺構規模は長軸約 3.12 m、短軸約 1.32 m、検出面からの深さ 0.28 mを測り、平面形態はややいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は４層に分けることができた。底面中央やや東寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構は開田事業により大きく削平されている調査５区に位置し、かつＳＩ 72 により削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

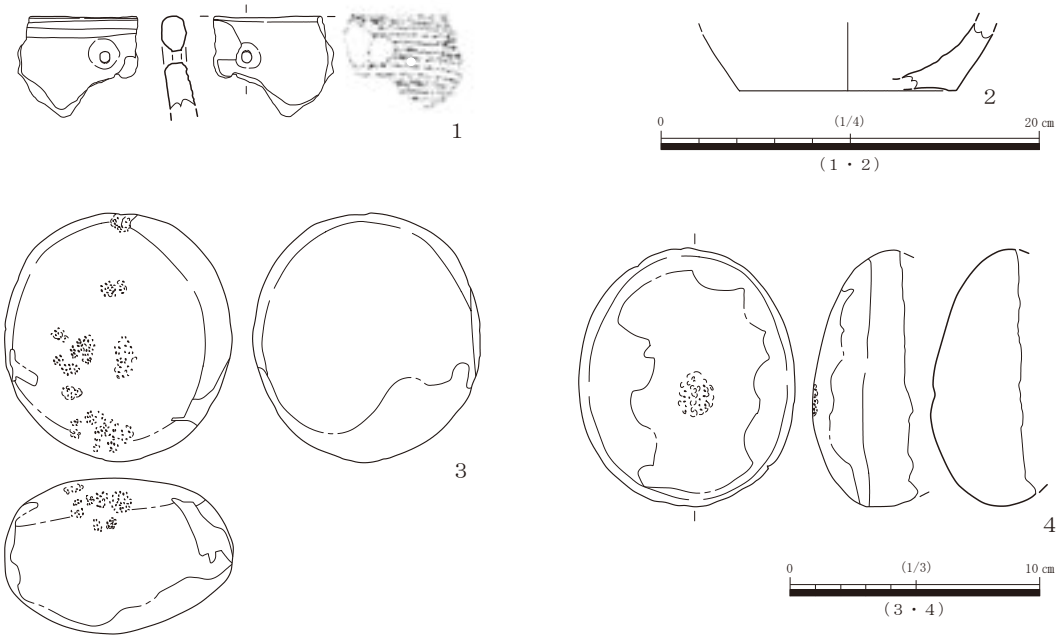
出土遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

ＳＫ 33（第 10 図）

ＳＫ 33 はＤ７に位置する。上面はＳＩ 72 により削平されている。遺構規模は長軸約 2.80 m、短軸約 0.94 m、検出面からの深さ 0.44 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向であり、ＳＫ 29 と並んだように位置している。覆土は９層に分けることができた。底面中央やや東寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もＳＫ 29 同様に開田事業により大きく削平されている調査５区に位置し、かつＳＩ 72 により削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。



<土層注記>ＳＫ32
①層：10YR3/2暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒を少量含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒と炭化物を少量含む
③層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや弱い　粘性強い　焼土粒をやや多く含む　炭化物を少量含む
④層：5YR4/8赤褐色土　締まり弱い　粘性やや弱い　焼土粒をやや多く含む
⑤層：10YR3/3暗褐色土　締まり弱い　粘性やや弱い　焼土粒をやや多く含む
⑥層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒を少量含む　ニガ土を含む
⑦層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒を少量含む
⑧層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ニガ土を含む
⑨層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土粒をやや多く含む
⑩層：7.5YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ロームに焼土混ざる
⑪層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い ローム黒褐色混じり　焼土ブロック（２cm程）を少量含む
⑫層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ローム混じる　焼土粒を少量含む
⑬層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い ローム、ニガ土混じる
⑭層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土粒を少量含む
⑮層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　焼土を多く含む
⑯層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒と炭化物を多く含む
⑰層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・ローム粒（？）を含む
⑱層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒を少量含む
⑲層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ローム粒・焼土粒と炭化物を多く含む
⑳層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒を含む
㉑層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土と炭化物を多く含む
㉒層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土と炭化物、ニガ土を含む
㉓層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒と炭化物を少量含む



第８図　　ＳＫ32 遺構・出土遺物実測図

遺物は覆土上層から出土しており、縄文時代早期の遺構と推定している。５は口縁部外面に貝殻条痕文を施している。内面には横ナデが施されている。

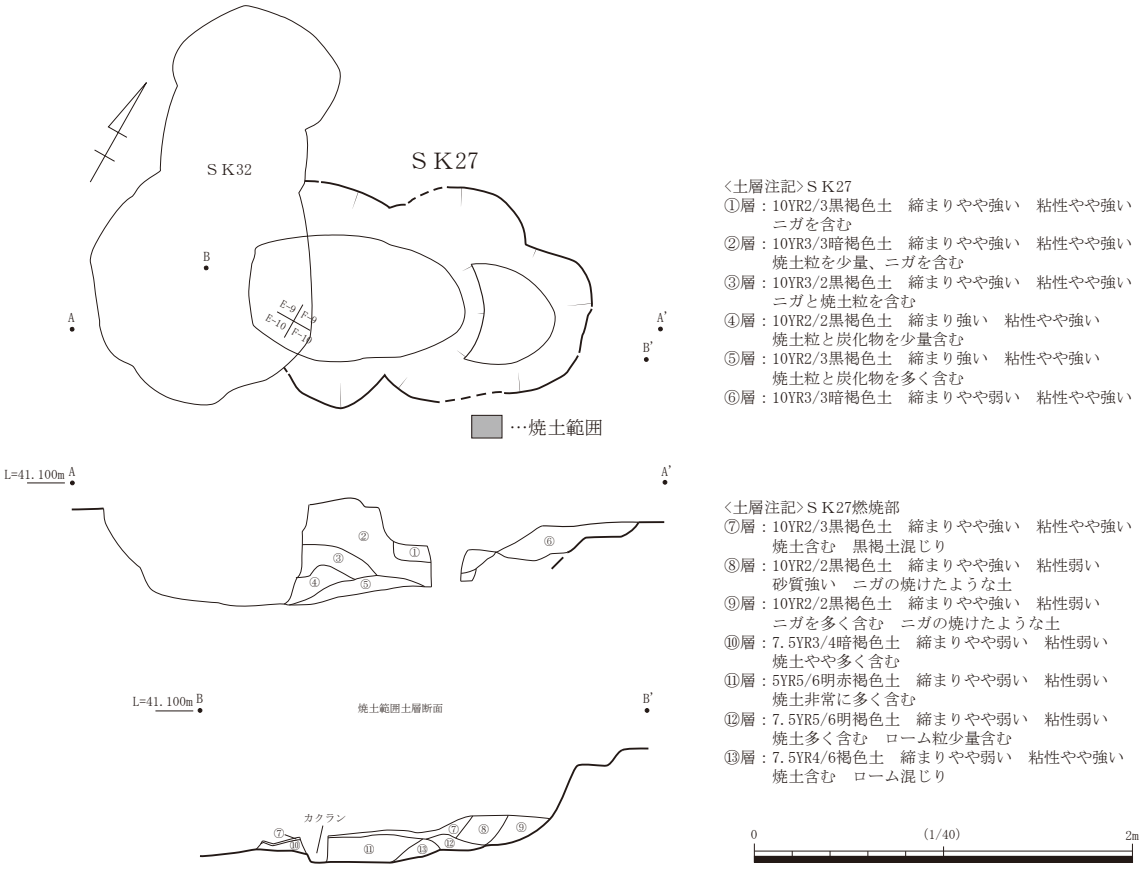
ＳＫ 34（第 11 図）

ＳＫ 34 はＤ７・８に位置する。上面はＳＩ 73 により削平されている。ＳＫ 35 と重複しており、先後関係はＳＫ 35 →ＳＫ 33 又はＳＫ 34 である。遺構規模は長軸約 3.08 m、短軸約 1.16 m、検出面からの深さ 0.66 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は 11 層に分けることができた。底面中央やや南寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構もＳＫ 29 同様に開田事業により大きく削平されている調査５区に位置し、かつＳＩ 73 により削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

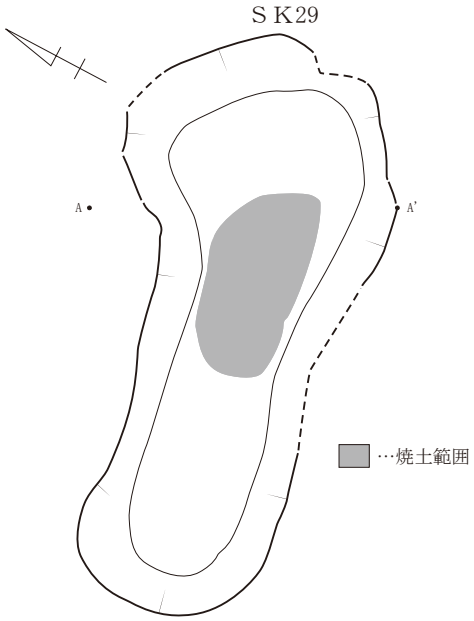
実測可能な遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

ＳＫ 35（第 11 図）

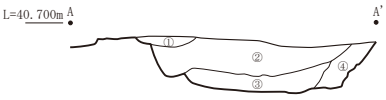
ＳＫ 35 はＤ７・８に位置する。上面はＳＩ 73 により削平されている。ＳＫ 33・35 と重複しており、先後関係はＳＫ 35 →ＳＫ 33 又はＳＫ 34 である。遺構規模は底面の残存部分からの推定で長軸約 2.60 m、短軸約 1.24 m、検出面からの深さ 0.54 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は６層に分けることができた。底面中央やや南寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広が

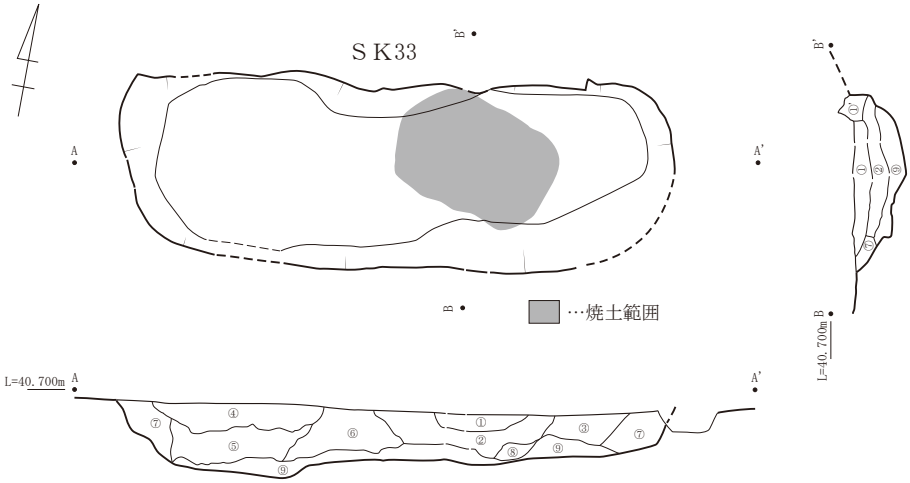


第９図　　ＳＫ27 遺構実測図

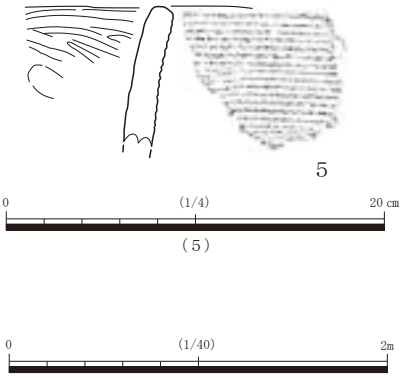


<土層注記>ＳＫ29
①層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い
　　φ１～２㎜の焼土粒・炭化物を少量含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い
　　φ１～３㎜の焼土粒・炭化物を多量含む
③層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ10㎜大の
　　焼土ブロック・ロームブロックを多量含む
④層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～３㎜の
　　焼土粒・炭化物を多量含む　φ10㎜大の焼土ブロック・ローム
　　ブロックを多量含む





<土層注記>ＳＫ33
①層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒少量含む
　　ジャリジャリ　白ニガブロック混入
①’層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒を少量含む
　　白ニガブロック混入
②層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒を多量含む
③層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒を少量含む
　　ロームブロック混入
④層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒を多量含む
　　ジャリジャリ
⑤層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒を少量含む
⑥層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒を少量含む
⑦層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒を少量含む
　　白ニガブロック混入
⑧層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒を多量含む
　　白ニガを多く含む　発泡している
⑨層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　焼土の塊を多量含む



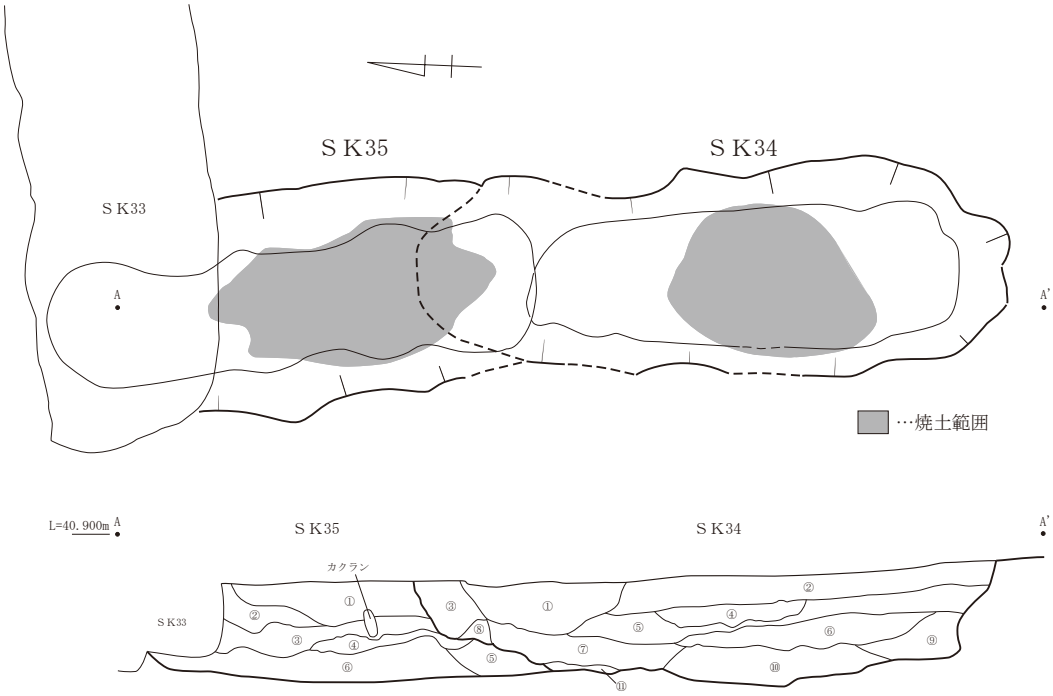
第 10 図　　ＳＫ29・33 遺構・出土遺物実測図

っている。本遺構もＳＫ 29 同様に開田事業により大きく削平されている調査５区に位置し、かつＳＩ 73 により削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

出土遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

ＳＫ 123（第 12 図）

ＳＫ 123 はＭ 10、Ｎ 10 に位置する。上面は開田事業により削平されている。遺構規模は長軸約 2.62 m、短軸約 0.84 m、検出面からの深さ 0.36 mを測り、平面形態は長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は 10 層に分けることができた。底面中央やや北西寄りに炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構も他の炉穴同様に大きく削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。なお、平面プランの確認が上

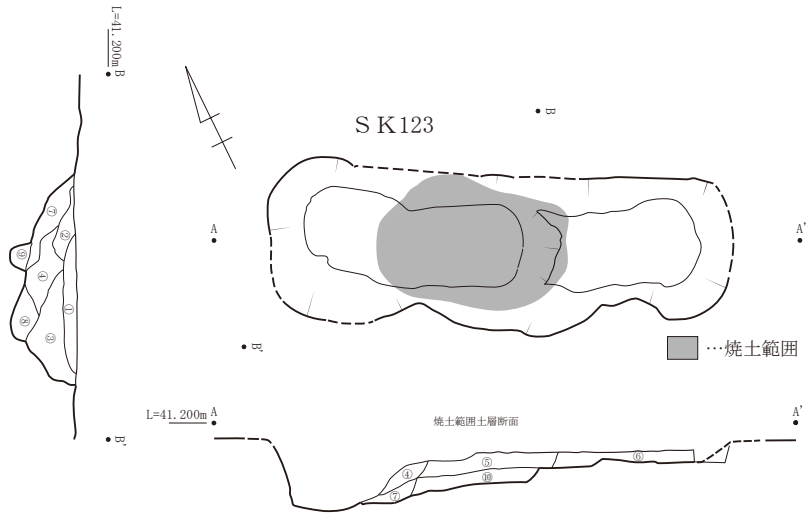


〈土層注記〉ＳＫ34
①層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性やや弱い　φ１～10㎜大の焼土粒・ロームブロックを多量に含む　ジャリジャリ
②層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや弱い　φ１～２㎜の焼土粒を少量含む　①層に比べて混入物少量
③層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒をやや多く含む
④層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒を少量含む　白ニガブロックを含む　②層に比べてキレイ
⑤層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～10㎜大の焼土粒をやや多く含む
⑥層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～20㎜大の焼土ブロックを多く含む　白ニガブロックを多く含む　南側から流れ込みか　土器片・石を含む
⑦層：10YR3/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～20㎜大の焼土ブロックを多く含む　白ニガブロックを多く含む　北側から流れ込みか　ガチガチしている　⑨層に似ている
⑧層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや弱い　ローム粒を微量含む　③層に似ている
⑨層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや弱い　φ１～10㎜大の焼土ブロックを多く含む　白ニガブロックを多く含む　発泡している
⑩層：7.5YR4/6褐色土　燃焼部　ガチガチの焼土の塊　北側が赤みが強い
⑪層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い

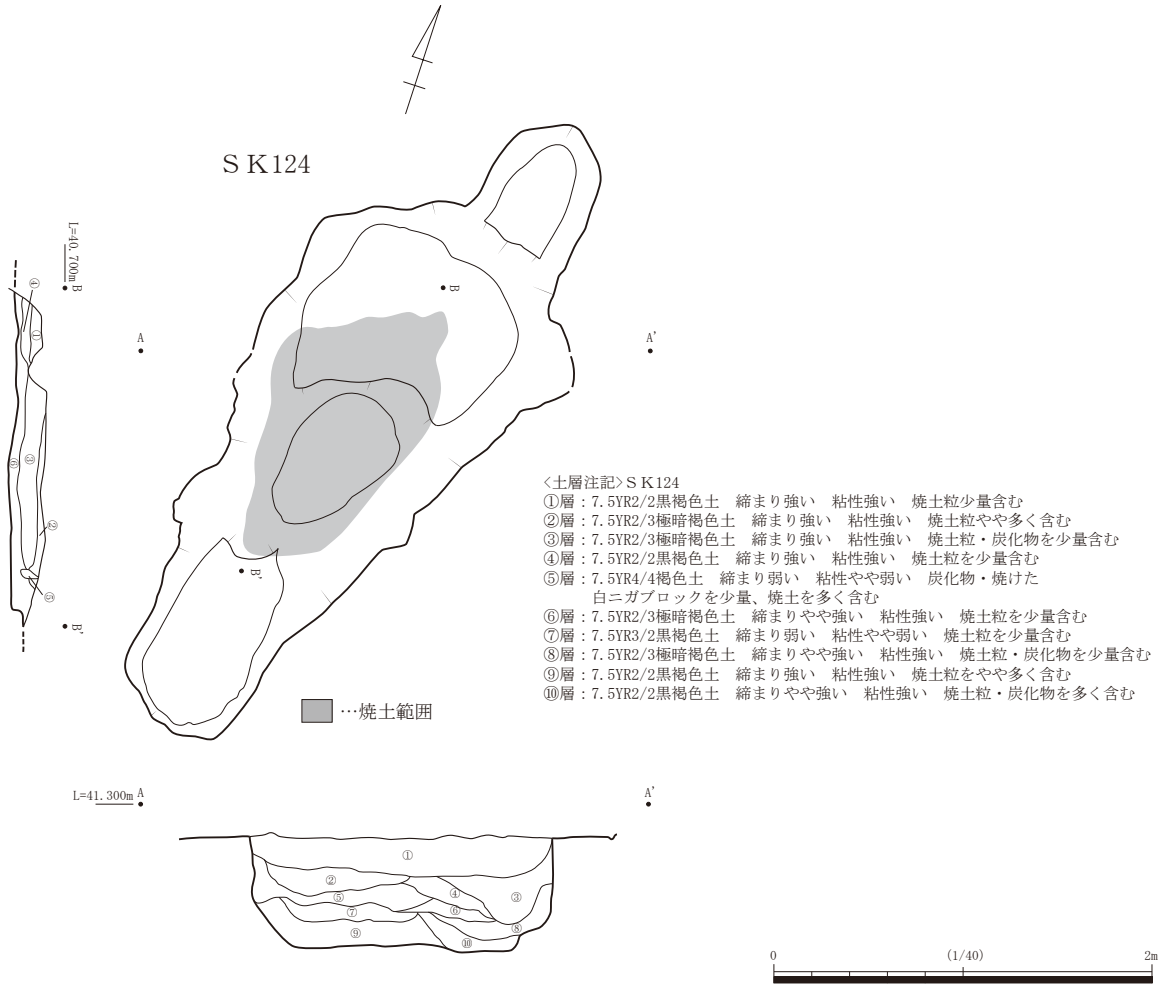
〈土層注記〉ＳＫ35
①層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒をやや多く含む　③層に似るが白ニガブロックが少ない
②層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒を微量含む
③層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜の焼土粒をやや多く含む　白ニガブロックを少量含む　やや硬く感じる
④層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒を多量含む　粉っぽい　⑤層との混じり
⑤層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性弱い　焼土の塊を多量含む　ＳＫ34によって焼かれているので黒色土もカチカチ　白ニガが発泡している
⑥層：7.5YR4/6褐色土　燃焼部　ガチガチの焼土の塊

0　(1/40)　2m

第 11 図　　ＳＫ34・35 遺構実測図

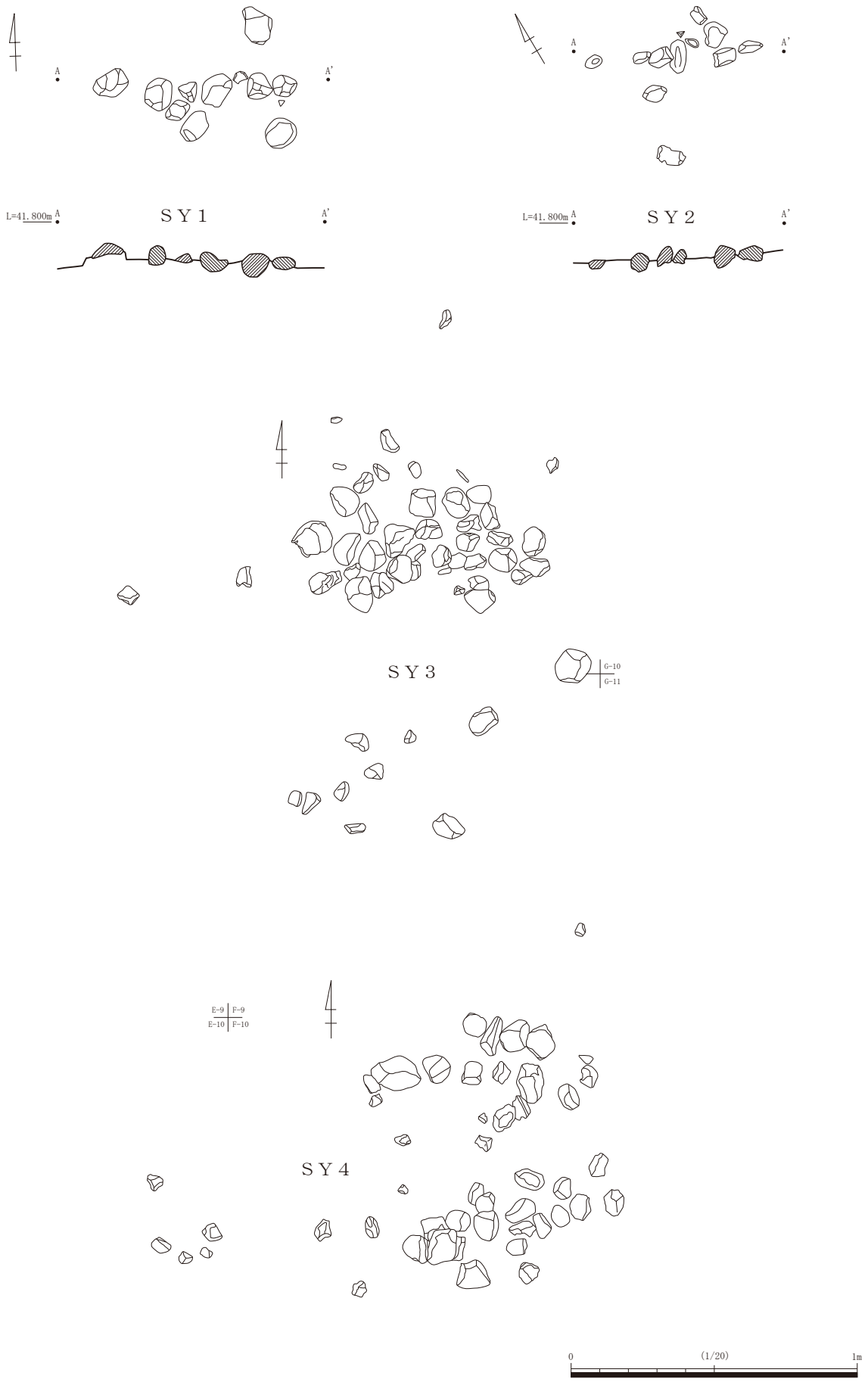


〈土層注記〉ＳＫ123
①層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い
②層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土やや多く混じる
③層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土・炭化物を少量含む
④層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土
⑤層：5YR5/6明赤褐色土　締まり弱い　粘性弱い　焼土非常に多く含む
⑥層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　焼土を少量含む
⑦層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　炭化物を少量含む　焼土を非常に多く含む
⑧層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　ニガ土を少量含む
⑨層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　ニガ土・焼土を少量含む
⑩層：5YR5/6明赤褐色土　締まり弱い　粘性弱い　焼土非常に多く含む　ニガ上で火を使用



〈土層注記〉ＳＫ124
①層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土粒少量含む
②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土粒やや多く含む
③層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土粒・炭化物を少量含む
④層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土粒を少量含む
⑤層：7.5YR4/4褐色土　締まり弱い　粘性やや弱い　炭化物・焼けた白ニガブロックを少量、焼土を多く含む
⑥層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　焼土粒を少量含む
⑦層：7.5YR3/2黒褐色土　締まり弱い　粘性やや弱い　焼土粒を少量含む
⑧層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　焼土粒・炭化物を少量含む
⑨層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土粒をやや多く含む
⑩層：7.5YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　焼土粒・炭化物を多く含む

第 12 図　　ＳＫ123・124 遺構実測図



第 13 図　　ＳＹ１～４遺構実測図

手くいかなかったため、土層観察用のベルトがズレてしまっている。

出土遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

ＳＫ 124（第 12 図）

ＳＫ 124 はＬ 10 に位置する。上面は開田事業により削平されている。遺構規模は長軸約 3.74 m、短軸約 1.68 m、検出面からの深さ 0.68 mを測り、平面形態はいびつな長楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は 10 層に分けることができた。底面ほぼ中央に炉部と推定される厚い焼土面が広がっている。本遺構も他の炉穴同様に大きく削平されているため、実際の掘り込み面より下げた面で検出している。そのため本来ブリッジ等の付属施設があったのかどうか解らない。

当初は削平された溝状遺構の一部と考え調査を行っていた。厚い焼土面を確認し、ようやく炉穴ではないかと考えを修正して調査を進めた経緯がある。なお、ＳＫ 123 同様に、平面プランの確認が上手くいかなかったため、土層観察用のベルトがズレてしまっている。

実測可能遺物がなかったため、推定される遺構の機能、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代早期の遺構と推定している。

②集石遺構

ＳＹ１（第 13 図）

ＳＹ１はＮ 12 に位置する。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 0.8 m×約 0.6 mの範囲に集中している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

ＳＹ２（第 13 図）

ＳＹ２はＴ 12 に位置する。調査４区の外周に設定した土層観察用のトレンチ内で検出した。したがって、東側は調査区外に広がるものと推定される。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 0.7 m×約 0.6 mの範囲に集中している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

ＳＹ３（第 13 図）

ＳＹ３はＦ 10 に位置する。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 1.8 m×約 1.7 mの範囲に散乱しており、中央に礫の集中部がみられる。ＳＹ４と隣接している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

ＳＹ４（第 13 図）

ＳＹ４はＦ 10 に位置する。拳大の円礫や角ばった礫で構成される。約 2.0 m×約 1.8 mの範囲に散乱しており、東寄りに礫の集中部がみられる。ＳＹ３と隣接している。掘り込み部は検出できなかった。構成礫は熱により赤化しているものがみられる。周辺で炭化物を確認することはできなかった。

いずれの集石遺構からも出土遺物はなかった。既報告（水上 2013）の調査３区では縄文時代早期の土器片を伴っており、ここでも当該期の可能性があると考えている。

③竪穴建物

ＳＩ 24（第 14 図）

ＳＩ 24 はＱ 11・12、Ｒ 11・12 に位置する。建物南側が弥生時代後期に比定されるＳＩ６と重複している。先後関係はＳＩ 24 →ＳＩ６である。遺構規模は長軸推定 4.50 m、短軸約 3.70 m、検出面からの深さ 0.18 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡等は検出できなかった。

遺物は覆土上層と本遺構の位置するグリッドより上の包含層から出土している。６は安山岩製の打製石斧で製作途中に破損した未製品と思われる。

ＳＩ 25（第 15 図・第 16 図）

ＳＩ 25 はＱ 10・11、Ｒ 10・11 に位置する。建物北側が弥生時代後期に比定されるＳＩ４と重複している。先後関係はＳＩ 25 →ＳＩ４である。遺構規模は長軸約 6.08 m、短軸約 4.40 m、検出面からの深さ 0.18 m を測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡等は検出できなかった。

遺物は覆土と本遺構の位置するグリッドより上の包含層から出土している。７は口縁部にリボン状の突起をもち、内外面ともに二枚貝条痕調整が施されている。深鉢と思われる。８は内面に横方向のミガキが施されている。９は内外面ともに二枚貝条痕調整が施されている深鉢と思われる。10 は内面にミガキが施されている浅鉢である。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。11 は安山岩製の打製石斧、12 は砂岩製の打製石斧である。13 は安山岩製の円盤形石器である。14 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ 31（第 17 図）

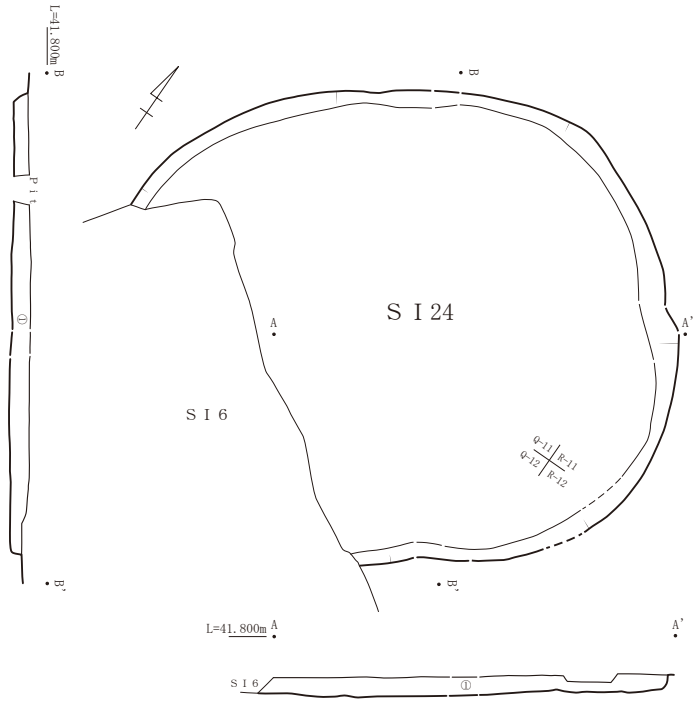
ＳＩ 31 はＬ 13・14、Ｍ 14 に位置する。建物北側がＳＸ１と重複している。先後関係はＳＩ 31 →ＳＸ１である。遺構規模は長軸約 3.00 m、検出面からの深さ 0.40 mを測り、平面形態は円形を呈するものと推定される。本遺跡での当該期に比定される竪穴建物の中でも後述するＳＩ 41・42 同様に小形である。建物覆土は３層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡等は検出できなかった。

遺物は覆土と本遺構の位置するグリッドより上の包含層から出土している。15 は口縁部でやや内湾ぎみに立ち上がる。外面に二枚貝条痕調整が施されている。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

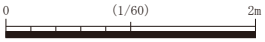
ＳＩ 41（第 17 図）

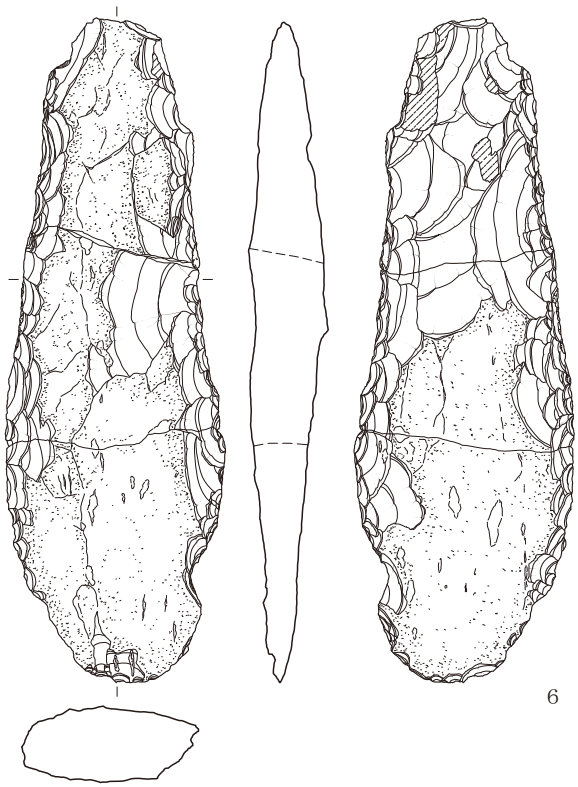
ＳＩ 41 はＬ 14、Ｍ 14 に位置する。建物北側がＳＩ 31・ＳＸ１と重複している。先後関係はＳＩ 41 →ＳＩ 31 →ＳＸ１である。遺構規模は長軸約 1.76 m、検出面からの深さ 0.10 mを測り、平面形態は円形を呈するものと推定される。前述のとおりＳＩ 31・42 同様に小形である。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡等は検出できなかった。

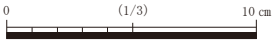
16 の太型蛤刃石斧が出土しているが、ＳＩ 31 との重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代後期後半から晩期前半の遺構と推定している。16 は流れ込みによるものと考えている。



〈土層注記〉ＳＩ24
①層：7.5YR3/4暗褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を微量含む　４層漸移層に似る　やや暗い

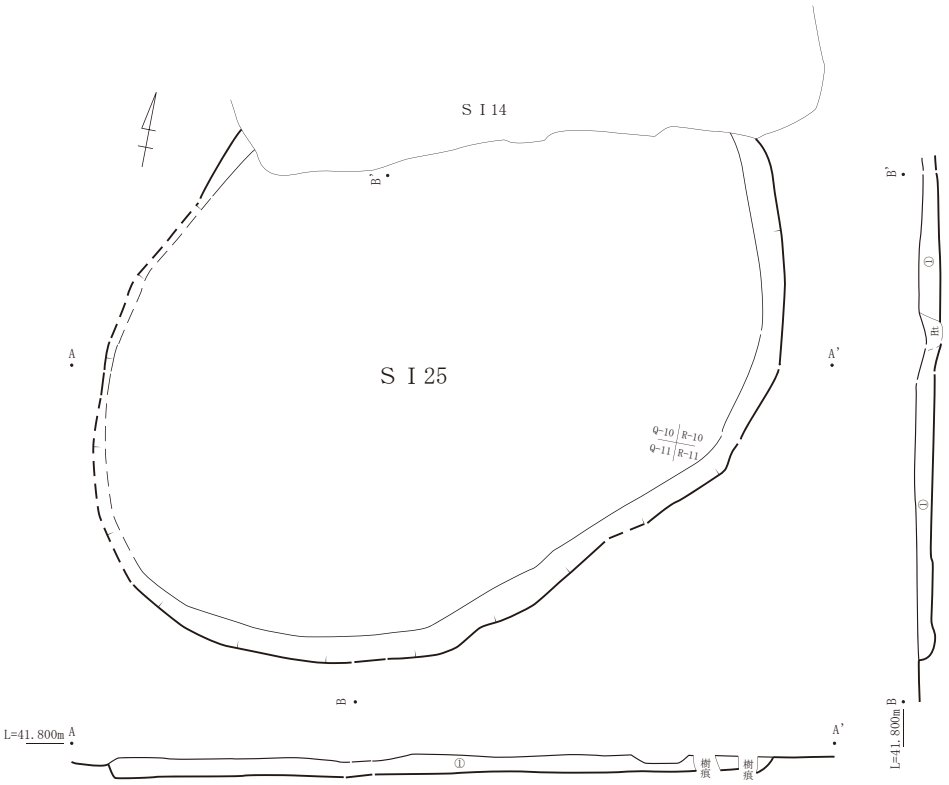




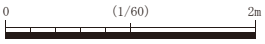


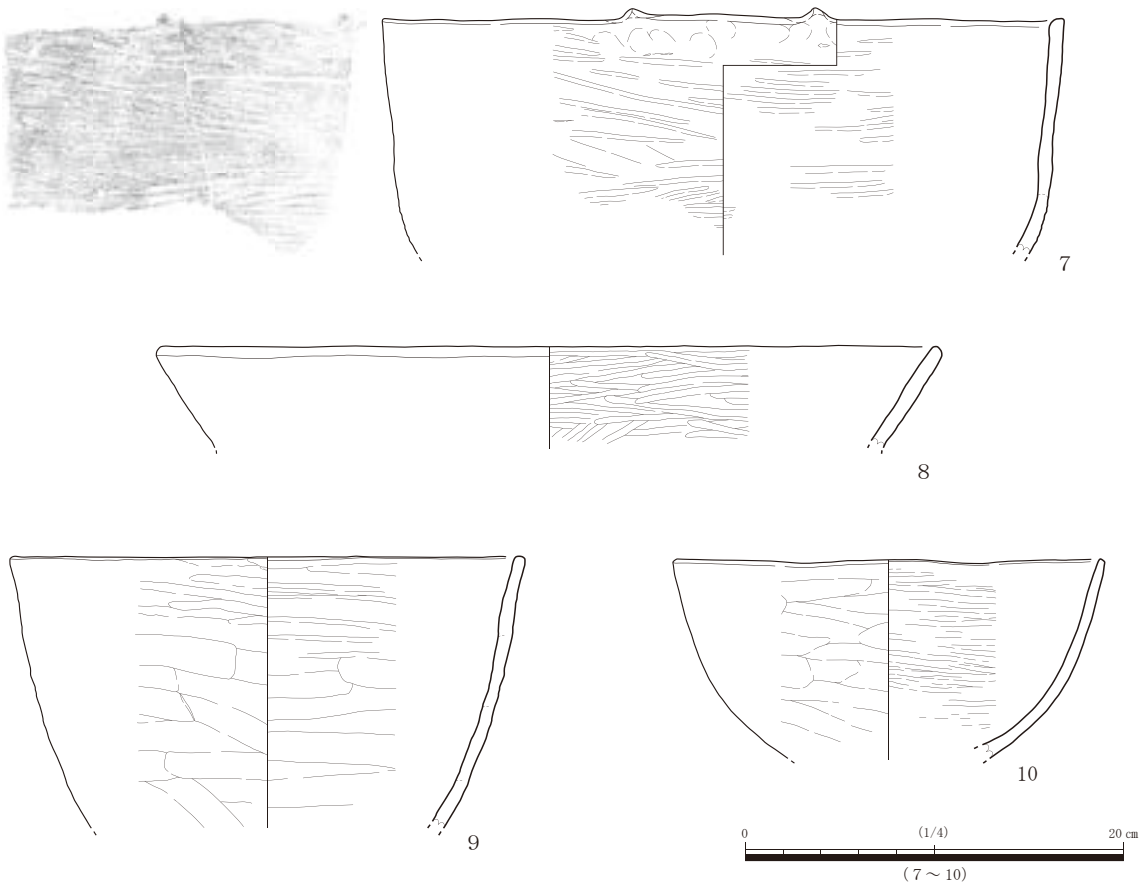
（６）

第 14 図　　ＳＩ24 遺構・出土遺物実測図



〈土層注記〉ＳＩ25
①層：7.5YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む
まだらで４層漸移層に似る　周辺に比べてやや暗く遺物を多く含む





第 15 図　　ＳＩ25 遺構・出土遺物実測図１

ＳＩ 42（第 18 図）

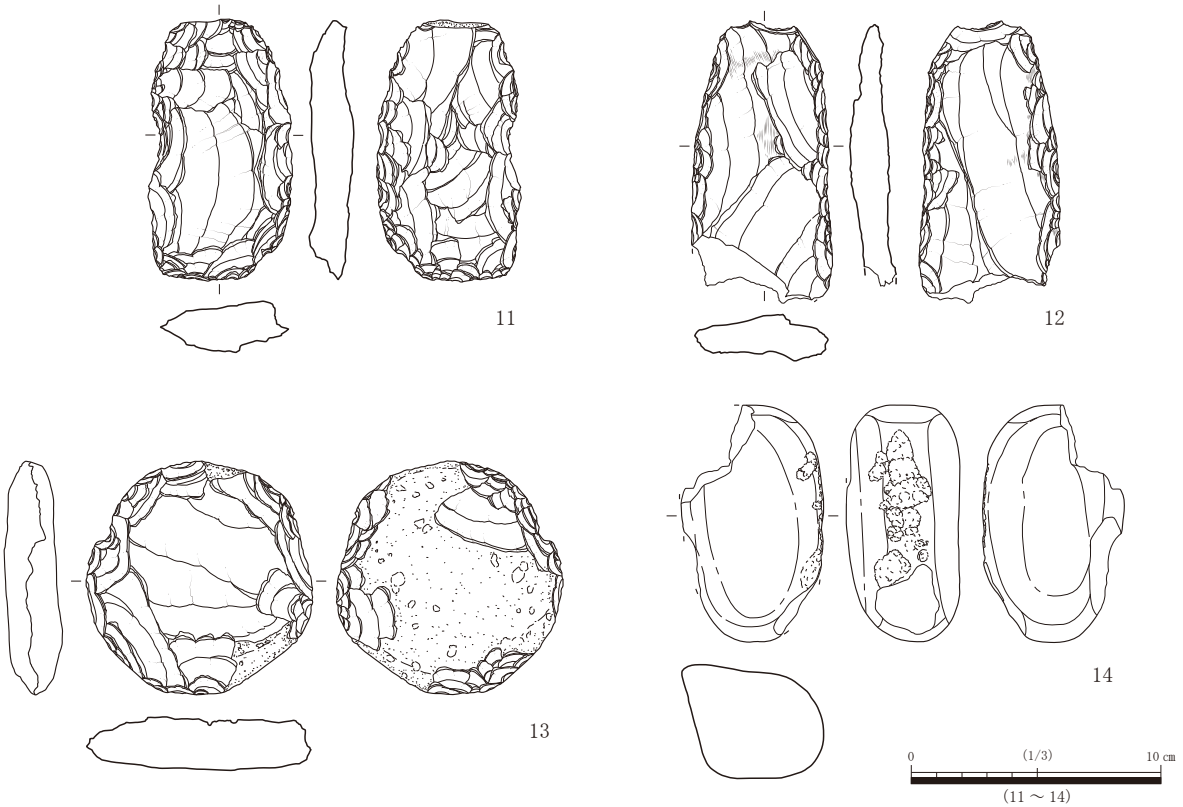
ＳＩ 42 はＬ 13 に位置する。建物北側がＳＸ１、東側がＳＩ 31 と重複している。先後関係はＳＩ 42 →ＳＩ 31 →ＳＸ１である。遺構規模は長軸約 1.32 m、検出面からの深さ 0.08 mを測り、平面形態は円形を呈するものと推定される。前述のとおりＳＩ 31・41 同様に小形である。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡等は検出できなかった。

遺物は覆土から点在して出土している。17 は二等辺三角形をしている平基式の黒曜石製の石鏃である。18 ～ 20 はいずれも安山岩製の打製石斧である。

ＳＩ 32（第 19 図）

ＳＩ 32 はＫ 13・14、Ｌ 13・14 に位置する。遺構規模は長軸約 3.74 m、短軸約 3.50 m、検出面からの深さ 0.14 mを測り、平面形態は円形を呈する。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を５基検出した。深さは約 18 ～ 26㎝を測る。Ｐ１～Ｐ４は竪穴の壁際に配置されていた。

遺物は覆土から石器３点が出土している。21 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。22 は砂岩製の磨製石斧である。23 は磨石類である。敲打痕が認められる。

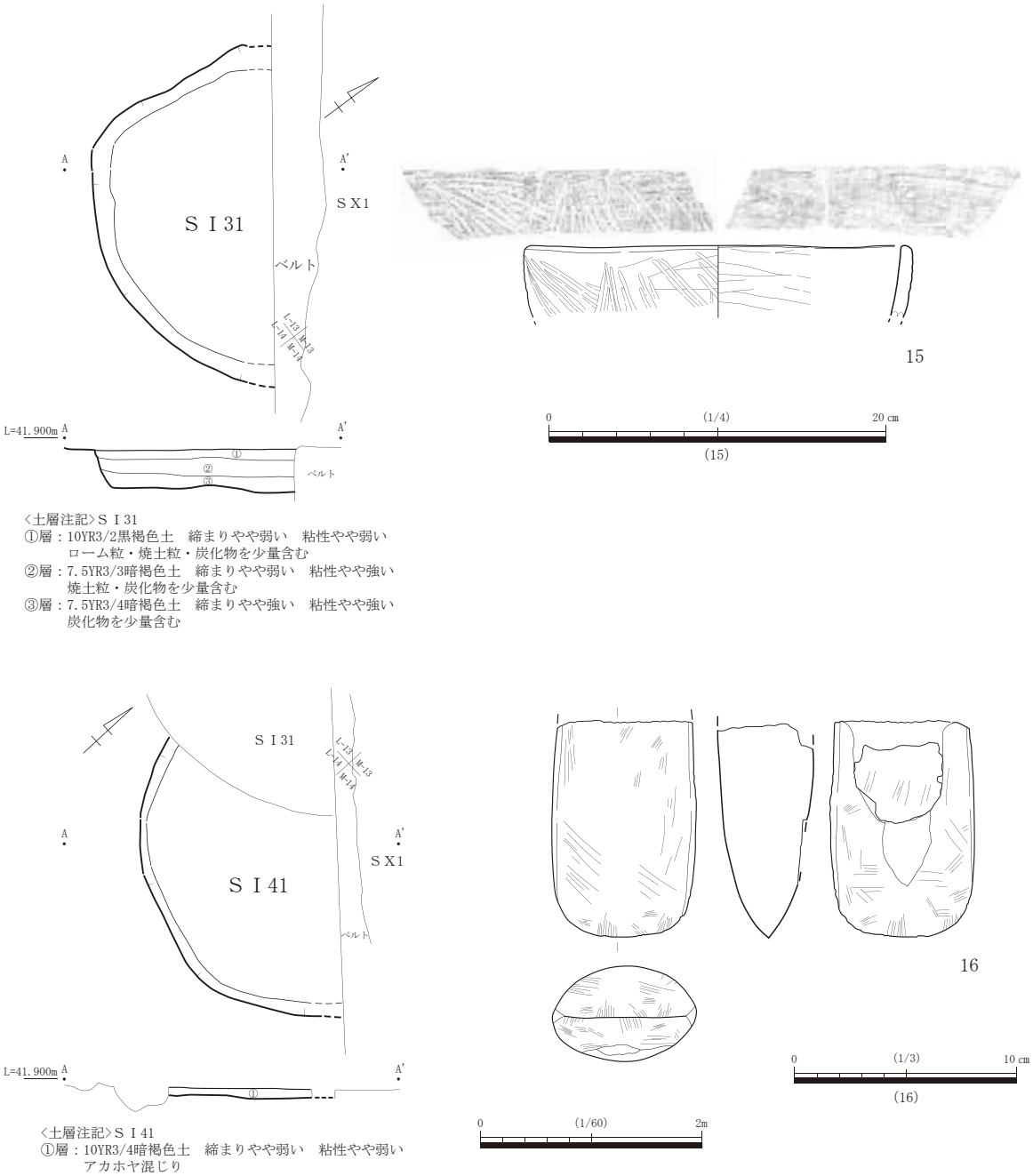


第 16 図　　ＳＩ 25 出土遺物実測図２

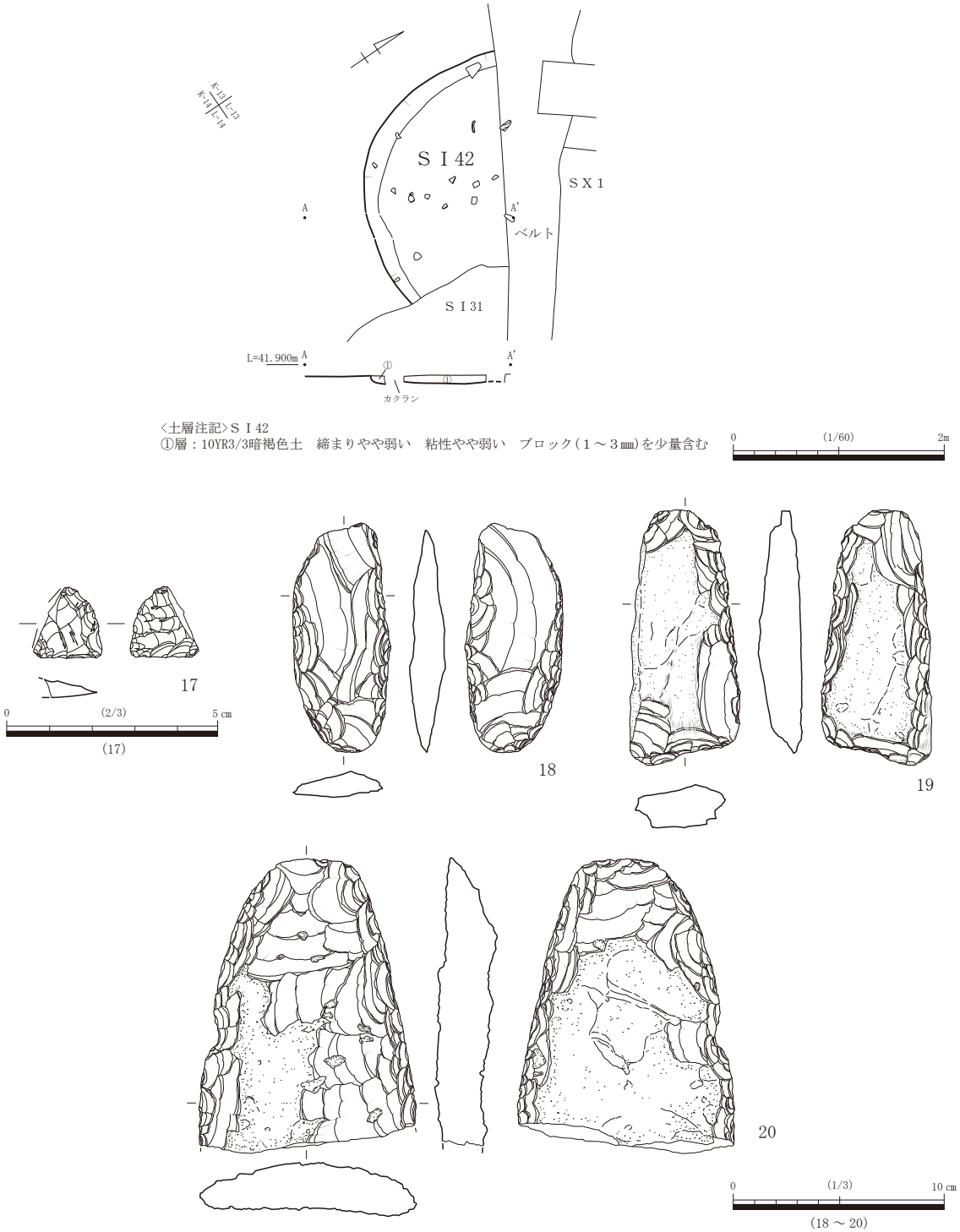
ＳＩ 34（第 20 図）

ＳＩ 34 はＫ 12･13 に位置する。建物北東側がＳＸ１と重複している。先後関係はＳＩ 34 →ＳＸ１である。遺構規模は長軸約 5.46 m、検出面からの深さ 0.06 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡等は検出できなかった。

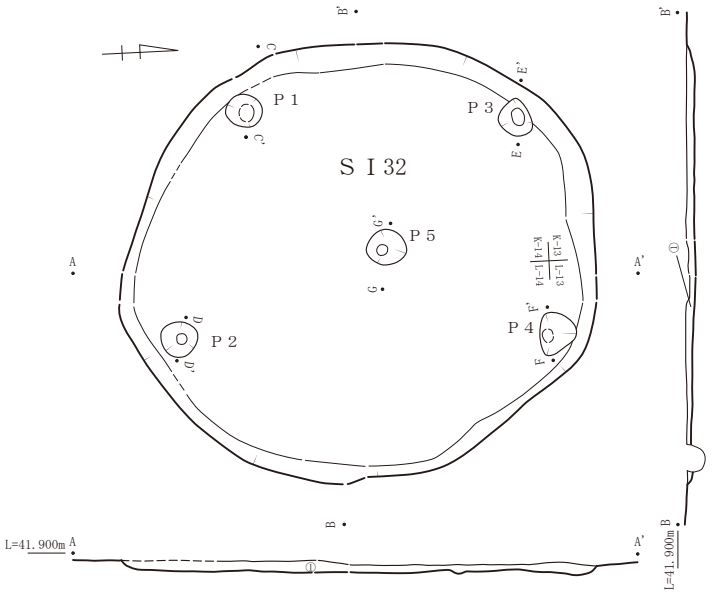
遺物は建物南東側の覆土から点在して出土している。24 は内面に横方向のミガキが施された浅鉢である。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。25 は焼成粘土塊である。26 は安山岩製の打製石斧である。27 は磨石類である。敲打痕が認められる。



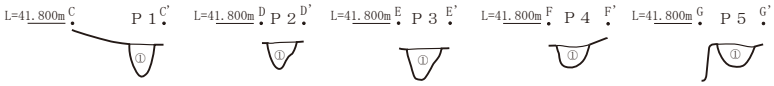
第 17 図　　ＳＩ 31・41 遺構・出土遺物実測図



第 18 図　　ＳＩ42 遺構・出土遺物実測図

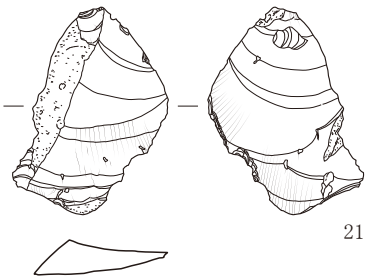


〈土層注記〉ＳＩ32
①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒少量含む

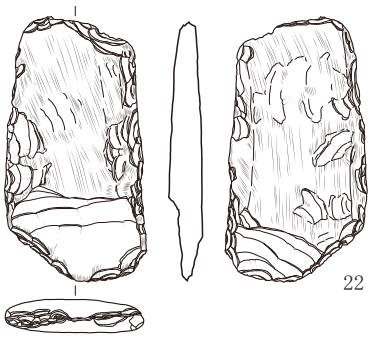


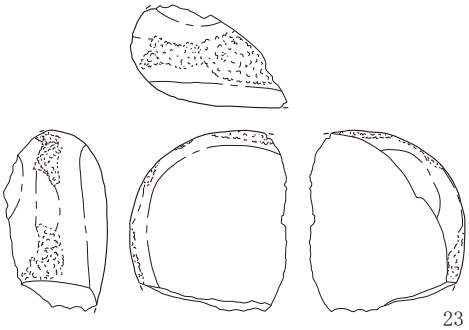
〈土層注記〉Ｐ１～Ｐ５
Ｐ１　①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ローム粒少量含む
Ｐ２　①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ローム粒少量含む
Ｐ３　①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ローム粒・焼土少量含む
Ｐ４　①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ローム粒少量含む
Ｐ５　①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ローム粒少量含む

0　(1/60)　2m



0　(2/3)　5 cm
(21)





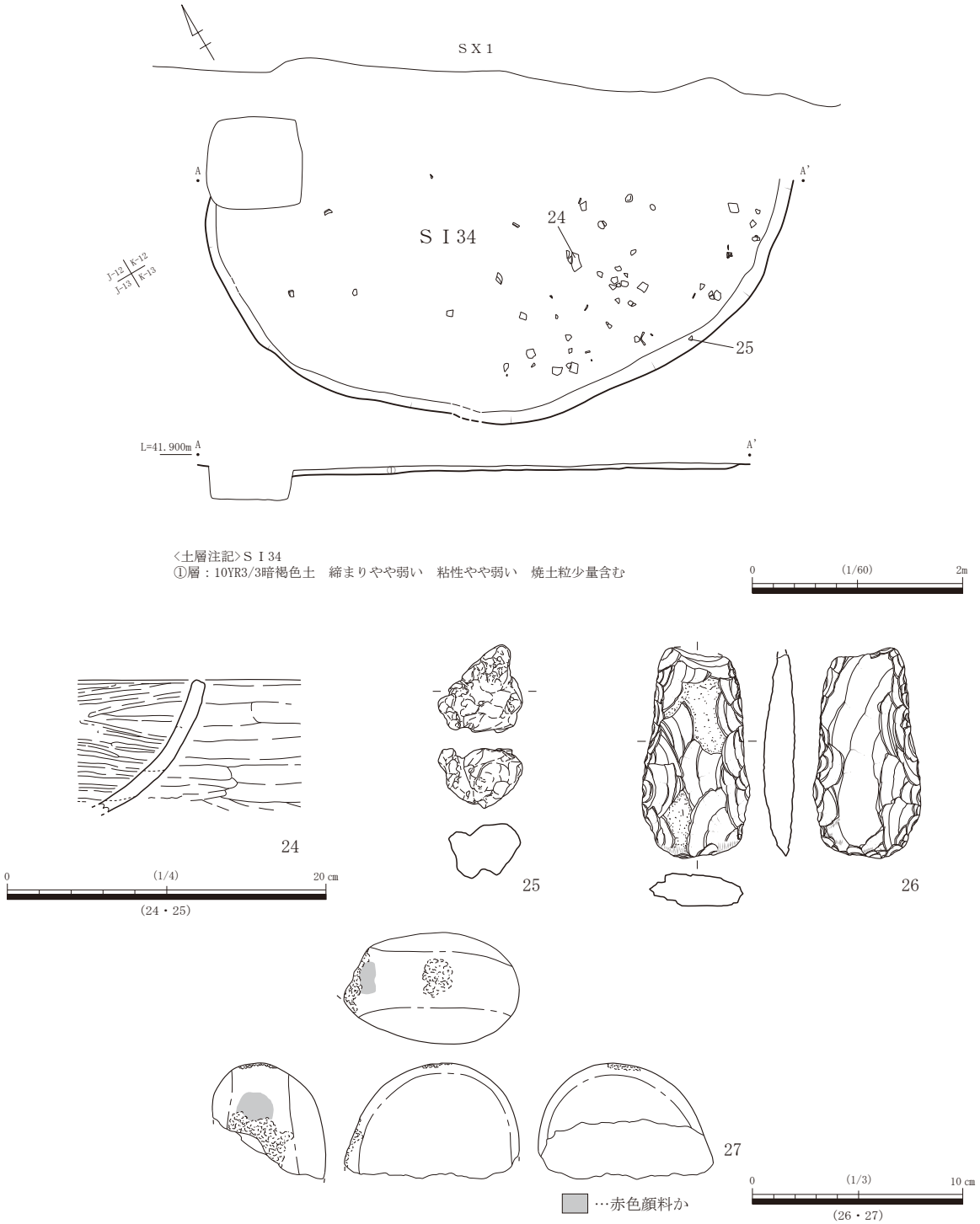
0　(1/3)　10 cm
(22・23)

第 19 図　　ＳＩ32 遺構・出土遺物実測図

ＳＩ 40（第 21 図）

ＳＩ 40 はＪ 12・13、Ｋ 12・13 に位置する。建物北側がＳＩ 34 及びＳＸ１と重複している。先後関係はＳＩ 40 →ＳＩ 34 →ＳＸ１である。遺構規模は長軸約 4.92 m、検出面からの深さ 0.08 mを測り、平面形態は楕円形を呈するものと思われる。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を２基検出した。深さは約 28 ～ 32㎝を測り、Ｐ１～Ｐ２は建物壁際に配置されている。

遺物は覆土から石器が１点出土している。28 は緑色片岩製の打製石斧である。

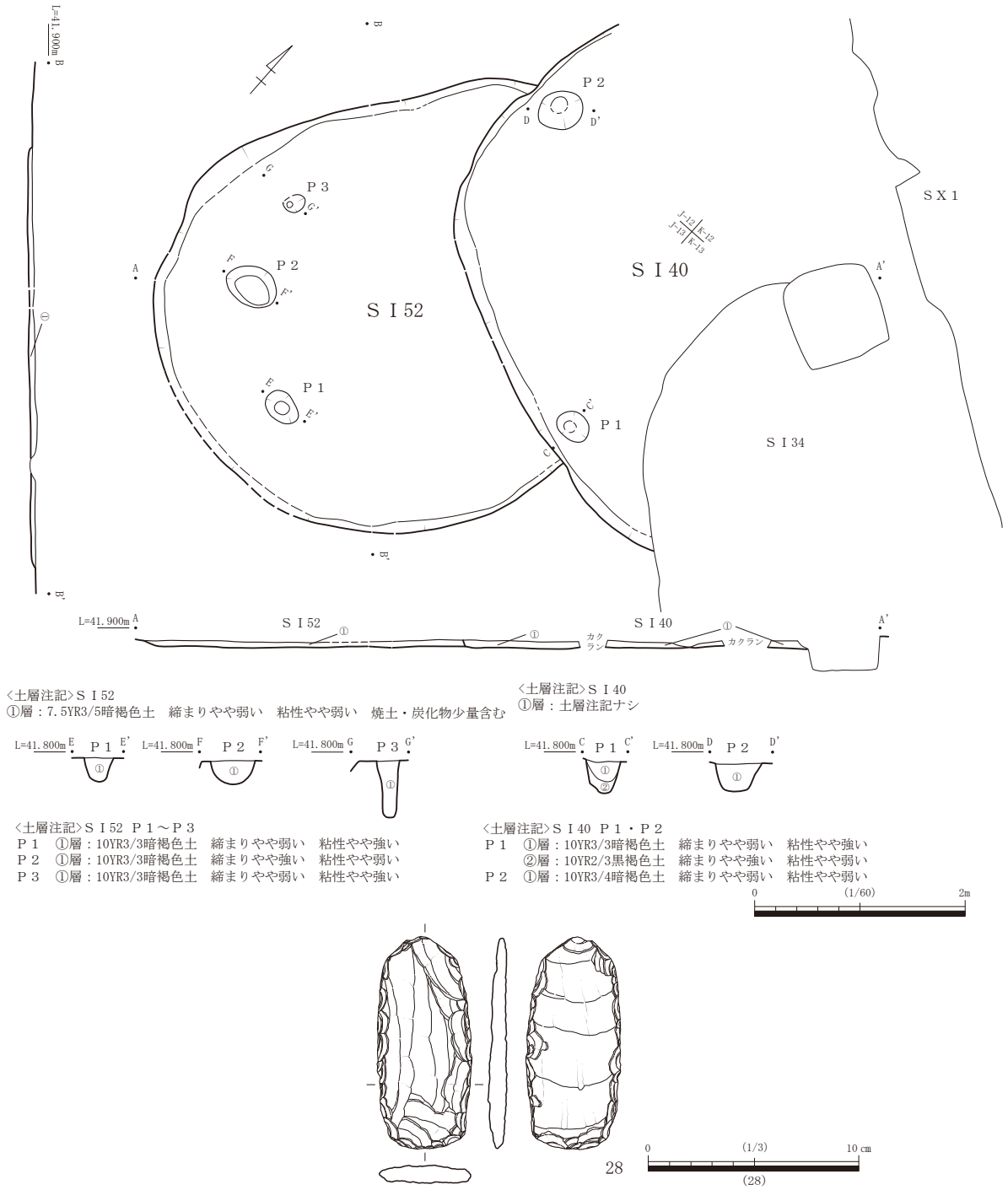


第 20 図　　ＳＩ 34 遺構・出土遺物実測図

ＳＩ 52（第 21 図）

ＳＩ 52 はＪ 13、Ｋ 13 に位置する。建物北東側がＳＩ 40 と重複している。先後関係はＳＩ 52 →ＳＩ 40 である。遺構規模は長軸推定 4.74 m、短軸約 4.08 m検出面からの深さ 0.08 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を３基検出した。深さは約 22 ～ 54㎝を測り、Ｐ１～Ｐ３は建物壁側に配置されている。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の遺構と推定している。



第 21 図　　ＳＩ 40・52 遺構・出土遺物実測図

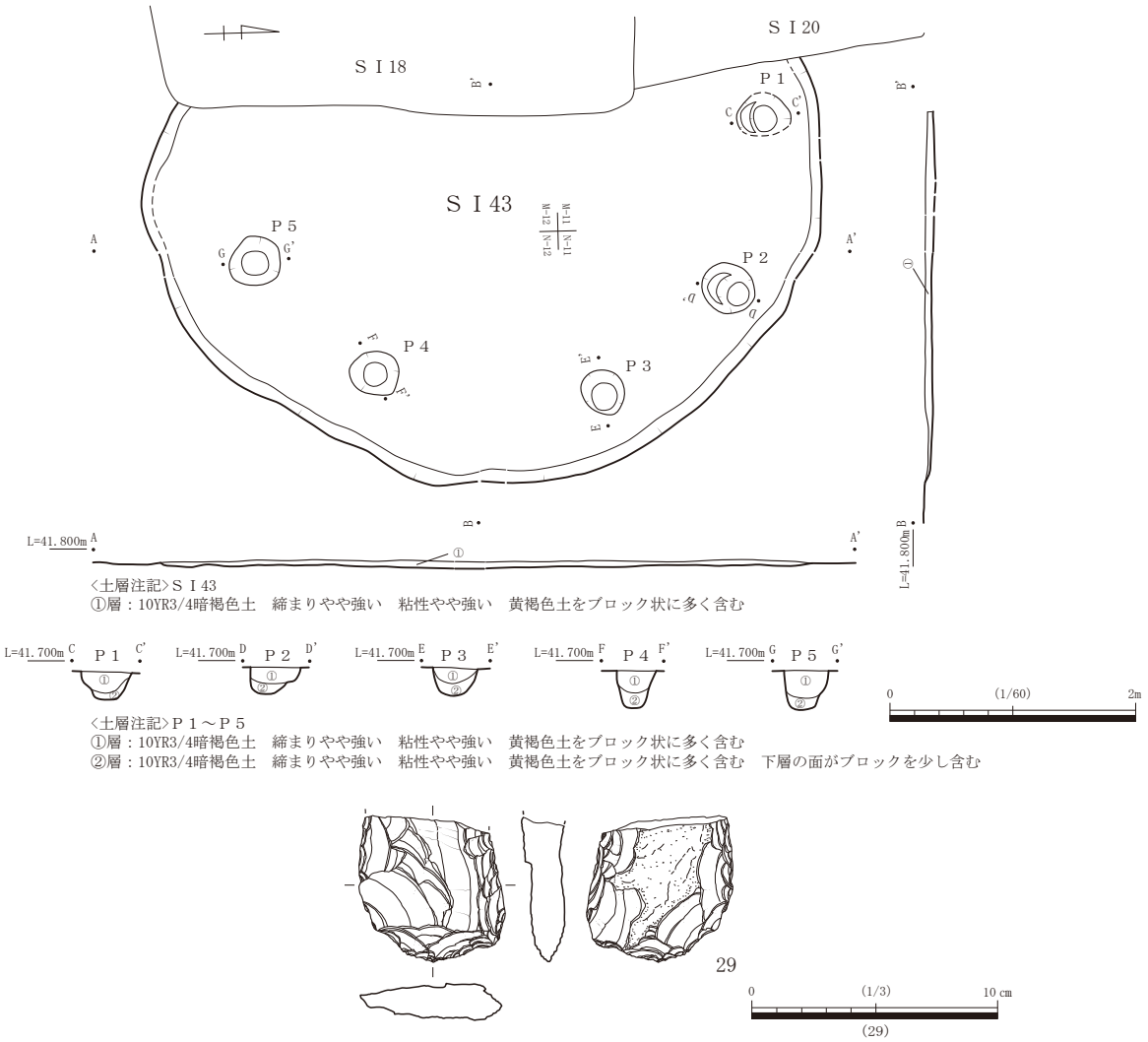
ＳＩ 43（第 22 図）

ＳＩ 43 はＭ 11・12、Ｎ 11・12 に位置する。建物西側がＳＩ 18 及びＳＩ 20 と重複している。先後関係はＳＩ 43 →ＳＩ 20 →ＳＩ 18 である。遺構規模は長軸約 5.34 m、検出面からの深さ 0.06 mを測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を５基検出した。深さは約 21 ～ 30㎝を測り、いずれも建物壁際に配置されている。

遺物は覆土から石器が１点出土している。29 は安山岩製の打製石斧である。

ＳＩ 44（第 23 図・第 24 図）

ＳＩ 44 はＮ 11・12、Ｏ 11・12 に位置する。建物東側がＳＩ 15 及びＳＩ１と重複している。先後関係はＳＩ 44 →ＳＩ 15 →ＳＩ１である。遺構規模は長軸約 5.86 m、短軸推定 4.86 m、検出面からの深さ 0.06 m を測り、平面形態は楕円形を呈する。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として土坑１基、柱穴を４基検出した。柱穴は深さ約 28 ～ 40㎝を測り、いずれも建物壁際に配置されている。



第 22 図　　ＳＩ 43 遺構・出土遺物実測図

遺物は覆土から点在して出土している。ここでは土器３点、石器３点を図示した。なお、Ｐ２から貝殻条痕文系の土器片が１点出土しているが、他の遺構や遺物の状況から縄文時代後期後半から晩期前半の遺構と考えている。30 は頸部と口縁部が一体化し短くなっている浅鉢である。内外面ともに横方向のミガキが施されている。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。31 は深鉢の胴部から底部である。外面は粗い横方向のケズリが施されているが底部に組織痕が残っている。縄文時代晩期前半以降と思われる。32 は口縁部外面に横方向の貝殻条痕文、内面に縦方向のミガキが施されている。縄文時代早期のものと思われる。33 は黒曜石製の石核である。34 はチャート製の磨製石斧である。35 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ 45（第 24 図）

ＳＩ 45 はＯ 12、Ｐ 11・12 に位置する。建物西側がＳＤ１と重複している。先後関係はＳＩ 45 →ＳＤ１である。遺構規模は長軸約 4.92 m、検出面からの深さ 0.14 mを測り、平面形態は楕円形を呈するものと推定される。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡等は検出できなかった。

遺物は覆土から点在して出土している。ここでは土器４点、石器１点を図示した。36 は頸部と口縁部が一体化し短くなっている浅鉢である。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。37 は深鉢である。口縁部に７～８条の沈線がめぐる。胴部内面での頸部と胴部の境はない。38・39 は深鉢の底部と思われる。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。40 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。

ＳＩ 47（第 25 図）

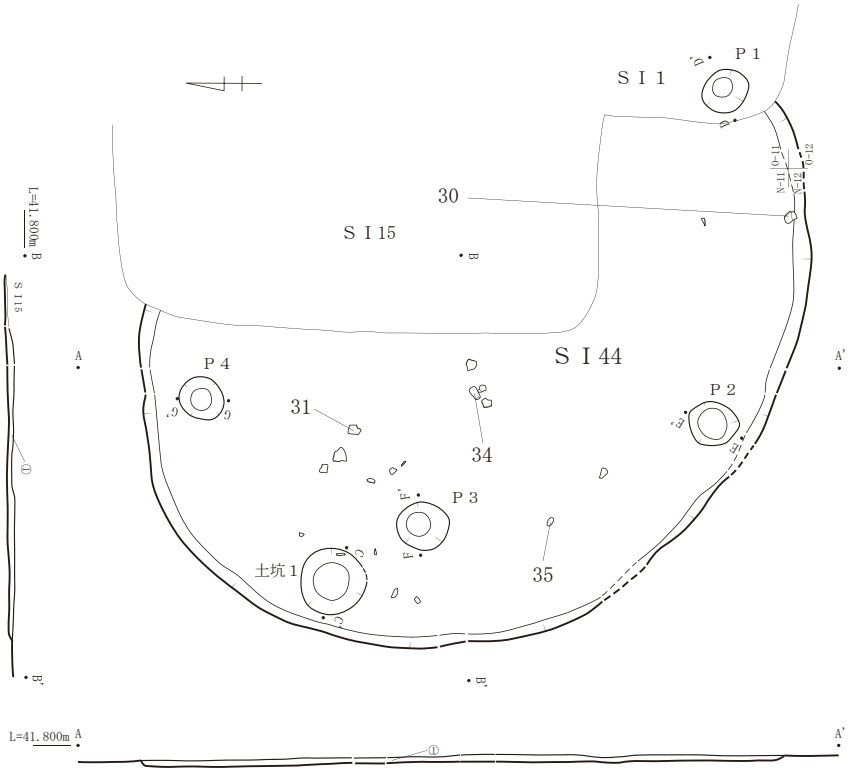
ＳＩ 47 はＰ 12・13 に位置する。遺構規模は長軸約 5.34 m、検出面からの深さ 0.12 mを測り、平面形態はややいびつな円形を呈するものと推定される。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を３基検出した。柱穴は深さ約 18 ～ 22㎝を測る。柱穴はＳＩ 43・44 のように建物壁際に配置されることはない。

遺物は覆土から点在して出土している。ここでは土器２点、石器１点を図示した。41 は頸部と口縁部が一体化し短くなっている浅鉢である。口縁部内面に沈線が１条めぐる。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。42 は深鉢である。口縁部には沈線状の条痕が施されている。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。43 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。

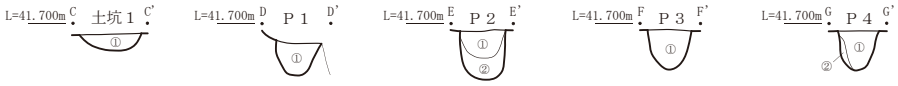
ＳＩ 57（第 25 図）

ＳＩ 57 はＲ 10・11、Ｓ 10・11 に位置する。建物北東側がＳＩ 10 と重複している。先後関係はＳＩ 57 →ＳＩ 10 である。遺構規模は長軸約 5.42 m、短軸約 4.02 m検出面からの深さ 0.08 mを測り、平面形態はややいびつな楕円形を呈するものと推定される。建物覆土は１層とした。なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であり、かなり掘り下げて遺構検出を行っているため、実際の掘り込み面はもっと上面と思われる。建物に伴う遺構として柱穴を１基検出した。柱穴は深さ約 18㎝を測る。柱穴はＳＩ 43・44 のように建物壁際に配置されることはない。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から縄文時代後期後半から晩期前半の遺構と推定している。

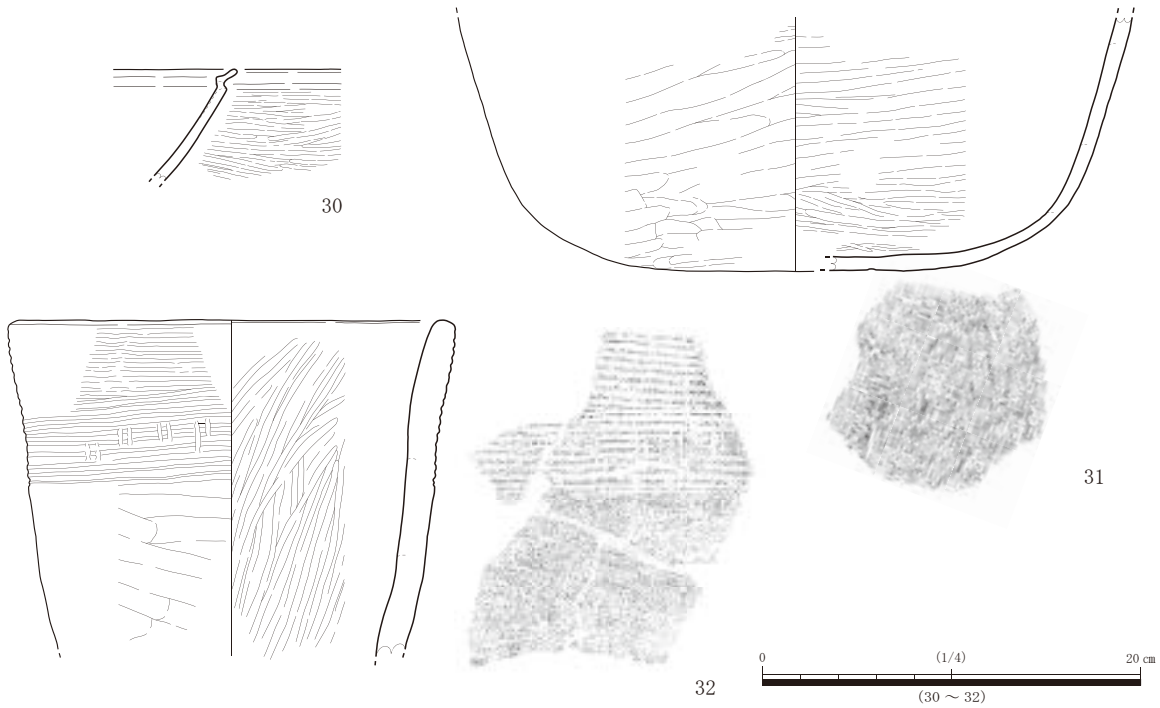


<土層注記>ＳＩ44
①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　黄褐色土をブロック状に多く含む

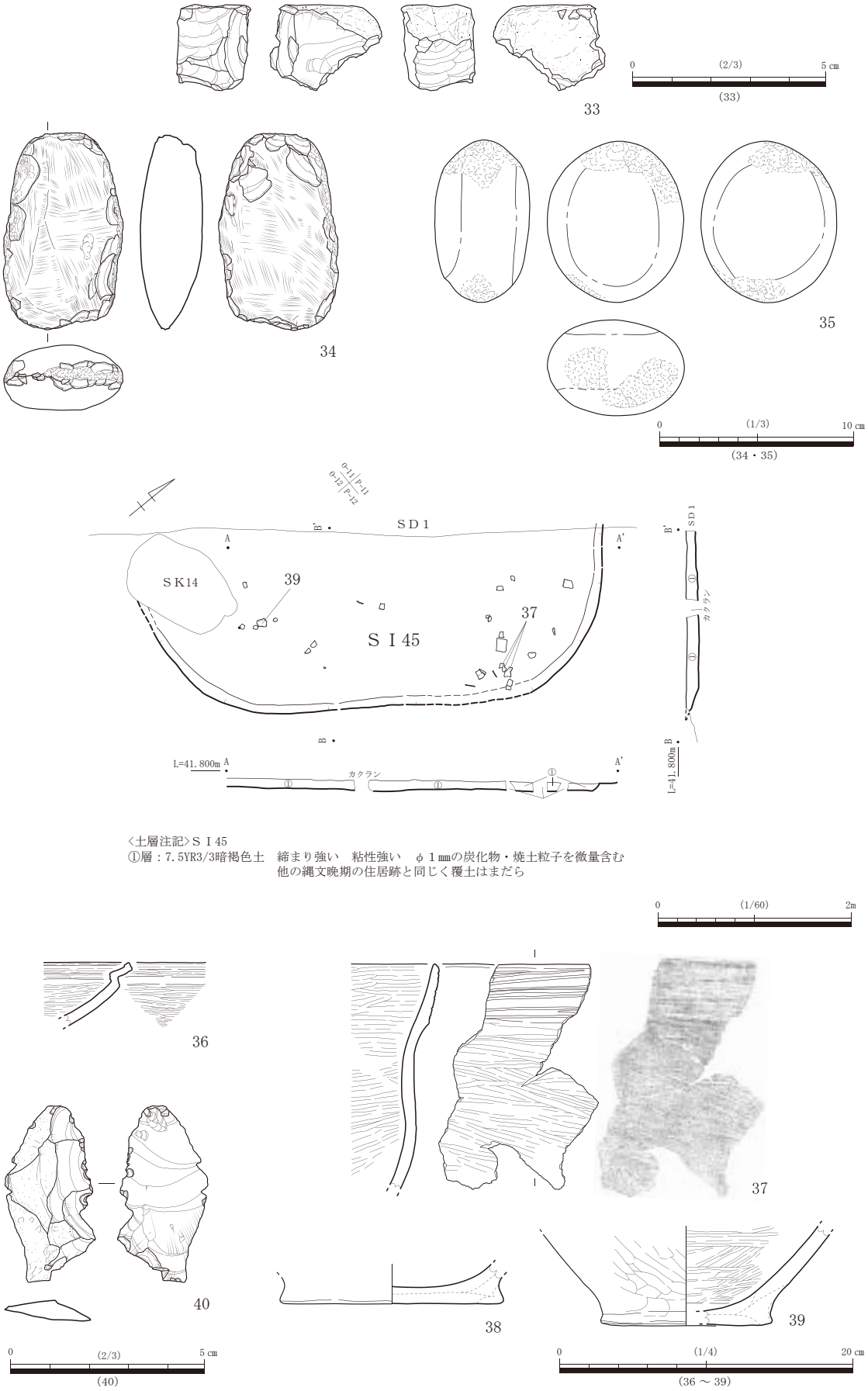


<土層注記>土坑１、Ｐ１～Ｐ４
土坑１　　①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土を多く含む
Ｐ１～Ｐ４　①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　黄褐色土をブロック状に多く含む
　　②層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　黄褐色土をブロック状に多く含む　下層のシロニガを少し含む

0　(1/60)　2m

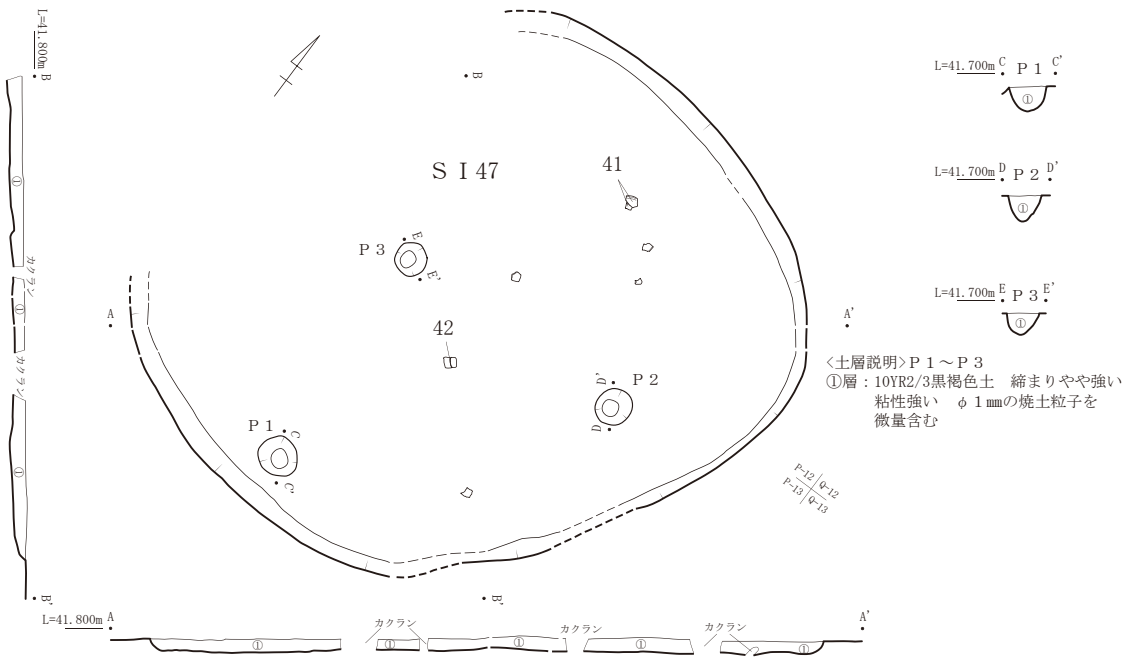


第 23 図　　ＳＩ44 遺構・出土遺物実測図１



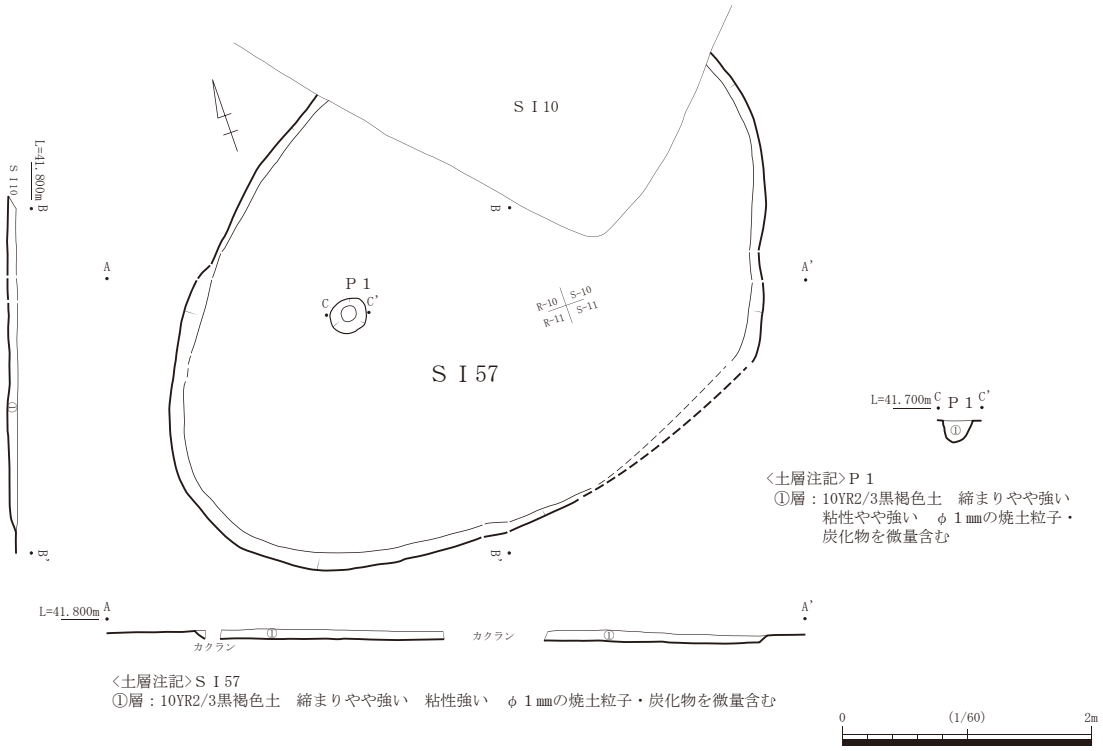
<土層注記>ＳＩ45
①層：7.5YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１㎜の炭化物・焼土粒子を微量含む
他の縄文晩期の住居跡と同じく覆土はまだら

第 24 図　　ＳＩ44・45 遺構・出土遺物実測図



〈土層説明〉Ｐ１～Ｐ３
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い
粘性強い　φ１㎜の焼土粒子を
微量含む

〈土層注記〉ＳＩ47
①層：7.5YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を微量含む　他の縄文晩期の住居跡と同じく覆土はまだら



〈土層注記〉Ｐ１
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い
粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子・
炭化物を微量含む

〈土層注記〉ＳＩ57
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を微量含む

0　(1/60)　2m

第 25 図　　ＳＩ47・57 遺構・出土遺物実測図

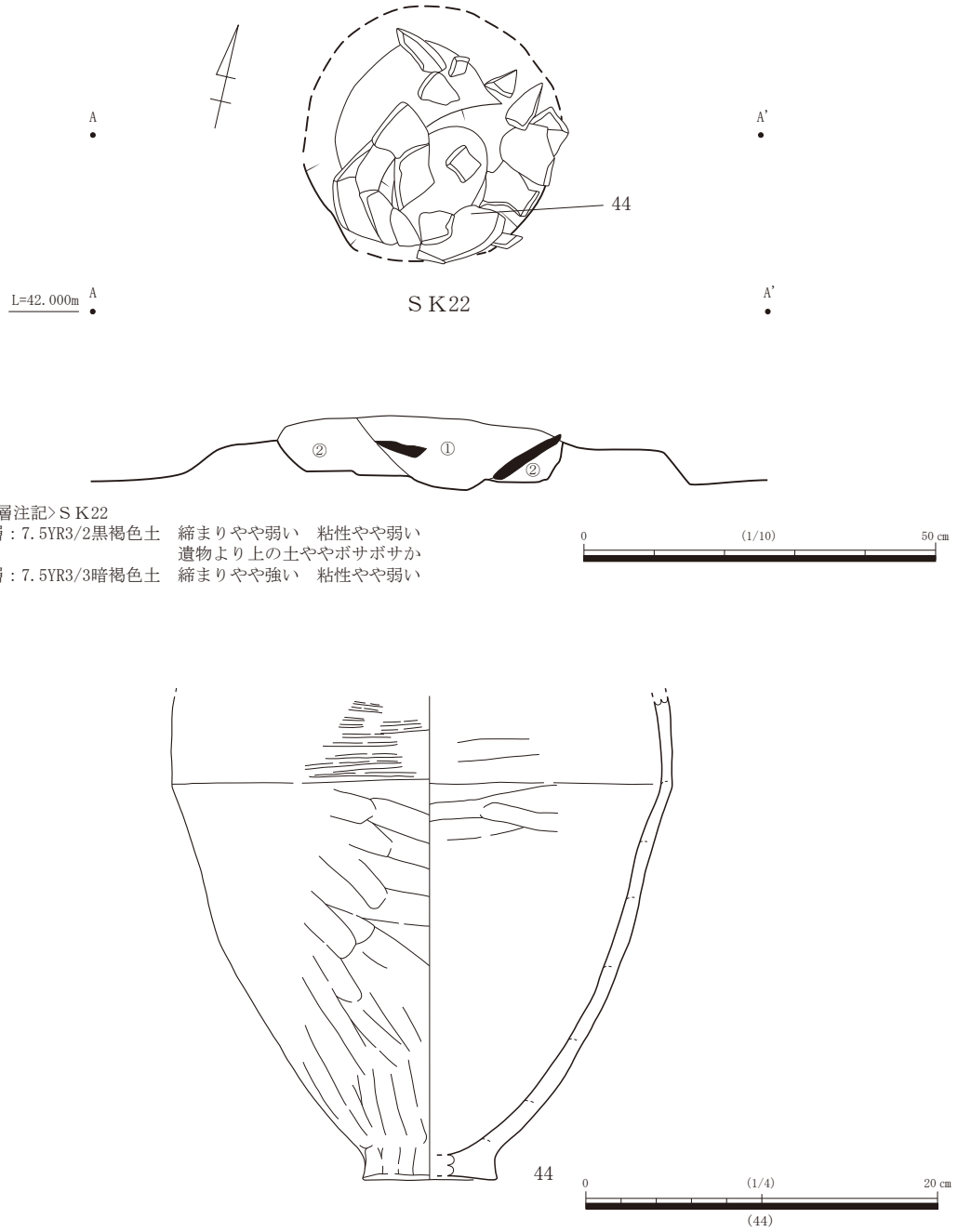
④土器埋設遺構

ＳＫ 22（第 26 図）

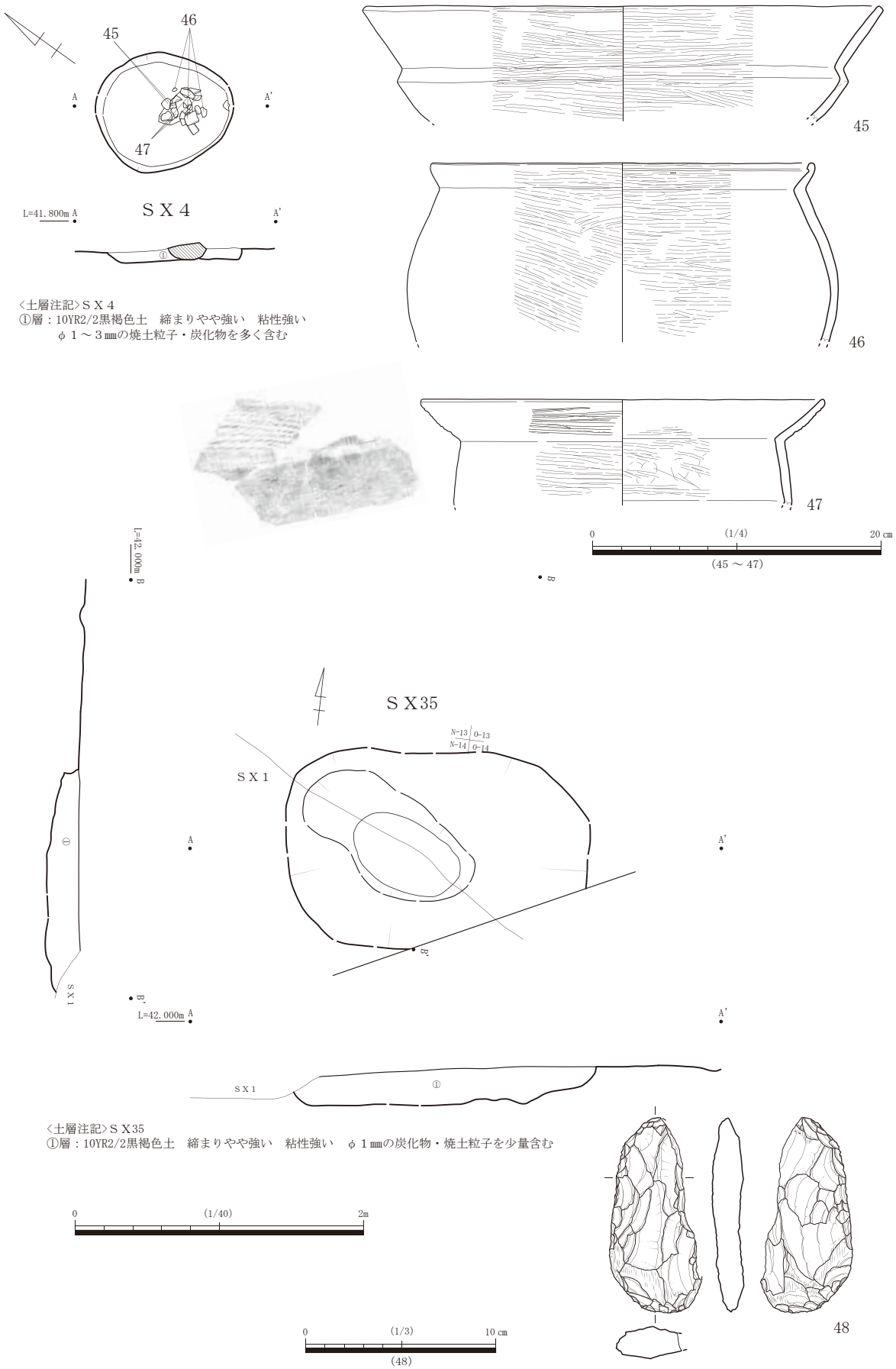
ＳＫ 22 はＭ 14 に位置する。上面は削平されているが、掘方のある土器埋設遺構である。

遺構規模は直径約 0.36 m、検出面からの深さ 0.12 mを測り、平面形態は円形、断面形態は台形を呈する。覆土は２層とした。掘方内にほぼ垂直に据えられていた。口縁部から胴部上半を欠いているが、もともと欠いているのか、削平等により欠けているのか判然としない。

44 は胴部上半から底部が残存していた。胴部屈曲部に横方向の条痕が施されている。内面はナデが丁寧に施されている。外面の調整は粗い。縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。



第 26 図　　ＳＫ22（埋設土器）出土状況・遺物実測図



〈土層注記〉ＳＸ４
①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い
　　φ１～３㎜の焼土粒子・炭化物を多く含む

〈土層注記〉ＳＸ35
①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の炭化物・焼土粒子を少量含む

第 27 図　　ＳＸ４・35 遺構・出土遺物実測図

⑤不明遺構

ＳＸ４（第 27 図）

ＳＸ４はＮ 12 に位置する。上面は削平されているが、掘方のある遺構である。ＳＫ 22 や調査３区で検出した土器埋設遺構と異なり、複数個体の土器片が出土しているが、本項目で説明することとした。

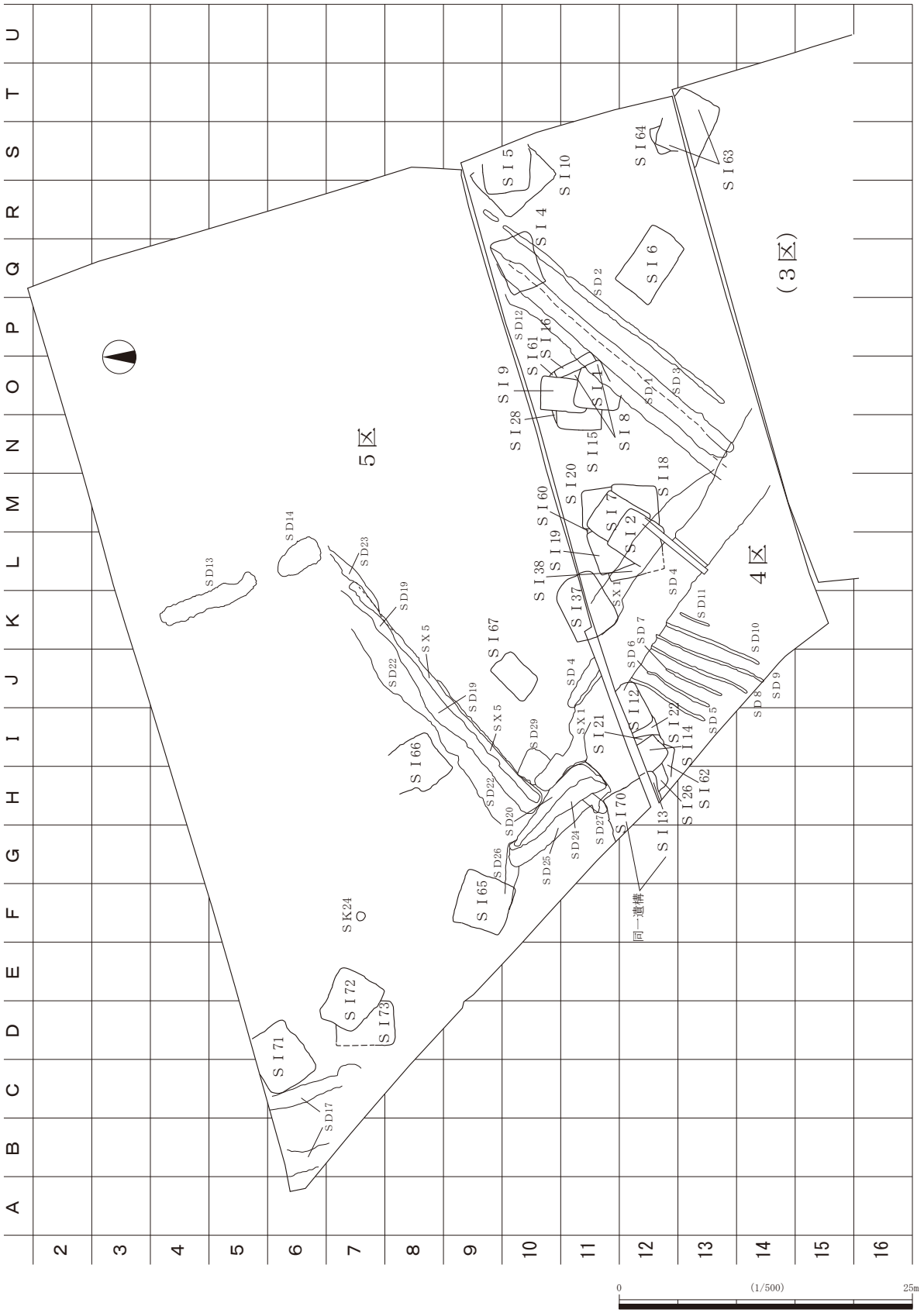
遺構規模は長軸約 0.96 m、短軸約 0.82 m検出面からの深さ 0.08 mを測り、平面形態はやや楕円形、断面形態は台形を呈する。覆土は１層とした。

45 は口縁部から胴部下半が残存していた。浅鉢と思われる。大きく開く直行口縁をもつ。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。46 は頸部がかなり短い大形の鉢と思われる。内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。47 は口縁部から胴部上半が残存していた深鉢と思われる。口縁部はやや内湾ぎみにひらく。口縁部には沈線状の条痕が施されている。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

ＳＸ 35（第 27 図）

ＳＸ 35 はＮ 14、Ｏ 14 に位置する。上面は削平されている。最後まで遺構なのか自然の窪みなのか判然としなかったが、ここでは遺構として報告する。遺構規模は長軸約 2.1 m、短軸約 1.36 m検出面からの深さ 0.26 mを測り、平面形態は楕円形、断面形態は台形を呈する。覆土は１層とした。

覆土から 48 の頁岩製の打製石斧が出土している。



第 28 図　　４・５区遺構配置図（弥生時代）

（２）弥生時代後期の遺構・遺物（第 28 図～第 73 図）

調査４区・５区における弥生時代の主要な検出遺構は、竪穴建物 33 軒、土坑１基である。時期は弥生時代後期前半から後半が主体と想定される。ただし、調査４区に竪穴建物が集中しているのは、調査５区が開田事業により大きく削平されたことに起因しており、本来の遺跡の状況を表しているとは考えていない。

なお、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて遺構検出を行っているが、それでも正確に把握できなかったものがある。そのため、遺構の重複関係に曖昧な部分が残り、遺物の帰属遺構に正確さを欠いている箇所がある。反省すべき点が多い調査となってしまった。

また、遺構内の出土遺物は可能な限り出土位置の三次元情報を記録し取り上げたが、報告書にはドットマップを掲載することができなかった。所見にはその成果をできるだけ生かすこととしたが、客観的に提示することができていない。しかも、職員の異動に伴い年度ごとに整理担当者が代わっている関係で、遺物の選び出しを行った者と執筆者が異なっている。そのため、本来掲載すべきと思われる遺物をカバーできていない可能性がある。所見執筆時に若干補っているが、不十分なところが多々ある。どうか、ご容赦願いたい。

①竪穴建物跡

ＳＩ１（第 29 図）

ＳＩ１はＯ 11・12 に位置する。ＳＤ１やＳＫ２などにより、建物南東側約 1/4 が破壊されている。遺構の規模は長軸約 3.90 m、短軸約 3.38 m、検出面からの深さ 0.22 mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は１層とした。建物に伴う遺構として柱穴を３基検出した。深さは約 18 ～ 36㎝を測る。建物北東側に柱穴を１基推定できるが、後世の土坑により撹乱されている。炉跡やベッド状遺構は確認できなかった。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の遺構と推定している。

ＳＩ９（第 29 図）

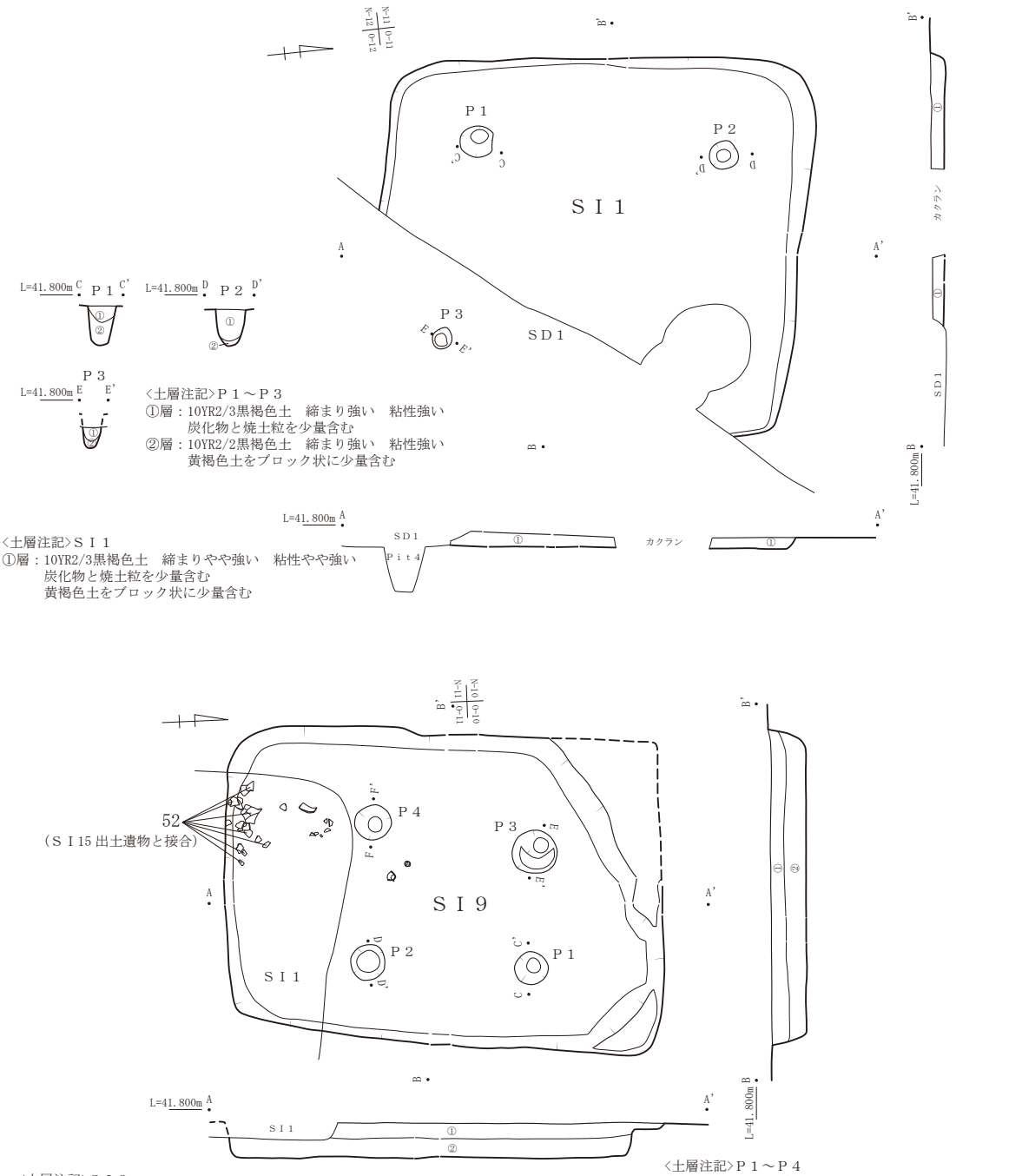
ＳＩ９はＯ 10・11 に位置する。建物南側約 1/5 がＳＩ１と重複している。先後関係はＳＩ９→ＳＩ１である。遺構の規模は長軸約 4.0 m、短軸約 2.84 m、検出面からの深さ 0.40 mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は２層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは約 20 ～ 35㎝を測る。建物北東側と北西側にベッド状の高まりを確認した。炉跡は検出していない。

出土遺物は少し気にはなるが、ＳＩ１と重複する建物南側でまとまって出土している。ここでは石器２点を図示したがいずれも流れ込みと思われる。49・50 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。

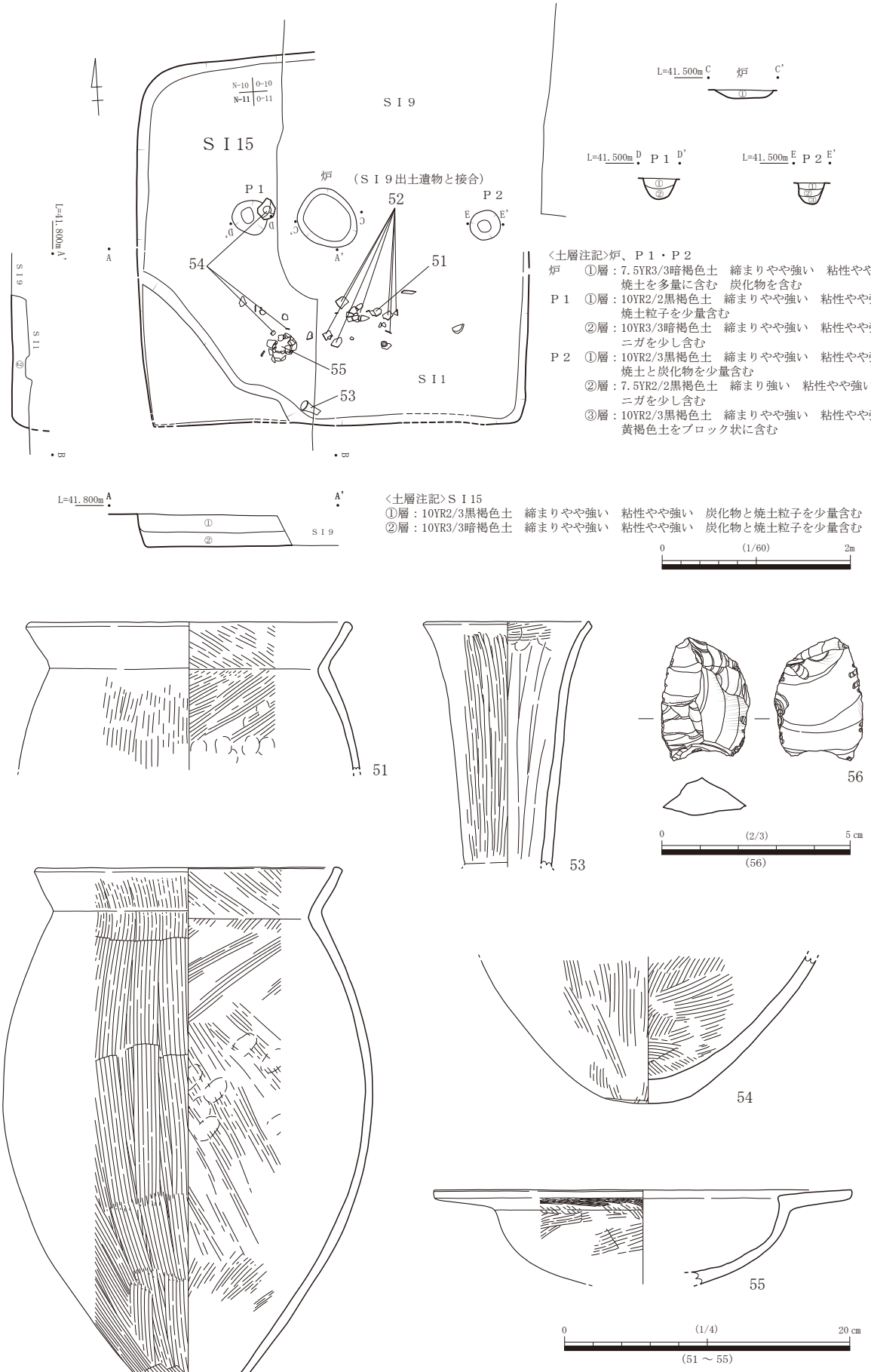
ＳＩ 15（第 30 図）

ＳＩ 15 はＮ 10・11、Ｏ 10・11 に位置する。建物東側約 1/2 がＳＩ９とＳＩ１と重複している。重複が激しいが、先後関係はＳＩ 15 →ＳＩ９→ＳＩ１と捉えている。遺構の規模は長軸約 4.22 m、短軸約 3.98 m、検出面からの深さ 0.44 mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は２層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を２基検出した。深さは約 22㎝を測る。建物南西側にベッド状の高まりを確認した。建物中央で炉跡を１基検出している。

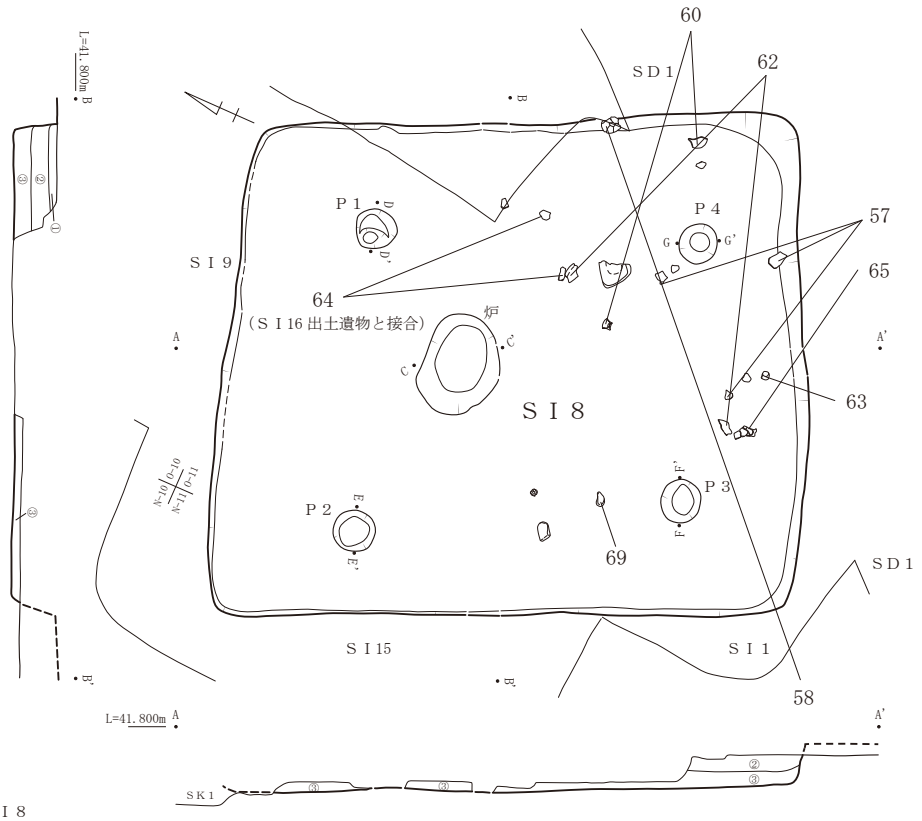
出土遺物は、建物跡南側の下層でややまとまって出土している。51・52 は甕である。51 は口縁部から胴部上半まで、52 は口縁部から胴部下半まで残存していた。いずれも口縁部は内湾ぎみに開き、胴部中位に最大径をもつ。外面はハケ目と横ナデ、内面はハケ目ののち横ナデを施している。52 は重複関係のないＳＩ 10 出土遺物と接合関係にある。脚台付の甕と思われる。53・54 は壷である。53 は長頸壷の頸部であり、外面に縦のミガキが施されている。54 は胴部下半から底部内外面ともハケ目とナデが施されている。55 は高坏で



第29図　　ＳＩ１・９遺構・出土遺物実測図

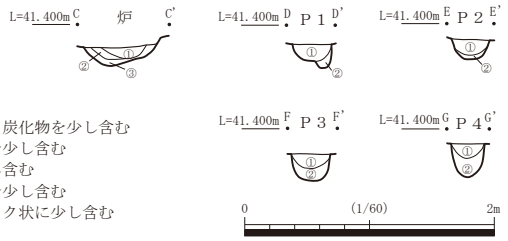


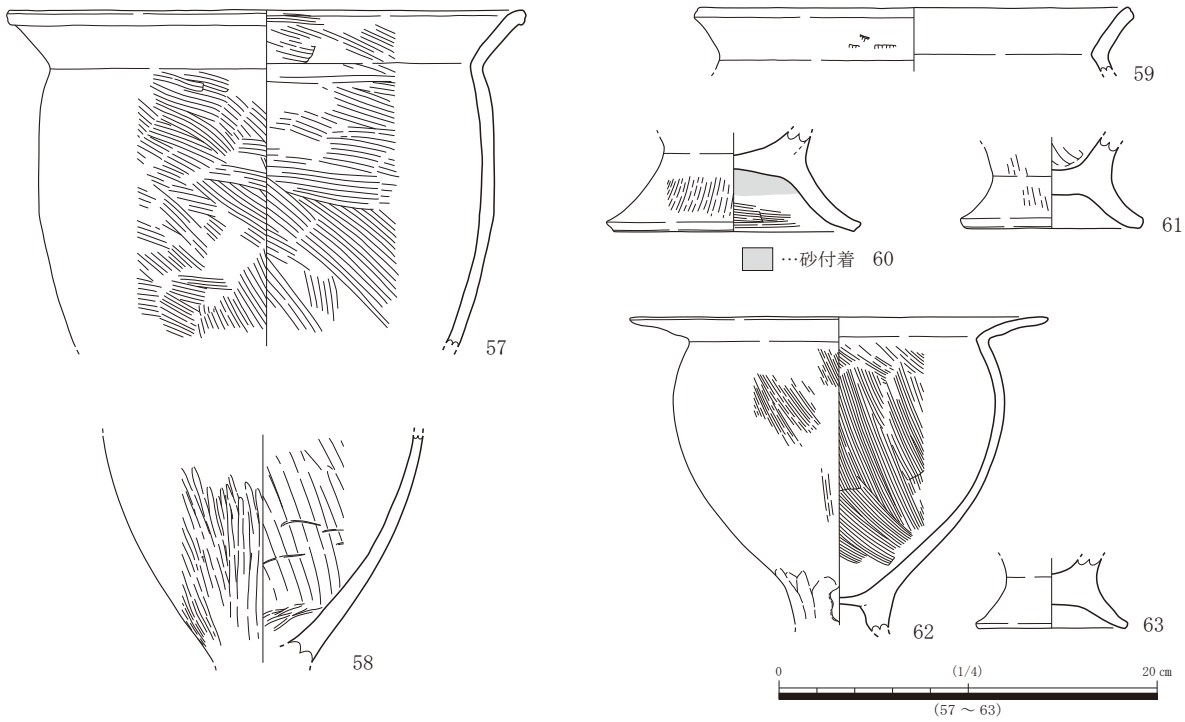
第 30 図　　ＳＩ15 遺構・出土遺物実測図



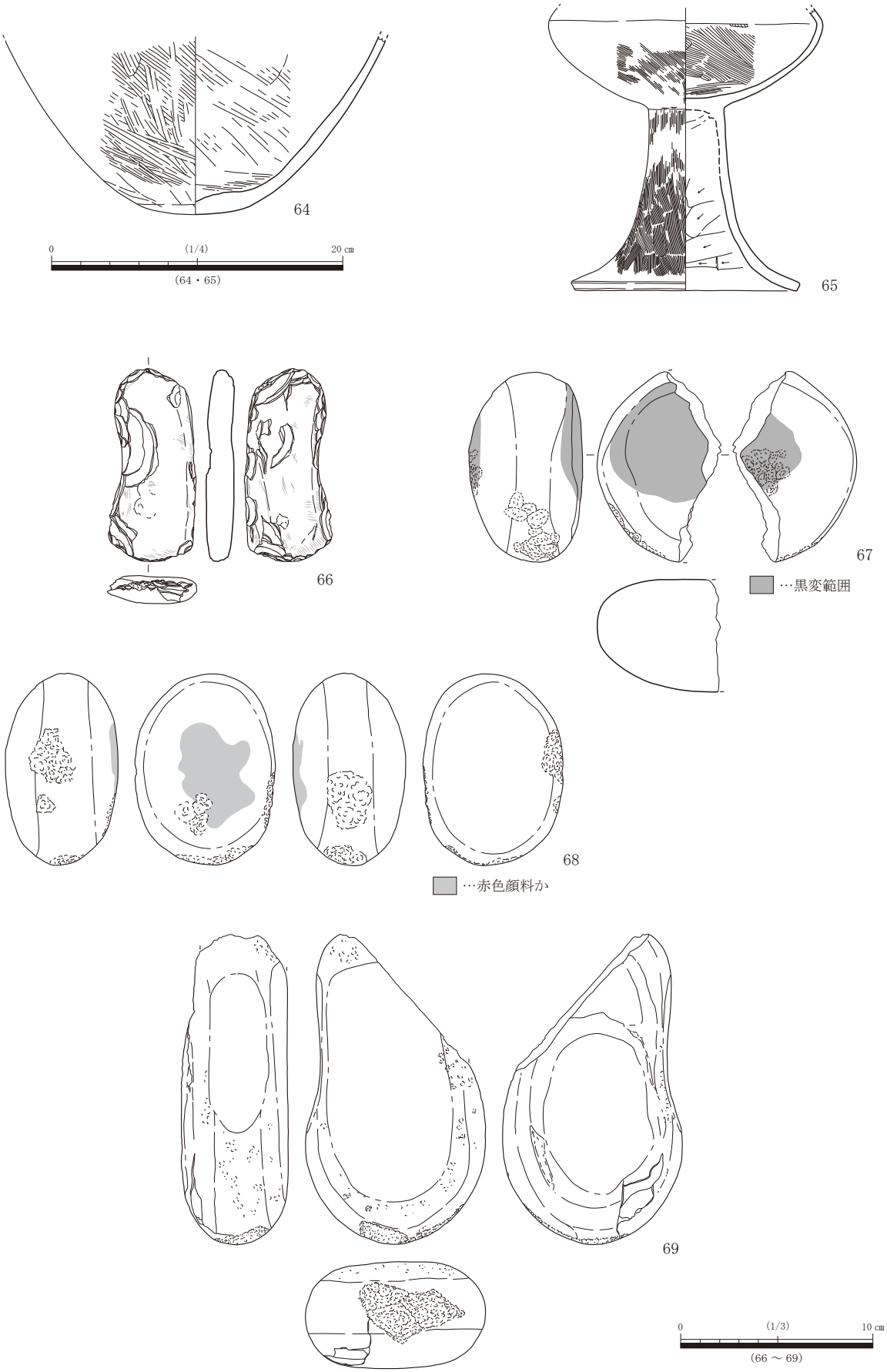
<土層注記>ＳＩ８
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒子と炭化物を少し含む
②層：10YR3/2暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　少し締まりが強くなる
焼土粒子と炭化物を少し含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性強い　焼土粒子と炭化物を少し多く含む

<土層注記>炉、Ｐ１～Ｐ４
炉　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土を多量に含む　炭化物を少し含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒子と炭化物を少し含む
③層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ニガブロックを少し含む
Ｐ１～Ｐ４　①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒子と炭化物を少し含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　下層のニガをブロック状に少し含む





第 31 図　　ＳＩ８遺構・出土遺物実測図１



第 32 図　　ＳＩ８出土遺物実測図２

ある。脚部を欠いている。浅い坏部に、強く屈曲しほぼ水平に開く口縁を有する。内面は残りが悪く調整が不明瞭である。口縁部から坏部の屈曲部分にかけてやや粗いハケ目が施されている。重複関係のないＳＩ 10 出土遺物と接合関係にある。56 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。流れ込みと思われる。

ＳＩ８（第 31 図・第 32 図）

ＳＩ８はＮ 11、Ｏ 11 に位置する。建物北側がＳＩ９、南側がＳＩ１、南東側がＳＤ１と重複している。重複が激しいが、先後関係はＳＩ８→ＳＩ 15 →ＳＩ９→ＳＩ１→ＳＤ１と捉えている。遺構の規模は長軸約 4.58 m、短軸約 3.90 m、検出面からの深さ 0.36 mを測り、平面形態は隅丸のやや長方形を呈する。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは 16 ～ 28㎝を測る。建物中央やや北西寄りで炉跡を１基検出している。ベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は、建物東側で中層から下層にかけて点在して出土している。57 ～ 59 は甕である。57 は口縁部から胴部中位まで残存しており、胴部上位に最大径をもつ。外面は横ナデとハケ目、内面はハケ目と横ナデを施す。58 は胴部中位から胴部下半まで残存しており、小形の脚台付きの甕と捉えた。59 は口縁部破片である。60・61 は甕の脚台部であり、裾部が外側に開く。いずれも高さは低い。62 は台付鉢もしくは高坏と思われる。深い胴部に、強く屈曲し大きく開く口縁部を有する。内面にハケ目が明瞭に残っている。63 は甕もしくは鉢の脚台部である。64 は壷であり、外面に粗いハケ目が施されている。65 は高坏と思われる。坏部にわずかに屈曲部が残存している。坏部から脚部外面に横ナデと縦のハケ目を施している。66 は緑色片岩製の磨製石斧である。67 ～ 69 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ 16（第 33 図）

ＳＩ 16 はＯ 10・11 に位置する。建物西側約 4/5 がＳＩ８と重複している。先後関係はＳＩ 16 →ＳＩ８と捉えている。遺構の規模は長軸約 3.6 m、柱穴の位置からの推定で短軸約 2.8 m、検出面からの深さ 0.36 mを測り、平面形態は柱穴の位置から隅丸長方形と推定した。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは 14 ～ 20㎝を測る。炉跡やベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は、ＳＩ８と重複していない建物東側の下層で点在して出土している。70・71 は甕の脚台部である。脚の裾部が外側に開き、器高は低い。全体的厚く、外面にハケ目ののち横ナデが施される。72 は粘板岩製の石庖丁であり、ふたつの孔は両側から穿たれている。73 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ 61（第 33 図）

ＳＩ 61 はＯ 10 に位置する。建物の大部分がＳＩ 16 やＳＩ９と重複しているため残りは非常に悪い。ＳＩ 16 調査時の掘り残しの可能性も考えたが、ＳＩ 16 の柱穴の位置や想定される建物規模等から別遺構と考えた。検出面からの深さ 0.36 mを測るが、残存状況が悪いため、建物規模、平面形態、付属施設はわからない。建物覆土は３層に分けることができる。

実測可能な遺物はなかったため、検出面からの深さや覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

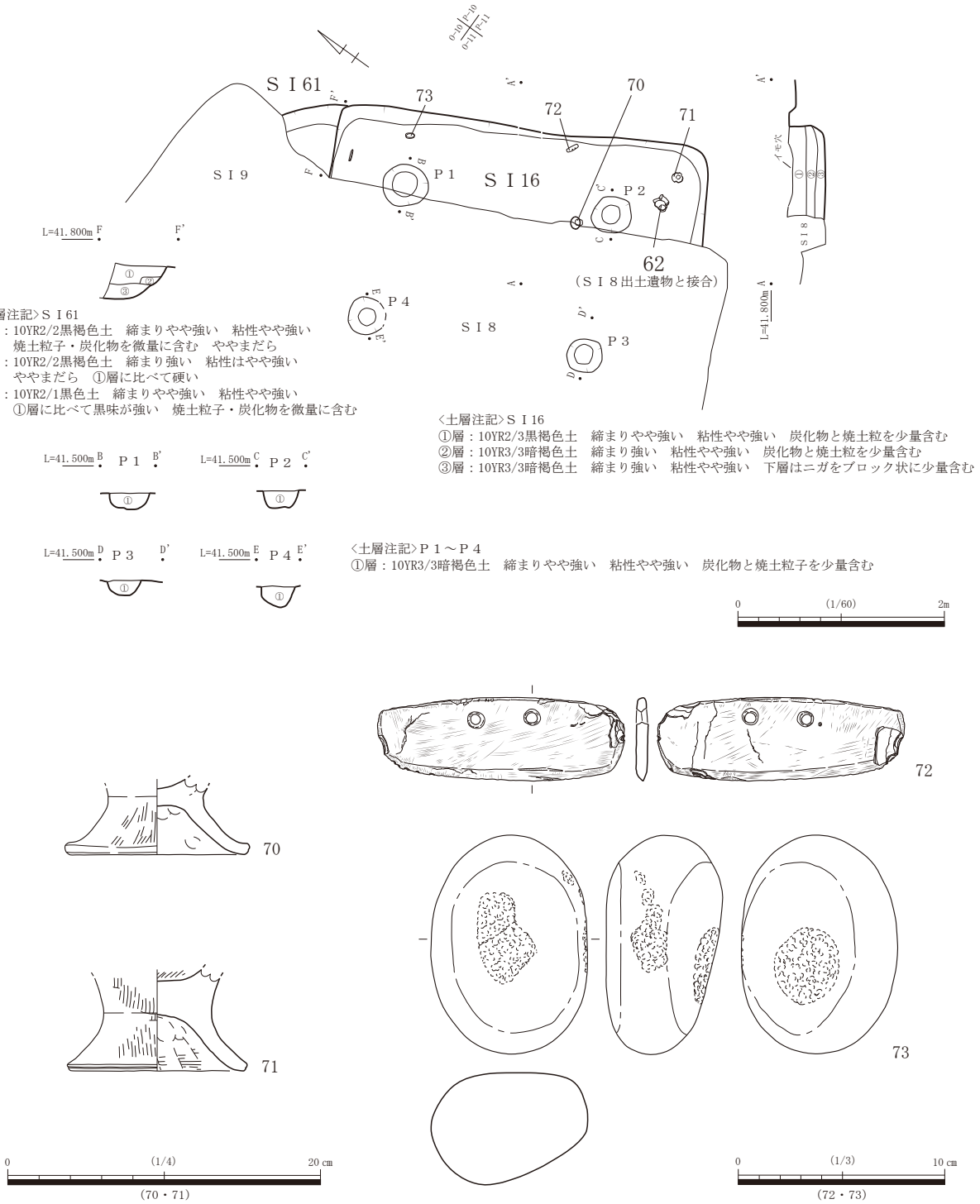
ＳＩ 28（第 34 図）

ＳＩ 28 はＮ 10・11、Ｏ 10・11 に位置する。建物の大部分がＳＩ 16 やＳＩ９と重複しているため残りは非常に悪い。遺構の規模は柱穴と炉跡の位置から推定して長軸約 4.60 m、短軸約 3.80 m、検出面からの深さ 0.14 mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈するものと推定した。建物覆土は１層とした。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは 16 ～ 22㎝を測る。建物中央で炉跡を１基検出している。

実測可能な遺物はなかったため、検出面からの深さや覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

ＳＩ２（第 35 図）

ＳＩ２はＬ 11・12、Ｍ 11・12 に位置する。建物の大部分がＳＤ４と重複しているため残りは非常に悪い。遺構の規模は長軸約 3.84 m、短軸約 3.78 m、検出面からの深さ 0.40 mを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は４層に分けることができる。本遺構は現地調査時に２時期あると考えられた。建物壁際に深さ



第 33 図　　ＳＩ16・61 遺構・出土遺物実測図

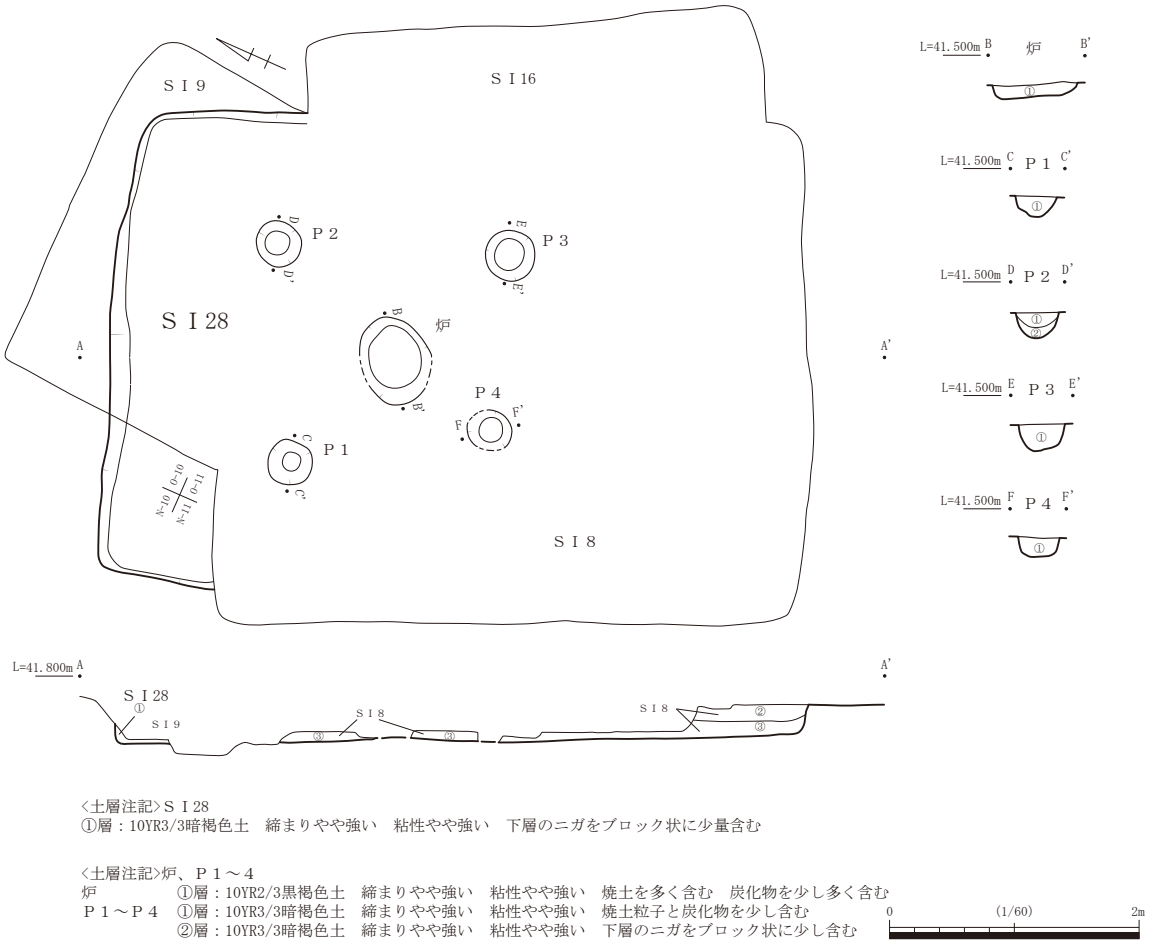
約 20 ～ 32㎝の柱穴が４基配置される竪穴が使用されたのち、建物北西側にベッド状遺構を構築し、深さ約 18 ～ 24㎝の柱穴が４基配置される竪穴となる。硬化面は認められなかったが、やや締まった土が広がっていたため、その面を床面とし２時期と推測している。

74 は甕の脚台部である。内外面はハケ目と横ナデが施される。75 はチャート製の打製石鏃。76 は砂岩製の磨製石斧である。77 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ７（第 36 図）

ＳＩ７はＬ 11・12、Ｍ 11・12 に位置する。建物南西側約 1/2 がＳＩ２と重複している。先後関係はＳＩ７→ＳＩ２と捉えている。遺構の規模は長軸約 4.22 m、短軸約 3.82 m、検出面からの深さ 0.58 mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形と呈する。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を５基検出した。深さは約 22 ～ 34㎝を測る。P4 は他の柱穴との位置関係から主柱穴とは別と思われる。炉跡やベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は覆土上層で出土している。78 は鉢もしくは壷の口縁部から胴部上半である。内外面は横ナデが施される。79 は黒曜石製の打製石鏃、80 は安山岩製の打製石斧、81 は緑色片岩製の磨製石斧である。

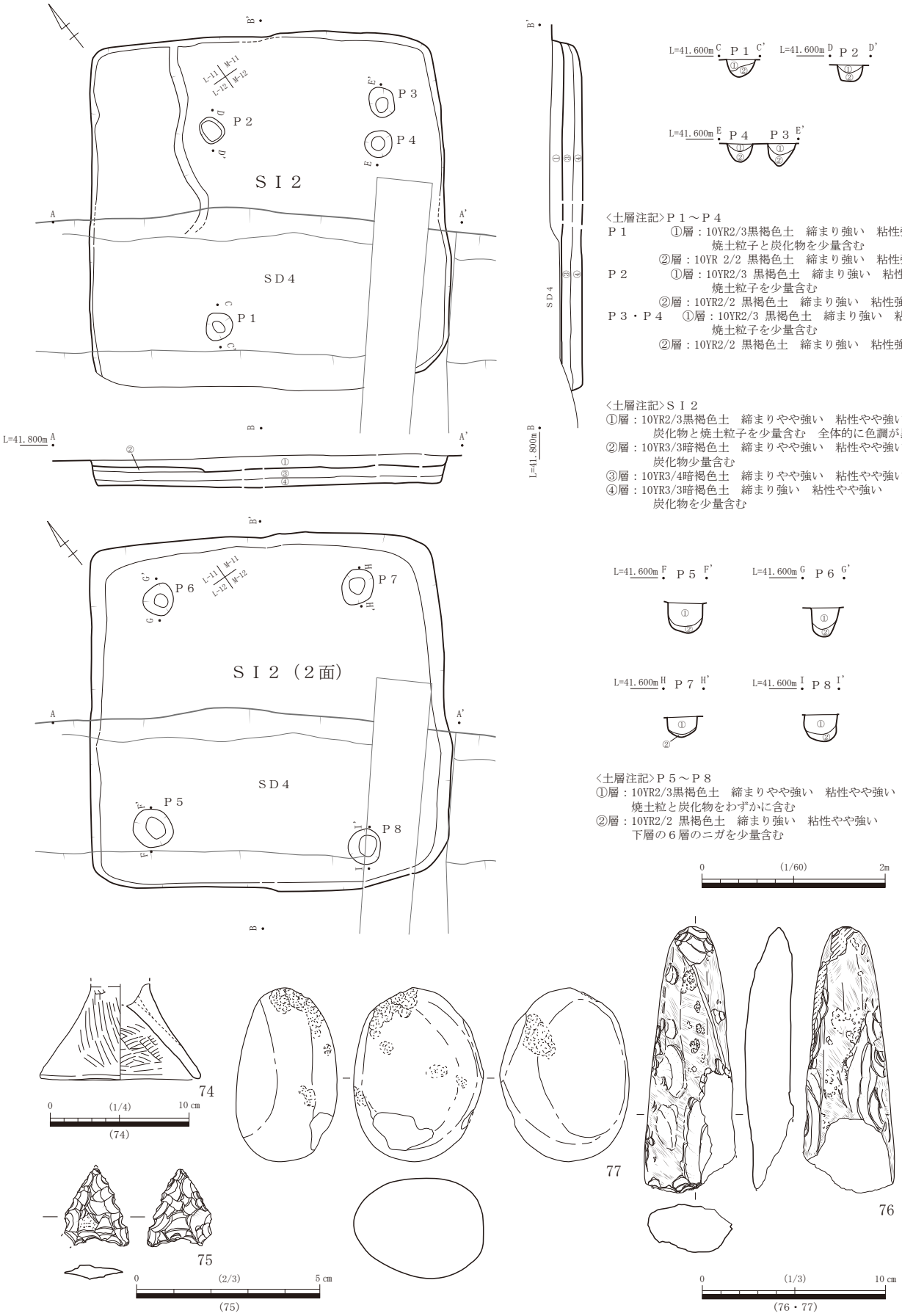


〈土層注記〉ＳＩ28
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　下層のニガをブロック状に少量含む

〈土層注記〉炉、Ｐ１～４
炉　　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土を多く含む　炭化物を少し多く含む
Ｐ１～Ｐ４　①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒子と炭化物を少し含む
　　②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　下層のニガをブロック状に少し含む

0　(1/60)　2m

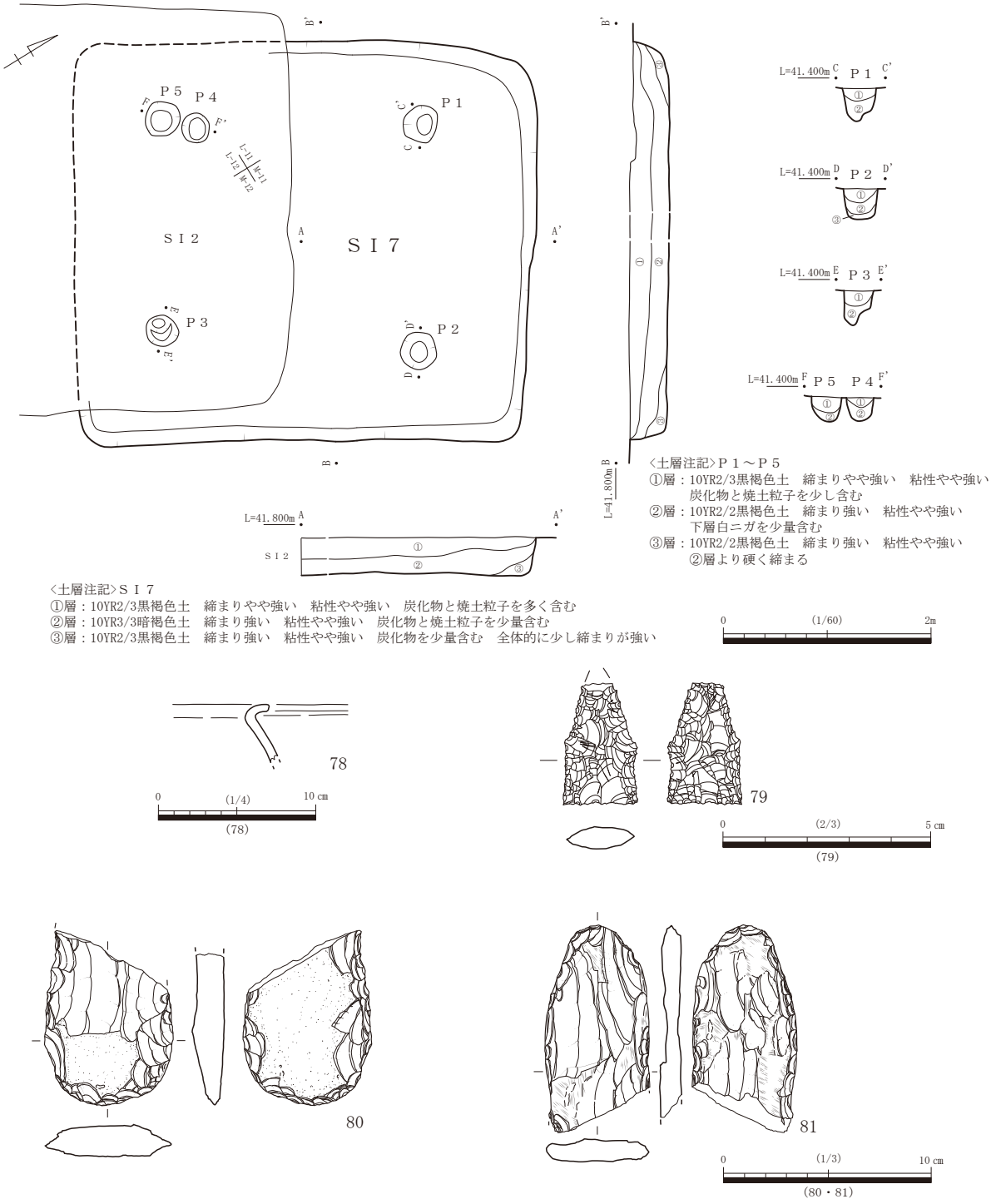
第 34 図　　ＳＩ28 遺構実測図



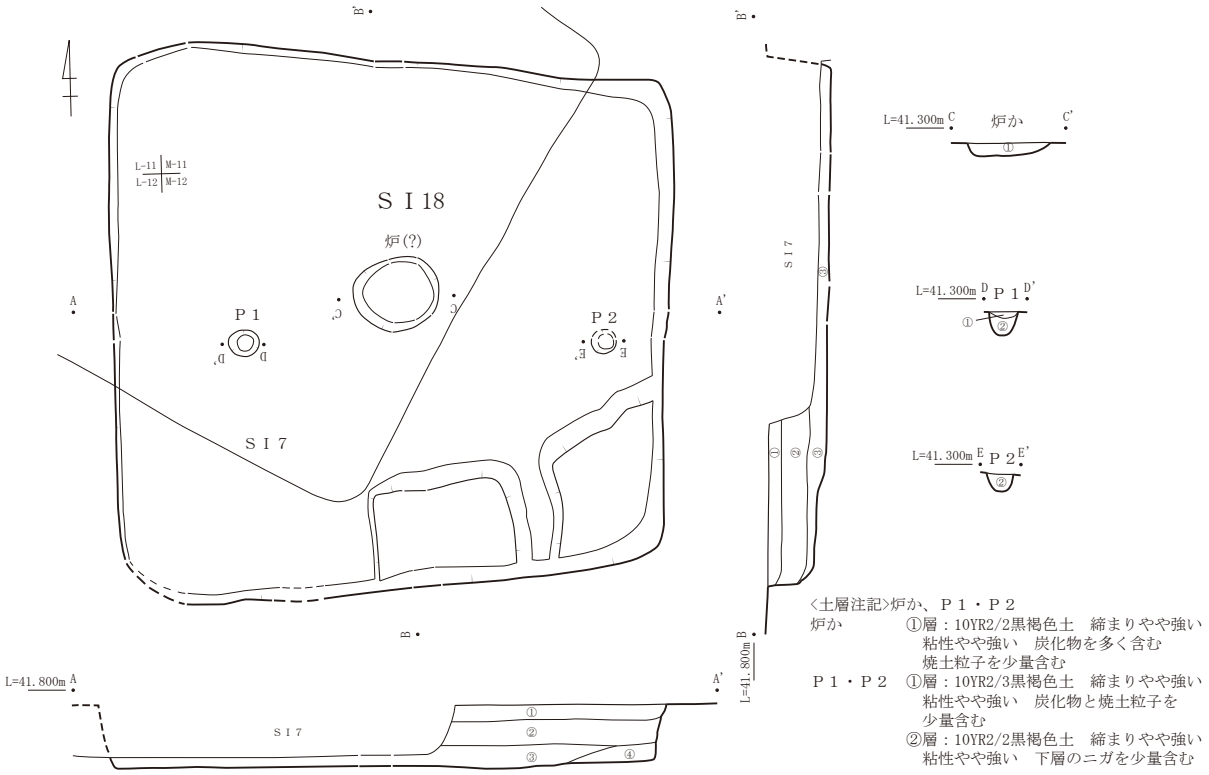
第35図　　ＳＩ２遺構・出土遺物実測図

ＳＩ 18（第 37 図）

ＳＩ 18 はＬ 11・12、Ｍ 11・12 に位置する。建物北西側約 1/2 がＳＩ７と重複している。先後関係はＳＩ 18 →ＳＩ７である。遺構の規模は長軸約 4.42 m、短軸約 4.19 m、検出面からの深さ 0.50 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は４層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を２基検出した。深さは約 14 ～ 18㎝を測る。建物南東隅と南側にベッド状遺構を確認した。建物中央で炉跡と推定されるものを１基検出している。



第 36 図　　ＳＩ７遺構・出土遺物実測図



<土層注記>炉か、Ｐ１・Ｐ２

炉か　①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物を多く含む　焼土粒子を少量含む

Ｐ１・Ｐ２　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒子を少量含む

②層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　下層のニガを少量含む

<土層注記>ＳＩ18

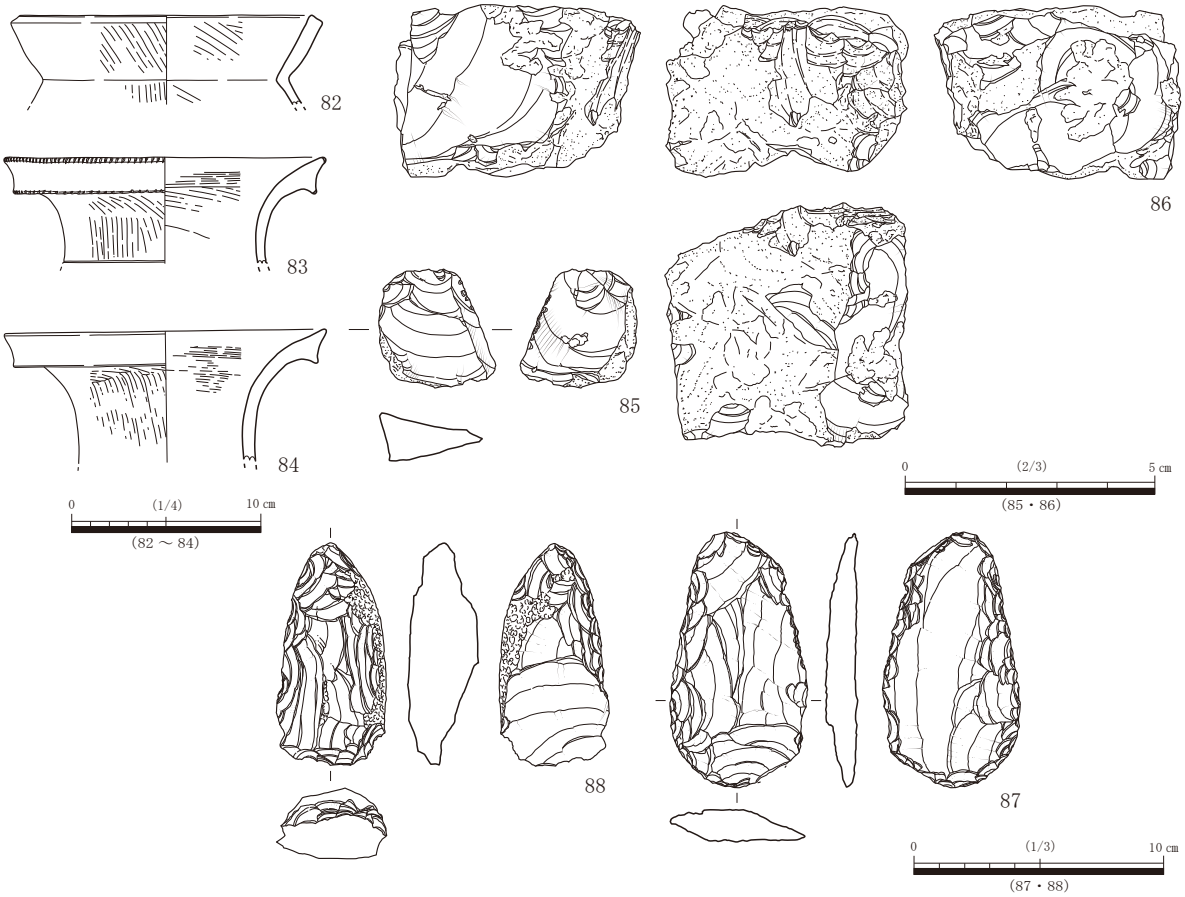
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒子を少量含む

②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒子を少量含む

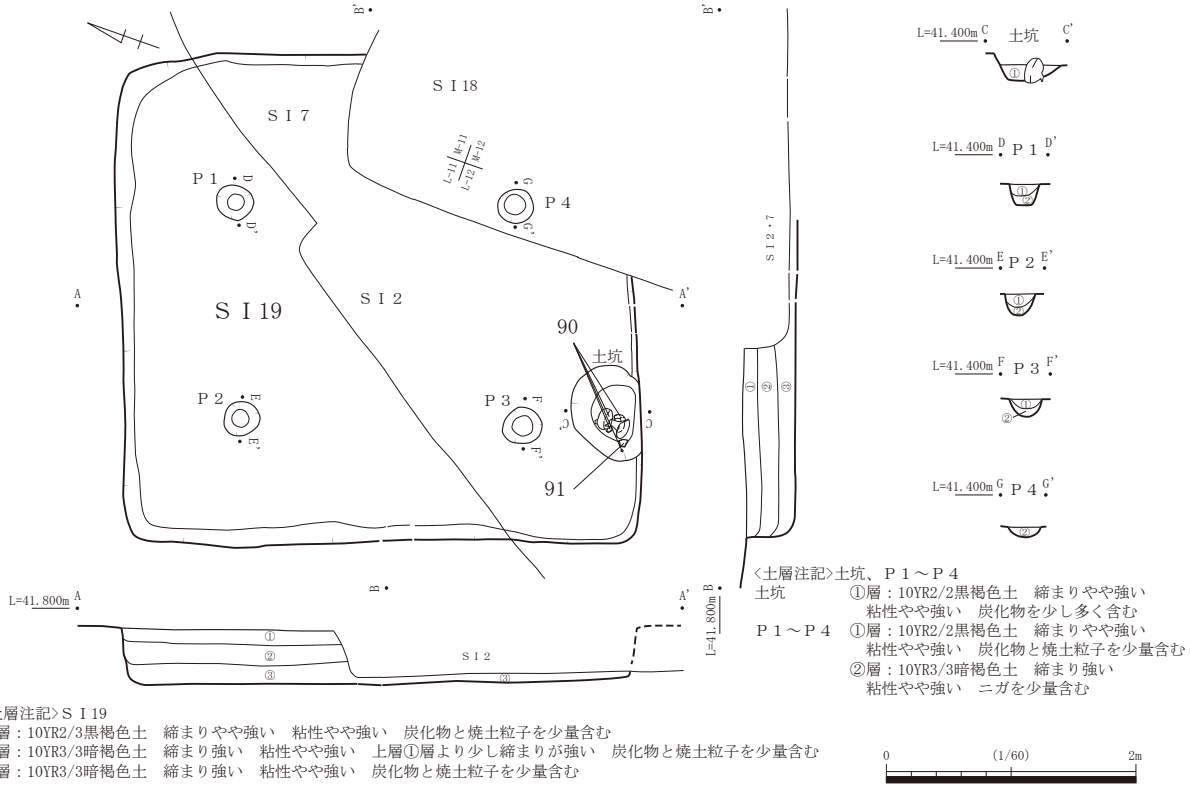
③層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　下層の６層ニガを少量含む

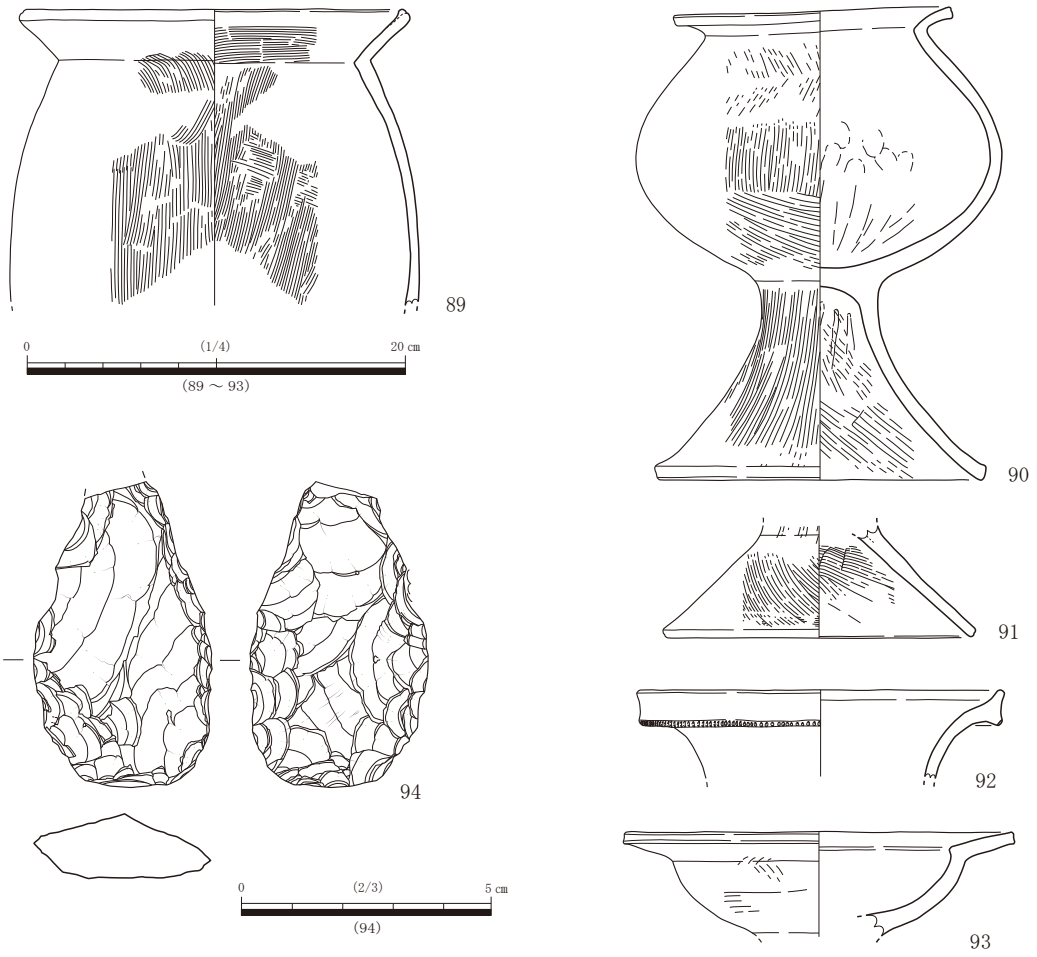
④層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　下層６層黒褐色土と褐色土をブロック状に含んでいる

0　(1/60)　2m

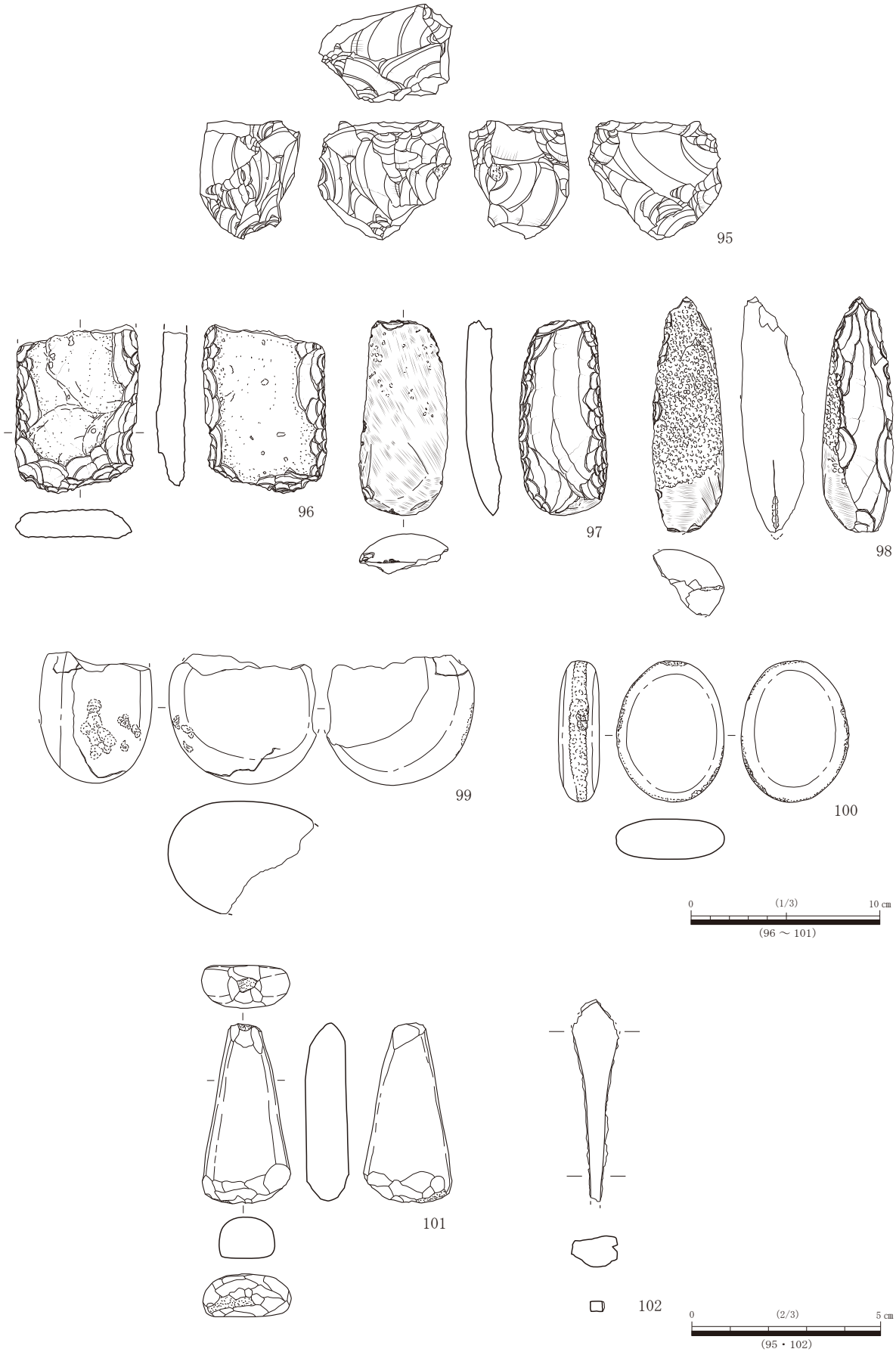


第 37 図　　ＳＩ18 遺構・出土遺物実測図





第 38 図　　ＳＩ19 遺構・出土遺物実測図１



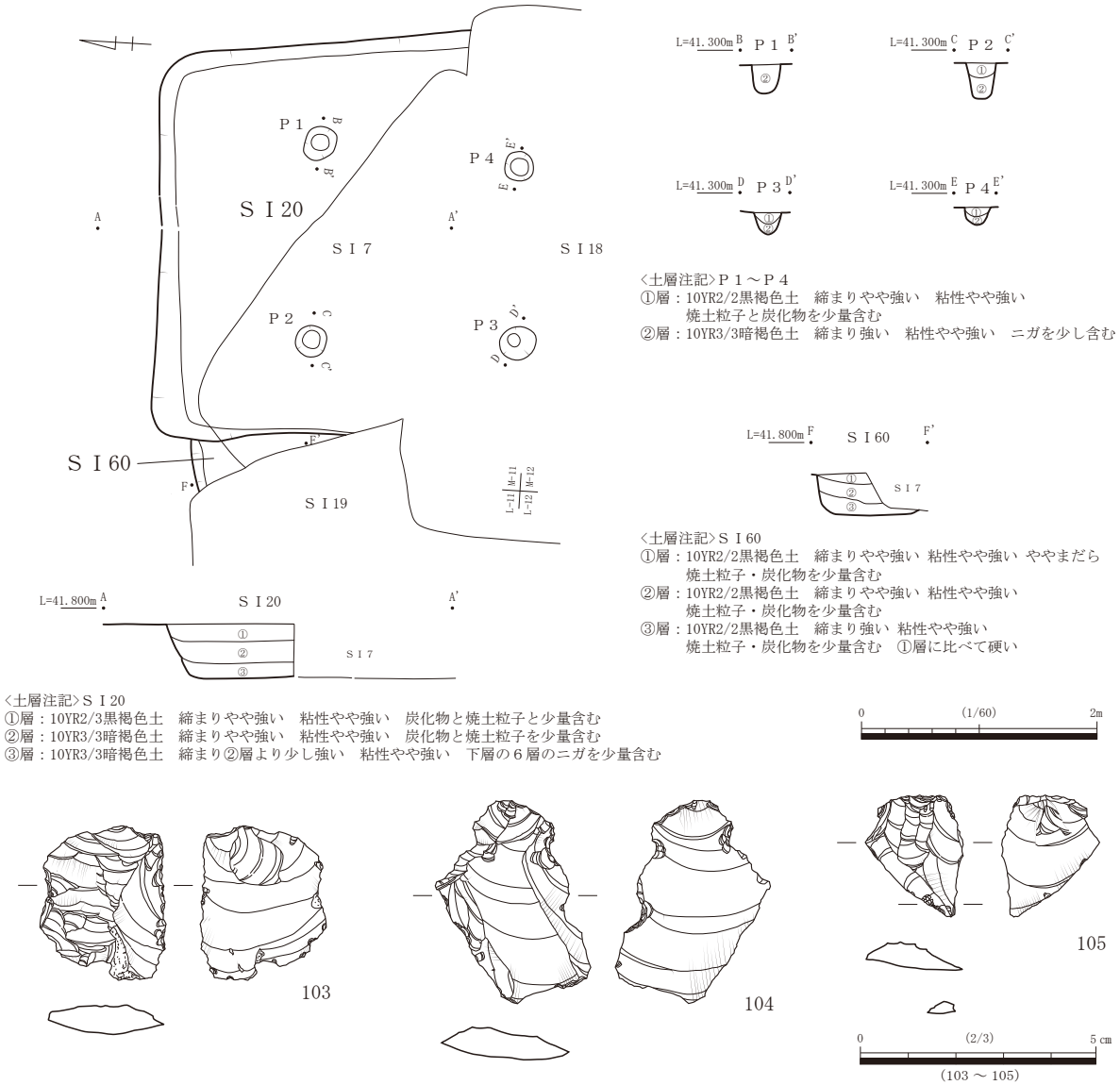
第 39 図　　ＳＩ19 出土遺物実測図２

出土遺物は覆土中層から下層で出土している。82 は甕の口縁部である。内外面にハケ目と横ナデが施される。83・84 は壷の口縁部から頸部である。外反する口縁部は肥厚して断面が三角形状をなす。83 は上端と下端に刻み目を入れる。上端の刻み目の方が間隔は狭い。85 は使用痕のある剥片、86 は石核でいずれも黒曜石。87 は安山岩製の打製石斧である。88 は砂岩製の磨製石斧。

ＳＩ 19（第 38 図・第 39 図）

ＳＩ 19 はＬ 11・12、Ｍ 11・12 に位置する。建物南東側約 1/2 がＳＩ７とＳＩ２と重複している。重複が激しいが、先後関係はＳＩ 19→ＳＩ７→ＳＩ２と捉えている。遺構の規模は長軸約 4.08 m、短軸約 3.88 m、検出面からの深さ 0.44 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは約８～ 17㎝を測る。建物南側壁際に長軸約 76㎝、短軸約 60㎝、深さ約 14㎝の土坑があり、内部からほぼ完形の脚台付の鉢が倒れた状態で出土している。炉跡やベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は覆土下層を中心に出土している。89 は甕で、口縁部から胴部上半まで残存していた。口縁部は



第 40 図　　ＳＩ20・60 遺構・出土遺物実測図

頸部から直線的に開き、端部内面が少し摘んだようになる。内外面は横ナデとハケ目が施される。90 は脚台付きの鉢である。口縁部は外反しており、口径が胴部径より小さい。胴部下位に最大径をもつ。91 は鉢の脚台部と思われる。胴部との接合部が残っており、外側に直線的に開く。内外面にハケ目が明瞭に残っている。92 は壷の口縁部から頸部である。外反する口縁部は肥厚して断面が三角形状をなす。口縁下端のみ細かい刻み目を入れる。93 は高坏の口縁部から坏部である。脚部との接合部が少し残っている。浅い坏部に、強く屈曲しほぼ水平に開く口縁を有する。内外面は横ナデとハケ目が施される。94 は安山岩製のスクレイパー、96 は安山岩製の打製石斧である。97・98 は砂岩製の磨製石斧である。99・100 は磨石類である。敲打痕が認められる。101 は敲石である。102 は有茎式の鉄鏃である。

ＳＩ 20（第 40 図）

ＳＩ 20 はＭ 11・12 に位置する。建物南側約 2/3 以上がＳＩ 18 とＳＩ７と重複しているため、非常に残りが悪い。重複が激しいが、先後関係はＳＩ 20 →ＳＩ 18 →ＳＩ７と捉えている。遺構の規模は柱穴と炉跡の位置から推定して長軸約 4.36 m、短軸約 3.28 m、検出面からの深さ 0.46 mを測り、平面形態は隅丸長方形と推定される。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは約 15 ～ 30㎝を測る。炉跡やベッド状遺構は見つけられなかった。

出土遺物は覆土中層から下層にかけて出土している。103 ～ 105 はいずれも黒曜石の使用痕のある剥片である。

ＳＩ 60（第 40 図）

ＳＩ 60 はＬ 11、Ｍ 11 に位置する。建物の大部分がＳＩ 19 やＳＩ 20 と重複しているため残りは非常に悪い。ＳＩ 17・19・20 調査時の掘り残しの可能性も考えたが、柱穴の位置や想定される建物規模等から別遺構と推定したものである。検出面からの深さ 0.36 mを測るが、残存状況が悪いため、他の建物規模、平面形態、付属施設はわからない。建物覆土は３層に分けることができる。

実測可能な遺物はなかったため、検出面からの深さや覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

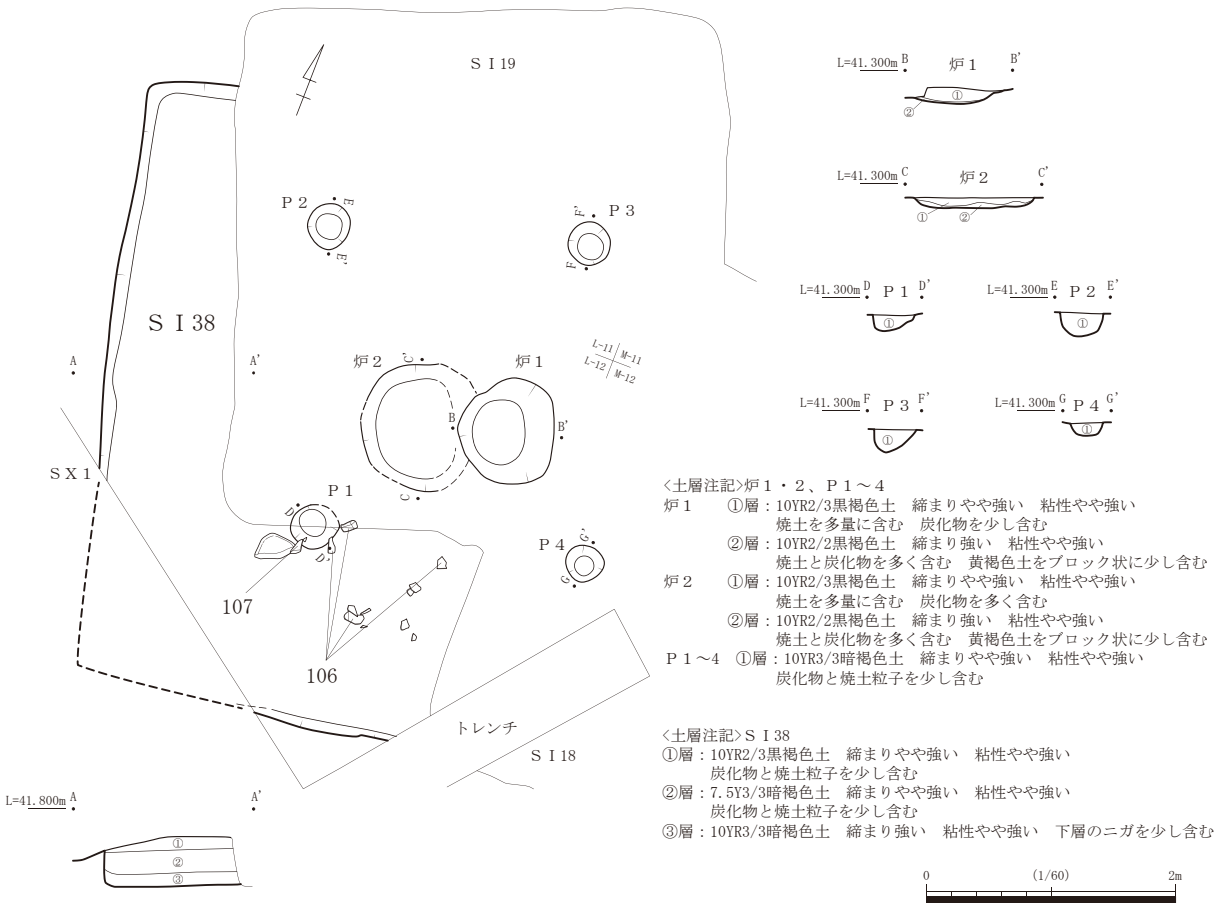
ＳＩ 38（第 41 図）

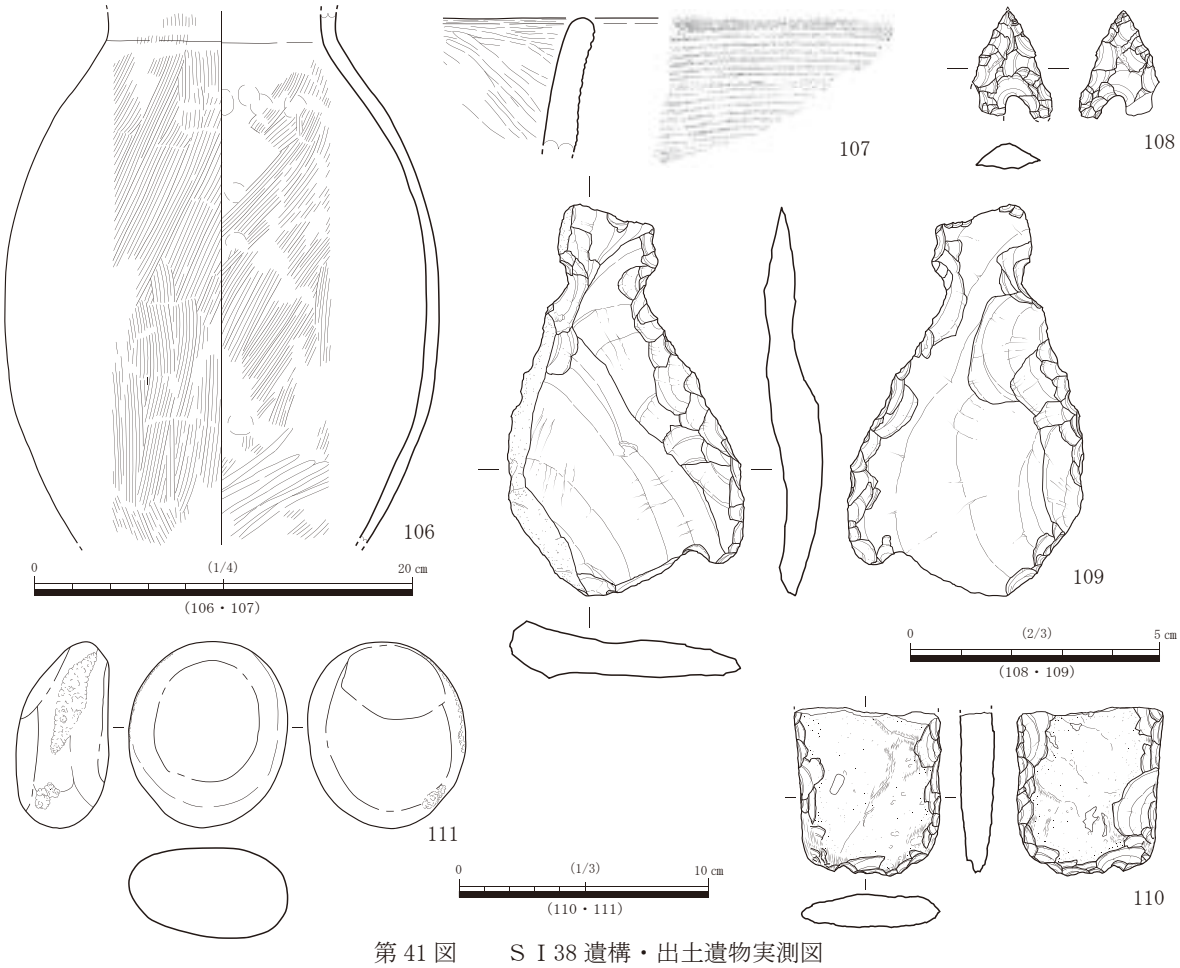
ＳＩ 38 はＬ 11・12、Ｍ 11・12 に位置する。建物の大部分がＳＸ１、ＳＤ４、試掘トレンチ、ＳＩ２・７・18・19 と重複しているため、非常に残りが悪い。重複が激しいが、先後関係はＳＩ 38 →ＳＩ 18・19 →ＳＩ７→ＳＩ２→ＳＤ４→ＳＸ１と捉えている。遺構の規模は柱穴と炉跡の位置から推定して長軸約 5.2 m、短軸約 5.0 m、検出面からの深さ 0.40 mを測り、平面形態は隅丸方形と推定される。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは約 11 ～ 19㎝を測る。炉跡は２基検出した。炉２ののち炉１が構築されている。残存していた範囲ではベッド状遺構は見つけられなかった。

出土遺物は覆土中層から下層にかけて出土している。106 は壷である。頸部から胴部下半が残存している。外面にハケ目と横ナデ、内面にハケ目と横ナデが施される。一部ミガキらしきものも見られる。107 は縄文時代早期貝殻条痕文系土器の深鉢の口縁部破片である。混入と思われる。108 は黒曜石製の打製石鏃、109 は安山岩製の石匙の未製品と思われる。110 は安山岩製の打製石斧である。111 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ５（第 42 図）

ＳＩ５はＲ９・10、Ｓ９・10 に位置する。建物東側に調査区外周トレンチ、試掘トレンチが入る。遺構の





第 41 図　　ＳＩ38 遺構・出土遺物実測図

規模は長軸約 4.0 m、短軸約 3.5 m、検出面からの深さ 0.21 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は１層とした。ＳＩ 10 上にそのまま収まる大きさのため、ＳＩ 10 の覆土の広がりの可能性も想定したが、土に締まりのある面で柱穴を検出したため、一つの竪穴建物跡と捉えた。建物に伴う遺構として柱穴を５基検出したが、他の重複関係が激しい竪穴建物と異なり規則性は認められない。深さは約 14 ～ 25㎝を測る。炉跡やベッド状遺構は検出されなかった。

112 は黒曜石製の石錐である。混入と思われる。

ＳＩ 10（第 42 図・第 43 図）

ＳＩ 10 はＲ９・10、Ｓ９・10 に位置する。建物東側に調査区外周トレンチ、試掘トレンチが入る。建物中央がＳＩ５と重複しているが、深さは浅い。遺構の規模は長軸約 5.54 m、短軸推定 4.92 m、検出面からの深さ 0.54 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。建物覆土は 13 層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を４基検出した。深さは約 65 ～ 90㎝を測り、他の竪穴建物よりもしっかりとした柱穴であり、主柱穴と考えられる。浅い皿状の炉跡を建物中央東寄りで検出している。ベッド状遺構は検出されなかった。

出土遺物は覆土上層から中層にかけて出土している。113・114 は甕の脚台部と思われる。113 は裾端部が外側に開く。外面に横ナデ、内面にハケ目と横ナデが施される。114 は緩やかに外反し広がる。内外面にハケ目と横ナデが施される。115 は黒曜石の石核、116 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ６（第 44 図）

ＳＩ６はＰ 12、Ｑ 11・12 に位置する。遺構の規模は長軸約 5.88 m、短軸約 3.46 m、検出面からの深さ 0.46 mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴を２基検出した。深さは約 62 ～ 68㎝を測り、主柱穴と考えられる。建物中央に炉跡を１基検出した。南東側にベッド状遺構を２箇所検出した。北西隅にもベッド状の高まりを確認したが、他のベッド状遺構に比べて極めて小規模なため、ベッド状遺構と呼ぶのはためらわれる。

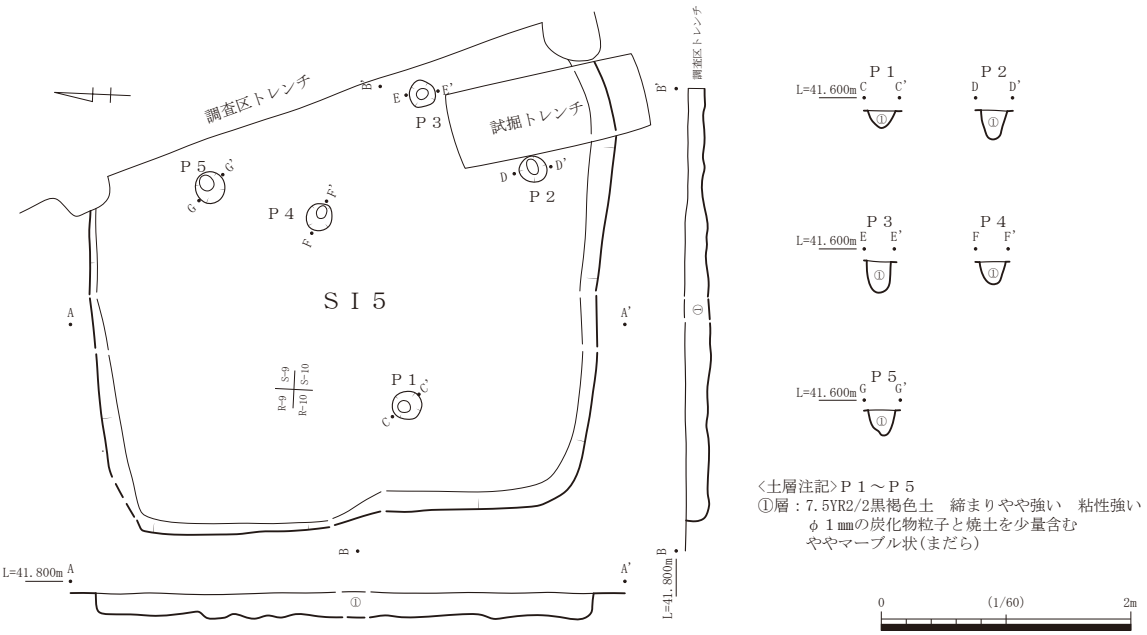
遺物は建物南西側の覆土中層から出土している。117 は甕の胴部下半から脚台部である。高さは裾部径の半分以下と低い。外面にハケ目と横ナデ、内面にナデが施される。118 は皿状のもので、ここでは鉢とした。内外面をハケ目調整し、口縁部に横ナデを施したのち、全面に細かいミガキが施されている。内面にはケズリも見られる。

ＳＩ 12（第 45 図～第 51 図）

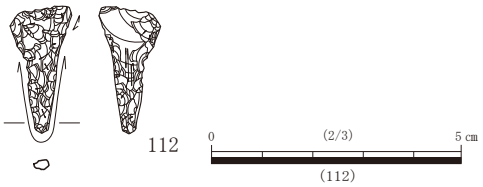
ＳＩ 12 はＩ 12、Ｊ 11・12 に位置する。調査５区側は開田事業により削平されているため残っていなかった。現存部分での遺構の規模は長軸約 4.12 m、短軸約 2.04 m、検出面からの深さ 0.54 mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形もしくは長方形を呈するものと推定される。建物覆土は５層に分けることができる。建物に伴う遺構として東側にベッド状遺構を１箇所検出した。柱穴や炉跡は確認できなかった。

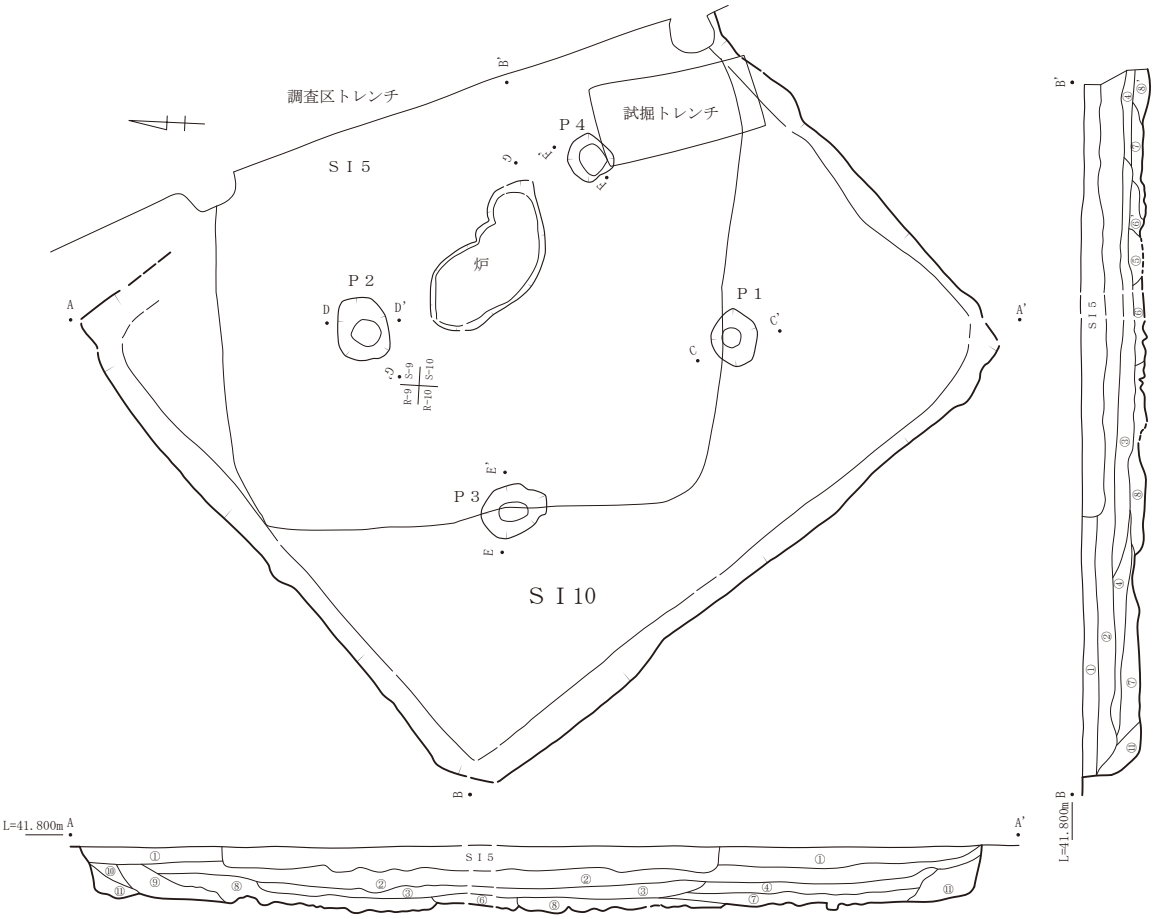
遺物は建物東側から西側に向かって流れ込んだように多量に出土している。平面分布と垂直分布を見ると床面やベッド状遺構上面よりやや上に分布していることから、建物使用が終わってから一定の時間を経たのち、ＳＩ 12 内に同時に埋没したものと考えられる。ＳＩ 12 付近は建物跡の重複が激しいうえ、繰り返しになるが調査５区側が削られているため、遺構の先後関係に誤認があるかもしれない。しかし、出土遺物はＳＩ 12 内でまとまっているうえ、重複遺構からの出土遺物と接合関係がほとんど認められないことから、本遺構に伴うものと判断している。なお、124 の甕が５m程離れて東側に位置するＳＩ 37 と接合関係にある。

また、自然科学分析の結果、ＳＩ 12 内から出土した炭化材は、ブナ科シイノキ属のツブラジイであった。



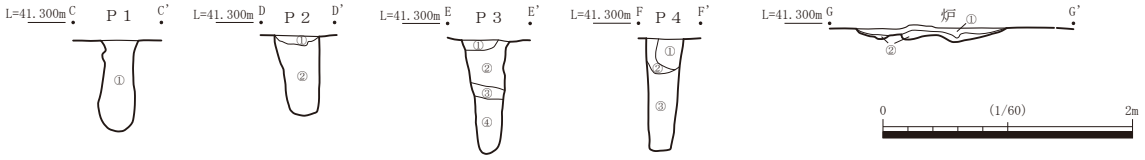
〈土層注記〉S I ５
①層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや弱い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む



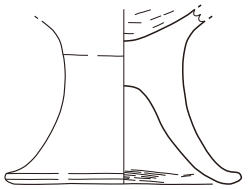


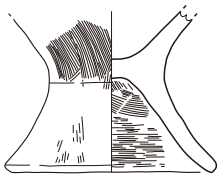
第 42 図　　S I ５・10 遺構・出土遺物実測図

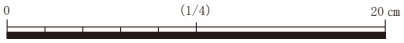
〈土層注記〉ＳＩ10
①層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
③層：7.5YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
④層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
⑤層：7.5YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
⑥層：7.5YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
⑥’層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
⑦層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む　１～1.5㎝の焼土粒子を含む
　　シロニガブロックを含む
⑧層：7.5YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む　１㎝の焼土を含む　シロニガブロックを含む
⑧’層：7.5YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
⑨層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む　２㎝大の炭化材を多く含む　１～1.5㎝の
　　焼土粒子を含む　シロニガブロックを含む
⑩層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
⑪層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む　２㎝大の炭化材を多く含む



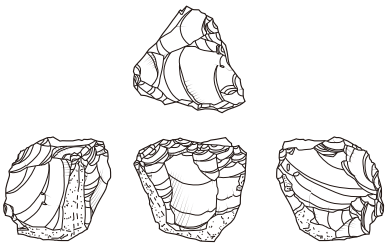
〈土層注記〉Ｐ１～Ｐ４、炉
Ｐ１　①層：10YR2/3黒褐色土　締まり弱い　粘性強い　φ１㎜の炭化物･焼土粒子を少量含む
Ｐ２　①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　白ニガブロック混　φ１㎜の焼土・炭化物を多く含む
　　②層：10YR2/2黒褐色土　締まり弱い　粘性強い　ボソボソ　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
Ｐ３　①層：7.5YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１㎜の焼土・炭化物を多量に含む
　　②～④層：Ｐ４の①～③層と同様。
Ｐ４　①層：10YR2/1黒色土　締まりやや弱い　粘性強い　白ニガブロックを含む
　　②層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性は強い　白ニガブロック混　φ１㎜の焼土・炭化物を多く含む
　　③層：10YR2/2黒褐色土　締まり弱い　粘性強い　ボソボソ　φ１㎜の焼土・炭化物を少量含む
炉　①層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性強い　20㎝大の炭化材を含む　φ１㎜の炭化物･焼土粒子を多量に含む
　　②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１㎜の炭化物･焼土粒子を多量に含む



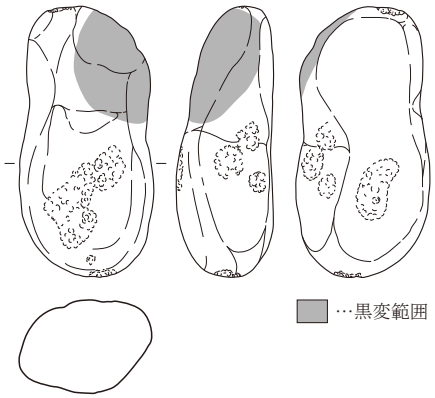




(113・114)

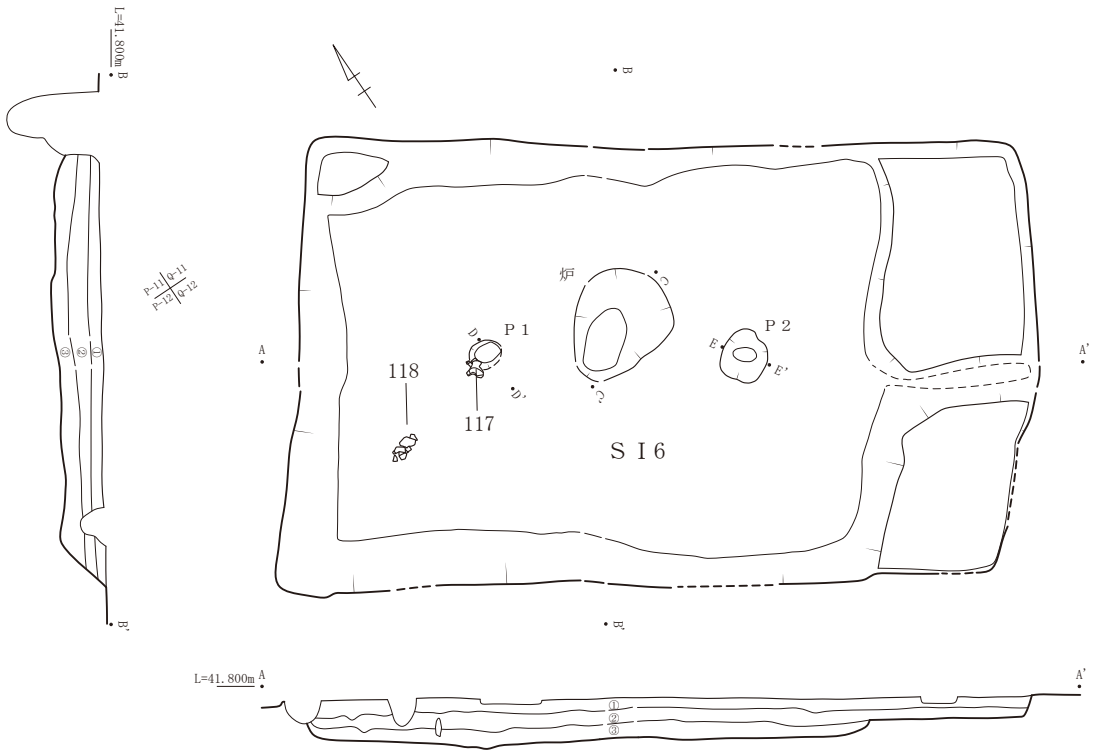


(115)

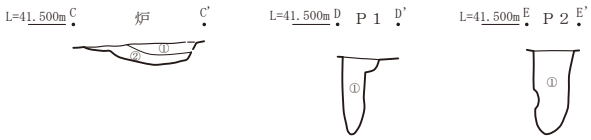


(116)

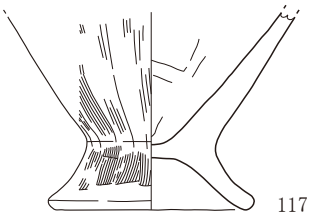
第 43 図　　ＳＩ10 遺構・出土遺物実測図

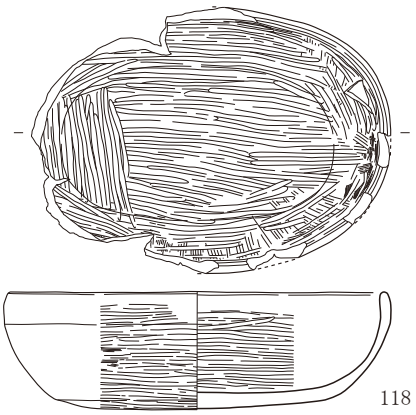


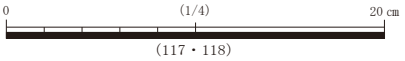
〈土層注記〉ＳＩ６
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子を少量含む　色調はややまだら
②層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子を微量含む　①層に比べて焼土粒子が少なくまだらでもない
　　きれいな土
③層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子を微量含む　②層に比べてやや硬い　削ったときに少しひっかかる



〈土層注記〉炉、Ｐ１・Ｐ２
炉　　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い
　　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む　φ１㎝大の
　　焼土粒子を少量含む
Ｐ１・Ｐ２　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い
　　φ１㎜の焼土粒子を微量含む



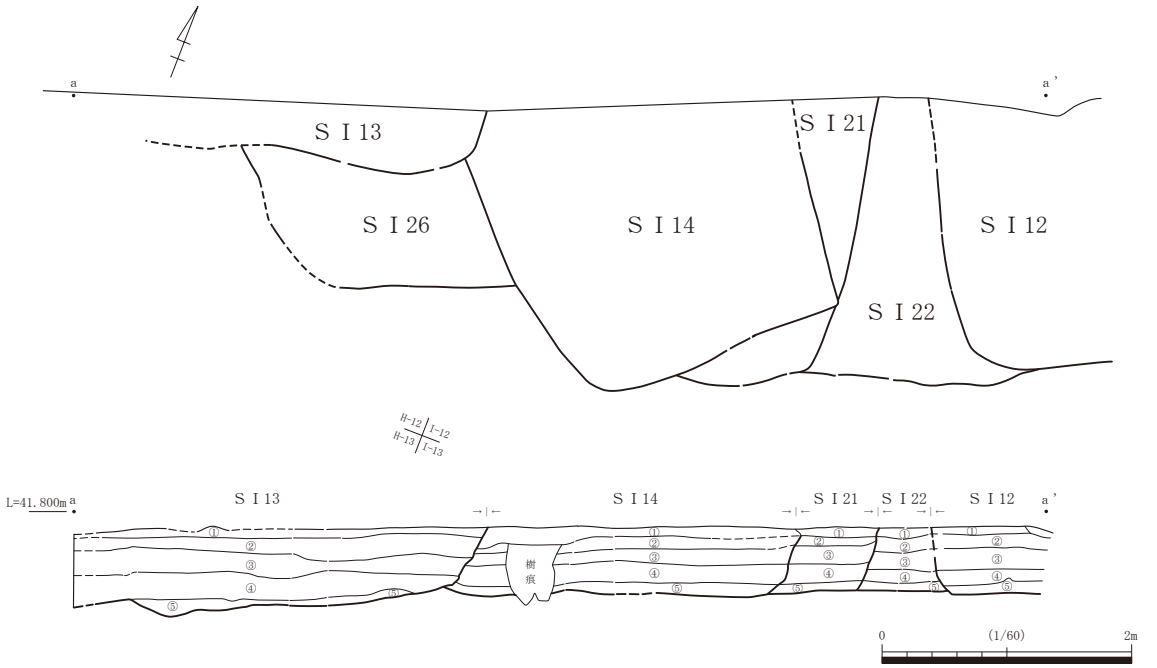




第 44 図　　ＳＩ６遺構・出土遺物実測図

比較的重硬で強度が高いことから建築部材として適材とされている。覆土上層からの出土であったため、ＳＩ12 というよりは、周辺の遺構で使用された建築部材の可能性がある。

119 ～ 126 は脚台付きの甕と思われる。119 ～ 121 は口縁部が緩やかに外反しながら開く。外面に縦もしくは斜め方向のハケ目、内面に斜めもしくは横方向のハケ目を施す。119・120 の口縁部外面に横ナデが丁寧に施されている。121 の口縁部内外面にハケ目が残る。122 は胴部外面の縦もしくは斜め方向のハケ目の下にタタキ目が残る。123 は頸部からくの字状に口縁部が開く。いずれも胴部中位に最大径をもつ。124・125 は小形の脚台付きの甕と思われる。口縁部は緩やかに外反しながら開く。いずれも胴部中位より上半に最大径をもつ。126 は甕の脚台部と思われる。高さは裾部径の半分以下であり、裾端部は丁寧に面取りされている。内外面にハケ目が施される。127 は甕である。口縁部は緩やかに外反しながら開く。胴部上半にハケ目が残る。胴部中位に最大径をもつ。128・129 は鉢もしくは甕と思われる。128 の口縁部は外側に大きく開く。口縁端部は丁寧に面取りされている。胴部最大径付近まで外面のハケ目が残る。129 は小形の甕と思われる。130 ～ 133 は脚台付きの鉢と思われる。131 は内面にハケ目が明瞭に残っている。133・134 は鉢の脚台部と思われるが、残りが悪く判然としない。135 は大形の鉢と思われる。頸部屈曲部にハケ目状の刻目突帯を有する。



<土層注記>ＳＩ12
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　炭化物少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土・炭化物少量含む
③層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土・炭化物少量含む
④層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土・炭化物含む
⑤層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土やや多く炭化物少量含む

<土層注記>ＳＩ13
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　炭化物・ローム粒少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物少量含む
③層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い　炭化物少量含む
④層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物多く含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ロームブロック炭化物ニガ土混ざる

<土層注記>ＳＩ14
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　炭化物少量含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物少量含む
③層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物・焼土粒やや多く含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物・焼土粒やや多く含む

<土層注記>ＳＩ21
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
③層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む

<土層注記>ＳＩ22
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　炭化物少量含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒少量含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物やや多く含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物・ニガブロックやや多く含む

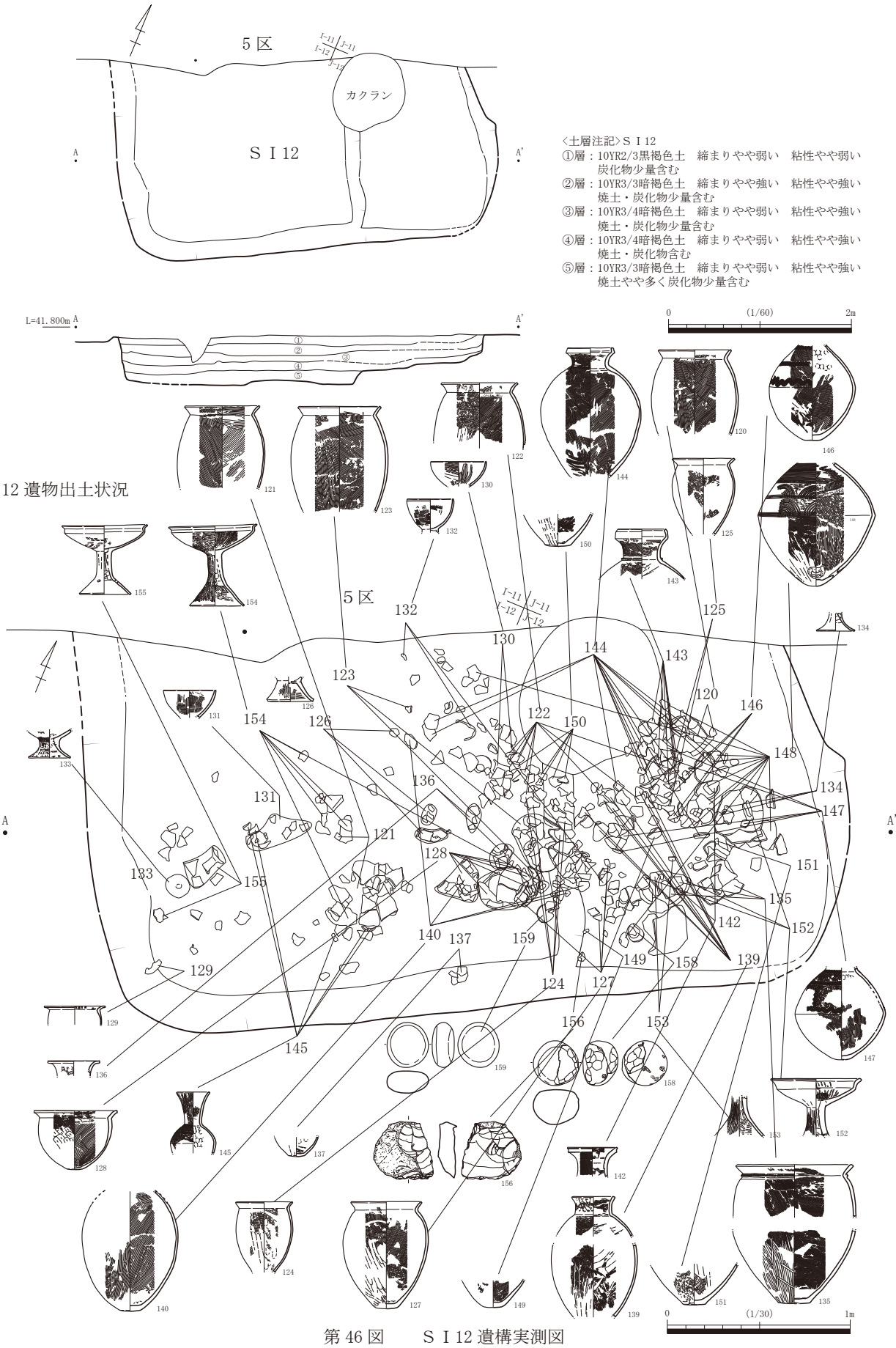
第 45 図　　ＳＩ12 ～ 14・21・22・26 相関図

口径よりも胴部最大径の方が大きく、底部は平底になる。136 ～ 151 は壷である。136 は壷の口縁部である。口縁端部でやや強く開く。138 は 136 と異なり頸部から緩やかに外反し口縁部が開く。いずれも口縁端部は丁寧に面取りされている。139 は肩部から頸部が垂直に立ち上がり、やや外反し開く。140 は胴部上半から底部まで残存していた。141・142 は外反する口縁部は肥厚して断面が三角形状をなす。142 はハケ目が明瞭に残る。143・144 は複合口縁をもつ壷である。143 の一次口縁は外反しながら開き、二次口縁が垂直に立ち上がり最後に緩やかに内傾する。頸部屈曲部に刻目突帯を有する。144 の一次口縁は外反しながら開き、短い二次口縁が緩やかに内傾する。胴部上半には斜めのハケ目ののち、肩部にハケ状工具により波状文らしき文様が施文されている。145 は長頸壷である。頸部外面には丁寧に縦ミガキが施されている。頸部と胴部の境と胴部最大径付近に平行線が引かれたのち、ハケ状工具により波状文らしき文様が４段施文されている。146 は外面に斜めのハケ目が施されたのち、頸部と胴部の境に１段目、肩部に２段目、胴部最大径付近に３段目の波状文らしき文様がハケ状工具により施文されている。147 は頸部と胴部の境に１段目、肩部に２段目、胴部最大径付近に３段目の波状文らしき文様がハケ状工具により施文されている。２段目と３段目の間に縦方向の波状文らしき文様が施文されている。文様の切り合いから順序は３段目横方向、縦方向、２段目横方向である。148 は底部から胴部上半まで残存していた。平行区画線を胴部上位から頸部立ち上がりまで 21 条施し、平行線の一部に短い縦刻みを２段施す。肩部に３条の平行区画線、胴部最大径の４条の平行区画線を施す。平行区画線の間に上向きの重弧文を描き、その重弧文に沿うように縦刻みを施している。胴部下位に打ち欠いて開けたような孔がある。149 ～ 151 は壷の胴部下半から底部と思われる。152 ～ 155 は高坏である。152 は皿状の坏部から口縁がほぼ垂直に立ち上がり、さらに短い口唇部が緩やかに外反し開く。脚部に円孔が１箇所残存していた。全体に作りが厚い。153 は脚部で縦のミガキが丁寧に施されている。154 と 155 は口縁が内傾して立ち上がり、更に短い口唇部が緩やかに外反し開く。脚裾部はハの字に開く。155 は脚部に円孔が３箇所穿たれている。156 はチャート製のスクレイパーである。157 は黒曜石製の石核。158・159 は磨石類である。158 には敲打痕が認められる。

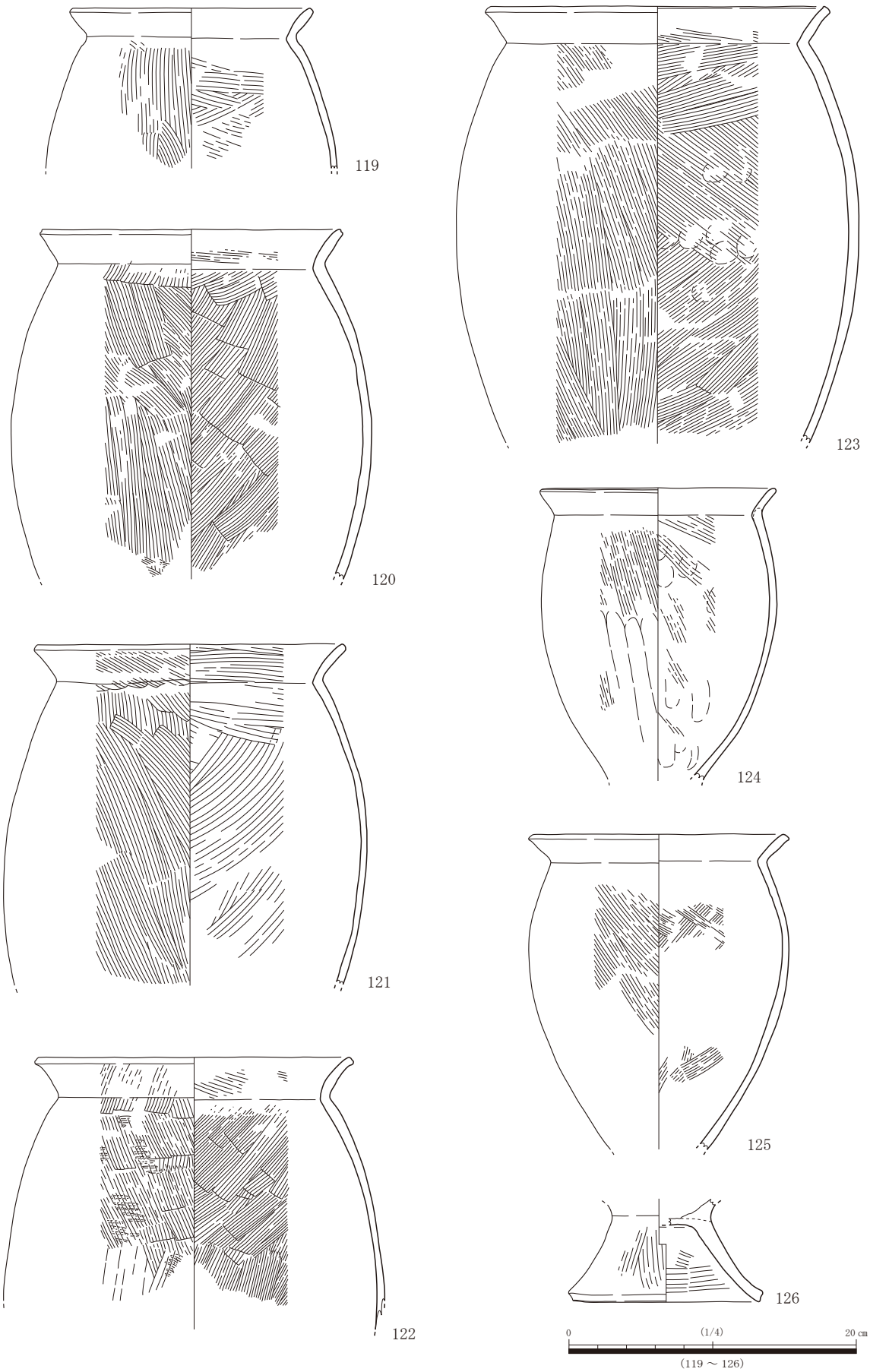
ＳＩ 13（ＳＩ 70）（第 52 図・第 53 図）

ＳＩ 13（ＳＩ 70）はＧ 11・12、Ｈ 11・12 に位置する。調査４区側を平成 20 年度にＳＩ 13 として、調査５区側を平成 21 年度にＳＩ 70 として調査している。同一の遺構であるため、ＳＩ 13 として報告する。前述のとおり５区側が開田事業により削平されているため、残存状況が非常に悪い。遺構の規模は長軸約 4.76 m、検出面からの深さ 0.72 mを測る。平面形態は隅丸のいびつな平行四辺形を呈するが、南西隅側にベッド状遺構があった場合は、長方形もしくは方形プランの可能性があり、建物西側が調査区外のため判然としない。建物覆土は５層に分けることができる。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡、ベッド状遺構は検出できなかった。

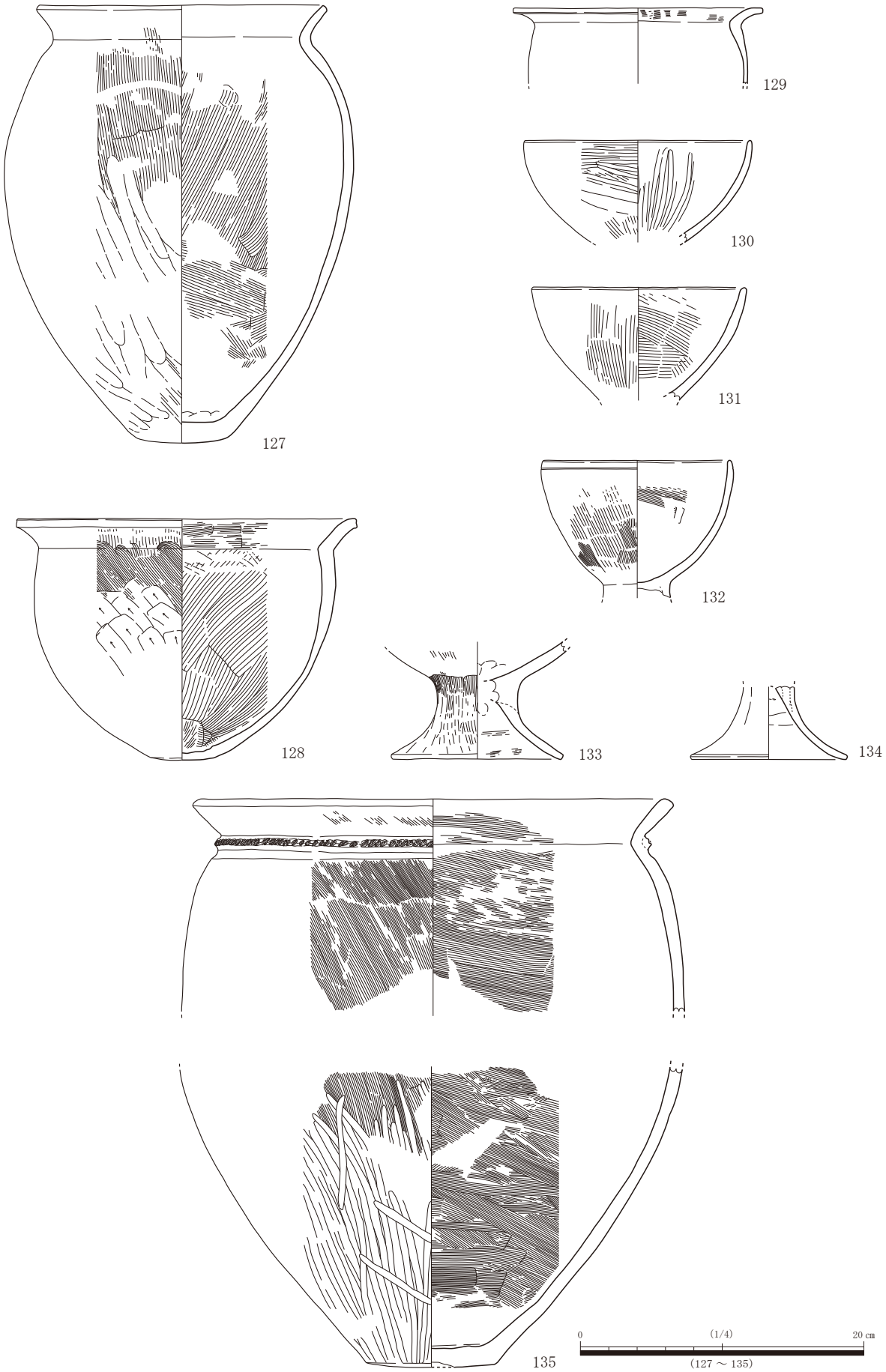
遺物は覆土中層から下層にかけて出土している。163 の壷が１個体まとまって分布する以外は、建物中央から東側にかけて点在している。160 は甕である。口縁部がやや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丁寧に面取りされている。外面はタタキのちハケ目、内面はハケ目と横ナデが施されている。161 は甕の脚台部である。高さは裾部径の半分以上で、裾部にかけて直線的に広がる。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。162 は台付鉢であり、胴部中位から脚台部上位まで残存していた。胴部に２条の突帯がめぐる。上位の突帯には赤彩が施されている。内外面ともにハケ目とナデが施されている。163 は壷である。外反する口縁部は肥厚して断面が三角形状をなす。胴部上半には縦のハケ目ののち、ハケ状工具により波状文らしき文様が施文されている。内外面ともにハケ目とナデが施されている。164 は黒曜石製の石鏃、165 は安山岩製の円盤形石器である。



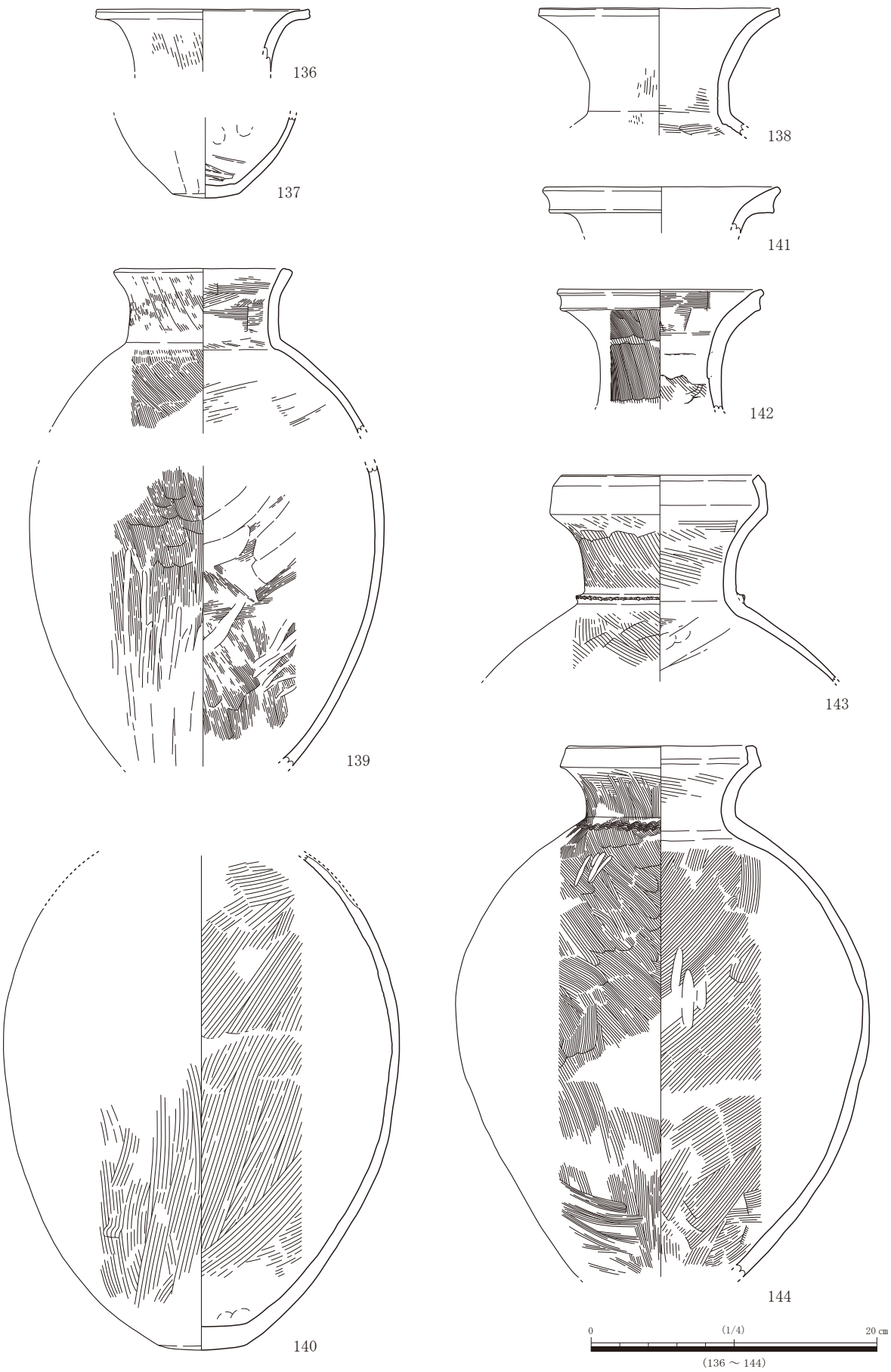
第46図　　ＳＩ12遺構実測図



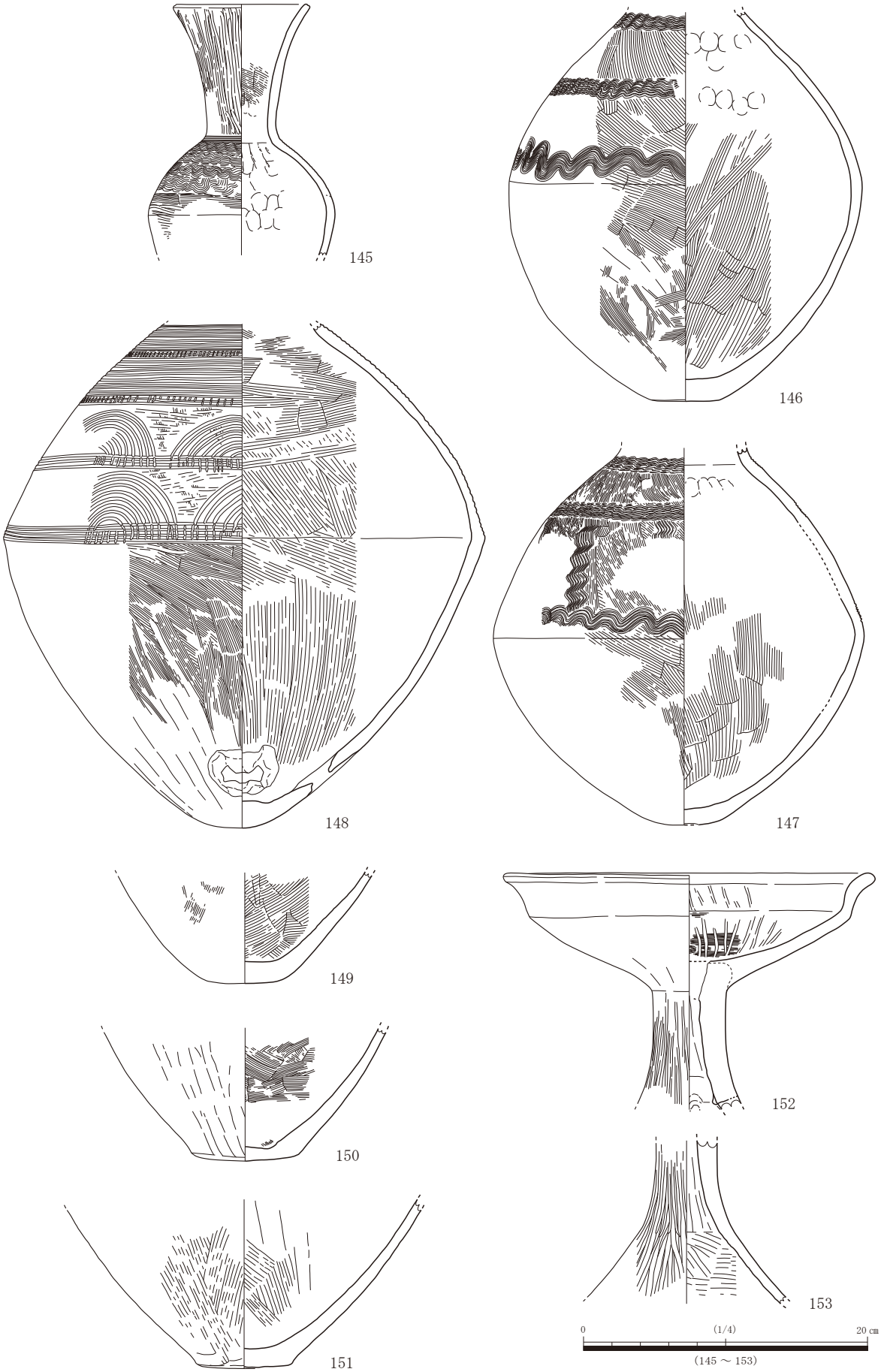
第 47 図　　ＳＩ12 出土遺物実測図１



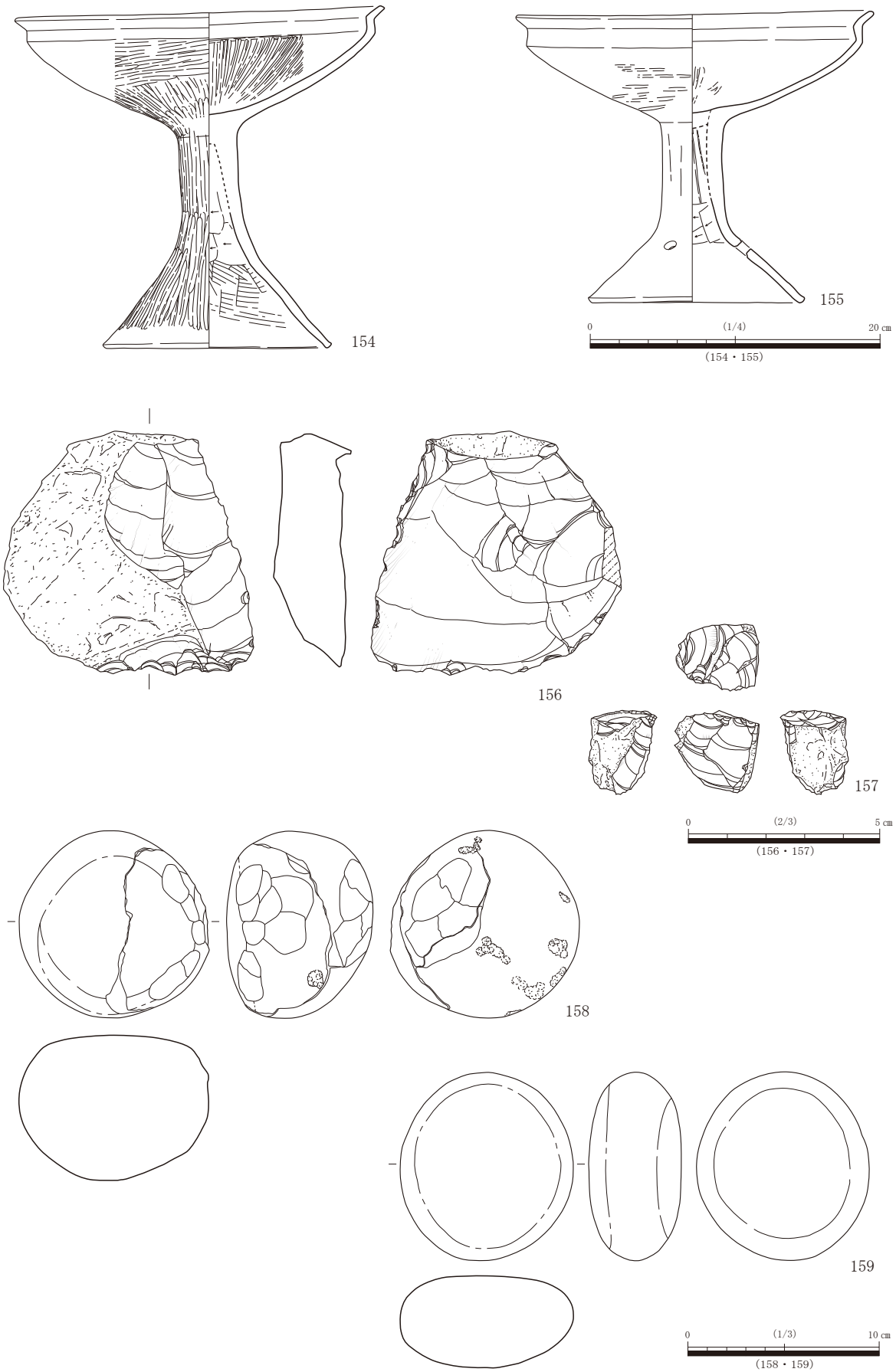
第 48 図　　ＳＩ12 出土遺物実測図２



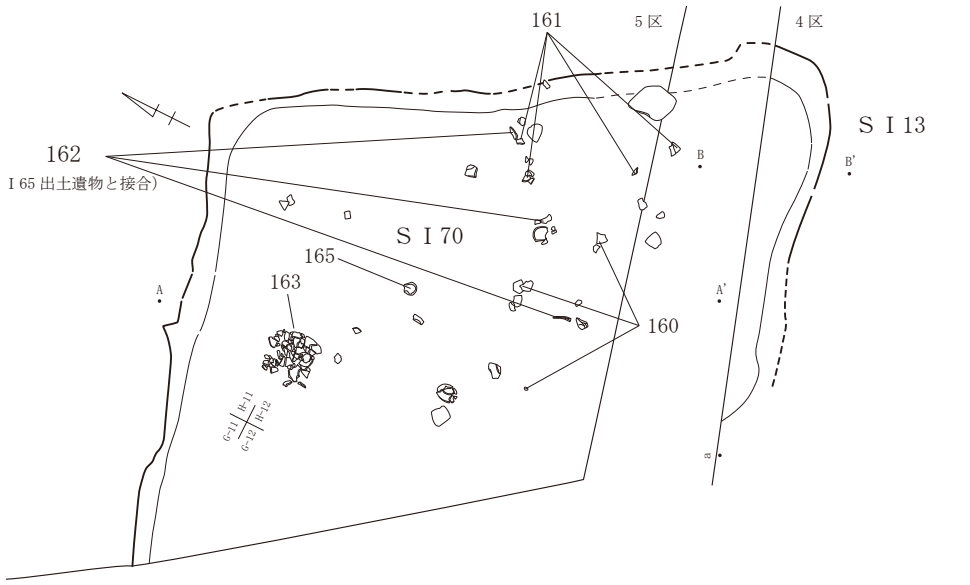
第 49 図　　ＳＩ12 出土遺物実測図３

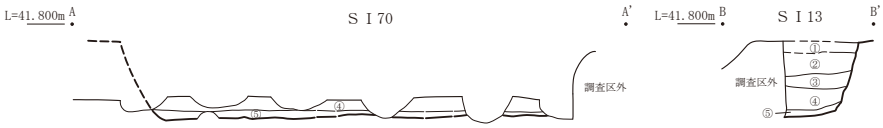


第 50 図　　ＳＩ12 出土遺物実測図４



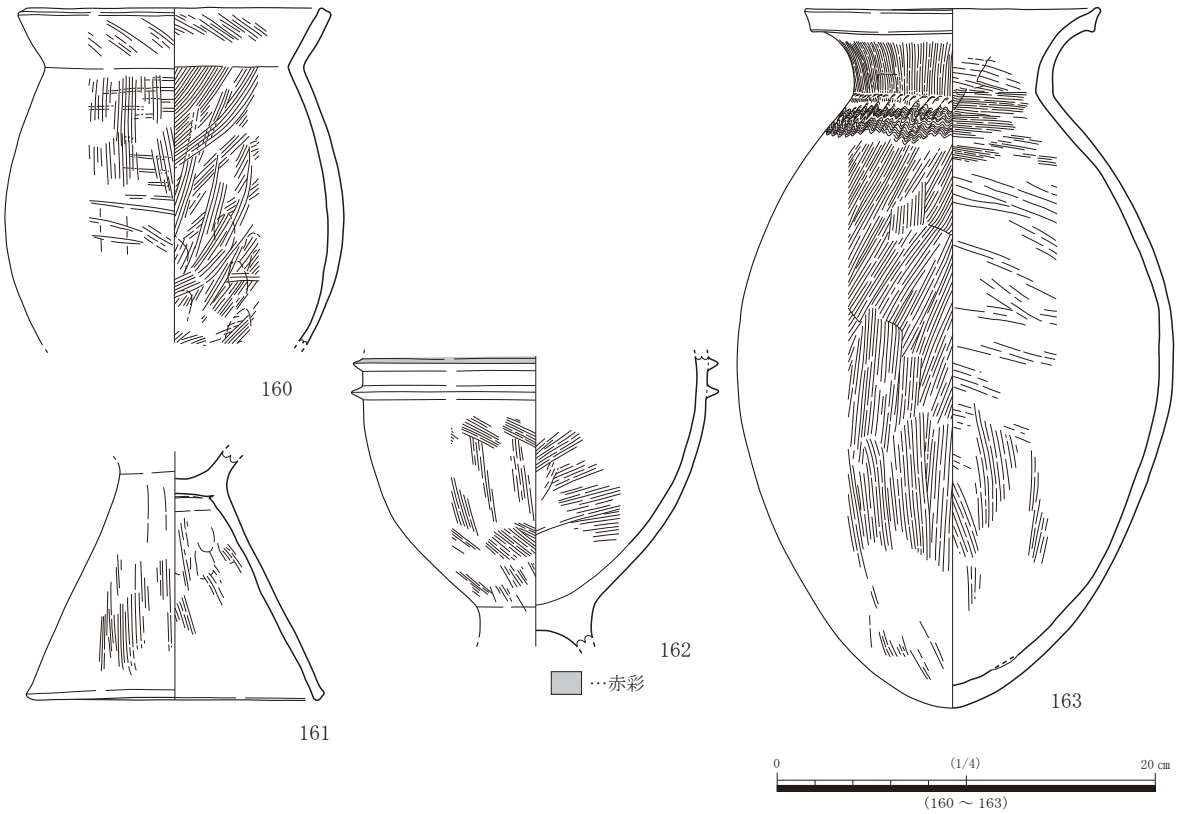
第 51 図　　ＳＩ12 出土遺物実測図５





〈土層注記〉ＳＩ13・70
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　炭化物・ローム粒少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物少量含む
③層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　炭化物少量含む
④層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物多く含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ロームブロック炭化物ニガ土混ざる

0　(1/60)　2m



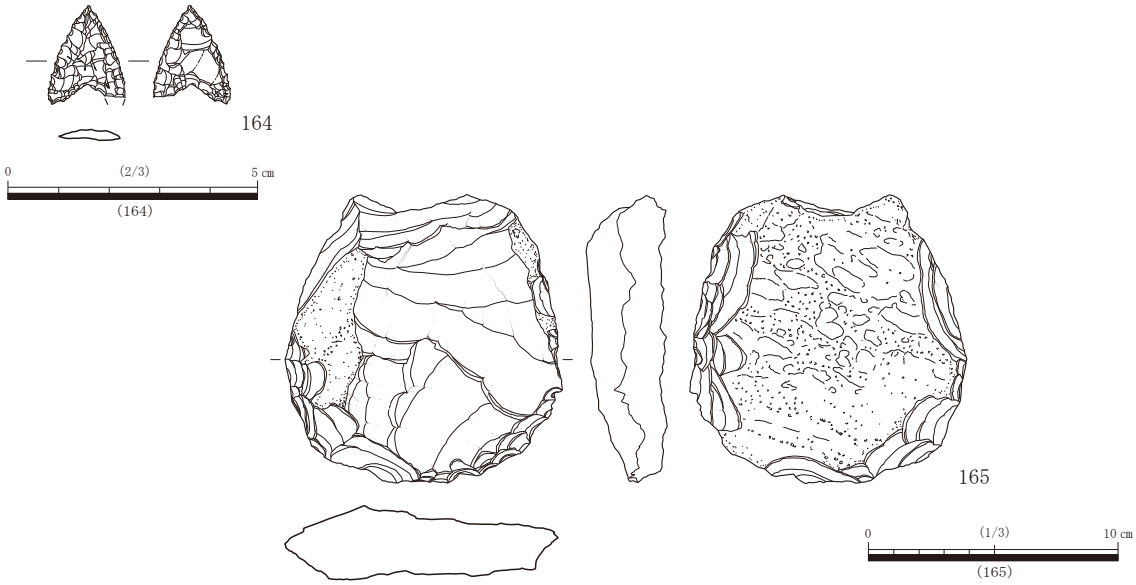
第 52 図　　ＳＩ13（70）遺構・出土遺物実測図１

ＳＩ 14、ＳＩ 21（第 54 図）

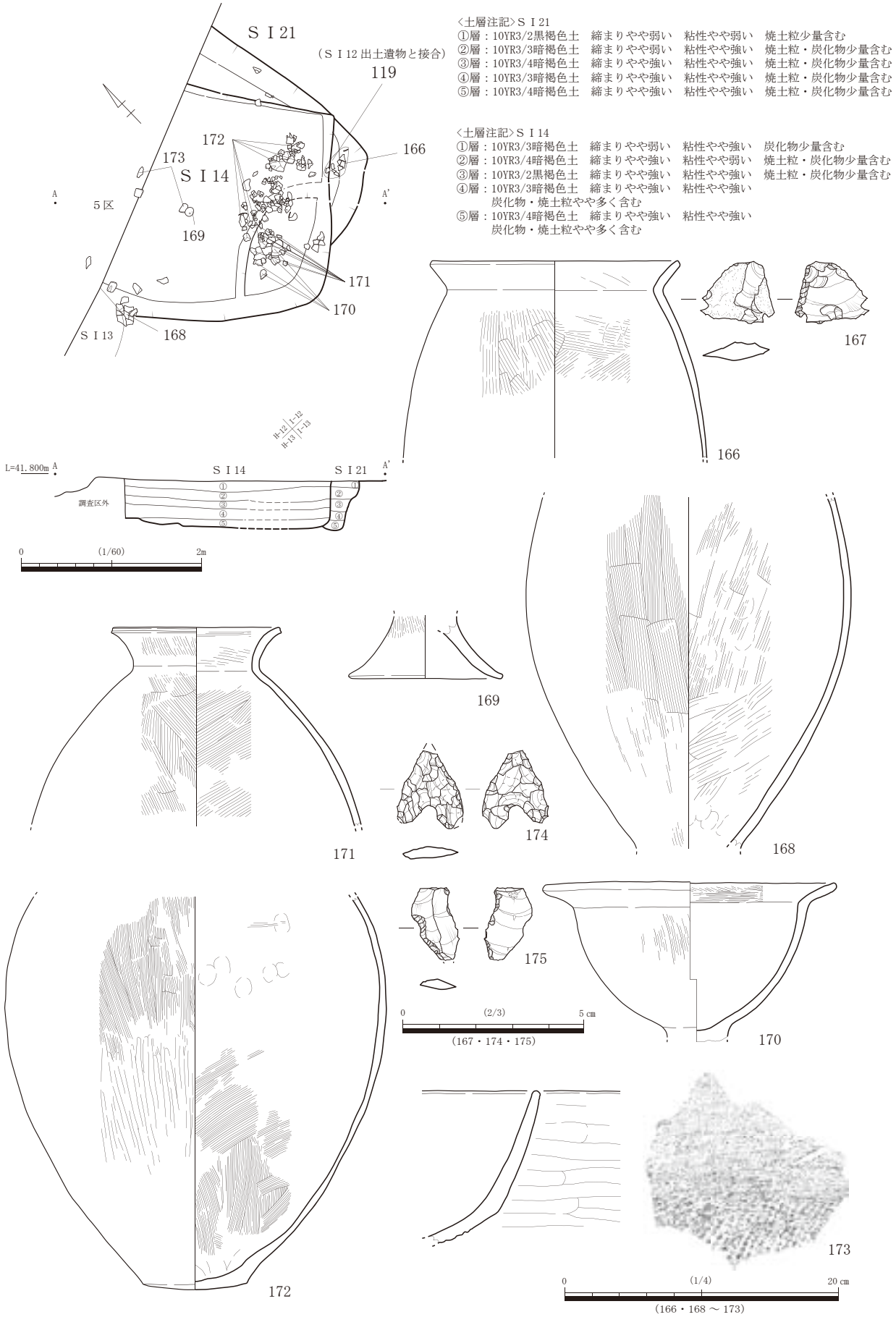
ＳＩ 14、ＳＩ 21 はＨ 12、Ｉ 11 に位置する。建物北側の調査５区側は開田事業により削平されているため残っていなかった。ＳＩ 13（ＳＩ 70）・ＳＩ 21 と重複している。先後関係はＳＩ 13（ＳＩ 70）→ＳＩ 14 →ＳＩ 21 であるが、遺物の出土状況や接合関係からみると、遺構区分の誤認があるかもしれない。ＳＩ 14 の現存部分での遺構規模は長軸約 2.58 m、短軸約 2.16 m、検出面からの深さ 0.56 mを測り、平面形態は隅丸方形もしくは長方形を呈するものと推定される。建物覆土は５層に分けることができる。建物に伴う遺構として南側にベッド状遺構を１箇所検出した。柱穴や炉跡は確認できなかった。

一方、ＳＩ 21 の現存部分での遺構規模は大部分がＳＩ 14 と開田事業による削平により破壊されているためわからない。建物覆土は５層に分けることができる。

遺物は覆土上層から中層にかけて、ベッド状遺構周辺にまとまって出土している。床面やベッド状遺構上面より上であることから、建物使用が終わってから一定の時間を経たのち、ＳＩ 14 内に埋没した可能性がある。また、繰り返しになるが、極めて近接した遺構間で接合関係が認められることから、遺物の所属遺構に誤認があるかもしれない。しかし、遺物の平面分布、垂直分布ともまとまっていることから、同時期に埋没したものと考えられる。166・167 はＳＩ 21 出土。166 は甕で口縁部から胴部上半の一部が残存していた。口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。167 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。168 ～ 175 はＳＩ 14 出土。168 は甕で胴部上半から脚台部との接合部まで残存していた。内外面ともにハケ目とナデが施されている。169 は甕の脚台部と思われる。裾部は外側に開く。外面はハケ目と横ナデ、内面はナデが施される。170 は台付鉢もしくは高坏と思われる。深い体部に、屈曲し大きく開く口縁部を有する。器面はかなり摩滅しているが、外面にハケ目と横ナデ、内面にハケ目とナデが施されている。171 は壷で短く外反する口縁部を有する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。172 は壷と思われる。胴部上半から底部まで残存していた。外面にハケ目、ナデとミガキ、内面にハケ目が施される。173 は縄文時代晩期前半以降の浅鉢と思われる。内面は横方向のナデが施されている。口縁部外面は横方向のケズリが施されており、胴部外面には型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕が見られる。遺構外出土遺物として報告している 332 と同一個体と思われる。混入と思われる。174 は安山岩製の石鏃、175 は黒曜石製の使用痕のある剥片である。



第 53 図　　ＳＩ 13（70）出土遺物実測図２



〈土層注記〉ＳＩ21
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
③層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む

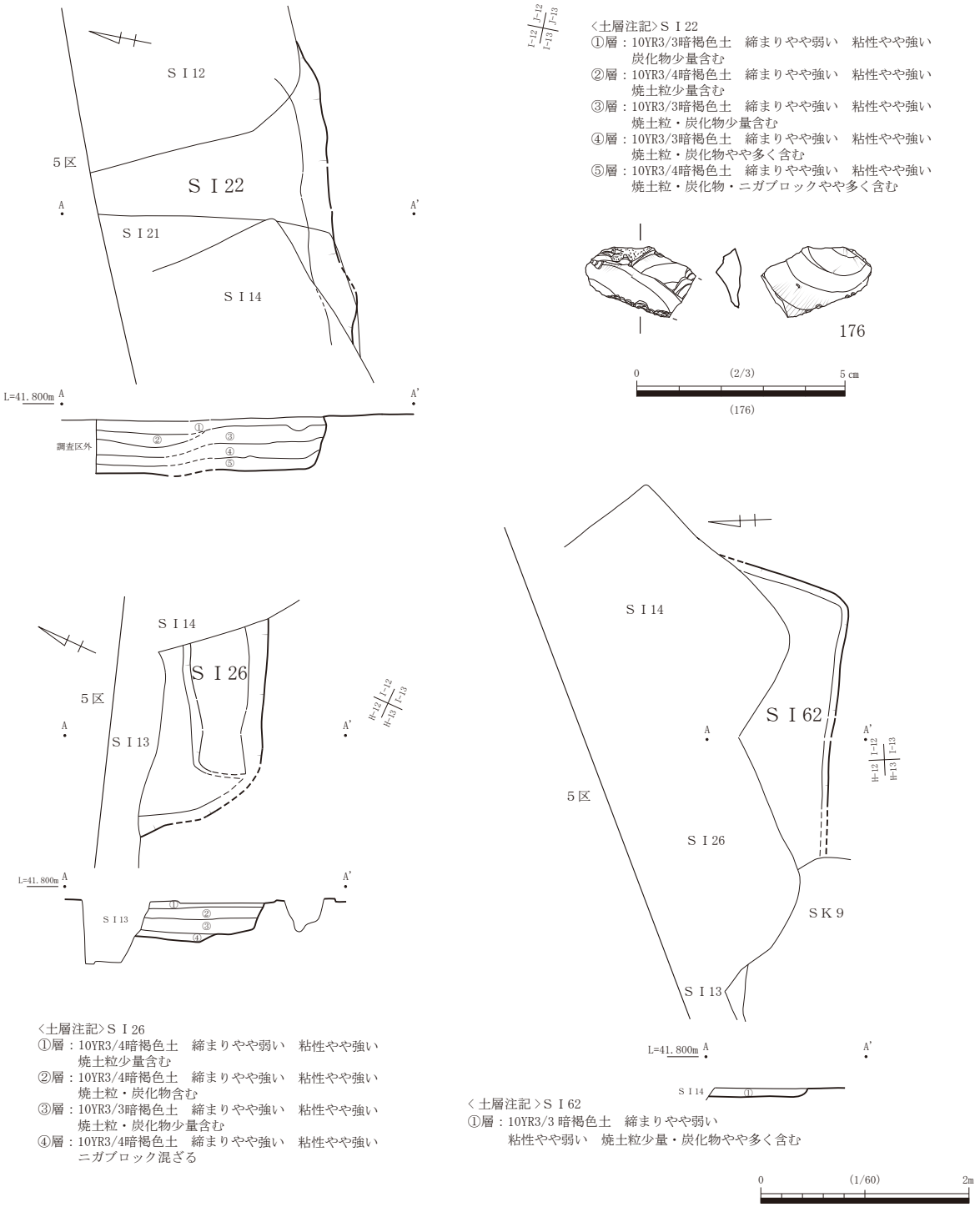
〈土層注記〉ＳＩ14
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　炭化物少量含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物少量含む
③層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒・炭化物少量含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
炭化物・焼土粒やや多く含む
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
炭化物・焼土粒やや多く含む

第 54 図　　ＳＩ14・21 遺構・出土遺物実測図

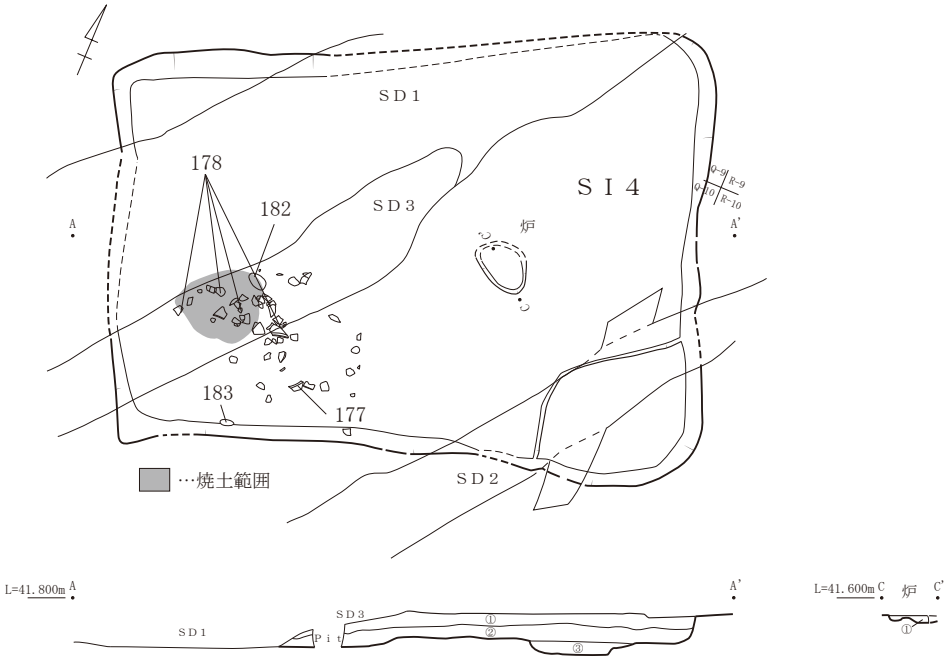
ＳＩ 22（第 55 図）

ＳＩ 22 はＩ 12 に位置する。建物の大部分がＳＩ 12、ＳＩ 21、ＳＩ 14 により切られており、北側の調査５区側は開田事業により削平されているためほとんど残っていなかった。先後関係はＳＩ 22 →ＳＩ 12・ＳＩ 21 →ＳＩ 14 である。検出面からの深さ 0.54 mを測るが、残存状況が悪いため、建物規模、平面形態、付属施設はわからない。建物覆土は５層に分けることができた。

遺物は 176 の黒曜石製の使用痕のある剥片が出土しているが、重複関係、検出面からの深さ、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

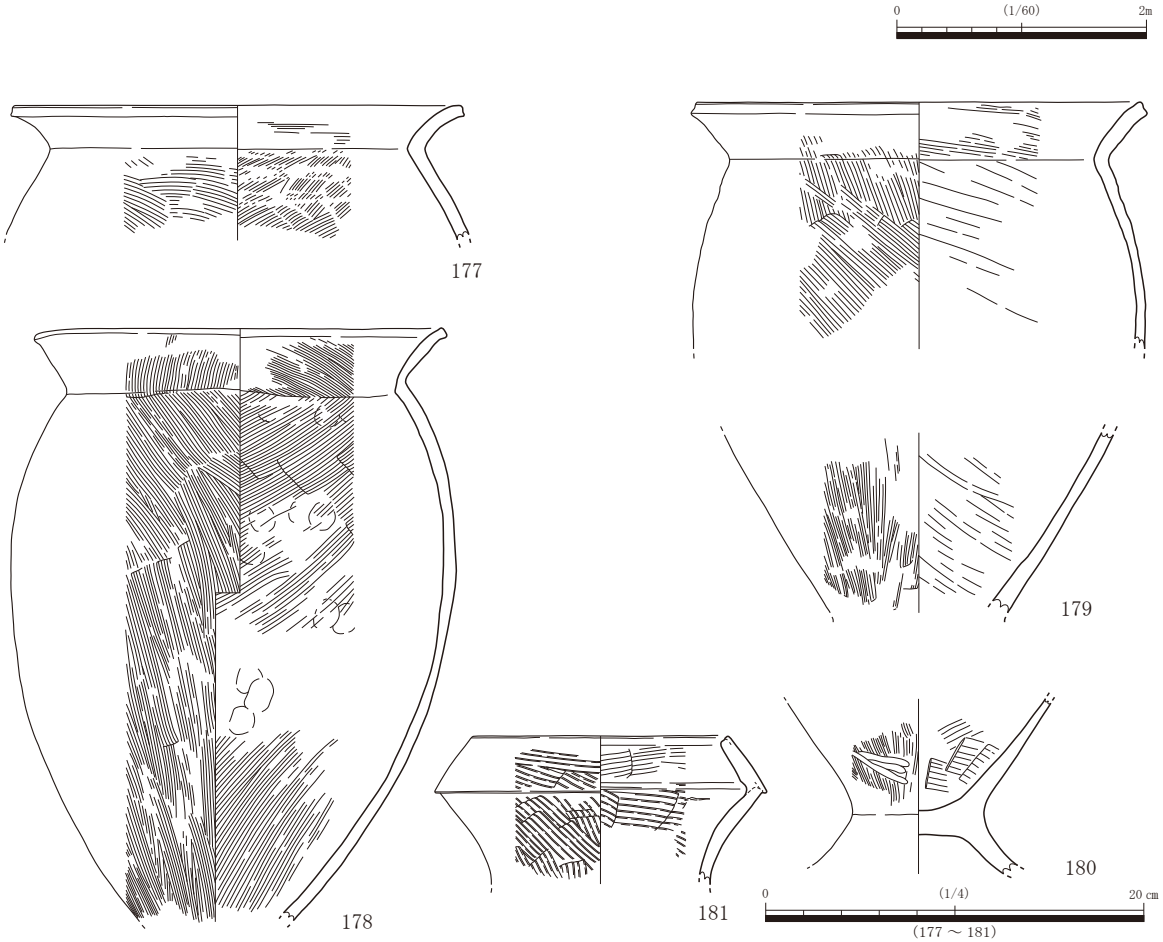


第 55 図　　ＳＩ 22・26・62 遺構・出土遺物実測図



〈土層注記〉ＳＩ４
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む　色調はややマーブル状
②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む　①層に比べてやや粘っこい
③層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子・炭化物を多量に含む

〈土層注記〉炉
①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ１㎜の焼土粒子を少量含む



第 56 図　　ＳＩ４遺構・出土遺物実測図１

ＳＩ 26（第 55 図）

ＳＩ 26 はＨ 12 に位置する。建物の大部分がＳＩ 13（ＳＩ 70）、ＳＩ 14 により切られており、北側の調査５区側は開田事業により削平されているためほとんど残っていなかった。先後関係はＳＩ 26 →ＳＩ 14 →ＳＩ 13（ＳＩ 70）である。検出面からの深さ 0.38 mを測るが、残存状況が悪いため、他の建物規模や平面形態はわからない。建物南側でベッド状遺構を確認した。建物覆土は４層に分けることができた。

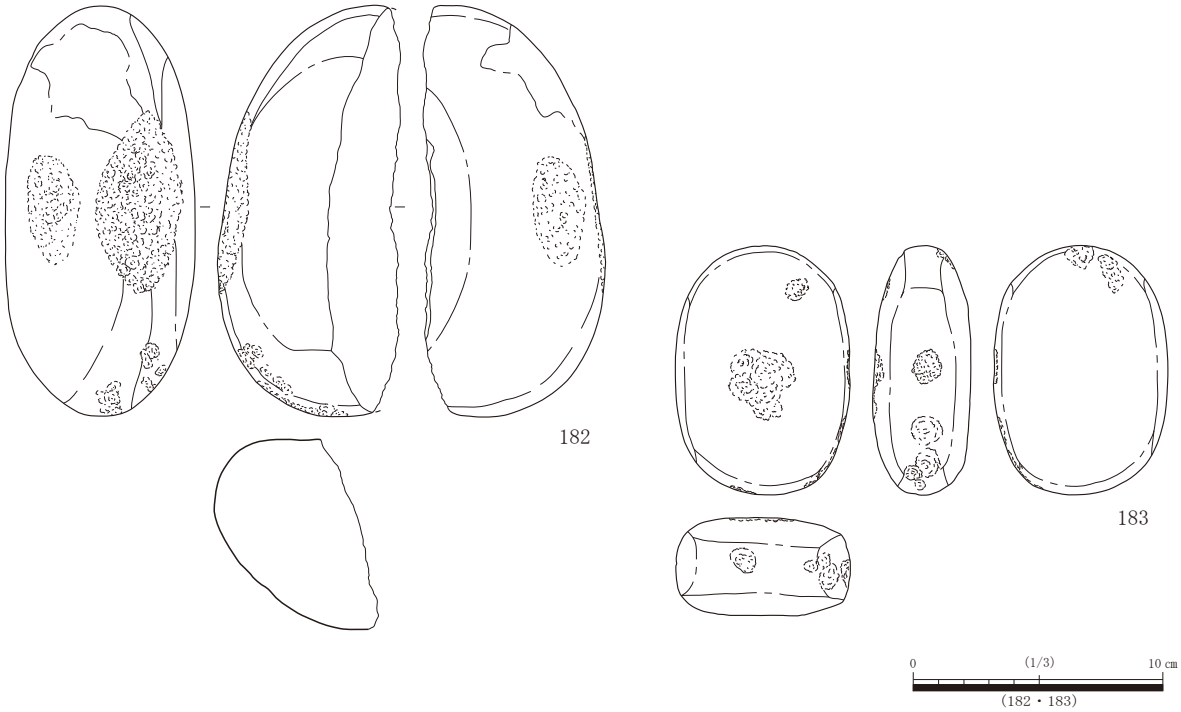
実測可能な遺物がなかったため、重複関係、検出面からの深さ、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

ＳＩ 62（第 55 図）

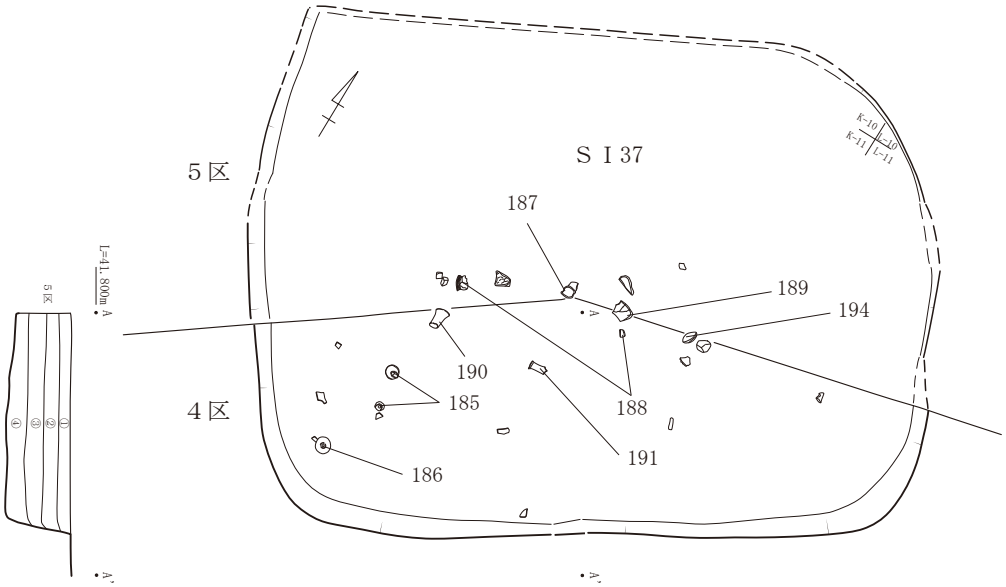
ＳＩ 62 はＨ 12、Ｉ 12 に位置する。建物の大部分がＳＫ９、ＳＩ 26、ＳＩ 13（ＳＩ 70）、ＳＩ 14 により切られており、北側の調査５区側は開田事業により削平されているためほとんど残っていない。先後関係はＳＫ９→ＳＩ 26 →ＳＩ 14 →ＳＩ 13（ＳＩ 70）である。検出面からの深さ 0.09 mを測るが、残存状況が悪いため、他の建物規模や平面形態はわからない。建物覆土は１層とした。実測可能な遺物がなかったので、残存範囲での平面形態、切り合い関係、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。当該期の他の竪穴建物よりも浅いため、竪穴建物のベッド状遺構の可能性がある。

ＳＩ４（第 56 図・第 57 図）

ＳＩ４はＱ９・10、Ｒ 10 に位置する。建物南側約 1/2 以上がＳＤ１・２・３と重複しているため、残りが悪い。重複が激しいが、先後関係はＳＩ４→ＳＤ１→ＳＤ２・３と考えている。遺構の規模は長軸約 4.68 m、短軸約 3.12 m、検出面からの深さ 0.33 mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は３層に分けることができる。建物に伴う遺構として中央東寄りで炉跡、南東隅でベッド状遺構を確認したが、柱穴は検出できなかった。また、建物西側で焼土の広がりを確認したが、掘り込みはなく焼土が床面に乗っている状況であったため、炉とは捉えなかった。

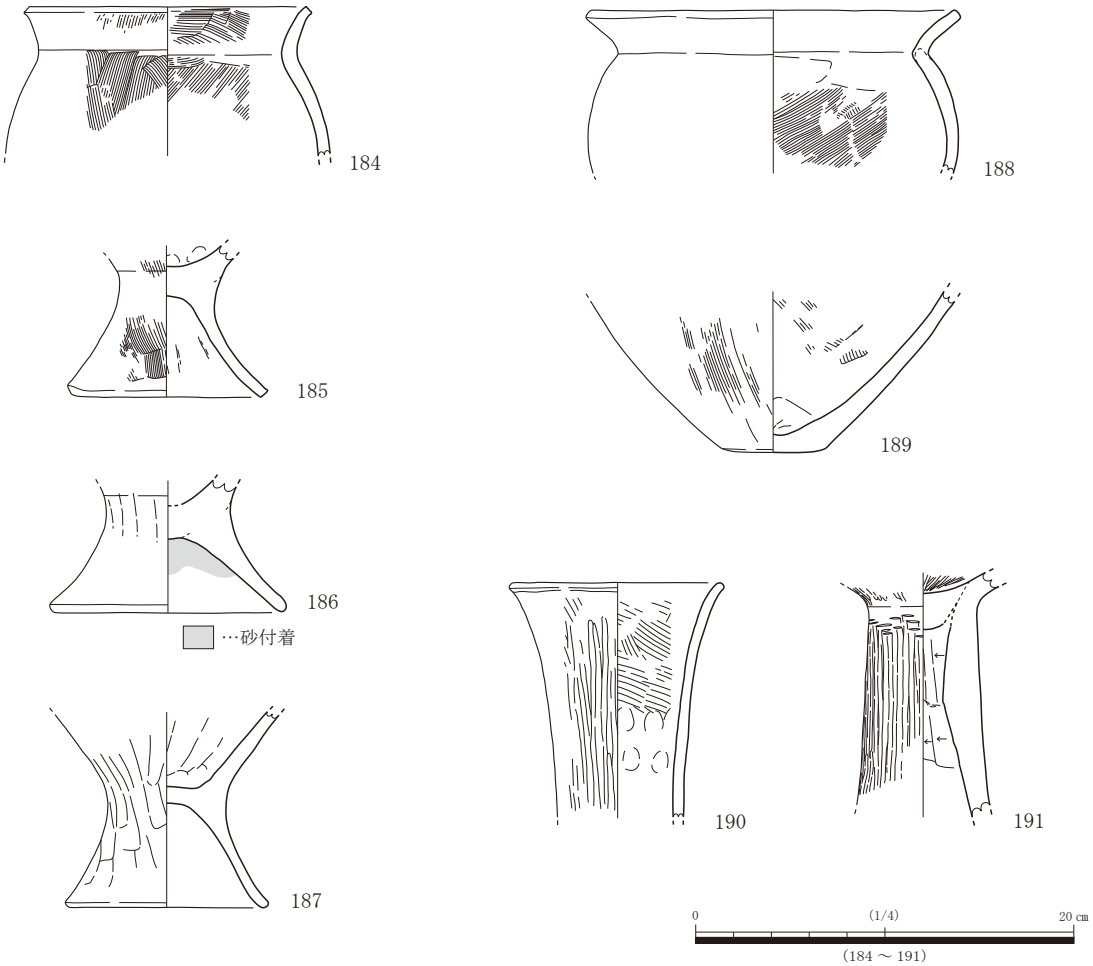


第 57 図　　ＳＩ４出土遺物実測図２



〈土層注記〉ＳＩ37
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒子を少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒子を全体にまばらに含む
③層：10YR3/3暗褐色土　②層よりやや締まりが強い　炭化物が全体的にポツポツと多くみられる
④層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒子がかたまって多く含む　ニガを少し含む

0　(1/60)　2m



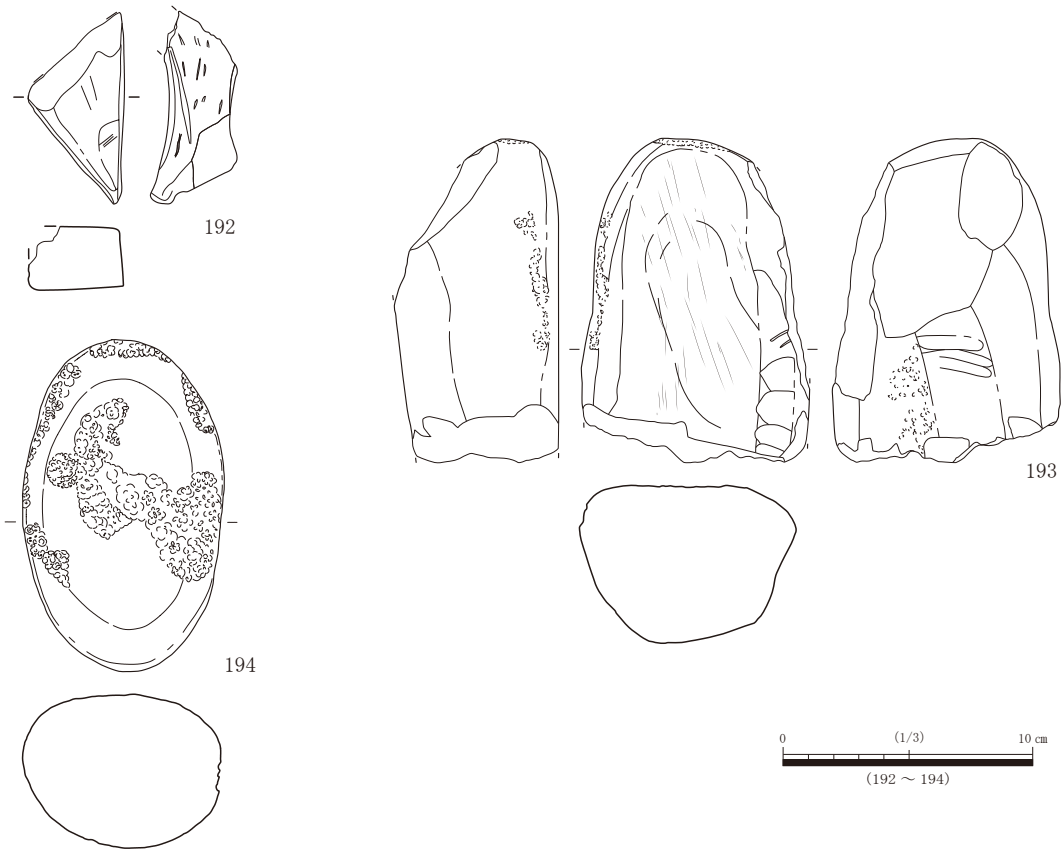
第 58 図　　ＳＩ37 遺構・出土遺物実測図１

遺物は覆土中層からまとまって出土している。177 ～ 180 は甕である。177 の口縁部は強く外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。178 は口縁部から胴部下半まで残存していた。口縁部は頸部から直線的に開いたのち、口縁端部は摘んだようにしてやや強めに外側に開く。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。179 は口縁部から胴部上半が残存しており、口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。180 は甕の脚台部であり、裾部が外側に開く。裾端部を欠いているが、高さは裾部径の半分以下と推測される。内外面ともにハケ目とナデが施される。181 は壷の複合口縁の破片である。一次口縁は外反しながら開き、二次口縁が内傾気味に立ち上がる。内外面ともにハケ目が明瞭に残る。182・183 は磨石類である。敲打痕が認められる。

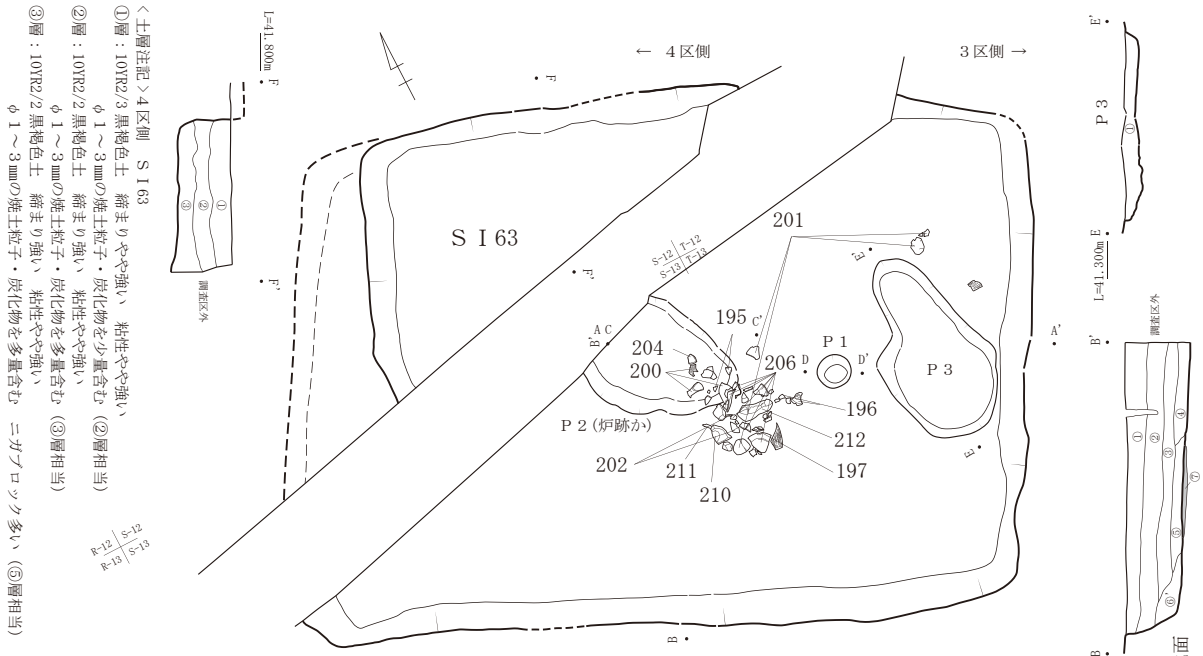
ＳＩ 37（第 58 図・第 59 図）

ＳＩ 37 はＫ 10・11、Ｌ 10・11、調査４区と調査５区の境に位置している。そのため、土地全体が削平されている調査５区側の建物北側は大部分が破壊されている。遺構規模は長軸約 5.52 m、短軸 3.96 m、検出面からの深さ 0.52 mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は４層に分けることができた。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡、ベッド状遺構等は検出されなかった。

遺物は建物南側、残存状況の良好な調査４区側の覆土中層から下層にかけて点在して出土している。平面分布、垂直分布から建物廃絶後、時間をおかずに埋没したものと思われる。184 は甕と思われ、口縁部から胴部上半まで残存している。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丁寧に面取りされている。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。185 ～ 187 は甕の脚台部である。185 は底部から裾部まで直線的に広がる。裾端部は丁寧に面取りされており、外面はハケ目とナデ、内面はナデが施されている。186 は底部から裾部まで直

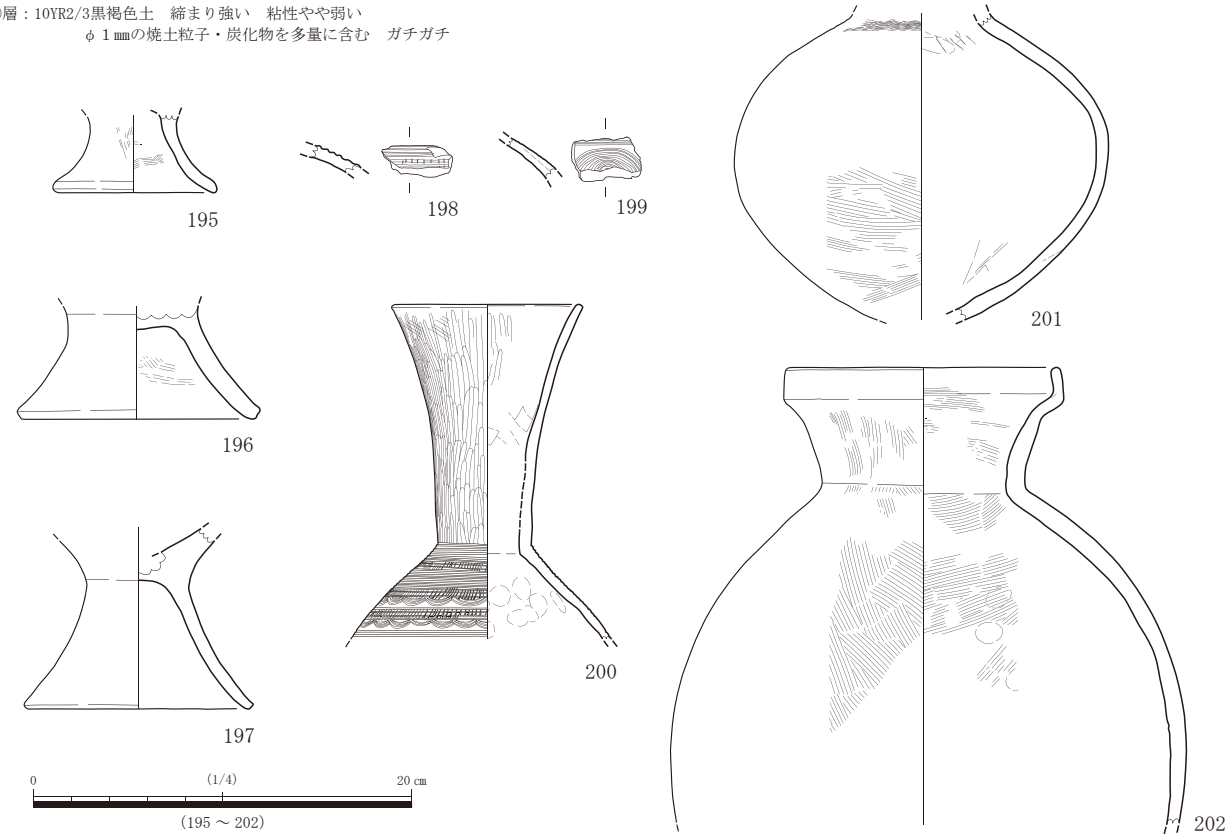


第 59 図　　ＳＩ 37 出土遺物実測図２



〈土層注記〉ＳＩ63
①層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い
φ１㎜の焼土粒・炭化物を微量含む　②層に比べてややまだら
②層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い
φ１㎜の焼土粒・炭化物を微量含む　まだらではない
③層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い
φ１㎜の焼土粒・炭化物を少量含む
④層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い
φ１㎜の焼土粒・炭化物を多量に含む　黒味が強い
⑤層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１㎜の焼土粒・
炭化物をやや多く含む　若干ニガ（７層）が混じる
⑥層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
φ１㎜の焼土粒・炭化物を多量に含む　焼土が多い　三角堆積
⑥’層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
φ１㎜の焼土粒子・炭化物を多量に含む
焼土粒は⑥層に比べて少ない　三角堆積
⑦層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性やや弱い
φ１㎜の焼土粒子・炭化物を多量に含む　ガチガチ

〈土層注記〉Ｐ１～Ｐ３
Ｐ１・Ｐ３　①層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い
φ１㎜の焼土粒子・炭化物をやや多く含む
Ｐ２（炉跡か）①層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い
φ１㎜の焼土粒子・炭化物を多量に含む



第 60 図　　ＳＩ63 遺構・出土遺物実測図１

第 61 図　　ＳＩ63 出土遺物実測図２

線的に広がり、内外面ともに丁寧に横ナデが施されている。脚台部の底には砂が付着している。187 は底部から裾部まで直線的に広がる。内外面ともに横ナデが施されている。188 は鉢で口縁部から胴部上半の一部であり、口縁部は緩やかに外反する。外面は横ナデ、内面にはハケ目と横ナデが施されている。外面はかなり摩滅している。189 は壷の胴部下半から底部と思われる。内外面ともにハケ目とナデが施されている。190 は長頸壷の頸部である。ほぼ直立しながら緩やかに外反して開く。外面に縦のミガキ、内面にハケ目が残っている。191 は高坏の坏部底から脚部である。脚部外面に縦のミガキが施されている。坏部底は充填したように成形されている。192 は砥石、193・194 は磨石類である。敲打痕が認められる。

ＳＩ 63（第 60 図～第 62 図）

ＳＩ 63 はＳ 12・13、Ｔ 13 に位置する。南側の半分以上は調査３区に位置し、既に報告済みであるが（水上 2013）、遺構の一部が調査４区側に位置するため、ここで改めて報告する。遺構規模は長軸約 5.58 m、短軸 4.08 m、検出面からの深さ 0.56 mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は７層に分けることができた。付属施設として柱穴を１基、炉跡と思われるＰ２、長楕円形で断面が皿状のＰ３を検出した。柱穴は深さ約 50㎝を測る。Ｐ１と対応する柱穴が、炉跡と推定されるＰ２を挟んで建物中央に入れた調査４区外周トレンチの部分に想定される。調査３区側のプランから西側にベッド状遺構を想定できる。既報告分を訂正したい。

第 62 図　　ＳＩ 63 出土遺物実測図３

遺物は建物中央でまとまって出土している。平面分布、垂直分布から建物廃絶後、時間をおかずに埋没したものと思われる。195 ～ 197 は甕の脚台部である。198・199 は壷形土器の胴部破片。200 は壷形土器の頸部から胴部である。201 は壷形土器の胴部。頸部と底部を欠いている。202 は複合口縁の壷形土器。203 ～ 205 は壷形土器の底部と思われる。206 は高坏形土器である。坏部と口縁部の境に段があり、口縁部は大きく外側に開く。207 はチャート製の石鏃。208 は磨石類で、209・210 は砥石の可能性がある。211 は石皿、212 は台石と思われる。

ＳＩ 64（第 63 図）

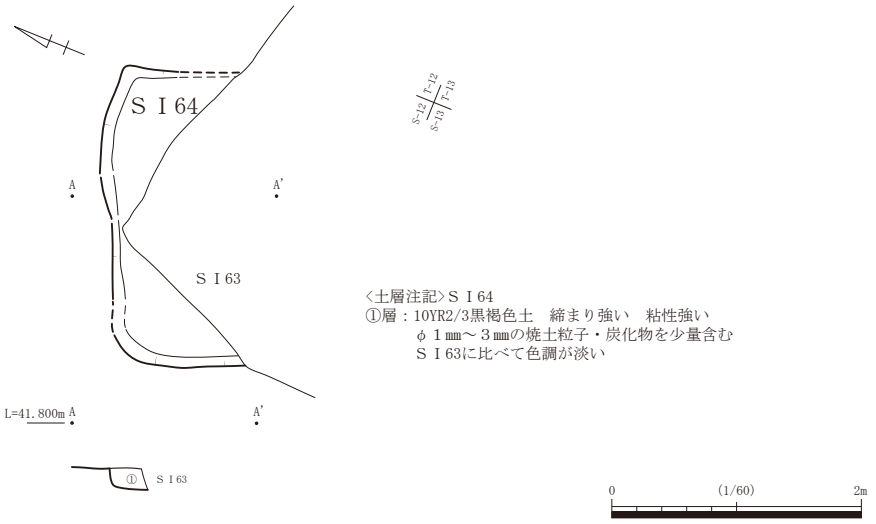
ＳＩ 64 はＳ 12 に位置する。建物の大部分がＳＩ 63 と重複しているためほとんど残っていない。先後関係はＳＩ 63 →ＳＩ 64 である。検出面からの深さ 0.18 mを測るが、残存状況が悪いため、他の遺構規模や平面形態はわからない。建物覆土は１層とした。当該期の他の竪穴建物よりも浅いため、竪穴建物のベッド状遺構の一部である可能性も想定したが、小規模であり、機能が異なる遺構とも思われる。

実測可能な遺物がないため、残存範囲での平面形態、重複関係、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

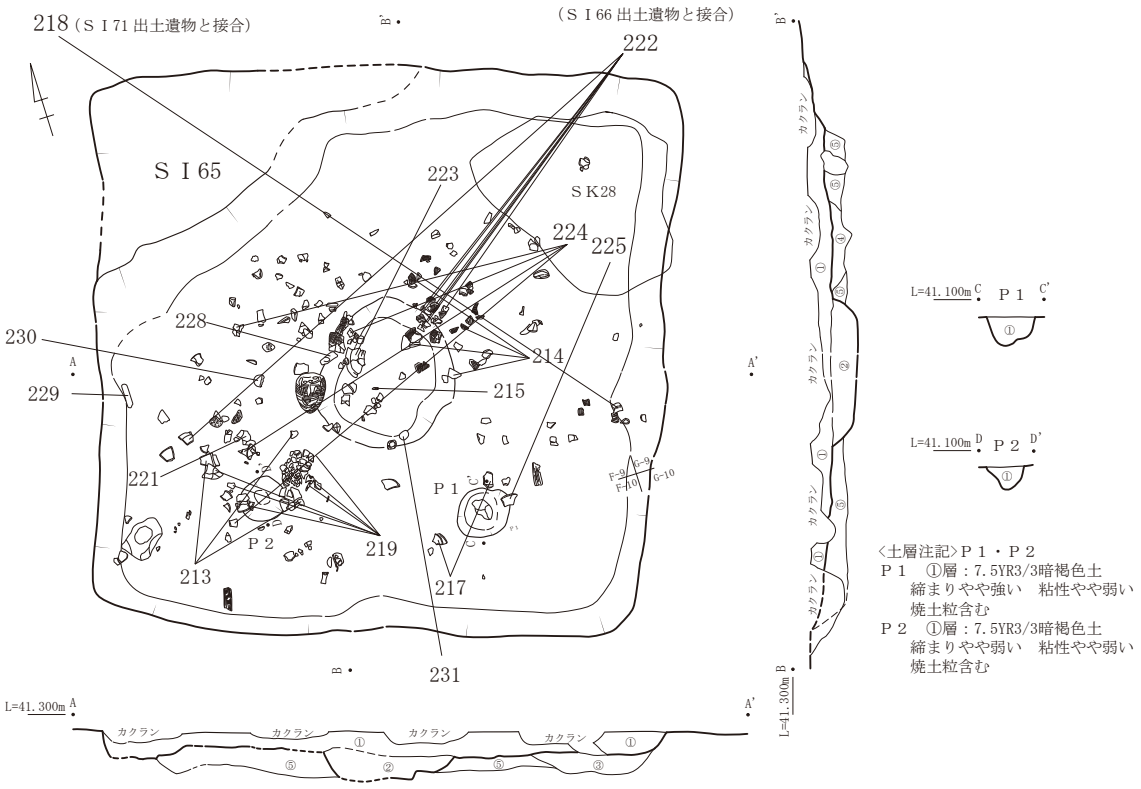
ＳＩ 65（第 64 図～第 66 図）

ＳＩ 65 はＦ９・10、Ｇ９に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は決して良くない。遺構規模は長軸約 4.50 m、短軸約 4.50 m、検出面からの深さ 0.42 mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は５層に分けることができる。建物に伴う遺構として北西隅にベッド状の高まりを１箇所検出した。柱穴を建物南側で２基検出した。深さは約 23 ～ 26㎝と浅い。一方、北側に対応する柱穴は検出できなかった。炉跡は建物中央で１基検出した。本遺構は塔平遺跡では珍しく掘方を有しており、覆土③層～⑤層の上に床面が構築されている。

遺物は建物中央を中心に覆土下層から出土しており、本遺構と重複関係にないＳＩ 66 出土の資料が 220 と 222、ＳＩ 71 出土の資料が 218 と接合関係にあることがわかっている。213 ～ 215 は甕である。213・214 の口縁部は頸部から緩やかに外反する。胴部最大径はやや上位に位置する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。214 の口縁端部は丁寧に面取りされている。215 は脚台部で底部から裾部に緩やかに開く。裾端部は丁寧に面取りされている。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。216 は台付鉢である。脚台の裾部はや

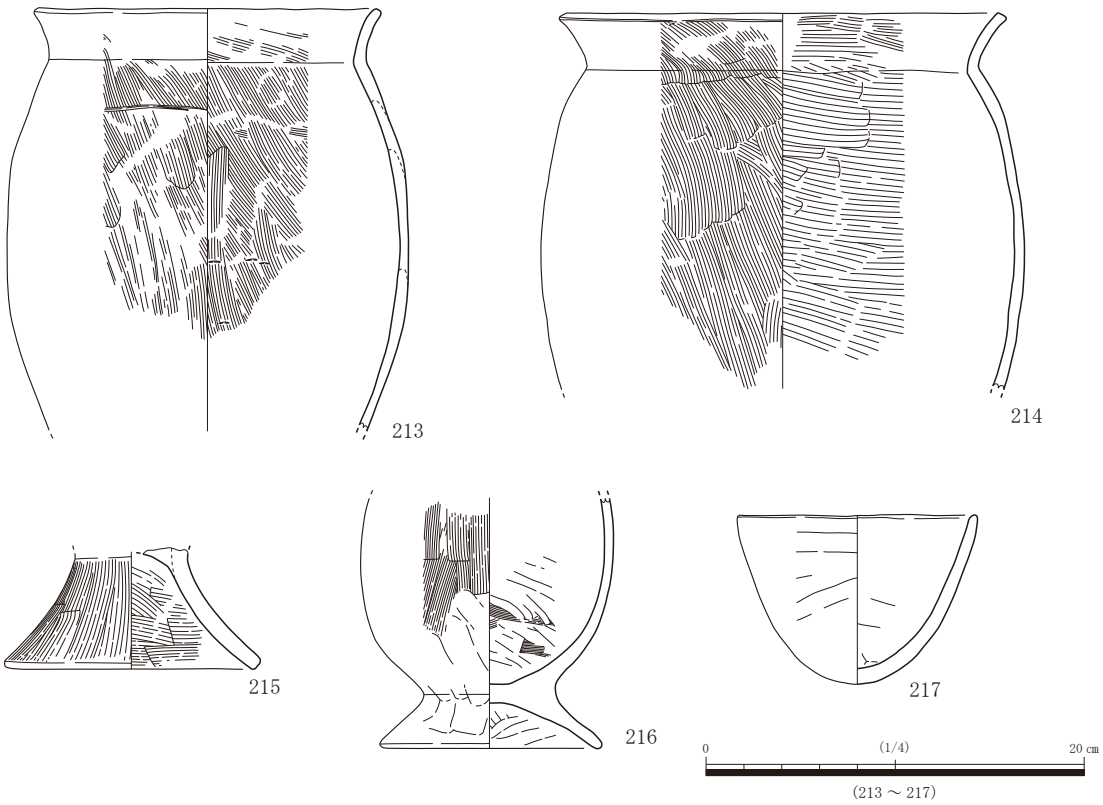


第 63 図　　ＳＩ 64 遺構実測図

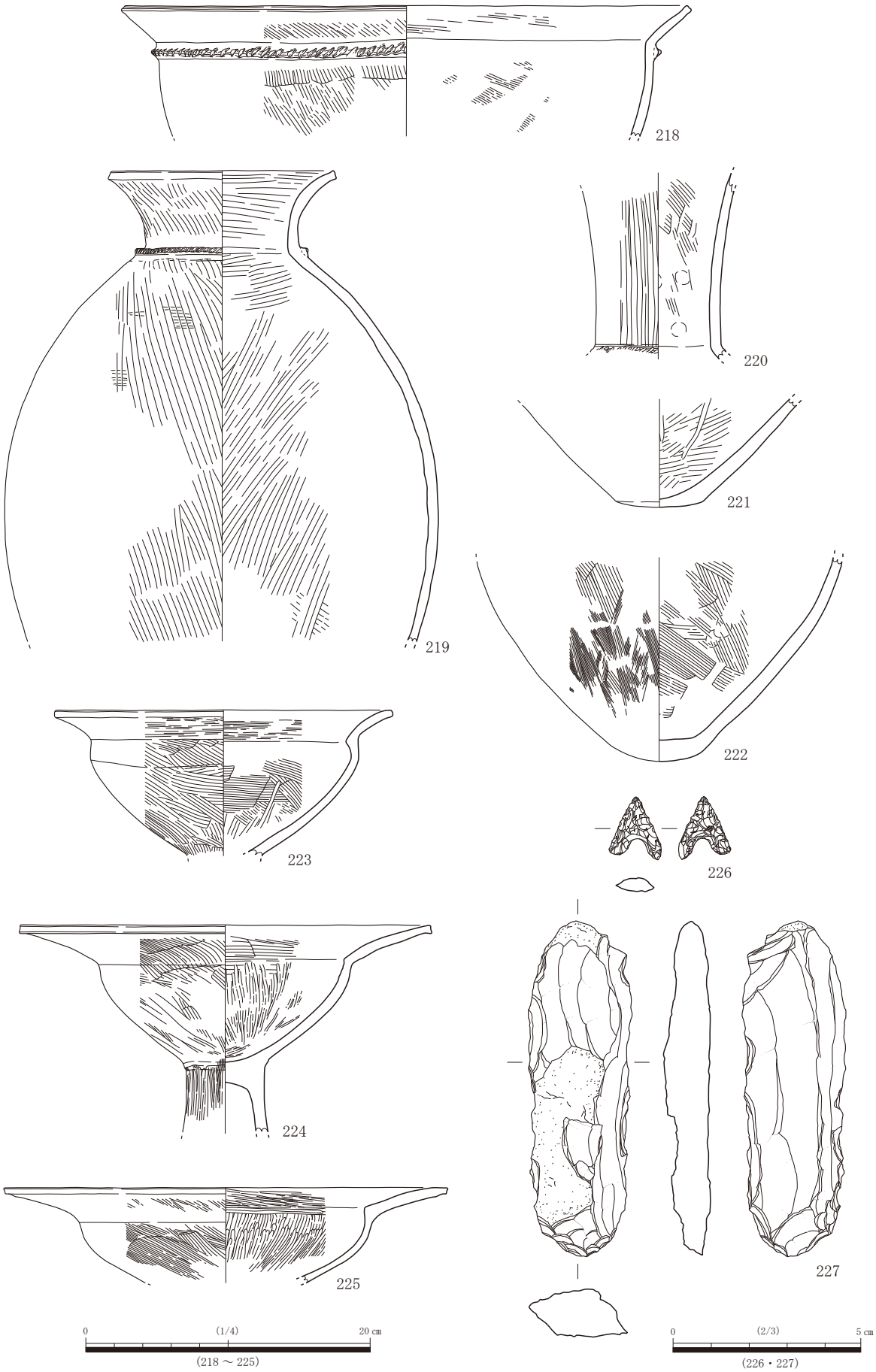


〈土層注記〉ＳＩ65
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い　焼土・炭化物を含む
②層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土・炭化物多く含む
③層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土・炭化物（0.1mm以下～１cm）多く含む
④層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土多く含む
⑤層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土・炭化物やや多く含む

0　(1/60)　2m



第64図　　ＳＩ65遺構・出土遺物実測図１



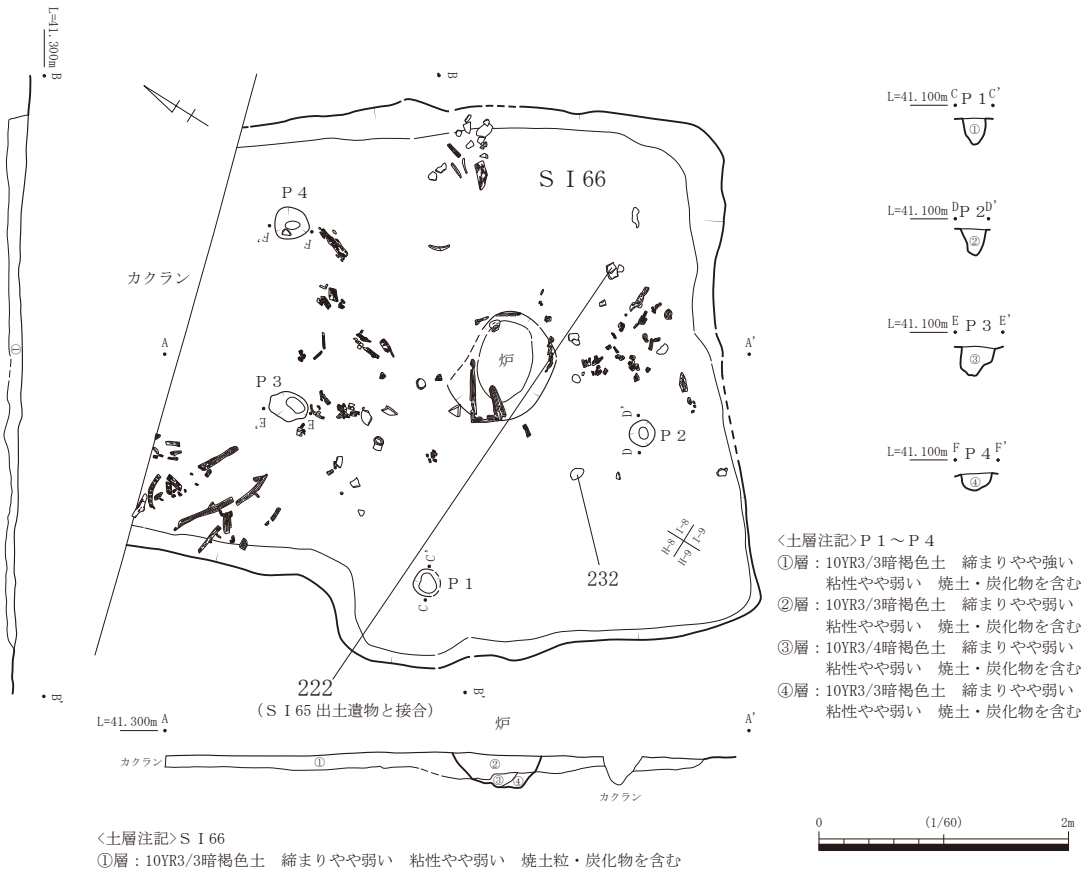
第 65 図　　ＳＩ65 出土遺物実測図２

や内湾ぎみに大きく開く。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。217 は小形の鉢であり、やや直線的に開く。内外面ともに横ナデが施されている。218 は鉢と思われる。頸部は直線的に開く。頸部屈曲部に刻目突帯を有する。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。219 は壷である。口縁部は頸部から立ち上がり外反して開く。口縁端部は丁寧に面取りされている。頸部下端に刻目突帯を有する。内外面にハケ目が明瞭に施されている。外面の一部にタタキ目らしきものが残っている。220 は長頸壷の頸部である。外面に丁寧なミガキ、内面にハケ目が施されている。220 はＳＩ 66 と接合関係にある。221・222 は壷で胴部下半から底部が残存していた。ハケ目が明瞭に施されている。222 はＳＩ 66 と接合関係にある。223 ～ 225 は高坏である。223 は口縁の長さに比べて深い坏部を有する。口縁部は緩やかに外反しながら開く。内面に一部ミガキが認められるが、内外面ともにハケ目が明瞭に残っている。224 は長い口縁を有する。内外面にハケ目が残るが、坏部内面に 225 に比べ若干粗いミガキが施されている。外面と口縁部内面は赤味を帯びている。225 は浅い坏部に強く屈曲した口縁部を有する。内面は丁寧にミガキが施されており、放射状の暗文を呈している。226 は黒曜石製の石鏃、227 は二次加工のある剥片である。228 は安山岩製の打製石斧である。229 は砥石、230・231 は磨石類である。敲打痕が認められる。

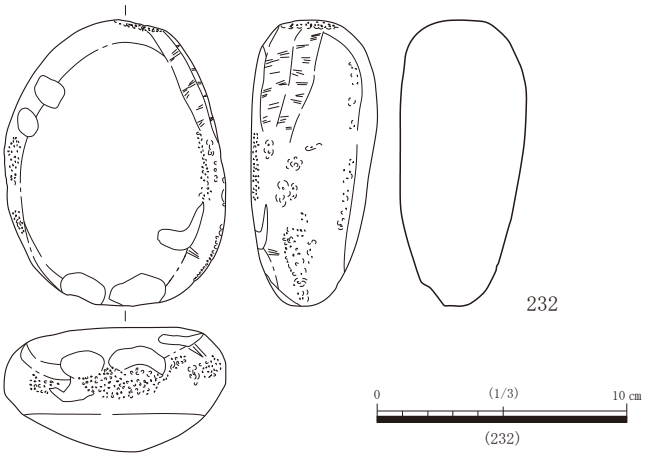
第 66 図　　ＳＩ65 出土遺物実測図３

ＳＩ 66（第 67 図）

ＳＩ 66 はＨ８・９、Ｉ８・９に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。遺構規模は長軸約 4.50 m、短軸約 4.32 mを測り、検出面からの深さ 0.18 mを測り、平面形態は隅丸のいびつな長方形を呈する。大きく削平されていたため、いきなり床面を検出した。建物覆土は１層とした。覆土①層の上に床面が構築されている。建物に伴う遺構として建物中央で炉跡を１基、柱穴を４基検出した。柱穴の深さは 14 ～ 22㎝と浅い。柱穴はいずれも床面を掘方まで掘削中に確認できたものであり、本来はもう少し深いもの



〈土層注記〉ＳＩ66
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土粒・炭化物を含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　焼土・炭化物やや多く含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　焼土・炭化物やや多く含む
④層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物・焼土粒含む



第 67 図　　ＳＩ 66 遺構・出土遺物実測図

と推定される。建物北西側のいびつな部分はベッド状遺構の可能性があるが、建物の壁が削平されているため判然としない。

自然科学分析の結果、ＳＩ 66 内から出土した炭化材は、コナラ属アカガシ亜属であった。比較的重硬で強度が高いことから建築部材として適材とされている。床面からの出土であり本遺構で使用された建築部材の可能性がある。

遺物は建物中央を中心に覆土からややまとまって出土しており、本遺構と重複関係にないＳＩ 65 から出土した壷（220・222）と接合関係にあることがわかっている。図示した遺物は１点だが、他にも壷や高坏、甕と思われる胴部の破片資料が多数出土している。また、甕の脚台部と思われる資料が４個体分出土している。いずれも高さは低い資料であった。232 は磨石類である。右側面に擦痕が認められる。

ＳＩ 67（第 68 図）

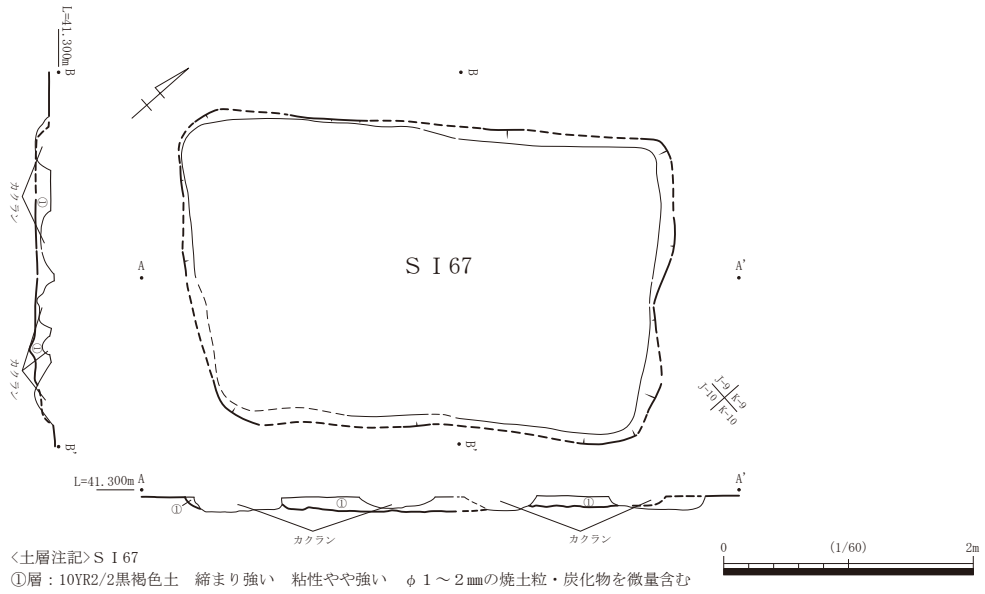
ＳＩ 67 はＪ９・10 に位置する。建物の大部分が削平と耕作時のトレンチャーにより破壊されているため残りが非常に悪い。遺構規模は長軸約 3.90 m、短軸 2.40 m、検出面からの深さ 0.12 mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。建物覆土は１層とした。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡、ベッド状遺構は検出されなかった。

実測可能な遺物がないため、平面形態、覆土の色調等から当該期の遺構と推定している。

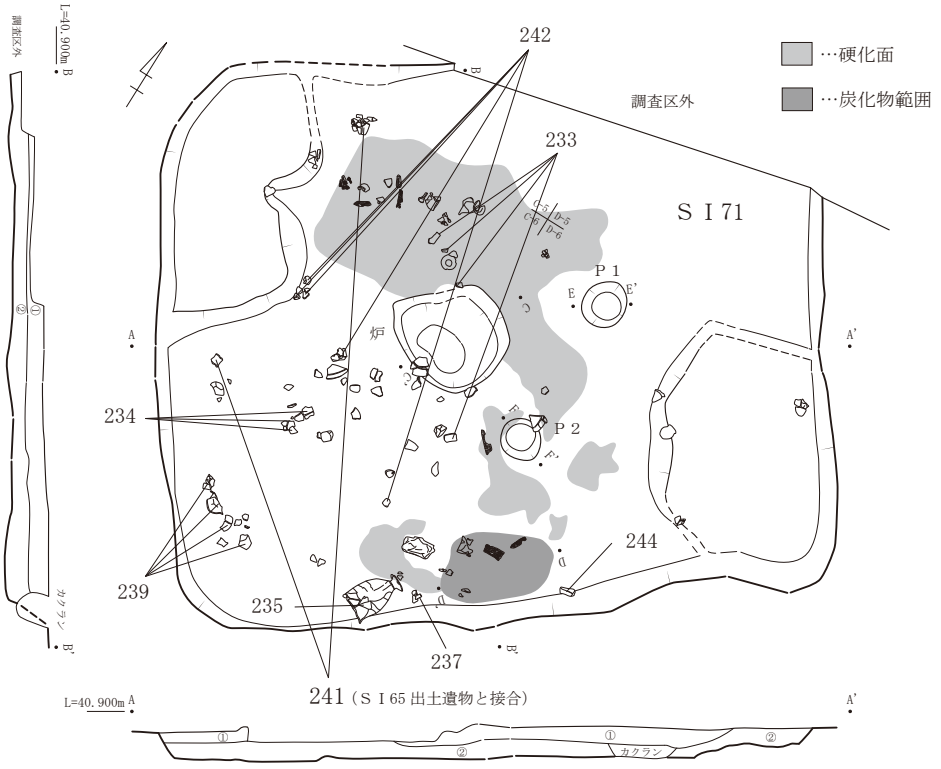
ＳＩ 71（第 69 図・第 70 図）

ＳＩ 71 はＣ５・６、Ｄ５・６に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。遺構規模は長軸約 5.28 m、短軸約 4.50 m、検出面からの深さ 0.36 mを測り、平面形態は隅丸の長方形を呈する。北東側が調査区外に広がる。建物覆土は２層とした。建物に伴う遺構として建物中央で炉跡を１基、柱穴を２基検出した。柱穴の深さは 46 ～ 54㎝と浅い。炉の北側と南側で硬化した床面を検出した。建物北西隅と南東隅にベッド状遺構を確認した。

自然科学分析の結果、ＳＩ 71 内から出土した炭化材は、ＳＩ 66 同様にコナラ属アカガシ亜属であった。比較的重硬で強度が高いことから建築部材として適材とされている。床面に近い覆土２層からの出土であり、

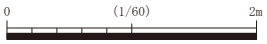


第 68 図　　ＳＩ 67 遺構実測図

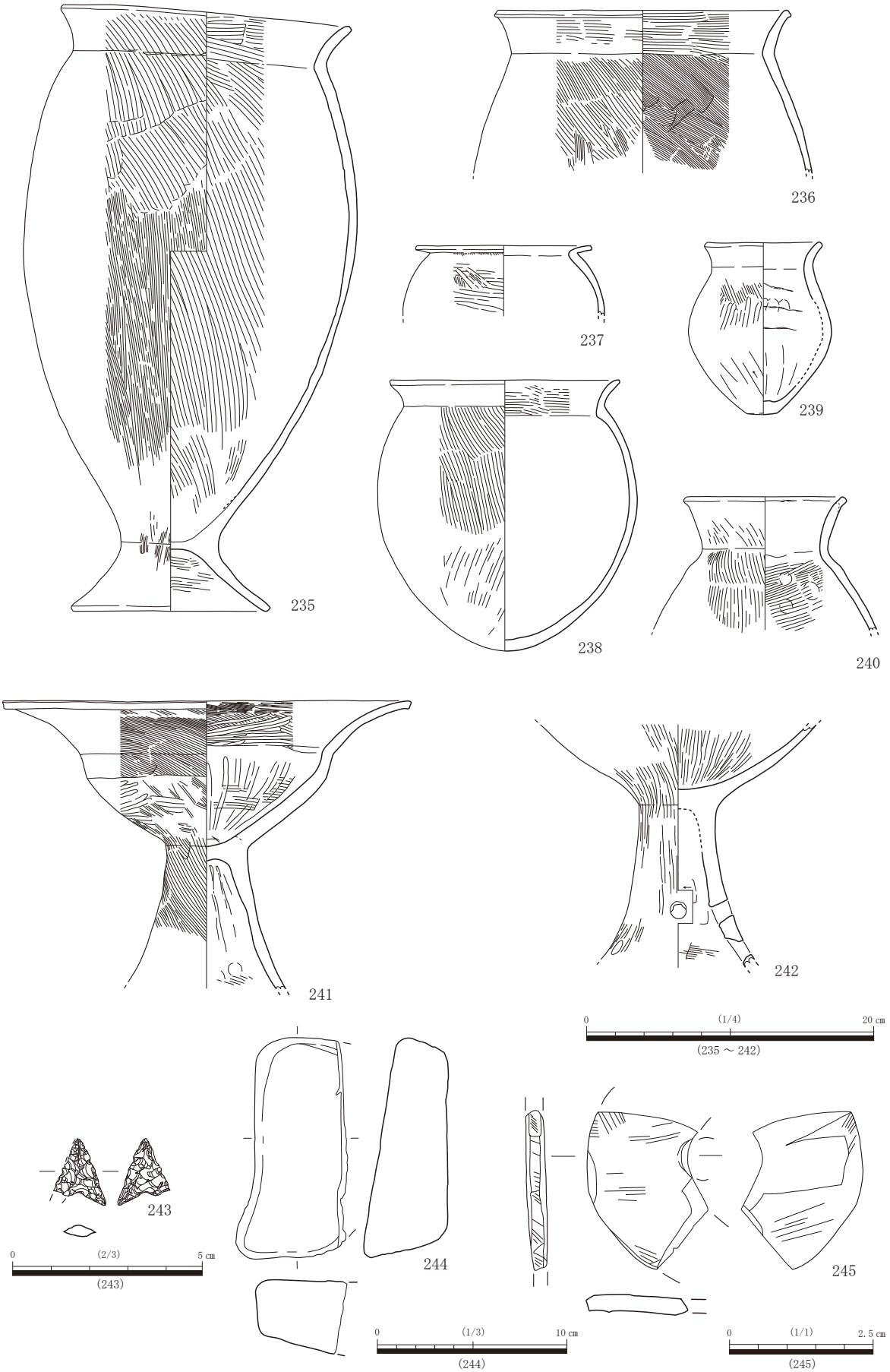


〈土層注記〉ＳＩ71
①層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ1～２㎜のローム粒子を微量・焼土粒子を少量含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ1～２㎜のローム粒子・焼土粒子・炭化物を少量含む

〈土層注記〉炉・炭化物集中範囲・Ｐｉｔ
炉　①層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性やや弱い　φ1～２㎜の焼土粒子を多く含み炭化物を少量含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ1～２㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性強い　ロームブロックを少量含む
炭化物　①層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ1～２㎜の焼土粒子を少量含む
φ1～２㎜の炭化物を多量に含む
Ｐ１・Ｐ２　①層：7.5YR3/4暗褐色土　締まり強い　粘性強い　φ1～２㎜の炭化物・焼土粒子を少量含む　ややまだら
②層：10YR3/4暗褐色土　締まり強い　粘性強い



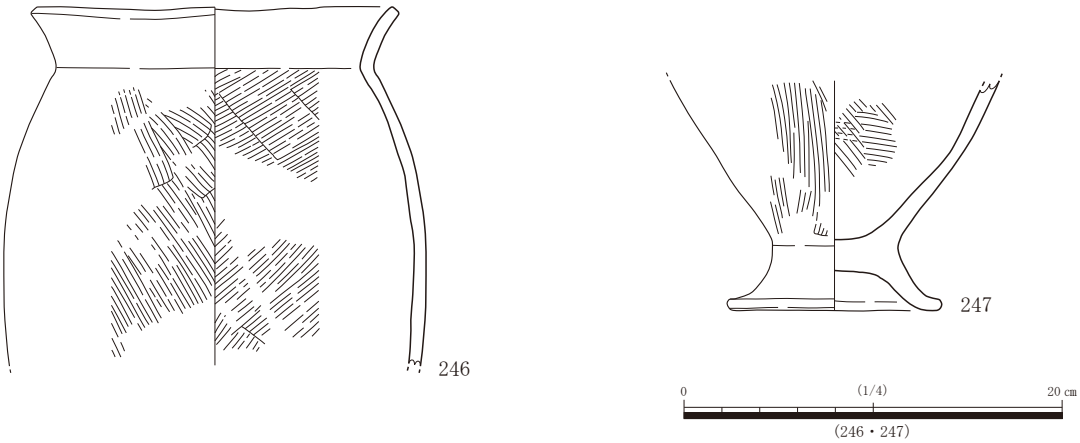
第69図　　ＳＩ71遺構・出土遺物実測図１



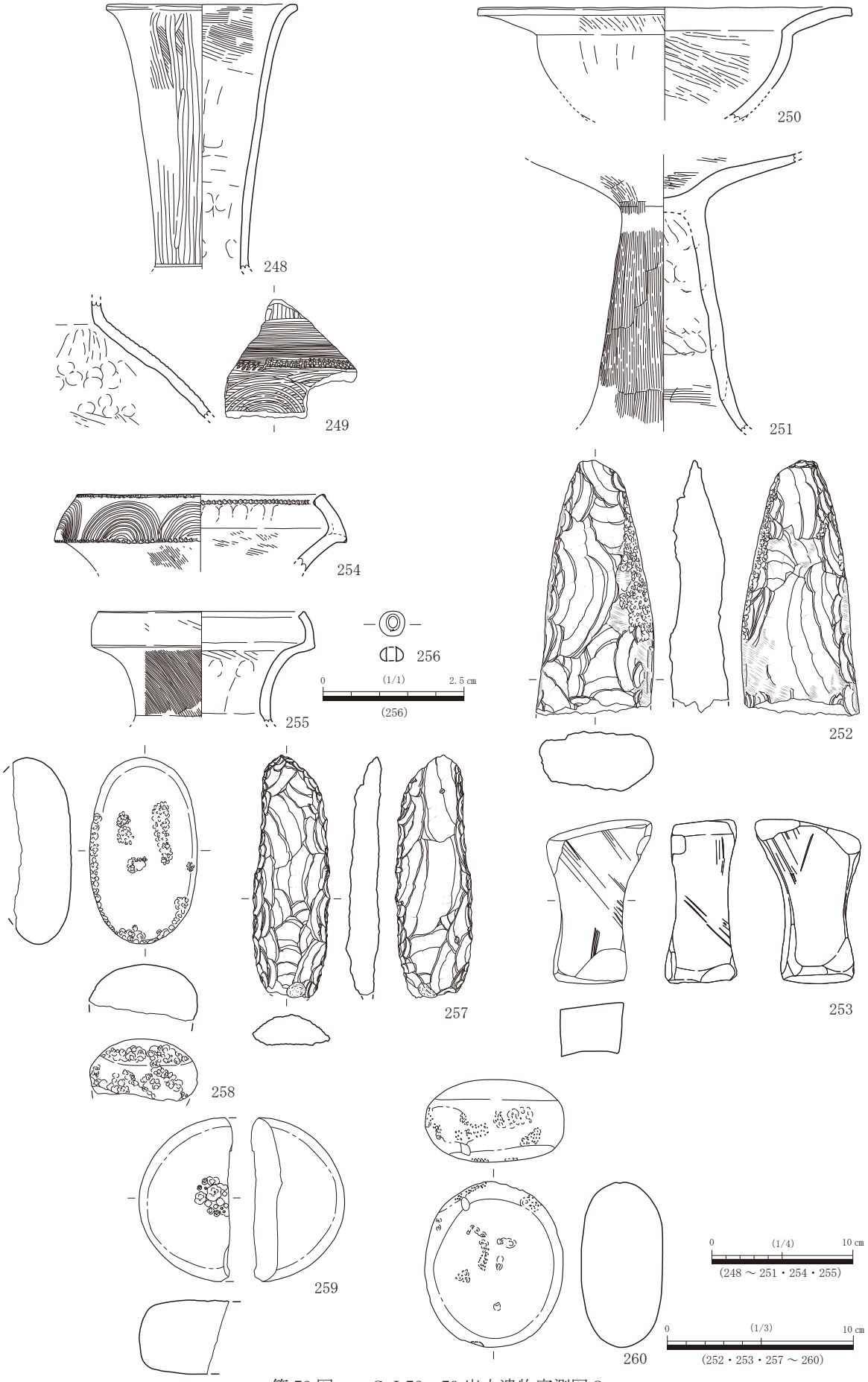
第 70 図　　ＳＩ71 出土遺物実測図２

<土層注記>ＳＩ72
①層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む　ローム粒子を少量含む
③層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ１～２㎜の焼土粒子・炭化物を少量含む　ニガシロのブロックを多く含む

<土層注記>ＳＩ73
①層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜のローム粒を微量含む　焼土粒子を少量含む
②層：10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性強い　φ１～２㎜のローム粒を少量含む　焼土粒子を少量含む



第 71 図　　ＳＩ72・73 遺構・出土遺物実測図１



第 72 図　　ＳＩ72・73 出土遺物実測図２

炭化物も散在していたが、建物床面が焼けていることはなく、炭化材の出土量も少量でもあることから、本遺構もしくは周辺遺構で使用された建築部材と考えたい。

遺物は建物南側を中心に覆土下層から多量に出土しており、本遺構と重複関係にないＳＩ 65 の出土遺物と接合関係にあることがわかっている。233 ～ 236 は甕である。233 の口縁部は頸部から緩やかに外反する。口縁端部は丁寧に面取りされている。胴部中位に最大径をもつ。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。脚台部の高さは裾部径の半分程度である。234 の口縁部は頸部からやや強く外反する。胴部上位に最大径をもつ。内外面ともに口縁部から胴部まで明瞭にハケ目が施されている。235 の口縁部は頸部から外反し開く。胴部中位に最大径をもつ。内面と外面胴部上位のハケ目は目が粗く、胴部中位から下位のハケ目は目の細かいものが施されている。脚台部の高さは裾部径の半分以下である。236 の口縁部は頸部から緩やかに外反する。口縁端部は丁寧に面取りされており、外側は摘んだように仕上げられている。237 は鉢と思われる。短い口縁部が外側に強く開く。238 は鉢と思われる。口縁部は頸部からまっすぐ立ち上がり緩やかに外反する。外面は胴部中位までのハケ目は目が粗く、中位から下位のハケ目は細かい。239 は小形の壷であり、完形で残っていた。口縁部は緩やかに開く。胴部上半に斜めのハケ目が残る。240 は壷である。頸部からややまっすぐに立ち上がり短く外反する。内外面ともにハケ目と横ナデが施される。241・242 は高坏である。241 は長い口縁を有する。内外面にハケ目が残るが、坏部内面に若干粗いミガキが施されている。ＳＩ 65 と接合関係にある。242 は坏部から脚部下位まで残存していた。脚部には円孔が二段互い違いに 4 箇所ずつ穿たれている。内外面ともに丁寧にミガキが施され、赤味を帯びる。外面は摩滅が激しい。243 は二等辺三角形をしている凹基式の黒曜石製の石鏃。244 は砥石。245 は円盤状の石製品である。

ＳＩ 72（第 71 図・第 72 図）

ＳＩ 72 はＤ７、Ｅ７に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。建物北西側がＳＩ 73 と重複している。先後関係はＳＩ 73 →ＳＩ 72 である。遺構規模は長軸約 4.68 m、短軸約 4.20 m、検出面からの深さ 0.30 mを測り、平面形態は隅丸のややいびつな長方形を呈する。建物覆土は 3 層とした。建物に伴う遺構として北東隅と北西隅にベッド状遺構を検出した。柱穴や炉跡は検出されなかった。

遺物は建物中央を中心に覆土下層から多量に出土している。ＳＩ 73 との重複箇所から出土した遺物同士で接合関係が認められた。調査時に明確にそれぞれの帰属遺構を区別できなかったことが原因である。出土位置の三次元情報を頼りに帰属遺構を推定し分類したが、ここでの接合関係は精度が低い。

246・247 は甕である。246 の口縁部は頸部から緩やかに外反する。胴部上位に最大径をもつ。内外面ともにハケ目と横ナデを施す。247 は甕で、胴部下半から脚台部が残存していた。脚台部の高さは裾部径の半分以下である。裾部付近で外側に開く。ＳＩ 73 と接合関係にある。248 は長頸壷の頸部である。頸部と胴部の接合部付近に区画線が 1 条施されている。外面には丁寧に縦ミガキが施されている。249 は壷の胴部破片である。平行区画線を胴部上位から頸部立ち上がりまで 16 条施し、平行線の一部に短い縦刻みを施す。その下部に上向きの重弧文を描く。250・251 は高坏である。250 はやや深い胴部に強く屈曲した口縁部を有する。内面は丁寧にミガキが施され、内外面ともに赤味を帯びる。ＳＩ 73 と接合関係にある。251 は浅い坏部から脚部下半まで残存していた。外面には縦のハケ目が明瞭に残り、内面にはミガキが施されている。内外面ともに赤味を帯びる。252 は蛇紋岩製の磨製石斧である。253 は砥石である。

ＳＩ 73（第 71 図・第 72 図）

ＳＩ 73 はＤ７・８に位置する。開田事業により削平されているため、残存状況は悪い。建物北東側約 1/4 がＳＩ 72 と重複している。先後関係はＳＩ 73 →ＳＩ 72 である。また、北西側は表土剥ぎの際、重機で掘

削し過ぎてしまったため完全に飛んでしまっている。遺構規模は長軸約 5.0 m、短軸約 3.84 m、検出面からの深さ 0.30 mを測り、平面形態は隅丸の長方形を呈する。建物覆土は２層とした。ＳＩ 72 と重複した北東側を明確に把握することができなかった。調査について反省すべき点が多い遺構となってしまった。建物に伴う遺構として柱穴、炉跡、ベッド状遺構は検出できなかった。

遺物は建物東側を中心に覆土下層から多量に出土している。ＳＩ 72 との重複箇所から出土した遺物同士で接合関係が認められた。調査時に明確にそれぞれの帰属遺構を区別できなかったことが原因である。出土位置の三次元情報を頼りに帰属遺構を推定し分類したが、ここでの接合関係は精度が低い。

254・255 は複合口縁の壷である。254 の一次口縁はやや外反しながら開き、二次口縁が内傾して立ち上がる。一次口縁の内外面にハケ目が明瞭に残る。二次口縁の口縁端部の内外面及び一次口縁との接合部外面に短い縦刻みを施したのち、外面に上向きの重弧文を描いている。縦刻みを目印に描いているように見える。255 の一次口縁は外反しながら開き、短い二次口縁が緩やかに内傾して立ち上がる。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。ＳＩ 72 と接合関係にある。256 はガラス製小玉で径 4.5㎜、厚さ 2.5㎜、孔径 2㎜を測る。薄い群青色を呈する。257 は砂岩製の打製石斧である。258 ～ 260 は磨石類である。敲打痕が認められる。

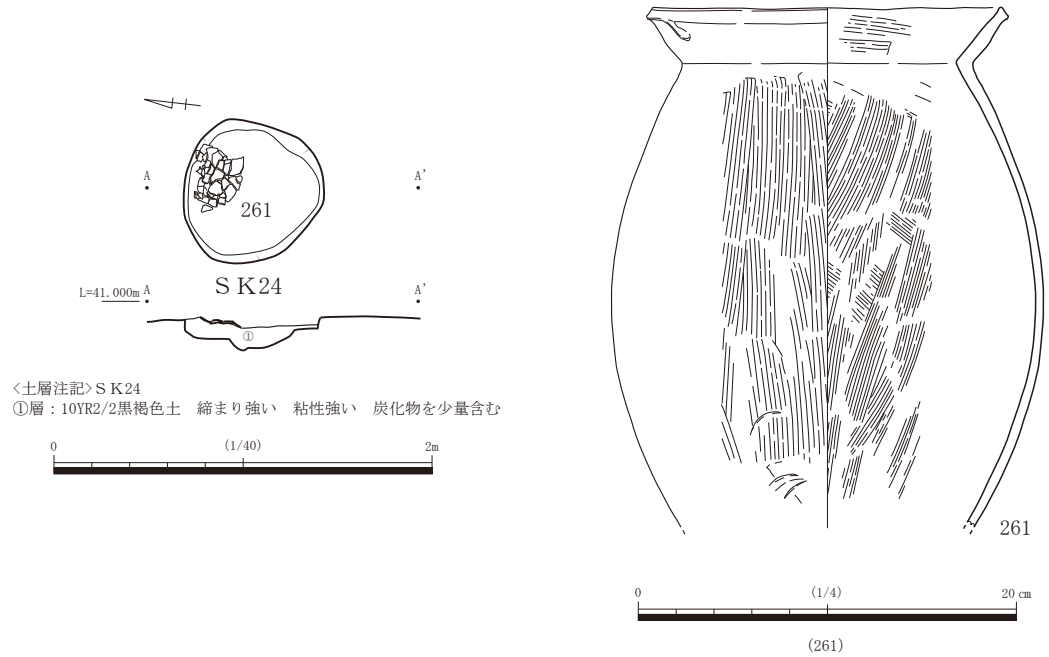
②土坑

ＳＫ 24（第 73 図）

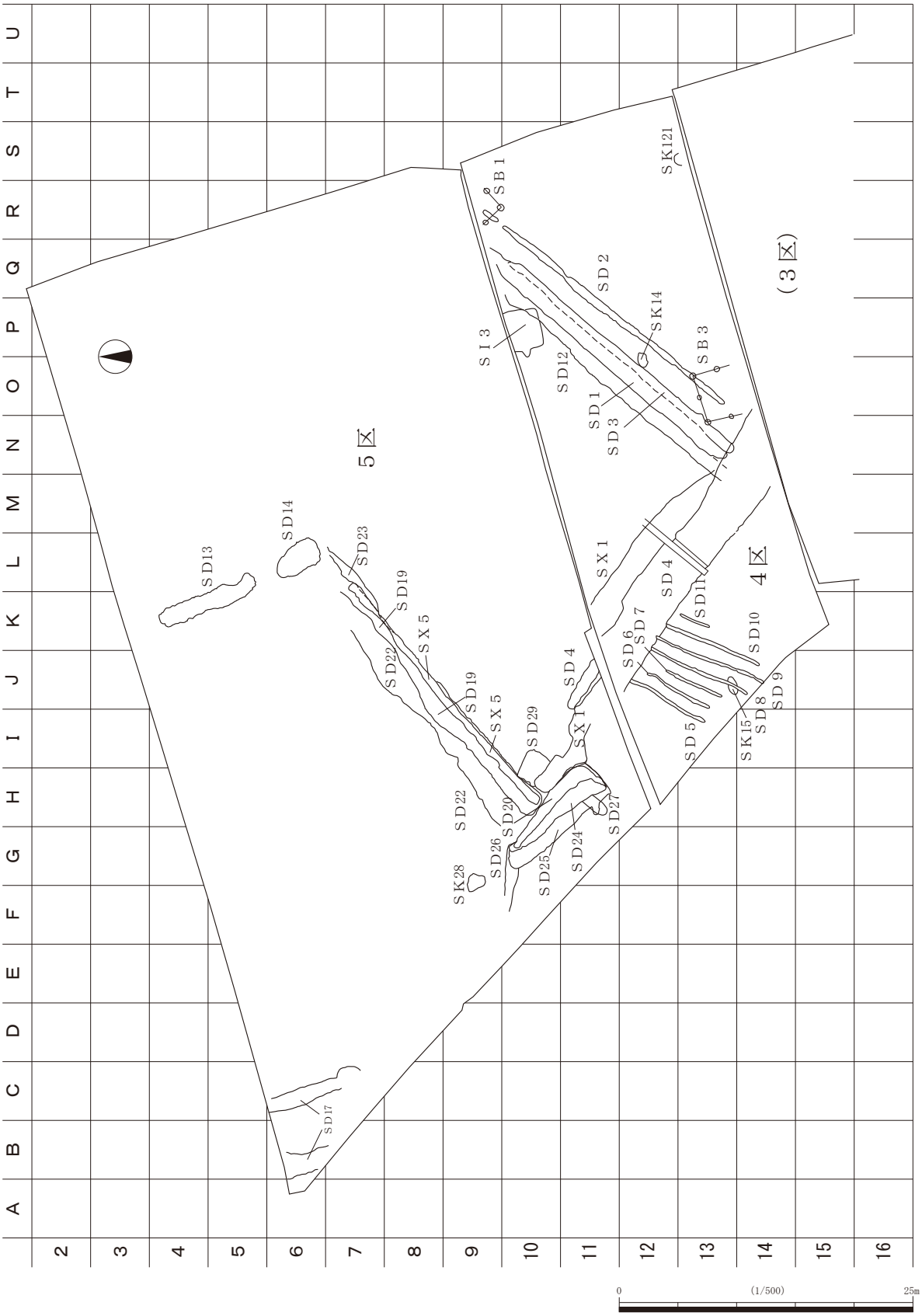
ＳＫ 24 はＦ７に位置する。調査５区が開田事業により削平されているため、本来竪穴建物の付属遺構なのか、単独の土坑なのか判然としないが、ここでは単独の土坑として報告する。

遺構規模は直径約 0.76 m、検出面からの深さ 0.16 mを測り、平面形態は円形を呈する。覆土は１層とした。甕がつぶれたような状態で出土したため周辺を探ったところ、土坑に伴うものとわかった。

261 は甕である。口縁部は頸部からやや内湾ぎみに開く。口縁端部は丁寧に面取りされている。胴部中位に胴部最大径をもつ。内外面ともにハケ目と横ナデが施されている。



第 73 図　　ＳＫ24 遺構・出土遺物実測図



第 74 図　　４・５区遺構配置図（古代以降）

（３）古代の遺構・遺物（第 74 図～第 76 図）

調査４区・５区における古代の主要な検出遺構は、竪穴建物１軒、掘立柱建物２棟である。時期は９世紀初頭から９世紀中葉が主体と想定される。当該期は、これまでの研究（網田 1997）により小型の竪穴建物から掘立柱建物へと移行する時期とされる。第６章で本遺跡の状況について考えたい。

①竪穴建物跡

ＳＩ３（第 75 図）

ＳＩ３はＰ 10、調査４区と調査５区の境に位置している。そのため、土地全体が削平されている調査５区側にあたる建物北側は大部分が破壊されている。遺構の規模は長軸約 4.08 m、検出面からの深さ 0.45 mを測り、平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物覆土は 13 層とした。主軸方位はＮ -79° - Ｅで座標西よりわずかに東に振れる。建物に伴う遺構としてカマド１基、柱穴２基を検出した。カマドは建物西側に造り付けられており、袖幅約 27 ～ 46㎝を測る。柱穴は建物南側でＰ１・２が並んで検出されている。深さは約 12 ～ 14㎝を測り、やや浅いが主柱穴と思われる。対応する北側の柱穴は削平により破壊されているものと考えている。床面はカマド周辺から建物中央にかけて硬化した面が広がっている。

出土遺物は、覆土から土師器、カマドの燃焼部から管玉が出土している。ここでは土器１点、管玉１点を図示した。262 は土師器の長胴甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部の開きが強く、やや横方向に開く。胴部外面に縦方向のハケ目、内面に縦方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデが施されている。９世紀前葉から中葉の所産に収まるものと思われる。263 は灰色がかった緑色の管玉である。長さ 0.65㎝、幅 0.35cm、孔径 0.15㎝を測る。

②掘立柱建物

ＳＢ１（第 76 図）

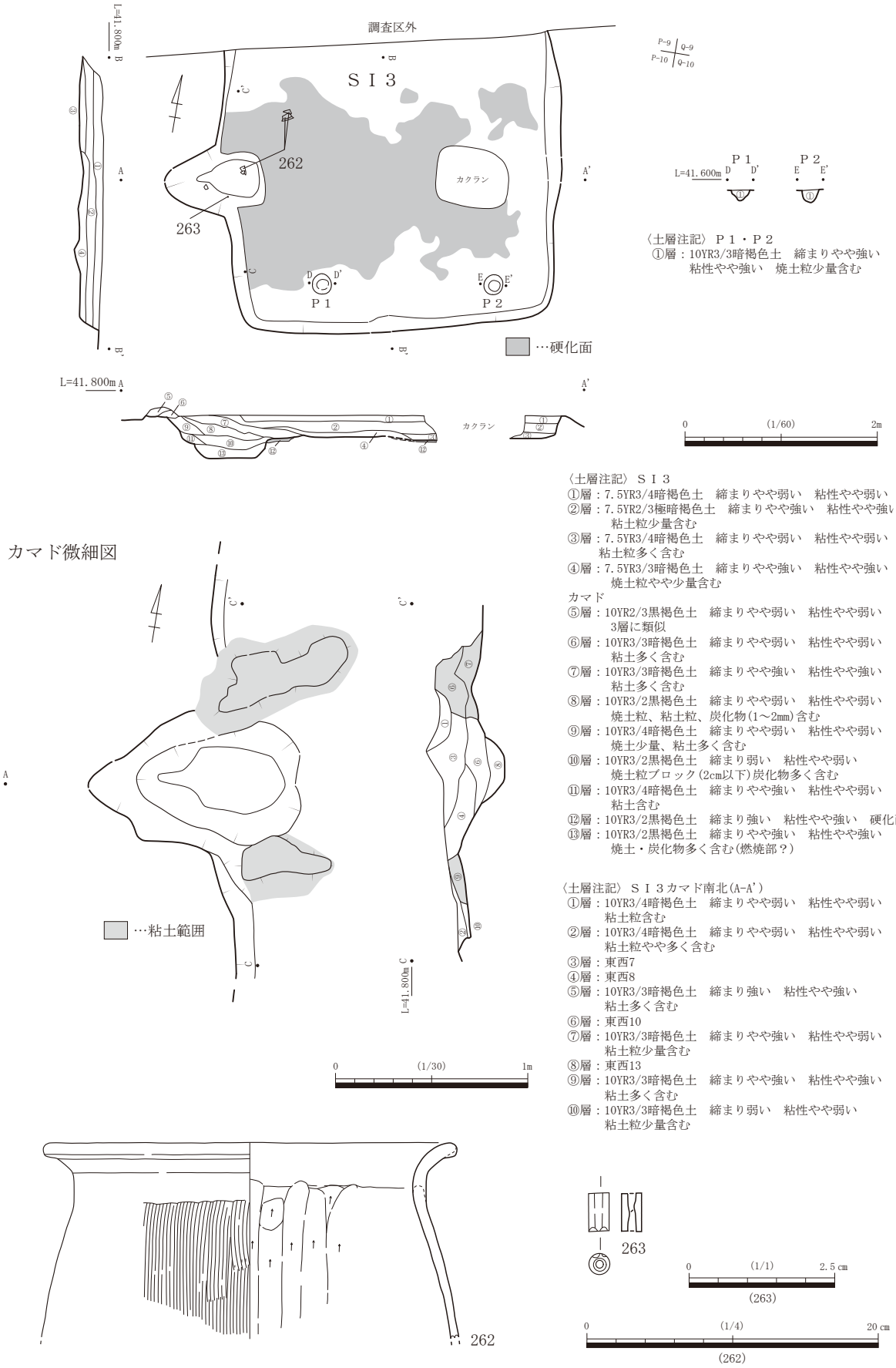
ＳＢ１はＲ９、調査４区と調査５区の境に位置している。そのため、土地全体が削平されている調査５区側にあたる建物北側は大部分が破壊されている。よって、検出できたのは桁行１間・梁行１間であった。しかし、本遺跡で検出されている掘立柱建物の規模から推定すると、本来はもう少し規模のある建物と思われる。柱穴は径 40 ～ 58㎝、深さ約 32 ～ 46㎝を測る。柱穴の下端レベルはほぼ一定である。

柱穴からの出土遺物はないが、重複関係、覆土の色調、塔平遺跡での掘立柱建物の調査状況から当該期の遺構と推定している。

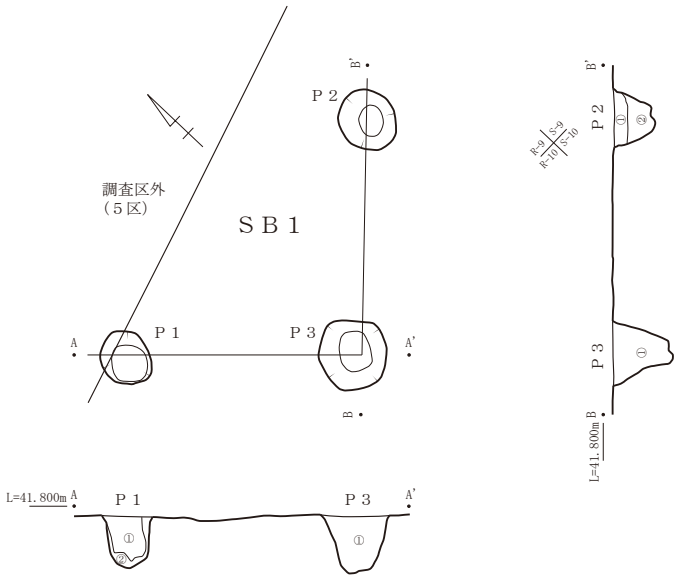
ＳＢ３（第 76 図）

ＳＢ３はＮ 13、Ｏ 13、調査３区と調査４区の境に位置している。３区（水上 2013）の調査では、ＳＢ３の広がりを探したが検出することはできなかった。調査区外周に設定した土層トレンチや別遺構により破壊されている可能性もある。検出できたのは、桁行２間・梁行１間であったが、ＳＢ１同様に本来はもう少し規模のある建物と推定される。柱穴は径約 38 ～ 54㎝、深さ約 26 ～ 58㎝を測る。柱穴の下端レベルは一定ではない。主軸方位は調査３区で検出されている桁行２間・梁行３間の掘立柱建物４棟とほぼ同一である。

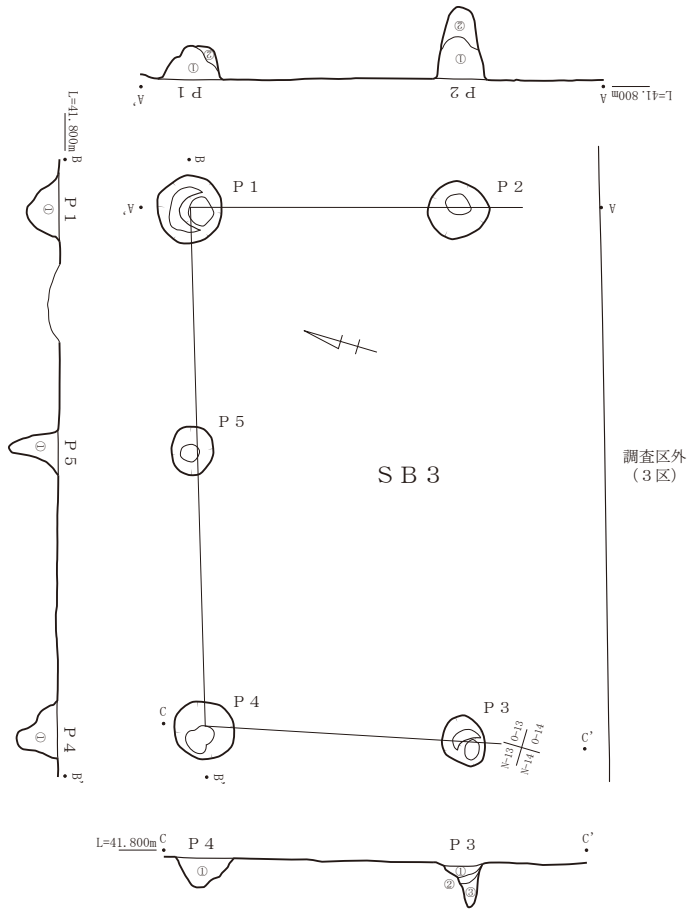
柱穴からの出土遺物はないが、重複関係、覆土の色調、塔平遺跡での掘立柱建物の調査状況から当該期の遺構と推定している。



第 75 図　　ＳＩ３遺構・出土遺物実測図



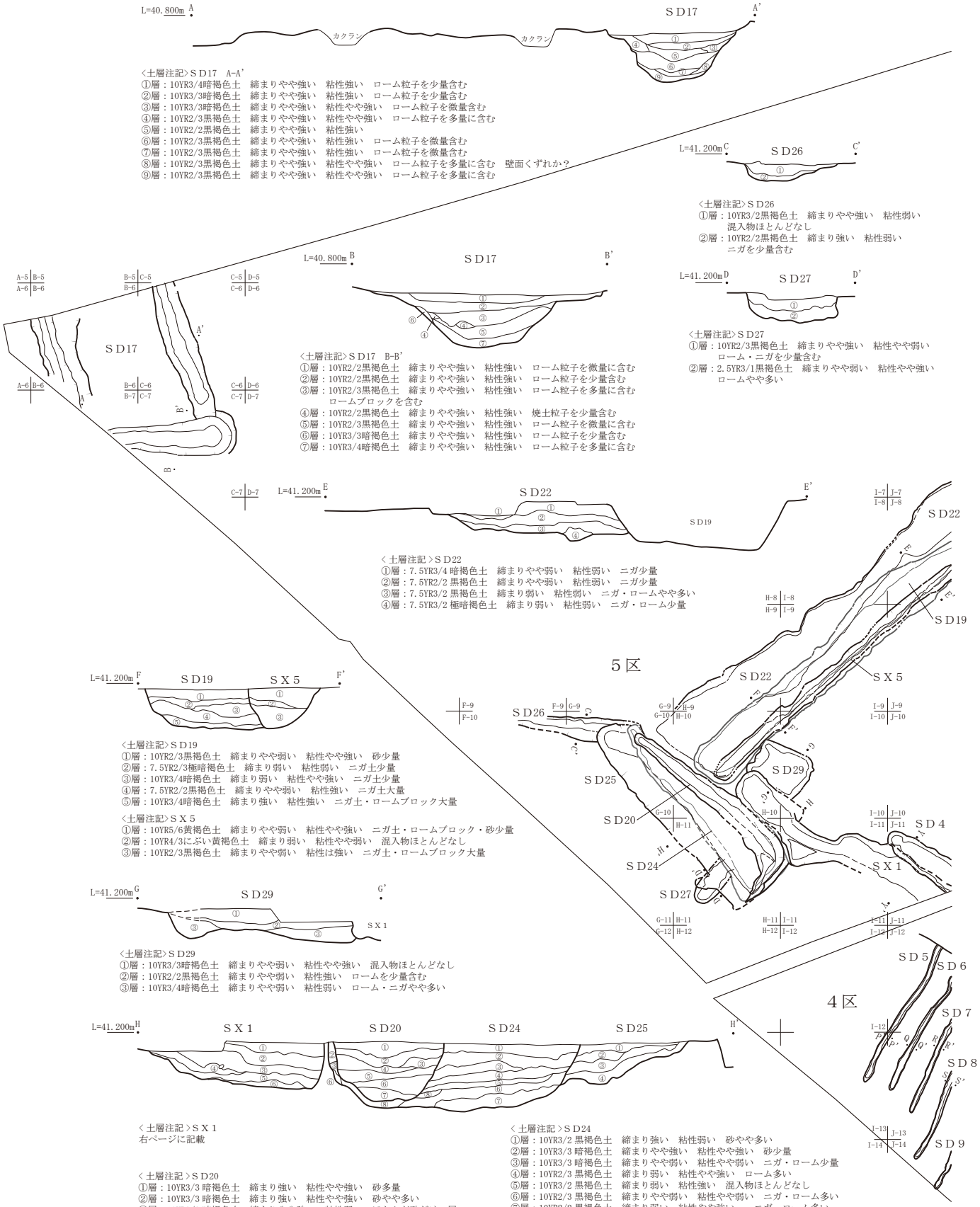
〈土層注記〉ＳＢ１　Ｐ１～Ｐ３
①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒子を少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　焼土粒子を少量含む



〈土層注記〉ＳＢ３
Ｐ１　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒を少量含む　白ニガを少し含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　黄褐色土をブロック状に含む
Ｐ２・Ｐ５　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒を少量含む　白ニガを少し含む　黄褐色土をブロック状に含む
　　②層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　黄褐色土をブロック状に含む　白ニガを少し含む
Ｐ３　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒を少量含む　白ニガを少し含む
　　②層：10YR2/2黒褐色土　全体的に①層より色調が濃い　炭化物を少し含む
　　③層：10YR2/2黒褐色土　黄褐色土をブロック状に多く含む
Ｐ４　①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物と焼土粒を少量含む　白ニガを少し含む

0　(1/60)　2m

第 76 図　　ＳＢ１・３遺構実測図



〈土層注記〉ＳＤ17　A-A'
①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を少量含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を少量含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ローム粒子を微量含む
④層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ローム粒子を多量に含む
⑤層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い
⑥層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を微量含む
⑦層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を微量含む
⑧層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ローム粒子を多量に含む　壁面くずれか？
⑨層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ローム粒子を多量に含む

〈土層注記〉ＳＤ26
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性弱い
混入物ほとんどなし
②層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性弱い
ニガを少量含む

〈土層注記〉ＳＤ27
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い
ローム・ニガを少量含む
②層：2.5YR3/1黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い
ロームやや多い

〈土層注記〉ＳＤ17　B-B'
①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を微量に含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を少量含む
③層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を多量に含む
ロームブロックを含む
④層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　焼土粒子を少量含む
⑤層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を微量に含む
⑥層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を少量含む
⑦層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子を多量に含む

〈土層注記〉ＳＤ22
①層：7.5YR3/4 暗褐色土　締まりやや弱い　粘性弱い　ニガ少量
②層：7.5YR2/2 黒褐色土　締まりやや弱い　粘性弱い　ニガ少量
③層：7.5YR3/2 黒褐色土　締まり弱い　粘性弱い　ニガ・ロームやや多い
④層：7.5YR3/2 極暗褐色土　締まり弱い　粘性弱い　ニガ・ローム少量

〈土層注記〉ＳＤ19
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　砂少量
②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり弱い　粘性弱い　ニガ土少量
③層：10YR3/4暗褐色土　締まり弱い　粘性やや強い　ニガ土少量
④層：7.5YR2/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性強い　ニガ土大量
⑤層：10YR3/4暗褐色土　締まり強い　粘性強い　ニガ土・ロームブロック大量

〈土層注記〉ＳＸ５
①層：10YR5/6黄褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　ニガ土・ロームブロック・砂少量
②層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締まり弱い　粘性やや弱い　混入物ほとんどなし
③層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性は強い　ニガ土・ロームブロック大量

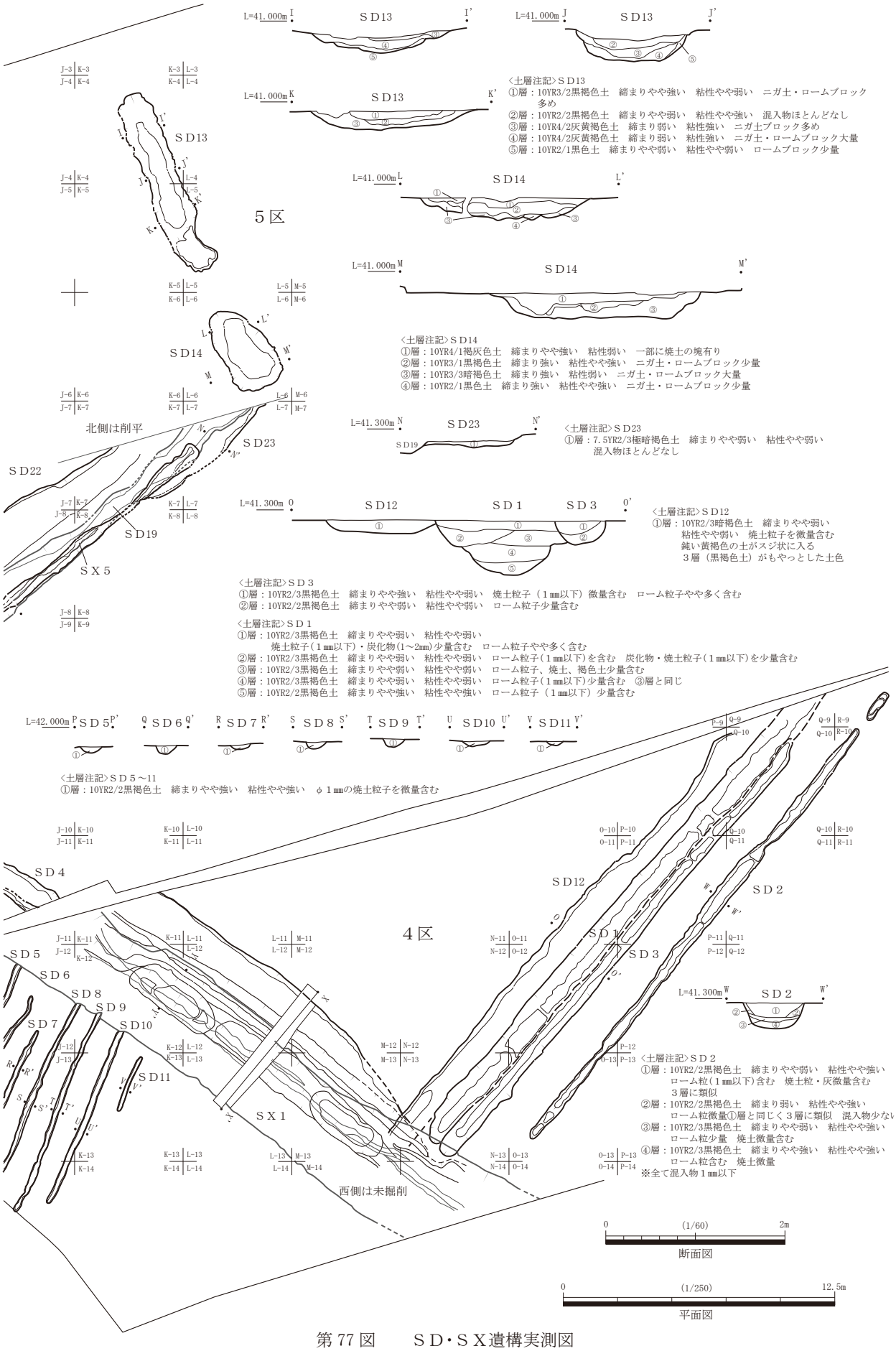
〈土層注記〉ＳＤ29
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　混入物ほとんどなし
②層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性強い　ロームを少量含む
③層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや弱い　粘性弱い　ローム・ニガやや多い

〈土層注記〉ＳＸ１
右ページに記載

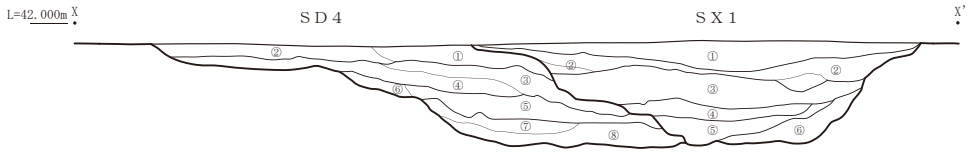
〈土層注記〉ＳＤ20
①層：10YR3/3 暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　砂多量
②層：10YR3/3 暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　砂やや多い
③層：10YR3/3 暗褐色土　締まりやや強い　粘性弱い　ほとんど砂だけの層
④層：10YR3/4 暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　混入物ほとんどなし
⑤層：10YR3/4 暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　砂少量
⑥層：10YR3/4 暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い　砂少量（⑤層より少し多くなる）
⑦層：10YR2/3 黒褐色土　締まりやや弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし

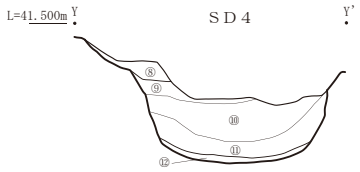
〈土層注記〉ＳＤ24
①層：10YR3/2 黒褐色土　締まり強い　粘性弱い　砂やや多い
②層：10YR3/3 暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　砂少量
③層：10YR3/3 暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ニガ・ローム少量
④層：10YR2/3 黒褐色土　締まり弱い　粘性やや強い　ローム多い
⑤層：10YR3/2 黒褐色土　締まり弱い　粘性強い　混入物ほとんどなし
⑥層：10YR2/3 黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い　ニガ・ローム多い
⑦層：10YR2/2 黒褐色土　締まり弱い　粘性やや強い　ニガ・ローム多い
⑧層：10YR2/2 黒褐色土　締まり弱い　粘性弱い　ロームやや多い

〈土層注記〉ＳＤ25
①層：10YR2/3 黒褐色土　締まりやや強い　粘性弱い　混入物ほとんどなし
②層：10YR2/2 黒褐色土　締まりやや弱い　粘性弱い　混入物ほとんどなし
③層：10YR2/2 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　ニガやや多い
④層：10YR3/3 暗褐色土　締まり弱い　粘性弱い　ニガ・ローム多い



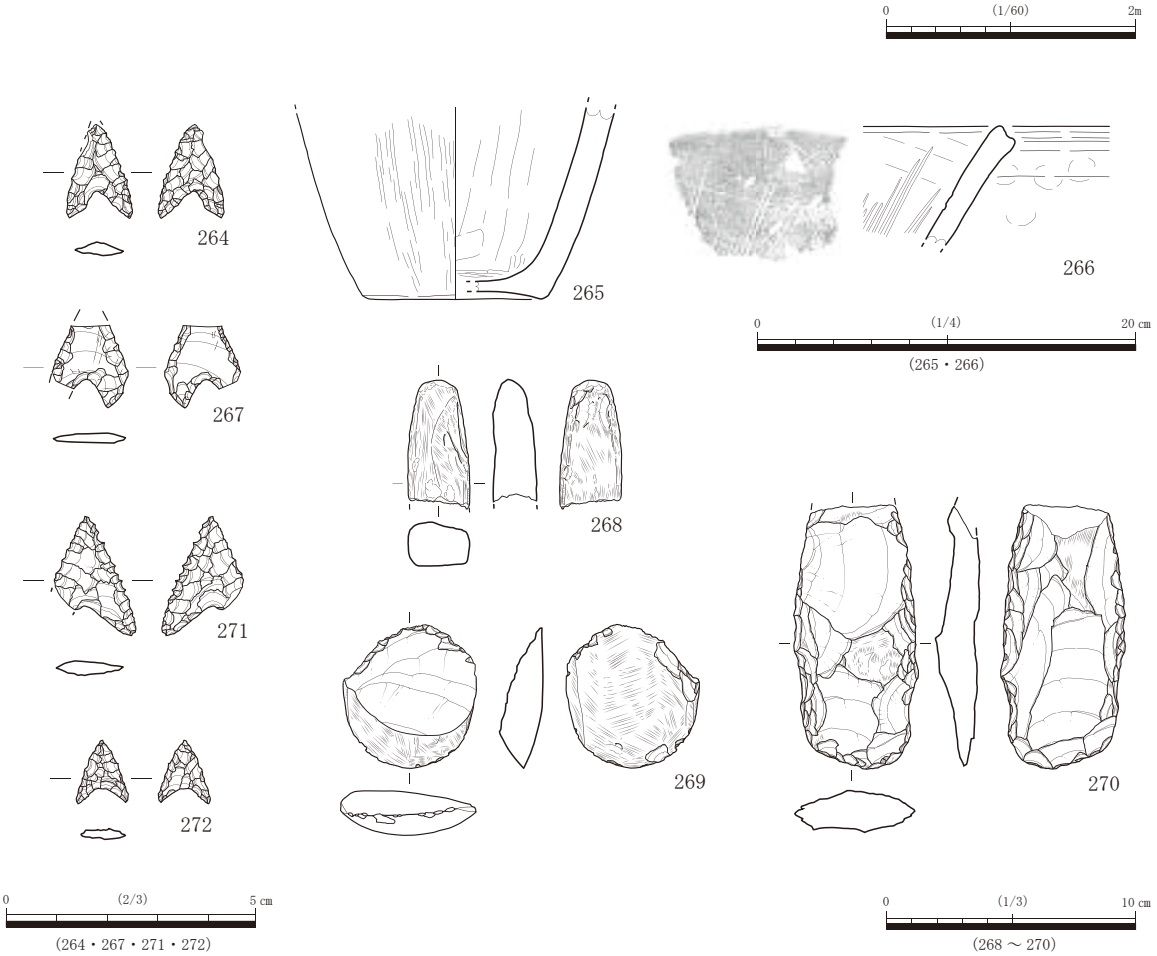
第 77 図　　ＳＤ・ＳＸ遺構実測図



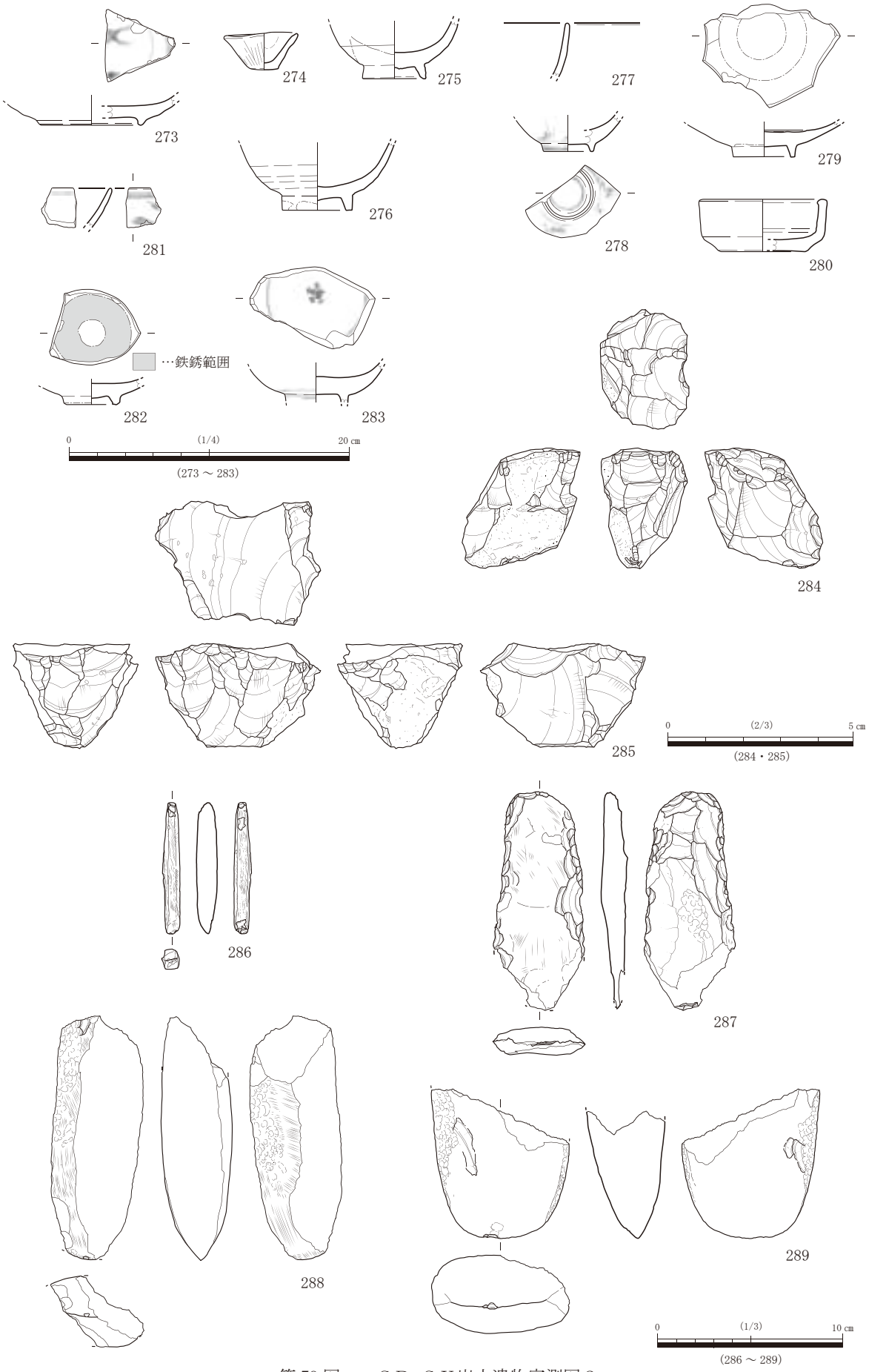


<土層注記>ＳＸ１（調査３区と共通）
①層：10YR4/3暗褐色土　締まり強い　粘性やや弱い　砂粒・ローム粒子多く含む　基本土層2層由来
②層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　混入物ほとんどなし
③層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い　砂少量含む
④層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い　砂粒・ローム粒多く含む　黒褐色土混入
⑤層：10YR3/2暗褐色土　締まり強い　粘性強い　砂粒・ローム粒多く含む　部分的にブロック状に締まる
⑤’層：基本土層5層ブロックが混じる
⑥層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性強い　砂粒やや多く含む
⑥’層：⑥層より砂粒やや少ない
⑦層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　ローム粒子⑧層より小さい
　　ロームブロック・ニガやや多く混じる
⑧層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性弱い　ニガ・ロームブロック（2～5cm）がやや多く混じる
⑧’層：⑧層よりロームブロックより多い

<土層注記>ＳＤ４
①層：①層　10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い
　　砂粒（ローム粒）・焼土粒・炭化物（1mm以下）を多く含む
　　②層　10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い
　　砂粒（ローム層）・焼土粒・炭化物（1mm以下）多く含む　黒褐土混ざる
②層：③層　10YR3/3暗褐色土　締まりやや弱い　粘性やや弱い
　　砂粒（ローム層）・焼土粒・炭化物（1mm以下）多く含む　部分的にブロック状にしまる
　　④層　10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　砂粒（ローム粒）・焼土粒・炭化物（1mm以下）多く含む　黒褐色土混　部分的にしまる
③層：⑤層　10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　砂粒（ローム粒）・焼土粒・炭化物（1mm以下）少量含む　黒褐土少量混ざる　褐色土多く混ざる
　　⑥層　10YR2/3黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い
　　砂粒（ローム粒）・焼土粒・炭化物（1mm以下）含む
④層：⑦層　10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　砂粒（ローム粒）・焼土粒・炭化物（1mm以下）微量含む
　　⑧層　10YR2/3黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い
　　砂粒（ローム層）・焼土粒・炭化物（1mm以下）微量含む　ニガ土混ざる
⑤層：⑨層　10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　2×2cm大の黄褐色をブロック状に多量に含む
　　白ニガをわずかに含む
　　⑩層　10YR2/1黒褐色土　締まりやや強い　粘性弱い　砂を多く含み、4×4cm大の黄褐色土ブロックを多量に含む
　　⑪層　10YR2/3黒褐色土　締まり弱い　粘性弱い　砂質が2層よりも強い　白ニガをブロック状に多く含む
⑥層：⑫層　10YR2/3黒色土　締まりやや強い　粘性弱い　きめの細かい砂を含む　白ニガをブロック状に含む　下層のロームブロックを少し含む



第 78 図　　ＳＤ･ＳＸ遺構・出土遺物実測図１



第 79 図　　ＳＤ・ＳＸ出土遺物実測図２

（４）近現代の遺構・遺物（第 74・77 図～第 79 図）

基本土層２層～３層中において確認された溝である。調査３区では多くの溝状遺構検出時において、プランを囲むように耕作時の撹乱（いも穴）を確認しているが、調査４区・５区では溝状遺構に沿うような撹乱を確認することはあまりなかった。溝状遺構内において取り上げた遺物には良好な資料を包含していた。

ここでは主要なＳＤ、ＳＸの所見及びＳＤ、ＳＸで特徴的な出土遺物の所見を記すこととする。

①溝状遺構

ＳＤ２（第 77 図）

ＳＤ２は調査４区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 26.2 m、幅約 0.65 m、検出面からの深さ 0.28 mを測る。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は４層に分けることができた。実測可能な遺物がなかったため、覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ 12（第 77 図・第 78 図）

ＳＤ 12 は調査４区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 24.3 m、幅約 1.2 m、検出面からの深さ 0.15 mを測る。調査５区との境界付近でプランが不明瞭なまま収束したため、調査５区までは伸びないものと捉えた。ＳＤ３、ＳＤ 12、ＳＸ１と重複している。先後関係はＳＤ 12 →ＳＤ１・ＳＸ１→ＳＤ３・ＳＸ１と捉えている。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は１層だが、色調がとても淡く、最後まで遺構とするか迷ったものである。

269 は砂岩製の磨製石斧である。270 は安山岩製の打製石斧である。混入と捉えている。覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ１（第 77 図・第 78 図）

ＳＤ１は調査４区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 27.5 m、幅約 1.33 m、検出面からの深さ 0.6 mを測る。調査５区に向かって伸びるが、削平されているため、検出は４区でとどまっている。ＳＤ３、ＳＤ 12、ＳＸ１と重複している。先後関係はＳＤ 12 →ＳＤ１・ＳＸ１→ＳＤ３・ＳＸ１と捉えている。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は５層に分けることができた。

264 は二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鏃。混入と捉えている。重複関係､覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ３（第 77 図）

ＳＤ３は調査４区中央で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 25.0 m、幅約 0.56 m、検出面からの深さ 0.26 mを測る。ＳＤ１、ＳＸ１と重複している。先後関係はＳＤ１・ＳＸ１→ＳＤ３・ＳＸ１と捉えている。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。覆土は２層に分けることができた。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ５～11（第 77 図）

ＳＤ５～ 11 は調査４区西側で南西から北東方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報

告する。遺構規模は長さ約 2.7 ～ 10.0 m、幅約 0.15 ～ 0.30 m、検出面からの深さ 0.1 ～ 0.15 mを測る。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は１層。出土遺物はなかった。覆土の色調や規模から近現代の畑の畝ではないかと推測している。

ＳＸ１（ＳＤ４）（第 77 図～第 79 図）

ＳＸ１（ＳＤ４）は調査４区西側で南東から北西方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 35.0 m、幅約 4.10 m、検出面からの深さ 0.84 mを測る。ＳＤ１、ＳＤ３、ＳＤ 12 と重複している。先後関係はＳＤ 12 →ＳＤ１・ＳＸ１→ＳＤ３・ＳＸ１と捉えている。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行関係にある。ＳＤ４の覆土は 12 層、ＳＸ１の覆土は８層に分けることができた。ＳＤ１やＳＤ３と交差しており、同時期のものと考えている。調査３区のＳＸ１と同一のものである。断面は北東から緩やかに落ち込み、段を成すごとに急傾斜し、南西側に最深部をもつ。

ＳＸ１とＳＤ４の区別は断面図を作成したポイントでは可能だが平面での区別は難しく、翌年の３区調査時に見分けようと試みたが、南側では断面での区別も付かない状況であった。したがって、本来同一の遺構だが、ある時期に４区側で埋没しかけた溝を西側のＳＸ１部分だけ掘り直したのではないかと推定している。つまり、ＳＸ１は２時期に分けられ、掘り直された時に、埋没したまま残った部分がＳＤ４ではないかと思われる。区画溝もしくは水路ではないかと推定しており、覆土上層の特徴から、戦後の圃場整備が行われた際に最終的に埋め戻されたものと考えている。

265 は深鉢の胴部下半から底部の破片である。縄文時代早期のものと思われる。266 は瓦質の擂鉢の口縁部破片である。267 は二等辺三角形をしている凹基式の黒曜石製の打製石鏃。268 は蛇紋岩製の磨製石斧である。281 は磁器の染付碗（青花）である。漳州窯系と思われる。282 は白磁の碗である。283 は磁器の染付碗である。コンニャク印判で五弁花が付けられている。

284・285 は黒曜石製の石核である。286 は蛇紋岩製の片刃の磨製石斧もしくは石鑿と思われる。287 は結晶片岩製の磨製石斧と思われる。288 は砂岩製の両刃の磨製石斧である。289 は安山岩製の両刃の磨製石斧である。

ＳＤ 29（第 77 図）

ＳＤ 29 は調査５区西側で南東から北西方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 2.70 m、幅約 2.12 m、検出面からの深さ 0.33 mを測る。ＳＸ１と重複している。先後関係はＳＤ 29 →ＳＸ１と捉えている。覆土は３層に分けることができた。新たな遺構名を付けているが、ＳＤ４と同一のもので、ＳＸ１として掘り直した際に埋没したまま残った部分と思われる。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ 13・14（第 77 図・第 78 図）

ＳＤ 13・14 は調査５区中央で南西から北東方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報告する。遺構規模は長さ約 4.2 ～ 8.5 m、幅約 1.75 ～ 2.3 m、検出面からの深さ 0.17 ～ 0.26 mを測る。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は４層～５層に分けることができた。

271 は二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鏃。混入と捉えている。覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ 20・24・25（第 77 図・第 79 図）

ＳＤ 20・24・25 は調査５区西側で南東から北西方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報告する。遺構規模は長さ約 9.80 ～ 10.6 m、幅約 1.26 ～ 3.40 m、検出面からの深さ 0.44 ～ 0.76 mを測る。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は４層～８層に分けることができた。先後関係はＳＤ 25 →ＳＤ 24 →ＳＤ 20 と捉えている。ＳＤ 25 を３時期にわたり掘り直したものと推定している。

273 はＳＤ 20 から出土した磁器の染付皿である。肥前系と思われる。277 はＳＤ 24 から出土した陶器の碗である。278 はＳＤ 24 から出土した磁器の染付碗である。279 はＳＤ 24 から出土した青磁の皿である。

ＳＤ 26（第 77 図）

ＳＤ 26 は調査５区西側で南東から北西方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 5.0 m、幅約 1.06 m、検出面からの深さ 0.19 mを測る。ＳＤ 20・ＳＤ 24・25 と重複している。先後関係はＳＤ 26・ＳＤ 25 →ＳＤ 24 →ＳＤ 20 と捉えている。覆土は２層に分けることができた。遺構名を分けたが、ＳＤ 25 が西側に折れた部分と思われる。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ 27（第 77 図）

ＳＤ 27 は調査５区西側で南西から北東方向へ伸びる。遺構規模は長さ約 2.0 m、幅約 0.84 m、検出面からの深さ 0.24 mを測る。ＳＤ 24･25 と重複している。先後関係はＳＤ 27 →ＳＤ 25 →ＳＤ 24 と捉えている。覆土は２層に分けることができた。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

ＳＤ 22・23・19・ＳＸ５（第 77 図～第 79 図）

ＳＤ 22・23・19・ＳＸ５は調査５区西側で南西から北東方向へ伸びる。一連の溝状遺構と考えられるため、まとめて報告する。遺構規模は長さ約 6.90 ～ 25.1 m、幅約 0.80 ～ 3.80 m、検出面からの深さ 0.44 ～ 0.46 mを測る。調査４区・５区において検出した溝状遺構と平行もしくは直行する関係にある。覆土は３層～５層に分けることができた。先後関係はＳＤ 22・23 →ＳＤ 19 →ＳＸ５と捉えている。ＳＤ 22・23 を３時期にわたり掘り直したものと推定している。

272 は二等辺三角形をしている凹基式の黒曜石製の打製石鏃。274 はＳＤ 22 から出土した鉢形をしたミニチュア土器である。外面にハケ目が施されている。275 はＳＤ 22 から出土した陶器の碗である。276 はＳＤ 22 から出土した白磁の碗である。280 はＳＤ 28 から出土した青磁の火入である。肥前系と思われる。いずれも混入と思われる。

ＳＤ 17（第 77 図）

ＳＤ 17 は調査５区西側に位置する。遺構規模は長さ約 3.80 ～ 6.00 m、幅約 1.50 ～ 2.20 m、検出面からの深さ 0.54 ～ 0.59 mを測る。一部が交差しているが一連のものと推定した。覆土は９層に分けることができた。

実測可能な遺物がなかったため、重複関係、覆土の色調、類例等から当該期の区画溝もしくは水路ではないかと推定している。

（５）時期不明の遺構・遺物（第 74・80 図）

①土坑

ＳＫ 14（第 80 図）

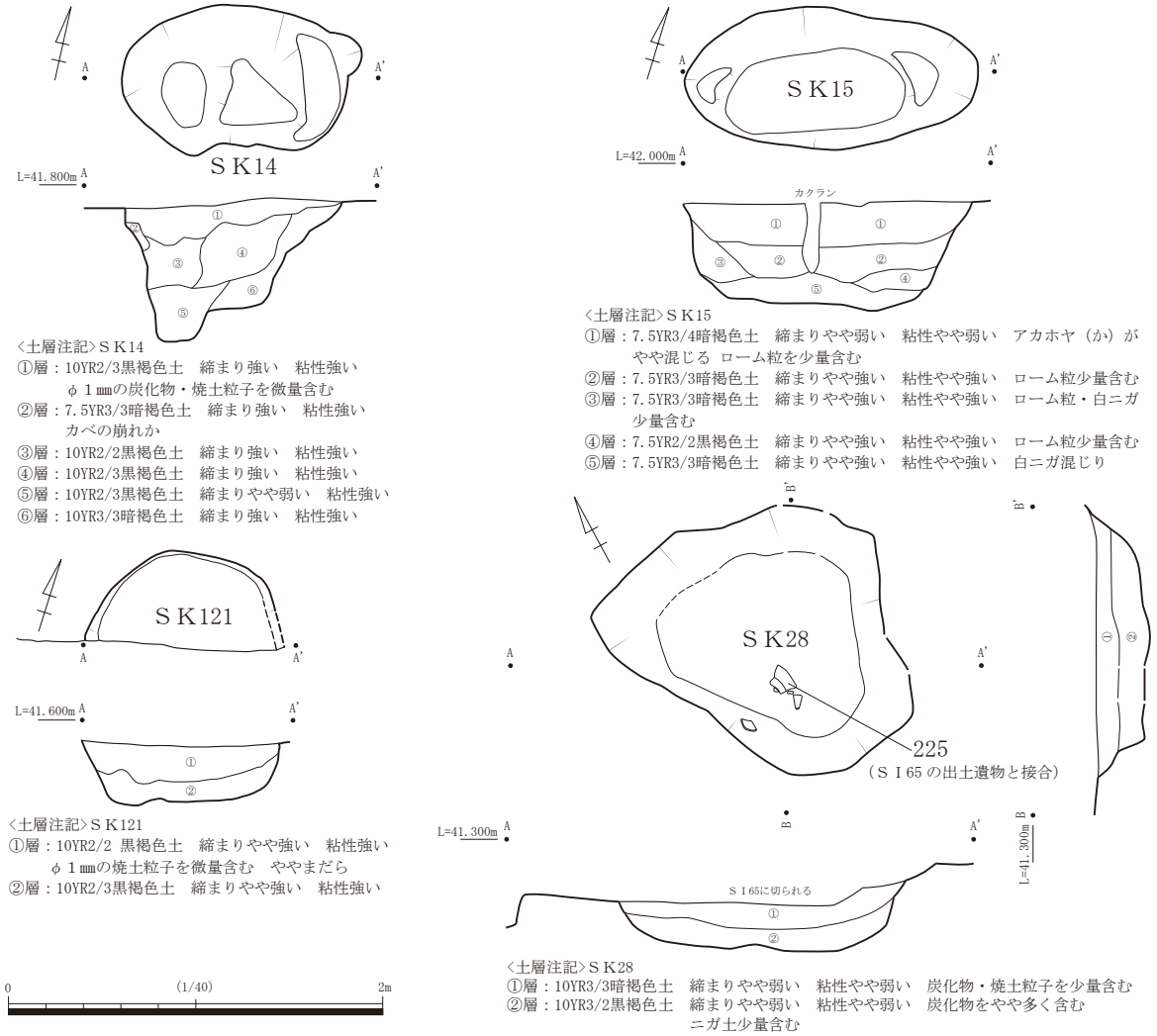
ＳＫ 14 はＯ 12 に位置する。遺構規模は長軸約 1.2 m、短軸約 0.78 m、検出面からの深さ 0.78 mを測り、平面形態はややいびつな楕円形、断面形態はいびつな台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は６層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している。

ＳＫ 15（第 80 図）

ＳＫ 15 はＪ 13・14 に位置する。遺構規模は長軸約 1.55 m、短軸約 0.76 m、検出面からの深さ 0.58 m を測り、平面形態は楕円形、断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は５層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している

ＳＫ 121（第 80 図）

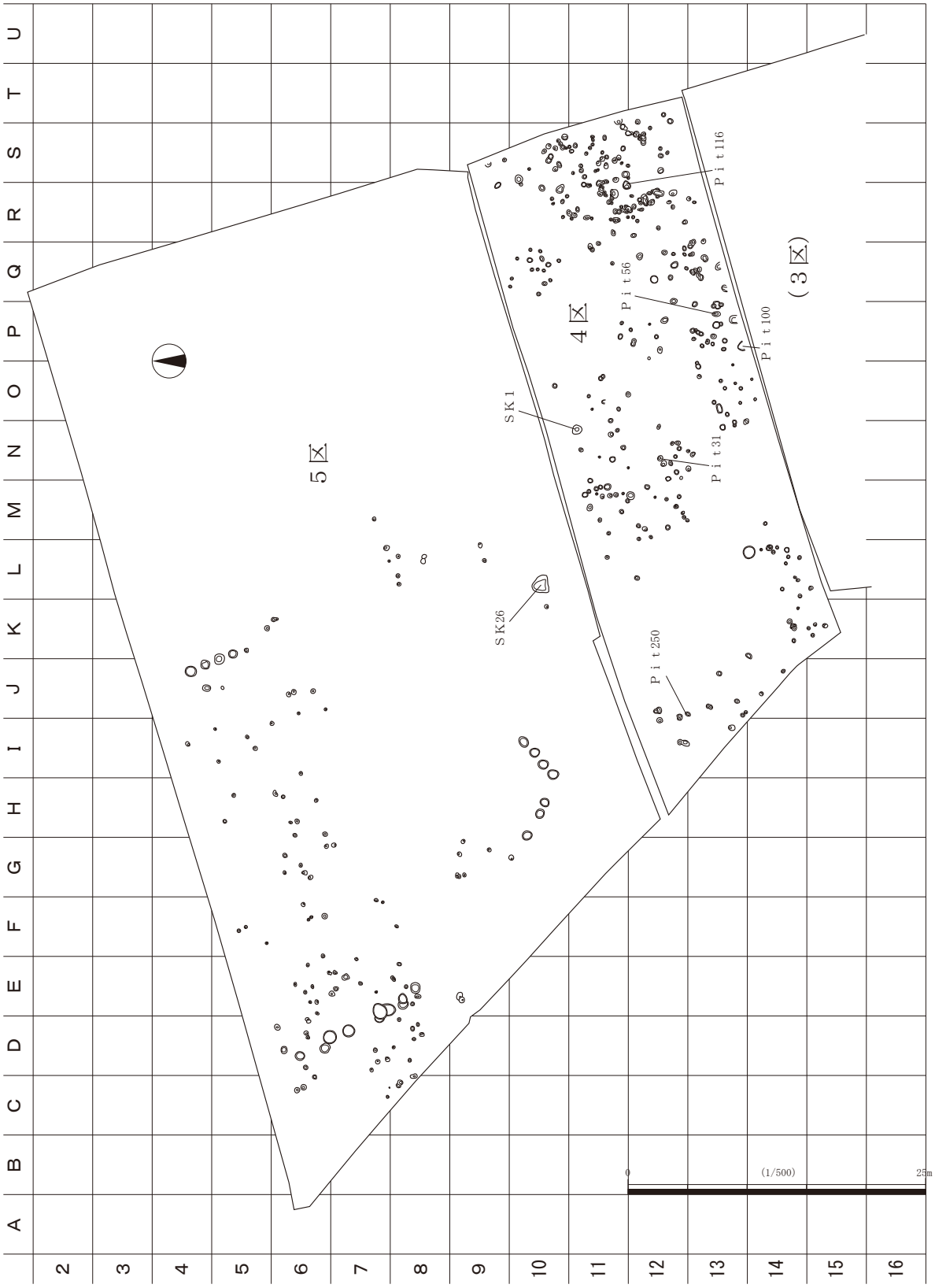
ＳＫ 121 はＳ 12・13 に位置する。遺構規模は長軸約 1.06 m、検出面からの深さ 0.36 mを測る。平面形態は円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ東西方向である。覆土は２層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している。



第 80 図　　ＳＫ14・15・121・28 遺構実測図

ＳＫ 28（第 80 図）

ＳＫ 28 はＦ・Ｇ９に位置する。遺構規模は長軸約 1.56 m、短軸 1.38 m、検出面からの深さ 0.47 mを測る。平面形態はいびつな円形を呈する。断面形態は台形を呈する。長軸はほぼ南北方向である。覆土は２層に分けることができた。出土遺物がなかったため、当該期の遺構と推定している。



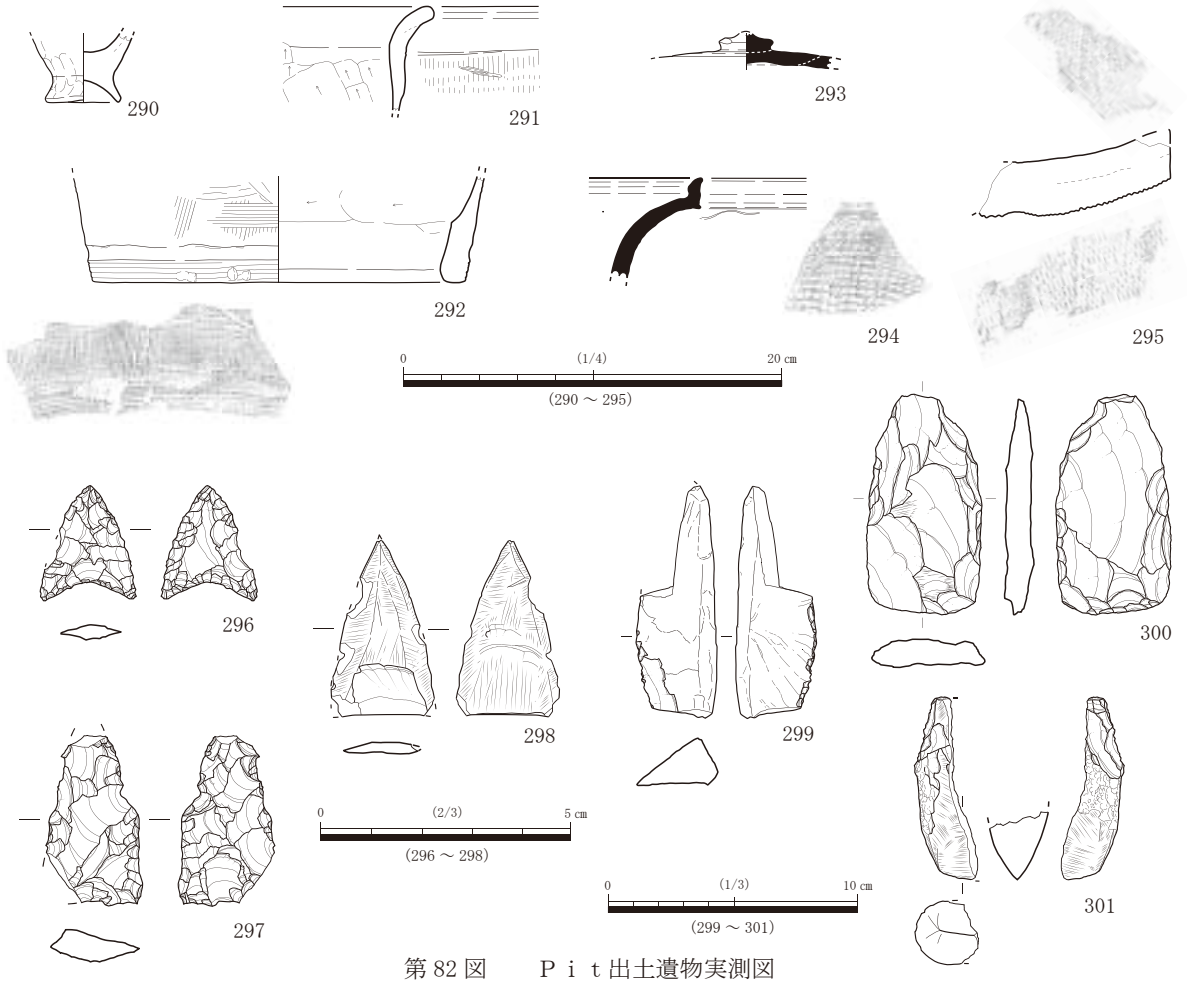
第 81 図　　４・５区Ｐｉｔ配置図

（６）Ｐｉｔ出土遺物（第 81・82 図）

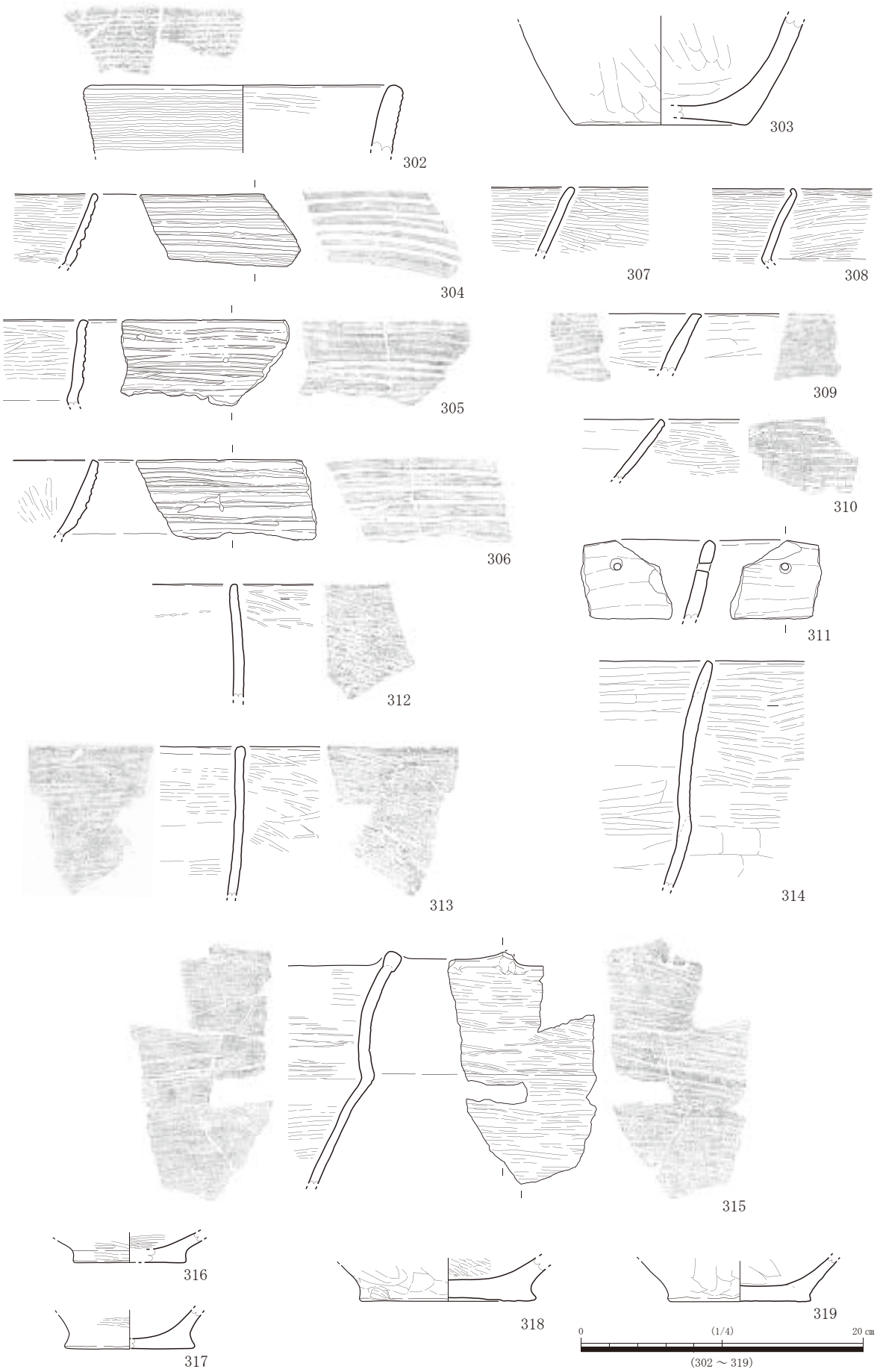
調査４区・５区においては多数のピットを検出した。いずれの遺構覆土も黒褐色～暗褐色を呈しており、混入物、土質にそれぞれ若干の違いがあったが、遺構の正確な時期は解らなかった。ここではピット内から出土した遺物のうち、土器５点、瓦１点、石器６点を図示した。

290 は脚台付甕もしくは台付鉢のミニチュア土器である。弥生時代後期のものと思われる。291 は土師器の長胴甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部はやや斜め上向きに開く。胴部外面に縦方向のハケ目、内面に斜め方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデが施されている。胴部の器壁がやや薄い。９世紀前葉から中葉のものと思われる。内面から口縁端部にかけてススが付着している。292 は土師器の甑であろうか。底部が残存していた。外面にハケ目が明瞭に残り、内面は深いケズリが施されている。293 は須恵器の蓋である。つまみはやや偏平な擬宝珠形のもの。294 は須恵器の壷の口縁部から頸部と思われる。外面に格子目タタキ、内面には回転ナデが残っている。295 は平瓦で凸面に縄目、凹面に布目痕が残る。

296 はＰｉｔ 56 から出土した二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鏃。297 はＰｉｔ 116 から出土した二等辺三角形をしている平基式の黒曜石製の打製石鏃。298 はＳＫ１から出土した二等辺三角形をしている凹基式の磨製石鏃で緑色片岩製である。299 はＰｉｔ 100 から出土した頁岩製の礫器と思われる。300 はＰｉｔ 229 から出土した安山岩製の打製石斧である。301 はＰｉｔ 250 から出土した蛇紋岩製の両刃の磨製石斧である。



第 82 図　　Ｐｉｔ出土遺物実測図



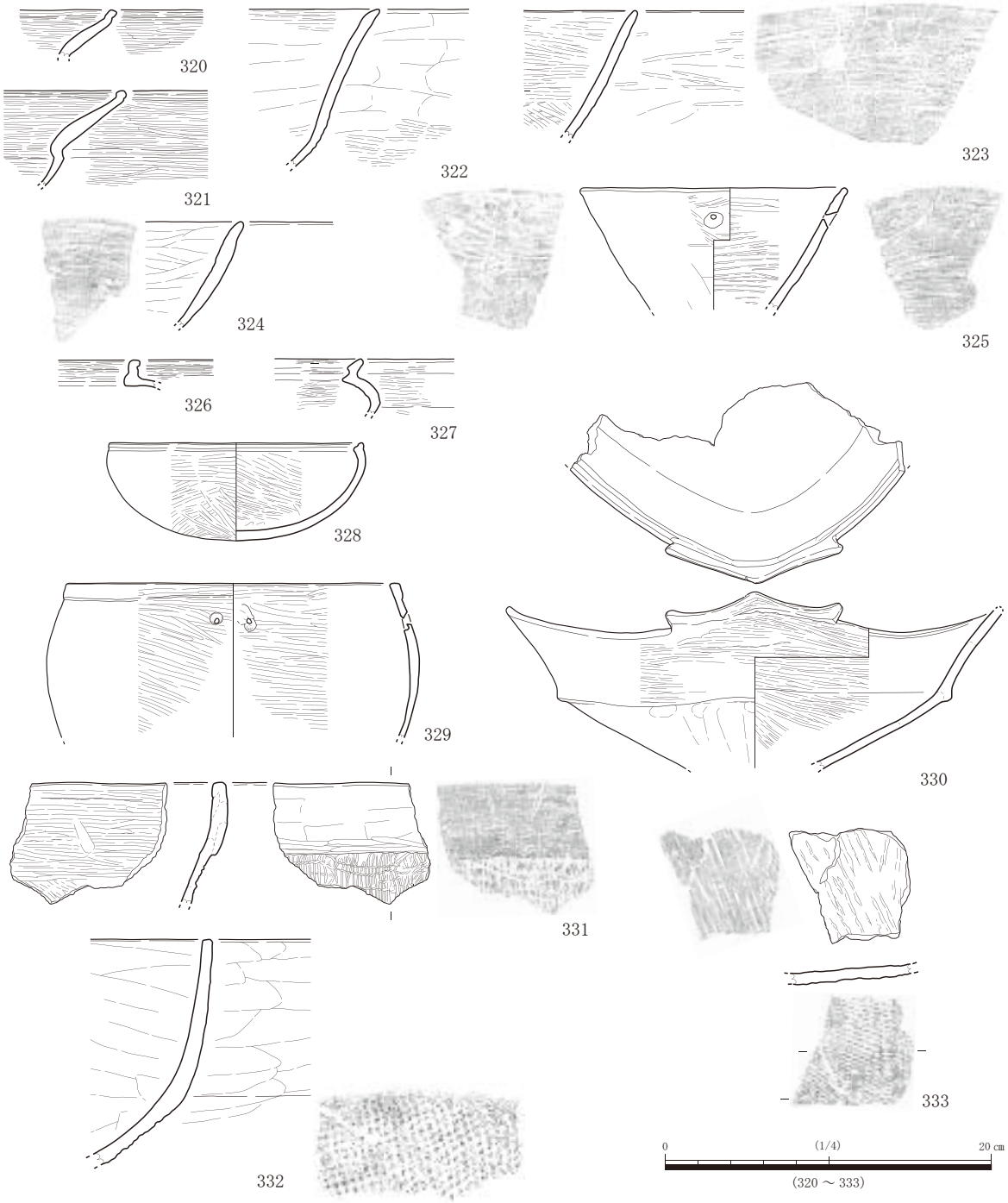
第 83 図　　遺構外出土遺物実測図１

（７）４区・５区遺構外出土遺物（第 83 図～第 91 図）

調査４区・５区の遺構外からは多量の遺物が出土している。現地調査では遺構外の出土遺物は、いずれもグリッド名と層位名を付けて取り上げている。整理作業の過程で種別、時期別に分類し、周辺遺構から出土した遺物との接合作業も行っている。ここでは、遺構出土遺物と接合することなかった土器 46 点、瓦１点、陶器１点、石器 96 点、玉類３点、鉄器５点を図示した。

①土器・瓦類（第 83 図～第 85 図）

302 は貝殻条痕文の深鉢の口縁部破片である。口縁部はやや斜め上方に直線的に開く。厚さは１㎝以上ある。外面に押引文、内面にナデとミガキが施される。303 は深鉢の底部～胴部下半である。厚さは１㎝以上ある。



第 84 図　　遺構外出土遺物実測図２

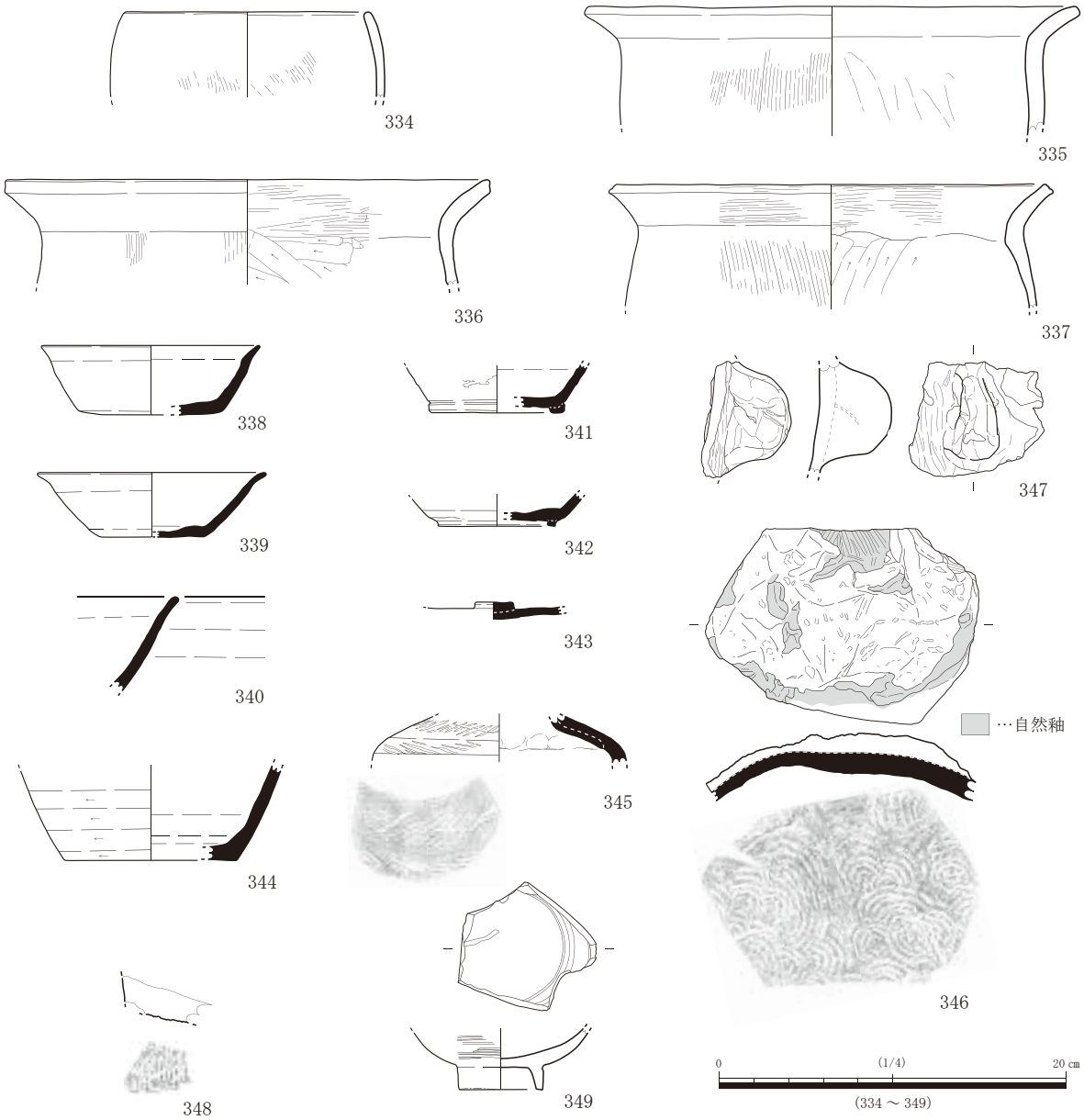
内外面に縦方向のやや強いナデが施されている。いずれも縄文時代早期のものと思われる。

304 ～ 306 は深鉢と思われる口縁部破片である。304 は５条、305 は８条、306 は６条口縁部外面に沈線がめぐる。内面は丁寧なミガキが施されている。307 は深鉢もしくは浅鉢の口縁部、308 は浅鉢の口縁部破片である。内外面ともに丁寧な横ミガキが施される。309 ～ 311 は深鉢もしくは浅鉢の口縁部破片である。304 ～ 308 に比べて調整が粗雑であり、貝殻条痕調整が明瞭に残っている。311 は穿孔されている。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

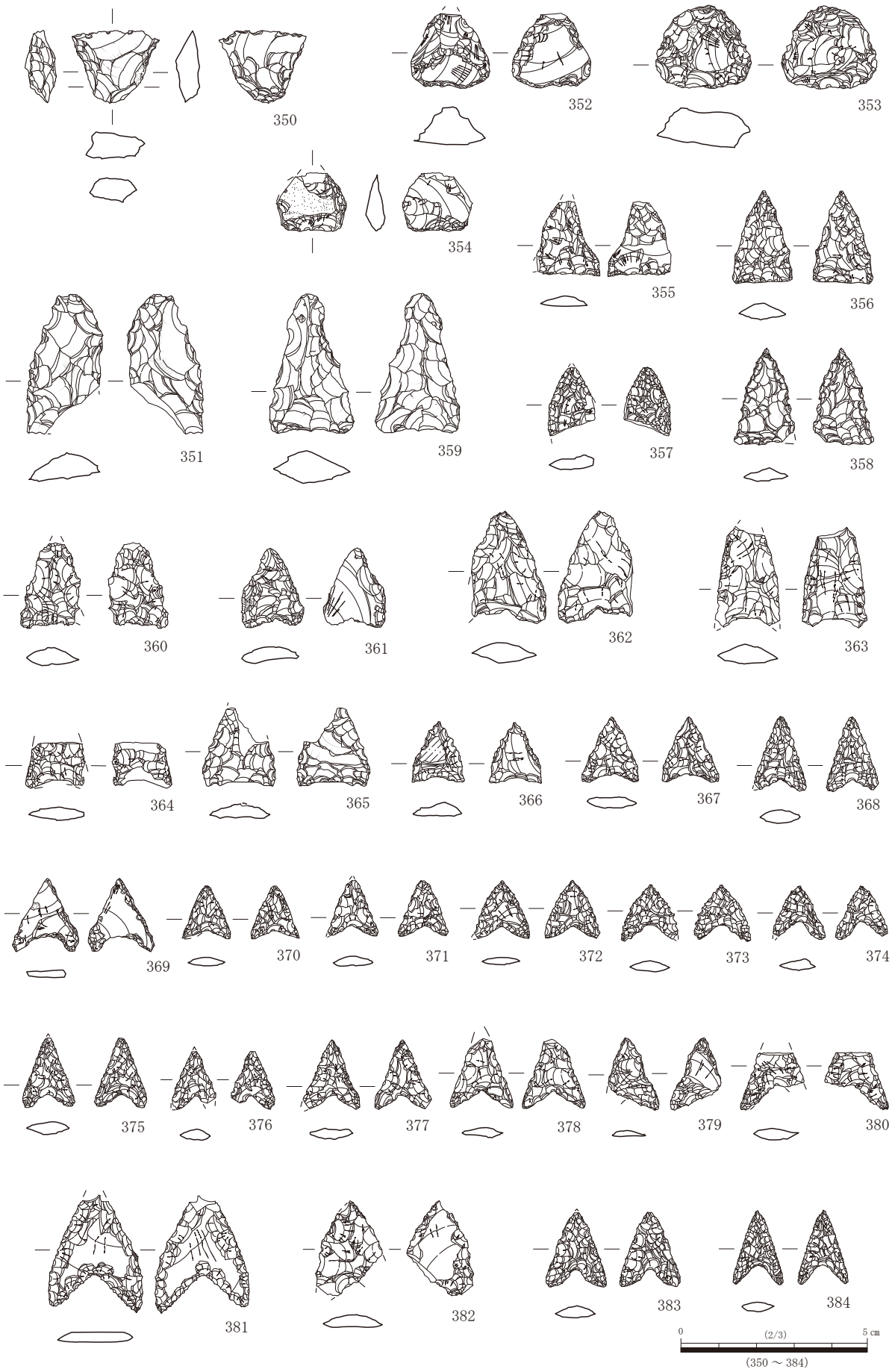
312・313 は深鉢の口縁部破片である。外面にやや斜めの貝殻条痕調整が明瞭に残る。314 は深鉢の口縁部から胴部上半である。胴部で屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。外面にやや横方向の貝殻条痕調整が施されている。315 は深鉢の口縁部から胴部上半であり、胴部で屈曲し口縁部は外反する。口縁部は波状である。外面に横方向の貝殻条痕調整が施されている。いずれも縄文時代晩期前半以降のものと思われる。

316 ～ 319 は深鉢の底部である。320・321 は浅鉢の口縁部から胴部である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施され、口縁に１条沈線がめぐる。いずれも縄文時代後期後半から晩期前半のものと思われる。

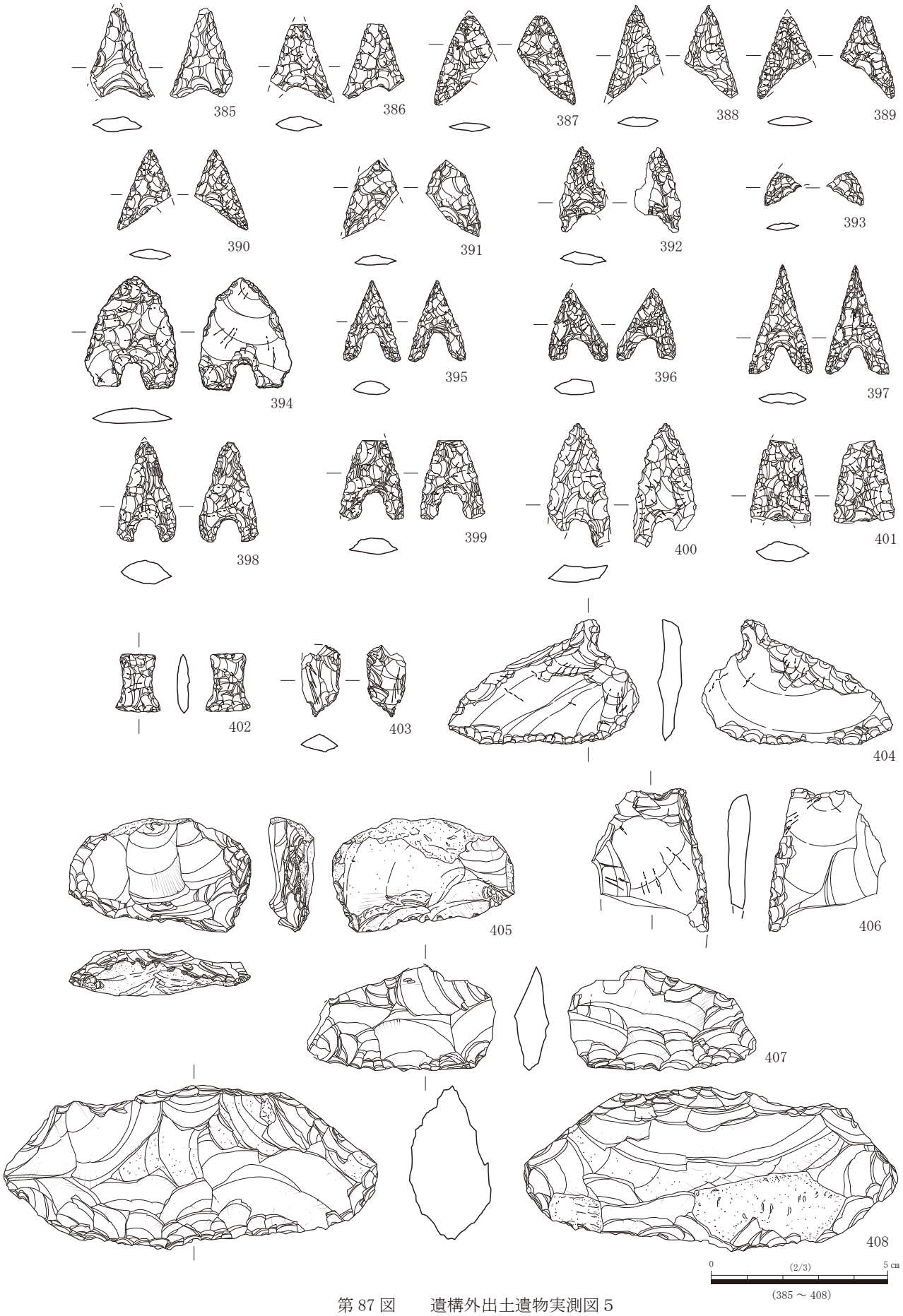
322・323 は深鉢の口縁部から胴部である。外面に横方向の貝殻条痕調整が施されている。324 は浅鉢の口



第 85 図　　遺構外出土遺物実測図３



第 86 図　　遺構外出土遺物実測図４



第 87 図　　遺構外出土遺物実測図５

第 88 図　　遺構外出土遺物実測図６

第 89 図　　遺構外出土遺物実測図７

縁部と思われる。325 は鉢の口縁部から胴部である。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整が施されている。焼成後、外面から穿孔されている。326・327 は浅鉢の口縁部破片である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施されている。326 は口縁外面に１条沈線がめぐる。328 は浅鉢である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施されており、口縁部の内外面にそれぞれ１条沈線がめぐる。329 は鉢である。外面に丁寧なやや斜めのミガキが施されており、口縁部の外面に沈線状のものが一部ある。焼成後、外面から穿孔されている。いずれも縄文時代晩期前半以降のものと思われる。

330 は浅鉢である。残存部から方形のものと推定できる。口縁部にはリボン状突起が付き、口縁部内面に１条沈線がめぐる。内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施されている。331 ～ 333 はいわゆる組織痕土器の浅鉢と思われる。331 は口縁部から胴部上半で、内面は丁寧な横方向のミガキが施されている。口縁部外面は横方向のナデが施されており、胴部外面には型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕がみられる。332 は口縁部から胴部下半で、内面は横方向のナデが施されている。口縁部外面は横方向のケズリが施されており、胴部外面には型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕がみられる。333 は胴部と思われる。内

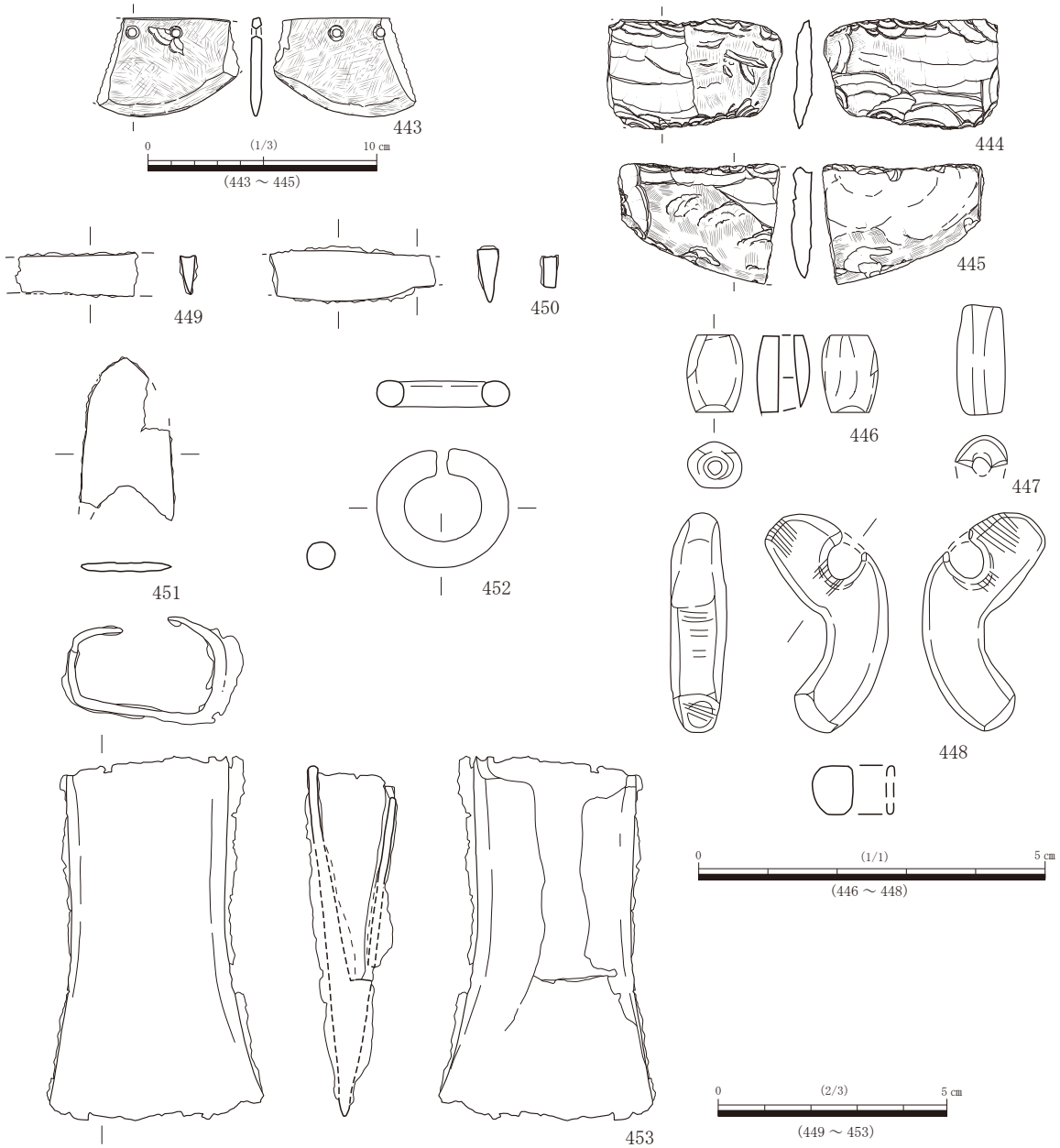
第 90 図　　遺構外出土遺物実測図８

面は貝殻条痕調整ののちナデが施されている。外面には型自体に由来すると考えられている網代の圧痕がみられる。いずれも縄文時代晩期前半以降のものと思われる。

334 は弥生土器の鉢の口縁部から胴部である。外面に一部ハケ目が残るが、丁寧な横ナデが施されている。弥生時代後期のものと思われる。

335 ～ 337 は土師器の長胴甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部はやや斜め上向きに開く。胴部外面に縦方向のハケ目、内面に縦方向もしくは斜め方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデが施されている。336・337 は胴部の器壁がやや薄い。個体により時期は異なるが、９世紀前葉から中葉の所産に収まるものと思われる。

338・339 は須恵器の坏である。平底の底部はヘラ切り後、ナデがみられる。340 は須恵器椀の口縁部から椀部破片と思われる。341・342 は須恵器の椀である。高台は貼り付け。343 は須恵器の蓋である。つまみは偏平なもの。344 は須恵器の長胴壷の底部破片と思われる。345 は須恵器の長胴壷の肩部破片と思われる。外面には平行タタキ目ののち、回転ナデが施されている。346 は須恵器の甕の胴部破片と思われる。外面には



第 91 図　　遺構外出土遺物実測図９

平行タタキ、内面に同心円のあて具痕が残る。外面には厚い自然釉が付いている。個体により時期は異なるが、９世紀中葉以降のものと思われる。

347 は土師器の甕もしくは甑の把手部である。粘土紐を折り曲げて胴部に貼付していることがよくわかる資料である。内面には縦方向のケズリが施されている。９世紀前葉から中葉のものであろうか。

348 は平瓦で凸面に縄目が残る。349 は陶器の碗である。

②石器類（第 86 図～第 91 図）

350 は３層から出土したチャート製の台形様石器である。351 は二等辺三角形をしている凹基式のチャート製の打製石鏃の未製品である。352 は二等辺三角形をしている平基式の黒曜石製の打製石鏃の未製品と思われる。353 は黒曜石製の加工痕のある石器である。354 は黒曜石製の加工痕のある剥片である。355 ～ 401 は打製石鏃である。355 ～ 358 は二等辺三角形をしている平基式。黒曜石製である。359 は二等辺三角形をしている凹基式で、凹基の状態はわずかに内湾する程度。安山岩製で未製品と思われる。360 ～ 366 は二等辺三角形をしている凹基式。凹基の状態はわずかに内湾する程度である。360・361・364・365 は黒曜石製、362・363・366・367 は安山岩製である。368 ～ 371 は二等辺三角形をしている凹基式。368 はチャート製、369 ～ 371 は黒曜石製である。372 ～ 374 はほぼ正三角形をしている凹基式。372・373 は黒曜石製、374 はチャート製である。375 ～ 383 は二等辺三角形をしている凹基式で、基部の抉りが三角状をしている。380 ～ 382 は脚部がやや長い。375・378・381 は安山岩製、376・379・380 は黒曜石製、377・382・383 はチャート製。384 ～ 393 は二等辺三角形をしている凹基式で、基部の抉りが三角状、脚部が長くなり先端が尖る。384・386・387・389・392・393 は黒曜石製、385・388 は安山岩製、390・391 はチャート製である。394 ～ 401 は二等辺三角形をしている凹基式で、基部の抉りがアーチ状、両脚部の先端が水平である。394 ～ 397・401 はチャート製、398 ～ 400 は安山岩製である。

402 は器種が解らず異形石器とした。黒曜石製である。403 は黒曜石製の二次加工のある剥片である。404 は安山岩製の石匙、405 は黒曜石製の石核で、スクレイパーに転用されている。406 ～ 408 はスクレイパー。406・408 は安山岩製、407 は黒曜石製である。409 ～ 414 は二次加工のある剥片で、409・410・412・413 は黒曜石製、411・414 はチャート製である。415・417・418 は黒曜石製、416 はチャート製の使用痕のある剥片である。419 は輝緑凝灰岩製の剥片。420 ～ 424 は黒曜石製の石核、425 は安山岩製の石核である。

426・427 はいわゆる「短冊形」と呼ばれてきた打製石斧。安山岩製である。428 ～ 434・436 ～ 438 はいわゆる「撥形」と呼ばれてきた打製石斧。437 は砂岩製で、他は安山岩製である。435 はいわゆる「分銅形」と呼ばれてきた打製石斧。砂岩製である。439 は粘板岩製の円盤形石器と思われる。440 は緑色片岩製の磨製石斧である。441 は砂岩製の両刃の磨製石斧である。442 は安山岩製の打製石斧の未製品である。磨石類に転用されている。

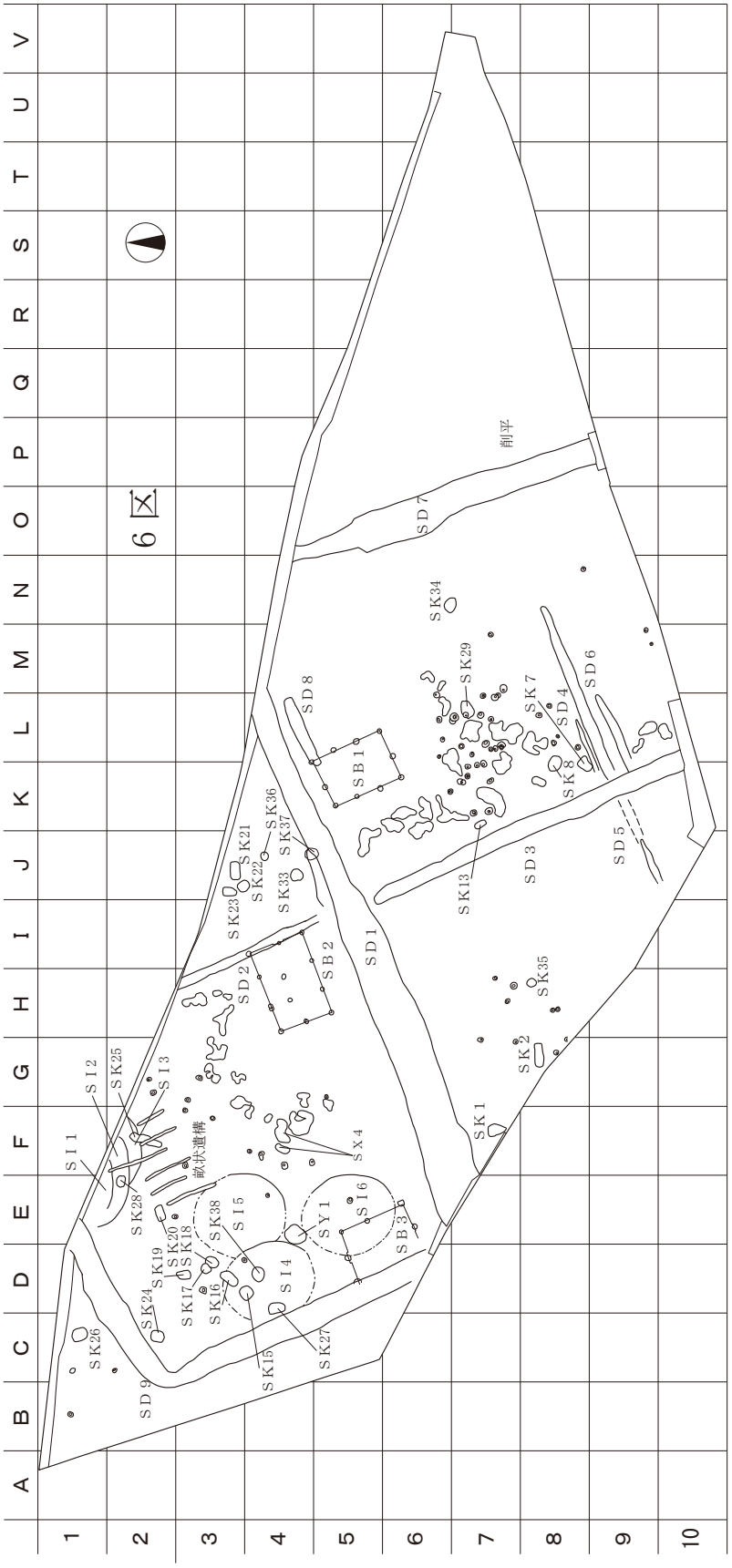
443 は粘板岩製の石庖丁である。孔径 0.5㎝、孔間 1.9㎝を測る。二つの孔は両面から穿孔されている。444・445 は石庖丁の未製品と思われる。444 は蛇紋岩製、445 は砂岩製である。

③玉類（第 91 図）

446・447 は管玉である。446 は緑色を呈し、全長 1.1㎝、幅 0.8㎝で孔径 0.2㎝を測る。447 は淡い緑色を呈し、全長 1.6㎝、幅 0.7㎝で孔径 0.3㎝を測る。448 は勾玉である。緑色を呈し、全長 3.2㎝、幅 1.8㎝で孔径 0.5㎝を測る。孔は一部が欠損している。

④鉄器類（第 91 図）

449・450 は刀子の破片と思われる。449 は刀身と茎の部分、450 は刀身の部分と思われる。451 は鉄鏃である。基部に抉入部をもつ。452 は青銅製の耳環である。排土の運搬中に偶然作業員が排土置場で見つけたものであるため、あくまで参考資料として掲載した。453 は３区出土の袋状鉄斧である。袋部の断面形が長方形で、基部より刃部の方が広い。



※重複関係にある遺構で線が細く表現されているものは、
一方より時期が古いと想定されるものである。

0　(1/500)　20m

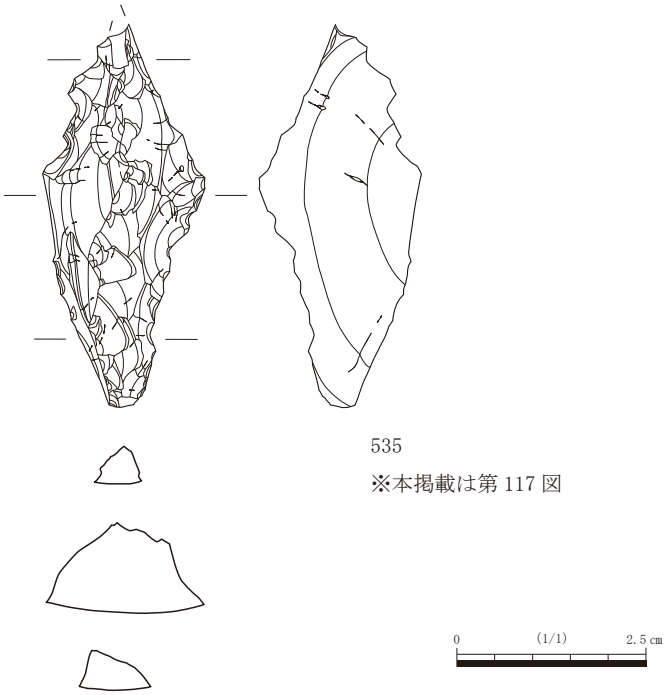
第 92 図　　6 区遺構配置図

第２節　調査６区

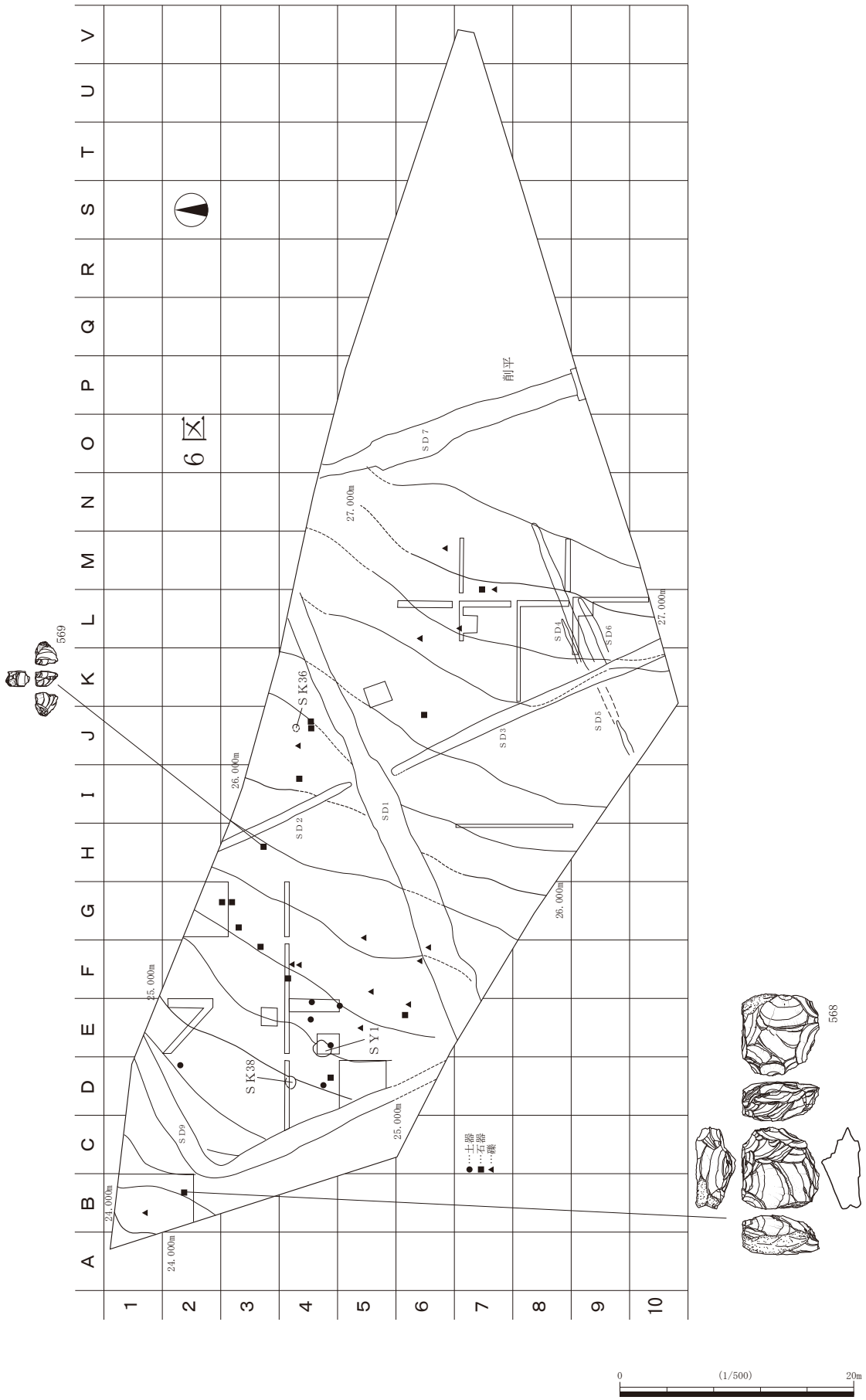
塔平遺跡６区の調査では、第 92 図に示す縄文時代、古代～中世、近世、近代にかけての遺構、及び旧石器を含めた各時代の遺物が検出された。図を見ても分かるように調査区の東側は後世の削平を激しく受けていたため遺構は滅失していた。調査前は田畑地としての利用があり、北西にかけて緩やかに傾斜する箇所であったが、圃場整備による土地改良で東側は言うまでもなく、西側でも削平の影響を多大に受けていた。平成 22 年３月に当初調査範囲としていた西の約 1,800㎡分の確認調査でもその影響の大きさを表す結果を示し、耕作土、圃場整備土の下はローム層が占めていた。そこで、本節では調査範囲の絞り込み後の調査区として、各時代における調査成果を記述する。

（１）旧石器時代の遺物（第 93 図～第 95 図）

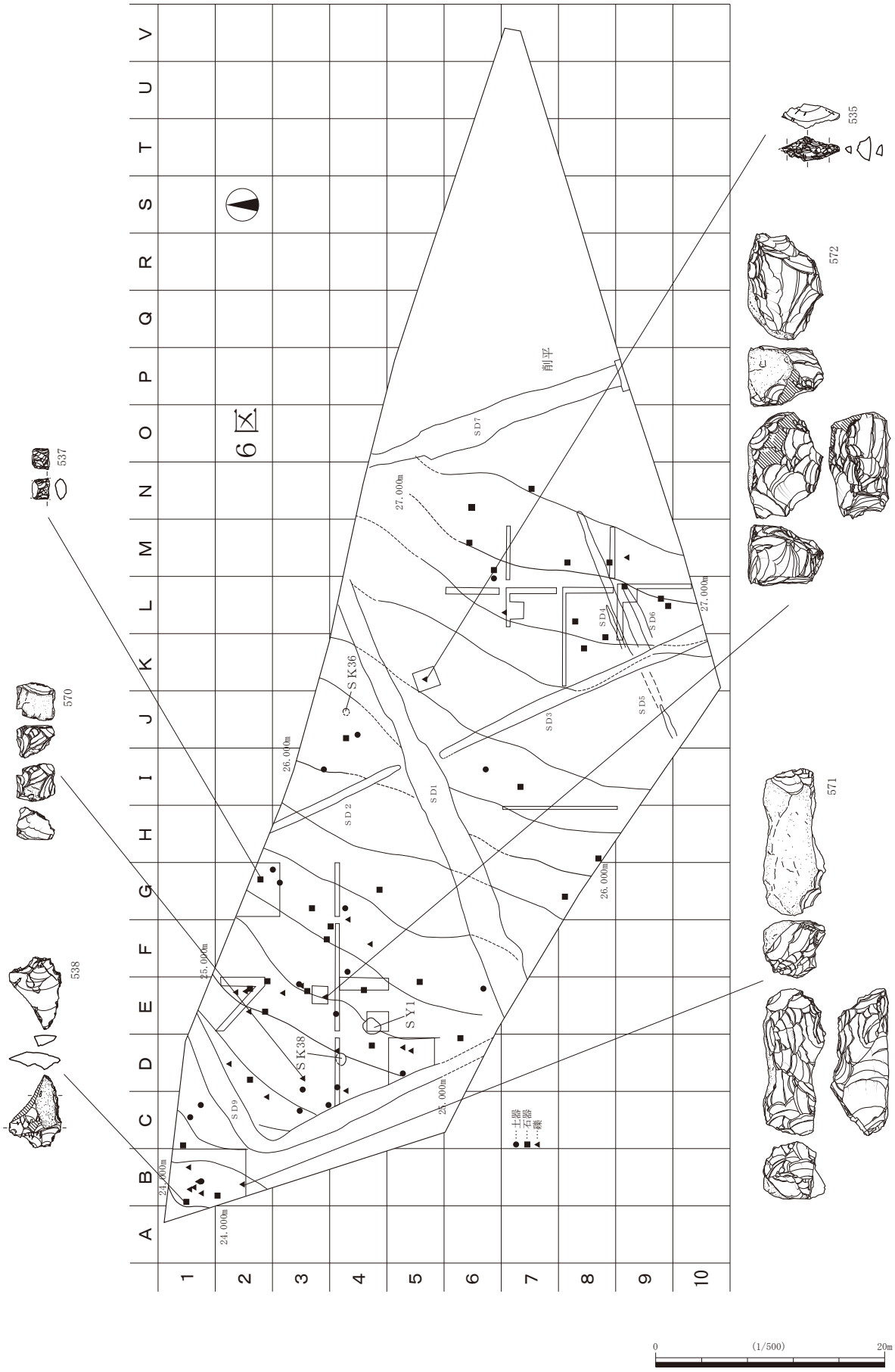
Ｋ５グリッドの５層（アカホヤ２次堆積層）下より、下図の三稜尖頭器を検出した。平成２４年度に「塔平遺跡１」として報告をまとめた調査１区・３区においても旧石器（三稜尖頭器２点、ナイフ形石器１点）が出土しており、これに加え当該調査区においても旧石器の存在が確認されたことから、出土点を中心とした５層以下のより慎重な掘削調査を試みたが、石器ブロックや炭化物集中部などの遺構は検出されなかった。しかし縄文期を含む、時期特定には至らない細片遺物の点在が確認されたため、６a 層、５層における出土遺物を第 94 図、第 95 図においてドットで示すこととした。なお、それぞれの遺物出土状況図は旧石器時代文化層、面を示すものではないことを追記しておく。その中で出土した三稜尖頭器に加え、出土層位が本来的な出土状態を示していなくとも、自然環境変化による影響からの遺物の上下動を勘案するとともに、資料観察を行った結果、縄文時代以前の可能性をもつ資料を第 94 図と第 95 図及び第 117 図と第 119 図で示している。参照されたい。



第 93 図　　６区遺物実測図（三稜尖頭器）



第 94 図　　６区６ａ層検出遺構配置図・遺物出土状況



第 95 図　　６区５層検出遺構配置図・遺物出土状況

（２）縄文時代早期の遺構・遺物（第 94 図～第 96 図）

遺構は基本層６a 層上面で土坑２基、集石１基を検出した。これら遺構内における遺物は集石の礫のみだが、遺物は基本層５層及び６a 層上面にて土器等の出土もあったが細片で実測が難しいものがほとんどであった。

本調査区からほど近い北東に位置する「櫛島遺跡」では、昭和 47 年度の調査において多数の炉穴、集石群が検出されている。さらには配置、遺物に特徴をもった遺構として紹介した国土交通省が実施主体の工事区間で調査した塔平遺跡調査３区、そして本報告書で紹介する調査４・５区においても炉穴、集石が検出されていることから、本調査区においても同様の遺構の検出を期待していたが、下記に示す３遺構の検出にとどまった。

各遺構について紹介する。

①土坑

ＳＫ 36（第 96 図）

Ｊ４グリッドに位置する。基本層５層掘削後、焼土粒子が多く混入するピット状の遺構を検出した。検出当初より、連結土坑の可能性を踏まえてＳＫとして調査することとした。その確認のために遺構北西部、及び南西部を掘り下げ、広がりの有無を調査した結果、痕跡は認められなかった。平面形は円形を呈し、径は約 0.48m、検出面からの深さは約 0.95m を測る。埋土は３層に分けられ、１層、２層は基本層６層ブロックが混入する。埋土３層の下層はロームブロックが混入する。全体的に炭化物を微量に含むが、焼土粒子の量は下層ほど少量になる。焼土塊は１、３層において確認できている。焼土粒子を多く含むピット状遺構である、という以外の情報が確認できず、用途は不明である。

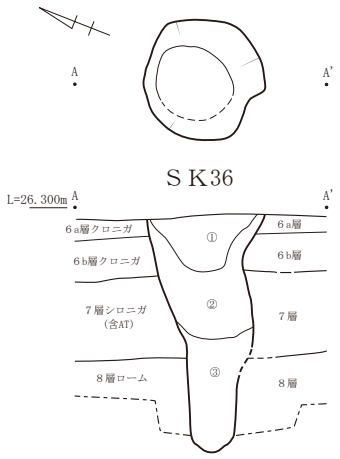
ＳＫ 38（第 96 図）

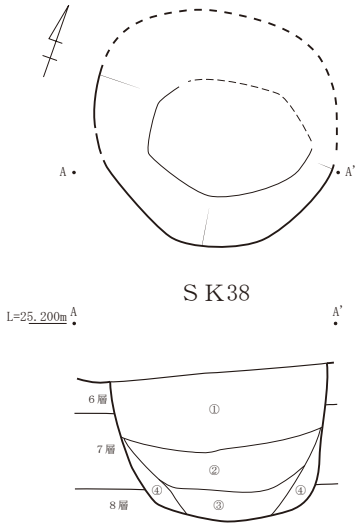
Ｄ４グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は台形状を呈する。径は約 0.88m、検出面からの深さは約 0.68m を測る。埋土は４層に分けることができ、基本層６層、７層土が混入する。遺物等は確認されていない。遺構検出時は黒褐色土で覆われており、埋土には基本層５層土（アカホヤ含む褐色土）が混入していない、また埋土が６層ブロックを主体として７層ブロックが混じることなどから層位的にみて縄文時代早期の遺構と捉えた。

②集石

ＳＹ１（第 96 図）

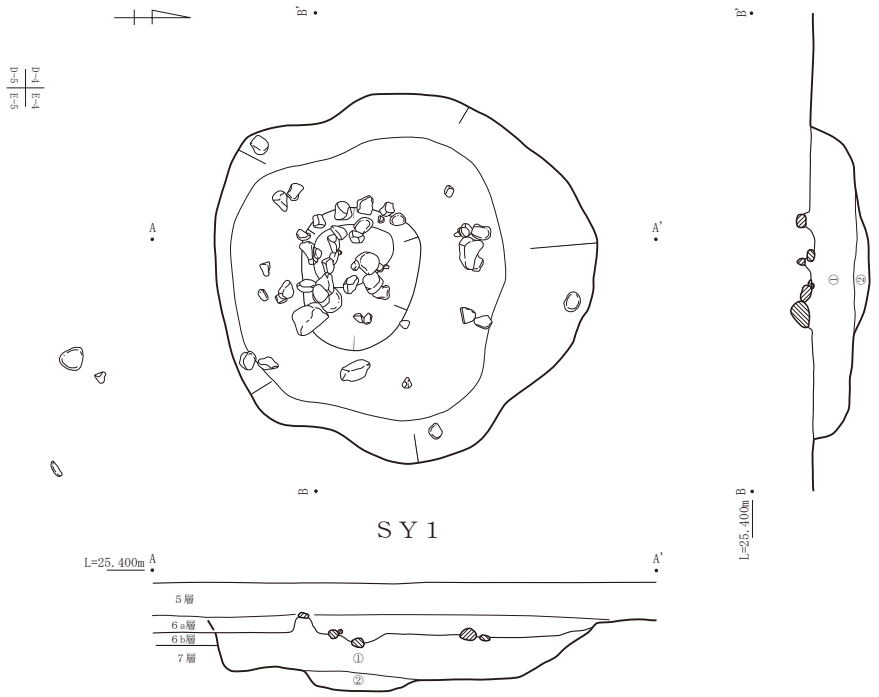
Ｅ４グリッドにて検出した。50 個程度の円礫、角礫で構成されており、扁平礫もわずかに含まれる。掘り込みの平面形は不整な円形を呈し、断面は浅い皿状、中央がやや窪んでいる。平面形の最大径は約 1.5m、検出面からの深さは約 0.23m を測る。礫は埋土１層の中位～上位にかけて多く見られる。また、埋土２層には炭化物、焼土粒子の混入が見られ、土坑内での火の使用を認めることができる。しかし、集石内の礫に、明瞭な赤変などは確認できなかった。





〈土層注記〉ＳＫ36
①層：5YR4/3にぶい赤褐色土　締まり強い　粘性やや強い
　　φ１～３cmの焼土塊・φ0.2～0.4cm大の焼土粒子非常に多い
　　炭化物微量　φ３cm大の６層ブロックやや混ざる
②層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　φ0.2～0.4cm大の
　　焼土粒子多い　炭化物微量　６層ブロック①層よりやや多く混ざる
③層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締まりやや強い　粘性強い　φ５cm大の焼土塊混ざる
　　φ0.2～0.5cm大の焼土粒子やや多い
　　炭化物微量　下層にロームブロック（10YR5/8）ローム粒子やや混ざる

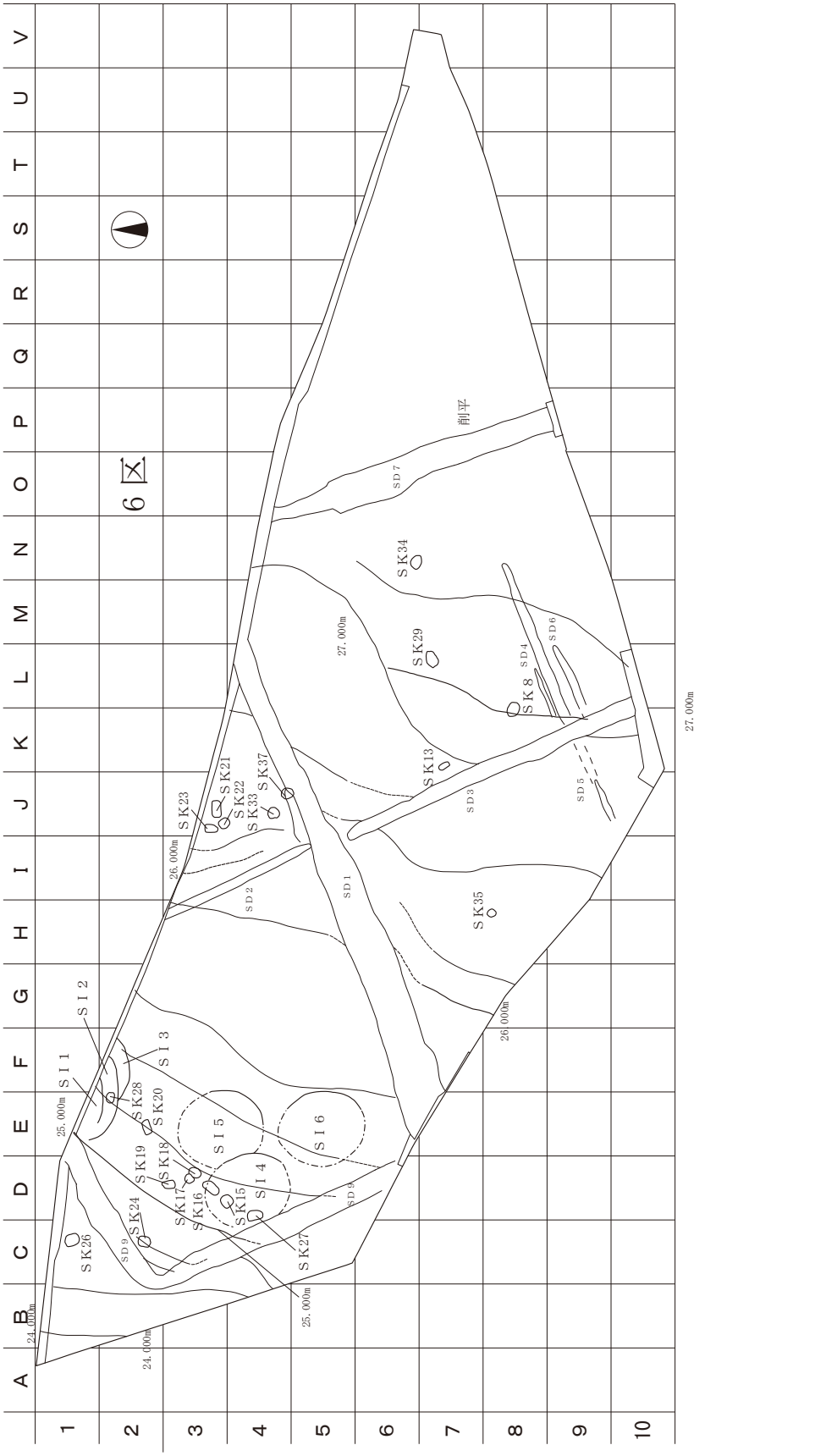
〈土層注記〉ＳＫ38
①層：10YR2/3黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
　　φ１～２mmの橙色粒子を少し含む　６層ブロック少し含む
②層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まり強い　粘性強い
　　φ１～２mmの橙色粒子多く含む　６層ブロック多く含む
　　７層ブロック少し含む
③層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い
　　φ１～２mmの橙色粒少し含む
④層：7.5YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性強い
　　小さい８層ブロック多く含む



〈土層注記〉ＳＹ１
①層：10YR2/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い
　　６a-b層ブロックと７層ブロック８：２　炭化物微量
　　集石レキはこの層に集中する
②層：10YR2/1黒色土　締まり強い　粘性強い
　　埋土は①層とそんなに差はないが黒みがある
　　焼土粒子(0.2cm大)やや多い　炭化物やや多い　火を使用したのか

0　(1/30)　1m

第96図　　ＳＫ36・38・ＳＹ１遺構実測図



0　(1/500)　20m

第 97 図　　６区遺構配置図（縄文後晩期）

（３）縄文時代後～晩期の遺構・遺物（第 97 図～第 105 図）

①竪穴建物跡

ＳＩ１（第 98 図）

Ｅ１・２、Ｆ１・２グリッド、調査区北壁付近に位置する。同時期の遺構と考えられるＳＩ２・３を切る形で検出した。３遺構の新旧関係はＳＩ３（古）→ＳＩ２→ＳＩ１（新）である。検出しようとした基本層４層の残りが悪く、３層の掘り下げ時に誤って埋土の多くを掘り下げてしまっている。また、西側の一部は削平により、推定できるプランとして載せている。断面は整地によりほぼ水平を成している。検出面からの深さは最大で約 34㎝を測る。埋土はＳＩ１～３ともに基本層４層、５層のブロックが７：３程度の割合で混入し、暗褐色土として確認している。平面で見られる溝状の遺構は加工時によるものと考えられ、床面を形成した際に埋まっている。遺構のほとんどが北側の未調査域に伸びるため詳細な情報を得ることができなかった。加えて主柱穴と考えられるピットも全体の配置を捉えることができなかったため、その遺構のものかを断定するまでには至らなかった。ここでは、平面径が約 30 ～ 42㎝、深度が約 15 ～ 18㎝の、主柱穴として可能性があるものを４基検出している。炉跡、硬化面は確認されなかった。

遺物は 454 の磨･敲石が出土している。両面とも顕著に使用した痕跡を残し、側面には敲打痕が観察できる。右側面には黒変した箇所がある。

ＳＩ２（第 98 図）

Ｅ２、Ｆ２グリッドにて検出した。そのほとんどが後世の削平や遺構による損壊を受け、また調査区外へと伸びるため詳細な情報は得られていない。西側の一部は削平により、推定できるプランとして載せている。断面は整地によりほぼ水平を成している。検出面からの深さは最大で約 0.18m を測る。またＳＩ１と同様、ピットも全体の配置を捉えることができなかったため、主柱穴と断定するまでには至らなかった。ここでは、平面径が約 34 ～ 44㎝、深度が約 18 ～ 24㎝の、主柱穴として可能性があるものを３基検出している。しかしＰ２に関しては、ここで検出された竪穴建物の主柱穴が遺構の縁に配置されることを想定して考えるに、後述するＳＩ３のものである可能性もある。炉跡、硬化面は確認されなかった。

ＳＩ３（第 98 図）

Ｅ２、Ｆ２グリッドにて検出した。前述した竪穴建物跡と同様、そのほとんどが後世の削平や遺構による損壊を受け、また調査区外へと伸びるため詳細な情報は得られていない。西側の一部は削平により、推定できるプランとして載せている。断面は整地によりほぼ水平を成している。検出面からの深さは最大で約 0.10m を測る。ピットの全体配置も不明で、主柱穴と断定するまでには至らなかった。ここでは、平面径が約 34 ～ 36㎝、深度が約 13 ～ 24㎝の、主柱穴として可能性があるものを２基検出している。炉跡、硬化面は確認されなかった。

ＳＩ４（第 99 図）

調査区西側のＤ３・４グリッドに位置する遺構である。平面形は南北にやや張り出した楕円形を呈する。推定される長軸約 6.74m、短軸約 5.64m を測る。ただ、後世の削平の影響で埋土は東側の一部と遺構中央の土坑以外は確認できない状況で、遺構があったであろう推定範囲に染み状に残るのみであった。長軸はＮ－９°－Ｗである。埋土は基本層４層のブロックを主体とした暗褐色土で整地層の一部と考えられる。

土坑は中央からやや南に位置し、長軸約 111㎝、短軸約 92㎝、検出面からの深さは約 18㎝を測る。焼土と考えられる橙色粒と 2㎜大の炭化物を微量に含んでいる。炉跡の可能性をもつ。Ｐ１～Ｐ７を検出し、柱痕を確認できた箇所はないが、位置的な関係を考えてそれぞれが主柱穴の可能性が高い。径は約 34 ～ 46㎝、検

出面からの深さは約 12㎝～ 30㎝を測る。下端のレベルは一定ではない。貯蔵穴等も検出されていない。

遺物は 455 の黒曜石製の使用痕をもつ縦長剥片、456 の手持砥石が出土している。

ＳＩ５（第 100 図）

Ｄ３・４、Ｅ３・４グリッドに位置し、南西の一部をＳＩ４に壊された遺構である。検出時の状況としてはＳＩ４と同じで、埋土は南東の一部と、中央の炉と考えられる土坑を残すのみであった。平面形は楕円形を呈し、推定される長軸約 6.56m、短軸約 6.26m を測る。長軸はＮ－ 20°－Ｅである。埋土は基本層４層のブロックを主体とした暗褐色土で整地層の一部と考えられる。土坑は中央からやや南に位置し、長軸約 113㎝、短軸約 97㎝、検出面からの深さは約 14㎝を測る。焼土と考えられる橙色粒と 2㎜大の炭化物を微量に含んでいる。炉跡の可能性がある。Ｐ１～Ｐ７を検出し、柱痕を確認できた箇所はないが、配置的な関係を考えてそれぞれが主柱穴となる可能性がある。径は約 33 ～ 45㎝、検出面からの深さは約 20㎝～ 54㎝を測り、下端のレベルも一定ではない。貯蔵穴等も検出されていない。

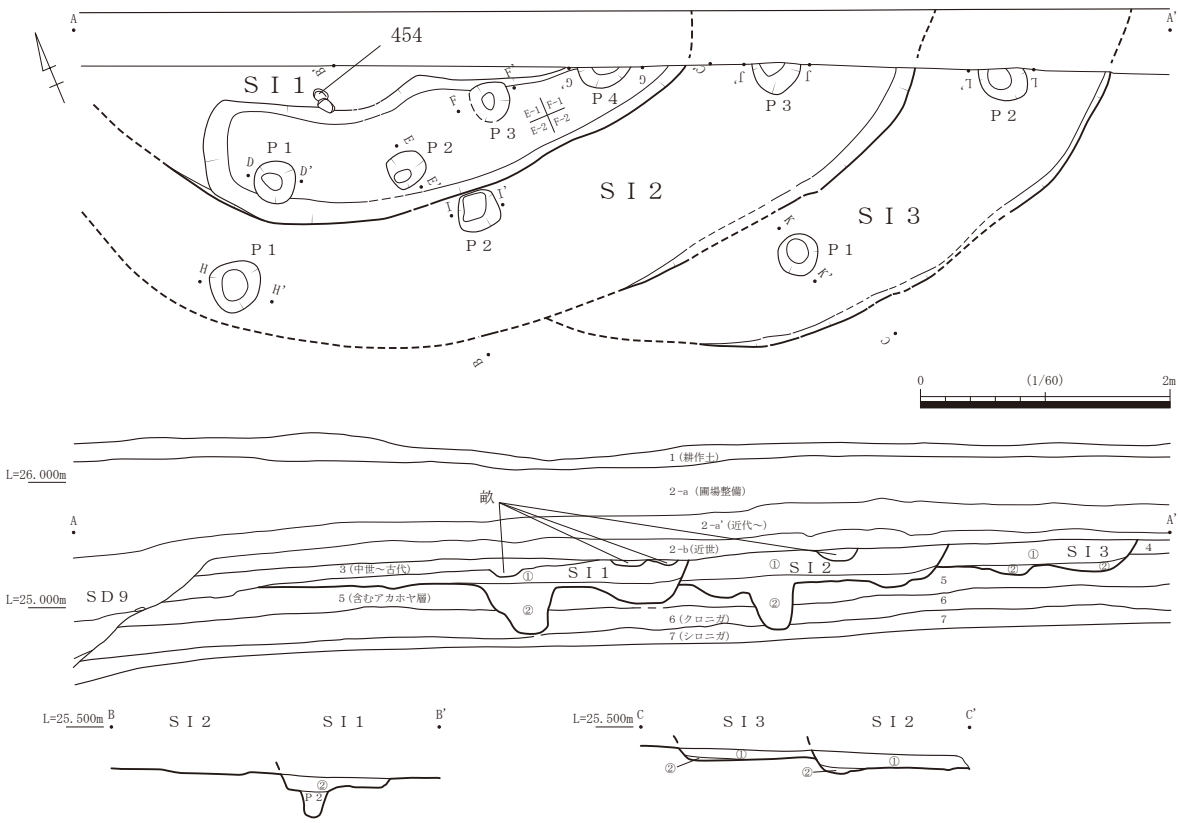
遺物は 457 の黒曜石製の二次加工痕をもつ剥片、458 の磨・敲石が出土している。

ＳＩ６（第 101 図）

Ｅ４・５グリッド、ＳＩ５の真南に位置する。検出時の状況は前述のＳＩ４・５と同じで、埋土は西側の一部を残すのみであった。平面形は楕円形を呈し、推定される長軸約 6.86m、短軸約 5.76m を測る。長軸はＮ－ 21°－Ｗである。埋土は基本層４層のブロックを主体とした暗褐色土で整地層の一部と考えられる。中央のやや低まった箇所も同様で、炉跡と考える要素は確認できず、整地時の埋土と思われる。遺構縁辺部にＰ１～Ｐ６を検出し、柱痕を確認できた箇所はないが、それぞれが主柱穴となる可能性がある。径は約 34 ～ 58㎝、検出面からの深さは約 14㎝～ 26㎝を測る。下端のレベルは一定ではない。炉跡や貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は石斧が２点出土している。459 の磨製石斧は砂岩製の撥形を呈する。裏面に顕著な剥離面を残し、基部は薄く反りが大きくなっている。縦方向へ割れたものを再加工したと考えられる。460 は打製のもので刃部と基部を欠損するが、縁辺部に加工が観察できる。安山岩製である。

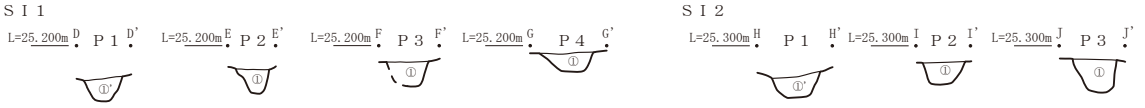
遺構検出面までの掘削過程において、上記遺構が位置するグリッドで一括取り上げした遺物もある。そのほとんどが土器であり、第 115 図の遺構外出土遺物実測図１にて掲載しているため、詳細はそこで紹介することとする。



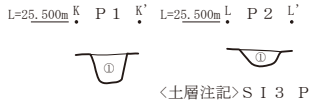
<土層注記>ＳＩ１
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ２㎜の橙色粒子(焼土粒子?)やや多い　炭化物やや多い　φ20～50㎜の５層ブロック多く含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ２㎜の橙色粒子(焼土粒子?)微量　炭化物微量　φ10～30㎜の５層ブロックやや多く含む

<土層注記>ＳＩ２
①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ２㎜の橙色粒子(焼土粒子?)微量　炭化物微量　φ20～40㎜の５層ブロック多く含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ２㎜の橙色粒子(焼土粒子?)微量　炭化物微量　φ20～40㎜の５層ブロック少し含む

<土層注記>ＳＩ３
①層：7.5YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ２㎜の橙色粒子(焼土粒子?)微量　炭化物微量　φ20～40㎜の５層ブロックやや多く含む
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　φ２㎜の橙色粒子(焼土粒子?)微量　炭化物微量　φ20～40㎜の５層ブロック少し含む

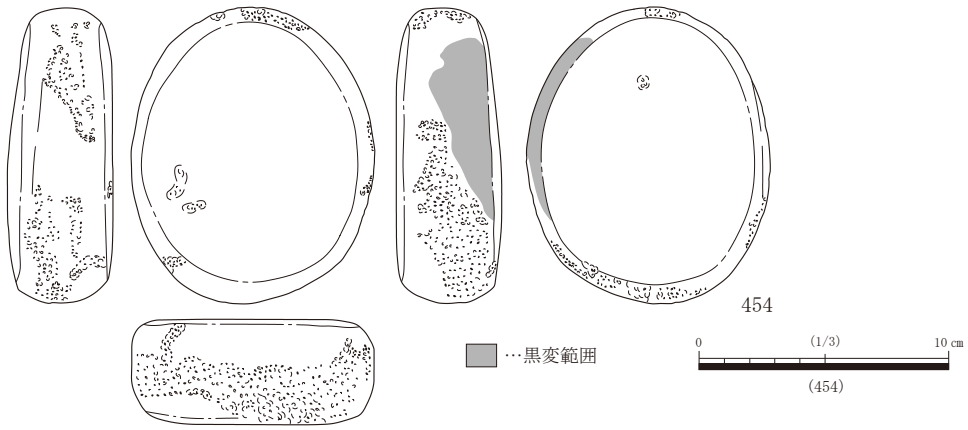


<土層注記>ＳＩ１　Ｐ１～Ｐ４
①層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
４・５層のブロック７：３程度で、当遺跡でいうマーブル状の土
炭化物微量　橙色粒子(焼土粒子?)微量　ＳＩ１埋土２層と類似
①'層：①層よりやや黒みあり

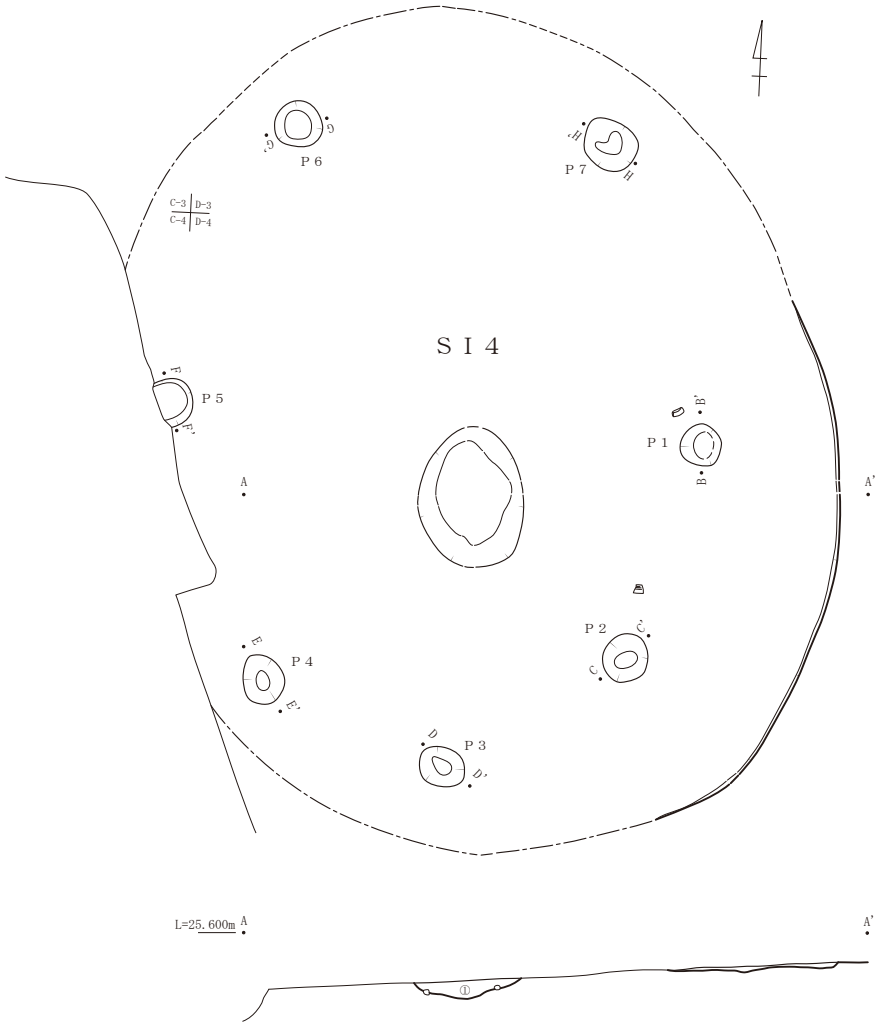


<土層注記>ＳＩ２　Ｐ１～Ｐ３
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　５層ブロック
ややまじる　炭化物微量　橙色粒子(焼土粒子?)微量
①'層：①層よりやや黒みあり

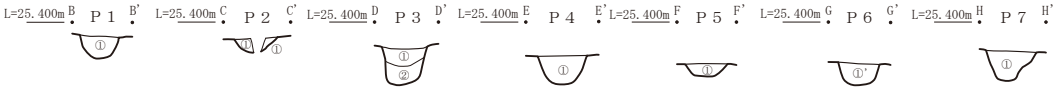
<土層注記>ＳＩ３　Ｐ１～Ｐ２
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　５層
ブロックややまじる　炭化物微量　橙色粒子(焼土粒子?)微量



第98図　　ＳＩ１～３遺構・出土遺物実測図

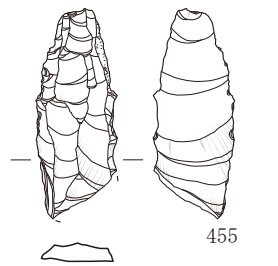


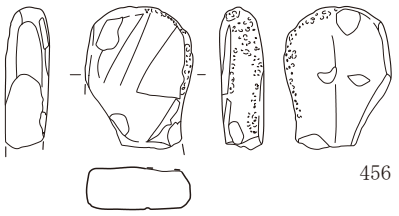
<土層注記>ＳＩ４　炉か
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　褐色粒子(焼土粒子？)・炭化物２㎜大微量　４層ブロック主体で５層ブロック（２～３㎝大）やや混ざる



<土層注記>ＳＩ４～６共通　Ｐ１～Ｐ７
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　５層ブロック混ざる
②層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　５層ブロック混ざる
③層：10YR3/4暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　５層ブロック混ざる
④層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　５層ブロック混ざる

0　(1/60)　2m

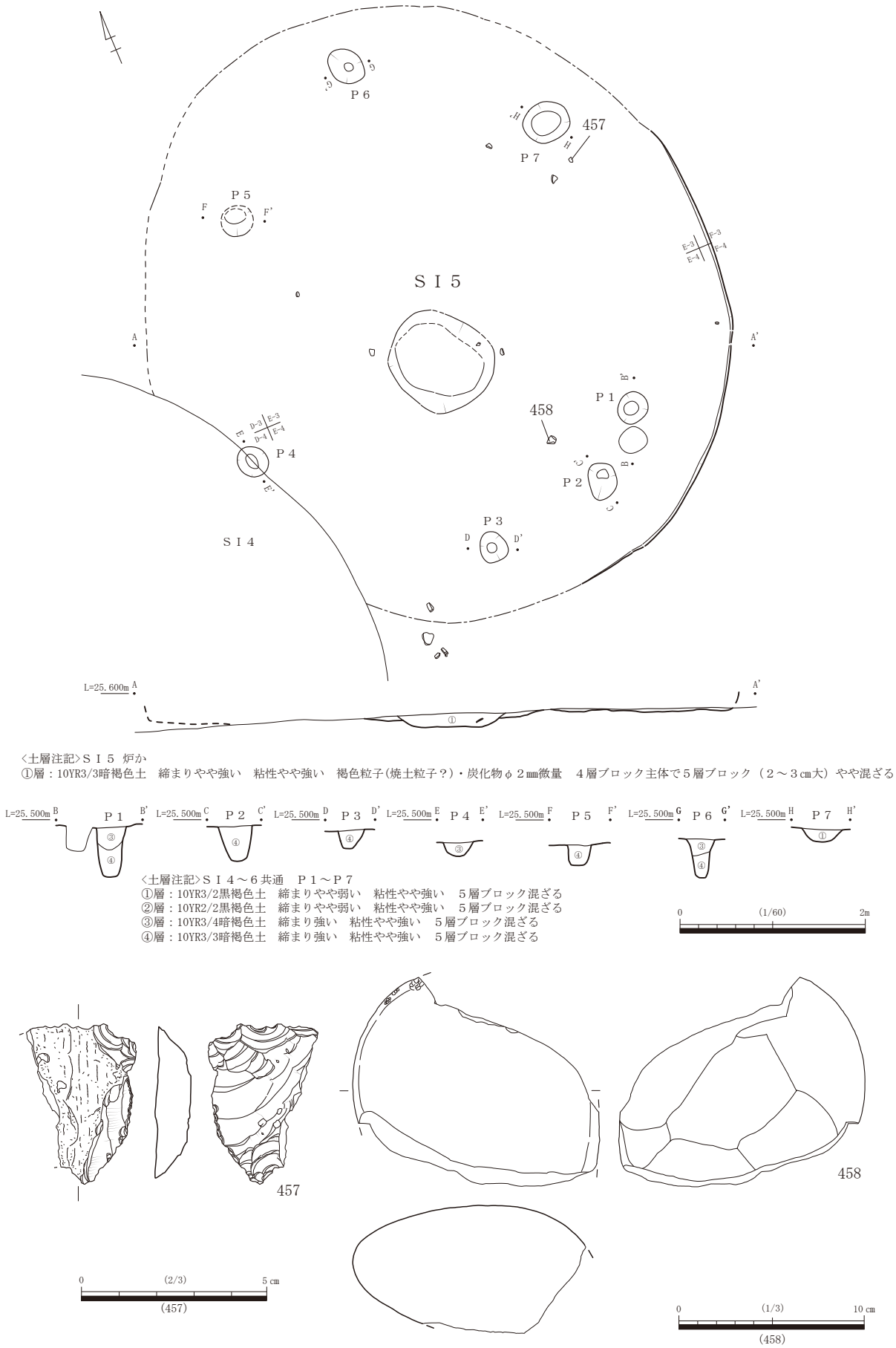




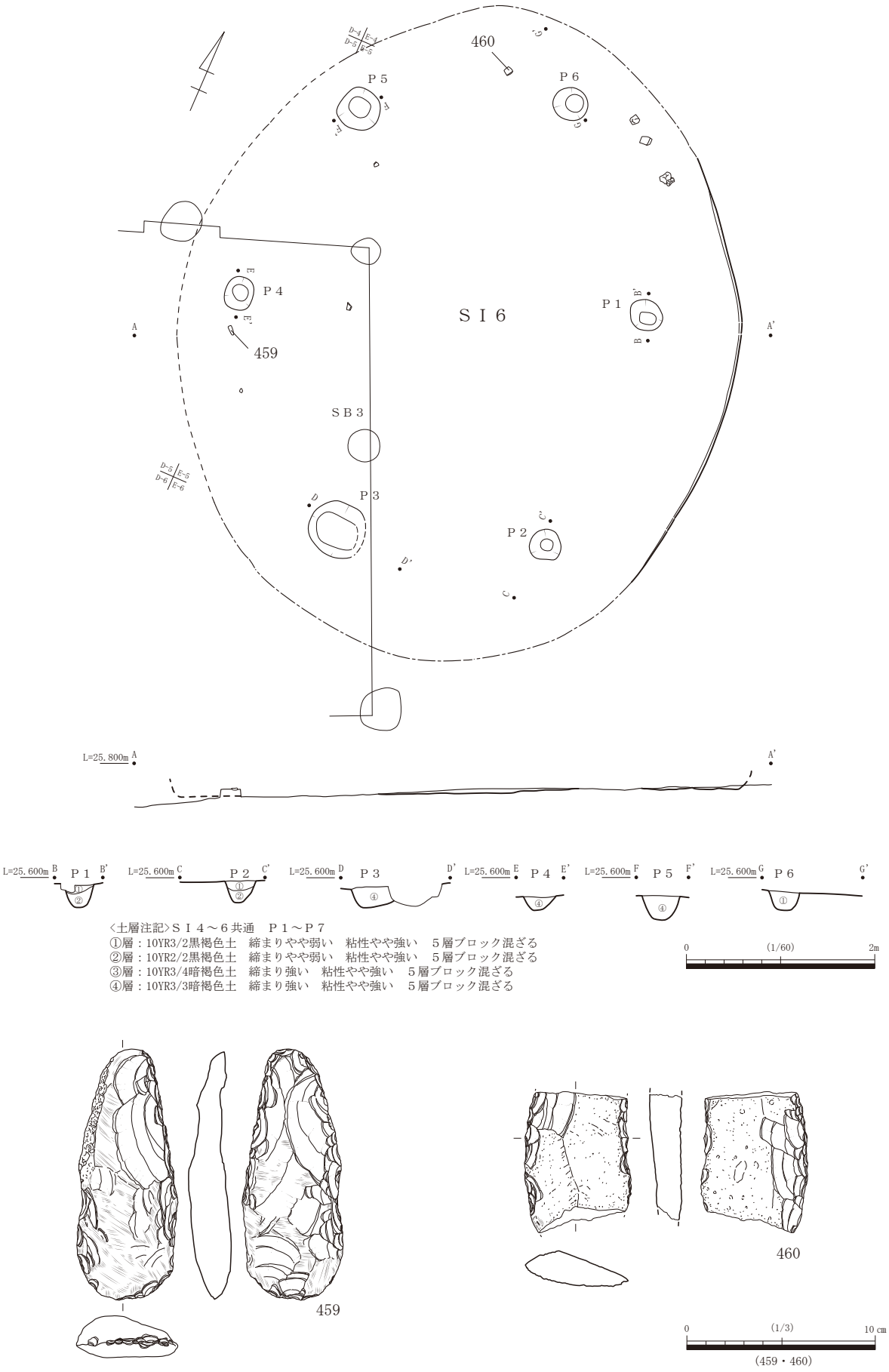
0　(2/3)　5㎝
(455)

0　(1/3)　10㎝
(456)

第99図　　ＳＩ４遺構・出土遺物実測図



第 100 図　　ＳＩ５遺構・出土遺物実測図



第 101 図　　ＳＩ６遺構・出土遺物実測図

②土坑

ＳＫ 29（第 102 図）

Ｌ７グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.33m、短軸は約 0.85m、検出面からの深さは約 0.28m を測る。埋土は焼土と思われる橙色粒、炭化物を多量に含んだにぶい黄褐色土層、上層よりは少なくなるも橙色粒、炭化物を多く含んだ暗褐色土層とに分けることができる。埋土１層の西側には炭化材が検出されている。埋土２層上面にて火を用いたと考えられるが、何の機能をもった遺構かは不明である。

遺物は 461 の黒曜石製の石鏃が出土しており、基部を欠損している。

ＳＫ 34（第 102 図）

Ｎ６・７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は深い台形状を呈する。長軸約 1.0m、短軸は約 0.86m、検出面からの深さは約 0.70m を測る。埋土は基本層５層ブロックを含む黒褐色土で、ブロックは下層になるほど少量化していく。埋土１層下方より、462 で示す縄文晩期の深鉢形土器片が出土している。口縁～胴部下部までの残存で、径の復元はできなかったが、残存する器高は約 33.9㎝を測る。外器面は横、斜めの条痕、内器面はミガキが観察できる。

ＳＫ８（第 103 図）

Ｋ８グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.22m、短軸約 0.90m、検出面からの深さは約 0.10m を測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒子、炭化物を微量に含んでいる。基本層４層土を主体とした黒褐色土で、２～ 3㎝大の５層ブロックが混じる。

ＳＫ 13（第 103 図）

Ｋ７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は中央に向かって落ち込む皿状を呈する。長軸約 0.88m、短軸は推定 0.44m、検出面からの深さは約 0.18m を測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒を少し含んでいる。基本層４層ブロックを多く含んだ暗褐色土である。

ＳＫ 15（第 103 図）

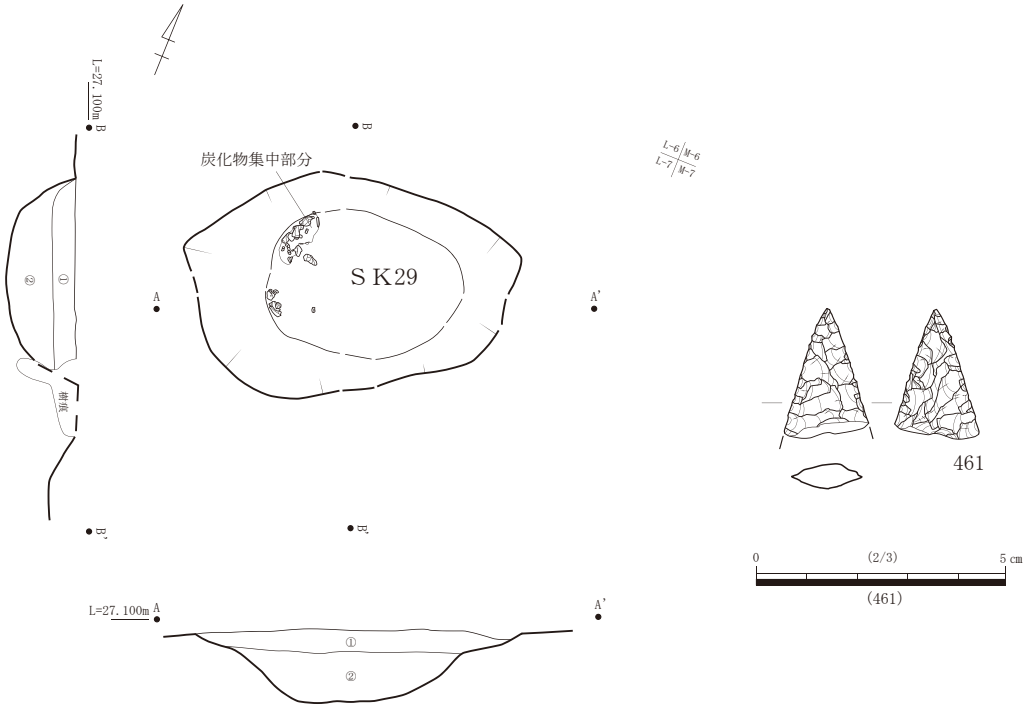
Ｄ３・４グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 0.96m、短軸約 0.92m、検出面からの深さは約 0.16m を測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒子、2㎜大の炭化物を微量に含んだ暗褐色土である。基本層４層ブロックを主体とし、下層には２～ 3㎝大の５層ブロックをやや多く含んでいる。

ＳＫ 16（第 103 図）

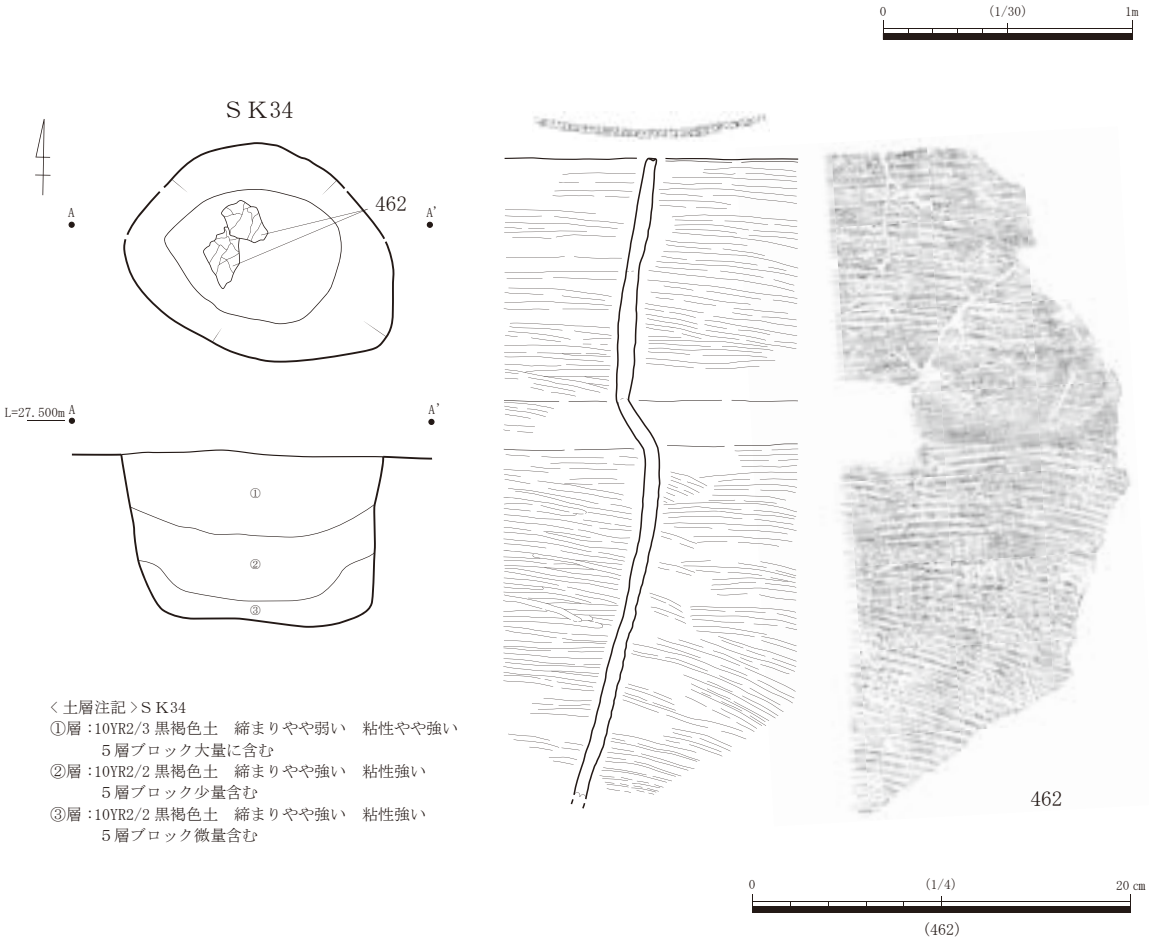
Ｄ３グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面は歪な皿状を呈する。長軸約 1.36m、短軸は約 0.72m、検出面からの深さは約 0.26m を測る。埋土は２層で、基本層４層ブロックを主体とし、５層ブロックがやや混じる暗褐色土である。上層は焼土と思われる橙色粒と、2㎜大の炭化物を微量に含んでいる。

ＳＫ 17（第 103 図）

Ｄ３グリッドに位置する。ＳＫ 18 の北西部の一部を壊している。平面形は歪な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 0.74m、短軸は推定 0.67m、検出面からの深さは約 0.32m を測る。埋土は黒褐色土に５層ブロックが

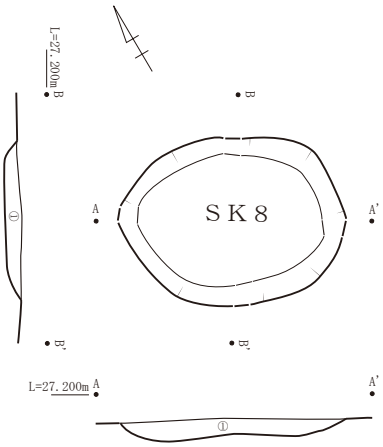


<土層注記>ＳＫ29
①層：10YR4/3にぶい黄褐色土　締まり強い　粘性やや強い　炭を大量に含む　焼土粒子　炭化物多く含む
②層：10YR3/4暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い　焼土粒子　炭化物多く含む　上層よりは少ない

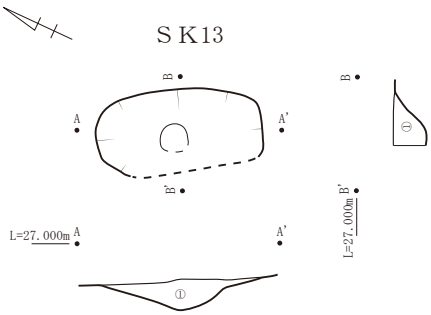


< 土層注記 >ＳＫ34
①層：10YR2/3 黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い
　　５層ブロック大量に含む
②層：10YR2/2 黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い
　　５層ブロック少量含む
③層：10YR2/2 黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い
　　５層ブロック微量含む

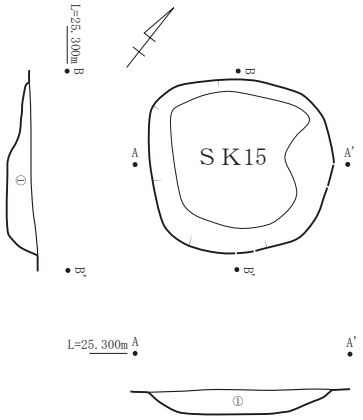
第 102 図　　ＳＫ29・34 遺構・出土遺物実測図



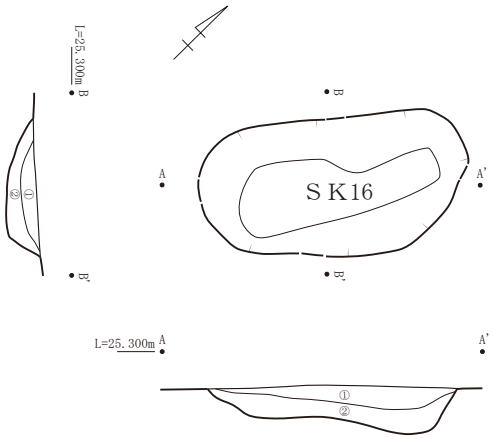
〈土層注記〉ＳＫ８
①層：10YR3/2 黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い　炭化物微量
４層を主体としφ２～３cm大の５層ブロックやや混じる



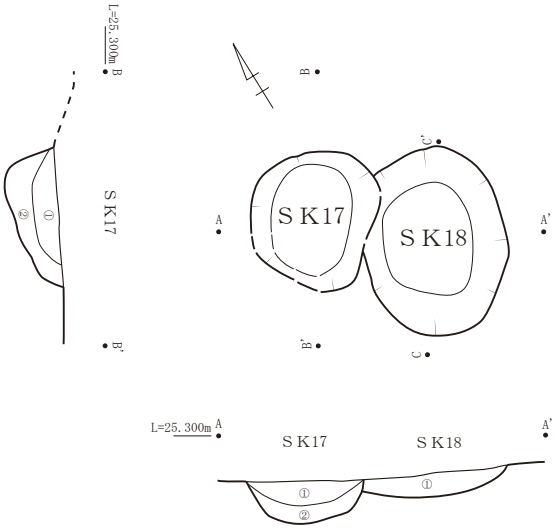
〈土層注記〉ＳＫ13
①層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性弱い
４層ブロック多く含む



〈土層注記〉ＳＫ15
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
下層に５層ブロック（φ２～３cm大）やや多く混じる

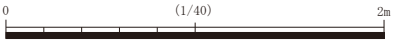


〈土層注記〉ＳＫ16
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
炭化物φ２mm大微量　４層ブロック主体で
５層ブロック（φ２～３cm大）やや混じる
②層：10YR3/4暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
４層ブロック主体で５層ブロック（φ２～４cm大）やや多く混じる

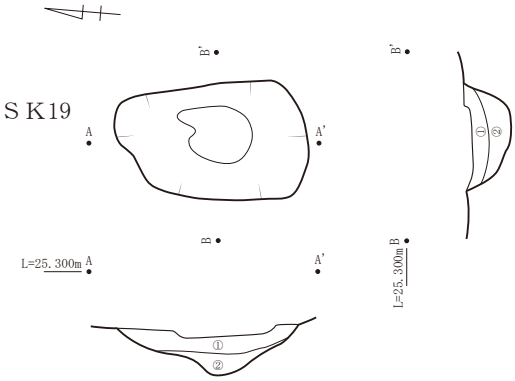


〈土層注記〉ＳＫ17
①層：10YR3/2黒褐色土　締まり弱い　粘性やや強い
炭化物微量　黒褐色土ブロック（φ２～３cm大）と
５層ブロック（φ２～３cm大）７：３ぐらい
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
炭化物微量　５層ブロック（φ２～３cm大）やや混じる

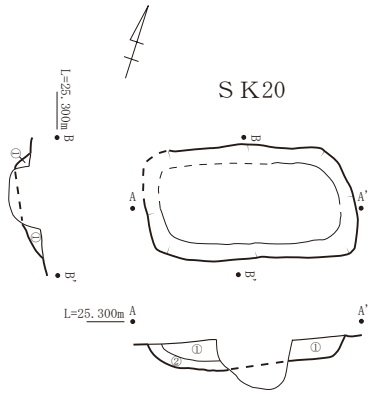
〈土層注記〉ＳＫ18
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
４層ブロック（φ３～５cm大）と
５層ブロック（φ２～３cm大）７：３ぐらい



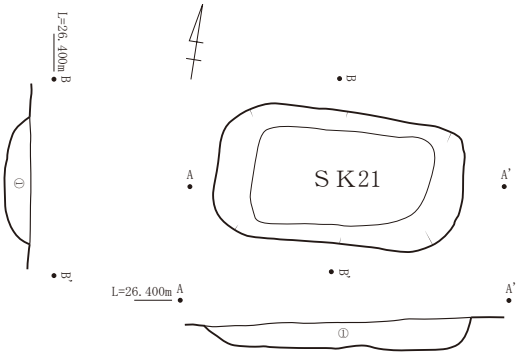
第 103 図　　ＳＫ８・13・15～18 遺構実測図



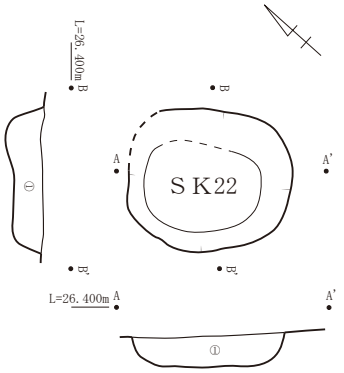
<土層注記>ＳＫ19
①層：10YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性強い
　　５層ブロックをやや多めに含む
②層：7.5YR3/3暗褐色土　締まり強い　粘性強い
　　５層６層ブロックを多く含む



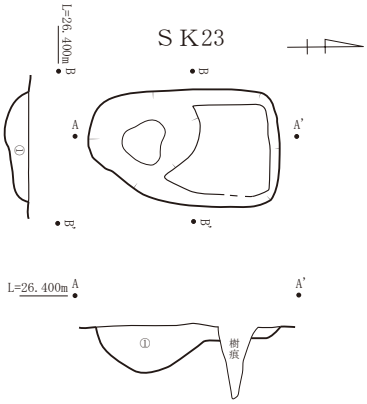
<土層注記>ＳＫ20
①層：10YR3/1黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　混入物なし
②層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い　混入物なし



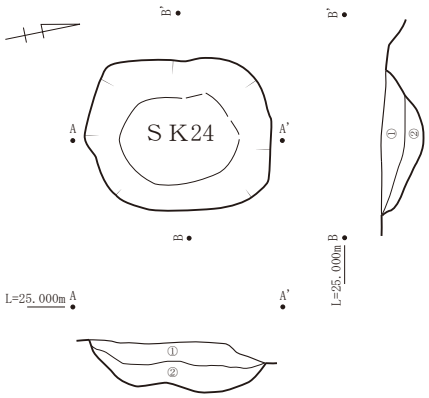
<土層注記>ＳＫ21
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い



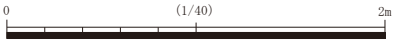
<土層注記>ＳＫ22
①層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや弱い　粘性強い
　　混入物なし



<土層注記>ＳＫ23
①層：10YR3/2黒褐色土　締まり弱い　粘性やや強い
　　灰色の土が大きなブロック状に少量入る



<土層注記>ＳＫ24
①層：7.5YR2/3極暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い
　　５層ブロックを多く含む
②層：7.5YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや弱い
　　５層ブロックを大量　６層ブロックを少量含む



第 104 図　　ＳＫ19 ～ 24 遺構実測図

混じる層と、暗褐色土に５層ブロックがやや混じる層とに分かれる。両層ともに炭化物を微量に含んでいる。

ＳＫ 18（第 103 図）、

Ｄ３グリッドに位置する。ＳＫ 17 に一部を壊されている。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.0m、短軸は推定 0.76m、検出面からの深さは約 0.16m を測る。埋土は基本層４層ブロックを主体とし、５層ブロックがおおよそ７：３の割合で混じり合う暗褐色土である。

ＳＫ 19（第 104 図）

Ｄ３グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、断面は中央が窪んだ皿状を呈する。長軸約 1.00m、短軸は約 0.62m、検出面からの深さは約 0.26m を測る。埋土は暗褐色で、５層ブロックをやや多めに含む層と、５、６層ブロックを多く含む層とに分かれる。

ＳＫ 20（第 104 図）

Ｅ２グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、断面は皿状を呈する。中央部はピットで壊されている。長軸約 1.12m、短軸は約 0.61m、検出面からの深さは約 0.20m を測る。埋土は黒褐色土で２層に分けることができる。

ＳＫ 21（第 104 図）

Ｊ３グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.32m、短軸は約 0.70m、検出面からの深さは約 0.16m を測る。

ＳＫ 22（第 104 図）

Ｊ３・４グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 0.86m、短軸は約 0.74m、検出面からの深さは約 0.2m を測る。

ＳＫ 23（第 104 図）

Ｊ３グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、断面は南側が大きく窪んだ皿状を呈する。長軸約 1.12m、短軸は約 0.61m、検出面からの深さは約 0.28m を測る。

ＳＫ 24（第 104 図）

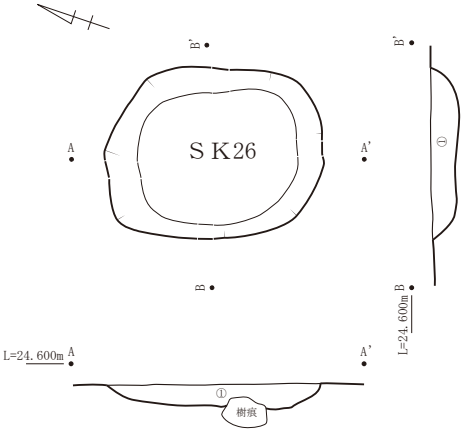
Ｃ２グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は凹凸のある皿状を呈する。長軸約 0.98m、短軸は約 0.80m、検出面からの深さは約 0.28m を測る。埋土は基本層５層ブロック多く含んだ暗褐色土層と、多量の５層ブロックに６層ブロックを少量含んだ暗褐色土層とに分けることができる。

ＳＫ 26（第 105 図）

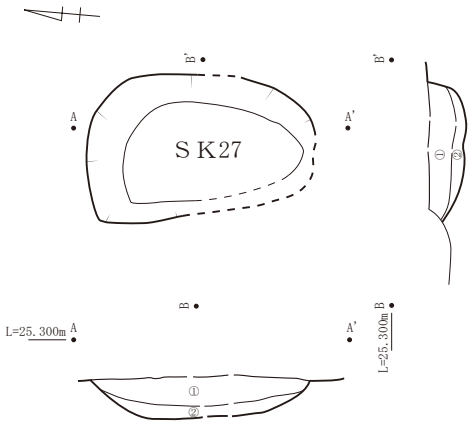
Ｃ１グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.16m、短軸は約 0.90m、検出面からの深さは約 0.16m を測る。埋土は焼土と思われる橙色粒を少し含んだ暗褐色土で、基本層５、６層ブロックを少し含む。1㎝大の礫も含んでいる。

ＳＫ 27（第 105 図）

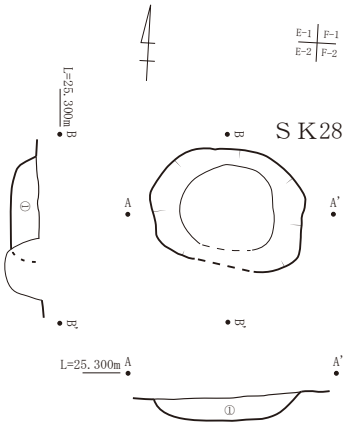
Ｄ４グリッドに位置する。平面形は歪な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.2m、短軸は約 0.78m、



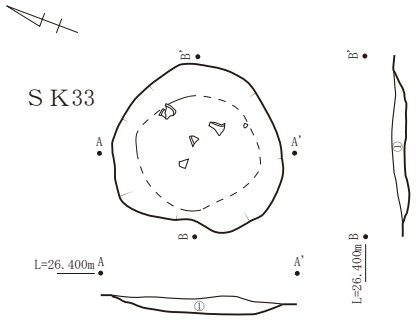
〈土層注記〉S K26
①層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
５層６層ブロック少し含む



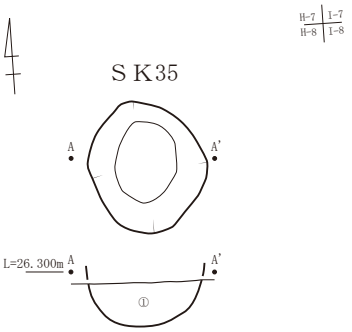
〈土層注記〉S K27
①層：10YR3/2 黒褐色土　締まり強い　粘性やや強い
５層ブロックやや多めに含む
②層：10YR3/3 暗褐色土　締まり強い　粘性やや強い
５層ブロック大量に含む



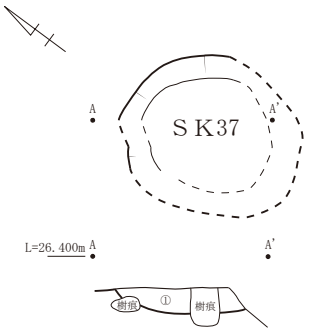
〈土層注記〉S K28
①層：10YR2/3 黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い



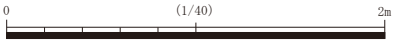
〈土層注記〉S K33
①層：10YR3/2 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
５層ブロック少し含む



〈土層注記〉S K35
①層：10YR3/2 黒褐色土　粘質土（シルト質）　締まり強い　粘性強い
φ３cm 大の黒ニガブロック少し含む　橙色粒を少し
５層ブロックを多く含む



〈土層注記〉S K37
①層：10YR3/2 黒褐色土　締まり強い　粘性強い
φ１～６cm 大の焼土片大量に含む
５層ブロック多く含む



第 105 図　　S K26 ～ 28・33・35・37 遺構実測図

検出面からの深さは約 0.24m を測る。埋土は焼土と思われる橙色粒を少し含み基本層５層ブロックをやや多く含んだ黒褐色土と、５層ブロックを多量に含んだ暗褐色土層に分けられる。

ＳＫ 28（第 105 図）

Ｅ２グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。南側の一部はピットで壊されている。長軸約 0.80m、短軸は約 0.60m、検出面からの深さは約 0.20m を測る。

ＳＫ 33（第 105 図）

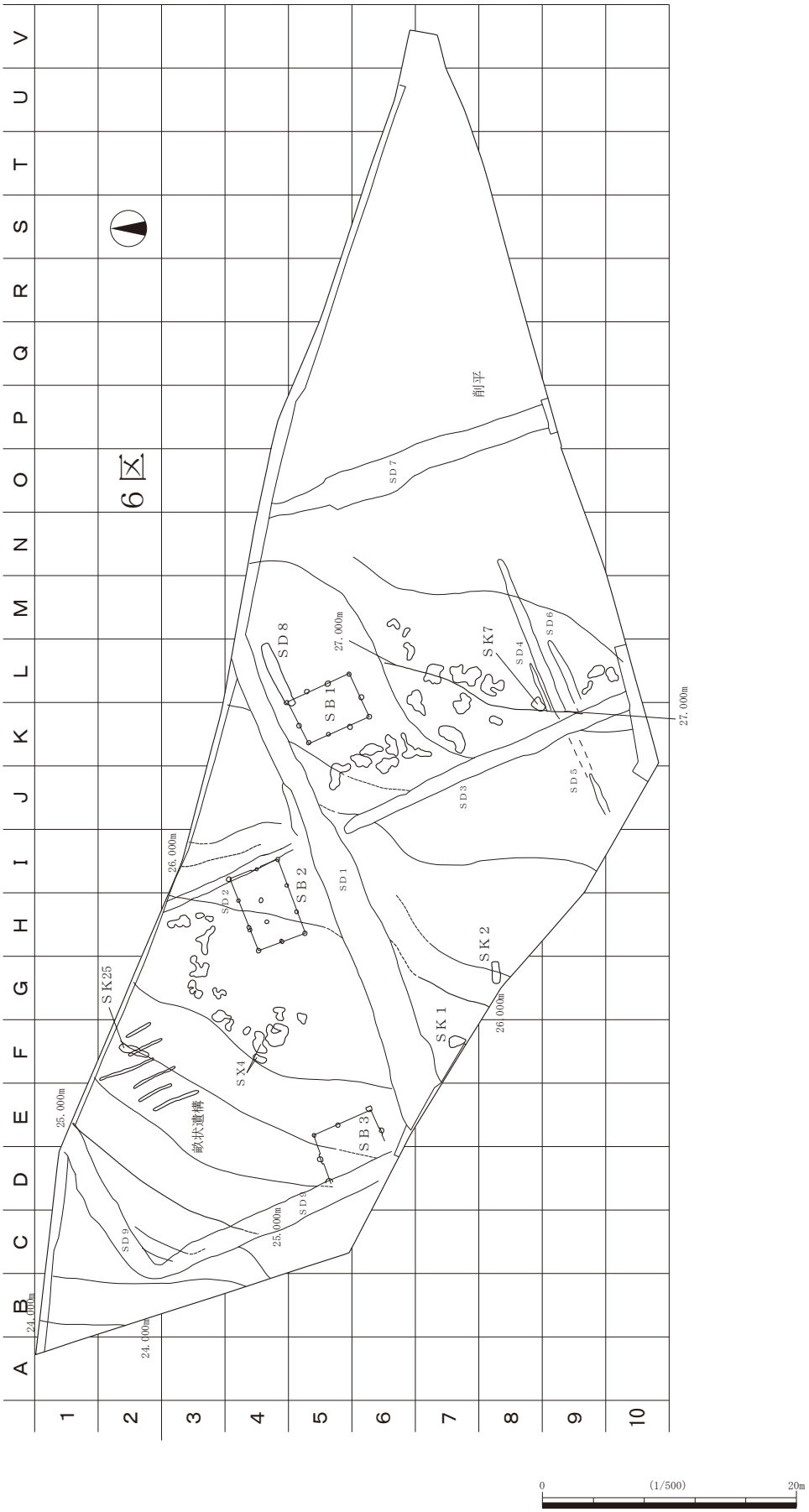
Ｊ４グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 0.90m、短軸は約 0.82m、検出面からの深さは約 0.10m を測る。埋土は焼土と思われる橙色粒を少し含み基本層５層ブロックを少し含んだ黒褐色土である。遺物は縄文後・晩期の深鉢形土器の胴部片、浅鉢形土器の口縁～胴部片等が出土している。

ＳＫ 35（第 105 図）

Ｈ８グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 0.69m、短軸は約 0.63m、検出面からの深さは約 26㎝を測る。埋土は焼土と思われる橙色粒を少し含み、基本層５層ブロックを多く、３㎝大の６層ブロックを少し含んでいる。

ＳＫ 37（第 105 図）

Ｊ４グリッドに位置する。ＳＤ１とトレンチにより半分以上が壊されている。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは約 0.14m を測る。埋土は基本層５層ブロックを多く含んだ黒褐色土で１～６㎝大の焼土粒を大量に含む。



第 106 図　　６区遺構配置図（古代・中世）

（４）古代～中世の遺構・遺物（第 106 図～第 109 図）

基本層４層上面にて掘立柱建物跡、土坑、ピット、溝状遺構、畝状遺構を検出した。遺物は遺構に伴うものはほとんど無く、表土、包含層、近現代の溝より古代～中世の土器の出土を確認した。加えて後世の削平などが各遺構の時期考察を困難にしていたため、埋土の状況と調査で得られた遺物資料などから、「古代～中世」として記載することとした。

①掘立柱建物跡

ＳＢ１（第 107 図）

Ｋ５・６、Ｌ５・６グリッドに位置する。Ｐ１、Ｐ９は半分以上を撹乱（いも穴）により壊された状態で検出した。桁行は３間で、東側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４）約 5.26m、西側柱列（Ｐ９－Ｐ８－Ｐ７－Ｐ６）約 5.00m。梁行は２間で北側柱列（Ｐ１－Ｐ 10 －Ｐ９）約 3.71m、南側柱列（Ｐ６－Ｐ５－Ｐ４）約 3.72m を測る側柱建物である。桁行方向はＮ－ 25°－Ｗである。柱間は、桁行約 1.70 ～ 1.87m、梁行約 1.62 ～ 2.90m を測る。柱掘方は平面円形であり、径は約 32 ～ 47㎝、検出面からの深さは最深で約 54㎝を測る。柱穴の下端レベルは一定ではないが、最大差が約 28㎝を測る。全ピットにおいて柱痕を確認している。埋土中に 2㎜大の焼土と思われる橙色粒、炭化物を微量に含んでいる。

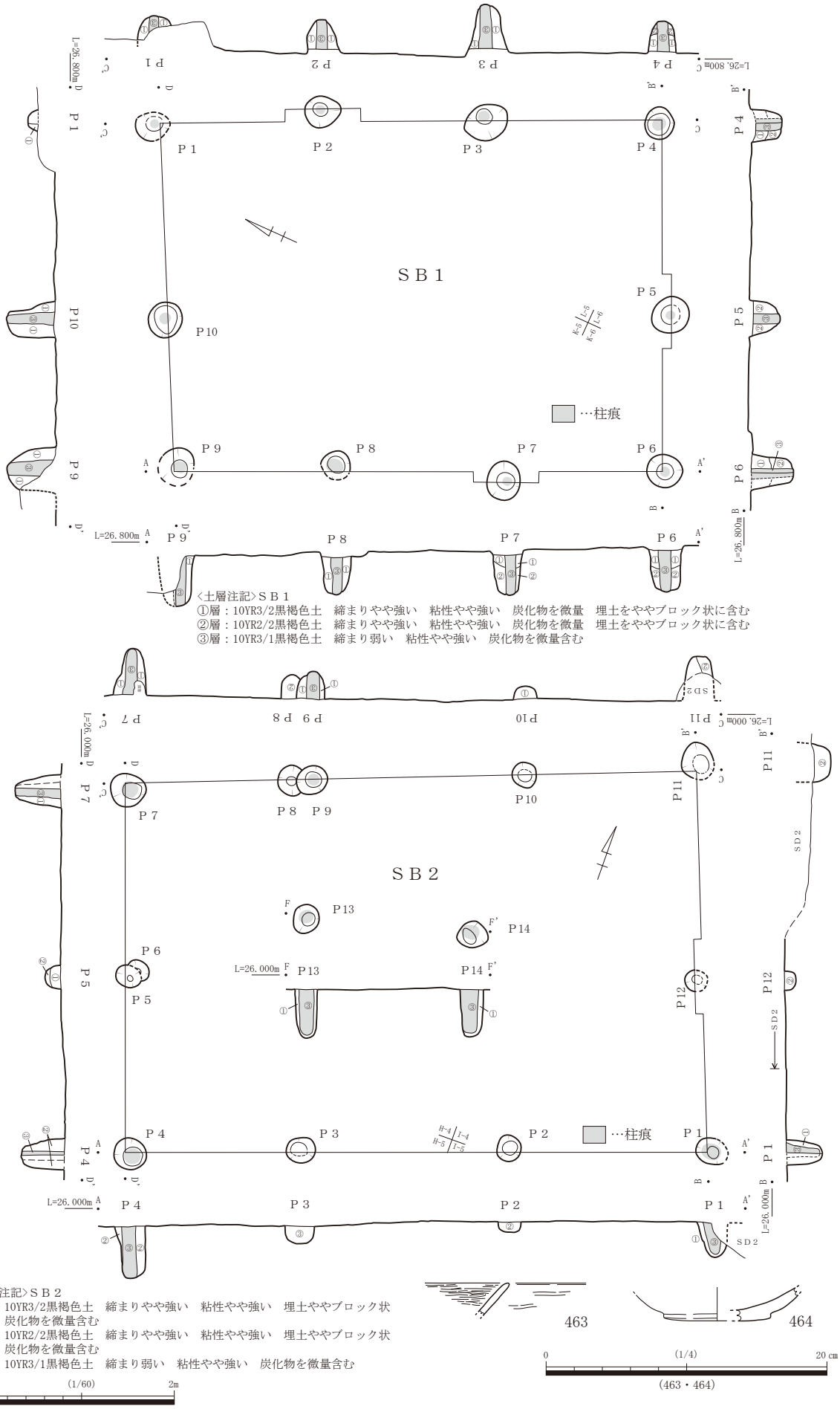
ＳＢ２（第 107 図）

Ｈ４・５、Ｉ４グリッドに位置する。Ｐ１、Ｐ 12、Ｐ 11 はＳＤ２、撹乱（いも穴）によりそのほとんどを壊され、西側に配するピットも、上層のほとんどを後世の削平を受けている。桁行は３間で、北側柱列（Ｐ 11 －Ｐ 10 －Ｐ９－Ｐ７）約 5.94m、南側柱列（Ｐ４－Ｐ３－Ｐ２－Ｐ１）約 6.05m。梁行は２間で東側柱列（Ｐ１－Ｐ 12 －Ｐ 11）約 4.16m、西側柱列（Ｐ７－Ｐ５－Ｐ４）約 3.91m を測る側柱建物である。桁行方向はＮ－ 60°－Ｅである。柱間は、桁行約 1.79 ～ 2.26m、梁行約 1.91 ～ 2.30m を測る。柱掘方は平面円形であり、径は約 24 ～ 40㎝、検出面からの深さは最深で約 55㎝を測る。柱穴の下端レベルは一定ではないが、４隅（Ｐ１、Ｐ４、Ｐ７、Ｐ 11）は他の柱穴よりも深く掘られていることに特徴がある。埋土中に 2㎜大の焼土と思われる橙色粒、炭化物を微量に含んでいる。中央付近に位置する２基のピットは柱痕も確認しており、梁支えの柱、支柱などＳＢ２に付随する何らかの用途があったと考えられるが詳細は不明である。

遺物はＰ４において、463 に示す黒色土器Ａ類椀の口縁部片が出土している。

ＳＢ３（第 108 図）

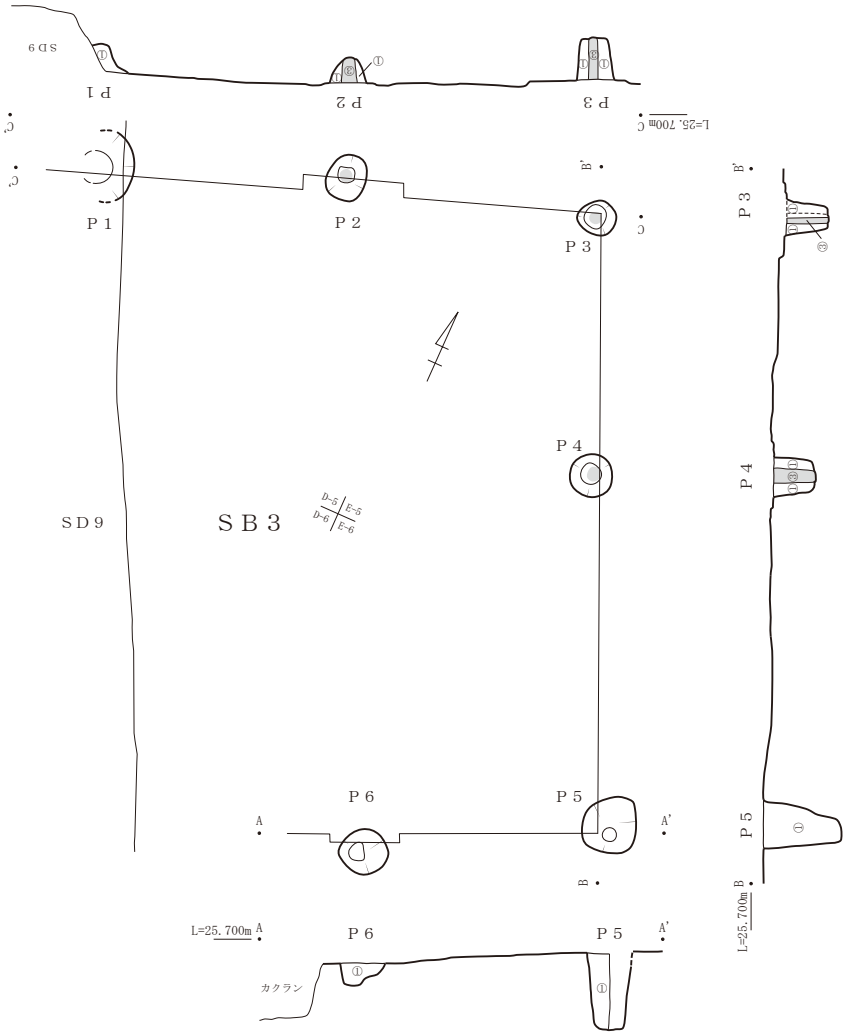
Ｄ５・６、Ｅ５・６グリッドに位置する。調査区が大きく段を成して落ち込む部分にかかり、遺構の半分は情報が得られなかったが、柱痕を確認できるピットの存在、配置、想定される桁行方向がＳＢ２と似ることなどから、掘立柱建物跡として調査した。梁行、桁行軸は不明だが、残存する柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）約 4.10m、柱列（Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５）約 4.43m を測る。柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）の軸方向はＮ－ 60°－Ｅで、ＳＢ２と同じである。柱間は、約 1.97 ～ 2.87m を測るが、２間をなす柱列（Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５）の柱間が広いことから、削平されている西側方向へ柱数が増える可能性もある。柱掘方は平面円形であり、径は約 31 ～ 42㎝、検出面からの深さは最深で約 62㎝を測る。柱穴の下端レベルは一定ではない。埋土中に 2㎜大の焼土と思われる橙色粒、炭化物を微量に含んでいる。



第 107 図　　ＳＢ１・２遺構・出土遺物実測図

調査６区において検出された３棟の掘立柱建物に関しては、得られた遺物資料が乏しく時期の特定は難しい。しかし、ＳＢ１とＳＢ２がほぼ90度方向に軸が変わる。また、大小差はあるものの、桁、梁の規格が一致していることが特徴として挙げられる。国土交通省事業で実施した塔平遺跡１区にも同じ構造規格、軸方向の違いをもった掘立柱建物跡２棟が検出されている。同時期に建てられていた、また、用途の違いをもった建物跡という考え、可能性を含むが推察の域を超えない。

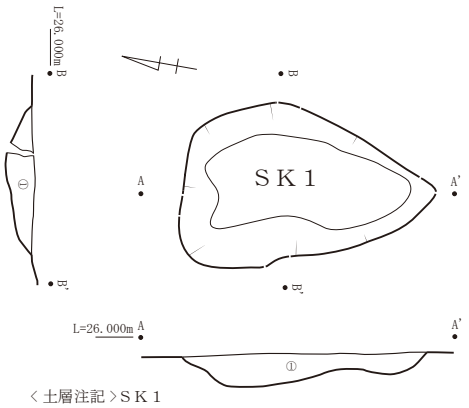
掘立柱建物跡関連のものかと思われた不明遺構について記す。掘立柱建物跡の検出時に、その周辺にて古い時期のものと考えられる不明遺構（樹痕跡）を多数検出した。形状はそれぞれ歪だが、箇所としては40箇所を超える。うち１つのＳＸ４からは464に示す土師器の坏の底部片が出土している。気になるのはその配置である。その多くがＳＢ１の南西、ＳＢ２の北西に、桁・梁軸に平行するようにコの字形で配置されていたことである。掘立柱建物跡に被るものはなく、意図的に植樹されているかのような配置状況であった。「生垣」のように思える樹痕跡の存在の可能性を否定できない。ただ上記以外の情報を得ることができず断定には至らなかった。



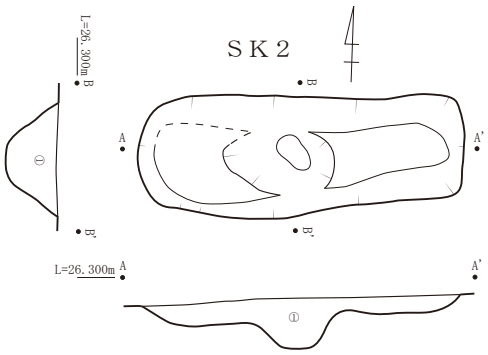
<土層注記>ＳＢ３（ＳＢ１に同じ）
①層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物を微量　埋土をややブロック状に含む
②層：10YR2/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物を微量　埋土をややブロック状に含む
③層：10YR3/1黒褐色土　締まり弱い　粘性やや強い　炭化物を微量含む

0　(1/60)　2m

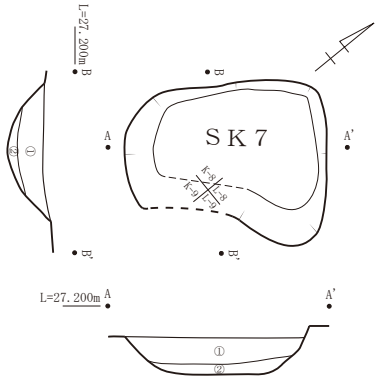
第108図　　ＳＢ３遺構実測図



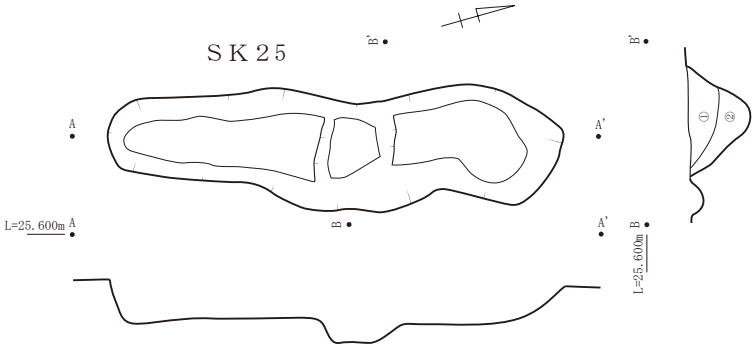
〈土層注記〉ＳＫ１
①層：10YR3/1 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い 炭化物微量
３層を主体として４層ブロック（φ２～３cm大）やや混じる
下層に５層ブロックやや混じる



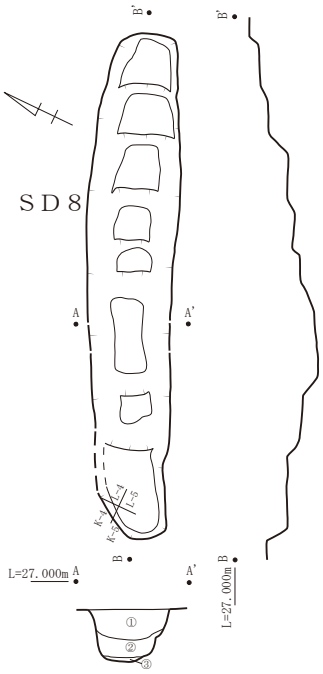
〈土層注記〉ＳＫ２
①層：10YR3/1 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物微量
３～４層ブロックを主体とし５層ブロック（φ３～５cm大）混じる



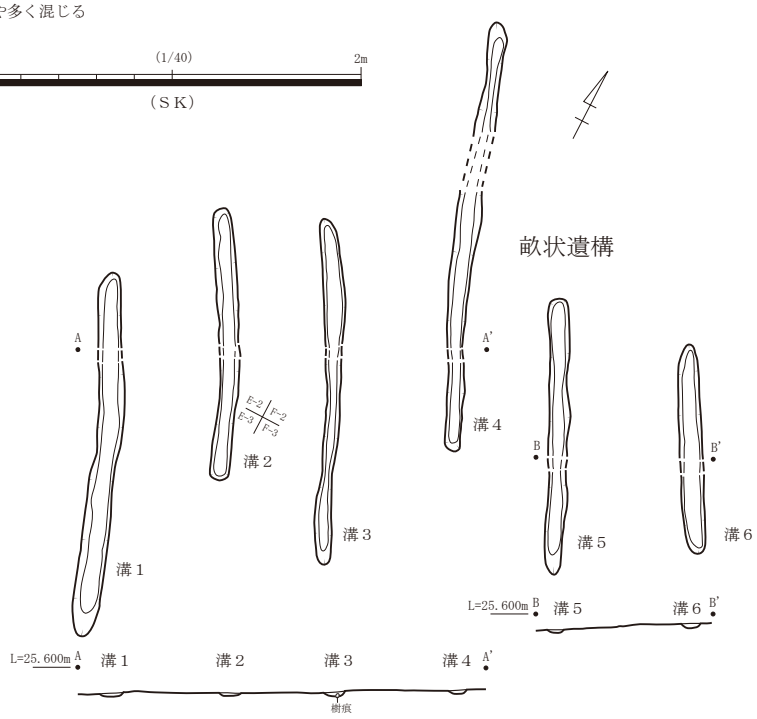
〈土層注記〉ＳＫ７
①層：10YR3/1 黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物微量
３層を主体としφ２～３cm大の４～５層ブロックやや混じる
②層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
①層を主体としφ３～４cm大の５層ブロックやや多く混じる



〈土層注記〉ＳＫ２５
①層：10YR2/2 黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い
混入物なし
②層：10YR3/1黒褐色土　締まりやや弱い　粘性やや強い
①層の土が少量混じってマーブル状になる

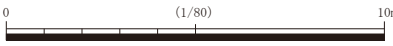


（ＳＫ）



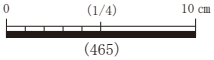
〈土層注記〉ＳＤ８
①層：10YR3/1黒褐色土　砂質土　締まり強い
粘性やや強い　５層ブロック多く含む
②層：10YR3/2黒褐色土　砂質土　締まり強い
粘性やや強い　７層ブロック少し含む
③層：10YR3/4暗褐色土　砂質土　締まり非常に強い
粘性強い　７層ブロック大量に含む

〈土層注記〉畝状遺構
10YR3/2黒褐色土　締まりやや弱い
粘性やや強い　混入物ほとんどなし



（ＳＤ８・畝状遺構）

465



(465)

第 109 図　　ＳＫ１・２・７・25・ＳＤ８・畝状遺構・出土遺物実測図

②土坑

ＳＫ１（第 109 図）

Ｆ７グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.34m、短軸約 0.82m、検出面からの深さは約 0.18 mを測る。埋土は単層で、基本層３層を主体とした黒褐色土で、４層、下層には５層ブロックが少し混じる。焼土と思われる橙色粒子、炭化物を微量に含んでいる。

ＳＫ２（第 109 図）

Ｇ８グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面は中央が窪んだ皿状を呈する。長軸約 1.74m、短軸約 0.64m、検出面からの深さは約 0.28m を測る。埋土は単層で、焼土と思われる橙色粒子をやや多く含み、炭化物を微量に含んでいる。基本層３層と４層ブロックを主体とした黒褐色土で、中央の窪んだ箇所は５、６層土が混じる。

ＳＫ７（第 109 図）

Ｋ８、Ｌ８グリッドに位置する。不整な楕円形で、断面は皿状を呈する。長軸約 1.08m、短軸約 0.66m、検出面からの深さは約 0.20m を測る。埋土は２層に分けることができ、埋土１層は基本層３層を主体とした黒褐色土に焼土と思われる橙色粒子、炭化物を微量に含んでいる。埋土２層は埋土１層を主体とし、基本層５層ブロックがやや多く混じる。

ＳＫ 25（第 109 図）

Ｆ２グリッドに位置する。平面形は不整な長楕円形で、断面は中央が窪んだ皿状を呈する。長軸約 2.42m、短軸約 0.58m、検出面からの深さは約 0.32m を測る。

基本層４層上面において検出した土坑は、３層主体の埋土をもつもの、３層及び４層ブロック混じりの埋土をもつものに分けられる。前者においては縄文後・晩期の遺物の出土をみるが、後者には良好な遺物資料はなかったものの、ＳＢ２の四隅で観察できた埋土に近い。同じ３層土が混じること、調査区内（遺構外）出土資料から古代～中世の土器資料が確認されたことからもこの時期の遺構ではないかと考えるに至った。

③溝

ＳＤ８（第 109 図）

Ｌ４・５グリッドに位置し、４層上面にて検出した。最大幅約 0.98m、長さ約 5.17m、検出面からの深さは最深部で約 0.72m を測る。長軸はＮ－ 66°－Ｅである。断面は中央やや西寄りの最深部に向かい、両端より階段状に落ち込んでいる。埋土は３層に分けることができるが水成堆積は確認できず、埋土３層は基本層７層のブロックを大量に含み、締まりは非常に強い。加工時の成形土と考えられる。検出時は溝状にでき、周囲の近現代の溝と同時期のものと考えていたが、埋土は黒褐色で、掘立柱建物跡を成すピットの埋土よりも黒味が強い。また、ＳＢ１のピットを切る状況も確認された。用途は不明である。

④畝状遺構（第 109 図）

Ｅ２・３、Ｆ２・３グリッドに位置し、４層上面にて検出した。畝の凹状遺構と考えられる。長いもので約 4.55m、一番短いものが約 2.22m を測る。６条の全てがほぼＮ－ 30°－Ｗ方向を向く。植物依存体などは確認されていない。黒褐色の埋土で混入物は確認できなかった。

遺物は 465 に示す東播系須恵器の捏鉢の口縁部片が出土している。内面の下半部は、使用による擦れが観察できる。

（５）近世～近代の遺構・遺物（第 110 図～第 114 図）

検出したのは溝状遺構８条、土坑３基であるが前者のみ記載する。遺物は、近世瓦、陶磁器片を主として、須恵器、土師器、縄文土器、石器が少量出土している。瓦以外の遺物は細片が多くを占めるが、ここでは実測ができた遺物について記載する。

ＳＤ１（第 110 図・第 113 図・第 114 図）

調査区中央、北東から南西方向へと延び、溝方向はＮ－ 66°－Ｅである。両端はそれぞれ調査区外へと続く。南西に向けて溝幅は広がり、確認できる長さは約 38.4m、南西壁面で確認できる溝幅は約 4.5m、深さは約 1.48m である。断面は深い皿状を呈する。周辺の溝との位置関係を考察するに、区画溝としての使用が考えられる。使用期は３期に分けられると考えられ、その都度掘り返し、及び整地を繰り返した痕跡を残す埋土である。

ＳＤ１からの出土遺物は 20 点を図示している。466 は把手である。467 は龍泉窯系青磁碗で、外面に細蓮弁文が観察できる。内面の見込みは無文である。468 は削り出し高台をもつ壷と思われる。外面の一部に自然釉が観察できる。469 は砂目積痕をもつ肥前系陶器の皿である。高台にも３箇所の砂目積痕が残る。470 は肥前系の染付皿である。見込みは手描きと思われる五弁花、高台内は渦福の一部が観察できる。471 の染付皿は見込みに手描きの五弁花、外面には唐草文の一部が観察できる。472 ～ 474 は肥前の染付碗である。外面には円文（縞）と菱文をもち、472 の見込みにはコンニャク印判による五弁花が観察できるが形はかなり崩れており歪である。475 は染付皿で、内面には二線を対とした草文、圏線が観察できる。476・477 は陶器碗で、476 は蛇の目の釉剥ぎ痕、高台内には渦状の削り込みをもつ。

478・479 は縦長の剥片で、それぞれ安山岩製、輝緑凝灰岩製のものである。480 はチャート製の残核で、上面に礫面を残す。少なくとも２面の幅広剥片を剥出したと考えられる。481 は安山岩製の短冊形を呈する打製石斧で基部を欠損する。下半部に摩耗が観察できる。482 は砂岩製の打製石斧で不整形な撥形を呈する。刃部はやや尖る。483 は２点が接合した安山岩製の石斧である。下半部の平面に擦痕が観察できる。484・485 は使用面を４面もつ砥石である。

ＳＤ２（第 110 図・第 114 図）

調査区中央、北西から南東方向へと延び、溝方向はＮ－ 24°－Ｗである。ＳＤ１に向かい直行するような方向へ延びるも、交錯はしない。確認できる長さは約 11.1m、溝幅は約 0.62m、深さは約 0.30m を測る。

ＳＤ２からは 486 に示す天草砥石の硯が出土している。砥石として使用されていたものを硯へ転用したと考えられ、左側、裏面において砥石時の使用痕が残る。硯の陸部には墨を磨りやすくするための横方向への刻みが施されている。海部、波止部、陸部全域に墨の付着が観察できる。

ＳＤ３（第 110 図）

調査区中央、南東から北西方向へと延び、溝方向はＮ－ 24°－ＷとＳＤ２と同じである。同じくＳＤ１に向かい直行するような方向へ延びるも、交錯はしない。確認できる長さは 25.9m、溝幅は最大で約 1.15m、深さは約 0.40m を測る。

ＳＤ４（第 110 図・第 114 図）

調査区の中央、南西側に位置し、近接するＳＤ５、６とは並行に並んでおり、ＳＤ３に直行するように走る。北東から南西方向へと延び、溝方向はＮ－ 68°－Ｅである。確認できる長さは約４m 以上、溝幅は最大で

約 0.34m、深さは約 0.14m を測る。ＳＤ５の延長がＳＤ３の西側で確認されていることから、圃場整備等で上層が大きく削平されているため確認はできないが、このＳＤ４もＳＤ３に直交していたものと考えられる。

487 は須恵器の壷と考えられる胴部片が出土しており、脚部は剥落している。

ＳＤ５（第 110 図）

ＳＤ４の南に位置する。溝方向はＮ－ 67°－Ｅである。確認できる長さは推定で約 21.1m 以上、溝幅は最大で約 0.85m、深さは約 0.22m を測る。ＳＤ３の西側でＳＤ５の延長部が確認されている。

ＳＤ６（第 110 図）

ＳＤ５の南に位置する。溝方向はＮ－ 63°－Ｅである。確認できる長さは推定で約 6.1m 以上、溝幅は最大で約 0.60m、深さは約 0.12m を測る。

ＳＤ７（第 112 図・第 114 図）

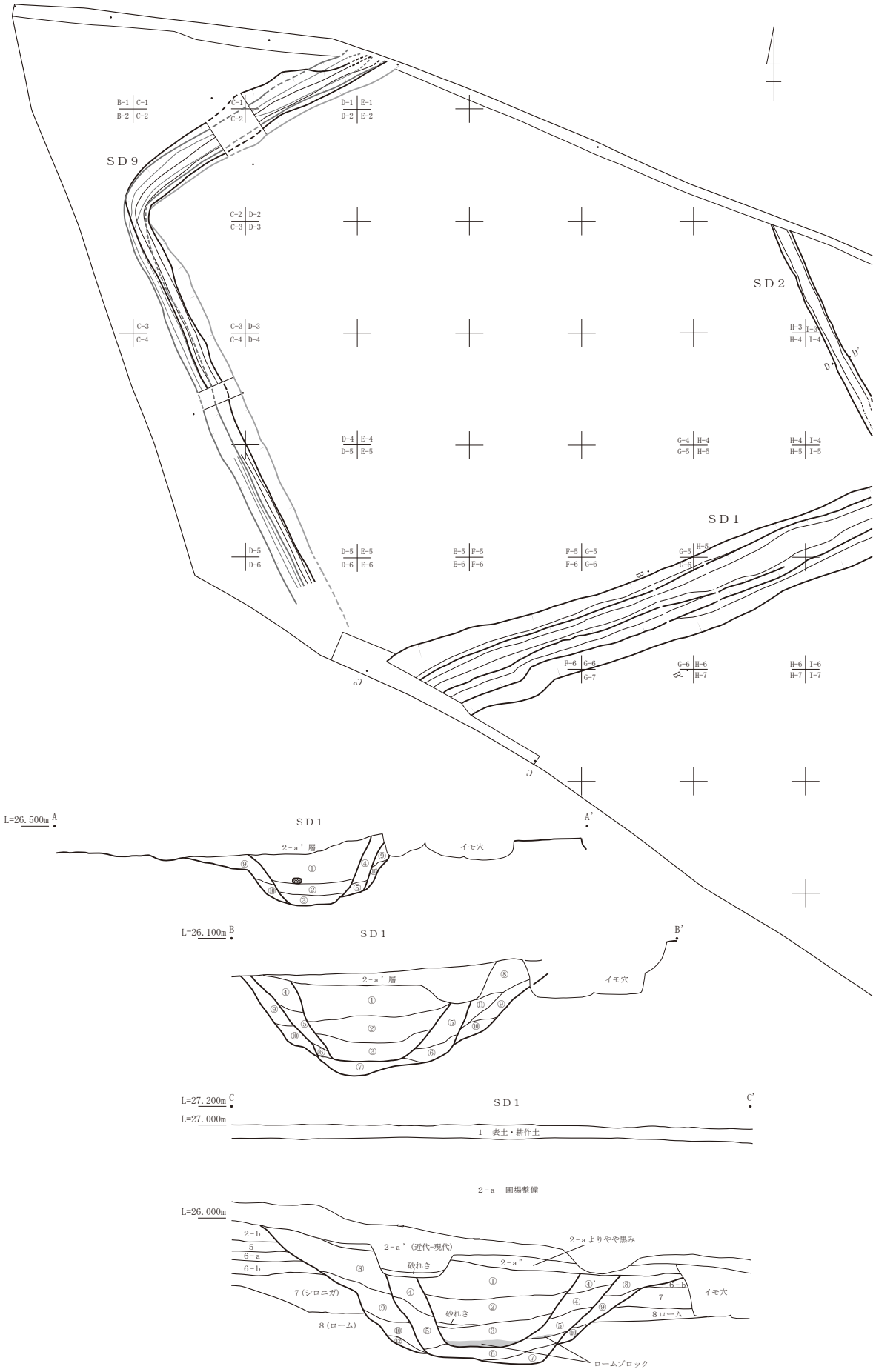
調査区東、南東から北西方向へと延び、溝方向はＮ－ 20°－Ｗである。両端はそれぞれ調査区外へと続く。確認できる長さは約 23.6m、Ａ－Ａ’で確認できる溝幅は約 2.7m、深さは約 0.92m である。断面は台形状を呈する。使用期はＳＤ１と同様３期に分けられると考えられる。

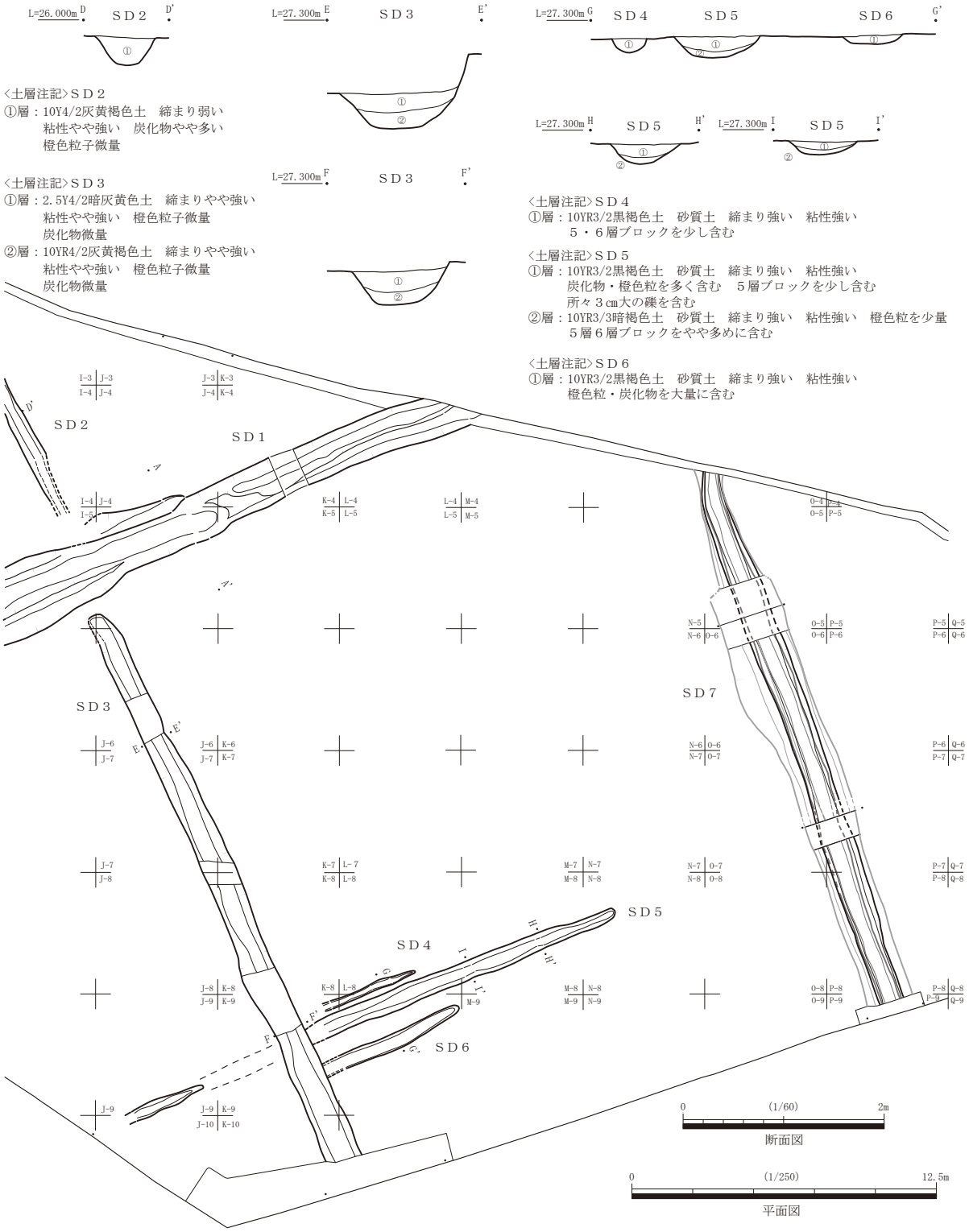
ＳＤ７からは 488 に示す須恵器の鉢の底部片が出土している。外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。489 は近代文具の石板である。

ＳＤ９（第 111 図・第 114 図）

調査区西に位置し、90°近く屈曲する溝である。南東から北西への向きから、Ｂ２・３、Ｃ２・３グリッドを隔てる杭付近より北東へと向きを変える。両端はそれぞれ調査区外へと続く。確認できる長さは約 34.5m、北壁面で確認できる溝幅は約 2.85m、深さは約 1.0m を測る。ＳＤ１、ＳＤ７と同じく、使用期は３期に分けられる。

ＳＤ９から出土した遺物は４点図示している。490 は須恵器の溶着塊で、蓋３点、甕の胴部１点の少なくとも４個体分の存在が確認できる。上面には窯壁と思われる塊が付着している。重ね焼き、もしくは廃棄品を重ね置いていたものが窯内で焼成され、溶着したものと考えられる。蓋の形状から９世紀頃のものと考えられる。近くの生産遺跡としては、当遺跡から南南東へ約 3.2㎞、チサンゴルフ場西側斜面、御船町大字高木字善助山にある古代、中世期の「善助山窯跡」がある。この窯跡所産の可能性があるが、出土地までの距離など根拠に乏しい。調査区からより近くの箇所に未発見の窯跡が存在する可能性もある。491 は甕の底部直上部と思われる中世須恵器片である。内面は斜方向からのハケメ、外面は格子目状のタタキを施している。0.5㎜～ 1.0㎜程度の砂粒を少し含み、2.0㎜程度の小石を含んでいる。美濃口雅朗氏（熊本市文化振興課）より、樺番城系のものではないかという御教示を得たものである。492 はＳＤ１で示した 469 と同様、砂目積痕をもつ肥前系陶器の皿である。493 は白磁の皿で、波佐見系のものと思われる。内面に蛇の目の釉剥ぎ痕が観察できる。


SD9
SD2
SD1
B-1 C-1 B-2 C-2
C-1 C-2
D-1 E-1 D-2 E-2
C-2 D-2 C-3 D-3
C-3 C-4
C-3 D-3 C-4 D-4
H-3 I-3 H-4 I-4
D-4 E-4 D-5 E-5
G-4 H-4 G-5 H-5
H-4 I-4 H-5 I-5
D-5 D-6
D-5 E-5 D-6 E-6
E-5 F-5 E-6 F-6
F-5 G-5 F-6 G-6
G-5 H-5 G-6
F-6 G-6 G-7
G-6 H-6 H-7
H-6 I-6 H-7 I-7
L=26.500m A
A'
SD1
2-a' 層
イモ穴
L=26.100m B
B'
SD1
2-a' 層
イモ穴
L=27.200m C
C'
SD1
L=27.000m
1　表土・耕作土
2-a　圃場整備
L=26.000m
2-b
5
6-a
6-b
7（シロニガ）
8（ローム）
2-a'（近代-現代）
砂れき
2-a よりやや黒み
2-a"
砂れき
6-b
7
8 ローム
イモ穴
ロームブロック



〈土層注記〉ＳＤ２
①層：10Y4/2灰黄褐色土　締まり弱い
　　粘性やや強い　炭化物やや多い
　　橙色粒子微量

〈土層注記〉ＳＤ３
①層：2.5Y4/2暗灰黄色土　締まりやや強い
　　粘性やや強い　橙色粒子微量
　　炭化物微量
②層：10YR4/2灰黄褐色土　締まりやや強い
　　粘性やや強い　橙色粒子微量
　　炭化物微量

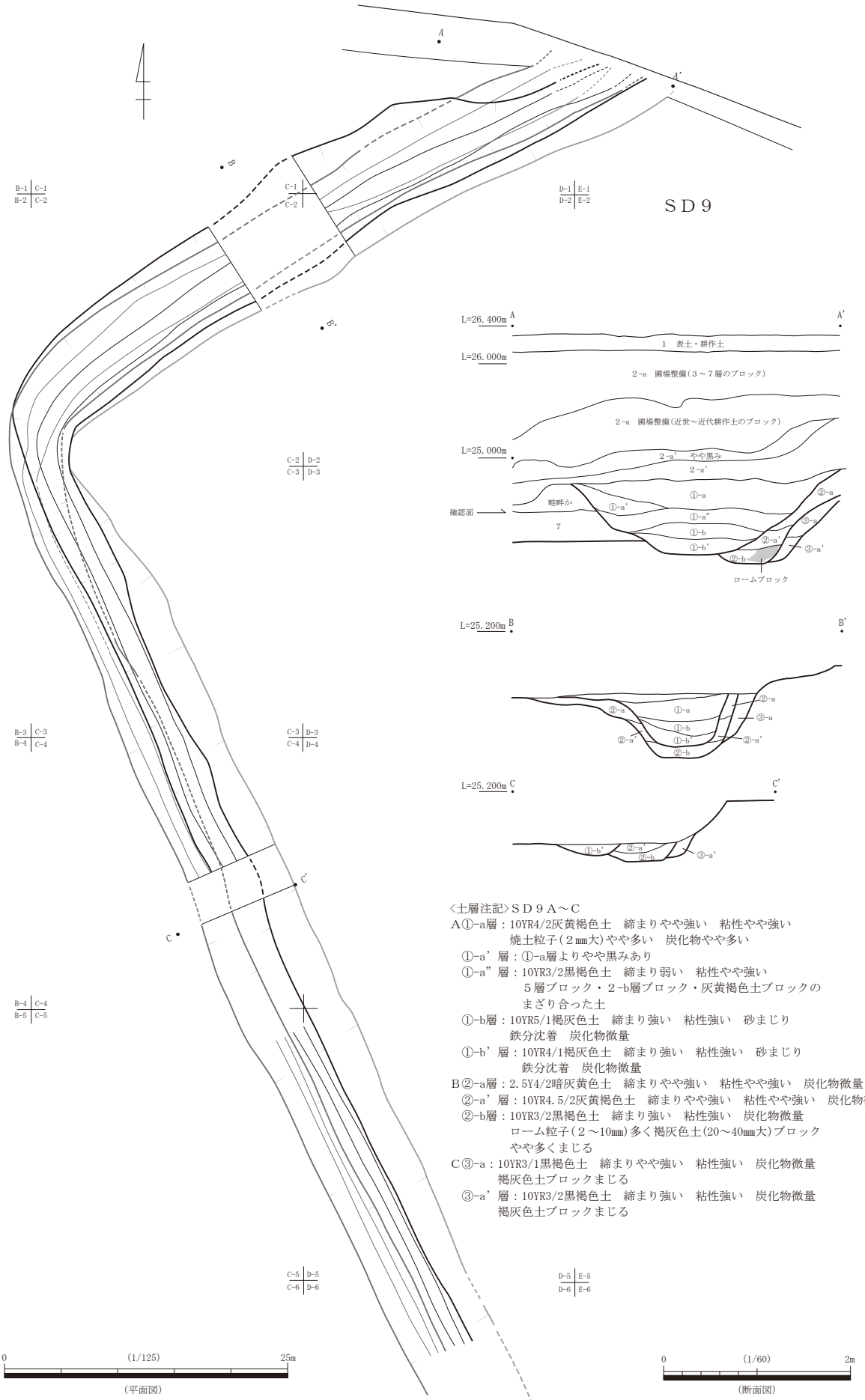
〈土層注記〉ＳＤ４
①層：10YR3/2黒褐色土　砂質土　締まり強い　粘性強い
　　５・６層ブロックを少し含む

〈土層注記〉ＳＤ５
①層：10YR3/2黒褐色土　砂質土　締まり強い　粘性強い
　　炭化物・橙色粒を多く含む　５層ブロックを少し含む
　　所々３㎝大の礫を含む
②層：10YR3/3暗褐色土　砂質土　締まり強い　粘性強い　橙色粒を少量
　　５層６層ブロックをやや多めに含む

〈土層注記〉ＳＤ６
①層：10YR3/2黒褐色土　砂質土　締まり強い　粘性強い
　　橙色粒・炭化物を大量に含む

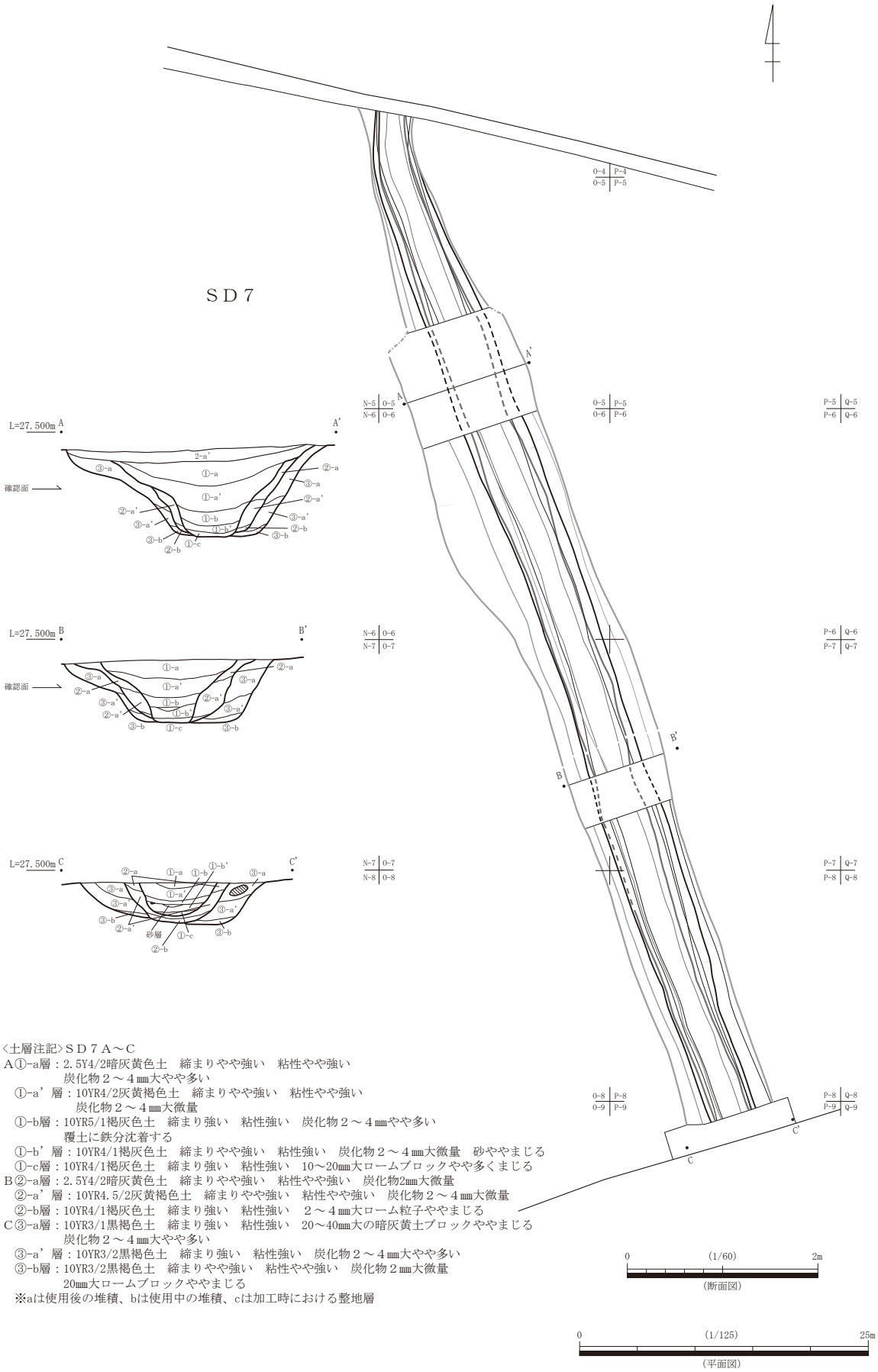
〈土層注記〉ＳＤ１Ａ～Ｃ
Ａ①層：10YR4/2灰黄褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　２㎜大橙色粒子　炭化物やや多く含む
　②層：10YR5/1褐灰色土　締まり強い　粘性強い　２㎜大橙色粒子・炭化物微量　砂ややまじる
　③層：10YR4/1褐灰色土　締まり強い　粘性強い　２㎜大橙色粒子・炭化物やや多い　砂ややまじる
　　※②・③層は使用時堆積(水と関係あり)
Ｂ④層：2.5Y4/2暗灰黄色土　締まり弱い　粘性弱い　２㎜大橙色粒子・炭化物微量　④'-④よりやや明るい
　⑤層：10YR4.5/2灰黄褐色土　締まり弱い　粘性弱い　２㎜大橙色粒子やや多い　炭化物微量
　⑥層：10YR5/2灰黄褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　２㎜大橙色粒子・炭化物微量　砂ややまじる
　⑦層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　２㎜大ローム粒子・20～30㎜大ロームブロック多く含む　２㎜大橙色粒子・炭化物微量
Ｃ⑧層：2.5Y4/2暗灰黄色土　締まりやや強い　粘性やや強い　２㎜大橙色粒子・炭化物微量
　⑨層：10YR3/1黒褐色土　締まり弱い　粘性弱い　２㎜大橙色粒子・炭化物やや多い　灰黄褐色土ブロック(20～30㎜大)ややまじる
　⑩層：10YR3/2黒褐色土　締まり弱い　粘性弱い　２㎜大橙色粒子・炭化物やや多い　灰黄褐色土ブロック(20～30㎜大)　２～４㎜大ローム粒子ややまじる
　⑪層：2.5YR4.5/2暗灰黄色土　締まりやや強い　粘性やや強い　⑧よりやや暗い　２㎜大橙色粒子・炭化物微量
　⑫層：10YR3/3暗褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　20～40㎜大ロームブロックややまじる

第 110 図　　ＳＤ遺構実測図



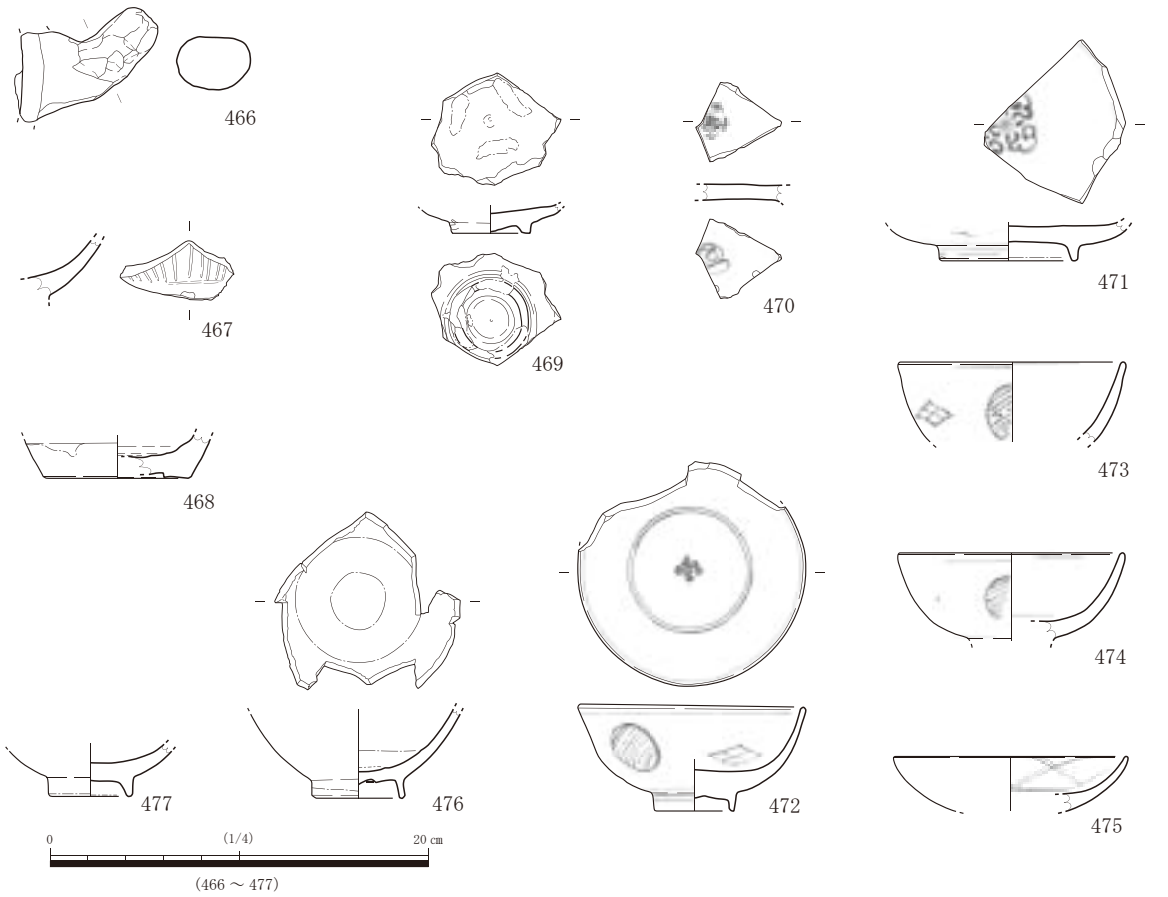
〈土層注記〉ＳＤ９Ａ～Ｃ
Ａ①-a層：10YR4/2灰黄褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
焼土粒子（２㎜大）やや多い　炭化物やや多い
①-a'層：①-a層よりやや黒みあり
①-a"層：10YR3/2黒褐色土　締まり弱い　粘性やや強い
５層ブロック・２-b層ブロック・灰黄褐色土ブロックの
まざり合った土
①-b層：10YR5/1褐灰色土　締まり強い　粘性強い　砂まじり
鉄分沈着　炭化物微量
①-b'層：10YR4/1褐灰色土　締まり強い　粘性強い　砂まじり
鉄分沈着　炭化物微量
Ｂ②-a層：2.5Y4/2暗灰黄色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物微量
②-a'層：10YR4.5/2灰黄褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物微量
②-b層：10YR3/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　炭化物微量
ローム粒子（２～10㎜）多く褐灰色土（20～40㎜大）ブロック
やや多くまじる
Ｃ③-a：10YR3/1黒褐色土　締まりやや強い　粘性強い　炭化物微量
褐灰色土ブロックまじる
③-a'層：10YR3/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　炭化物微量
褐灰色土ブロックまじる

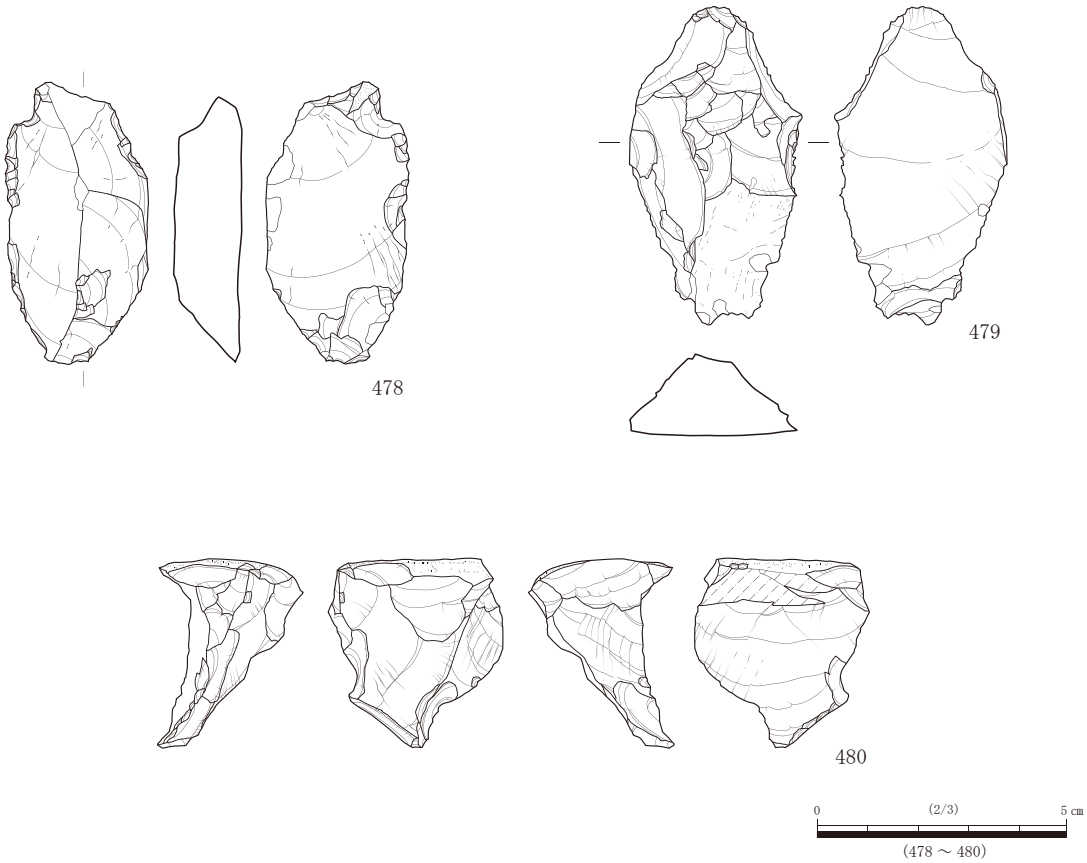
第 111 図　　ＳＤ９遺構実測図



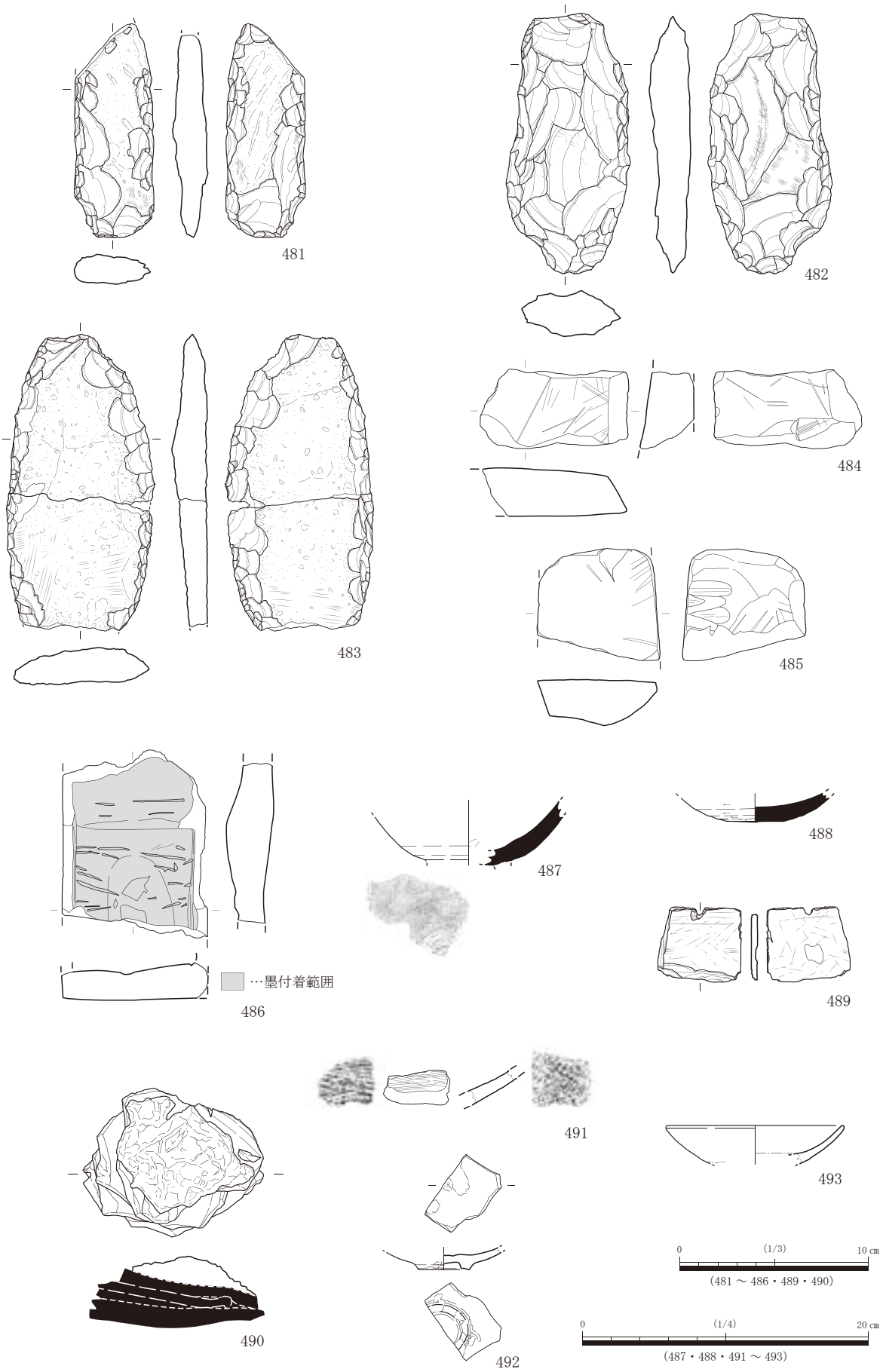
〈土層注記〉ＳＤ７Ａ～Ｃ
Ａ①-a層：2.5Y4/2暗灰黄色土　締まりやや強い　粘性やや強い
炭化物２～４㎜大やや多い
①-a’層：10YR4/2灰黄褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い
炭化物２～４㎜大微量
①-b層：10YR5/1褐灰色土　締まり強い　粘性強い　炭化物２～４㎜やや多い
覆土に鉄分沈着する
①-b’層：10YR4/1褐灰色土　締まりやや強い　粘性強い　炭化物２～４㎜大微量　砂ややまじる
①-c層：10YR4/1褐灰色土　締まり強い　粘性強い　10～20㎜大ロームブロックやや多くまじる
Ｂ②-a層：2.5Y4/2暗灰黄色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物2㎜大微量
②-a’層：10YR4.5/2灰黄褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物２～４㎜大微量
②-b層：10YR4/1褐灰色土　締まり強い　粘性強い　２～４㎜大ローム粒子ややまじる
Ｃ③-a層：10YR3/1黒褐色土　締まり強い　粘性強い　20～40㎜大の暗灰黄土ブロックややまじる
炭化物２～４㎜大やや多い
③-a’層：10YR3/2黒褐色土　締まり強い　粘性強い　炭化物２～４㎜大やや多い
③-b層：10YR3/2黒褐色土　締まりやや強い　粘性やや強い　炭化物２㎜大微量
20㎜大ロームブロックややまじる
※aは使用後の堆積、bは使用中の堆積、cは加工時における整地層

第 112 図　　ＳＤ７遺構実測図





第 113 図　　ＳＤ出土遺物実測図１



第 114 図　　ＳＤ出土遺物実測図２

近世～近代のものとして検出した８条の溝は、それぞれの配置関係からそのほとんどが区画溝として利用されていたと考えられる。流れ込んだ遺物も近世のものが多いながらも、古代～中世のものも含む。ここで調査者が気になる点を２つ記しておく。１つめは近世～近代のものとした溝８条と古代～中世のものとした畝状遺構、ＳＤ８との関係である。畝状遺構は近～現代、特にＳＤ１・２・９の溝から成る方形区画に対し並行、直行する。またＳＤ８もＳＤ１と並行する点である。２つめは古代～中世とした掘立柱建物３棟もまた、８条の溝の方向軸を意識しているかのような配置である点である。おそらくは古代～中世期から近～現代に至るまで、土地形状、土地利用にあまり差がなかったためとも考えられる。つまり、ここで記した溝８条は検出層位や埋土の状況からは近世～近代として使用を確認できるのだが、それよりも前の古代～中世期にも８条全てでは無いにせよ、同じ方向軸をもった溝の初期段階が存在し、その後土地利用を同じくする近世～近代において大きく掘り返しを受けた結果、初期段階のものは滅失したのではないかと推察する。

（６）遺構外出土遺物（第 115 図～第 122 図）

基本層位毎の掘り下げ、確認トレンチ掘削、撹乱埋土より出土した遺物である。

494 ～ 512 の 19 点は縄文期の土器を示している。494 は縄文早期の深鉢で、外面は撚糸文と考えられる。495 は貝殻条痕、496 は押引文がそれぞれ施されている。497 は阿高式の口縁部片で、口唇部に３箇所の刻目、外面に凹点と３条の凹線文が施されている。498 は古閑式の浅鉢形土器の口縁で、補修孔をもつ。499 ～ 503・507・508・512 は浅鉢形土器である。499 は内外面ともに顕著なミガキが施されている。501 は欠損するも片側への口縁部の上がり方から、リボン状突起を有するものと考えられる。503 もリボン状突起が貼り付けられている。507・508 は内面にそれぞれ横、斜めのミガキが、外面は貝殻条痕が施されている。512 は残存形状からみて極めて底部に近い部分と考えられ、組織痕をもつものである。498 から示した縄文後・晩期の土器１５点のうち、499・504 ～ 507 はＳＩ１・２・３を、501・503・508・512 はＳＩ４・５・６を検出したグリッド、及び近接グリッドからの出土である。

513 の土師器甕は復元口径約 25.7㎝を測る。514 は甕の胴部と考えられ外面に横方向のハケメを施している。

515・516 は須恵器の椀で貼付高台をもち、両遺物とも復元底径は約 8.8㎝を測る。内外面ともに回転ナデが施されている。

517 は瓦質土器の擂鉢で内面の一部に縦方向の擂目が観察できる。外面には指頭圧痕が観察できる。518 は同じく瓦質の鉢である。519 は瓦玉である。側面に研磨が施されている。瓦質土器の再加工とも考えられるが、約 2.0㎝という厚みを測るため瓦玉の可能性が高い。

523 は同安窯系の青磁碗片で、内面には斜め方向の櫛状、外面には縦方向の陰刻が施されている。524 ～ 526 は龍泉窯系の青磁碗片で、524 は内面口縁部３条の陰刻が施されている。525 は外面に、526 は内面にそれぞれ蓮花の一部が観察できる。

520 ～ 522 は白磁皿、碗である。521 の白磁皿片は内面には横方向の、外面には縦方向の陰刻が観察できる。

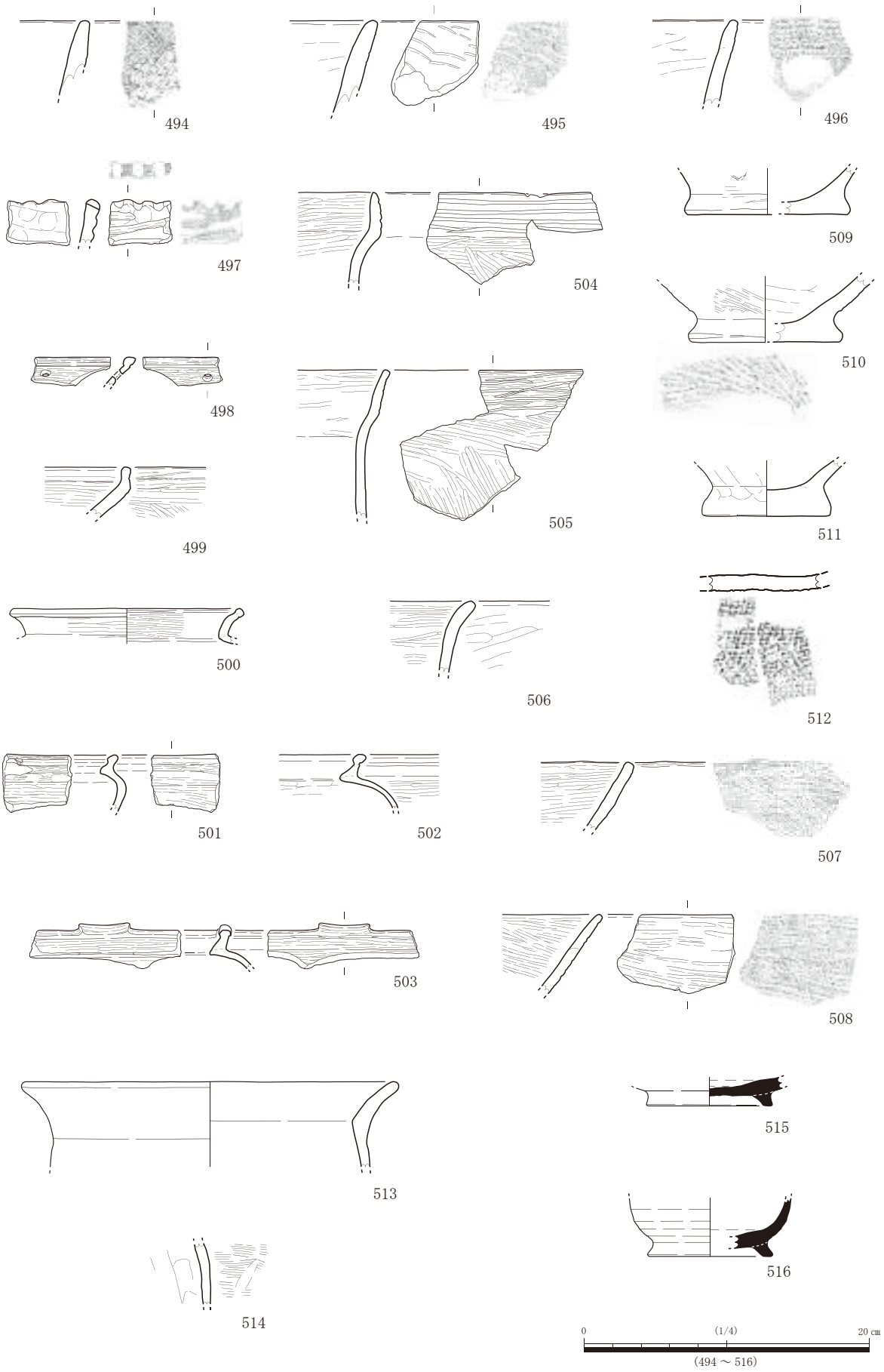
527 ～ 530 は陶器の皿、碗である。529 は細片だが、内面に釉剥ぎ痕の一部が観察できる。531 は肥前系陶器擂鉢で、明瞭な糸切り痕をもった平底である。17 世紀前半のものと考えられる。532 は筒形の染付碗である。内面口縁部に２条の圏線、外面には樹木文のようなものが観察できる。533 の染付皿は見込に五弁花が配されており、高台内は文字の一部が観察できるが判読はできない。534 は蛇の目の釉剥ぎ痕をもつ比較的新しい染付碗である。

石器は全 60 点を示す。

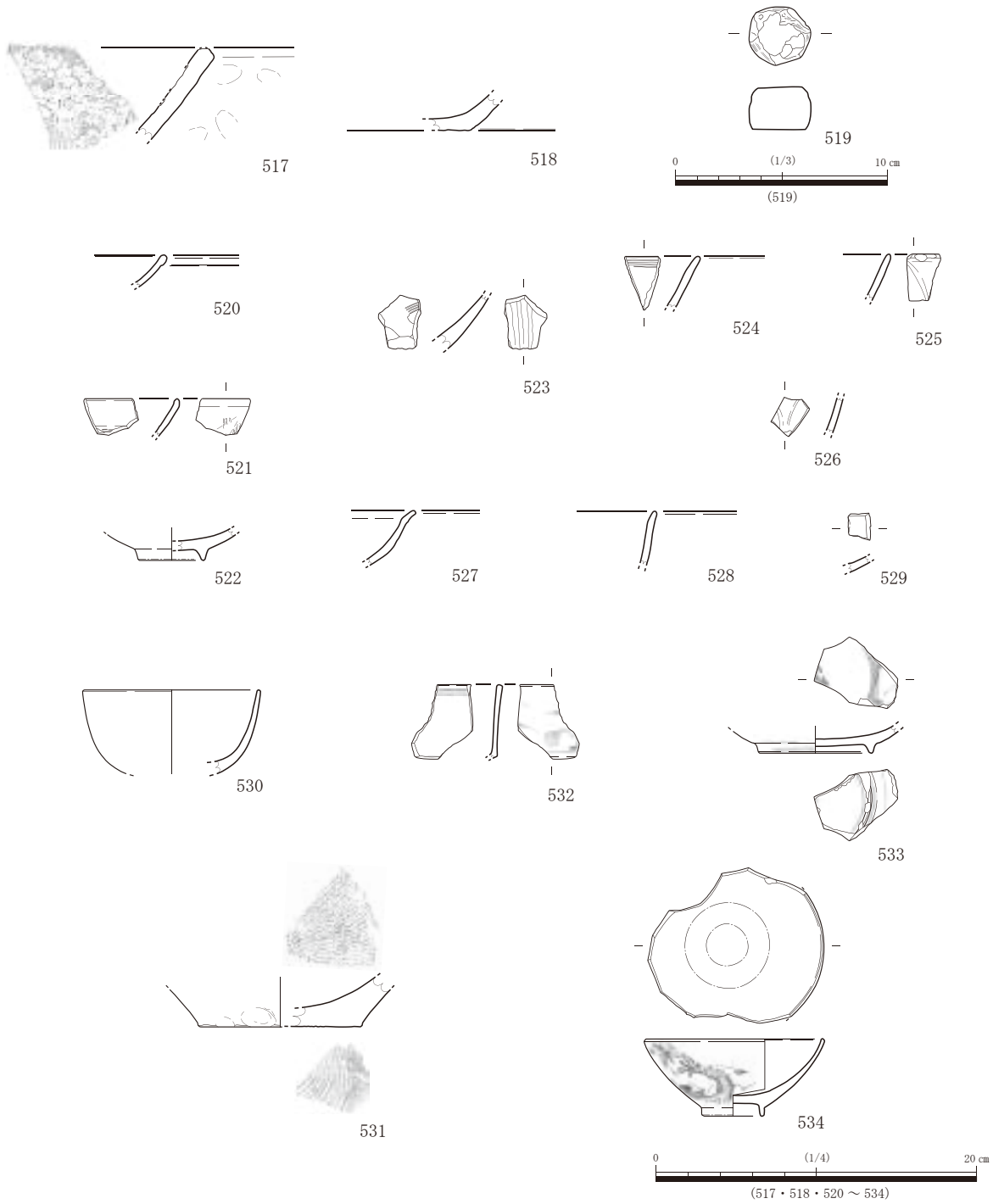
535 はＫ５グリッド、５層下より出土した三稜尖頭器である。珪質頁岩の肉厚な横長剥片を素材とし、稜上からの調整痕が観察できる。背面側からの調整はほとんど行われていない。先端部を一部欠損する。長さ 5.1㎝、幅 2.1㎝、厚さ 1.2㎝、重さ 10.12 ｇを測る。周辺部を掘り下げて、石器、ブロックの有無を確認するもこの１点にとどまった。塔平遺跡では国土交通省が実施主体の工事区間で調査したものと合わせて、３点の三稜尖頭器が出土したことになる。

536 はＬ９グリッド、４層及び同グリッド５層より出土した遺物の接合資料で、両側縁に使用痕をもつ剥片である。西北九州産の黒曜石を石材とし、両側縁に使用痕が見られる。長さ 2.7㎝、幅 1.1㎝、厚さ 0.4㎝、重さ 1.15 ｇを測る。細石刃の可能性もあるが、大辻遺跡（2013 益城町教育委員会）より出土したもの（長さ 2.4㎝、幅 0.95㎝、厚さ 0.2㎝、重さ 0.4 ｇ）と比較しても、やや幅広で大きいものであること、細石核が出土していないこと、出土層位などから疑問を残すままである。

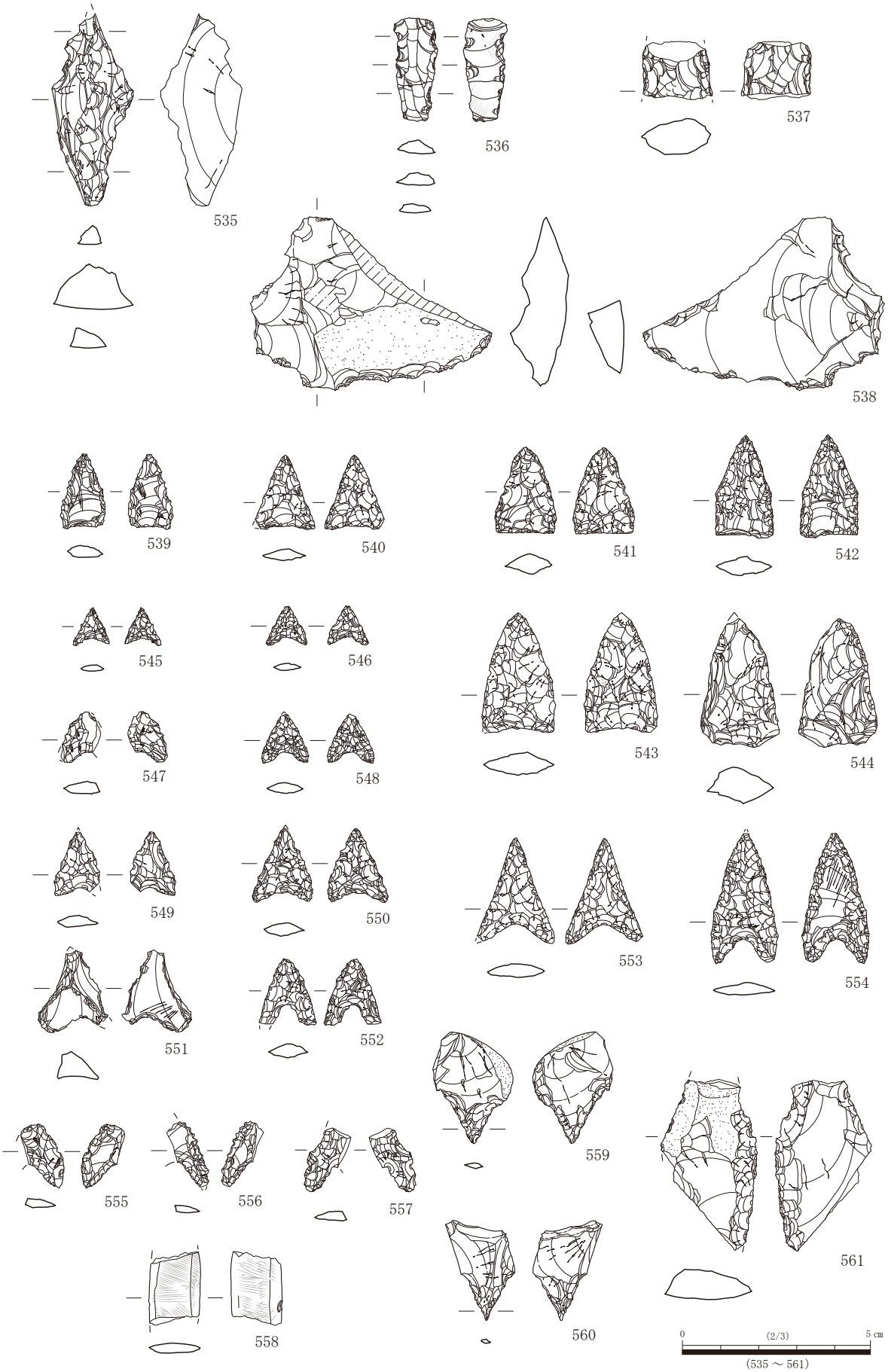
537 はＧ２グリッドの５層中から出土し頁岩製の石器片で、先端部、基部を欠損しているため全体の形状は不明である。約 1.0㎝もの厚みをもつため異形石鏃、あるいは尖頭器である可能性は否定できない。長さ 1.5㎝、



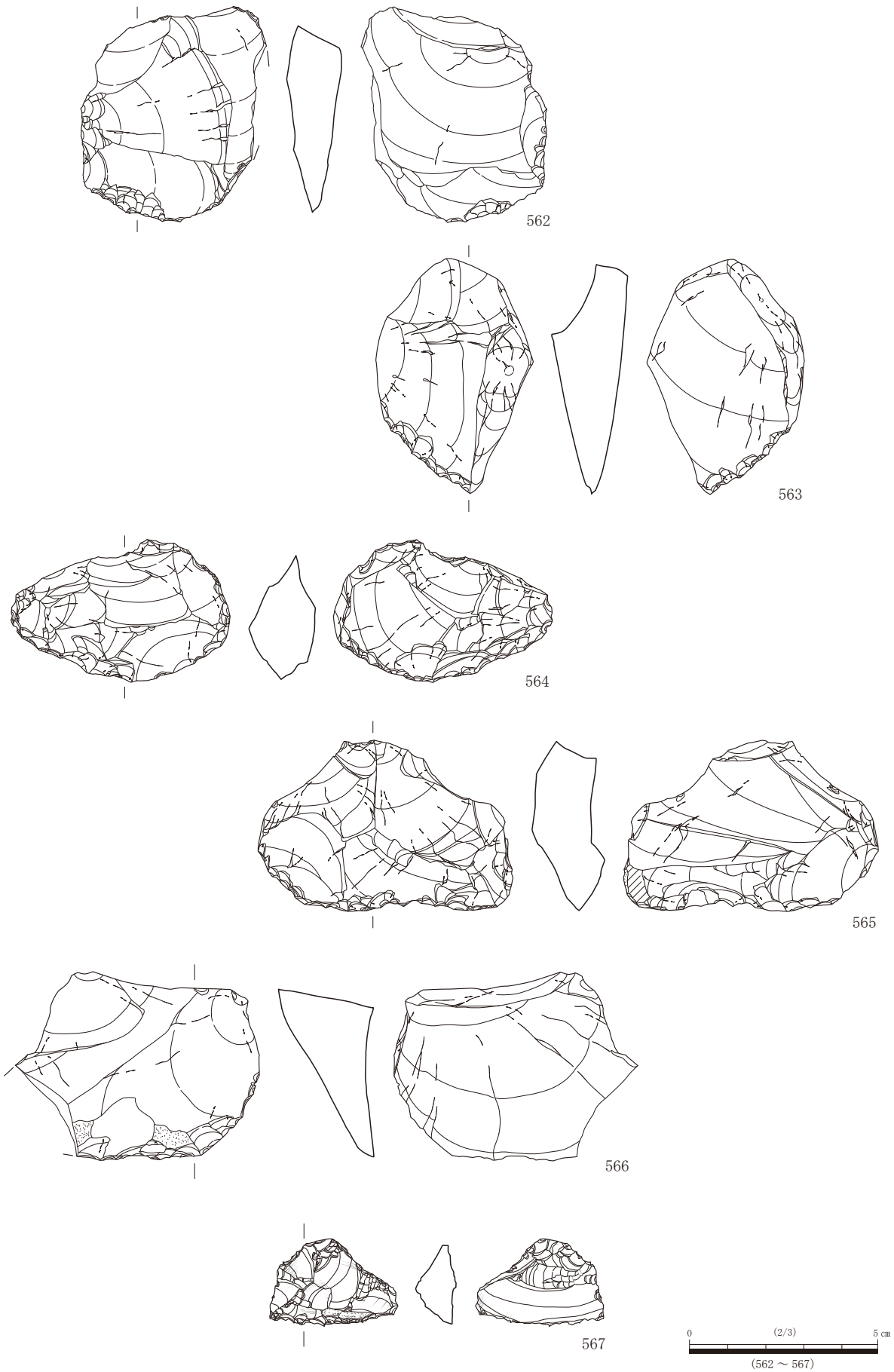
第 115 図　　遺構外出土遺物実測図 1



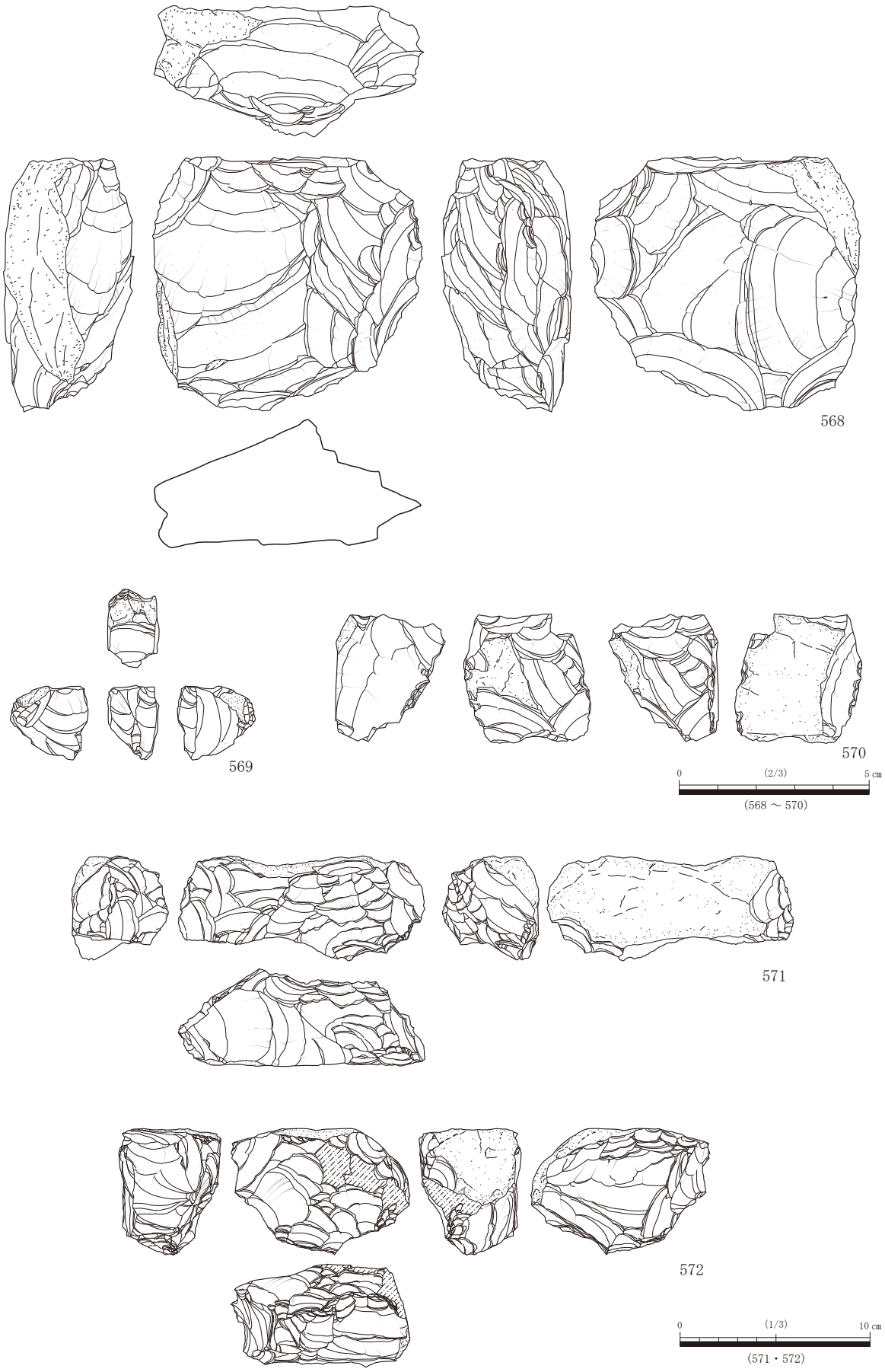
第 116 図　　遺構外出土遺物実測図２



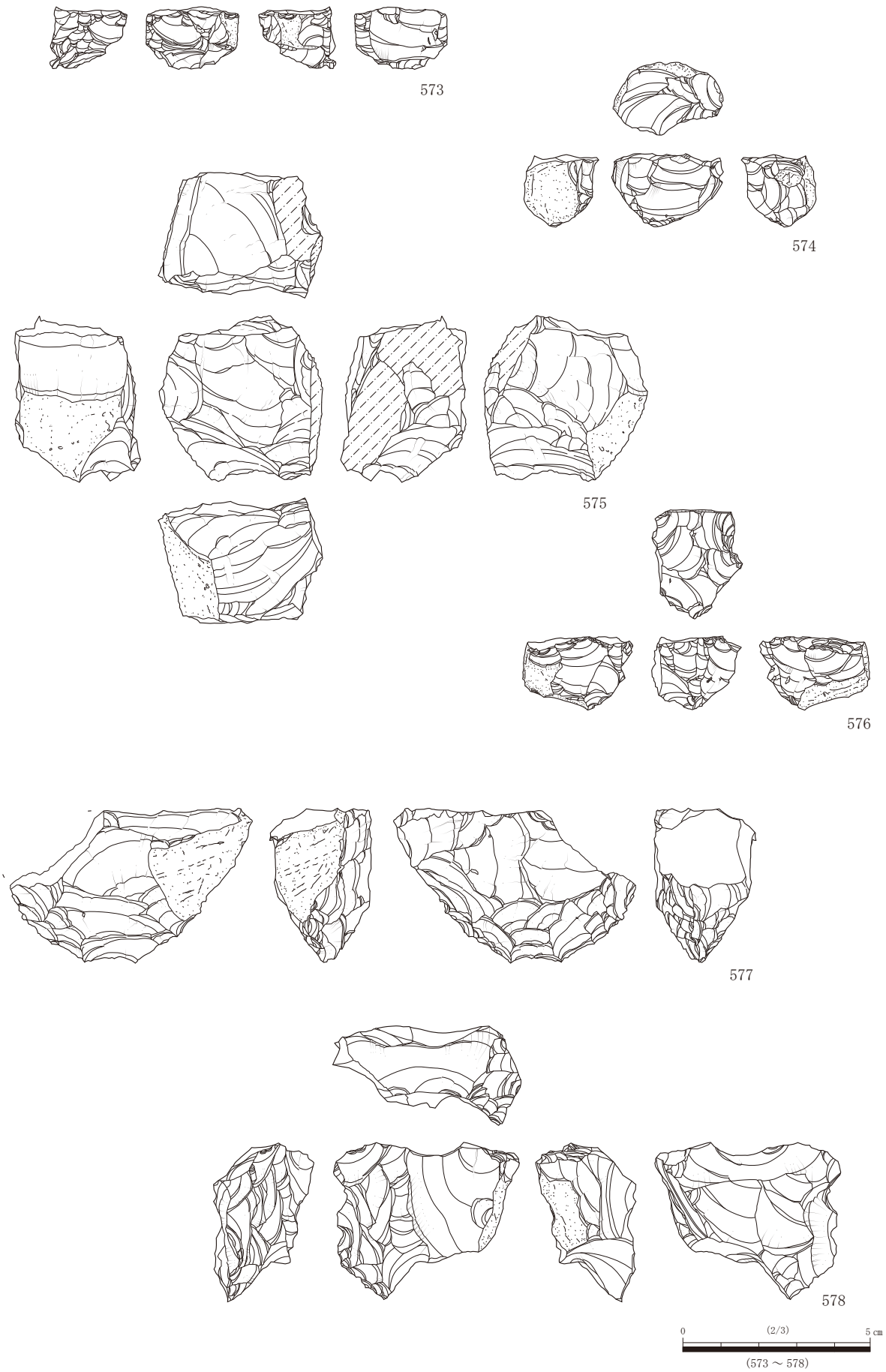
第 117 図　　遺構外出土遺物実測図３



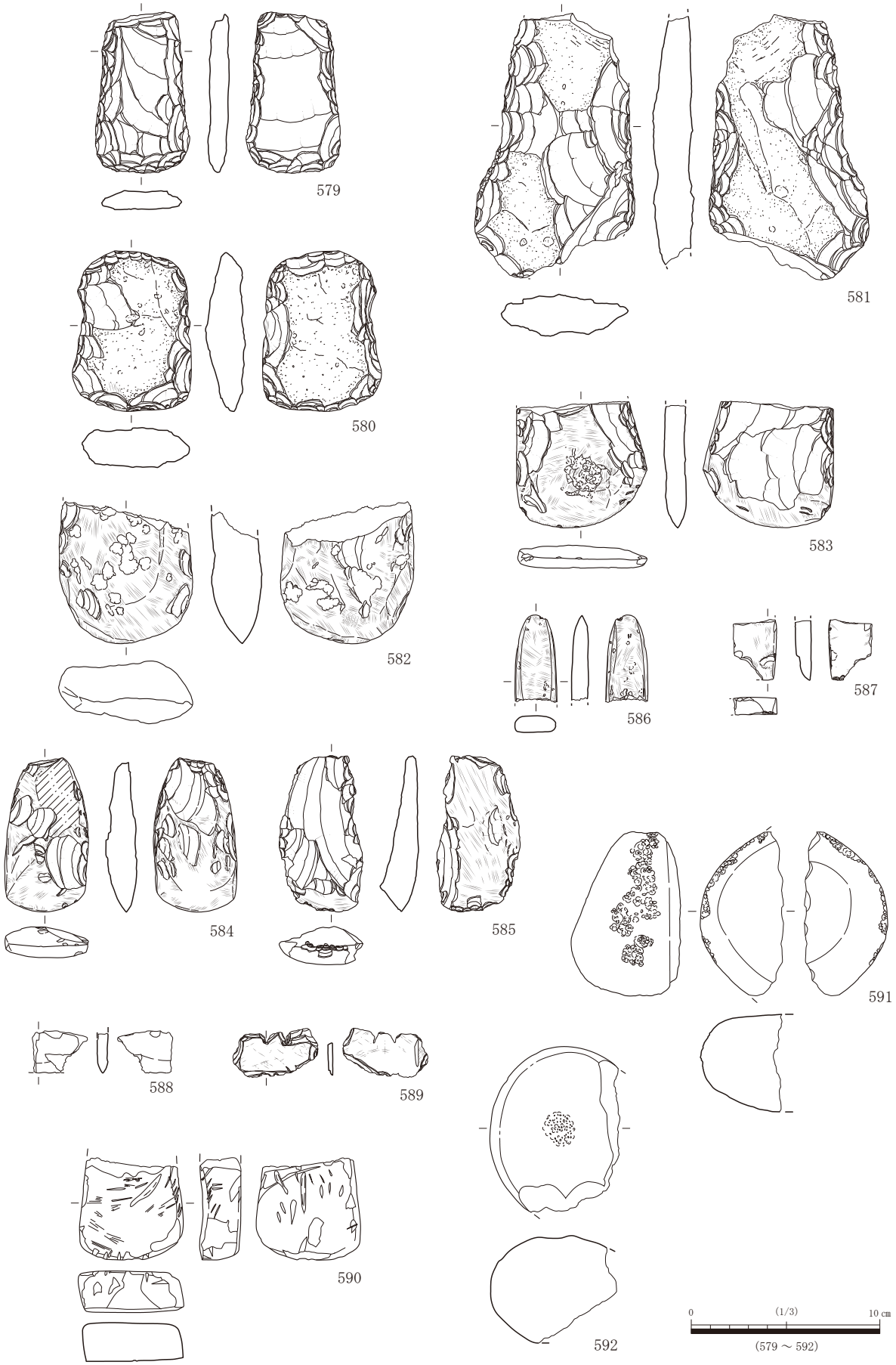
第 118 図　　遺構外出土遺物実測図４



第 119 図　　遺構外出土遺物実測図５



第 120 図　　遺構外出土遺物実測図６



第 121 図　　遺構外出土遺物実測図 7

幅 1.9㎝、重さ 3.37 ｇを測る。

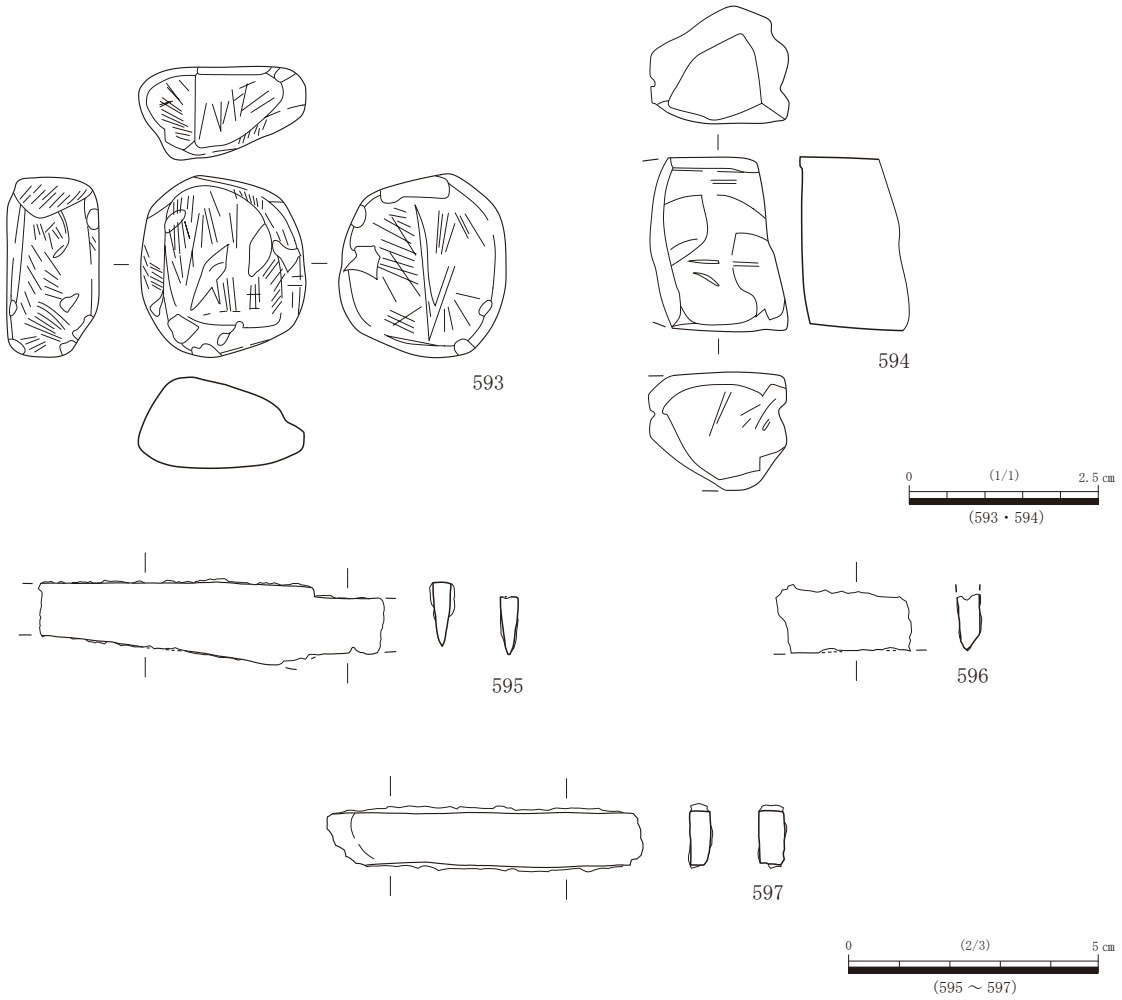
538 はＢ１グリッド５層下より出土した珪質頁岩製のスクレイパーである。幅広の剥片に一部自然面を残し、刃部調整は簡易で主に主面側に集中している。使用痕も観察できるが、風化しているようにも見える。縄文期以前の古い時期の石器である可能性をもつ。長さ 4.6㎝、幅 6.4㎝、厚さ 1.5㎝、重さ 34.10 ｇを測る。

539 ～ 558 の 20 点は石鏃を図示している。

539 ～ 543 は平基からやや凹基のものである。542 と 543 は基部から先端部にかけて鋭角から鈍角に変わる。544 は未製品と思われる。545 ～ 557 は基部の抉りが深くなる。545 は長さ 1.0㎝、幅 1.0㎝、厚さ 0.2㎝、重さ 0.11g を測り、出土した中で最小のものである。551 は未製品である。ここで記した１９点の打製石鏃の石材は、黒曜石 12 点（63％）、チャート４点（21％）、安山岩３点（16％）と、黒曜石製が半数以上を占める。558 は６区で出土した唯一の磨製石鏃である。チャート製で先端と基部を欠損しているが、柳葉形であったと考えられる。全体的に丁寧な研磨が施されている。

559・560 は安山岩製の石錐で、両縁側において先端部への調整が施されている。

561 は珪質頁岩製のもので、先端部を大きく欠損しているため全体の形状は不明だが、縦長石匙の未製品と考えられる。両面の縁辺部の調整が観察できる。562 ～ 567 は二次加工が施された剥片である。564 や 567 のように全周にわたって、563・566 のように一側面にのみ剥離調整が施されたものなどがある。



第 122 図　　遺構外出土遺物実測図８

568 ～ 578 の 11 点は石核を図示している。

568 はＢ２グリッドから出土した安山岩製のもので、周縁部から求心状に幅広剥片を剥出している。569 はＨ３グリッドから出土した黒曜石製のもので、礫面の残る上面を調整剥離後打面にして、小剥片を剥出している。この２点は６a 層上より出土したものである。570 はＤ３グリッドから出土しており、頁岩製で上面を除く周縁部より不定形剥片を剥出している。571 はＢ２グリッドの５層下より出土している。頁岩製で、周縁部からの打撃により不定形剥片を剥出している。上面から背部に礫面を大きく残している。380 ｇを測る大形のものである。572 はＥ３グリッドの５層下から出土したものである。緑色チャートを石材とし、少なくとも３箇所の打面から幅広剥片を剥出している。上面は礫面を大きく残す。これも 392 ｇを測る大形のものである。570 ～ 572 は５層ないし５層下より出土しており、剥離された面が他の石核と比較して風化している箇所をもつものもある。

上記５点の石核に関しては出土した層と同じ層位において縄文期の土器細片も確認されているが、調査６区で出土した石核の中でも、やや下層において出土したものである。三稜尖頭器の層位錯誤の例もあることから、536 ～ 538 を含めてこれらも旧石器時代のものである可能性もあるが、報告者の力量、資料観察不足で判断には至らなかった。

573・574・576 は黒曜石製のものである。573 は５層中から出土したもので、４箇所以上の打面から小形の幅広剥片を剥出している。574 は３箇所以上の打面から小形の幅広剥片を剥出している。５層中から出土している。575 は５層中から出土した輝緑凝灰岩製のもので、少なくとも２箇所の打面より不定形剥片を剥出している。全体的に節理が多く、目的剥片は多く得られていないと思われる。576 は４層中から出土したもので、少なくとも４箇所の打面から小形の幅広剥片を剥出している。577 は安山岩製で、５箇所より不定形剥片を剥出している。578 は頁岩製のもので、５面の打点より不定形剥片を剥出する。

579 ～ 587 の９点は石斧を図示している。579・580 は撥形を呈し、それぞれ緑色片岩、安山岩を石材とする。581 は分銅形を呈し、片側のみ抉入し、基部は膨らまない。刃部、基部ともに端部を欠損する。582 は蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部のみの残存である。刃部の稜は湾曲し水平ではない。583 は砂岩製のもので、撥形を呈すと考えられる。584 も撥形を呈するが、やや小ぶりである。585 は欠損した磨製石斧を再加工したものである。刃部側の両側面に再調整のための剥離が施されている。刃部に使用痕と思われる小剥離が観察できる。586 は蛇紋岩製の小形のもので、刃部を大きく欠損する。全体的に丁寧で、基部の端部まで研磨調整が施されている。587 は扁平片刃石斧の破片と思われる。基部と片側縁を欠損している。粘板岩製で風化が激しいが、全体的に丁寧な研磨が施されていたようである。

588 は欠損が著しいが、安山岩製の石庖丁の刃部片と考えられる。

589 は粘板岩を石材とし、両面ともに研磨が施されている。489 と同様、近代文具の石板の一部と考えられる。

590 は使用面を５面もつ天草砥石である。591・592 は磨・敲石で、それぞれ側面、中央部に敲打痕が観察できる。

593 は黒色の硬質石材を加工研磨した碁石と考えられる。表裏、全側面において研磨が施されている。長さ 2.4㎝、幅 2.2㎝、厚さ 1.2㎝、重さ 10.2 ｇを測る。594 は滑石製の石器片で、石鍋の耳の一部と考えられる。

鉄器は３点図示する。595 の刀子は、残存する長さ 6.85㎝、幅 1.70㎝、厚さ 0.35㎝を測る。刃部、基部を欠損する。断面は三角形を呈する。596 は断面が三角形を呈しているが、欠損が激しく全体の形状、器種は不明である。刀子片とも考えられる。597 は長さ 6.25㎝、幅 1.30㎝、厚さ 0.55㎝を測る棒状鉄器である。断面は四角形を呈している。

【引用・参考文献】

麻生優・加藤晋平・藤本強編　『日本の旧石器文化３　遺跡と遺物〈下〉』
麻生優・加藤晋平・藤本強編　『日本の旧石器文化５　旧石器文化の研究法』
高谷和生・江本直編　1983　『曲野遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 61 集　熊本県教育委員会
松本健郎・野田拓治ほか編　1983　『上の原遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 58 集　熊本県教育委員会
江本直編　1986　『熊本県旧石器時代調査報告書』熊本県文化財調査報告第 81 集　熊本県教育委員会
宮坂孝宏編　1994　『白鳥平Ｂ遺跡』熊本県文化財調査報告第 142 集　熊本県教育委員会
古森政次編　1999　『潮山・クノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第 179 集　熊本県教育委員会
稲葉一文・橋口剛士ほか編　2010　『瀬田池ノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第 252 集　熊本県教育委員会
小林達夫・小川忠博　1989　『縄文土器大観　1　草創期　早期　前期』
小林達夫・小川忠博　1989　『縄文土器大観　4　後期　晩期　続縄文」
渡辺誠　1991　「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』三島格会長古稀記念号
緒方勉・髙木正文編　1975　『久保遺跡－観音堂・櫛島遺跡－』熊本県文化財調査報告第 18 集
熊本県教育委員会
隈昭志ほか編　1980　『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告第 47 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999　『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第 184 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999　『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告第 175 集　熊本県教育委員会
出合宏光　2000　「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ
日本中世土器研究会
美濃口雅朗　1997　「樺番城窯跡の中世須恵器（１）」『肥後考古第 10 号』
美濃口雅朗　2007　「樺番城（熊本県）」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年　補遺編』
大宰府市教育委員会　2000　『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』
加藤唐九郎編　『原色陶器大辞典』
矢部良明ほか編『角川　日本陶磁大辞典』
荒尾市　2012『荒尾市史　通史編』
益城町　1990　『益城町史　通史編』
益城町　1990　『益城町史　資料・民俗編』
文化庁編　2010　『発掘調査のてびき』
水上公誠ほか編　2013　『塔平遺跡１』熊本県文化財調査報告第 285 集　熊本県教育委員会

第２表　塔平遺跡遺物観察表

４・５区遺構

法量（　）は復元値。焼成は良、やや不良、不良の３段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第８図	1	縄文土器	深鉢	5	SK	32	－	－	(5.3)		良	貝殻条痕，ミガキ	ミガキ	褐	にぶい褐	穿孔有
第８図	2	縄文土器	深鉢	5	SK	32	－	(11.4)	(3.6)		良	横ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	
第８図	3	石器	磨石類	5	SK	32	10.0	9.1	6.2	812.7						
第８図	4	石器	磨石類	5	SK	32	10.3	8.7	4.2	422.0						
第10図	5	縄文土器	深鉢	5	SK	33	－	－	(7.4)		良	横ナデ，ミガキ，貝殻条痕	横ナデ，押圧	にぶい橙	橙	
第14図	6	石器	打製石斧未製品	4	SI Q,R	24 11,11	26.4	8.7	3.2	647.00	安山岩					
第15図	7	縄文土器	深鉢	4	SI	25	(35.8)	－	(13.0)		良	工具ナデ，押圧，ナデ， 貝殻条痕	押圧，工具ナデ，ナデ， 貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	リボン状突起
第15図	8	縄文土器	深鉢	4	SI Q	25 11	(41.0)	－	(5.4)		良	工具ナデ，ナデ	ミガキ	にぶい褐	橙	
第15図	9	縄文土器	浅鉢	4	SI Q,R	25 11,10	(26.9)	－	(14.3)		良	工具ナデ，貝殻条痕	工具ナデ，貝殻条痕	橙	にぶい黄褐	
第15図	10	縄文土器	浅鉢	4	SI	25	(22.4)	－	(10.5)		良	ナデ，工具ナデ	工具ナデ，ナデ，ミガキ	にぶい黄褐	にぶい橙	
第16図	11	石器	打製石斧	4	SI	25	10.4	5.7	2.0	137.40	安山岩					
第16図	12	石器	打製石斧	4	SI	25	11.2	5.6	1.9	112.00	砂岩					
第16図	13	石器	円盤形石器	4	SI	25	9.3	9.0	2.3	187.00	安山岩					
第16図	14	石器	磨石類	4	SI	25	9.4	5.7	4.5	291.0						黒変か
第17図	15	縄文土器	深鉢	4	SI L	31 13	(22.1)	－	(4.3)		良	工具ナデ，貝殻条痕	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第17図	16	石器	磨製石斧	4	SI SD	41 10	9.8	6.4	4.3	377.8						太型蛤刃石斧
第18図	17	石器	石鏃	4	SI	42	1.7	1.6	0.4	1.08	黒曜石					
第18図	18	石器	打製石斧	4	SI	42	10.7	4.6	1.7	72.42	安山岩					
第18図	19	石器	打製石斧	4	SI	42	12.0	5.2	2.1	150.90	安山岩					
第18図	20	石器	打製石斧	4	SI	42	13.8	10.2	2.9	459.00	安山岩					
第19図	21	石器	使用痕剥片	4	SI	32	3.1	3.1	1.1	5.50	黒曜石					
第19図	22	石器	磨製石斧	4	SI	32	10.5	5.6	1.3	110.20	砂岩					
第19図	23	石器	磨石類	4	SI	32	7.2	6.2	4.1	186.0						
第20図	24	縄文土器	浅鉢	4	SI	34	－	－	(8.3)		良	工具ナデ，ナデ	工具ナデ，ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	
第20図	25	土製品	焼成粘土塊	4	SI	34	5.5	5.3	3.4		良	－	－	にぶい黄橙	－	
第20図	26	石器	打製石斧	4	SI	34	9.9	5.1	1.5	94.81	安山岩					
第20図	27	石器	磨石類	4	SI	34	5.5	8.2	5.3	235.0						赤色顔料か
第21図	28	石器	打製石斧	4	SI	40	10.0	4.5	0.9	62.59	緑色片岩					

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第22図	29	石器	打製石斧	4	SI	43	5.9	5.9	1.7	67.91	安山岩					
第23図	30	縄文土器	浅鉢	4	SI	44	—	—	(5.9)		良	横ナデ, ミガキ	横ナデ, ミガキ	明黄褐	明黄褐	
第23図	31	縄文土器	深鉢	4	SI N	44 11,15	—	(20.4)	(13.4)		良	横ナデ, 組織痕後ヘラケズリ, 工具ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
第23図	32	縄文土器	深鉢	4	SI	44	(22.4)	—	(17.7)		良	押し引き条痕, 工具ナデ, 貝殻条痕, ナデ	ナデ, ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第24図	33	石器	石核	4	SI	44	2.2	2.9	1.9	12.79	黒曜石					
第24図	34	石器	磨製石斧	4	SI	44	10.1	6.2	3.3	335.00	チャート					
第24図	35	石器	磨石類	4	SI	44	8.3	7.0	4.9	399.0						
第24図	36	縄文土器	浅鉢	4	SI	45	—	—	(4.3)		良	横ナデ, ミガキ	横ナデ, ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第24図	37	縄文土器	深鉢	4	SI	45	—	—	(15.3)		良	ナデ, 横ナデ, ミガキ, 沈線	横ナデ, ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第24図	38	縄文土器	深鉢	4	SI	45	—	(15.2)	(2.7)		やや不良	横ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	
第24図	39	縄文土器	深鉢	4	SI	45	—	(11.5)	(6.8)		良	ナデ, 工具ナデ	ミガキ	明黄褐	にぶい黄橙	
第24図	40	石器	使用痕剥片	4	SI	45	4.5	2.3	0.9	5.55	黒曜石					
第25図	41	縄文土器	浅鉢	4	SI	47	—	—	(8.2)		良	横ナデ, ミガキ	横ナデ, ミガキ, 沈線	明黄褐	灰黄褐	
第25図	42	縄文土器	深鉢	4	SI	47	—	—	(9.6)		良	工具ナデ, ナデ, 貝殻条痕	押圧, 工具ナデ, ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第25図	43	石器	使用痕剥片	4	SI	47	2.3	1.8	0.7	2.63	黒曜石					
第26図	44	縄文土器	深鉢	4	SK M	22 14	—	(7.6)	(27.5)		良	貝殻条痕, 工具痕	工具ナデ, ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	
第27図	45	縄文土器	浅鉢	4	SX N	4 12	(35.4)	—	(8.0)		良	横ナデ, ミガキ	横ナデ, ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第27図	46	縄文土器	鉢	4	SX N	4 12	(26.0)	—	(12.3)		良	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	にぶい黄褐	灰黄褐	
第27図	47	縄文土器	深鉢	4	SX	4	(27.7)	—	(7.3)		良	横ナデ, ミガキ, 沈線	横ナデ, 押圧, 工具ナデ, ミガキ	にぶい黄褐	明黄褐	
第27図	48	石器	打製石斧	4	SX	35	10.1	4.8	1.7	83.24	頁岩					
第29図	49	石器	使用痕剥片	4	SI	9	2.7	3.4	0.9	4.07	黒曜石					
第29図	50	石器	使用痕剥片	4	SI	9	2.7	1.2	0.3	0.57	黒曜石					
第30図	51	弥生土器	甕	4	SI	15	(21.9)	—	(10.3)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, 押圧, ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第30図	52	弥生土器	甕	4	SI SK	15 1	20.8	—	(36.4)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, 押圧, ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第30図	53	弥生土器	壷	4	SI	15	11.4	—	(17.1)		良	横ナデ, ミガキ	横ナデ, 押圧, ハケメ, 工具ナデ	明褐	明褐	
第30図	54	弥生土器	壷	4	SI	15	—	6.1	(10.3)		良	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	
第30図	55	弥生土器	高坏	4	SI	15	29.1	—	(6.6)		良	横ナデ, ハケメ, ナデ	横ナデ, ミガキ	橙	明褐	
第30図	56	石器	使用痕剥片	4	SI	15	3.2	2.3	1.1	7.05	黒曜石					
第31図	57	弥生土器	甕	4	SI SK	8 4	(27.2)	—	(17.7)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, ハケメ	にぶい褐	にぶい褐	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第31図	58	弥生土器	甕	4	SI SK,O	8 18,2,12	—	—	(12.0)		良	工具ナデ, ヘラケズリ, ナデ, ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	
第31図	59	弥生土器	甕	4	SI	8	(22.5)	—	(3.4)		良	横ナデ, 沈線	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第31図	60	弥生土器	甕	4	SI	8,16	—	12.6	(5.2)		良	ハケメ, 横ナデ	押圧, ハケメ, 横ナデ, ナデ	にぶい褐	にぶい橙	
第31図	61	弥生土器	甕	4	SI	8	—	9.1	(4.8)		良	ハケメ, 横ナデ	ナデ, 横ナデ, 工具ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第31図	62	弥生土器	台付鉢	4	SI SK	8,16 3	(22.2)	—	(16.6)		やや不良	横ナデ, ハケメ, ケズリ	横ナデ, ハケメ, ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	
第31図	63	弥生土器	甕か台付鉢か	4	SI	8	—	(7.7)	(3.7)		良	横ナデ	押圧, 横ナデ, 工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第32図	64	弥生土器	壺	4	SI SD	8,9,16 12	—	(8.0)	(12.2)		良	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	明褐	にぶい黄褐	
第32図	65	弥生土器	高坏	4	SI SK	8,16 3	—	15.2	(19.4)		良	横ナデ, ハケメ	ハケメ, ナデ, 横ナデ, ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	
第32図	66	石器	磨製石斧	4	SI	8	9.9	4.6	1.4	108.40	緑色片岩					
第32図	67	石器	磨石類	4	SI	8	9.8	6.4	5.9	406.0						黒変, 赤色顔料か
第32図	68	石器	磨石類	4	SI	8	9.9	7.3	5.8	504.0						赤色顔料か
第32図	69	石器	磨石類	4	SI	8	16.0	9.3	5.5	1111.0						黒変
第33図	70	弥生土器	甕	4	SI	16	—	11.1	(4.8)		良	ハケメ, 横ナデ	押圧, 横ナデ, ナデ	橙	橙	
第33図	71	弥生土器	甕	4	SI	16	—	11.1	(6.4)		良	ハケメ, 横ナデ	押圧, ハケメ, 横ナデ	橙	橙	
第33図	72	石器	石剱丁	4	SI	16	11.8	4.0	0.6	44.25	粘板岩					
第33図	73	石器	磨石類	4	SI	16	10.5	7.5	5.6	616.0						
第35図	74	弥生土器	甕	4	SI	2	—	(11.4)	(6.9)		やや不良	工具ナデ, ハケメ, 横ナデ	ハケメ, ナデ, 横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第35図	75	石器	打製石鏃	4	SI	2	2.1	1.8	0.4	0.96	チャート					
第35図	76	石器	磨製石斧	4	SI	2	14.4	5.0	2.7	236.00	砂岩					
第35図	77	石器	磨石類	4	SI	2	9.4	7.0	5.4	474.0						
第36図	78	弥生土器	壺	4	SI	7	—	—	(3.7)		良	横ナデ	横ナデ, 工具ナデ	橙	にぶい橙	
第36図	79	石器	石鏃	4	SI	7	2.9	1.8	0.6	2.87	黒曜石					
第36図	80	石器	打製石斧	4	SI	7	8.4	6.1	1.6	94.95	安山岩					
第36図	81	石器	磨製石斧	4	SI	7	9.9	5.0	1.3	75.90	緑色片岩					
第37図	82	弥生土器	甕	4	SI	2,18	15.3	—	(4.7)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, ハケメ	にぶい褐	にぶい橙	
第37図	83	弥生土器	壺	4	SI	18	(16.8)	—	(5.6)		良	横ナデ, ハケメ, 沈線	横ナデ, ハケメ, ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	刻目
第37図	84	弥生土器	壺	4	SI	18	(16.8)	—	(6.9)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, ハケメ	明黄褐	明黄褐	
第37図	85	石器	使用痕剥片	4	SI	18	2.4	2.3	1.0	4.41	黒曜石					
第37図	86	石器	石核原形	4	SI	18	4.9	4.9	3.5	95.47	黒曜石					
第37図	87	石器	打製石斧	4	SI	18	10.2	5.5	1.3	76.22	安山岩					
第37図	88	石器	磨製石斧	4	SI	18	8.8	4.3	2.8	120.40	砂岩					

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第38図	89	弥生土器	甕	4	SI	19,38	(19.8)	—	(15.6)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	明黄褐	
第38図	90	弥生土器	台付鉢	4	SI	19	14.5	16.9	24.9		良	横ナデ，ハケメ，ナデ（螺旋状）	横ナデ，押圧，工具ナデ，ナデ，しぼり痕，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第38図	91	弥生土器	台付鉢	4	SI	19	—	16.0	(5.9)		良	ハケメ，ナデ，横ナデ，沈線	ハケメ，横ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	
第38図	92	弥生土器	壷	4	SI	19	(19.1)	—	(4.7)		良	横ナデ，ナデ	横ナデ，ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	刻目
第38図	93	弥生土器	高坏	4	SI	19	(20.4)	—	(5.5)		良	横ナデ，ハケメ，ナデ	横ナデ，ハケメ，ナデ	にぶい褐	明褐	
第38図	94	石器	スクレイパー	4	SI	19	6.0	3.5	1.4	29.27	安山岩					
第39図	95	石器	石核	4	SI	19	3.1	3.5	2.6	28.03	黒曜石					
第39図	96	石器	打製石斧	4	SI	19	8.9	6.5	1.6	132.90	安山岩					
第39図	97	石器	磨製石斧	4	SI	19	10.2	4.6	2.1	106.30	砂岩					
第39図	98	石器	磨製石斧	4	SI	19	12.4	3.7	3.5	145.50	砂岩					
第39図	99	石器	磨石類	4	SI	19	6.9	7.7	5.9	374.0						
第39図	100	石器	磨石類	4	SI	19	7.4	5.6	2.2	141.00						
第39図	101	石器	敲石	4	SI	19	9.5	4.7	2.3	133.6						
第39図	102	鉄器	鉄鏃（有茎式）	4	SI	19	5.4	1.2	0.8	5.1						茎部は欠損
第40図	103	石器	使用痕剥片	4	SI	20	3.2	2.6	0.7	4.93	黒曜石					
第40図	104	石器	使用痕剥片	4	SI	20	4.3	3.2	1.0	6.23	黒曜石					
第40図	105	石器	使用痕剥片	4	SI	20	2.6	2.1	0.6	2.55	黒曜石					
第41図	106	弥生土器	壷	4	SI K	38 1	—	—	(28.1)		良	ハケメ，横ナデ	ハケメ，横ナデ，ミガキ，押圧	にぶい黄橙	明黄褐	
第41図	107	縄文土器	深鉢	4	SI	38	—	—	(7.1)		良	ナデ，貝殻条痕	ナデ，ミガキ	明褐	明褐	
第41図	108	石器	打製石鏃	4	SI	38	2.1	1.6	0.5	1.11	黒曜石					
第41図	109	石器	石匙未製品	4	SI	38	7.8	4.7	1.2	32.42	安山岩					
第41図	110	石器	打製石斧	4	SI	38	6.7	5.8	1.3	80.80	安山岩					
第41図	111	石器	磨石類	4	SI	38	7.4	6.3	3.7	235.0						
第42図	112	石器	石錐	4	SI	5	2.5	1.2	0.2	0.79	黒曜石					
第43図	113	弥生土器	甕	4	SI	10	—	11.1	(9.2)		良	工具ナデ，横ナデ	ハケメ，ナデ，横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第43図	114	弥生土器	甕	4	SI	10	—	10.5	(8.5)		良	ハケメ，横ナデ	ハケメ，ナデ，横ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	
第43図	115	石器	石核	4	SI	10	2.1	2.2	2.2	8.88	黒曜石					
第43図	116	石器	磨石類	4	SI	10	10.7	5.4	3.9	302.0						黒変
第44図	117	弥生土器	甕	4	SI	6	—	10.1	(10.4)		良	ハケメ，横ナデ	工具ナデ	橙	橙	
第44図	118	弥生土器	鉢	4	SI Q	6 12	長径（19.7） 短径6.8	11.9	6.2		良	横ナデ，ハケメ，ミガキ	横ナデ，ハケメ，ミガキ	橙	橙	
第47図	119	弥生土器	甕	4	SI	12,21	(16.5)	—	(11.1)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第47図	120	弥生土器	甕	4	SI	12	(20.6)	—	(24.3)		良	横ナデ，ハケメ，沈線	横ナデ，ハケメ	明黄褐	明黄褐	
第47図	121	弥生土器	甕	4	SI	12	(21.2)	—	(23.7)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	
第47図	122	弥生土器	甕	4,5	SI	12	(21.5)	—	(18.9)		良	横ナデ，タタキ，ハケメ，工具ナデ，沈線	横ナデ，ハケメ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第47図	123	弥生土器	甕	4	SI	12	(23.2)	—	(30.4)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，押圧，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第47図	124	弥生土器	甕	4	SI	12,37	16.1	—	(20.3)		良	横ナデ，ハケメ，工具ナデ，ナデ	横ナデ，押圧，ハケメ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第47図	125	弥生土器	甕	4	SI	12	(17.2)	—	(21.9)		良	横ナデ，ハケメ，ナデ	横ナデ，ハケメ，ナデ	橙	橙	
第47図	126	弥生土器	甕	4	SI	12	—	12.9	(7.1)		良	ハケメ，ナデ，横ナデ	ハケメ，ナデ，横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第48図	127	弥生土器	甕	4	SI	12	(20.0)	6.3	30.9		良	横ナデ，ハケメ，工具ナデ，ナデ	横ナデ，ハケメ，押圧，ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第48図	128	弥生土器	鉢	4	SI	12	23.7	4.4	17.0		良	横ナデ，ハケメ，ヘラケズリ，ナデ	横ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第48図	129	弥生土器	甕	4	SI	12	(17.4)	—	(5.3)		良	横ナデ，ナデ	横ナデ，工具ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第48図	130	弥生土器	鉢	4	SI	12	(15.9)	—	(7.2)		良	横ナデ，工具ナデ，ミガキ，ハケメ	横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
第48図	131	弥生土器	台付鉢	4	SI	12	(14.9)	—	(8.0)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，ナデ	明黄褐	明黄褐	
第48図	132	弥生土器	台付鉢	4	SI	12	(13.1)	—	(9.7)		良	横ナデ，ハケメ，ナデ，沈線	横ナデ，ハケメ，ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第48図	133	弥生土器	台付鉢	4	SI	12	—	11.8	(8.3)		良	ハケメ，ナデ，横ナデ	押圧，ハケメ，ナデ，横ナデ	明黄褐	明黄褐	
第48図	134	弥生土器	台付鉢	4	SI	12	—	(11.0)	(5.1)		良	ナデ，一部工具痕	ナデ	橙	橙	
第48図	135	弥生土器	鉢	4	SI	12	(32.6)	9.2	(15.0) (21.2)		良	横ナデ，ハケメ，文様，ミガキ	横ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	刻目突帯
第49図	136	弥生土器	壺	4	SI	12	(14.7)	—	(4.4)		良	横ナデ，ハケメ，沈線	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第49図	137	弥生土器	壺	4	SI	12	—	4.7	(5.7)		良	工具ナデ，ナデ	押圧，工具ナデ，ナデ，工具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第49図	138	弥生土器	壺	4	SI	12	(16.6)	—	(8.9)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，ナデ	明黄褐	明黄褐	
第49図	139	弥生土器	壺	4	SI	12	11.3	—	(11.5) (21.0)		良	横ナデ，ハケメ，工具ナデ，ミガキ	ハケメ，ナデ，工具ナデ	橙	にぶい黄褐	
第49図	140	弥生土器	壺	4	SI	12	—	6.2	(34.6)		良	ナデ，ハケメ	ハケメ，押圧，ナデ	にぶい褐	橙	
第49図	141	弥生土器	壺	4	SI	12	(16.2)	—	(3.2)		良	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第49図	142	弥生土器	壺	4	SI	12	14.2	—	(8.4)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，ナデ	黄褐	にぶい黄褐	
第49図	143	弥生土器	壺	4	SI	12	13.8	—	(14.4)		良	横ナデ，ハケメ，ナデ	横ナデ，押圧，ハケメ，工具ナデ，ナデ	にぶい褐	にぶい褐	複合口縁，刻目突帯
第49図	144	弥生土器	壺	4	SI	12	(12.8)	—	(37.2)		良	横ナデ，ハケメ，工具痕，文様	横ナデ，ハケメ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	波状文，複合口縁
第50図	145	弥生土器	壺	4	SI	12	(9.0)	—	(17.6)		良	横ナデ，ナデ，文様，ミガキ，沈線	横ナデ，しぼり痕，押圧，ハケメ，ナデ	明黄褐	明黄褐	長頸壺，平行文
第50図	146	弥生土器	壺	4	SI	12	—	5.0	(27.9)		良	ハケメ，文様，ナデ	押圧，ハケメ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	波状文

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第50図	147	弥生土器	壷	4	SI	12	—	—	(26.5)		良	ハケメ，文様，ナデ	押圧，ハケメ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	波状文
第50図	148	弥生土器	壷	4	SI J,O	12 12,12	—	—	(35.5)		良	ハケメ，工具ナデ，ナデ，沈線，文様	ナデ，ハケメ，押圧	橙	橙	重弧文，孔
第50図	149	弥生土器	壷	4	SI	12	—	5.6	(7.2)		良	ハケメ，ナデ	ハケメ，ナデ	にぶい黄褐	褐灰	
第50図	150	弥生土器	壷	4	SI	12	—	7.6	(9.3)		良	工具ナデ，ナデ	ハケメ，横ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	
第50図	151	弥生土器	壷	4	SI	12	—	(6.6)	(11.9)		良	ハケメ，横ナデ，工具ナデ	ハケメ，ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第50図	152	弥生土器	高坏	4	SI	12	25.4	—	(16.6)		良	工具ナデ，ミガキ，ナデ	ハケメ，ミガキ，ケズリ	橙	にぶい黄橙	暗文，透有
第50図	153	弥生土器	高坏	4	SI J	12 12	—	—	(11.5)		良	ミガキ	ハケメ，しぼり痕	にぶい黄褐	灰黄褐	
第51図	154	弥生土器	高坏	4	SI	12	25.1	15.2	23.6		良	横ナデ，ミガキ	横ナデ，ナデ，ミガキ，ハケメ，ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第51図	155	弥生土器	高坏	4	SI	12,21,22	24.3	14.3	20.1		良	横ナデ，ケズリ，タタキ，ハケメ，工具ナデ	横ナデ，ケズリ，ナデ，ミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙	透有
第51図	156	石器	スクレイパー	4	SI	12	6.3	6.5	2.0	87.20	チャート					
第51図	157	石器	石核	4	SI	12	2.1	2.2	1.8	8.33	黒曜石					
第51図	158	石器	磨石類	4	SI	12	9.7	9.8	7.5	985.0						黒変
第51図	159	石器	磨石類	4	SI	12	9.8	9.0	4.8	621.0						被熱
第52図	160	弥生土器	甕	4・5	SI	70 (13)	(15.6)	—	(17.7)		良	タタキ，ハケメ，工具ナデ，ナデ	横ナデ，ハケメ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第52図	161	弥生土器	甕	4・5	SI	70 (13)	—	15.0	(13.1)		良	ハケメ，横ナデ，工具ナデ，沈線	ナデ，工具ナデ，押圧，ハケメ，横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第52図	162	弥生土器	台付鉢	4・5	SI	65,70 (13)	—	—	(15.3)		良	ハケメ，工具ナデ，突帯，ナデ	ハケメ，ナデ	明黄褐	明黄褐	外器面に赤彩
第52図	163	弥生土器	壷	4・5	SI	70 (13)	(15.4)	3.6	37.0		良	横ナデ，ハケメ，文様，ナデ	横ナデ，ハケメ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	波状文
第53図	164	石器	石鏃	4・5	SI	70 (13)	2.0	1.5	0.2	0.57	黒曜石					
第53図	165	石器	円盤形石器	4・5	SI	70 (13)	11.4	11.0	3.2	409.00	安山岩					
第54図	166	弥生土器	甕	4	SI	21	(18.0)	—	(14.4)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，押圧，ハケメ，ナデ	橙	橙	
第54図	167	石器	使用痕剥片	4	SI	21	1.7	2.0	0.6	1.59	黒曜石					
第54図	168	弥生土器	甕	4	SI	14	—	—	(25.6)		良	ハケメ，ナデ	押圧，ハケメ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第54図	169	弥生土器	甕	4	SI	14	—	10.9	(4.6)		良	ハケメ，横ナデ	横ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	
第54図	170	弥生土器	台付鉢	4	SI	14	21.0	—	(11.7)		やや不良	横ナデ，ハケメ，工具ナデ，ナデ	ハケメ，ナデ	明褐	明褐	
第54図	171	弥生土器	壷	4	SI	14	(15.3)	—	(14.5)		良	横ナデ，ハケメ，沈線	横ナデ，ハケメ，ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
第54図	172	弥生土器	壷	4	SI	14	—	(7.6)	(28.7)		良	ハケメ，工具ナデ，ミガキ	押圧，工具痕，ハケメ	橙	橙	
第54図	173	縄文土器	深鉢	4	SI	14	—	—	(11.1)		良	組織痕，工具ナデ，ナデ	横ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第54図	174	石器	石鏃	4	SI	14	2.2	1.8	0.4	0.89	安山岩					

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第54図	175	石器	剥片	4	SI	14	2.0	1.3	0.5	0.71	黒曜石					
第55図	176	石器	剥片	4	SI	22	1.7	2.6	0.7	1.94	黒曜石					
第56図	177	弥生土器	甕	4	SI	4	(23.6)	—	(7.1)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，工具ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	
第56図	178	弥生土器	甕	4	SI SD	4 1	21.5	—	(31.4)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，押圧，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第56図	179	弥生土器	甕	4	SI SD	4 1	(23.4)	—	(13.0) (9.5)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，工具ナデ	にぶい褐	橙，明褐	
第56図	180	弥生土器	甕	4	SI	4			(9.2)		良	ハケメ，工具痕，ナデ	ナデ，工具ナデ，ハケメ	にぶい褐	にぶい黄橙	
第56図	181	弥生土器	壷	4	SI	4	(13.6)	—	(7.9)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，ナデ	にぶい褐	明黄褐	複合口縁
第57図	182	石器	磨石類	4	SI	4	16.3	7.3	7.5	1116.0						
第57図	183	石器	磨石類	4	SI	4	9.9	7.0	3.9	459.0						
第58図	184	弥生土器	甕	4・5	SI L	37 11	(14.7)	—	(7.9)		良	横ナデ，ハケメ，沈線	横ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第58図	185	弥生土器	甕	4・5	SI	37	—	9.6	(8.0)		良	ナデ，ハケメ	押圧，ナデ，工具ナデ	明黄褐	明黄褐	
第58図	186	弥生土器	甕	4・5	SI	37	—	12.0	(7.0)		良	工具ナデ，横ナデ	ナデ，横ナデ	明黄褐	明黄褐	
第58図	187	弥生土器	甕	4・5	SI	37	—	(10.2)	(10.3)		良	工具ナデ，横ナデ	押圧，ナデ，工具ナデ，横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第58図	188	弥生土器	(台付)鉢	4・5	SI	37	(19.2)	—	(8.6)		良	横ナデ，工具ナデ	横ナデ，ハケメ，工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第58図	189	弥生土器	壷	4・5	SI	37	—	5.5	(8.5)		良	ハケメ，ナデ	ハケメ，工具ナデ，ナデ	明黄褐	褐灰	
第58図	190	弥生土器	壷	4・5	SI	37	11.0	—	(12.4)		良	横ナデ，ハケメ，ミガキ	横ナデ，ナデ，ハケメ，押圧	橙	橙	
第58図	191	弥生土器	高坏	4・5	SI	37	—	—	(12.9)		やや不良	工具ナデ，ミガキ，工具痕	充填，工具ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
第59図	192	石器	砥石（有溝）	4・5	SI	37	7.7	3.8	3.4	62.2						使用面2面
第59図	193	石器	磨石類	4・5	SI	37	12.9	9.1	6.5	968.0						被熱
第59図	194	石器	磨石類	4・5	SI	37	13.3	8.1	6.2	694.2						
第60図	195	弥生土器	甕	3・4	SI	63	—	8.4	(4.2)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	—	橙	にぶい橙	
第60図	196	弥生土器	甕	3・4	SI	63	—	12.2	(6.0)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	—	明黄褐	橙	
第60図	197	弥生土器	甕	3・4	SI	63	—	11.7	(9.6)		良	横ナデ，ナデ，ハケメ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第60図	198	弥生土器	壷	3・4	SI	63	—	—	(1.6)		良	文様	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	平行文，刻み
第60図	199	弥生土器	壷	3・4	SI	63	—	—	(2.4)		良	文様，ミガキ	ナデ	にぶい橙，褐灰	にぶい橙	平行文，重孤文
第60図	200	弥生土器	壷	3・4	SI	63	9.7	—	(17.7)		良	横ナデ，文様，ミガキ，ハケメ	横ナデ，工具ナデ，ナデ，ミガキ，押圧	橙	橙	平行文，重弧文，刻目
第60図	201	弥生土器	壷	3・4	SI	63	—	—	(16.0)		良	文様，ナデ，ハケメ	工具ナデ，ナデ，しぼり痕，押圧	橙	にぶい黄橙	波状文
第60図	202	弥生土器	壷	3・4	SI	63	14.0	—	(24.2)		良	ハケメ	ナデ，ハケメ，押圧	にぶい黄橙	にぶい黄橙	複合口縁
第61図	203	弥生土器	壷	3・4	SI	63	—	4.6	(2.2)		良	ナデ，ハケメ	工具ナデ	にぶい黄橙，褐灰	にぶい黄橙，褐灰	
第61図	204	弥生土器	壷か	3・4	SI	63	—	—	(3.8)		良	ナデ，ケズリ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調整		色調		備考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第61図	205	弥生土器	壷か 鉢か	3・4	SI	63	—	7.2	(5.6)		良	ナデ	ナデ, ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第61図	206	弥生土器	高坏	3・4	SI	63	32.6	20.3	(26.3)		良	横ナデ, ナデ, ハケメ	横ナデ, ナデ, ミガキ	明赤褐, 赤褐, にぶい黄橙	赤褐, 橙	
第61図	207	石器	石鏃	3・4	SI	63	2.2	1.6	0.3	0.8	チャート					
第61図	208	石器	磨石類	3・4	SI	63	9.9	7.4	6.1	443.4						
第61図	209	石器	磨石類（砥石か）	3・4	SI	63	13.6	8.0	5.6	854.0						
第61図	210	石器	砥石か	3・4	SI	63	18.3	9.6	12.9	3389.0						
第61図	211	石器	石皿	3・4	SI	63	26.8	10.3	5.3	1645.0						
第62図	212	石器	台石・砥石か	3・4	SI	63	37.0	25.5	14.5	20700.0						
第64図	213	弥生土器	甕	5	SI	65	(17.8)	—	(22.3)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第64図	214	弥生土器	甕	5	SI SK	28 65	(22.8)	—	(19.8)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, ハケメ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第64図	215	弥生土器	甕	5	SI	65	—	13.0	(6.1)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, ハケメ, ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第64図	216	弥生土器	台付鉢	5	SI	65	—	11.4	(13.2)		良	ハケメ, 工具ナデ, 横ナデ	ハケメ, ナデ, 工具ナデ, 横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第64図	217	弥生土器	鉢	5	SI	65	(12.4)	3.2	8.9		良	横ナデ, 工具ナデ	横ナデ, 工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第65図	218	弥生土器	鉢か	5	SI	65,71	(39.4)	—	(9.2)		良	横ナデ, ハケメ後ナデ, 突帯, ナデ	横ナデ, ハケメ, ナデ	明黄褐	明黄褐	刻目突帯
第65図	219	弥生土器	壷	5	SI	65	15.6	—	(33.1)		良	横ナデ, ハケメ, タタキ	横ナデ, ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刻目突帯
第65図	220	弥生土器	壷	5	SI	65,66	—	—	(13.1)		良	沈線, ミガキ	押圧, ハケメ, ナデ	橙	橙	
第65図	221	弥生土器	壷	5	SI	65	—	(6.2)	(7.6)		良	工具ナデ	ハケメ, 工具ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第65図	222	弥生土器	壺	5	SI	65,66	—	6.4	(14.3)		良	ハケメ, ナデ	押圧, ハケメ, ナデ	明褐	明褐	
第65図	223	弥生土器	高坏	5	SI	65	23.7	—	(10.2)		良	横ナデ, タタキ, ハケメ	横ナデ, ハケメ, ナデ, ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第65図	224	弥生土器	高坏	5	SI SK	65 28	(28.8)	—	(14.6)		良	横ナデ, ハケメ, 工具ナデ, ミガキ	横ナデ, ハケメ, ミガキ	橙	橙	
第65図	225	弥生土器	高坏	5	SI SK	65 28	(31.2)	—	(6.7)		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, ミガキ	明赤褐	明赤褐	
第65図	226	石器	石鏃	5	SI	65	1.7	1.4	0.4	0.49	黒曜石					
第65図	227	石器	二次加工剥片	5	SI	65	8.8	2.8	1.2	34.19	砂岩					
第66図	228	石器	打製石斧	5	SI	65	12.4	5.5	2.5	171.80	安山岩					
第66図	229	石器	砥石	5	SI	65	17.4	4.3	3.5	405.3						使用面1面
第66図	230	石器	磨石類	5	SI	65	9.8	6.8	6.0	483.0						
第66図	231	石器	磨石類	5	SI	65	7.8	6.9	3.9	274.8						黒変
第67図	232	石器	磨石類	5	SI	66	11.5	8.8	5.0	705.3						右側面に擦痕
第69図	233	弥生土器	甕	5	SI	71	(13.9)	9.8	28.8		良	横ナデ, ハケメ	横ナデ, 押圧, ナデ, ハケメ	にぶい褐	橙	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第69図	234	弥生土器	甕	5	SI	71	(24.3)	―	(28.0)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ	明黄褐	褐灰	
第70図	235	弥生土器	甕	5	SI	71	19.9	13.4	42.1		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	
第70図	236	弥生土器	甕	5	SI	71	(20.0)	―	(11.3)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第70図	237	弥生土器	台付鉢	5	SI	71	(12.1)	―	(4.9)		良	ナデ，ハケメ，ミガキ	横ナデ，ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第70図	238	弥生土器	鉢	5	SI	71	15.9	―	18.8		良	横ナデ，ハケメ，ナデ	横ナデ，工具ナデ，ナデ，ハケメ	にぶい黄褐	明黄褐	
第70図	239	弥生土器	壷	5	SI	71	7.8	2.1	12.0		良	横ナデ，ハケメ，工具ナデ，ナデ	横ナデ，押圧，工具ナデ，ナデ	にぶい黄橙	灰黄	
第70図	240	弥生土器	壷	5	SI	71	(10.8)	―	(9.3)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，工具痕，押圧，ハケメ	橙	橙	
第70図	241	弥生土器	高坏	5	SI	65,71	(28.4)	―	(20.0)		良	ハケメ，ミガキ	横ナデ，押圧，しぼり痕，ハケメ，工具痕，ミガキ	橙	橙	透有
第70図	242	弥生土器	高坏	5	SI	71	―	―	(16.9)		良	ミガキ	ミガキ，ハケメ，ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	透有
第70図	243	石器	石鏃	5	SI	71	1.8	1.4	0.3	0.43	黒曜石					
第70図	244	石器	砥石	5	SI	71	11.7	5.8	4.4	378.0						使用面1面
第70図	245	石製品	不明石製品	5	SI	71	2.8	2.2	0.4	2.5						中央に穿孔有
第71図	246	弥生土器	甕	5	SI	72	(18.7)	―	(18.9)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第71図	247	弥生土器	甕	5	SI	72,73	―	(10.9)	(12.1)		良	ハケメ，横ナデ	ハケメ，工具ナデ，横ナデ	にぶい褐	明褐	
第72図	248	弥生土器	壷	5	SI	72	(13.4)	―	(18.7)		良	横ナデ，ハケメ，沈線，ミガキ	横ナデ，押圧，工具ナデ	明赤褐	明赤褐	
第72図	249	弥生土器	壷	5	SI	72	―	―	(8.4)		良	ミガキ，文様，沈線	押圧後ナデ，しぼり痕，工具ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	重弧文
第72図	250	弥生土器	高坏	5	SI	72,73	(26.5)	―	(8.0)		良	横ナデ，ハケメ，工具ナデ	横ナデ，工具ナデ，ミガキ	橙	橙	
第72図	251	弥生土器	高坏	5	SI	72	―	―	(19.6)		良	ハケメ	ミガキ，押圧，ナデ，ハケメ，しぼり痕	橙	橙	
第72図	252	石器	磨製石斧	5	SI	72	13.6	6.3	3.2	342.00	蛇紋岩					
第72図	253	石器	砥石	5	SI	72	8.9	5.7	3.8	207.8						使用面4面
第72図	254	弥生土器	壷	5	SI	73	(17.4)	―	(5.4)		良	横ナデ，文様，ハケメ	横ナデ，押圧	にぶい橙	にぶい黄橙	重弧文，刻目，複合口縁
第72図	255	弥生土器	壷	5	SI	72,73	14.5	―	(7.8)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，押圧，ハケメ，工具ナデ	にぶい褐	にぶい褐	複合口縁
第72図	256	ガラス製品	小玉	5	SI	73	0.45	0.4	0.25	0.01						孔径0.2cm×0.15cm 水色
第72図	257	石器	打製石斧	5	SI	73	12.9	4.1	1.9	107.70	砂岩					
第72図	258	石器	磨石類	5	SI	73	10.0	5.8	3.3	234.9						
第72図	259	石器	磨石類	5	SI	73	8.8	5.0	4.0	253.3						
第72図	260	石器	磨石類	5	SI	73	8.9	7.4	4.4	375.0						
第73図	261	弥生土器	甕	5	SK	24	(18.3)	―	(27.5)		良	横ナデ，ハケメ，工具ナデ	横ナデ，ハケメ	にぶい黄橙	黄褐	
第75図	262	土師器	甕	4	SI	3	(27.4)	―	(13.4)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調整		色調		備考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第75図	263	石製品	管玉	4	SI	3	0.65	0.35	0.35	0.10						孔径 0.15cm× 0.15cm
第78図	264	石器	打製石鏃	4	SD	1	1.9	1.3	0.3	0.51	チャート					
第78図	265	縄文土器	深鉢	4	SD	4	−	(9.8)	(10.1)		良	ミガキ	工具ナデ, ミガキ	橙	にぶい黄褐	
第78図	266	瓦質	擂鉢	4	SD	4	−	−	(6.3)		良	押圧, 工具ナデ, 横ナデ	工具ナデ, 横ナデ, 擂目	にぶい赤褐	にぶい橙	
第78図	267	石器	石鏃	4	SD	4	1.7	1.5	0.2	0.48	黒曜石					
第78図	268	石器	磨製石斧	4	SD	4	5.1	2.5	1.7	32.81	蛇紋岩					
第78図	269	石器	磨製石斧	4	SD	12	5.7	5.3	1.7	55.66	砂岩					
第78図	270	石器	打製石斧	4	SD	12	10.5	4.9	1.8	99.29	安山岩					
第78図	271	石器	打製石鏃	5	SD	13	2.4	1.6	0.3	0.84	チャート					
第78図	272	石器	打製石鏃	5	SD	19	1.3	1.0	0.2	0.19	黒曜石					
第79図	273	磁器染付	皿	5	SD	20	−	(7.4)	(2.1)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	雪の灰白	雪の灰白, 縹	肥前系染付
第79図	274	ミニチュア土器	鉢	5	SD	22	5.1	2.0	2.6		良	ハケメ, ナデ	押圧, ナデ	にぶい橙	にぶい橙	手捏ね土器
第79図	275	陶器	碗	5	SD	22	−	4.5	(4.1)		やや不良	施釉（銅緑釉）	施釉（透明釉）	鉄の緑	砂漠の駱駝	
第79図	276	白磁	碗	5	SD	22	−	(5.0)	(4.8)		不良	施釉	施釉	銀灰	銀灰	
第79図	277	陶器	碗	5	SD	24	−	−	(3.8)		良	施釉	施釉	白茶	白茶	
第79図	278	磁器染付	碗	5	SD	24	−	(3.6)	(2.6)		不良	施釉（染付）	施釉（染付）	しろがね, 油煙墨	鉛の灰	草花文か
第79図	279	青磁	皿	5	SD	24	−	4.4	(2.5)		良	施釉	施釉, 蛇の目釉剥ぎ	龍泉窯青磁	龍泉窯青磁	
第79図	280	青磁	火入	5	SD	28	(7.8)	(6.0)	3.7		良	施釉	施釉	龍泉窯青磁	海老の殻の灰	
第79図	281	磁器染付	碗	5	SX	1	−	−	(2.8)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	薄緑青, 鉄紺	薄緑青, サックスブルー	青花（漳州窯系）か
第79図	282	白磁	碗	5	SX	1	−	3.5	(1.8)		良	施釉	施釉, 蛇の目釉剥ぎ	鉛の灰	鉛の灰	内器面砂目
第79図	283	磁器染付	碗	5	SX	1	−	−	(2.8)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰, サックスブルー	鉛の灰, サックスブルー	コンニャク五弁花
第79図	284	石器	石核	4	SX	1	3.2	2.3	3.2	20.61	黒曜石					
第79図	285	石器	石核	4	SX	1	2.8	4.5	3.0	34.92	黒曜石					
第79図	286	石器	石鑿	4	SX	1	7.0	0.9	1.1	10.24	蛇紋岩					
第79図	287	石器	磨製石斧	5	SX	1	11.7	4.9	1.4	89.70	結晶片岩					
第79図	288	石器	磨製石斧	4	SX	1	13.0	5.0	3.8	184.20	砂岩					
第79図	289	石器	磨製石斧	4	SX	1	8.0	7.4	4.2	278.00	安山岩					
第82図	290	ミニチュア土器	台付鉢	5	SK	26	−	(3.8)	(3.6)		良	押圧, ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	手捏ね土器
第82図	291	土師器	甕	4	Pit	99	−	−	(5.5)		良	ハケメ, 横ナデ	横ナデ, ヘラケズリ	にぶい褐	明黄褐	
第82図	292	土師器	甑か	4	Pit N	31 12	−	(19.6)	(5.6)		良	ハケメ, 工具痕, 横ナデ	ケズリ, 横ナデ	明黄褐	明黄褐	
第82図	293	須恵器	蓋	4	Pit	174	−	−	(1.8)		良	回転ナデ, 回転ヘラ切り離し後ナデ	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第82図	294	須恵器	壺	4	Pit	67	－	－	(5.3)		良	タタキ（格子状），回転ナデ，文様	回転ナデ	灰	灰白	波状文
第82図	295	瓦	平瓦	4	Pit	175	－	－	3.0		良	凹面：布目痕 凸面：縄目痕	－	凸面：黄褐	凹面：にぶい黄橙	瓦か
第82図	296	石器	打製石鏃	4	Pit	56	2.3	1.9	0.4	1.09	チャート					
第82図	297	石器	打製石鏃	4	Pit	116	3.4	1.9	0.6	3.51	黒曜石					
第82図	298	石器	磨製石鏃	4	SK	1	3.5	2.0	0.2	1.74	緑色片岩					
第82図	299	石器	礫器	4	Pit	100	9.2	3.2	1.9	46.49	頁岩					
第82図	300	石器	打製石斧	4	Pit	229	8.8	4.7	1.1	46.94	安山岩					
第82図	301	石器	磨製石斧	4	Pit	250	7.3	2.5	2.5	35.87	蛇紋岩					

4・5区遺構外　　法量（　）は復元値。焼成は良、やや不良、不良の3段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第83図	302	縄文土器	深鉢	4	N	12	(21.6)	－	(4.8)		良	横ナデ，貝殻条痕，文様	横ナデ，ミガキ	橙	にぶい黄橙	
第83図	303	縄文土器	深鉢	4	N	11	－	(12.0)	(7.7)		良	工具ナデ，ミガキ	工具ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第83図	304	縄文土器	深鉢	4	Q	11	－	－	(5.1)		良	ミガキ，沈線	ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	
第83図	305	縄文土器	深鉢	4	Q	11	－	－	(6.0)		良	ナデ，沈線，ミガキ	ナデ	灰褐	にぶい褐	
第83図	306	縄文土器	深鉢	4	Q	11	－	－	(5.5)		良	横ナデ，沈線	横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第83図	307	縄文土器	深鉢	4	Q R	11 11	－	－	(4.7)		良	ミガキ，ナデ	ミガキ，ナデ	にぶい黄褐	橙	
第83図	308	縄文土器	浅鉢	4	Q	10	－	－	(5.4)		良	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい黄褐	
第83図	309	縄文土器	深鉢	4	R	12	－	－	(4.1)		良	ナデ，工具ナデ	タタキ，ナデ，貝殻条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第83図	310	縄文土器	深鉢	4	R	12	－	－	(4.2)		良	貝殻条痕，ミガキ，ナデ	工具ナデ，ナデ	灰褐	明黄褐	
第83図	311	縄文土器	深鉢	4	R	12	－	－	(5.5)		良	ナデ，工具ナデ	ナデ，工具ナデ	黄褐	黄褐	補修孔
第83図	312	縄文土器	深鉢	4	Q	11	－	－	(8.0)		良	貝殻条痕，工具ナデ	工具ナデ，ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	
第83図	313	縄文土器	深鉢	4	Q	10	－	－	(10.5)		良	ナデ，貝殻条痕	貝殻条痕，工具ナデ，ナデ	橙	明黄褐	
第83図	314	縄文土器	深鉢	4	J	12	－	－	(16.0)		良	工具ナデ，貝殻条痕，ミガキ，ナデ	工具痕，ミガキ	にぶい黄橙	暗灰黄	
第83図	315	縄文土器	深鉢	4	Q	11	－	－	(16.4)		良	貝殻条痕，ナデ	貝殻条痕，ナデ	橙	橙	リボン状突起
第83図	316	縄文土器	深鉢	4	SI	39	－	(7.9)	(2.1)		良	ナデ，ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第83図	317	縄文土器	深鉢	4	SI	46	－	(9.2)	(2.8)		良	ナデ，ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第83図	318	縄文土器	深鉢	4	Q	11	－	12.5	(3.1)		良	工具ナデ，ナデ	ミガキ，押圧	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第83図	319	縄文土器	深鉢	4	Q	10,11	－	10.1	(3.1)		良	工具ナデ，押圧	工具ナデ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第84図	320	縄文土器	浅鉢	4	R	11	－	－	(2.8)		良	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	黒	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第84図	321	縄文土器	浅鉢	4	L	14	—	—	(5.8)		良	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第84図	322	縄文土器	深鉢	4	Q	11	—	—	(9.6)		良	ナデ，工具ナデ，貝殻条痕	ナデ，工具ナデ，ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
第84図	323	縄文土器	深鉢	4	R	11	—	—	(7.8)		良	工具ナデ，ナデ，貝殻条痕	貝殻条痕，ナデ，ミガキ	にぶい黄褐	明黄褐	
第84図	324	縄文土器	浅鉢	5	E	4	—	—	(6.5)		良	ナデ，工具ナデ	工具ナデ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第84図	325	縄文土器	浅鉢	4	R	11	(16.1)	—	(7.5)		良	貝殻条痕，工具ナデ，ナデ	貝殻条痕，工具ナデ	にぶい黄褐	橙	補修孔
第84図	326	縄文土器	浅鉢	4	R	12	—	—	(1.7)		良	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	褐灰	灰黄褐	
第84図	327	縄文土器	浅鉢	4	P	10	—	—	(3.3)		良	ナデ，ミガキ，ケズリ	ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第84図	328	縄文土器	浅鉢	4	N	12,13	(15.4)	—	6.0		良	横ナデ，工具ナデ，ミガキ	横ナデ，ミガキ，沈線	明黄褐	明黄褐	
第84図	329	縄文土器	浅鉢	4	Q	10	(20.4)	—	(9.4)		良	ミガキ	工具ナデ，ミガキ	灰黄褐	にぶい黄褐	補修孔
第84図	330	縄文土器	浅鉢	4	J	13	(30.4)	—	(10.8)		良	押圧，工具ナデ，ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	方形浅鉢
第84図	331	縄文土器	浅鉢か	4	T	12	—	—	(7.4)		良	工具ナデ，組織痕，ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第84図	332	縄文土器	浅鉢	4	J	12	—	—	(13.8)		良	組織痕，ヘラケズリ，ナデ	工具ナデ，ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
第84図	333	縄文土器	浅鉢	4	N	11	—	—	(1.3)		良	組織痕	貝殻条痕後ナデ	明黄褐	明黄褐	
第85図	334	弥生土器	鉢	4	N	11,12	(14.0)	—	(4.9)		良	横ナデ，ハケメ，ナデ	横ナデ，ハケメ，ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第85図	335	土師器	甕	4	P	12	(28.0)	—	(7.4)		やや不良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	
第85図	336	土師器	甕	4	M	11	(27.6)	—	(6.0)		良	横ナデ，ハケメ	ハケメ，ケズリ	にぶい黄橙	橙	
第85図	337	土師器	甕	4	R	10	(24.6)	—	(7.1)		良	横ナデ，ハケメ	横ナデ，ハケメ，ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第85図	338	須恵器	坏	4	R	10	(12.5)	(8.3)	4.0		良	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	
第85図	339	須恵器	坏	4	S	12	(13.0)	(6.0)	3.7		良	回転ナデ，ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ，ナデ	灰黄	灰黄	
第85図	340	須恵器	椀	4	Q	11	—	—	(5.4)		良	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	
第85図	341	須恵器	椀	4	N	12	—	(7.8)	(2.7)		良	回転ナデ，高台貼付，ヘラ切り後未調整，横ナデ	回転ナデ，ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	
第85図	342	須恵器	椀	4	R	10	—	(6.7)	(1.9)		良	回転ナデ，高台貼付後ナデ	回転ナデ，ヘラ切り離し後ナデ	灰	灰	
第85図	343	須恵器	蓋	4	N	11	—	—	(1.0)		良	ヘラ切り後未調整，回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	
第85図	344	須恵器	壷	4	M	11	—	(9.9)	(5.5)		良	回転ヘラケズリ	ナデ，回転ナデ	灰	灰オリーブ	
第85図	345	須恵器	壷か	4	Q	11	—	—	(2.6)		良	平行文タタキ，回転ナデ，回転ヘラケズリ	押圧，ナデ	暗灰黄	灰オリーブ	
第85図	346	須恵器	甕	4	表土		(11.2)	(15.7)	2.3		良	タタキ，自然釉	あて具痕	灰	灰	
第85図	347	土師器	把手	4	表土		—	—	(6.7)		良	押圧後ナデ，ヘラミガキ	ケズリ	にぶい褐	灰黄褐	
第85図	348	瓦	平瓦	4	R	12	—	—	1.7		良	凸面：縄目痕		にぶい橙	にぶい橙	
第85図	349	陶器	碗	5	表土		—	4.8	(3.5)		良	施釉	施釉	カーキー	カーキー	白堆線有

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第86図	350	石器	台形様石器	4	R	11	1.9	2.3	0.8	2.98	チャート					
第86図	351	石器	石鏃未製品	4	L	12	3.7	2.0	0.8	4.82	チャート					
第86図	352	石器	石鏃（未製品）	4	I	12	2.0	2.1	1.0	3.63	黒曜石					
第86図	353	石器	加工痕のある石器	4	N	12	2.2	2.5	1.1	5.62	黒曜石					
第86図	354	石器	加工痕のある石器	4	N	12	1.6	1.9	0.6	1.38	黒曜石					
第86図	355	石器	打製石鏃	4	R	11	2.0	1.8	0.3	0.95	黒曜石					
第86図	356	石器	打製石鏃	5	SX	6	2.5	1.6	0.5	1.23	黒曜石					
第86図	357	石器	打製石鏃	4	N	12	1.8	1.2	0.4	0.71	黒曜石					
第86図	358	石器	打製石鏃	4	K	13	2.6	1.6	0.4	1.07	黒曜石					
第86図	359	石器	打製石鏃未製品	4	M	14	3.7	2.3	0.9	4.78	安山岩					
第86図	360	石器	石鏃	4	－	－	2.3	1.6	0.5	1.35	黒曜石					
第86図	361	石器	石鏃	4	R	10	2.1	1.7	0.45	1.19	黒曜石					
第86図	362	石器	石鏃	4	R	11	3.0	2.0	0.6	2.06	安山岩					
第86図	363	石器	石鏃	5	表土		2.7	1.7	0.6	2.55	安山岩					
第86図	364	石器	石鏃	4	S	10	1.2	1.6	0.4	0.77	黒曜石					
第86図	365	石器	打製石鏃	5	表土		2.1	1.9	0.4	1.17	黒曜石					
第86図	366	石器	石鏃	4	O	10	1.6	1.4	0.4	0.72	安山岩					
第86図	367	石器	石鏃	4	I	13	1.7	1.5	0.3	0.49	安山岩					
第86図	368	石器	石鏃	4	M	12	2.0	1.4	0.4	0.67	チャート					
第86図	369	石器	石鏃	5	SX	9	2.0	1.8	0.2	0.59	黒曜石					
第86図	370	石器	石鏃	5	表土		1.4	1.3	0.2	0.29	黒曜石					
第86図	371	石器	石鏃	5	表土		1.5	1.4	0.3	0.35	黒曜石					
第86図	372	石器	石鏃	5	表土		1.6	1.5	0.2	0.34	黒曜石					
第86図	373	石器	石鏃	4	R	11	1.5	1.5	0.3	0.41	黒曜石					
第86図	374	石器	石鏃	5	表土		1.4	1.4	0.3	0.33	チャート					
第86図	375	石器	石鏃	4	I	13	1.9	1.4	0.4	0.54	安山岩					
第86図	376	石器	石鏃	5	表土		1.6	1.2	0.3	0.40	黒曜石					
第86図	377	石器	石鏃	5	表土		1.9	1.5	0.3	0.58	チャート					
第86図	378	石器	石鏃	5	表土		1.8	1.7	0.3	0.57	安山岩					
第86図	379	石器	石鏃	4	O	10	1.9	1.4	0.2	0.38	黒曜石					
第86図	380	石器	石鏃	4	Q	11	1.6	1.7	0.3	0.50	黒曜石					
第86図	381	石器	石鏃	4	Q	11	3.1	2.5	0.3	1.76	安山岩					
第86図	382	石器	石鏃	5	－	－	2.6	1.8	0.4	1.61	チャート					

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調整		色調		備考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第86図	383	石器	石鏃	4	K	13	2.0	1.6	0.4	0.68	チャート					
第86図	384	石器	石鏃	4	K	13	2.0	1.3	0.3	0.36	黒曜石					
第87図	385	石器	打製石鏃	5	表土		2.6	1.8	0.4	1.55	安山岩					
第87図	386	石器	石鏃	5	表土		2.1	1.7	0.4	1.00	黒曜石					
第87図	387	石器	石鏃	5	SX	6	2.5	1.6	0.3	0.68	黒曜石					
第87図	388	石器	石鏃	4	P	12	2.6	1.5	0.3	0.65	安山岩					
第87図	389	石器	石鏃	5	表土		2.3	1.5	0.3	0.59	黒曜石					
第87図	390	石器	石鏃	5	表土		2.3	1.5	0.3	0.72	チャート					
第87図	391	石器	打製石鏃	5	表土		2.0	1.6	0.3	0.78	チャート					
第87図	392	石器	石鏃	4	N	13	2.4	1.3	0.4	0.80	黒曜石					
第87図	393	石器	打製石鏃	5	表土		1.0	1.1	0.2	0.15	黒曜石					
第87図	394	石器	石鏃	4	N	11	3.2	2.6	0.45	3.95	チャート					
第87図	395	石器	石鏃	5	表土		2.3	1.6	0.4	0.76	チャート					
第87図	396	石器	石鏃	4	M	12	2.0	1.7	0.5	0.96	チャート					
第87図	397	石器	石鏃	4	SI	46	3.1	1.8	0.4	1.26	チャート					
第87図	398	石器	石鏃	4	M	12	2.8	1.7	0.7	2.00	安山岩					
第87図	399	石器	石鏃	4	J		2.2	1.8	0.5	1.36	安山岩					
第87図	400	石器	石鏃	4	―	―	3.5	1.8	0.5	2.61	安山岩					
第87図	401	石器	石鏃	4	J	14	2.3	1.7	0.6	2.28	チャート					
第87図	402	石器	異形石器	4	J	14	1.7	1.3	0.4	0.75	黒曜石					
第87図	403	石器	二次加工剥片	4	Q	11	2.0	1.1	0.5	1.03	黒曜石					
第87図	404	石器	石匙	4	N	11	3.5	5.4	0.7	13.66	安山岩					
第87図	405	石器	スクレイパー	4	SI	53	3.2	5.1	1.3	18.75	黒曜石					石核転用
第87図	406	石器	スクレイパー	4	R	13	4.1	3.3	0.7	7.61	安山岩					
第87図	407	石器	スクレイパー	5	表土		3.0	5.3	1.0	14.23	黒曜石					
第87図	408	石器	スクレイパー	4	I	13	4.6	10.5	2.3	101.10	安山岩					
第88図	409	石器	二次加工剥片	4	―	―	2.5	1.4	1.0	3.18	黒曜石					
第88図	410	石器	二次加工剥片	4	H	12	2.4	2.8	0.6	3.28	黒曜石					
第88図	411	石器	二次加工剥片	4	―	―	3.0	4.6	0.8	11.02	チャート					
第88図	412	石器	二次加工剥片	4	SI	50	2.8	2.5	1.0	5.23	黒曜石					
第88図	413	石器	二次加工剥片	4	R	10	2.2	1.9	0.5	1.54	黒曜石					
第88図	414	石器	二次加工剥片	4	H	12	2.0	3.4	0.6	3.11	チャート					
第88図	415	石器	使用痕剥片	4	N	11	4.2	2.6	0.9	7.72	黒曜石					

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第88図	416	石器	使用痕剥片	4	―	―	2.9	4.0	1.2	14.62	チャート					
第88図	417	石器	使用痕剥片	4	P	12	2.9	1.5	0.6	2.07	黒曜石					
第88図	418	石器	使用痕剥片	4	SI	39	2.4	3.7	0.8	3.09	黒曜石					
第88図	419	石器	使用痕剥片	4	K	14	4.6	5.5	1.6	33.00	輝緑凝灰岩					
第88図	420	石器	石核	4	J	13	2.1	1.8	1.5	5.60	黒曜石					
第88図	421	石器	石核	4	Q	10	2.2	3.0	2.3	11.66	黒曜石					
第88図	422	石器	石核	4	R	11	2.4	1.8	2.9	10.05	黒曜石					
第88図	423	石器	石核	4	―	―	2.7	2.3	2.0	11.85	黒曜石					
第88図	424	石器	石核	4	P	10	3.5	4.6	2.8	34.81	黒曜石					
第88図	425	石器	石核	4	N	11	4.1	5.2	2.7	60.00	安山岩					
第89図	426	石器	打製石斧	4	SI	30	8.0	5.6	1.8	111.40	安山岩					
第89図	427	石器	打製石斧	4	O	10	10.8	7.3	2.6	259.00	安山岩					
第89図	428	石器	打製石斧	4	Q	11	17.6	7.8	2.1	321.00	安山岩					
第89図	429	石器	打製石斧	4	O	10	11.3	6.3	1.9	169.00	安山岩					
第89図	430	石器	打製石斧	4	Q	11	10.4	5.0	1.9	122.40	安山岩					
第89図	431	石器	打製石斧	4	SI	46	11.8	5.3	2.2	156.40	安山岩					
第89図	432	石器	打製石斧	4	N	11	10.2	5.0	1.6	99.70	安山岩					
第89図	433	石器	打製石斧	4	L	11	12.8	5.2	1.6	141.30	安山岩					
第89図	434	石器	打製石斧	4	SI	55	9.3	4.7	2.9	124.40	安山岩					
第89図	435	石器	打製石斧	4	SI	29	9.7	5.7	2.7	144.40	砂岩					
第90図	436	石器	打製石斧	4	S	11	14.4	7.0	2.5	261.00	安山岩					
第90図	437	石器	打製石斧	4	Q	11	11.1	6.1	2.4	186.40	砂岩					
第90図	438	石器	打製石斧	5	表土		11.3	6.1	2.1	150.20	安山岩					
第90図	439	石器	打製石斧（円盤形）	5	表土		11.3	6.4	1.4	102.40	粘板岩					
第90図	440	石器	磨製石斧	5	表土		10.3	4.1	2.1	127.10	緑色片岩					
第90図	441	石器	磨製石斧	4	J	13	10.5	5.7	3.3	265.00	砂岩					
第90図	442	石器	打製石斧未製品	4	―	―	13.8	7.2	2.5	312.00	安山岩					敲石に転用か
第91図	443	石器	石庖丁	5	表土		6.2	4.3	0.5	18.60	粘板岩					
第91図	444	石器	石庖丁未製品	4	K	13	7.6	4.8	0.8	44.29	蛇紋岩					
第91図	445	石器	石庖丁未製品	4	M	11	7.0	5.2	0.9	44.37	砂岩					
第91図	446	石製品	管玉	5	―	―	1.1	0.8	0.8	0.95						孔径0.2cm×0.2cm
第91図	447	石製品	管玉	4	―	―	1.6	0.7	0.5	0.10						孔径（0.3）cm×（0.3）cm
第91図	448	石製品	勾玉	4	―	―	3.2	1.8	0.7	4.5						孔径（0.5）cm×0.4cm

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第 91 図	449	鉄器	刀子か	4	ー	ー	2.7	1.0	0.4	1.6						刀身と茎の境目
第 91 図	450	鉄器	刀子か	5	ー	ー	3.6	1.2	0.3	3.5						刀身の一部か
第 91 図	451	鉄器	鉄鏃（無茎式）	4	O	13	3.6	2.1	0.2	2.1						
第 91 図	452	青銅器	耳環	4	ー	ー	2.6	2.9	0.6	13.1						
第 91 図	453	鉄器	袋状鉄斧	3	ー	ー	7.9	4.7	2.4	104.6						

6 区遺構　　法量（　）は復元値。焼成は良、やや不良、不良の 3 段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第 98 図	454	石器	磨石類	6	SI	1	11.8	9.7	4.2	877.6						右側面黒変
第 99 図	455	石器	剥片	6	SI	4	4.2	1.6	0.9	2.53	黒曜石					
第 99 図	456	石器	砥石	6	SI	4	5.7	4.3	1.7	38.6						手持ち砥石
第 100 図	457	石器	二次加工剥片	6	SI	5	4.3	3.0	1.0	10.56	黒曜石					
第 100 図	458	石器	磨石類	6	SI	5	11.3	13.3	6.9	1306.5	1/2					
第 101 図	459	石器	磨製石斧	6	SI	6	13.2	5.3	2.2	181.20	砂岩					
第 101 図	460	石器	打製石斧	6	SI	6	7.4	5.6	1.9	85.02	安山岩					
第 102 図	461	石器	石鏃	6	SK	29	2.6	1.7	0.5	1.36	黒曜石					
第 102 図	462	縄文土器	深鉢	6	SK	34	ー	ー	(33.9)		良	貝殻条痕，ナデ	ミガキ，工具痕	明黄褐	にぶい黄褐	
第 107 図	463	黒色土器	椀	6	SB	2	ー	ー	(2.3)		良	回転ナデ，ヘラミガキ	回転ナデ，ヘラミガキ	橙	黒	黒色土器 A 類
第 107 図	464	土師器	坏	6	SX	4	ー	(7.6)	(2.4)		良	ケズリ，ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第 109 図	465	中世須恵器	捏鉢	6	畝状遺構 D	1 2	ー	ー	(7.6)		良	ロクロナデ	ロクロナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	
第 113 図	466	土師器	把手	6	SD	1	ー	ー	(6.0)		良	押圧後工具ナデ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第 113 図	467	青磁	碗	6	SD	1	ー	ー	(3.1)		良	陰刻，施釉	施釉	すずかけの樹，鉄の緑	すずかけの樹	細蓮弁は線刻か，見込み無文 龍泉窯系青磁
第 113 図	468	磁器か （陶器か）	壷か	6	SD	1	ー	(7.5)	(2.3)		良	ナデ，ロクロケズリ， 削り出し高台	ロクロナデ	銀灰	銀灰	
第 113 図	469	白磁	皿	6	SD	1	ー	(4.2)	(1.5)		良	施釉	施釉	銀灰	銀灰	内外器面砂目
第 113 図	470	磁器染付	皿	6	SD	1	ー	ー	(0.8)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰，濃い灰藍	鉛の灰，濃い灰藍	手書き五弁花か，高台内渦福
第 113 図	471	磁器染付	皿	6	SD	1	ー	(7.4)	(2.0)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰，サックスブルー	鉛の灰，濃い灰藍	手書き五弁花，外器面唐草文
第 113 図	472	磁器染付	碗	6	SD	1	11.8	4.2	5.6		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰，サックスブルー	鉛の灰，サックスブルー	コンニャク五弁花，円文
第 113 図	473	磁器染付	碗	6	SD	1	(11.8)	ー	(4.3)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰，濃い灰藍	鉛の灰，濃い灰藍	
第 113 図	474	磁器染付	碗	6	SD	1	(11.8)	ー	(4.6)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰，サックスブルー	鉛の灰，サックスブルー	外器面円文
第 113 図	475	磁器染付	皿	6	SD	1	(12.2)	ー	(2.9)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰	鉛の灰，苔の灰	内器面に二重斜格子文と 二重圏線

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第113図	476	陶器	碗	6	SD	1	—	4.9	(4.7)		良	施釉	施釉，蛇の目釉剥ぎ	褐，紺碧，銀灰	褐，紺碧，銀灰	巴高台，藁灰釉
第113図	477	陶器か	碗	6	SD	1	—	(4.5)	(2.8)		良	施釉，釉剥ぎ	施釉	白茶	白茶	
第113図	478	石器	剥片	6	SD	1	5.6	2.8	1.4	20.00	安山岩					
第113図	479	石器	剥片	6	SD	1	6.3	3.4	2.0	35.46	輝緑凝灰岩					
第113図	480	石器	石核		SD	1	3.8	3.5	2.9	27.79	チャート					
第114図	481	石器	打製石斧	6	SD	1	11.3	4.2	1.9	96.40	安山岩					
第114図	482	石器	打製石斧	6	SD	1	13.7	6.5	2.4	250.60	砂岩					
第114図	483	石器	打製石斧	6	SD H,I	1 5,6,5	15.6	7.8	1.9	300.10	安山岩					
第114図	484	石器	砥石（有溝）	6	SD	1	4.2	7.9	2.8	126.3						使用面4面
第114図	485	石器	砥石（有溝）	6	SD	1	6.0	6.5	2.4	109.2						使用面4面
第114図	486	石器	硯	6	SD	2	10.0	7.8	2.5	259.2	流紋岩					天草砥石，砥石転用　墨痕
第114図	487	須恵器	壷か	6	SD	4	—	—	(4.5)		良	回転ナデ	回転ナデ，工具痕	黄灰	浅黄	
第114図	488	須恵器	鉢か	6	SD	7A	—	(4.0)	(2.0)		良	回転ナデ，回転ヘラケズリ	ナデ	灰	灰	穿孔か
第114図	489	石器	石板	6	SD O	7A 5	4.0	4.4	0.3	8.00	粘板岩					
第114図	490	須恵器	溶着塊	6	SD	9A	(7.8)	(9.5)	(3.8)		良	—	タタキ	暗灰	灰	
第114図	491	中世須恵器	甕	6	D	1,2	—	—	(2.0)		良	格子目タタキ	ハケメ	黄灰	黄灰	
第114図	492	陶器	皿	6	SD	9A	—	(3.8)	(1.6)		良	施釉	施釉	すずかけの樹	すずかけの樹	砂目
第114図	493	白磁	皿	6	SD	9A	(12.4)	—	(2.7)		良	施釉	施釉，蛇の目釉剥ぎ	鉛の灰	鉛の灰	

6区遺構外

法量（　）は復元値。焼成は良、やや不良、不良の3段階に分ける。

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第115図	494	縄文土器	深鉢	6	F	5	—	—	(5.2)		良	ナデ，文様	ナデ，押圧	にぶい黄褐	にぶい黄橙	撚糸文
第115図	495	縄文土器	深鉢	6	D	3	—	—	(6.4)		良	ナデ，貝殻条痕	ナデ，工具ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
第115図	496	縄文土器	深鉢	6	D	3	—	—	(5.9)		良	ナデ，文様	ナデ，工具ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	押引文
第115図	497	縄文土器	深鉢	6	K	6	—	—	(3.2)		良	押圧，横ナデ，文様，工具痕	押圧，工具ナデ	明赤褐	にぶい褐	刻目，凹線文
第115図	498	縄文土器	浅鉢	6	—	—	—	—	(2.0)		良	ナデ，ミガキ，沈線	ナデ，ミガキ	暗灰黄	黄灰	補修孔
第115図	499	縄文土器	鉢	6	F	2	—	—	(3.5)		良	横ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第115図	500	縄文土器	浅鉢	6	D	5	(15.9)	—	(2.5)		良	ミガキ，ナデ	工具ナデ，ミガキ，ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	
第115図	501	縄文土器	浅鉢	6	E	5	—	—	(4.0)		良	ナデ，ミガキ	押圧，ナデ，ミガキ，工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第115図	502	縄文土器	浅鉢	6	G	2	—	—	(3.8)		良	ミガキ，横ナデ	工具ナデ，横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調整		色調		備考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第115図	503	縄文土器	浅鉢	6	D	4	—	—	(3.2)		良	ミガキ，貼付後ナデ，沈線	ミガキ，貼付後ナデ，工具ナデ	褐灰	褐灰	
第115図	504	縄文土器	深鉢	6	E	2,3	—	—	(6.4)		良	横ナデ，ミガキ，沈線	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい橙	
第115図	505	縄文土器	深鉢	6	E	3	—	—	(10.3)		良	横ナデ，ミガキ，貝殻条痕，沈線	横ナデ，ミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第115図	506	縄文土器	深鉢	6	F	2	—	—	(5.0)		良	横ナデ，工具ナデ	横ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第115図	507	縄文土器	浅鉢	6	E	2	—	—	(4.7)		良	貝殻条痕，ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
第115図	508	縄文土器	深鉢	6	E	4	—	—	(5.6)		良	工具ナデ，ナデ，貝殻条痕	ナデ，ミガキ	にぶい黄褐	にぶい褐	
第115図	509	縄文土器	深鉢	6	F	4	—	(11.6)	(3.2)		良	ナデ，工具ナデ，工具痕	工具ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	
第115図	510	縄文土器	深鉢	6	D	6	—	(10.8)	(4.6)		良	貝殻条痕	工具ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	
第115図	511	縄文土器	深鉢	6	J	5	—	9.0	(3.9)		良	ナデ	ナデ，押圧	橙	にぶい橙	
第115図	512	縄文土器	浅鉢	6	D	4	—	—	(1.2)		良	組織痕	ナデ，ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第115図	513	土師器	甕	6	K	7	(25.7)	—	(6.0)		良	横ナデ，ナデ	横ナデ，ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第115図	514	土師器	甕か	6	E	2	—	—	(4.3)		良	ハケメ，工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
第115図	515	須恵器	椀	6	E	2	—	(8.8)	(2.0)		良	回転ナデ，ヘラ切り離し，高台貼付後ナデ	回転ナデ	灰白	灰	
第115図	516	須恵器	椀	6	J	5	—	(8.8)	(4.1)		良	回転ナデ，ヘラ切り離し，高台貼付後ナデ	回転ナデ	浅黄	浅黄	
第116図	517	瓦質土器	擂鉢	6	J	5	—	—	(5.6)		良	ロクロナデ，ナデ	ロクロナデ，ナデ，擂目	暗灰黄	灰	
第116図	518	瓦質土器	鉢	6	—	—	—	—	(2.3)		良	回転ナデ，静止ナデ	ナデ	灰黄	黄灰	
第116図	519	土製品	瓦玉	6	I	5	(2.8)	(2.9)	(2.0)		良	ナデ	—	灰	—	
第116図	520	白磁	皿か	6	D	2	—	—	(2.0)		良	施釉	施釉	白茶	白茶	玉縁口縁，細片すぎて詳細不明
第116図	521	白磁	皿か	6	D	3	—	—	(2.3)		良	陰刻（くし状），施釉	陰刻，施釉	白茶	白茶	内外共に櫛描文
第116図	522	白磁か	碗	6	I	5	—	(4.2)	(2.0)		良	施釉，釉剥ぎ	施釉	辛子	辛子	
第116図	523	青磁	碗	6	B	2	—	—	(3.3)		良	陰刻，施釉	陰刻（くし状），施釉	カーキー	カーキー	内面細い櫛描文，外面粗い櫛描文 同安窯系青磁
第116図	524	青磁	碗	6	E	2	—	—	(3.1)		良	施釉	陰刻，施釉	すずかけの樹	すずかけの樹	陰刻器面に3～4条 龍泉窯系青磁類か
第116図	525	青磁	碗	6	D	4	—	—	(2.9)		良	陰刻（蓮花），施釉	施釉	茶の緑	茶の緑	龍泉窯系青磁
第116図	526	青磁	碗	6	J	7	—	—	(2.2)		良	施釉	陰刻，施釉	カーキー	カーキー	龍泉窯系青磁
第116図	527	陶器	皿	6	D	4	—	—	(3.4)		良	施釉	施釉	白茶	白茶	
第116図	528	青磁か白磁か	碗	6	K	4	—	—	(3.4)		良	施釉	施釉	すずかけの樹	すずかけの樹	
第116図	529	陶器	皿	6	—	—	—	—	(1.0)		良	ロクロヘラケズリ	施釉	白茶	白茶	蛇目釉剥ぎ
第116図	530	陶器	碗	6	K	4	(10.8)	—	(5.2)		良	施釉	施釉	白茶	白茶	
第116図	531	陶器	擂鉢	6	—	—	—	(10.0)	(3.1)		良	ロクロナデ，回転糸切り	擂目	代赭	代赭	
第116図	532	磁器染付	碗	6	C	2	—	—	(4.6)		良	施釉（染付）	施釉（染付）	鉛の灰，サックスブルー	鉛の灰，サックスブルー	

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第116図	533	磁器染付	碗	6	C	2	ー	(7.2)	(1.7)		やや不良	施釉（染付）	施釉（染付）	灰白，香	灰白，香	内器面草花文か，コンニャク印判（五弁花），高台内渦福か
第116図	534	磁器染付	碗	6	表土		(11.0)	3.9	4.8		良	施釉（染付）	施釉（染付），蛇の目釉剥ぎ	藍白，孔雀の藍	藍白，孔雀の藍	
第117図	535	石器	三稜尖頭器	6	K	5	5.1	2.1	1.2	10.12	珪質頁岩					
第117図	536	石器	二次加工剥片	6	L	9	2.7	1.1	0.4	1.15	黒曜石					
第117図	537	石器	打製石鏃か	6	G	2	1.5	1.9	1.0	3.37	頁岩					異形石鏃か尖頭器の可能性
第117図	538	石器	スクレイパー	6	B	1	4.6	6.4	1.5	34.10	珪質頁岩					
第117図	539	石器	石鏃（未製品）	6	表土		2.0	1.2	0.4	0.75	黒曜石					
第117図	540	石器	石鏃	6	I	5	2.0	1.6	0.3	0.81	チャート					
第117図	541	石器	石鏃	6	G	5	2.3	1.6	0.6	1.83	チャート					
第117図	542	石器	石鏃	6	E	5	2.7	1.5	0.5	1.67	黒曜石					
第117図	543	石器	石鏃	6	G	4	3.2	2.0	0.6	3.12	チャート					
第117図	544	石器	石鏃（未製品）	6	F	7	3.4	2.1	1.0	5.90	安山岩					
第117図	545	石器	石鏃	6	L	7	1.0	1.0	0.2	0.11	黒曜石					
第117図	546	石器	石鏃	6	D	5	1.0	1.1	0.2	0.12	黒曜石					
第117図	547	石器	石鏃	6	H	5	1.4	1.0	0.4	0.41	黒曜石					
第117図	548	石器	石鏃	6	ー	ー	1.3	1.3	0.3	0.30	黒曜石					
第117図	549	石器	石鏃	6	ー	ー	1.7	1.2	0.4	0.56	安山岩					
第117図	550	石器	石鏃	6	C	2	2.0	1.6	0.4	0.73	黒曜石					
第117図	551	石器	石鏃	6	L	4	2.2	1.9	0.7	1.66	黒曜石					
第117図	552	石器	石鏃	6	G	3	1.8	1.5	0.4	0.69	チャート					
第117図	553	石器	石鏃	6	N	7	2.8	2.0	0.4	1.20	安山岩					
第117図	554	石器	石鏃	6	L	9	3.4	1.8	0.4	1.68	黒曜石					
第117図	555	石器	石鏃	6	G	7	1.7	1.1	0.3	0.39	黒曜石					
第117図	556	石器	石鏃	6	M	6	1.7	1.1	0.3	0.31	黒曜石					
第117図	557	石器	石鏃	6	K	4	1.7	1.2	0.3	0.43	黒曜石					
第117図	558	石器	磨製石鏃か	6	C	3	2.0	1.4	0.3	1.10	チャート					
第117図	559	石器	石錐	6	N	6	3.0	2.1	0.1	2.77	安山岩					
第117図	560	石器	石錐	6	G	8	2.7	1.9	0.1	2.03	安山岩					
第117図	561	石器	石匙（未製品）	6	トレンチ		4.5	2.6	0.8	9.96	珪質頁岩					
第118図	562	石器	二次加工剥片	6	E	4	5.6	4.9	1.5	39.54	安山岩					
第118図	563	石器	二次加工剥片	6	ー	ー	6.2	4.2	2.0	44.81	頁岩					
第118図	564	石器	二次加工剥片	6	J	4,5	3.7	5.8	1.7	35.87	頁岩					

挿図番号	番号	種　別	器　種	出土地点			法量(cm)				焼成(石材)	調　整		色　調		備　考
				区	種別	番号	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)		外器面	内器面	外面	内面	
第 118 図	565	石器	二次加工剥片	6	J	4	4.5	6.7	1.9	52.07						
第 118 図	566	石器	二次加工剥片	6	L	4	5.0	6.4	2.5	60.90	安山岩					
第 118 図	567	石器	使用痕剥片	6	F	7	2.3	3.4	1.1	6.03	黒曜石					
第 119 図	568	石器	石核	6	B	2	6.6	7.0	3.4	181.90	安山岩					
第 119 図	569	石器	石核	6	H	3	1.9	1.3	2.1	5.58	黒曜石					
第 119 図	570	石器	石核	6	H	2	3.4	3.3	2.8	24.80	頁岩					
第 119 図	571	石器	石核	6	B	2	5.5	12.9	5.0	380.00	輝緑凝灰岩					
第 119 図	572	石器	石核	6	E	3	6.6	9.3	5.3	392.00	チャート					
第 120 図	573	石器	石核	6	E	3	1.6	2.4	2.0	7.98	黒曜石					
第 120 図	574	石器	石核	6	L	9	2.0	3.0	1.9	9.80	黒曜石					
第 120 図	575	石器	石核	6	L	9	4.4	4.3	3.3	78.63	輝緑凝灰岩					
第 120 図	576	石器	石核	6	E	3	1.9	2.9	2.4	12.89	黒曜石					
第 120 図	577	石器	石核	6	E	4	4.1	6.4	2.7	61.69	安山岩					
第 120 図	578	石器	石核	6	SK	6	4.1	4.9	2.7	40.87	頁岩					
第 121 図	579	石器	打製石斧	6	E	4	8.5	5.0	1.1	76.60	緑色片岩					
第 121 図	580	石器	打製石斧	6	D	2	8.4	6.3	2.1	130.00	安山岩					
第 121 図	581	石器	打製石斧	6	K	5	13.9	8.4	2.2	279.00	安山岩					
第 121 図	582	石器	磨製石斧	6	D	2	7.4	7.0	3.2	187.20	蛇紋岩					
第 121 図	583	石器	磨製石斧	6	E	6	6.6	6.9	1.2	84.52	砂岩					
第 121 図	584	石器	磨製石斧	6	表土		8.1	4.4	1.6	77.06	砂岩					
第 121 図	585	石器	磨製石斧	6	表土		8.2	4.4	2.0	68.24	砂岩					
第 121 図	586	石器	磨製石斧	6	G	7	4.6	2.2	0.9	16.44	蛇紋岩					
第 121 図	587	石器	扁平片刃石斧	6	―	―	3.2	2.3	0.9	10.94	粘板岩					
第 121 図	588	石器	石庖丁	6	L	4	2.9	2.2	0.6	5.10	安山岩					
第 121 図	589	石器	石板	6	―	―	2.6	4.5	0.3	3.88	粘板岩					
第 121 図	590	石器	砥石	6	M	6	5.4	5.5	2.2	102.8	流紋岩					天草砥石，使用面 5 面
第 121 図	591	石器	磨石類	6	J	4	8.7	4.4	5.8	274.8						
第 121 図	592	石器	磨石類	6	D	4	8.7	6.9	5.7	427.9						
第 122 図	593	石製品	玉類未製品か	6	G	6	2.4	2.2	1.2	10.2						碁石か
第 122 図	594	石製品	不明石製品	6	L	9	2.3	1.8	1.5	9.8						石鍋の耳の一部か
第 122 図	595	鉄製品	刀子	6	C	2	6.9	1.7	0.4	9.0						
第 122 図	596	鉄製品	刀子か	6	G	8	2.7	1.4	0.5	3.2						
第 122 図	597	鉄製品	不明鉄製品	6	J	8	6.3	1.3	0.6	9.2						棒状鉄器か

第５章　自然科学分析

塔平遺跡４区・５区から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塔平遺跡４区および５区の発掘調査では、弥生時代後期の住居跡が検出されており、住居内からは建築部材と考えられる炭化材が出土している。

本報告では、当時の木材利用に関する情報を得ることを目的として、炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、弥生時代後期の住居跡 (ＳＩ 12、ＳＩ 65、ＳＩ 66、ＳＩ 71) から出土した、建築部材と考えられる炭化材４点である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3. 結果

区	遺構	時期	層位	整理№	樹種
4区	ＳＩ12	弥生後期	埋土2層	492	ツブラジイ
5区	ＳＩ65	弥生後期	埋土1層	912	モッコク
5区	ＳＩ66	弥生後期	埋土1層	820	コナラ属アカガシ亜属
5区	ＳＩ71	弥生後期	埋土2層	1281	コナラ属アカガシ亜属

樹種同定結果を表１に示す。炭化材は広葉樹３分類群 (コナラ属アカガシ亜属・ツブラジイ・モッコク) に同定された。各分類群の主な解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科

放射孔材で、道管壁の厚さは中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ツブラジイ（Castanopsis cuspidata (Thunberg) Schottky）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1-2 個幅で放射方向に配列する。孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・モッコク（Ternstroemia gymnanthera（Wright et Arn.）Bedd.）　ツバキ科モッコク属

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形、単独または 2-3 個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-100 細胞高。

4. 考察

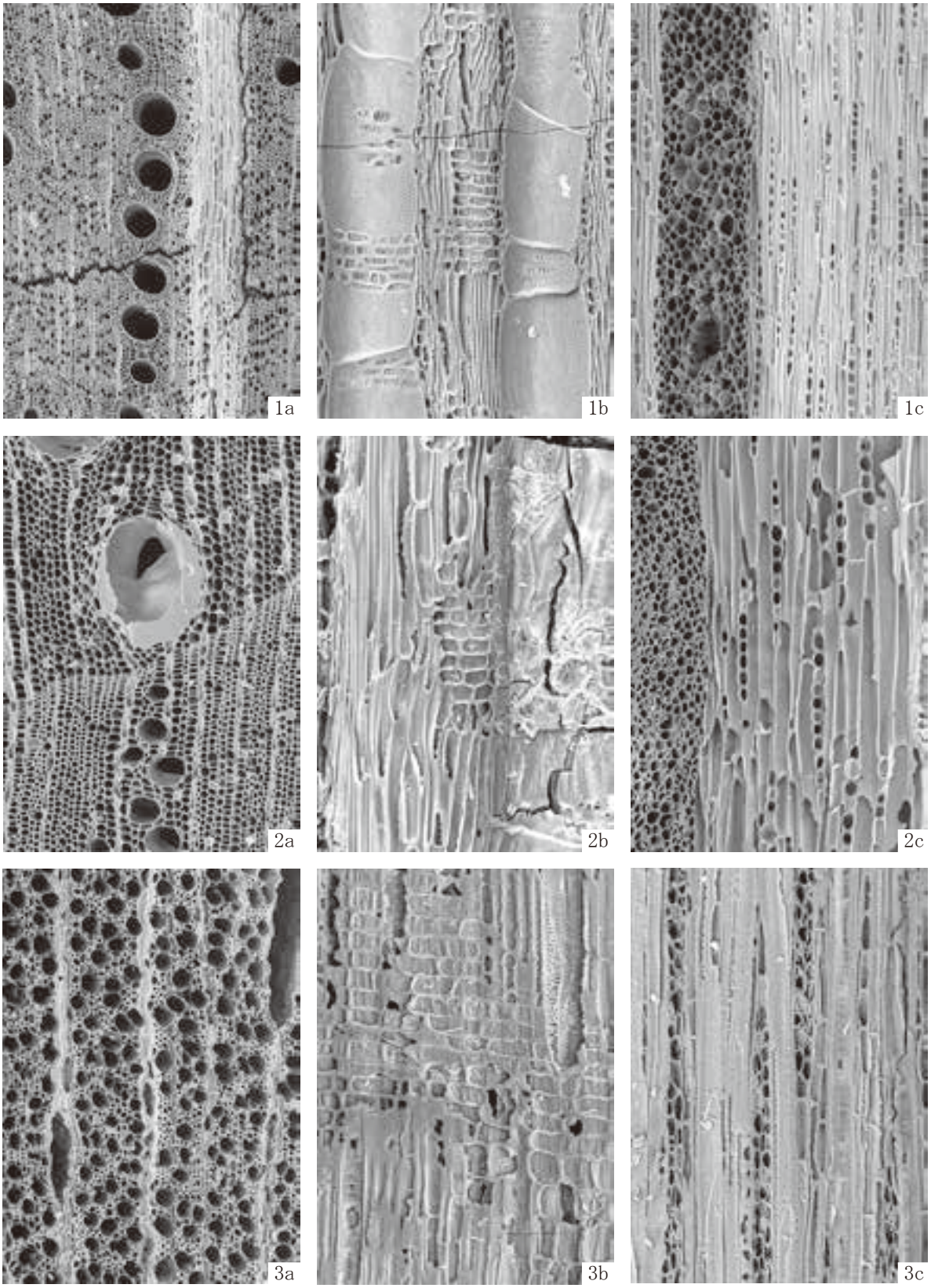
弥生時代後期の住居跡から出土した建築部材と考えられる炭化材は、ＳＩ 12 がツブラジイ、ＳＩ 65 がモッコク、ＳＩ 66 とＳＩ 71 がアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属とツブラジイは、高木となる常緑広葉樹で、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる種を含む。モッコクは、暖温帯性常緑広葉樹林から二次林に生育する常緑中高木である。木材は、いずれも比較的重硬で強度が高いことから、建築部材として適材であり、強度の高い木材を選択・利用していた可能性がある。

本遺跡では、1 区・3 区の弥生時代後期とされる住居跡から出土した炭化材に常緑広葉樹のアカガシ亜属、シャシャンボ、常緑または落葉広葉樹のアワブキ属が確認されている。これらの結果から、弥生時代後期の建築部材には、アカガシ亜属を中心に多様な広葉樹材が利用されていたことが推定される。また、弥生時代後期の遺跡周辺は、こうした多様な木材が入手できる環境であったことが推定される。

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .
伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.
伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.
伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.
伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.
伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.
島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

図版１　炭化材



1. コナラ属アカガシ亜属(SI71;№1281)
2. ツブラジイ(SI12;№492)
3. モッコク(SI65;№912)
　a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

第６章　総括

塔平遺跡の調査４区～６区は九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）の建設工事に伴って発掘調査を行い、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古代、近世以降の遺構・遺物を確認した。

調査４区・５区と調査６区は距離的にかなり離れており、遺構・遺物の内容も異なる部分が多い。したがって、本章第１節で調査４区・５区について、第２節で調査６区について各時代の調査成果を、簡単ではあるが総括としてまとめてみた。

なお、九州横断自動車道延岡線建設工事に伴い発掘調査を行った調査１区・３区については、既に報告しており（水上編 2013）、調査２区については次年度以降に報告される予定である。

第１節　調査４区・５区

旧石器時代

旧石器時代のものと推定される台形様石器が１点出土している。隣接する調査１区・３区においては、三稜尖頭器２点とナイフ形石器１点が出土している（水上編 2013）。また、細石器・スクレイパー・剥片・礫器が、かつて塔平遺跡で表面採集されたと報告されている（野田・濱田編 1999）。今回の調査区内で遺構は検出されず、遺物はいずれも古代～縄文時代の遺物包含層から出土したものである。当該期の生活域が周辺に存在した可能性が推測されるが、詳細については、今後の周辺での発掘調査事例を待って検討する必要がある。

縄文時代早期

調査区西側で炉穴７基、集石４基を検出した。調査１区・３区において、炉穴１基、集石４基が調査区東側を中心に検出されている（水上編 2013）。

検出した炉穴の焼土は厚く堆積しており、焼土面を明瞭に確認することができた。ＳＫ 29・33・34 やＳＫ 27・32 のように重複している炉穴も多いことから、同じ炉穴を何度も使用し、かつ同じ場所で何度も作り変えて使用していたものと考えられる。遺構内から出土した遺物は、貝殻条痕文をもつ少量の土器片と磨石類であった。これまでの調査事例も参考にして、縄文時代早期の遺構と考えている。

集石遺構は赤く焼けた拳大の円礫や角礫で構成されているが、周辺で炭化物は検出されていない。また、いずれの集石遺構も土坑を伴うものではなかった。本調査区で検出した集石遺構から、遺構の所属時期を特定する遺物の出土はなかった。しかし、調査３区で検出された集石遺構と状況が類似していることから、縄文時代早期の遺構と推測している。

縄文時代後期後半から晩期

調査４区で竪穴建物 14 軒、埋設土器遺構２基を検出した。調査１区・３区において、竪穴建物 13 軒、埋設土器遺構４基を検出しており、当該期は塔平遺跡において集落が形成された時期と考えられる。

竪穴建物はいずれも円形もしくは楕円形を呈する。床面で柱穴を検出できるものと検出できなかったものがある。第４章で繰り返し述べているが、地山の色調と覆土の色調との差が不明瞭であったため、かなり掘り下げて竪穴建物を検出している。したがって、５区で竪穴建物を検出することができなかったのは、そもそも竪穴建物が深く掘り下げて構築されなかったうえに、５区全域が削平の影響を受けていることによるものと思われる。よって、竪穴建物の数はもっと多かったものと推測している。なお、整理作業の過程で誤認の可能性があるものは本報告からは外している。

遺構内から出土した遺物はそれほど多くはなく、包含層出土遺物として、グリッド名と層位名を付けて取り上げ

た遺物の方が多い。これも前述の理由によるものである。出土した土器群は、黒色磨研土器様式の古閑式もしくは黒川式のものがほとんどであった。遺構検出面より上層から出土した土器も黒色磨研土器様式のものが非常に多い。前述のとおり検出状況があまり良好とはいえないため、幅をもたせて、縄文時代後期後半から晩期にかけての集落跡と考えたい。

なお、本遺跡出土の当該期土器の特徴として、組織痕土器の出土が上げられる。組織痕土器は、「縄文時代晩期の九州地方にみられる特徴的な土器」（渡辺 2006）であり、「黒川式では「組織痕土器」と呼ばれる編み布の圧痕が付いた土器がみられる」（宮地 2009）との指摘もされている。調査１区・３区では９点の組織痕土器が報告されており、調査４区・５区からも５点の組織痕土器が出土した。渡辺誠氏は、熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器を検討するなかで（渡辺 2006）、①「型自体に由来すると考えられている網代の圧痕」、②「型離れ材に由来すると考えられている編布の圧痕」、③「型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕」の３種に分類している。本遺跡報告の計 14 点の組織痕土器は、①～③に該当する組織痕土器であった。これらの土器については、九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）、九州横断自動車道延岡線の工事に伴う一連の調査報告が出揃った段階で再検討したいと考えている。

弥生時代後期

調査４区・５区では竪穴建物 33 軒、土坑１基を検出した。調査１区・３区においては、竪穴建物 27 軒を検出している（水上編 2013）。竪穴建物の重複は激しく、調査４区の３箇所で３軒以上の重複関係がみられた。竪穴建物内からは当該期に位置づけられる土器が多く出土しているが、重複が激しいため先後関係の誤認も推測される。また調査時の混乱もある。特に、調査４区のＳＩ１と重複する竪穴建物群、ＳＩ２と重複する竪穴建物群、ＳＩ 14 と重複する竪穴建物群には、その不安がある。

竪穴建物内からの出土遺物は可能な限り、出土位置の三次元情報を記録し取り上げたが、本報告書にはドットマップを掲載することができていない。しかも、職員の異動に伴い年度ごとに整理担当者が代わっている関係で、遺物の選別を行った者と執筆者が異なっている。そのため、検討に不十分なところが多々あることは、第４章でも述べたとおりである。

本項では、調査４区・５区の遺構から出土した当該期の土器群の変遷について検討を行った。複数の竪穴建物からは一括資料と考えられる土器群が出土している。検討を行うに際して、前段の理由から、①重複する他遺構との誤認の可能性が低い竪穴建物出土資料とすること、②器種構成にあまり偏りがなく、通時的に認められる器種が出土した竪穴建物出土資料とすること、を前提条件とし検討することとした。本来、重複する遺構から出土した遺物は、時期差を考えるうえで欠かせないものであるが、ここでは誤認の可能性を考慮し、敢えて可能な限り外すこととしている。

検討に際しては、熊本県内における当該期の既存の土器編年案（高谷編 1987、古庄 1989、木﨑編 1993・1996、亀田編 2001、宮崎編 2010）を参照した。とりわけ、器種分類と編年案については、塔平遺跡の南西に位置する二子塚遺跡の研究成果（島津ほか編 1992）、編年案については原田範昭氏（原田 1999）及び中里伸明氏（中里編 2009）による研究成果を主に参考としている。

調査４区・５区の土器群の変遷に関する検討結果をまとめたものが第 123 図になる。

まず、二子塚遺跡の器種分類を参考に、上記の前提条件に基づいて抽出した竪穴建物出土資料を分類した。ＳＩ８から出土した 57 ～ 61・63 は甕 B1 に相当、64 は壷Ａ？に相当、62 は高坏 A に相当、65 は高坏 G に相当するものと捉えた。ＳＩ４から出土した 177 ～ 180 は甕 B1 に相当、181 は壷 A2 に相当するものと捉えた。ＳＩ 65 から出土した 213 ～ 215 は甕 B1 に相当、219 ～ 222 は壷Ａ？に相当、220 は壷 C1 に相当、218 は鉢Ａ？に相当、217 は鉢 C2 に相当、216 は鉢 C5 に相当、223 は高坏 A に相当、224 は高坏 C に相当、225 は高坏 D

に相当するものと捉えた。ＳＩ 71 から出土した 233 ～ 236 は甕 B1 に相当、238 は甕 C4 に相当、239 は甕 C? に相当、237 は鉢 B? に相当、240 は壷 A1 に相当、241 は高坏 C に相当、242 は高坏 C? に相当するものと捉えた。ＳＩ 19 から出土した 89 は甕 B1 に相当、92 は壷 A4 に相当、90 は鉢 B に相当、91 は鉢？、93 は高坏 G に相当するものと捉えた。ＳＩ 13 から出土した 160・161 は甕 B1 に相当、163 は壷 A4 に相当、162 は鉢？に相当するものと捉えた。

次に、分類した各器種の時期的な組列について、検討を行った。原田氏によれば、甕、壷、高坏の３器種は「比較的変化過程の捉え易い」（原田 1999）ものという。そこで、これまでの先学同様に、まずは甕の変異を軸に変遷を考え、次いで壷、高坏の順に検討することとした。

甕は「口縁部の長大化、体部の長胴化、脚台部の高脚化、ハケ目調整の簡略化などの方向性をもつ」（原田 1999）とされている。塔平遺跡調査４区・５区出土資料でいえば、ＳＩ８の口縁部が短い甕 B1（59）、胴部最大径が胴部上位にある甕 B1（57）、脚台部だけだが脚内面の天井部に砂の付着がみられる甕 B1（60）から、胴部最大径が上位から中位のＳＩ４の甕 B1（177 ～ 179）、ＳＩ 65 の甕 B1（213・214）、ＳＩ 71 の甕 B1（233 ～ 236）へと変化し、口縁部が直線的に開くＳＩ 19 の甕 B1（89）、ＳＩ 13（ＳＩ 70）の体部のハケ目調整が一部省略されタタキの痕跡が認められる甕 B1（160）や脚台部が高脚化した甕 B1（161）へと大きく変化して行くものと考えられる。

壷は、単純口縁のＳＩ 65 の壷 A（219）、ＳＩ 71 の壷 A（240）と複合口縁のＳＩ４の壷 A2（181）、ＳＩ 19 の壷 A4（92）、ＳＩ 13 の壷 A4（163）、また底部から胴部しか残存していなかったため口縁部形態の解らない資料が出土している（64・221・222）。複合口縁の壷は「狩尾遺跡群の例で、時間の推移にともない口縁端部が大きくなり、複合口縁の幅を広げるという変化が指摘され」（原田 1999）るという。また、口縁端部に施される刻みも「強い刻み」から「弱々し」（木﨑編 1993）いものに変化するという。よって、ＳＩ 19 の壷 A4（92）とＳＩ 13 の壷 A4（163）が検討対象となるが、口縁部に大きな変化は認められなかった。壷からは、大きな時間差があるとは言い切れないだろう。

高坏は「口縁部内器面の突起が消失した」ものを「後期最古段階のものと考え、甕形土器や壷形土器にもみられる口縁部の長大化により」(原田 1999)形態変化を捉えるとされている。塔平遺跡調査４区・５区出土資料でいえば、同一器種により明確な形態変化が認められる資料は少なく、ＳＩ 65 の高坏 C（224）からＳＩ 71 の高坏 C（241）へ、ＳＩ 65 の高坏 D（225）からＳＩ 19 の高坏 D（93）への変化が見えなくもない。しかし、ＳＩ 71 の高坏 C（241）はＳＩ 65 との遺構間接合が認められた資料であり、口縁部の変化は大きくなく、組列ありきの変化とも考えられる。したがって、高坏だけで大きな時間差を捉えるのは難しいと思われる。

したがって、甕の形態変化を軸に考えた、ＳＩ８→ＳＩ４→ＳＩ 65･71 →ＳＩ 19･13（ＳＩ 70）という変遷は、壷や高坏の変遷と照らして順序を変えるような齟齬のあるものではないと思われる。

以上、紙幅の関係で極めて粗雑な検討となってしまった。今回、重弧文土器の検討、ＳＩ 12 から出土した多量の土器群の検討、調査１区・３区出土土器群との検討、遺構の変遷について検討することができなかった。今後、調査１区～６区までの報告が出揃った段階で、改めて検討すべき課題であると考えている。

古代

調査４区・５区では竪穴建物１軒、掘立柱建物２棟を検出した。調査１区・３区においては、竪穴建物３軒、掘立柱建物６棟を検出している（水上編 2013）。竪穴建物は建物西側にカマドを有するものであり、平面形態は方形を呈し、長軸４m程の規模であった。カマドの位置が異なるが、平面形態や規模は調査１区・３区の竪穴建物と類似している。

計４軒の竪穴建物から出土した遺物は極めて限られており、特に当該期の時期比定の手掛かりとして最も用いら

れる土師器の坏を欠いている。そのため、ここでは、ＳＩ３から出土した土師器の長胴甕（262）や調査３区のＳＩ 75 から出土した土師器の鉢（356）から考えてみたい。参考としたのは、中里伸明氏による熊本市戸坂遺跡出土土師器の研究結果である（中里編 2009）。中里氏は、戸坂遺跡の報告の中で、供膳具の編年観と遺構の先後関係から、供伴する土師器の長胴甕の組列を試みている。結果、①長胴甕は厚手タイプのものから薄手タイプのものへと変化すること、②内面調整のケズリの方向に変化が認められること、③口縁部の開き具合や方向に変化があることを明らかにしている。塔平遺跡竪穴建物出土の土師器の長胴甕や鉢は、胴部の器壁も薄く、口縁部がやや斜め上方に向かって開くものである。したがって、中里氏の研究結果に照らすと、９世紀初頭から中葉までの時期に収まるものと考えられる。

熊本県では、竪穴建物から掘立柱建物に「９世紀前半のうちには移行が完了していた」（網田 1997）と考えられており、本遺跡の竪穴建物の時期として、概ね齟齬のないものと思われる。また、包含層出土の長胴甕も９世紀初頭から中葉までの時期の所産と考えられるものである。

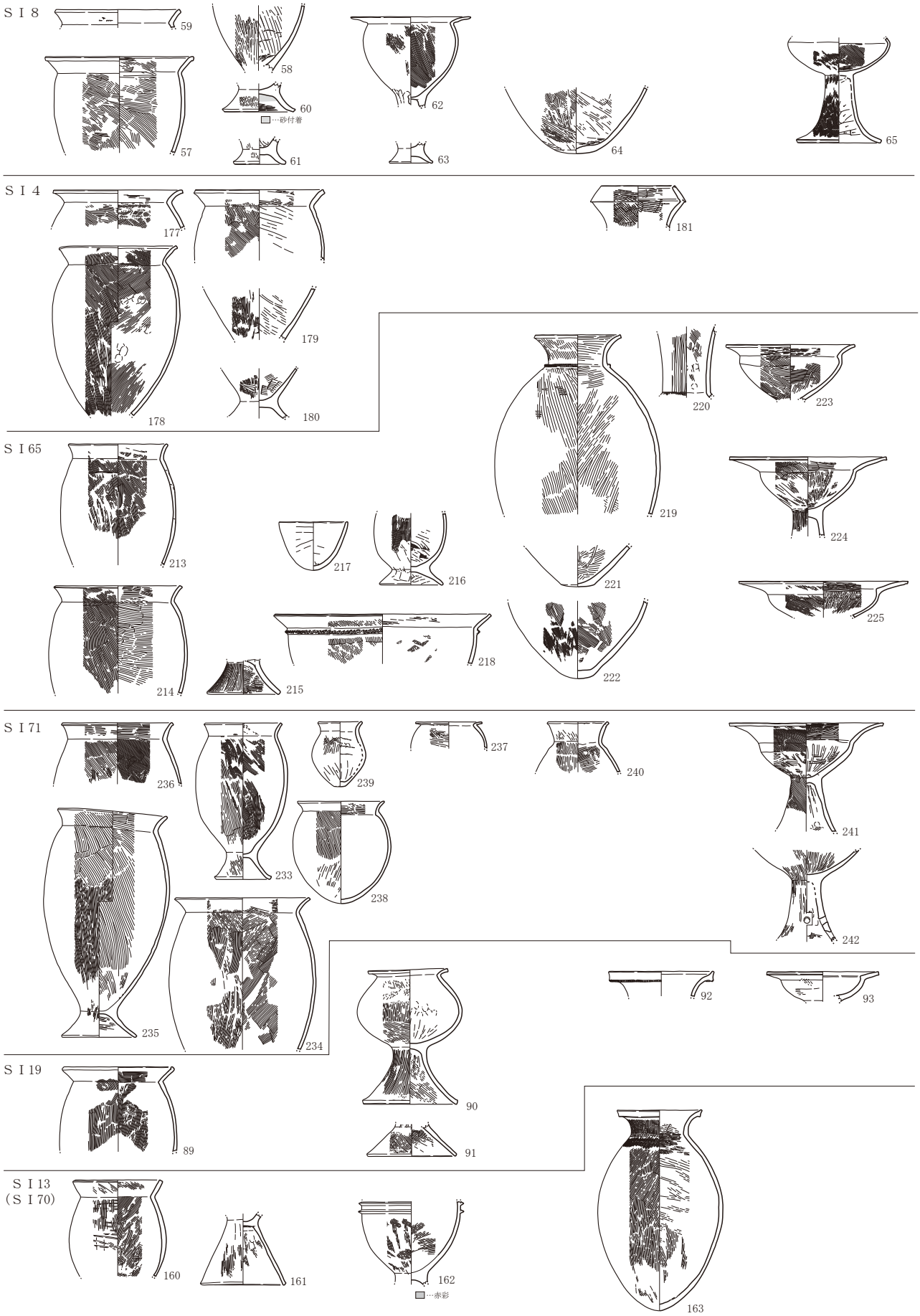
掘立柱建物は計８棟検出しているが、竪穴建物以上にその時期比定が難しかった。当該期の竪穴建物との重複関係はなく、出土遺物がほとんどみられないことがその要因である。前述のとおり、本遺跡で確認されたカマドを有する竪穴建物は規模が４m程あり、網田龍生氏により「炊事施設（釜屋）」（網田 1997）と考えられる小型竪穴に比べ若干大きいものである。しかし、竪穴建物と掘立柱建物が重複して検出することはなく、同時期に集落を構成していた可能性も推測できる。調査区内から出土する土師器や須恵器は９世紀初頭から中葉までの時期の所産と考えられる。調査１区・３区においても竪穴建物と掘立柱建物には重複関係は認められなかった。

したがって、塔平遺跡は、①竪穴建物に居住していた集落から掘立柱建物へ居住する集落へと移行した２時期以上に区分できる集落（第 124 図）、もしくは、②やや大きいが竪穴建物を炊事施設として利用し、掘立柱建物に居住するという建物構成がなされる集落（第 124 図）、のどちらかに近い集落景観を復元できるのではないかと推測している。なお、多くの掘立柱建物は同じ軸線上に並んでいる。竪穴建物はカマドの向きを軸と考えると、掘立柱建物と同じ軸線上か、約 90 度東か西に振れた軸線上に位置している。よって、何らかの規制が働いていた可能性は指摘できるのではないだろうか。

以上、遺構の検出状況と出土した遺物の様相から考えると、塔平遺跡の調査４区・５区には、主に縄文時代後期後半から晩期前半にかけての集落跡、弥生時代後期の集落跡、古代の集落跡が展開するものと考えられる。遺跡周辺の田畑では現在でも耕作が続けられており、地表下に多くの遺構・遺物が残存しているものと思われる。とりわけ、塔平遺跡全体の弥生時代後期の集落跡と古代の集落跡の様相については、今後の周辺での調査事例とこれまでの調査事例を参考に、改めて検討したいと考えている。

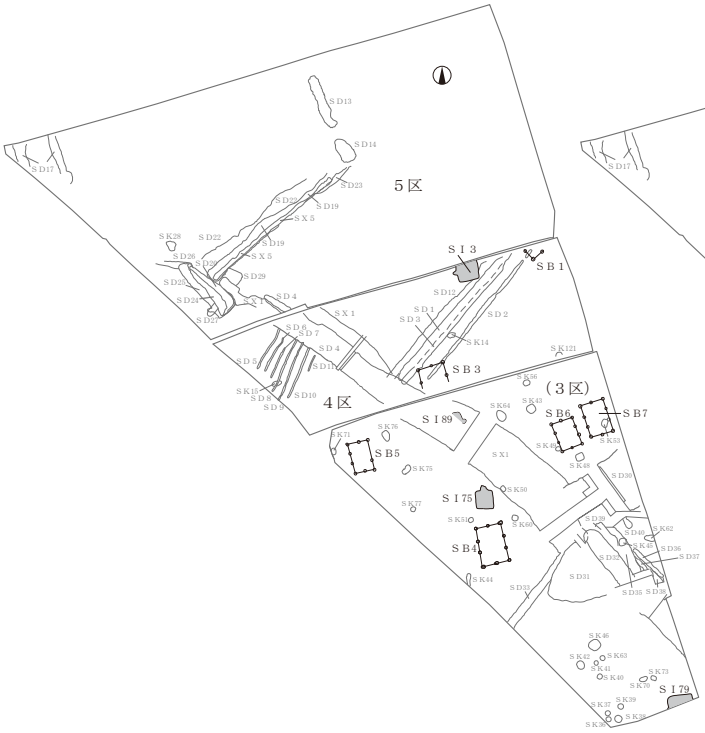
【引用・参考文献】

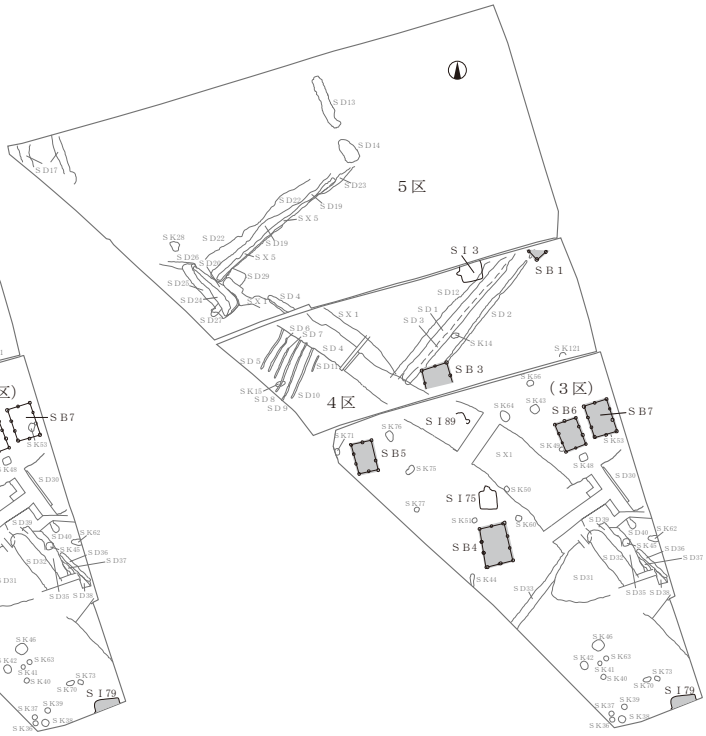
網田龍生編　1993 『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会
網田龍生編　1999 『池辺寺跡Ⅱ』熊本市教育委員会
池田朋生編　2001 『石の本遺跡群Ⅲ』熊本県文化財調査報告第 194 集　熊本県教育委員会
金田一精・原田範昭編　2006 『江津湖遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会
亀田　学編　2001 『梅ノ木遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第 199 集　熊本県教育委員会
木﨑康弘編　1993 『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告第 131 集　熊本県教育委員会
木﨑康弘編　1996 『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告第 159 集　熊本県教育委員会
島津義昭ほか編　1992 『二子塚』熊本県文化財調査報告第 117 集　熊本県教育委員会
高谷一生編　1987 『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第 88 集　熊本県教育委員会



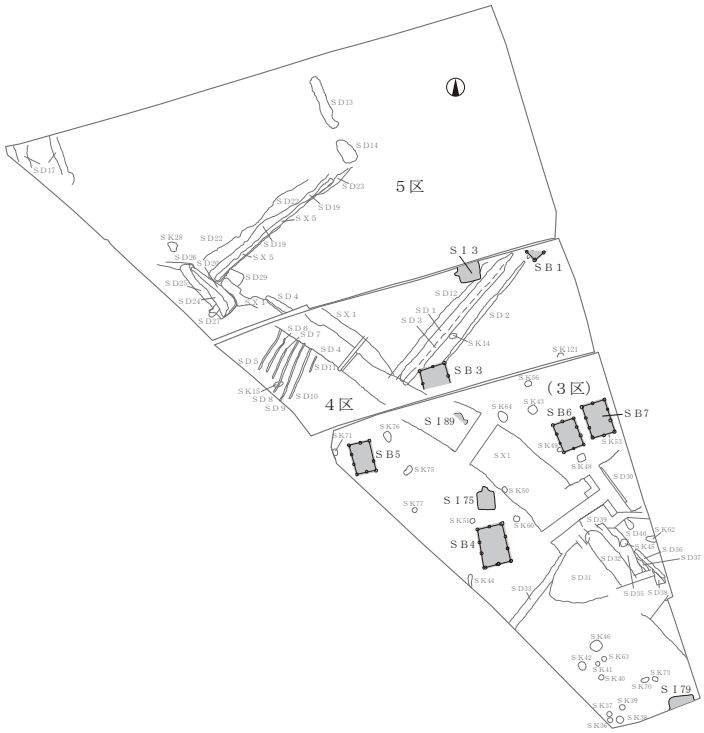
第 123 図　　弥生土器変遷案

①竪穴建物から掘立柱建物に移行する集落





②竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落



0　(1/1200)　400m

第 124 図　古代の遺構変遷案

中里伸明編　2009 『戸坂遺跡Ⅱ』熊本市教育委員会
中里伸明編　2012 『上ノ郷遺跡Ⅰ』熊本市教育委員会
中村幸弘編　2002 『石の本遺跡群Ⅴ』熊本県文化財調査報告第 205 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第 184 集　熊本県教育委員会
林田和人・山下宗親編　2004 『扇田遺跡』熊本市教育委員会
松本健郎編　1980 『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財調査報告第 48 集　熊本県教育委員会
古森政次編　1994 『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第 144 集　熊本県教育委員会
水上公誠ほか編　2013 『塔平遺跡１』熊本県文化財調査報告第 285 集　熊本県教育委員会
宮崎敬士編　2010 『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告第 205 集　熊本県教育委員会
網田龍生　1994 「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究』 龍田考古会
網田龍生　1994 「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ　日本中世土器研究会
網田龍生　1997 「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古』第 10 号　肥後考古学会
網田龍生　2001 「肥後における須恵器生産の終焉」『中世土器研究論集』 中世土器研究会
網田龍生　2003 「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究』Ⅳ　龍田考古会
網田龍生　2012 「肥後地域の様相」『第 61 回埋蔵文化財研究集会　集落から見た７世紀』
石橋新次　1983 「中九州における古式土師器」『古文化談叢』12
泉拓良・山崎純男　1989 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』４　小学館
乙益重隆　1986 「第二節　弥生時代　免田式土器について」『免田町史』第１巻
河森一浩　1998 「免田式土器の再検討」『肥後考古』第 11 号　肥後考古学会
清田純一　1998 「縄文後・晩期土器考」『肥後考古』第 11 号　肥後考古学会
島津義昭　1989 「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』４　小学館
新東晃一　1989 「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』１　小学館
新東晃一　2008 「早期南九州貝殻文系土器」『総覧　縄文土器』 アム・プロモーション
鈴木道之助　1991 『図録　石器入門事典　縄文』柏書房
西健一郎　1987 「重弧文長頸壺」『弥生文化の研究』４　雄山閣
野田拓治　1982 「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
原田範昭　1999 「中九州における弥生時代後期土器編年」『先史学・考古学論究』Ⅲ　龍田考古会
福田匡朗　2012 「白川流域における古墳時代初頭前後の土器編年」『熊本古墳研究』第５号
古庄浩明　1989 「中九州における古式土師器の成立」『國學院大學考古学資料館紀要』第５輯
帆足俊文　2003 「熊本県の集石遺構と炉穴」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会
宮地聡一郎　2008 「黒色磨研土器」『総覧　縄文土器』 アム・プロモーション
宮地聡一郎　2008 「凸帯文系土器（九州地方）」『総覧　縄文土器』 アム・プロモーション
渡辺誠　2006 「熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器について」『名古屋大学博物館報告』№22

第２節　調査６区

６区では旧石器時代、縄文時代、古代～中世、近世～近代の遺構、遺物を確認した。各時代の調査成果についてまとめる。

（１）調査の成果

旧石器時代

４区の台形様石器に加え、６区においても旧石器時代の三稜尖頭器１点の出土を確認した。後者は旧石器相当層位よりも上層からの出土であったため、出土したＫ５グリッド周辺の掘り下げ及び調査区内に数カ所設定したトレンチ調査を進めるも、石器ブロック等は確認できなかった。唯一成果として挙げられる内容は、塔平遺跡調査１区・３区の資料に加え、旧石器時代遺物資料の点在範囲の広がりを確認することができたことである。また、これまで周知されてきた塔平遺跡での表面採集記録を裏付ける資料となった。

縄文時代

縄文時代早期においては、基本層６a 層上面で土坑２基、集石１基を検出した。国土交通省が実施主体の工事区間で調査を行った塔平遺跡１・３区で確認された、配置、遺物に特徴のある遺構、また昭和 47 年度に調査された、本調査区からほど近い北東に位置する「櫛島遺跡」にみる炉穴、集石群のような遺構の検出も期待したが、上記の３基の遺構の検出で終わった。

土坑に関しては炉穴としては小さいＳＫ 36、６層ブロックを主体とした埋土をもつＳＫ 38 と、特徴に差はあるものの、比較するその他の遺構が無く、不明なままである。１つ言えることは、削平の影響は拭えないものの塔平遺跡１区・３区と櫛島遺跡に挟まれた当調査区は、縄文早期の資料が希薄になることである。早期集落の分立を窺わせるものである。

縄文時代後・晩期は６基の竪穴建物跡、土坑、ピット、遺物を検出した。後世の削平の影響を受けてはいるものの、土器や石器（特に石鏃や石斧）が多く出土したことからも、塔平遺跡全体の縄文時代後・晩期における集落規模の大きさを示す結果であろう。

古代～中世

３棟の掘立柱建物跡、土坑、ピットを検出した。遺構内から取り上げた遺物資料に乏しく、時期の特定は難しいものの、検出面までの掘り下げの過程で出土したもの、撹乱などから取り上げたものに、古代や中世に関する資料が得られたために「古代～中世」と記すこととした。これまでの塔平遺跡の調査で検出した掘立柱建物跡と同じく、大小差はあるものの、桁、梁の規格構造や方位の意識の仕方などが似ていることが特徴として挙げられる。須恵器の溶着塊は蓋の形状から９世紀頃のものと考えられる。近くの生産遺跡としては御船町大字高木字善助山にある古代、中世期の「善助山窯跡」があるが、未発見の窯跡が近くに存在する可能性もある。樺番城系と思われる中世須恵器片の出土は、その流通範囲（有明海沿岸地域）を反映しているものである。

近世～近代

近世から近代に至るものとして検出した８条の溝は、それぞれの配置関係からそのほとんどが区画溝として利用されていたと考えられる。この溝と、古代～中世のものと考えられる掘立柱建物３棟、畝状遺構及びＳＤ８との配置関係から、おそらくは古代～中世期から近代に至るまで、土地形状、土地利用にあまり差がなかったと思われる。８条全てでは無いにせよ、古代～中世期に同じ方向軸をもった溝の初期段階が存在し、その後土地利用を同じくす

る近世時に踏襲され、大きく掘り返しを受けた結果、初期段階のものは滅失したのではないかと考察する。表土層や溝内から出土した陶磁器類には 17 世紀前半から 18 世紀中頃のものが含まれており、おおよそこの時期による溝の掘り返し等が行われたと考えられる。また、図示はしてはいないが溝内において比較的多くの瓦の出土があった。細片や比較的新しいものがほとんどであるが、調査区から南西に位置する益城町大字小池字土山ではかつて、加藤・細川時代において御用瓦である「土山瓦」を造っていた背景もあり、現在においても瓦屋が数軒存在する。近世から現代に至る瓦生産地の特徴を示すものである。

（２）今後の課題

旧石器時代においては資料の点在こそ確認できている塔平遺跡だが、未だ石器ブロックや炭化物集中部などの遺構は検出されていない。調査範囲外にその痕跡が確認される可能性が高くなったと言える。資料に関しては、細石刃の可能性のある剥片など、「可能性」に留めざるを得ないものが存在するが、今後の周辺調査において塔平遺跡での資料成果が重要となってくるため、大辻遺跡（益城町）、葉山遺跡群（熊本市）のように周辺遺跡での調査資料との比較検討など、情報収集を続けていくことが責務となる。

縄文時代に関しては塔平遺跡の早期、後・晩期の生活範囲の広がりを窺わせる成果が得られ、集落の形成時期を裏付ける根拠としてはさらに十分な資料が加わったと言える。後・晩期は小池台地より北西へ緩やかに傾斜する広範囲において大集落を形成していた可能性がある。

古代から中世では、遺構、それに伴う遺物資料が得られず、不明瞭なままの成果と言わざるをえない。しかし、古代は９世紀から 10 世紀時のものと考えられる竪穴建物跡や掘立柱建物跡、遺物が調査１・３・４・５区より検出されているが、中世の遺物はごく少量で遺構にあっては皆無に近い。比べて６区は遺構こそ不明確であるが、中世須恵器の存在などが明らかになった。このことから、塔平遺跡の北西寄りには中世の遺構が確認される可能性が高いのではないかと考えられる。掘立柱建物跡周囲に検出、不明遺構として取り上げた樹痕跡については、「生垣」の可能性を示唆するに留めたが、同様の報告や関連資料などから再検討したい。

近世以降では耕作地としての利用が明白であり、その区画溝が多く検出されるのはこれまでと変わらない。しかし、今回の調査で古代～中世期の溝を踏襲して利用する可能性が確認されたことから、これまでの調査で確認された溝内からの遺物や検出遺構時期などの再検証が必要であろう。

平成 24 年度に調査２区（整理作業中）の調査が行われた。本報告にまとめる成果と、課題を活かした作業と報告ができるよう研鑽と助力をしたい。また、各時代の遺構、遺物ともに今回の調査資料に加え、今後の周辺での調査事例の増加を待ち、改めて検討する機会を得たい。

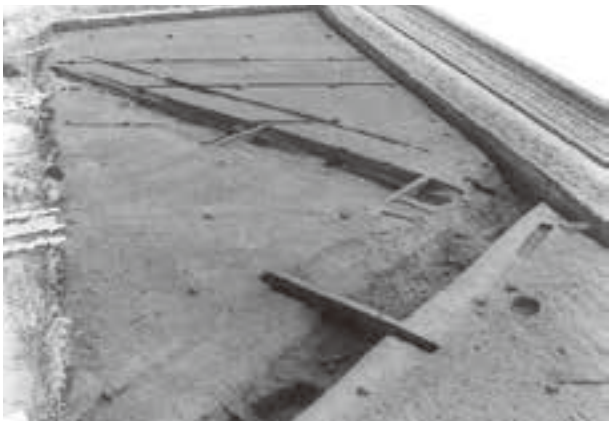
【引用・参考文献】

堤英介・上高原聡編　2010 『小柳遺跡』益城町文化財調査報告第 21 集　益城町教育委員会
堤英介編　2013 『大辻遺跡』益城町文化財調査報告第 22 集　益城町教育委員会
橋口剛士編　2010 『秋只山下遺跡』御船町文化財調査報告第１集　御船町教育委員会
橋口剛士編　2012 『辺田見中道遺跡』御船町文化財調査報告第２集　御船町教育委員会
橋口剛士編　2013 『辺田見中道遺跡２』御船町文化財調査報告第３集　御船町教育委員会
芝康次郎・小畑弘己編　2007『阿蘇における旧石器文化の研究』熊本大学文学部考古学研究室研究報告第２集　熊本大学文学部考古学研究室
島津義昭ほか編　1992 『二子塚』熊本県文化財調査報告第 117 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第 184 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999 『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告第 175 集　熊本県教育委員会

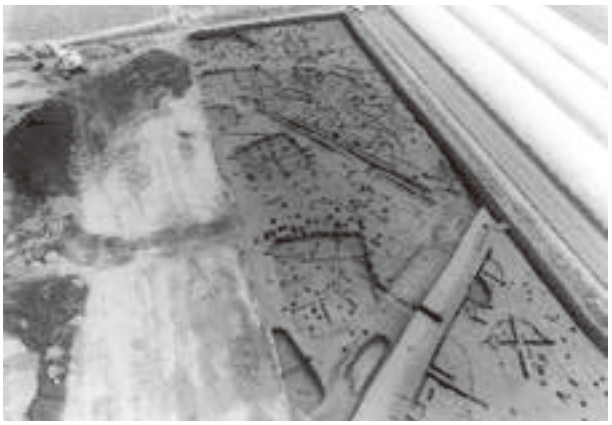
坂井田端志郎ほか編　2010 『山下遺跡』熊本県文化財調査報告第 260 集　熊本県教育委員会
麻生優・加藤晋平・藤本強編 『日本の旧石器文化３　遺跡と遺物〈下〉』
麻生優・加藤晋平・藤本強編 『日本の旧石器文化５　旧石器文化の研究法』
髙谷和生・江本直編　1983 『曲野遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 61 集　熊本県教育委員会
松本健郎・野田拓治ほか編　1983 『上の原遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 58 集　熊本県教育委員会
江本直編　1986 『熊本県旧石器時代調査報告書』熊本県文化財調査報告第 81 集　熊本県教育委員会
宮坂孝宏編　1994 『白鳥平Ｂ遺跡』熊本県文化財調査報告第 142 集　熊本県教育委員会
古森政次編　1999 『潮山・クノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第 179 集　熊本県教育委員会
稲葉一文・橋口剛士ほか編　2010 『瀬田池ノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第 252 集　熊本県教育委員会
小林達雄・小川忠博　1989 『縄文土器大観　1　草創期　早期　前期』
小林達雄・小川忠博　1989 『縄文土器大観　4　後期　晩期　続縄文」
渡辺誠　1991 「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』三島格会長古稀記念号
緒方勉・髙木正文編　1975 『久保遺跡－観音堂・櫛島遺跡－』熊本県文化財調査報告第 18 集　熊本県教育委員会
隈昭志編　1980 『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告第 47 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999 『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告第 184 集　熊本県教育委員会
野田恒親・濱田彰久編　1999 『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告第 175 集　熊本県教育委員会
出合宏光　2000 「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会
美濃口雅朗　1997 「樺番城窯跡の中世須恵器（１）」『肥後考古第 10 号』
美濃口雅朗　2007 「樺番城（熊本県）」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年　補遺編』
大宰府市教育委員会　2000 『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』
加藤唐九郎編 『原色陶器大辞典』
矢部良明ほか編 『角川　日本陶磁大辞典』
荒尾市　2012 『荒尾市史　通史編』
益城町　1990 『益城町史　通史編』
益城町　1990 『益城町史　資料・民俗編』
文化庁編　2010 『発掘調査のてびき』
水上公誠ほか編　2013 『塔平遺跡１』 熊本県文化財調査報告第 285 集　熊本県教育委員会

写真図版

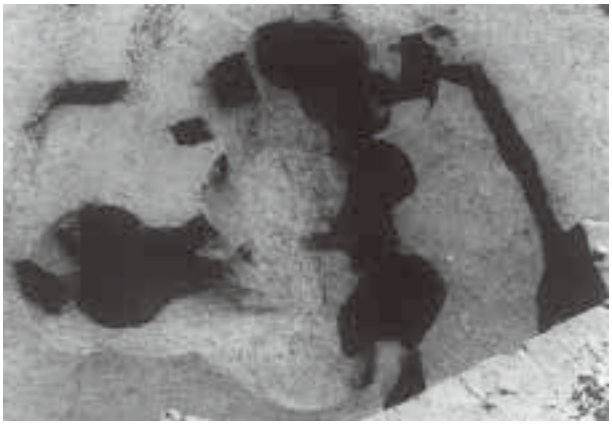
図版 1



4 区 3 層完掘状況



4 区 4 層完掘状況



5 区 S K 27 完掘状況

5 区 S K 29 完掘状況

5 区 S K 33 完掘状況

5 区 S K 34 完掘状況

5 区 S K 35 完掘状況

5 区 S K 124 完掘状況

４区ＳＹ１検出状況

４区ＳＹ２検出状況

５区ＳＹ３検出状況

５区ＳＹ４検出状況

４区ＳＩ 24 完掘状況

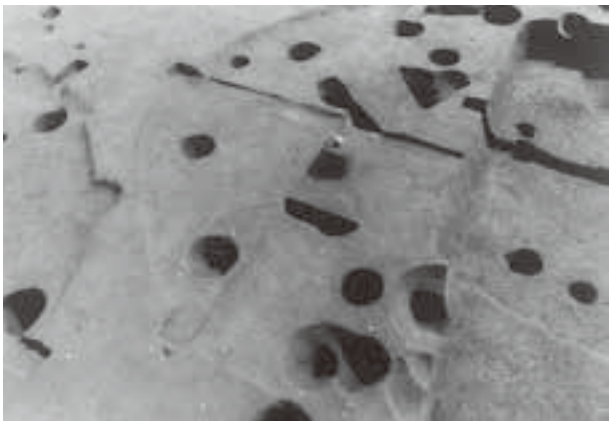
４区ＳＩ 25 完掘状況

４区ＳＩ 32 遺物出土状況

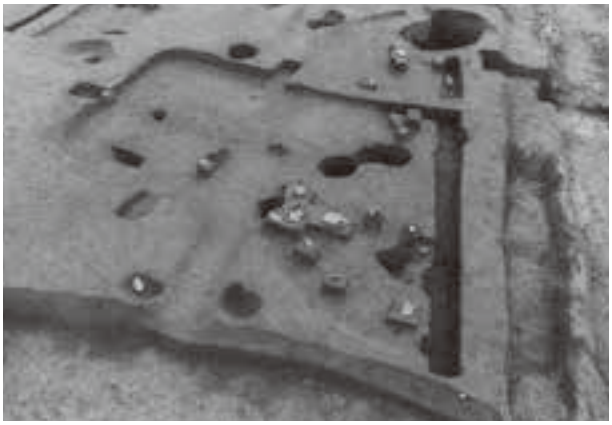
４区ＳＩ 34 完掘状況

図版３

４区ＳＩ 40・52 完掘状況


４区ＳＩ 43 完掘状況

４区ＳＩ 44 完掘状況


４区ＳＩ 45 完掘状況

４区ＳＩ 47 完掘状況

４区ＳＩ１完掘状況

４区ＳＩ９遺物出土状況

４区ＳＩ 15 完掘状況

4区ＳＩ８完掘状況

4区ＳＩ 16・28 完掘状況

4区ＳＩ２完掘状況

4区ＳＩ７完掘状況

4区ＳＩ 18 完掘状況

4区ＳＩ 19 完掘状況

4区ＳＩ 20 完掘状況

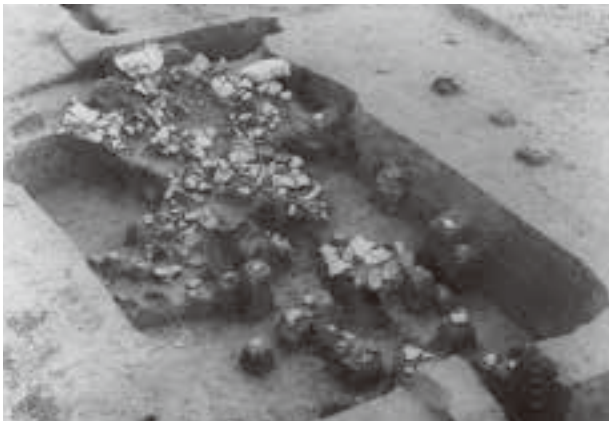
4区ＳＩ 38 完掘状況

図版 5

4区ＳＩ５完掘状況

4区ＳＩ 10 完掘状況

4区ＳＩ６完掘状況



4区ＳＩ 12 遺物出土状況

5区ＳＩ 70（4区ＳＩ 13）遺物出土状況

4区ＳＩ 14 遺物出土状況

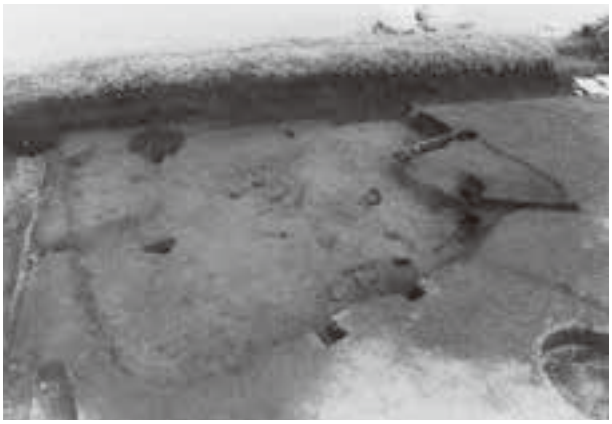
5区ＳＩ 65 遺物出土状況

5区ＳＩ 65 完掘状況

５区ＳＩ 66 遺物出土状況

５区ＳＩ 66 完掘状況

５区ＳＩ 71 遺物出土状況

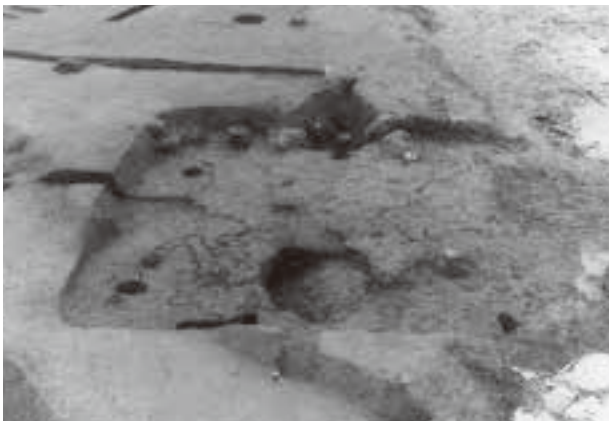


５区ＳＩ 71 完掘状況

５区ＳＩ 72 遺物出土状況

５区ＳＩ 72 完掘状況

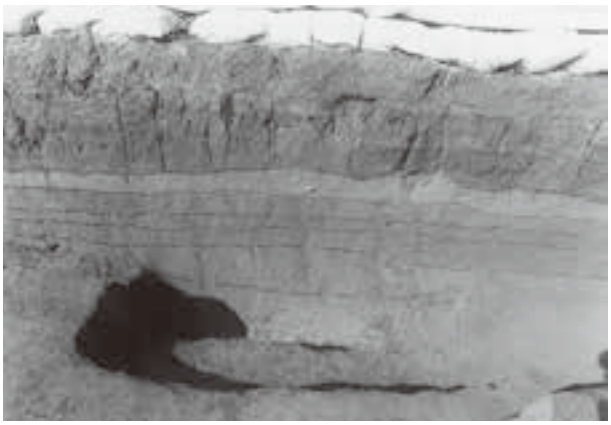
５区ＳＩ 73 遺物出土状況



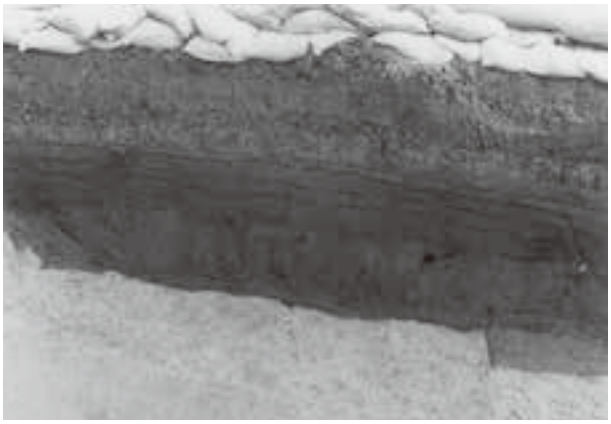
５区ＳＩ３完掘状況

図版７

６区土層断層Ａ－Ａ’



６区土層断層Ｂ－Ｂ’



６区土層断層Ｃ－Ｃ’

６区５層下　三稜尖頭器出土状況

６区５層下　石核出土状況

６区６ａ～５層遺物出土層位確認状況

６区５層下　スクレイパー出土状況

６区５層下　石核出土状況

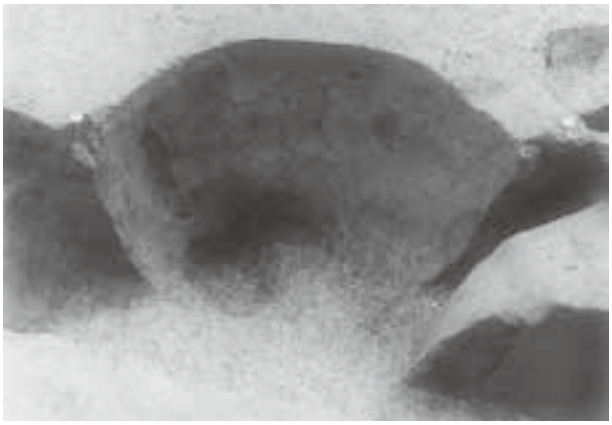
６区ＳＹ１土層断面状況

６区ＳＹ１検出状況

６区ＳＫ 36 土層断面状況

６区ＳＫ 36 完掘状況

６区ＳＫ 38 土層断面状況



６区ＳＫ 38 完掘状況

６区ＳＩ１・２・３完掘状況１（南西→）

６区ＳＩ１・２・３完掘状況２（西→）

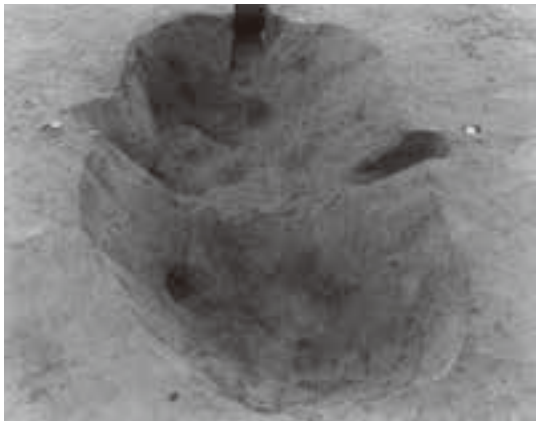
図版９

６区ＳＩ４・５・６完掘状況

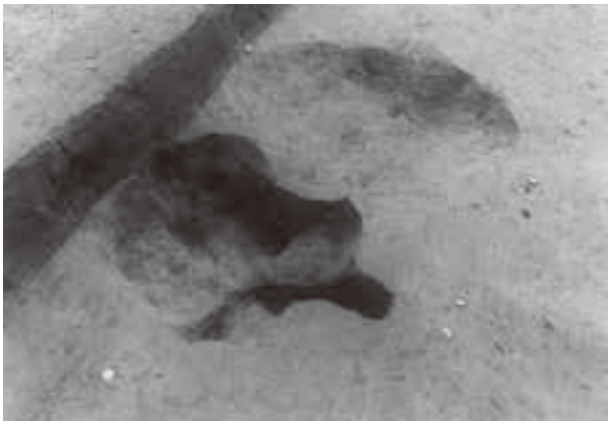
６区ＳＫ８完掘状況

６区ＳＫ 13 完掘状況

６区ＳＫ 15 完掘状況



６区ＳＫ 16 完掘状況



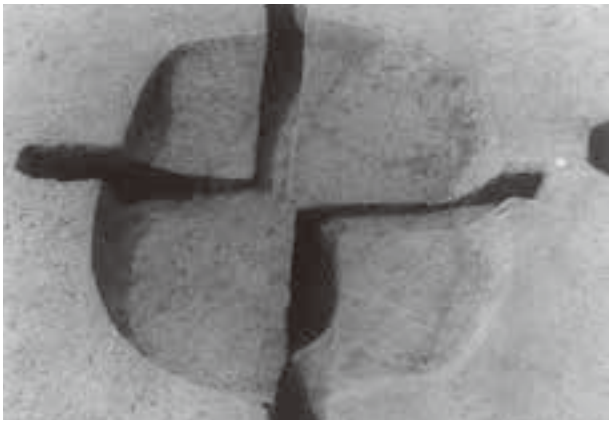
６区ＳＫ 17・18 完掘状況

６区ＳＫ 19 完掘状況

６区ＳＫ 20 完掘状況

6区ＳＫ 21・22・23 完掘状況

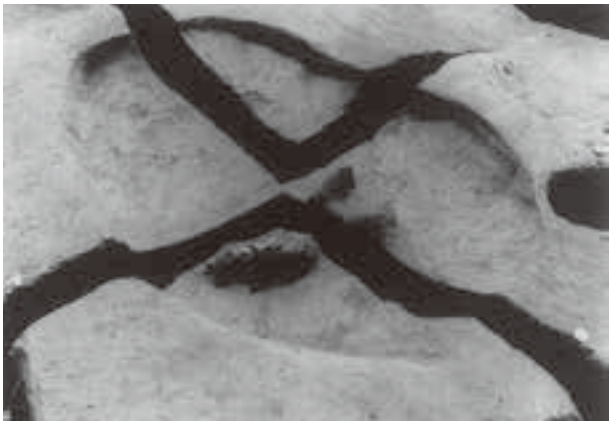
6区ＳＫ 24 完掘状況



6区ＳＫ 26 完掘状況

6区ＳＫ 27 完掘状況

6区ＳＫ 28 土層断面状況

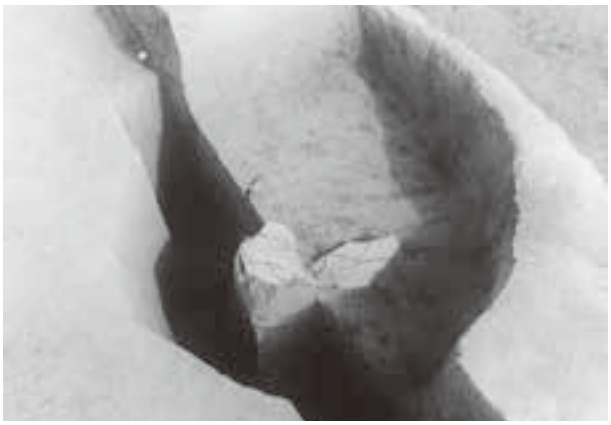


6区ＳＫ 29 炭化物検出状況

6区ＳＫ 29 完掘状況

6区ＳＫ 33 完掘状況

図版 11



6区ＳＫ 34 遺物出土状況

6区ＳＫ 34 完掘状況

6区ＳＫ 35 完掘状況

6区ＳＫ 37 完掘状況

6区ＳＢ１完掘状況

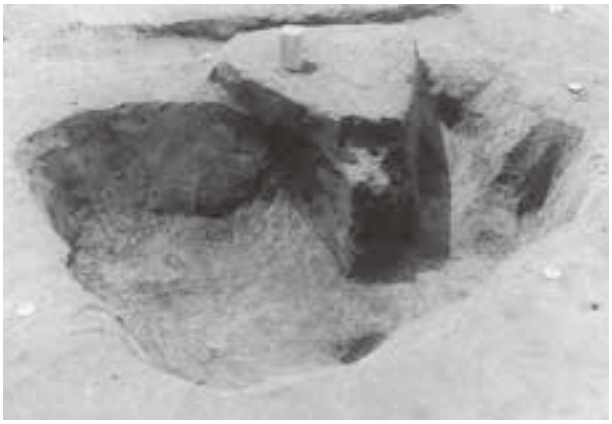
6区ＳＢ２完掘状況

6区ＳＢ３ピット半裁状況

6区掘立柱建物跡配置状況（東→）

6区ＳＫ１完掘状況

6区ＳＫ２完掘状況



6区ＳＫ７完掘状況

6区ＳＫ 25 完掘状況

6区ＳＤ８完掘状況

6区畝状遺構完掘状況

6区ＳＤ１完掘状況

6区ＳＤ２完掘状況

図版 13

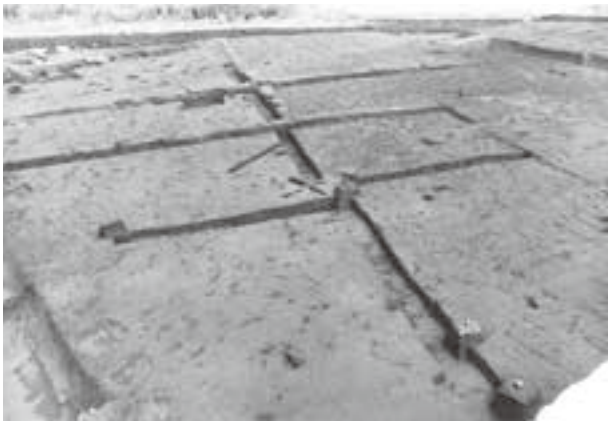
６区ＳＤ３完掘状況

６区ＳＤ４・５・６完掘状況

６区ＳＤ７完掘状況

６区ＳＤ９完掘状況

６区完掘状況１（南→）



６区完掘状況２（南→）

６区完掘状況３（南東→）

６区完掘状況４（北西→）

4区ＳＩ 25 出土土器

4区ＳＩ 25 出土土器

4区ＳＫ 22 埋設土器

4区ＳＸ４出土土器

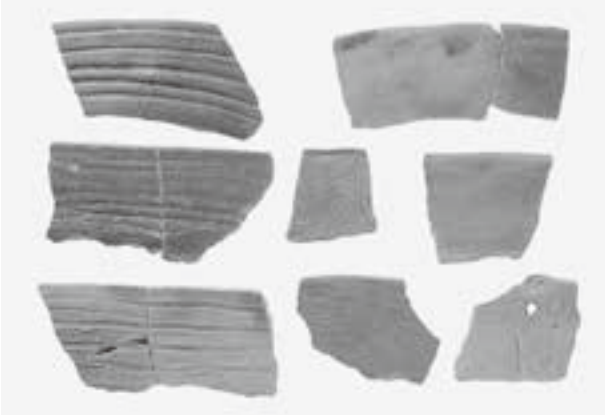
4・5区出土　縄文土器（早期）

図版 15

4区出土　縄文土器　方形浅鉢（外）

4区出土　縄文土器　方形浅鉢（内）

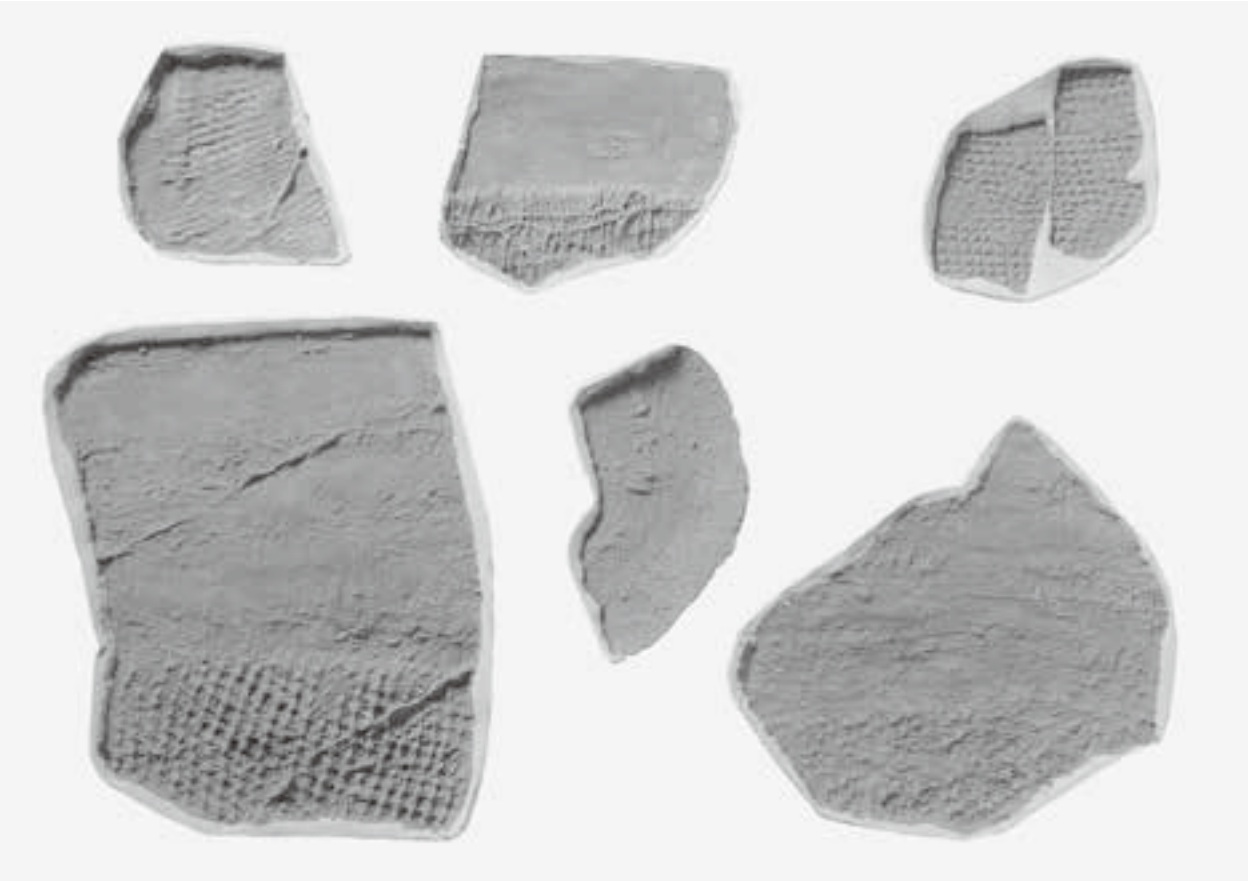
4・5区出土　縄文土器　浅鉢



4・5区出土　縄文土器　深鉢

4・5区出土　縄文土器　深鉢

4・5区出土　縄文土器　組織痕



4・5・6区出土　縄文土器　組織痕モデリング

図版 17

4区ＳＩ 15 出土土器

4区ＳＩ８出土土器

4区ＳＩ８出土土器

4区ＳＩ 18 出土土器

4区ＳＩ 19 出土土器

4区ＳＩ 19 出土土器

4区ＳＩ 10 出土土器

4区ＳＩ６出土土器

4区ＳＩ６出土土器

4区ＳＩ 12 出土土器　甕

4区ＳＩ 12 出土土器　鉢

4区ＳＩ 12 出土土器　壷

4区ＳＩ 12 出土土器　壷

4区ＳＩ 12 出土土器　高坏

4区ＳＩ 12 出土土器

4区ＳＩ 12 出土土器

4区ＳＩ 14 出土土器

4区ＳＩ 14 出土土器

4・5区ＳＩ 13・70 出土土器

4・5区ＳＩ37出土土器

4・5区ＳＩ37出土土器

4・5区ＳＩ37出土土器

4区ＳＩ4出土土器

4区ＳＩ4出土土器

5区ＳＩ 65 出土土器

5区ＳＩ 65 出土土器

5区ＳＩ 65 出土土器

5区ＳＩ 65 出土土器

5区ＳＩ 65 出土土器

5区ＳＩ 71 出土土器

5区ＳＩ 71 出土土器

5区ＳＩ 71 出土土器

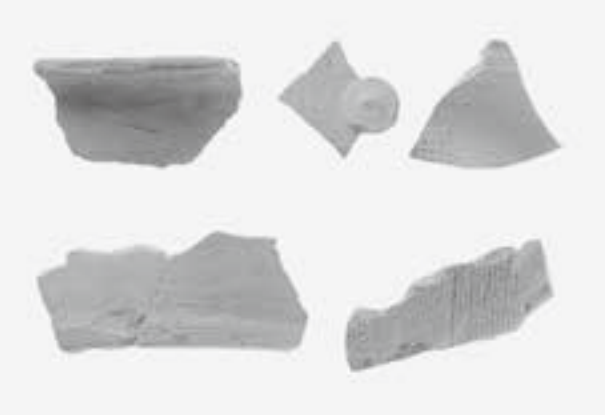
5区ＳＩ 71 出土土器

5区ＳＩ 72・73 出土土器

5区ＳＩ 72 出土土器

5区ＳＩ 72・73 出土土器

5区ＳＫ 24 出土土器



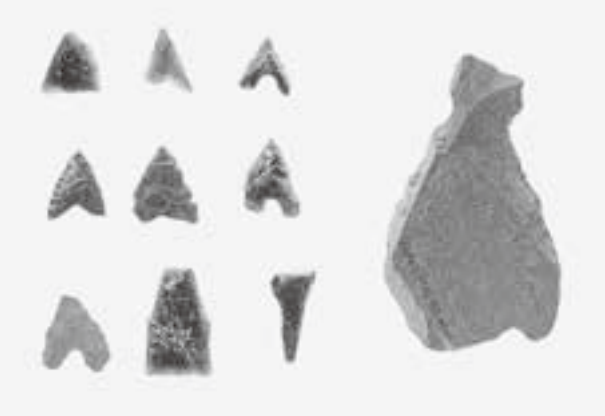
4・5区Ｐｉｔ出土土器

4・5区出土土器

4・5区出土　須恵器

4区出土　土師器　把手

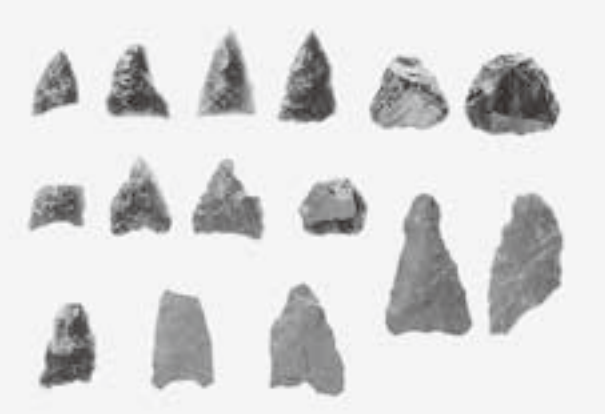
4区出土　須恵器（溶着）



4・5区ＳＩ出土石器　石鏃など

4・5区ＳＤ・Ｐｉｔ出土石器　石鏃

4・5区遺構外出土石器　異形石器など



4・5区出土石器　石鏃１

4・5区出土石器　石鏃２

4区ＳＩ出土石器　打製石斧

4・5区ＳＩ出土石器　打製石斧

4区ＳＩ出土石器　磨製石斧

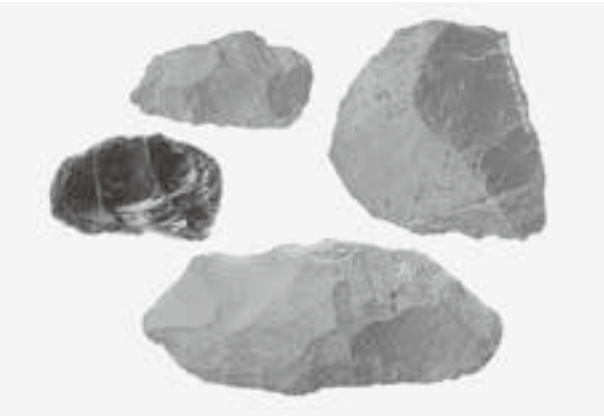
4・5区ＳＩ出土石器　磨製石斧

4・5区ＳＤ・Ｐｉｔ出土石器　石斧

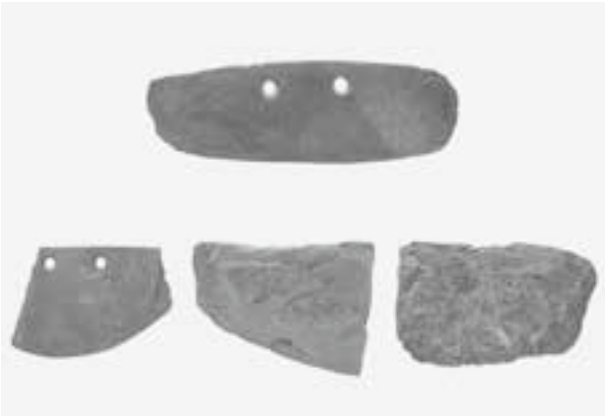
4・5区出土石器　打製石斧1

4・5区出土石器　打製石斧2

4・5区出土石器　磨製石斧



4・5区出土石器　スクレイパー



4・5区出土石器　石庖丁

4・5区出土　玉類

4区出土　耳環

６区ＳＩ１・４・５出土石器　磨・敲石、砥石

６区ＳＩ６出土石器　石斧

６区ＳＫ 34 出土　縄文土器　深鉢

６区ＳＢ２－Ｐ４出土　黒色土器　椀

６区ＳＸ４出土　土師器　坏

６区畝状遺構出土　中世須恵器　捏鉢

６区出土　縄文土器　阿高式

６区出土　縄文土器　深鉢

６区出土　縄文土器　浅鉢

６区出土　縄文土器　組織痕

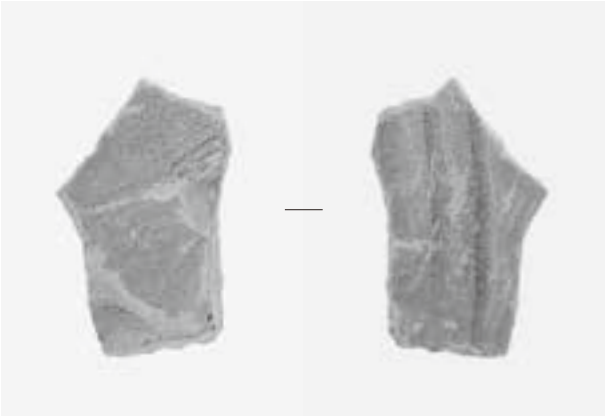
６区ＳＤ１出土　土師器　把手

６区出土　須恵器　椀

６区ＳＤ９出土　須恵器（溶着）

６区ＳＤ９出土　須恵器（溶着）

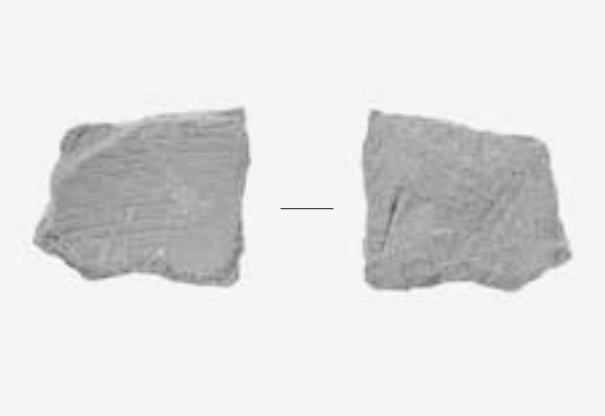
６区ＳＤ４・７出土　須恵器



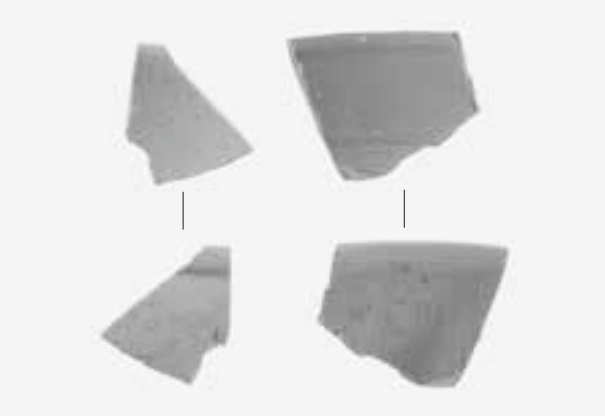
６区出土　青磁　碗

６区ＳＤ１出土　青磁　碗

６区出土　青磁　碗

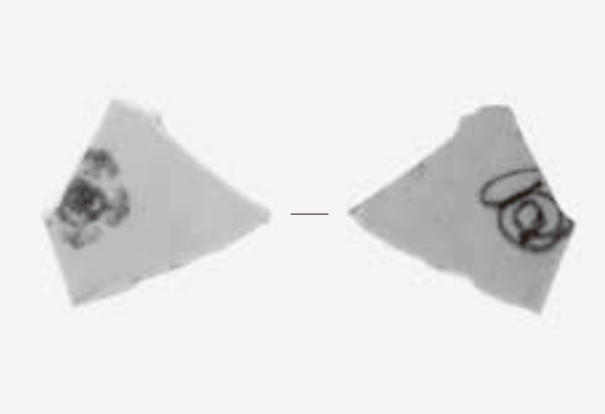


６区ＳＤ９出土　中世須恵器　甕



６区出土　白磁

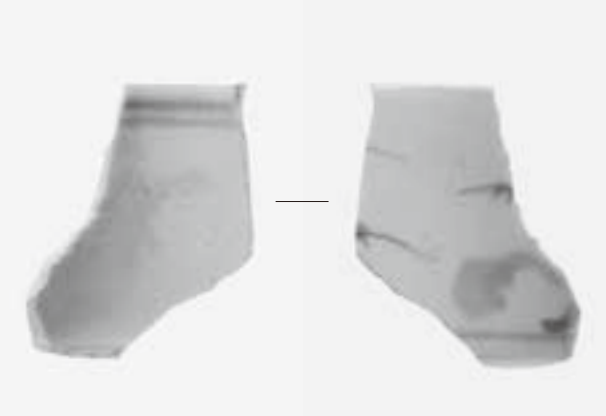
６区ＳＤ１・９出土　陶器　皿



６区ＳＤ１出土　染付　皿

６区ＳＤ１出土　染付　皿

６区ＳＤ１出土　染付　碗



６区出土　染付　碗（筒形）

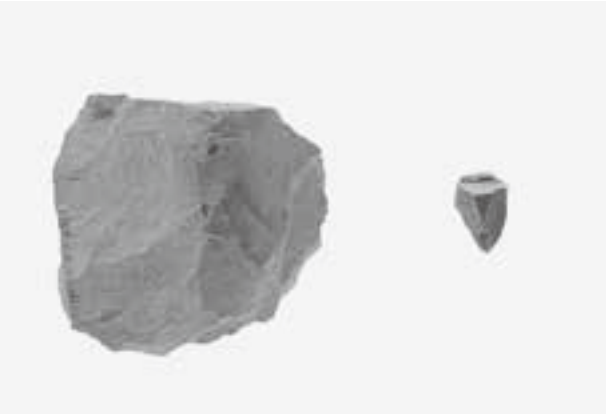
６区ＳＤ１出土　陶器　碗

６区５層下出土石器　三稜尖頭器

６区出土　使用痕をもつ剝片

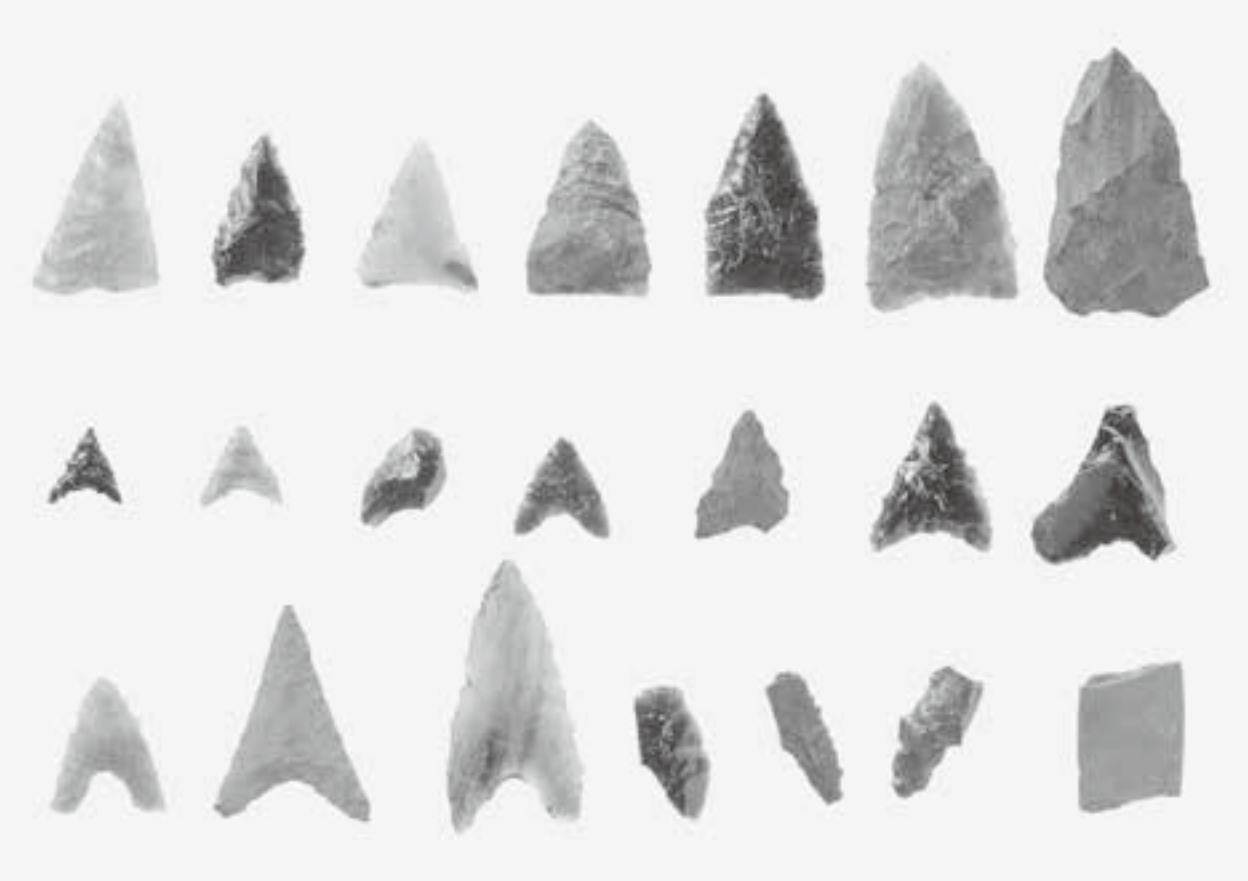
６区５層下出土石器　スクレイパー

６区５層出土石器



６区６ａ層出土　石核

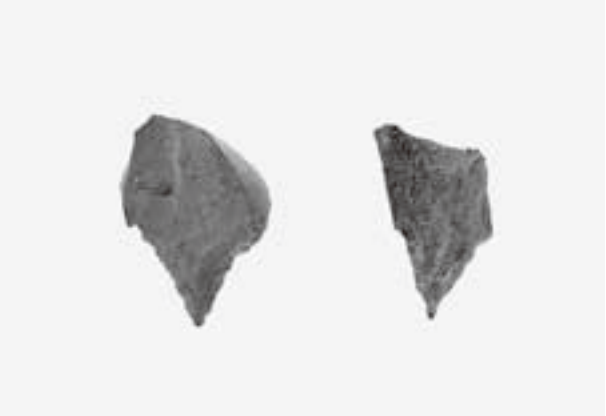
６区５層下出土　石核



6区出土石器　石鏃

6区出土石器　石斧

６区ＳＤ１出土石器　打製石斧



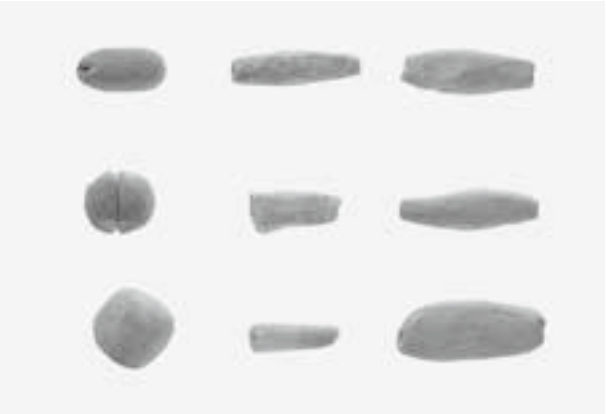
６区５層出土石器　石錐

６区出土石器　石匙

６区ＳＤ１出土石器　砥石

６区ＳＤ２出土　硯

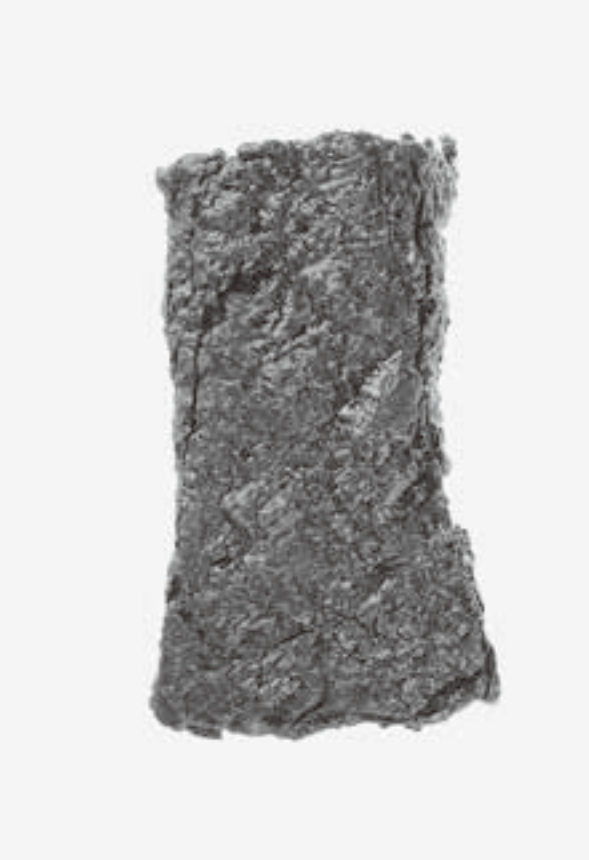
６区出土　碁石



４・５・６区出土　土錘（写真のみ）

６区出土　土製品（写真のみ）

4・5・6区出土鉄器　鉄鏃・刀子・棒状鉄器



3区出土鉄器　袋状鉄斧（表）

3区出土鉄器　袋状鉄斧（裏）

あとがき

塔平遺跡２の発掘調査報告書が完成しました。

発掘調査から整理報告書作成にあたって、たいへん多くの方々にご指導、ご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

今回の調査区におきましても、埋蔵文化財の調査、整理をとおして、多くの感動、発見がありました。このような素晴らしい遺跡を調査させていただいたことを本当に光栄に思いました。

調査から数年を経て、この調査の成果の一部をようやく報告書にすることができました。本報告書が、歴史を探るための基礎資料として埋蔵文化財に対する理解と保護のために、地域で活用されれば幸いです。

最後に本文中で触れることができなかった実際の作業に携われた方々の名前を記して、感謝の意を表したいと思います。

発掘調査

石永光恵　井手春代　上村久子　緒方範子　長船信一　押方富江　神谷守　神山了一
河北ツユ子　川元恵子　桑波恵介　古林喜久江　境百合子　佐々木謙吉　椎葉仁美　庄司修三
田島弘子　津崎次博　寺本眞富　永井健一　中村保　西坂宗一郎　西坂知紘　橋本恭代
長谷川亜紀　東孟伸　平尾直孝　福島志津夫　福島ヨシ子　福永美鈴　藤原英敏　堀部和憲
本田チヅ子　本田睦男　前田日出男　松井昭子　松岡洋　松下まち子　松本鐵郎　宮本美樹
村上シナ子　村上親敏　森上渉　森川恵津子　守永美紀子　森永ミドリ　山下民生　山下ルミ
山本遵　吉住妙子　吉住徹明　和田洋一　渡邊由佳利

整理報告書作成

上田佳奈子　大川好美　小原有子　金川希　河津洋伶　木村美和子　木村ゆり子
中島ひろみ　仲原加代子　中村公光子　西坂和美　蓮池千恵　村田百合子　山内洋子

（以上、敬称略・五十音順）

<table>
<tr><th colspan="8">報告書抄録</th></tr>
<tr><td>ふりがな</td><td colspan="7">とうのひらいせき</td></tr>
<tr><td>書名</td><td colspan="7">塔平遺跡２</td></tr>
<tr><td>副書名</td><td colspan="7">九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査</td></tr>
<tr><td>シリーズ名</td><td colspan="7">熊本県文化財調査報告</td></tr>
<tr><td>シリーズ番号</td><td colspan="7">第３０２集</td></tr>
<tr><td>編著者名</td><td colspan="7">佐藤哲朗、坂井田端志郎、水上公誠、坂井田亜耶</td></tr>
<tr><td>編集機関</td><td colspan="7">熊本県教育委員会</td></tr>
<tr><td>所在地</td><td colspan="7">〒８６２－８６０９　熊本県熊本市水前寺６丁目１８番１号
ＴＥＬ０９６－３８３－１１１１（代）</td></tr>
<tr><td>発行年月日</td><td colspan="7">２０１４年3月３１日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ふりがな
所収遺跡名</td><td rowspan="2">ふりがな
所在地</td><td colspan="2">コード</td><td rowspan="2">北緯</td><td rowspan="2">東経</td><td rowspan="2">発掘
期間</td><td rowspan="2">調査面積
㎡</td><td rowspan="2">発掘
原因</td></tr>
<tr><td>市町村</td><td>遺跡
番号</td></tr>
<tr><td>塔平遺跡</td><td>熊本県
上益城郡
益城町
大字小池
字塔平
大字島田
字小迫原</td><td>４４３</td><td>０４５</td><td>32°
75′
13″
32°
75′
15″
32°
75′
27″</td><td>130°
79′
72″
130°
79′
70″
130°
79′
27″</td><td>20081027
～
20090521
20090422
～
20090827
20100428
～
20100930</td><td>４区
1,095 ㎡
５区
2,925 ㎡
６区
4,150 ㎡</td><td>記録
保存
調査</td></tr>
<tr><td>所収遺跡名</td><td>種別</td><td colspan="2">主な時代</td><td colspan="2">主な遺構</td><td colspan="2">主な遺物</td><td>特記
事項</td></tr>
<tr><td>塔平遺跡</td><td>集落</td><td colspan="2">旧石器時代
縄文時代
弥生時代
奈良時代
平安時代
鎌倉時代
室町時代</td><td colspan="2">竪穴建物跡
掘立柱建物跡
土坑
炉穴
小穴
溝状遺構</td><td colspan="2">旧石器
縄文土器　弥生土器
土師器　須恵器
陶磁器　瓦
鉄器　石器</td><td></td></tr>
<tr><td>要約</td><td colspan="7">塔平遺跡の当該調査区は九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴い記録保存を目的として発掘調査された遺跡である。当該調査区における主な成果を挙げる。
旧石器時代は台形様石器、三稜尖頭器が各１点出土した。縄文時代は早期の炉穴、集石を検出した。後・晩期は竪穴建物跡が 20 軒、埋設土器遺構１基などを検出し、弥生期においても後期の竪穴建物跡を 33 軒検出するとともに多量の土器資料の出土など、塔平１で集落の形成時期と考察した根拠をさらに裏付ける資料を得る結果となった。古代は竪穴建物跡１軒、掘立柱建物跡５棟を検出し、掘立柱建物への移行期とされる９世紀初頭から９世紀中葉のものと考えられる。</td></tr>
</table>

2014 年 3 月 31 日　印刷
2014 年 3 月 31 日　発行

熊本県文化財調査報告第３０２集
塔平遺跡２
－九州縦貫自動車道嘉島ＪＣＴ（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－
著作権所有　熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号
発　行　者　熊本県教育委員会
印　刷　者　熊本市中央区上水前寺２丁目 16 番 16 号
シモダ印刷株式会社　熊本支店

発 行 者　：　熊本県教育委員会
所　　属　：　教育総務局文化課
発行年度　：　平成２５年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 302 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 塔平遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日